

緋弾のエリア if～遠山家最強の姉～

トリプルツレー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

その拳は天を貫き、地を砕く。

遠山家の長女にして、遠山家最強の存在――遠山金虎かなこ――

犯罪増加に伴い活躍する武偵たち。銃弾や剣戟が飛び交う、そんな時代に拳のみで数多の強敵たちを下してきた彼女。

自らを倒せる強者を求め旅立っていた彼女が帰還する。

何故彼女は、強者を求めるのか。

緋弾のアリアの遠山家に原作崩壊するレベルで強い姉がいたら、というif作品です。

初投稿の為、いろいろと不備があると思うのでご容赦ください。

# 目次

|                      |     |
|----------------------|-----|
| 最強の帰還                | 1   |
| 姉の旅路                 | 14  |
| 姉、弟と遊ぶ               | 27  |
| 姉の受験                 | 41  |
| 小話集―遠山金虎、被害者の会―      | 58  |
| 姉、買い物に行く             | 72  |
| 姉と義妹                 | 84  |
| 最強の虎（姉）と百獣の王（メイド）    | 92  |
| 訓練と不穏な言葉             | 101 |
| 女子会と二次会              | 110 |
| 姉を追う者                | 120 |
| 姉のH S S              | 139 |
| ラーメンと腕相撲             | 150 |
| 虎と東・西洋忍者             | 158 |
| それぞれの災難              | 168 |
| それぞれの裏側              | 180 |
| それぞれの想い              | 192 |
| 幕間―動き出す人々―           | 210 |
| 占いと旅立ち               | 221 |
| 矛盾                   | 237 |
| 要塞陥落                 | 250 |
| 虎、世界の舞台に立つ（メジャーデビュー） | 265 |
| 新たな道                 | 279 |
| 初仕事                  | 288 |

|                                   |     |
|-----------------------------------|-----|
| 性悪                                | 298 |
| 虎と狐                               | 312 |
| あの日の日曜日                           | 327 |
| 黄色のシユシユ                           | 350 |
| 天使と悪魔                             | 366 |
| 集結、名古屋女子校                         | 385 |
| 虎、尾張に立つ                           | 404 |
| 反撃と決着                             | 423 |
| 金虎（かねとら）爆誕                        | 436 |
| 疑念と真実                             | 450 |
| 眠れる虎                              | 465 |
| 虎と狐と時々要塞                          | 477 |
| 譲れない人々                            | 487 |
| 無自覚                               | 496 |
| 外伝：緋弾のアリア i f. i f   極東戦役編        | 503 |
| 開幕                                | 514 |
| 初戦                                | 528 |
| 試合終了                              | 535 |
| 外伝：緋弾のアリア i f. i f   開幕編          | 550 |
| 外伝：緋弾のアリア i f. i f   開幕編 II       | 560 |
| 外伝：緋弾のアリア i f. i f   開幕編 III      | 575 |
| 外伝：緋弾のアリア i f. i f   虎と狐と毒百合編     | 590 |
| 外伝：緋弾のアリア i f. i f   虎と狐と毒百合編 II  | 599 |
| 外伝：緋弾のアリア i f. i f   虎と狐と毒百合編 III | 609 |
| 虎と I C P O                        | 620 |

|                                |     |
|--------------------------------|-----|
| 憎きも親愛                          | 629 |
| 風魔の救命活動                        | 641 |
| サウナと保釈、そして決意                   | 653 |
| 乙女大乱―女子力競う、料理大会―               | 667 |
| 外伝：緋弾のARIA if. if―虎と竜、武偵高生徒編―  | 679 |
| 外伝：緋弾のARIA if. if―虎と竜、武偵高生徒編―  | 689 |
| 外伝：緋弾のARIA if. if―虎と竜、武偵高生徒編Ⅲ― | 703 |
| 外伝：緋弾のARIA if. if―虎と竜、武偵高生徒編Ⅳ― | 719 |
| 外伝：緋弾のARIA if. if―虎と竜、武偵高生徒編Ⅴ― | 735 |
| 最強の警察官                         | 753 |



「金次か、今は家にいるのか。」

「ああ、兄さん、どうしたんだ、家にいるけど、電話なんて珍しいじゃないか。」

「そうか、爺ちゃんからご馳走があるから家族で集まろうと突然連絡が来てな、お前のことだから何か巻き込まれていないかと思っただが、来れるようだな。伝えておく、爺ちゃんたちも喜ぶだろう。」

「分かった、それじゃあ今から行くよ。兄さん、連絡ありがとう。」

「ああ、それじゃあ、また後でな。」

今日の俺はどうやらツイてるみたいだな、金も食い物も無い時にご馳走とは。しかし突然？家族で集まろうなんて爺ちゃんも珍しいな。まあ、兄さんが生き返ったり（死んでないが）、孫が2人も増えたり（俺も最近知った）と賑やかになったのが嬉しいのだろうと深く考えずにご馳走にありつけることに歓喜し、家族団欒の為に巢鴨へと向かうのだった。

？家族で集まる“この意味を考えていれば、そう後悔するまで、それ程時間は有しなかった。

「お兄ーちゃん。」

「おう、兄貴も来たか。」

実家に着くと、庭でバーベキューの準備をするGⅢとかなめがいた。

「もう来てたのか。兄さんとかなでも来てるのか？」

「キンイチはまだだ、パトラが来れねーから家のこと済ませて来るつてよ。」

「かなでちゃんはお婆ちゃんと遊んでるよ。」

GⅢとかなめは楽しそうに炭を並べている。家族団欒が楽しみのようだ。

「バーベキューとは珍しいな。」

婆ちゃんの事だから豪華な和食だと思い込んでいた。まさか肉とは、栄養の足りない俺には有難いメニューだ。

「BBQといえばアメリカだ。年中金欠の兄貴に本場のBBQを味合

わせてやるよ。」

「お兄ちゃん、楽しみにしててね。」

根っからのアメリカン気質のGⅢとアメリカ育ちのかなめが準備してくれる間に爺ちゃんたちに挨拶しておこう。

「それじゃあ準備は任せた。俺は爺ちゃんたちに挨拶してくる。」

2人に告げ、家へと入る。

玄関を開け、居間へ向かう。居間には爺ちゃんと婆ちゃんと、それになでがいる。

「ただいま。」

「お兄ちゃん様!!」

俺の声で振り向いたかなでは笑顔で俺へと駆け寄ってくる。

「おお、来たか。」

「おかえり、キンジ。急な誘いでごめんねえ。」

かなでの頭を撫でてやっている俺に爺ちゃんたちが声を掛ける。

「いや、ちようど食い物が切れてて、助かったよ。でも、肉なんて珍しいな。嬉しいけど。」

「万馬券よ万馬券。」

豪快に笑う爺ちゃん。なるほど爺ちゃんの幸運に感謝だな。

「せっかく孫たちが来てくれるんだから、いつもの食事より若い子たちが好きそうなものと思ってね。」

婆ちゃんは家族が揃うのが嬉しいのか楽しそうに話す、婆ちゃんが俺たちを気遣ってくれて嬉しいが申し訳なさもある。いつも貧しい食事の俺にとってまともな食事であればそれだけで有難いのだ。それが表情に出ているのだろう。

「私たちも偶にはお肉を食べて元気をつけなくちゃと思うしね。それに、今日は？孫たちの為の食事」だもの。」

婆ちゃんが爺ちゃんと頷きながら嬉しそうにしているのを見て、何も言えなかった。

俺は庭に出て弟たちを手伝っている。かなでは縁側に座り、俺たちを楽しそうに眺めている。あらかた準備が終わったころ、塀の先に兄



さんの頭が見えた。

「おつ、キンイチも来たみてえだな…。」

GⅢが火を起こす準備をしながら呟く。兄さんはその場から動かない。

「おーい、兄さんー。」

俺が声を掛ける、兄さんは少し振り向き強張った顔で俺たちに瞬きで合図を送った。

『ニ・ゲ・ロ』

あの兄さんがここまで追い込まれる相手がこの先にいる。そう察した俺たちは、武装を整え、かなでや爺ちゃんたちの安全を確保を思案するが、ヒステリアモードですらない俺にとつて、この状況で戦う、逃げる、どちらの選択肢も活路を見いだせない。このタフな弟を囮にしてかなでたちを連れて逃げるか等、考えていると、

「この、馬鹿者があー。」

怒声とともに大砲が放たれたような轟音が鳴り、兄さんが塀をブチ破って飛来し、地面に塀の瓦礫と共に落ちる。

「兄さんっー!」「キンイチっ!!」

俺とGⅢが兄さんに駆け寄る。兄さんから返事はなく、気を失っている。

「糞っ、どうなってやがる。」

目の前の惨劇に怒りと恐怖がGⅢを襲う。俺は兄さんを倒したと思われる人物の声に引つ掛かりを覚える。あの声が以前と変わり少し低くなっているとしたら…。俺が最悪の答えに辿り着こうとしている時、崩れた塀から舞い上がる砂埃に人影が映る。

「ふざけやがって…、アメリカじゃあ勝手に家に入った奴は殺されても文句は言えねえんだよ。かなめっ、援護しろ。」

「わっ、わかったっ!」

GⅢとかなめが塀へ向かって飛び出た。

「おい、やめろっ!!」

兄さんが電話で言っていた? 家族で集まる”、婆ちゃんが言っていた? 孫たちの為の食事”…。最悪の答えを導き出してしまった俺は飛

び出した2人を呼び止めるが

「邪魔だ。」

崩れた塀を越え、庭に入ってきたその人物は、虫を払うように左手の一振りする。2人が地面に叩きつけられた。

「くそっ、GⅢっ!!かなめっ!!」

声を掛けるも返事はない、意識を刈り取られているようだ。

「かなで!! 爺ちゃんたちのところへ逃げろっ。」

縁側に目をやり、怯えるかなでへ向かい叫ぶも

「ううう…」

怯え切ったかなででは腰が抜けたのか、ペタンと座り込んで動けないでいる。

ガラガラと瓦礫の崩れる音と共に殺気が一歩ずつ近づいてくる。上下左右360°からレーザーポインターを当てられている、身動きも取れないような殺気が俺に向けられ、徐々に強くなっていく。

ジャリッ そいつが一步、近づいた。あまりの殺気に耐えられず、俺は膝から崩れ落ちる。逃げなければ。頭では分かっているのに身体が全く動かない。恐怖に支配された俺は左手で胸倉を掴まれ、力任せに立ち上がらせられる。そして――

「この軟弱者がああー!!!!」

強烈なボディーブローで沈んでいくのだった。

「うっ。」

痛みに呻きながらぼんやりと目を開くと、畳の上にいた。痛む身体を起こし、キョロキョロと辺りを見渡す。…どうやら実家の座敷のようだ。気を失った後、ここに転がされたようだ。時計を見れば、あれから2時間近く経過しており、それだけの間気を失っていたことになる。かなり手加減されたようで殴られた箇所がジリジリと痛むだけだ。恐らく兄さんたちも無事だろう。座敷には俺しかいない、痛み

と空っぽの腹を擦りながら、皆を探す為、座敷を出る。とりあえず居間へ向かおう。

「この大馬鹿ものっ!! 下らん理由で死んだと偽り、金次を不安にさせよってっ!!」

居間では仁王立ちした鬼に正座させられた兄さんが説教されていた。鬼に見つかる前にずらかろう。そう思う間もなく鬼がこちらを睨む。

「ようやく起きたか、金次。そこに正座だ。金一は行ってよし。」

兄さんが逃げるように居間を出て行き、すれ違いざまに憐れむ視線を向けられた。鬼から見えないとこにいるのになんで分かるんですかね。そう思いながらも逃げたら後がもっと怖いので素直に従い兄さんのいた場所に正座する。

正座した俺を見下ろす鬼―我らが遠山家の長女、遠山金虎―は、その無駄にデカイ胸を持ち上げるように腕を組み、言葉を紡ぎ始めた。「凡そ1年ぶりになるのか、金次。この1年、お前の話を何度か聞くことがあった。」

姉さんは、しみじみと振り返る様に瞳を閉じてゆっくりと言葉を紡いでいる。

―1年前―兄さんが死んだことになった事件の後、絶望で塞ぎ込む俺の前に姉さんは現れた

塞ぎ込み、自室に籠っている俺の前にくの字に変形した玄関のドアが轟音と共に襲来した。驚く俺の目の前に瞬間移動したのかという速さで立った姉さん、目の前で起こる異常現象に処理能力がパンク寸前の俺は、

「いつまでめそめそしているっ!! そんなことで遠山の男が務まるかっ!!」

姉さんの声で苛立ちを覚え、拳を握り声を荒げる。

「兄さんが、死んだんだぞっ!! 平気なわけあるかっ!! 兄さんは俺の憧れだったんだ…、目標だったんだ…、それなのにつ、それなのにつ…。」

怒りと悲しみで涙が溢れ出し、涙でいっぱい目で姉さんを睨みつける、握っていた拳が震えだしていた。

「ああああーっ!!」

そして叫びながら姉さんに拳を振りかぶる。しかし拳は姉さんの顔の前で止まり崩れ落ちる。

「どうした、殴らないのか。」

姉さんの落ち着いた声が静かに響く。

「分かっているんだよ…、俺が姉さんを殴っても、何をしたって、何も変わらない…。分かっているんだよっ!!」

「馬鹿者が…。」

床に拳を叩きつけながら嗚咽交じりに叫ぶ俺の前で姉さんは片膝をつき、俺を抱きしめた。そして俺を落ち着かせるために、ゆっくりと優しく背中を撫でてくれている。感情や愛情の基本表現が肉体言語だった姉さんが見せた優しさに涙が止まらなくなる。姉さんは俺が泣き止むまで手を止めずにいてくれた。

「姉さん、その、ありがとう…。」

泣き止み恥ずかしくなった俺は顔を上げ呟くように礼を言おうと、姉さんはフンツと鼻を鳴らし、照れくさそうに立ち上がるとクルリと背を向け玄関へと歩きだした。

「愚弟にひとつ教えてやる。遠山の男は殺されようとも死なんぞ。」

姉さんは、こちらを振り返ることなくそう言い放ちやって来た時と同じように一瞬で姿を消した。呆然と立ち尽くしていた俺は部屋を見渡す。

「姉さん…、玄関の修理どうすんだよ…。」

それ以来姉さんは、連絡も無く、何処にいるのかさえ分からなかった。あの時の修理費を請求せねば、そう考えていると姉さんが話を続ける。

「強者を求め、諸国を旅しているとお前の様々な武功の噂を耳にした。腑抜けておった愚弟が活躍する話に歓喜したぞ。」

嬉しそうだな姉さん。それってE.Uとか極東戦役のこと？俺的に

は黒歴史なんだけど。誰だよそんな話したやつ S D A が上がったのもそいつらのせいだろ……。しかし姉さん、嬉しそうだけどなんで正座させられてるんだ？疑問に対し思考する間もなく、姉さんの笑顔が消える。

「それがなんだ、英国での情けない話はっ!!」

ヤバい、怒ってる。えっ、なに、イギリス？何だ？確かにいろいろやらかしてるけどさ。俺が姉さんの怒りを前にあたふたしている。

「おい、姉貴、肉焼けたぜ。熱いうちに食べよ。」

「ん、おお、金三、すまん。」

GⅢが焼きあがった肉を皿に載せてやって来た。姉貴呼びなんだな弟よ……。恐らく俺が気絶している間に説明があったんだろう。そして、金三呼びで怒らないってことは力関係がはつきりしたんだな。

肉を前に姉さんの怒りが静まる。姉さんは肉が好物だ、それこそ名前の通り虎の様に食う。ここはGⅢの絶妙な援軍に感謝する。『よくやった』と目配せすると、GⅢはヘツと笑い、

「おい、兄貴も姉貴も、せっかくなんだ、庭で食おうぜ。話はそつちですりやいい。」

「仕方ない。」

肉の誘惑に屈した姉さんが皿を受け取る。「ナイス」っと心で叫ぶ俺を猫を掴まむ様にぶらーんと片手で持ち上げ庭へ向かって行く。

逃げられないんですね。知ってました。姉さんに重さの概念は無いらしい。無力な俺は回避できない説教と肉を味わうべく運ばれていったのだった。

「遅ーい、もう食べてるよー。食べる前にお説教なんて非合理的だよ。」

俺たちが庭に出てくるのを見たかなめが、かなでの皿に肉を載つけてやりながら笑う。

「俺たちもさっさと食おうぜ、説教なら食いながらでもできるだろ。」

「そ、そうだ、姉さん。一番旨い時に食わなきゃ、用意してくれた爺

ちやんたちに失礼だ。」

俺は、GⅢが出してくれた助け舟にすぐに乗っかる。姉さんは仕方ないという感じで俺を掴む手を放した。解放された俺はバタバタとバーベキューコンロへ駆け寄り、肉に食らいつく。熱い、しかし旨い。空腹に染み渡っていく。

「行儀が悪いぞキンジ、かなでも見ているんだ。：随分腹が減っていたみたいだな。」

兄さんが笑いながら俺を窘める。

「ああ、昼飯も食ってないままあれだからな。」

縁側に座り、上機嫌で肉を平らげていく姉さんをちらりと目線で指す。

「俺も驚いた。まさか戻ってきているとは思わなかったからな。：まだ終わってないんだろう?」

最後だけぼそぼそと小さく兄さんは訊ねてくる。幼い頃より姉にボコボコにされながら育ってきた可哀そうな兄弟二人は恐怖の権化たる姉に聞こえぬよう会話する。

「まだまだよ…、恐らくあの皿が終わったら来るぞ。兄さんは大丈夫だったのか?」

姉さんの持つ大盛の肉皿を盗み見ながら兄さんに質問を返す。あの量だと5分といったところか…。

「俺の件はほとんど最初の一発で終わった。イ・ウー潜入の件を誰にも教えず家族を悲しませたことは俺も悪かったと思ってるからな…。」

実際には、誰にも言えない任務だった為、仕方のない部分が多いのだが、去年、悲しみに暮れる俺を見ていた姉さんは俺の代わりに兄さんを殴ったのだろう。なんやかんや情に厚いところがあるからな、姉さんは。

「しかも、『そんな訳の分からない連中は正面突破で殴り倒せばよからう、回りくどいことをしおって』だよ。」

思わず苦笑いする俺と兄さん。あの化け物揃いのイ・ウーに正面から乗り込んで、全員を無力化するなんて夢物語で実際やれば手の込んだ

だ自殺だ。出来るわけない。…出来ないよね…。あの姉なら出来そうで怖い。

「待てよ、俺がイ・ウーに入った時にシャーロックが…『歓迎するよ、前に勧誘した彼女とは似ていないみたいだね。』と言っていたが…、違うよな…。」

兄さんが不安そうに呟く。違う、いや絶対に違っていて欲しい。そんな俺たちの願いは遮られる。

「おい、兄貴時間だぜ。それに面白そうな話してんな。」

ニヤニヤとGⅢが死刑執行人の様に寄ってくる。その後ろには肉を平らげ満足げな姉さんがいる。2分、予定より早すぎるっ!!まだ全然食ってないぞ。

「姉貴、シャーロック・ホームズって知ってつか?」

楽しそうに姉さんへ質問するGⅢ。こいつ聞いてやがったな。

「シャーロック…、ホームズ…。」

記憶を遡るように名前を復唱する姉さん、

「覚えのあるような、ないような…?」

世界一有名な探偵の名前が分からないポンコツ頭脳の姉さん。脳みそは相変わらず強くなっていないようだ。

「髪型はオールバック、英国紳士然とした立ち振る舞い。未来予知にも等しい推理、条理予知を扱う男だ。」

兄さんがシャーロックの特徴を紡ぐ。姉さんは少し考え、ポンと手を叩く。

「ああ、あの推理だなんだとうるさい男か。なんとやらの一員になれと誘ってきたがあまりにも推理、推理うるさいから殴ってしまったら、推理が外れたただのごちゃごちゃ言っておったが…。なにかまづかったか?」

それがどうした、といわんばかりの表情で俺たちを見る姉さん。兄さんが頭を抱えている。『なんとやら』って…、イ・ウーだよ!!実質片仮名2文字!!そのくらい覚えてくれよ!!シャーロックが推理出来ないレベルの脳筋な姉さんは、その時のことを思い出しらしく、「そもそも、推理だなんだと下らん、己が肉体をもって正面突破してこ

その——」とブツブツ言ってるし、GⅢはGⅢで「姉貴って面白れえな。」と俺に同意を求めてくる。…もうやだ、この姉と弟。

「それで姉貴、兄貴になんでキレてんだ？」

おのれGⅢ、余計なことを。鳥頭の姉さんが思い出しちゃうだろうが。

「おお、そうだった。金次の様々な武功を聞いて褒めてやろうと思っていた矢先に英国で実に不愉快な話を聞いたのだ。」

姉さんは、そう言いながら沸々と怒りが再度湧き上がってきている。

「右手は使わんとか言っておった、名前は…、なんだったか…?…接着剤…。」

うーん、と姉さんは考え込む。名前くらい覚えようよ。てか、サイオンだろそれ。「セメダイン…、いや、アロンアルファ…」と呟く姉さん。違う、ボンドだよ!!強すぎる為に、ハンデとして利き腕は使わない、世界最強のエージェント—007—サイオン・ボンド。そんな奴を接着剤で覚える姉さんはいろいろと残念過ぎる。まだ思い出せずうんうん唸ってるし…。

「ボンド…、サイオン・ボンドのことか?」

仕方がないので姉さんに聞くと

「おお、そんな名前だった。ボンドだ、ボンド。」

それだ!!と頷き、

「そのボンドに負けたと聞いたぞ、全く情けない。本気にさせずに負けるなど、精進の足らぬ証拠故、鍛えなおしてやる。」

クワツ、と目を開き、俺の胸倉を掴みながらそんなことを言う姉さん。

「まっ、待ってくれ姉さん。サイオンは世界最強のエージェントなんだぞ、そんな奴相手に生きて帰ってきたんだ、十分頑張った方だから。」

サイオンの強さを知る俺は情状酌量を訴える。

「そうだぞ、姉さん、キンジだって頑張っている。次はお互い全力でやり合えるはずさ。」



「007とやり合って、『面白い奴』扱いされるのは兄貴くらいだぜ、姉貴。」

同じく、サイオンの強さを知る兄さんとGⅢが俺を援護してくれる。

「世界最強だと…、あれがか…、そんな訳ないだろう!!」

姉さんの怒気が増す。

「右手を使わせたが弱かったぞっ!!あの程度で世界最強などあり得ぬっ!!」

姉さんの言葉によって俺たちの時間が止まった。

サイオン、右手使っちゃったの?そもそも姉さんと戦ったの?弱かった…?あの程度…?訳の分からん情報が錯綜し混乱の渦を巻く。

「…姉さん質問していいか?」

兄さんが小さく手を挙げる。

「なんだ。」

「姉さんは、なんでサイオンと戦ったんだ?」

「金次に勝った、強者と聞いたからだ。」

GⅢが続けて質問する。

「どうやって右手を使わせて勝ったんだ?」

「強者と聞いていたため、手始めに殴ったのだ。そしたら我が拳受けた奴の左手が折れてしまったな…。そこから本気になったようで、右手をいただいたので、適当にいなしながら少し強く殴ったら動かなくなってしまうってな…。」

「加減を間違えた。」と申し訳なさそうに言う姉さんに啞然とする俺たち。質問したGⅢさえ理解が追い付かない様子だ。

「う、動かなくなっただって…。」

「あつ、いや、死んでないぞっ!!…:多分。」

俺の疑問に少し焦って答える姉さん。多分かよ。そして、小さく咳払いし

「つまりだな、あの程度に負ける情けない愚弟に喝を入れ、鍛えなおしてやろうという話であつて、済んだことはどうでもいいだろう!!そもそも、あの程度を最強など、お前たちが軟弱なだけだっ!!」

「いや、姉さん（姉貴）の基準がおかしいっ!!」

「なっ、私のなにかおかしいというのだっ!!」

甚だ心外だと腕を組む姉さん。

「全部だよっ!!!!」

俺たちの心からの叫びだった。

## 姉の旅路

—金虎視点—

私の飢えを満たせる、あわよくば私を倒せる強者を求め旅を続けているが、今だ相まみえることは叶わない。そんな日々を過ごす中で、弟、金次の話を耳にする機会が増えた。曰く、『不可能を可能にする男』や『殺しても死なない男』やら e t c . . . 。「ようやく遠山の男らしくなったか」と弟の成長を誇らしく思う。そう思うと「どの程度成長したか見てやろう」という気持ち芽生えてくる。

「帰るか。」

そう思い立ち、流れ着いた地、英国より実家へその旨の連絡を『けーたい』とやらで送る(使い方は生前の父、金叉に叩きこまれた)。さて、どのような帰ろうか、来た道を辿るという手もあるが、—東シナ海を泳ぎ、上海へ辿り着き、歩きながら欧州へと至り、金次の噂を聞き喜びのあまり海へと飛び込んだ結果現在に至る—思いつきで辿った道の為、覚えていない。道を聞くにも言葉は日本語以外は理解出来ない。

「とりあえず、日本語を使える者を探すか。」

ブラブラと気の向くままに歩いていると、常人よりも強い気を感じた為、そちらへ向かうことにした。

「随分と治安の悪いところだ。」

強い気を追って薄汚れた道を通り抜けていく途中、何を言っているのか分からなかったが、私の身体に触れようとしたり、銃と向ける者や襲い掛かってくる者等がいたが邪魔なので転がしておいた。

「ここか。」

探していた気を持ち主を見つけ出した。五厘刈りの男の英国人がその気の持ち主だが、何やら戦闘中のような様子だ。しかし、一方的な勝利で戦いは終結する。

「相手が弱すぎるな…、しかしなぜ故利き腕を使わぬのか…。」

戦闘を見届け、感想と疑問を聞こえるように口に出すと、件の男は

驚いたようにこちらを見て口を開くが、何か言っているが英語の為、さっぱり分からん。

「なんと行っておるか分からん…、日本語は使えんのか。」

そう伝えると、こちらを警戒しながら日本語で話しかけてくる。

「日本人か？俺に気配を察知させないとは…、何者だ。何故俺の利き腕が右だと分かった？」

「日本語が通じて何よりだ。利き腕は体の動きで分かる。そして私は、日本からの旅人だ。それよりも何故利き腕を使わない？」  
「動きだけで分かったと…。」

男の警戒心が増し、銃をこちらに向けながら質問に答える。

「右を使わないのはハンデだ、俺は強すぎるからな。…しかし、トウヤマといい、日本人はおかしな奴が多いのか？」

ハンデ…、つまり加減か。しかし今、『トウヤマ』と…、はっ、と気づく、もしやとの思いで男へ駆け寄る。

「おお、トウヤマといったな!!金次に会ったのか!!」  
「止まれっ!!」

その声と共に、銃声が鳴る。随分と警戒しているようだ、そう思いながら弾丸を掴むと、驚いた表情でこちらを見ている。

「日本人…、お前、本当に何者だ…？」

「そんなことはどうでもいい、それより金次に会ったのかっ!!」

下らんことを聞いてくる男にそう言い放ちながら、握った拳を開くと弾丸が地面へと落ちる。男は苦い顔をしながら言葉を紡ぐ。

「お前が聞いているのは、トウヤマ・キンジのことか？それなら答えはイエスだ。」

そして、少し嬉しそうな表情で

「少し前に、決闘と共闘をした…。そのときは左手で俺の勝ちだったが…、将来的に右手を使えるだろう。」

まるで成長していくライバルを思うように話す。が、金次が負けたと…、しかも手心を加えられて…。

愚弟を少し見直していたが…、どうやら鍛えなおしてやらねばならぬようだ…、とりあえず、目の前のこの男の本気と同程度までな…。

この男の力量を測らねばな!!

「加減はいらぬぞ…」

構えをとり、そう言い放つ。私の構えを見て

「お前…、俺が007、サイオン・ボンドだと分かっているのか？」

身の程知らずめ、と言うような口調で男が殺気を放つ。なるほど、ボンドというのか、覚えておこう。しかし…

「007などしらんわっ!!」

このボンドとやらはなにを言っているのだろうか? とりあえず殴るか。そう思い踏み出す。

「クソっ、こいつ本物の馬鹿だっ!!」

ボンドが下がりながら銃を連射する。

「ハっ!!」

飛来する複数の弾丸を拳の連撃で撃ち落とし、一気に距離を詰める  
と、

「ちっ!!」

ボンドが私の拳に対応しようと左手を繰り出す。

「加減はいらぬと言ったはずだが…」

意地でも右手を使わぬつもりか…、あまりやりたくなかったが仕方がない。左腕に拳を繰り出す。

「ぐうっ!!」

ボンドが衝撃で仰け反り、左腕を押さえる。優しく折ってやったので完治は早いはずだ。

「これで手加減できなくなっただろう。」

「こい、と合図してやると、

「後悔するなよ…」

ボンドの殺気が増し、右手で攻撃を繰り出してくる。うむ、先程より格段に動きが良くなった。反撃せずに全ての攻撃を捌いていたが、大体の実力は分かった、そろそろ終わりにするか。しかし、この程度の手合いに負けるとは…、情けない男弟だ…。

「手合わせ感謝する。」

そう感謝の意を伝え、鳩尾に拳を叩きこむ。…しまった、少し加減

を間違えた…。

ボンドは壁にぶつかるまで吹っ飛び、倒れた。起き上がらない。

「殺ってしまったか!？」

焦ってボンドに駆け寄る、意識は無い…、呼吸は…ある。よかった、そう思うがここで問題がある。倒れたボンドをどうするか…？腕組みをして考え込む。

「おお、そうだ!!」

名案が浮かぶ。

「おい、そのの、日本語は分かるか？隠れて見てないで手を貸してくれ。」

ボンドと会った時から、建物の上に隠れてこちらを見ている存在がいた。気付いてはいたがどうでもいいので無視していたが、恐らくボンドの仲間だろう。手を貸してくれるはずだ。敵だったら殴ればよいだけだ。

「いつから、気付いていた。」

倒れているボンドの前、男が私に背を向け現れた。

「ボンドを見つけた時からだな。それよりこれの仲間であろう？医者に診せる、手を貸してくれ。」

「ただの同僚だ、仲間じゃねえ。が、こいつに恩を売ってやる。」

そう言って、男は「俺が運ぶ」とボンドを担いだので、「任せる」と小さく頷くと、

「敵意はないようだが…、お前は何者なんだ？こいつを赤子の手をひねる様に倒せるとは…、人間ではねえみてだが。」

と失礼なことをぬかしてきたので、

「むっ、私は誰がどう見ても人間であろう!!よく見ろっ!!」

そう言って男の頬を両手で挟み、無理やり視線を合わせ、私の顔を見させる。男は、一瞬、目を見開き、すぐに私から目を逸らす。

「なぜ目を逸らすっ!!」

ぐっ、と手に力を少し入れ、こつちを見るように促す。

「わ、わかった、わかった。お前は人間だ!!だから放してくれ!!」

「まったたく…。」

手を放してやる。男はふーつ、と息を吐き、顔を擦っていたが、それを終えると私に質問してくる。

「あんた、これからどうすんだ?」

「日本に帰ろうと思っっているが…、道が分からぬ。」

「そうか…、それじゃあ、ここで待ってな、サイオンの奴を運んだら、送ってやるよ。」

男の厚意が有難い。

「おお、助かる!!なにぶん言葉も分からぬし、金もなくて困っておったのだ。」

「そんじゃあ、待ってな。」

そう言っつて男はボンドを担いで去って行った。

言われたとおりにしばらく待っていると男が帰ってきた。

「待たせたな。」

男はへへつと笑い

「それじゃあ、行こうぜ。」

と、小道を指す。ついてこいということらしい。領き、歩みを開始する。

「そんで、道が分かんねえって言っつてたが、空港までか?」

男がこちらを見ながら尋ねてくる、

「空港…?いや、日本までの帰り方が分からんだ。陸路と海路で来たのでな。」

「そうか、とりあえず、日本に帰れりやいいんだな?」

男の問いに頷く。男はニカツと笑って、

「そんじゃあ、特別コースで日本へ送ってやるよ。」

「有難い。」

「ここは御厚意に甘えるでしょう。」

「そっういや、あんた、名前は?」

男が訊ねてくる。

「金虎、遠山金虎だ。」

「カナコか…、俺は、そうだな…、エイトだ。」  
「了解した。」

お互いに自己紹介をしながら小道を抜けていくと駐車してあるエイトの車に乗り込むと、エンジンがかかる。

「どうよ、いい車だろ。ボンドカーみてえな面白カーじゃねえけどよ。」

そんなことをエイトが言っているが、ボンドカーなるものは知らないし、車の良し悪しなど分からない私は、ひとつの疑問をぶつける。

「そんなことより、ひとつ聞きたい、ボンドのエイトも言っていたが、007や008とは何だ？」

私の質問に、エイトは驚いて

「嘘だろ…、信じられねえ。マジで知らねえのか？」

と啞然としている。

「知らん。」

それからしばらく、エイトがいろいろと説明していたが、話が難しく理解出来なかった。

「降りな。」

車のエンジンを切り、ドアを開けながらエイトが言う。それに従って降車する。戦闘機やヘリやらがずらりと並んでいる。

「こっからは空だ。」

エイトが小型の飛行機を指差す

「空港でも迷子になるだろうから、カナコには、こっちのがいいだろ。」  
からかうように言うエイト。事実、空港で降ろされ、ひとりで帰ることとなっていたら、なんと書いてあるか分からない空港内を、私は彷徨うはめになるだろう。文字は苦手だ。

「悔しいが、助かる。」

私がそういうと、エイトはケラケラと笑い

「んじゃ、行こうぜ。」

と歩きます。私はその後ろをついていき、飛行機に乗り込む。人生初の飛行機に少し気分が高揚する。



「俺は、操縦席に行くから、座ってな。」

エイトはそう言って奥へ行く。私は席に着き、機内をキョロキョロと見ていると、飛行機が動き出し、加速し、飛び立つ。「おおー」と声が漏れる。しばらく外を眺めていると

「随分と楽しそうだな。」

エイトが戻ってきた。

「操縦はいいのか？」

そう尋ねる私に

「自動操縦だよ。操縦は離陸と着陸、その前後だけだ。特注のエージェント専用機だからな。」

スゲーだろ。とエイトが言う。

「飛行機には初めて乗ったが…、実に面白い。」

私が称賛すると、

「陸路と海路で来たんだったな、随分と時間がかかったとは思うが、なんで帰り道が分からなくなるんだ？パスポートの入国スタンプを見りゃ、あらかた分かるだろうに。」

エイトがそう尋ねてくるが、

「パスポートとは何だ？見せろと言われても、そんなもの持っておらぬぞ。日本海を泳いで上海に渡り、そこから適当に歩いていたら欧州に辿りついてな、そして気晴らしに海へ飛び込んだらイギリスに流れ着いたのだ。故にどこを通ってきたのかも覚えておらん。そもそも、そのパスポートとやらが無ければ、何か問題でもあるのか？」

だいぶ省略したが伝わっただろう。しかし、パスポートとはなんだ？

「マジかよ…、嘘だろ…。」

エイトが頭を抱えて呻く。

「おい、大丈夫か？」

頭痛でもするのだろうか？と私が心配してやると、

「お前の頭が大丈夫じゃねえよ!!」

エイトが叫ぶ。人が心配してやったというのに、なんとという物言いだ。

「なんだ、私を馬鹿にしているのかっ!!」

「馬鹿にしているんじゃないやねえ!!お前は馬鹿なのっ!!」

「なんだとっ!!」

私は勉強が嫌いで、考えるのと覚えるのが苦手で、忘れることが多いだけだ。

それから日本へ着くまで、エイトからパスポートとやら法律やらを教わったが、難しかったので忘れた。そのほかにもいろいろと話したが…、それも忘れた。

日本に着くとエイトが見送ってくれた。

「いろいろと助かった。ありがとう。この借りは必ず返す。」

エイトに礼を言う。

「また、イギリスに来いよ。次は、ちゃんとパスポート持つてな。借りは…、考えとく、もしかしたら仕事を頼むかもしれないがな。」

「了解した。では、また会おう。」

見送るエイトに手を振る。―良き友を得た。また友に会うため、イギリスへ行くことを心に誓う。…しかし、パスポートとは何なのだ?…まあ、何でもよい、些細なことだ。約1年の旅を終えるべく、実家を目指し歩き出した。

|||||  
|||||  
|||||

—008視点—

俺は、MI6のエージェント—008—、本名は機密事項だ。

今は、007—サイオン・ボンド—のバックアップ任務に就いている。サイオンのターゲットが万が一、逃げ切れた場合（もつとも、そんなことは有り得ないだろうが）の対処役だ。

ターゲットを追い込んだサイオンを建物の上から眺める。サイオンが戦闘を開始した。「終わったな」そう思い、帰ろうとした時、ふら

りど人がが現れた。後ろ姿しか見えないが、女のようにだ。そいつはサイオンの戦闘を眺めているが、サイオンはそいつに気付いていない。まさか、敵か？―ターゲットに仲間はいない―情報部の調査に誤りがあったのか？しかも、戦闘中とはいえ、サイオンが存在に気付けない女、実力者と見て間違いないだろう。

俺が、その女への警戒を強めていると、サイオンの戦闘が終わる。戦闘を終えたサイオンに女が話しかけた。サイオンは、そこでようやく女の存在に気付いたようだ。驚いたサイオンが、女に質問をぶついているが、女は英語が分からないらしく、しばらくしてサイオンが日本語で話し始める。―日本人…、気配を消していたようだし、忍者か？―そんなことを考えていると、サイオンが発砲した。女には当たっていないようだ、恐らく威嚇射撃だろう。一連の動きを見ていなかった俺はそう考える。女が突然拳を構え、サイオンが殺気を放つ。馬鹿な女だ、戦う相手の実力も分からないらしい。忍者ならおとなしく隠密に徹していればよいものを…、いや、逃げられないと悟ったのか？俺が、世界最強のエージェント―007―と戦うことになった不幸な女を憐れんでいると、女が踏み出すと同時に、サイオンが銃を連射した。

「あーあ、可哀そうに…。」

女の死を確信して思わず口に出る。しかし、瞬間、目を疑う光景が繰り広げられた。その女は銃弾を拳で撃ち落としやがった、しかも、一発ではなく、サイオンが女を狙って放った弾丸、全てをだ。あの女、忍者じゃねえのかよ!!

「マジかよ…。」

俺が驚愕に目を見開いていると、女は瞬間移動したかのように、一瞬でサイオンとの距離を詰めている。サイオンが攻撃を繰り出すがりや、折れてるな…。援軍として女を攻撃するか、そう思っていると、ボンドの殺気が増した。これがあいつの本気か…、距離があっても伝わってくるサイオンの殺気。

「ちっ、あの野郎、俺たちにも加減していたのか…。」

悔しいが、サイオンは、俺たちエージエントで一番強い。何度か訓練でやり合ったが、全て負けた。認めたくはなかったが、あの新参の若造は圧倒的に強い。しかも、今の奴の殺気から、手加減されていたことが分かり、苛立ちを覚えた。手加減されても勝てない、最強のエージエント…、あいつのハンデを与える精神と、本気を出させれなかった己の未熟さに怒りが込み上げてきた。

サイオンは折れた腕を無視し、強烈な猛攻を仕掛けている。先程までと動きが全く違う。「スゲエ」、怒りを忘れ、素直に関心してしまう。しかしそれ以上の相手の女の凄まじさが見える。サイオンの猛攻を当然の様に捌いている。そして、女が、反撃に出た、いや、出たのだから…。何も見えなかったが、サイオンが吹っ飛んでいった。地面に落ちたサイオンは、ピクリとも動かない。

「嘘だろ…。」

あまりに衝撃的な光景に呆然としてしていると、女が焦った様子でサイオンに駆け寄り、サイオンの状態を確認している。俺は、我に返り、退却を開始しようとしたその時、

「おい、その、日本語は分かるか？隠れて見てないで手を貸してくれ。」

女の声が響く、気付かれていたか…、いや、違うな、あれ程の実力者相手に、気付かれないと過信していた、自分が甘かった。逃げるか戦うか、いやどっちも不可能、確実にやられる、そんな確信めいたものが脳裏をよぎる。一縷の望みを賭けて、俺は投降を決意し、女の元に向う。道中、落ちていているサイオンのはなった弾丸―ペしゃんこになり、コインの様になっている―を見つけた。戦闘になったら、間違いなく死ぬな。あの女は真正正銘の化物だ。

「いつから、気付いていた。」

動かないサイオン（気を失っているようだ）を前に、女に背を向けたまま、恐怖を隠し、平静を装いながら女に質問する。

「ポンドを見つけた時からだな。それよりこれの仲間であろう？医者に診せる、手を貸してくれ。」

女は、殺気どころか警戒すらなく、サイオンを指さす。どうやら、サ

イオンを病院に運ぶつもりらしい。どうやら死なないで済みそうだ。「ただの同僚だ、仲間じゃねえ。が、こいつに恩を売ってやる。」

エージェントは機密情報の塊だ、下手に病院には連れていけねえ、本部へ運ぶ必要がある。「俺が運ぶ」、そう言っつて、サイオンを担ぎ、初めて女をちらり正面から見ると、胸、デケエな——女の胸にまず目がいつてしまう——と、女は「任せる」と言い、小さく頷いた。こちらに對して全く敵意を感じない。

「敵意はないようだが…、お前は何者なんだ？こいつを赤子の手をひねる様に倒せるとは…、人間ではねえみてだが。」

女の正体が分からず、探りを入れると、奴は、

「むっ、私は誰がどう見ても人間であろう!!よく見ろっ!!」

語気を強める。しまった、そう思った瞬間、頬を両手で挟まれ、強引に動かしてくる。ヤバイ、そう思った時、俺の目に女の顔がはつきりと映る。ところどころ跳ねたブロンドの髪に、切れ長の目、その左の目じりには黒子がひとつある。…とんでもない美人がそこにはいた。エージェントとして世界各国で仕事をこなしてきた俺が知る限り、一番の美人だ。そんな美人、俺の目をじっと見ている。思わず照れくさくなり、目線を逸らす。

「なぜ目を逸らすっ!!」

この美人はそう言っつて両手に力を入れる。——痛い、マジでいたい、骨が砕けるっ!!——痛みに耐えかね、

「わ、わかった、わかった。お前は人間だ!!だから放してくれ!!」

俺は、怪力美人に懇願すると、

「まったたく…。」

そう言っつて、手を放してくれた。痛みを誤魔化すのと、気持ちの切り替えの為、息を吐き、顔を擦りながら考える。とりあえず、この女について分かっているのは、出鱈目な強さと、今のところ敵対する様子がないっつてことだけだ。それ以外には何もわかっていない、こいつに敵意のないうちに可能な限り情報を引き出す必要がある。エージェントとしても、ひとりの男としても、この女に對して抑えられない興味湧いてきた。

「あんた、これからどうすんだ？」

とりあえず、今後の行動予定を聞き出そう、顔に添えていた両手を戻し、そう思い質問する。

「日本に帰ろうと思っているが…、道が分からぬ。」

「そうか…、それじゃあ、ここで待ってな、サイオンの奴を運んだら、送ってやるよ。」

『日本に帰る』…この女は日本人で間違いないようだな。しかし、日本人つてのは黒髪じゃなかったか？いや、染めている可能性も、混血の可能性もある。道が分からないつてのはラッキーだ、ここから下手に動けないだろうし、道中で情報を聞き出せる可能性も高くなる。

「そうか…、それじゃあ、ここで待ってな、サイオンの奴を運んだら、送ってやるよ。」

「おお、助かる!!なにぶん言葉も分からぬし、金もなくて困っておったのだ。」

「そんじゃあ、待ってな。」

俺はサイオンを担ぎ、ひとまず本部へ向かう。

本部にサイオンを放り込んで先程の場所へ戻り、女から話を聞くと、日本まで送ることとなった。女を車へ案内し、その道すがら、名前を聞き出す。女は『トウヤマ・カナコ』というらしい。偽名の可能性もあるが、とりあえず一歩前進だ。俺も名乗ることになったが、『エイト』なんて我ながら安直な偽名だな。

車に乗ると、とりあえず、カナコが情報に疎いことが分かった。まさか、007もM16も知らないとはな…。仕方なく、世間一般にも知られている程度の内容を教えてやる。情報を聞き出すどころかこつちが話してどうすんだよ…、そう思いながらも、黙って話を聞いているカナコの横顔に見惚れてしまい、話を止めれなかった。サイオンが女を避ける理由が分かった気がする。この美女を見ているだけで、任務・不安や悩み…、どんな問題も些細なことに感じられ、この女のために全てを捧げたい、そんな思いが込み上げてくるのだ。

そんな思いは、車から飛行機へ乗り継ぎだ後、機内でのカナコとの会話で、一瞬で消え去った。

…カナコは、この優れた容姿からは想像できない、いや、想像してはいけないレベルの馬鹿だった。ひどく残念な女だった。黙っていれば、あんなに美人なのに…。パスポートの存在すら知らずに、とんでもない手段で世界を旅してやがった…。

「帰国したら、軟弱な弟を、死なない程度に殴って鍛えなおす。」

と、カナコは息巻いていたが、その弟が不憫でならねえ。しかし、化物以上の強さのカナコの拳（多少の加減はしていると思うが）を耐えられる時点で、弟も十分化物だな。

カナコの規格外の大馬鹿っぷりに呆れ、俺の淡い恋心は消し飛んだが、こいつの戦闘能力は、それ以上に規格外だ。上手く扱えりや、最強の戦力になる。そんなことを考えながら、カナコに常識を叩き込んでいたら、日本へ着いた。

飛行機を降り、カナコを見送ってやると、

「いろいろと助かった。ありがとう。この借りは必ず返す。」

カナコが、俺に礼を言う。

「また、イギリスに来いよ。次は、ちゃんとパスポート持ってな。借りは…、考えとく、もしかしたら仕事を頼むかもしれないがな。」

「了解した、では、また会おう。」

手を振り、去って行くカナコ。

『借りは必ず返す』

この短い旅行は無駄ではなかったらしい。俺は、最強のカードを手にしたようだ。切れる回数は一度だけかもしれないが…。

そして、『また会おう』手を振るカナコの姿を見送り、消し飛んだはずの恋心が、また、芽生えようとしていた。

## 姉、弟と遊ぶ

—GⅢ視点—

パチツと目が開き、脳が活動を開始する。

—和風な天井…、ジジイの家の居間だな—、そこに寝かされている。横になったまま、頭を動かさず、横を見る。かなめとかなでが寝ている。ようやく、自分たちが寝ている理由—キンイチが襲われ、その実行犯へ強襲するも気絶させられた—を思い出す。

「クソっ、兄貴たちはっ!?!」

ここにいない、兄貴やキンイチ、ジジイたちは無事か？突如現れた強敵の目的は不明だが、兄貴たち…、遠山家を意図的に攻撃している可能性がある。

「おい、起きろ。」

かなめたちを揺り起こす。

「ううん、あれ？」

目覚めたかなめは、まだ脳が動いていない様子だ。かなでも同じく、寝起きの目をこすっている。

「ボーっとしてんじゃねえ!!兄貴たちを…」

探すぞ。そう言おうと立ち上がると同時に、

「起きたか…。」

ブロンド髪の女が俺たちの前に現れた。いつの間に…!!俺とかなめは驚き、すぐに戦闘態勢を取ろうとし、かなでは、ビクツと震え、縮こまっている。

女が少し動いた。「クソっ」、左脇の銃を握った瞬間、

「お前たちの事情は聞いた。すまない、怖い思いをさせてしまったな。」

女が頭を下げた。どういうことだ…?かなめたちも、この女の行動にポカンとしていると、

「それじゃあ、伝わらないぞ。」

キンイチがそう言いながら現れる。無事だったのか。それでも俺



が女への警戒を解かずにいると、

「全然言葉が足りてないんだよ、姉さんは。」

キンイチが、俺たちに『安心しろ』と目線を送り、女へ呆れた様に話かける。…は？姉さん…？横の2人も「えっ…？」と声を漏らしている。キンイチに姉…。いたのか…、しかし、なんで俺たちも、ペンタゴンですら知らなかったんだ…？腕を組んで立っている、姉と称された人物は、「説明は苦手だ…」と呟いている。

「混乱しているな…、まあ、当然か。突然、弟や妹が増えた、俺やキンジもそんな感じだった。姉さんは説明が下手だから、俺が説明する。いいか？」

キンイチが、俺たちの様子を見て、口を開いた。

「ああ、早いところ説明してくれ、訳が分からない過ぎて、頭がパニックだ。」

俺がそういうと、

「これから話すことは、信用できる人間以外には、他言無用だ。」

そう言い、いいな？そう目で問いかけるキンイチに、俺たち3人は、こくりと頷く。

「よし、まず、この人は、俺たちの姉―」

「遠山金虎だ。」

キンイチが言いきる前に、姉といわれる人物が口を開く。カナコか…。キンイチは「姉さんは、お前たちについて、爺ちゃんたちから話を聞いている。」と言って、説明を続ける。

「お前たちが、姉さんのことを知らないのは、無理もない。姉さんは、ペンタゴンだろうが、M I 6だろうが知りえない、日本の最重要機密だからな。」

キンイチ曰く、この姉は、異常なまでの強さを誇り、その力が悪用されない為の処置らしい。…そんなことがあるのか？疑いを持つ俺に対し、キンイチは、

「撃ってみろ。」

姉をちらりと見て、そう言う。百聞は一見に如かず、「面白れえ」そう言つて一瞬で銃弾を放つ。的となる姉は、「ん？」、何でもないと

うように弾丸を掴む。放たれたばかりの銃弾を掴み、熱いという感覚さえない様子で、ポイ、と弾丸をこちらに放り投げ、

「キャッチボールがしたいのか?」

首を傾げ、俺に聞いてくる。どんな皮膚してんだ?

「それは…、今度頼むぜ!!」

次は、両手に銃を持ち、姉に向かって、弾倉すべての弾を打ち尽くす。さあ、どうする?

「むう?」

カナコはまた、なんの問題もない、といった感じで、拳の連撃を放ち、全て撃ち落とした。…早すぎて、腕が千手観音の様に何本にも見えた。

「最近ほ、このような遊びが流行っているのか?」

床の落ちた、俺の放った弾丸の成れの果て―潰れてコインの様になっていて―を、恐る恐る見ていた、かなめとかなでに問いかけるカナコに、ふるふると首を振る2人。…こいつにとっちゃ、これも遊び程度か。

「納得したか?」

キンイチの問いに、「ああ。」と答え、銃を仕舞う。強い、それは分かる。…だが、こいつの本当の強さはこの程度じゃ測れねえな。まあ、この出鱈目っぷりは、兄貴に似ている。…兄貴が比にならない出鱈目っぷりだがな。俺は、この一連の流れで、カナコへの警戒心は消え去る。へへっ、面白れえ姉貴ができたな。この姉貴には間違いない、遠山の血が流れていることを確信する。かなめたちも察してみたんだな。

「これから、よろしく頼むぜ、姉貴。」

俺だ笑って、そう言うのと、

「「かなこお姉ちゃん(様)」」

かなめとかなでもそれに続く。

「うむ、私も、新しい弟と妹が増えて嬉しいぞ。」

姉貴は、そう言って、「金女、金天」と名前を呼びながら、2人の頭を撫でる。そして、

「金三。」

俺を見て、そう言う。そうか、ジジイたちから、俺たちのことを聞いていたからな。

「俺は、ジ―」

GⅢだ、と訂正しようと口を開いた時、

「遠山家の三男、遠山金三だろう。」

そう言つて、優しく俺の頭を撫でてきた。…まあ、姉貴になら、そう呼ばれるのも悪くねえか。…いつまで撫でてやがるっ!! 姉貴の手を払い除けるが、…びくともしねえ。が、意図は伝わったのか、姉貴は、「むう…」と少し残念そうに手を除けた。

「そういや、兄貴は?」

すっかり忘れていた兄貴の存在を思い出す。

「座敷で、まだのびてるよ。」

キンイチがそう答えると、

「まったく、軟弱者め。」

と腕を組む姉貴。

「とりあえず、俺たちだけでも準備しよう。」

キンイチがそう言つて、庭を指す。倒れてしまっているバーベキューコンロが見える。そういや、今日はBBQだったな。

「じゃあねえ、やり直すか。」

かなめを見てそう言つと、「うん。」と、かなめも頷き、「かなでちやんも行こつ。」と、かなでの手を取つて、一緒に立ち上がる。

そんな俺たちを見た姉貴は、キンイチの首根っこを捕まえ、  
「すまないが、お前たちに任せてもよいか…? 私たちは少し話さねばならぬ。」

「えっ!?!」とキンイチが驚き、藻掻くが…、逃げられないみてえだな。

「りよーかい、かなめ、かなで、行くぞ。」

庭へ向かう俺たちに、

「おいっ、お前たち、待て、待ってくれ!! クソっ、姉さん、放してくれ!!」

キンイチが助けを求めるが、

「ええい、黙れ!!お前には説教が必要だ。そこに正座しろっ!!」

姉貴の声を背に一目散に3人で逃げる。君子危うきに近寄らず。キンイチには悪いが、俺たちは無関係なんぞな。

「姉貴に、とびきり旨い肉を焼いてやろう。」初めて出来た姉の為に、俺たち新参者3人はせっせと準備を始めた。

|||||

—キンジ視点—

恐怖の大権化たる、姉さんが帰ってきた翌日、実家に泊まっていた俺は、目覚めると、自室を出る。

昨日はいろいろあり過ぎて、疲れのあまり、寝坊してしまった。幸いにして、今日は塾は休みだが、

「勉強しなきゃならねえのに…。」

東大に合格しなければならぬ俺は、人一倍、勉強しなければならぬのに…、と寝坊したことを悔やむ。居間へ行くと、庭で、昨日姉さんが壊した塀を直していたGⅢが俺に気付く。

「遅えぞ、バカ兄貴。」

「うるせえ、俺は受験生で、日夜勉強に忙しいんだよ。」

俺の言葉に、「だったら、早く起きろよ。」と、正論をたれながら、塀の修理に戻るGⅢ。

「なんでお前が、修理してんだ?」

本来であるならば、壊した本人がやるべきことだ、姉さん、さっそく新しく出来た弟をこき使ってるな。

「最初は姉貴がやってたんだけどよ…、姉貴がやると、修理してるはずなんだが、何故かさらに破壊されてくんでな。」

GⅢが作業の手を止めずに、話す。こいつ随分と姉さんに懐いてる

な。俺の気絶している間に何があったんだ？そう思っていると、  
「代わってやる対価に、姉貴が技を見せてくれんだぜ。」

楽しそうに言うGⅢ。お前って、そうゆうのホント好きだよな。しかし、姉さんが技？力技の間違いだろ。弟よ、残念だが、姉さんは、父さんの教育方針で、遠山家に伝わる技を教わっていない。あの強さは、生まれた時からだし、戦い方も全て我流だ。そんなこととは知らないGⅢは、せっせと塀を修復して汗を流している。

「まあ、頑張れよ。俺は飯食ってくる。」

労働に勤しむ弟を背に、俺は台所に向かう。

「婆ちゃん、おはよう。」

台所でお茶をわかしている婆ちゃんに挨拶する。

「おはよう、キンジ。朝ご飯、テーブルに置いてるから、早くお食べ。」

テーブルには、丁寧にラップされた朝食が並んでいる。

「ありがとう、婆ちゃん。いただきます。」

あまり婆ちゃんを待たせたくない俺は、急いで食事をする。

「ご馳走さま。」

流しへ食器を持って行くと、

「食器は私が洗っておくから、金三にお茶を持って行ってくれるかい。」

婆ちゃんに、熱々のお茶の入った湯飲みが2つ載せられたお盆を渡される。そのうち1つは、GⅢ用なのだろう、ド派手な湯飲み—一般的なの家にあったか？—、もう1つは、普通の湯飲み。

「分かった。婆ちゃん、ありがとう。」

そういつて居間に向かう俺に、婆ちゃんは、「熱いから、溢さないように気を付けてね。」と声を掛け、食器を洗い始めた。居間へ行くと、作業を終えたGⅢが、縁側に座りタオルで汗を拭っていた。

「お疲れさん、ほれ、婆ちゃんが淹れてくれた、お茶だ。」

ド派手な湯飲みを渡してやると、「おう。」と言って、それをうけると、ふーっ、と息を吐いて、冷ましながら、ズズツとお茶を啜る。

「凄い、湯飲みだな。」

思わず、俺が感想を述べると、

「いいだろ、俺用に買ったんだぜ。」

自慢げに湯飲みを見せてくるが、相変わらず、こいつの美的センスは分からん。俺もお茶を飲もうと湯飲みを取ろうとするが…、あれ、無いよ？キヨロキヨロと探していると、GⅢの後ろ―俺とGⅢの間―に姉さんが立っていた。

「姉さん、いつの間にも!!」

俺の驚いた声に、GⅢも驚いて振り向き、そこに立つ姉さんの姿に口をあんどりと開けている。そんな俺たちの驚愕も、どこ吹く風な姉さんは、

「見事に直っておるな、でかしたぞ、金三。」

と言つて、俺の探していたお茶を一気に飲み干す。この人には、熱いという概念がないのだろうか？そもそも、いつ取つて、いつ現れたのかも分からない。GⅢも戸惑いながら、「と、当然だぜ。」と姉さんの称賛に応えているが、作業を終えた時よりも、汗をかいている。そりゃ、焦るよな。俺も一瞬、心臓止まったもん。

「それで、金三よ、場所は準備できたのか？」

「ああ、問題なしだ。部下たちも呼んでるんだが…、いいよな？」

「私は、別に構わんぞ。」

姉さんとGⅢの会話を聞く。…場所？

「場所つてなんだ？」

「兄貴、さっき言っただろ、姉貴に技を見せてもらうつて。周辺に被害が出ないくて、頑丈な対象物がある場所がいるんだとよ。」

俺の質問に、早く見たくてワクワクしたようすでGⅢが答える。…被害が出るレベルのことすんなよ。あと、あんまり姉さんのこと人に言うなよ!!まあ、GⅢの部下なら大丈夫だろうが…、あいつら、このバカ弟に心酔してるからな。

「では、昼食をとつたら、向かうとしよう。」

姉さんが言うと、

「了解。あいつらに連絡入れとくぜ。迎えも寄越させるから、任せてくれ。」

GⅢは答え、スマホを取り出し、電話を掛ける。姉さんは、

「婆様に、夕飯はいらぬと伝えねば。」

と、台所へ向かう。ん？姉さん、そのまんまどっか行くのか？まあ、姉さんの行動は、予測不可能だからな、あんまり考えないようにしよう。それに、俺は勉強しなくちゃな。俺は自室に勉強しに戻る。

自室に戻り、教材と睨めっこをしていると、襖の開く音がしたので、机から顔を上げる。GⅢの野郎、退屈だから邪魔しにやがったか？そう思い振り返るが…、えっ？誰もいないし、襖も開いてない。襖の開く音はしたが、閉まる音は無かった。気味が悪くなり、確認の為に廊下へ出ると、姉さんの部屋が開いている。恐る恐る覗き込むと、姉さんが、何か段ボールをぐそぐそとやっていた。なんだ、姉さんだったのか。

しかし、久しぶりに見た姉さんの部屋には、驚くほどに物が無い。布団と姉さんが漁っていた段ボール、それだけだ。いい歳した大人の女が、こんな部屋でいいのだろうか？と、姉さんのことが心配になったが、それ以上に心配なことが多い人だし、この程度なら、『姉さんだから仕方ない』の一言で片付く問題だ。実際、兄さんと俺は、大抵のことはそれで済ませてきたし。

とりあえず、音の原因も分かったので、部屋に戻ろうとしたが、喉が渴いていたので、一旦、一階へ降りた。台所で、冷蔵庫からお茶を出して飲んでいると、姉さんが、二階から下りてきて、台所へ来て、「金次、先程、部屋を覗いておったが、何か用があったのか？」

そう言いながら、戸棚からコップを取る姉さん。気付いてたのかわずいっ、とコップを差し出す姉さん。それにお茶を注いでやりながら、

「いや、別になにも。音がしたから気になっただけ。」

そう答えると、姉さんは、「そうか。」と、お茶を飲みながら呟く。「ところで姉さんは、なにしてたんだ。」

逆に俺の質問に、

「探しものをしていただけだ。もう見つかったから大丈夫だ。」

そう答える姉さん。

「探しもの?」

「これだ。」

そう言つて、足につけているポーチから取り出したものを、姉さんが机の上に置く。置かれたものに俺は、ぎよっとする。帯封で留められた一万円札の束があった。なんで無職の姉さんが、こんな大金をもっているんだ!?

「姉さん…、これ…。」

俺が、恐る恐るは札束を指すと、

「以前貰つたのだが、使わないので仕舞つておつてのだ。無くなつたら連絡しろといつていたが…、連絡先を忘れてしまったな。」

札束をポーチに入れ、「婆様なら覚えておるかな?」と立ち去つて行く。いやいや、怖えよ、その金!!

俺も知らない秘密が姉さんにはあるようだが、知ると碌なことにならない気がするので、詮索はやめよう。…十万くらい小遣いとしてくれませんか、お姉様?

部屋に戻り、勉強をしていると、

「なあ、姉貴、キャッチボールしようぜ。」

GⅢの声が聞こえてくる。仲いいな、と思いつつながら、勉強に集中しなおそうとしていた時、「いくぜー。」というGⅢの声と同時に、パン!!という銃声が響く。驚いて窓から庭を見ると、GⅢが姉さんに向けて銃を向けていた。—あの馬鹿弟、キャッチボールつてそっちのかわよ!!

銃を持っていない姉さんは、掴んだ弾を親指で弾き、GⅢに向けて飛ばす。…なんで普通の銃弾より速いんですかね? GⅢも、「うおつ!!」つて辛うじて避けてるし。

「もう少し加減できるか、次は取るからよ。」

と言つて弾を拳銃から、姉さんに寄越すGⅢ。銃声が響く。弾を受け取つた姉さんは、それをまた弾き、今回は、掴めたGⅢ。「よっしゃ!!」とはしゃいでおり、姉さんも弟の成長を喜ぶように、頷いている。微笑ましい姉弟のふれあい…、な訳あるか!!あと、うるせえよ。物騒



極まらないキャッチボールのせいで、全く集中出来なかった俺は、婆ちゃんの「お昼出来たわよ。」と言う声を聞き、昼食ったら、さつさと帰ろう、実家にあのふたりがいると集中できねえ。そう決意し、部屋を出る。

居間へ行くと、既に昼食が並べられており、婆ちゃんとバカ姉弟も座っている。俺が座ると、みんなで「いただきます。」と言って、食事を開始する。

「おい、バカ弟、なんつーキャッチボールしてんだよ。」

「なんだ、アホ兄貴もやりたかったのか？」

「誰がやるか、あんなもん。俺は、うるせえって言ってんの。」

俺たち兄弟が、アホだバカだと言い合っている間、姉さんは、婆ちゃんと1、2言だけ会話し、「ご馳走さま。」と言って席を立つ。その後、俺たちも食事を終え、俺は部屋に行き、荷物を入れたカバン取っただら、婆ちゃんに帰ることを伝える。

靴を履いて玄関を出ると、GⅢが立っており、俺を見て、

「さあ、行こうぜ。」

こいつ、姉さんの技を見る云々に俺を連れて行く気だ。

「断る!!」

駆け出した瞬間、体が浮き上がる。

「行くぞ、金次。」

姉さんが、俺の首根っこを掴み、片手で持ち上げている。姉さんは、「嫌だ、行きたくない」と暴れる俺を俵担ぎにして、GⅢの後ろをついていく。

「お待ちしておりました。」

GⅢの部下で初老の執事、アングスが車の前に立ち、一礼する。それにGⅢは、おう、と返事し、

「姉貴たちは、後ろに乗ってくれ。」

と後部座席を指す。俺は行くとは一言も言っていないぞ。逃げるべく、バタバタと打ち上げられた魚の様に暴れるが、抵抗虚しく、車内に放り込まれる。反対側のドアから逃げようとするも、車内に入った姉さんに押さえ込まれ、車が発進する。

信号で停車する度に、脱出を試みる俺だったが、その度に、隣に座る姉さんによって阻止される。そんなことを繰り返していると、GⅢが

「姉貴、もうすぐだ。兄貴も、あきらめて大人しくしてろよ。」

と言う。車外を見ると、見慣れない田園風景が広がる。ここで逃げても、帰れない。絶望に打槌がれる俺は、大人しく、外を眺める。車は、人里を離れるように進んでいき、山に入る。長年整備されていない山道を進むと、

「ここだ。」

GⅢが、フロントガラスを指し、俺たちに言う。木々に同化し、ぱつと見では気付かないが、シャッターがある。車が、それに近づくと、開き、通路が現れる。そこを進んでいき、停車した。

「よし、降りてくれ。」

GⅢの言葉で姉さんが、車外に出る。諦めた俺も、それに続く。

「んじゃ、行こうぜ。」

GⅢが先導し、歩き始める。

「おい、なんだここは？」

俺が前を歩くGⅢに問う、

「俺の拠点の一つだ。防衛寄りのな。んで、この先だ。」

会話しながら、GⅢが扉を開ける。扉の先は、巨大な箱の中のような空間だった。

「ここは、核シェルターになってる。ここなら気にせずやれるだろ。」

GⅢは、姉さんを見て、そう言うのと、姉さんは「うむ。」と頷く。それを確認したGⅢは、

「揃ってるみてえだし、ついでに紹介といくか。」

シェルターの中には、GⅢの部下たちも集合しているようで、そこからへ歩いていく。

「おう、おめえら、よく来たな。これが姉貴とバカ兄貴だ。んで、こつちが、俺の部下たちだ。」

俺たちと部下たちの紹介をするGⅢ、俺の紹介いらないうね。お

前、バカ兄貴言いたいだけだろ。GⅢの部下たちの視線が姉さんに集まる。警戒している目だ。そんな視線と空気を受け、姉さんは、「見事な忠誠心だ…、良き部下を持ったな。」

と、GⅢへ言い、

「弟への忠誠、感謝に耐えん、これからも支えてやってくれ。」

と、部下たちに頭を下げる。

「おい、やめろよ。」

GⅢが照れて、姉さんの頭を上げさせる。

一連の流れで、警戒が少し解けると、

「ところで、こんななんもの用意させて、なにするのぉ。」

オネエ黒人のコリンズが、設置された2 m程の分厚い鋼鉄の板を指して、GⅢに聞く。GⅢは、ニヤリと笑い、

「おめえらに面白れえもん見せてやる。」

そう言つて、姉さんを板の前に誘導し、全員の視線が、姉さんと板に集中する。

「姉貴、こいつは訳あって、戦艦大和の主砲防盾を想定して作ったもんだ。頑丈な訳って言ってたが、こいつなら、大丈夫だろう?」

バンバン、とそれを叩きながら、姉さんに話すGⅢ。おい、それつて、藍幫の孫が、如意棒という名のレーザービームで貫けなかった、厚さ67cmの高張力鋼だろ!!なんでそんなもん…、と思つたが、負けず嫌いのGⅢだからな、孫対策にいろいろ試行錯誤していたんだろ。姉さんはそれをノックするように、コンコンと軽く叩いた後、

「ふん。」

殴った。

ガンツ、という拳がぶつかる音が響く。姉さんの背中しか見えな、い、俺やGⅢの部下たちには見えないが、

「オーマイ…。」

姉さんの横に立っていたGⅢは、ゴツドの言葉が出ない程驚愕している。

「むう、少し脆いが、仕方ない、加減してやるとしよう。」

姉さんは、そう言って、打ち出していた拳を引つ込め、口を開けているGⅢを見て、「どうした」と言つて高張力鋼から離れる。

姉さんが離れたことで、ようやく理解した。穴が開いている、高張力鋼は見事に貫通し、向こう側の景色が見えている。意識を取り戻したGⅢが「マジかよ…」と言いながら、穴に手を通してしている。俺たちも近づいてそれを見る。GⅢが穴から手を抜き、目をキラキラさせながら振り返り、

「おい、見たか!! スゲエ、マジで貫通してやがる!!」

そう言つて、姉さんの元へ走つて行く。俺たちが恐る恐る穴を覗いたり、触ったりしている、姉さんとGⅢがやってくる。

「おい、おめえら、こっち来い。」

GⅢがそう言つて、俺たちに手招きする。そろそろと移動し、ふたりの後ろに立つ。姉さんと高張力鋼の距離は5 m程離れている。

「姉貴、やってくれ。」

GⅢが姉さんに頼むと、

「構わぬが、あの程度の強度だと、どんなに加減しても、あれは消し飛ぶが…、よいか?」

高張力鋼を指し、GⅢに問う姉さん。普通に考えれば、有り得ない、馬鹿げたことを言っている姉さんだが、先程のこともあり、全員の喉が、ゴクリと鳴る。

「構わねえ!!」

とにかく早くみせてくれと、目を輝かせるGⅢ。

「了解した。金次、後ろより横の方がよく見える。…もう少し距離を取れ。金三もだ」

姉さんの指示で、姉さんの両側に、GⅢと俺が立つ。その後、全員が俺やGⅢの後ろに立つ。姉さんは、全員が移動を終えるのを確認すると。

「では、やるぞ…。」

そういうと同時に、姉さんの両手が金色の光を纏う。そして、その手を『かめはめ波』の様に突き出すと、カツ!!という光を放ち、巨大な虎が現れ、高張力鋼に襲い掛かり、それがぶつかると、強烈な衝撃

波が起こる。

「ぐうっ。」

声が漏れる。姉さん以外の全員が、衝撃波に吹き飛ばされそうになり、踏ん張る。衝撃波が消え、顔を上げると、高張力鋼のあったはずの場所には、クレーターができており、高張力鋼は跡形もなく消え去った。全員が言葉を失い、呆然とその光景と姉さんを見ている。これをやった姉さんは、

「床に穴が開いてしまったか、最低出力だったが…。」

と呟いて、右の手のひらを眺めている。

「おい、姉貴…、なんだ…、今の…、なにをしたんだ…。」

GⅢが、想像を遙かに上回る、出鱈目な技を見せた姉さんに、尋ねる。

「あれか？あれは気合いだ。気合いをこう、ぐつと込めて、バツ、とすれば出る。」

姉さんが訳の分からない説明をする。とりあえず、姉さんは人間辞めてるどころか、化物辞めてるのは分かった。

姉さんの技を見終え、俺とGⅢは2人で話している。姉さんは、警戒が、恐怖や怯えに代わったGⅢの部下たちに「怖くないぞ。」と近づき、余計怖がらせている。そりゃあ、あんなの見せられたらね。

「んで、見た感想は？」

俺の問いに

「スゲエ、マジでスゲエけどよ…、流石にあれやんのは無理だな。兄貴は？」

「同じく。」

しかし…、

「気合いつてなんなんだ。」

俺たち兄弟に、哲学的疑問を残し、姉さんの技のお披露目会は終了した。

## 姉の受験

—キンジ視点—

姉さん、技のお披露目会が終了し、場は、疑問の解決に動きだした。「姉さん…、気合いつてなんだ?」

俺の、この場にいる全員の代弁する疑問をぶつける。全員がよくぞ聞いた!!という目で俺をみる。そんな疑問に姉さんは、はあ、とため息をつき、

「金次よ…、まさかそんなことも分からぬとは…。」

心底呆れた様に姉さんが言う。いや、ここにいる全員分かってないし!!あと、お馬鹿オリンピック、全種目金メダルの姉さんに馬鹿にされると、尋常じゃなく腹が立つな。そんな俺の心情は知らず、姉さんは言葉を紡ぐ、

「金次よ、気合いとは…。」

全員が、ゴクリと唾を飲み、次の言葉を待つ、

「気合いとは、その、あれだ、こう…ガツトなって、グツとして、その…、つまり、気合いだっ!!」

あんたも分かってないじゃん!!全員の心が一致した時であった。

その後、気合いとは何かを説明しようと、

「気合いがあれば、天をも駆ける!!」

などと言い空中を走りだす姉さんによって、さらに謎が深まりながらも、解散となった。

解散後、再び、アングスの運転する車に乗り込み、帰路につく。空は夕日が落ちていく。道中を、姉さんにGⅢが、他の技を聞いて、奇想天外な回答が帰ってくるのを聞きながら過ごす。海を割るつてなに?モーゼ?そんな奇怪な会話や、GⅢが姉さんの連絡先を登録したりしている。学園島に着いていた。そして、車が止まる。

「姉貴に兄貴、そんじゃあな、俺は、これから少しアメリカに戻るけどよ…。また、すぐに遊びに来てやるよ。」

少し、別れを惜しむ様に、GⅢが言う。相変わらずのツンデレム—

ブだな。そんなGⅢに、姉さんは、

「私は、しばらく日本にすることにした。こちらに来たら、必ず顔を見せに来い。」

とGⅢに、微笑む。俺も、「またな。」と言い、車を降り、車が見えなくなるまで見送る。さて、帰るか。自宅に戻ろうとする俺に

「金次、着いてこい。」

姉さんが、俺の首根っこを掴む。着いて来いって…、連行じゃないですか。

飲食店が並ぶ街並、ほろ酔いの人々や客引きが行き交う。そんな通りで、俺は、姉さんの隣に立っている。(諦めて抵抗をやめたら降ろしてもらえた。)すれ違う男たちが、姉さんに目を奪われそして、隣に立つ俺を見て、「なんであんな奴が」と言う視線を向けて来る。―姉さんは、身内の目からしても、美人、それもかなり高レベルの容姿を持っている(中身を知れば、そんなことはおもわなくなるが)―

そんな視線を受けながら、歩いていくと、姉さんが、  
「入るぞ。」

と俺に言っつて、『飲み放題 2000円!! 団体様歓迎!!』と看板のある居酒屋の戸を開ける。俺、未成年なんですが?

店に入り、姉さんが店員に、「2人だ。」と伝えると、席に誘導され、4人掛けの個室に案内される。

「飲み放題は如何なさいますか?」

という、店員の質問に、姉さんが、「ありで。」と答えると、店員は、「かしこまりました。ご注文は、タッチパネルでお願い致します。」

と、一礼し、去って行く。タッチパネルを手に取った姉さんは、それを俺の方へ差し出す、

「好きなものを頼め、遠慮はいらぬ。私は、使い方が分からぬ故、日本酒と肉を頼んでくれ。」

タッチパネルを受け取った俺は、操作を教えながら、注文をする。(肉は焼き鳥になった。)

「お待たせしました。日本酒2合とウーロン茶です。」

店員が飲み物を運んでくる。居酒屋って飲み物だけ先にくるんだな。そんなことを考えながら受け取り、日本酒の入った徳利を姉さんに渡す。えーっと、こういう場合は、

「姉さん、えーっと、乾杯？」

俺がウーロン茶の入ったジョッキ突き出すと、「ああ、乾杯。」と言いつつ、徳利をジョッキにコンッ、と軽くぶつける姉さん。そして、徳利にそのまま口をつけ、一気に飲み干す。

「すまない、金次、同じのを頼んでくれ。」

酒って、そんな飲み方しないだろ、と思いつつ、再度注文し、ウーロン茶を飲む。料理が届く前にトイレに行こう。そう思い、立ち上がる。

「姉さん、ちよつとトイレ行ってくる。」

そう言いつつ、席を離れる俺に、「ああ。」とだけ答える姉さん。姉さん、なんで俺を連れて来たんだろう？酒が飲みたいが為に、わざわざ…？いや、それだったら俺を無理やり連行する必要はないし…、などと考えながら男子トイレに入り、用を足す。

手を洗い、トイレを出ると、向かい側の女子トイレから出てきた人物と目が合う。げえっ！！

「んん？なんや、なにいつちよ前に居酒屋におんねん、遠山？」

俺の、出会いたくない女ランキング上位の蘭豹がいた。

「武偵高退学なった阿呆が、酒浸りか？」

「いたたたたた！」

ヘッドロックを掛けてくる蘭豹。胸が、胸が当たってるから、

「ちつ、違いますって、俺は無理やり連れてこられただけで、？んてません！！」

「なんや、おもしろいな。」

そう言いつつ、ヘッドロックを放す蘭豹。

「蘭豹…先生こそ、なにしてんですか。」

「いま呼び捨てにしかえたやろお前。まあ、ええ、今日は武偵高教員の飲み会や。」

まじかよ…、俺、最悪の店に入ってるじゃん。今すぐこの店出たい。



「んで、遠山は、どんな奴を連れ込んだんやろなあ。」

蘭豹が、俺を再びヘッドロックし、ニヤニヤとして

「おらあ、案内せえ。」

と、俺をそのまま引きずる。

「わ、分かりましたから、放して下さい!!」

「そこのひとつ先の個室です。」

渋々、俺が蘭豹を案内し、個室の前に立つ。

「遅かったな、金次。…ん？蘭か？」

「あ…、姉御…!!」

えつと…、お知り合いましたか…。

「姉御っ、ご無沙汰しております!!なんでこんなところに…?」

「ああ、金次と話したいことがあつてな。蘭も息災でなによりだ。して、金次と知り合いのようだが?」

「は、はい、実は私、今は武偵高の教員をしております、こいつは元教え子です。」

ペコペコと、蘭豹が頭を下げながら、俺に、「どういふことや。」と瞬きで送ってくる。俺の方が聞きたいよ。

「そうか、弟が世話になったな。」

「いや、そんな…、えつ…、弟!!」

と、蘭豹が俺と姉さんを見比べ、「嘘やろ、全然似てへん。」と呟く。俺もそう思う。そして、

「あ、あの、教員の飲み会があつてまして…、失礼しますっ!!」

蘭豹は逃げ出した。あの、蘭豹が逃げ出すつて…、姉さんにしたんだよ…。俺が席に着くと、既に料理が届いていた。

「まさか、お前が蘭の教え子とはな…。世間は狭いな。」

そう言つて、今度は、ちゃんとお猪口に注いだ酒をくいつと飲む姉さん。

「俺も驚いたよ。まさか、姉さんの知り合いだったなんて。」

どうやって知り合ったのか。そう続ける前に

「教師か…。数年前、香港で初めて会った時から想像できんな。」

姉さんが、懐かしむ様に言葉を漏らす。なんとなく2人の出会いが分かる。恐らく、虎と豹の猛獣対決して、蘭豹の様子を見るに、虎が圧勝したんだろう。

「それで、姉さん、俺に話って言っただけど…?」

俺が料理に手をつけながら尋ねると、

「ああ…。」

言いよどむ姉さん。なんだ?

「金」から、お前が、父上と、同じ職を目指していると聞いた。己の目標を見つけたのは、良いことだ。私は、姉として、出来る限り応援するつもりで、その、なんだ、今日はしっかりと食って、英気を養え。」

この食事は、不器用な姉さんなりの激励らしい。

「分かったら、早く食え。足りなければ、遠慮なく追加しろ。」

「姉さん、ありがとうございます。いただきます。」

酒の肴は、白い飯にもよく合う。居酒屋飯も案外良いものだ。俺は、姉さんの激励を噛み締め、料理を平らげていく。

「目標があるのは良いことだ、私は、一度失った故、心からそう思う。」

「姉さん…。」

姉さんが、徳利を傾け、お猪口に酒を注ぎながら言う。姉さんは、武偵になれなかった。父さんの方針で、小・中学校と一般校に通った姉さんは、武偵高を受験し、落ちた。姉さんの桁違いの強さを、危険と判断した政府により、姉さんに、武偵の道を諦めさせるべく、受験はさせたが、武偵庁に圧力を掛け、不合格にさせる算段があった。まあ、普通にアホ過ぎて不合格になったが。全てのステータスを、戦闘力と容姿に振り切ってしまった姉さんは、都内最底辺の偏差値を誇り、学力はほとんど重視しない、東京武偵高にさえ入学拒否、見事、中卒無職の肩書を手にし、旅立った。

「姉さんは、今でも武偵になりたいと思う?」

姉さんは、叶わなかった夢を、まだ持ち続けているのだろうか…、ウーロン茶を飲みながら、そんな疑問が頭に浮かぶ。

「いや、旅をして分かった。私には向いていない。私は、今の様に、強



てきた受験生と記録用紙を見る。ひとり般中出身か…、ブロンド髪で、ロングスカートの黒いセーラー服を身につけた美少女を見る、名前は…、『遠山金虎』か。ありやあ、CVRと間違えて受験してるんじゃないか？

「おい、外部受験生は、ここの銃を使いな。」

俺は、貸出用の銃が並んだ机を指して言う。武器の所持が、原則認められていない一般中学出身の外部受験生向けに、受験用に銃の貸出が行われている。そいつは机に並ぶ銃を眺める。

「銃を触ったことは？」

俺の質問に、

「ないです。」

とだけ答える、ずぶの素人か、面倒くせえな。

「好きなのを取りな。」

まあ、射撃は才能もあるが、一番は訓練と経験だ。ランクには関わりますが、入学には然程問題はない。入学してから苦労はするがな。遠山は銃を眺めていたが、

「おお、父上と同じ銃だ。」

気に入ったものを見つけたらしく、手に取った。手にしたのはデザートイーグル。素人がいきなり使う銃ではないな。

「んじや、それ持って並べ。」

俺の言葉で、遠山は受験生の列の最後尾に並ぶ。なんの問題もなく、列は進み、最後のひとり、遠山の番になった。遠山は素人丸出しの構えで、銃を的に向ける。おい、そんな構えだと、肩が外れるぞ。素人の相手は面倒だな、と思い、遠山に構え方を教える為に近づこうとした時、遠山が銃を落としそうになる。それを慌てて空中でキャッチした後、困ったという表情でこちらを見てくる。なんだ？初めての射撃にビビったのか？しかし、危なっかしいな、そう思う俺に、遠山は「すみません、思わず力が入ってしまい、その…。」

申し訳なさそうに、口を開く、

「力が入って、どうしたんだよ。」

俺が、言葉の続きを促すと、遠山が俺に申し訳なさそうに銃を差し

出し、

「それが、その…、握りつぶしてしまいました。」

「はあっ？」

なに言っただこいつ、そう思い、遠山の差し出す銃を見る。弾倉ごと銃把が粉々になったデザートイーグルがあった。こいつ、ゴリラかなんかなの？その見た目からは、想像できない握力を披露した遠山は、その後、何個か別の銃を持ち、全て同じ結果。本人曰く、

「銃がこんなに脆いとは、思わなかった。威力も低く、使わない方がましだ。」

とのこと。

前代未聞の受験生に、試験官と試験監督、校長までもが集まり、緊急の話し合いが行われ。審議の結果、遠山金虎の受験票に、『射撃 不可能』の文字が刻まれた。

次のCQCの試験では、相手の受験生が、突然意識を失い、またも評価に審議を要した。

そんなことをやらかした遠山は、試験官たちの注目を集めながら、模擬戦闘の試験に挑む。

試験内容は簡単だ。7階建てのコンクリートビルを模した試験場、その各階に受験生が配置され、試験場にいる全員と戦う。各階に高性能カメラが複数設置され、ひとりずつ教官も隠れて、受験生を観察し、評価する。遠山のスタート位置は最上階だ。

俺は、試験場の外で、他の試験官たちと共に、モニターで中の様子を見る。当然、遠山は、悪い意味で一番の注目の的だ。試験官の中には、次は何をやらかすのか、楽しみにしてる奴までいる。

合図とともに、試験が始まった。各階を映すモニターを見る。隠れて待ち伏せする者、先手必勝と素早く攻撃を行う者、それぞれが、自身のスタイルに合わせて、行動を開始している。そんな中、一番の注目株、遠山の動きは速かった。いや、速いなんて生温いものではなかった。モニターから見える遠山は、一瞬で相手の受験生の前に現れ、殴り、戦闘不能にし、すぐに別の受験生を同じ様にして倒していく。そ

の階にいる、他の受験生を全員無力化し、拳句隠れていた試験官までも同じ様に殴り飛ばした。それに有した時間は10秒足らず。圧倒的だった。

しかし、遠山は、止まらない。分厚いコンクリートの床を殴り、穴を開け、下の階へ降りる。突如落下して現れた遠山に、その階の受験生たちが驚き、一齐に発砲する。遠山は、自身に四方八方から襲い掛かる弾丸を、ぐるん、と回転、回し蹴りですべて撃ち落とす。それから、上の階でやったのと、同じことをし、また下へ。これを繰り返して、ひとりで、全ての階を制圧するのに、2分も掛からなかった。

想像を絶する映像に、全員が言葉を失い、場が沈黙に支配された。

「あの移動速度、彼女は超偵でしょうか？対象にワープするような能力を持つ…。」

ひとりの試験官が沈黙を破り、口を開く。

「いいや、違う。あのガキからは超偵の？"それ"を感じない。」

SSRの教諭がそう返し、録画された、試験映像を再生する。遠山が受験生の前に一瞬で現れるところだ。確かに、速すぎて、瞬間的に空間を移動している様には見えない。それを今度は、超スーパーローで再生すると、

「走っている…!?!」

誰かが、声を漏らす。スロー映像を見ると、それでも一瞬だが、見えた。確かに遠山が受験生の前まで走って移動している。

「つまり、あのガキは、とんでもなく足が速いってことだな。」

SSRの教諭が結論を語る。足が速いって、そんなレベルじゃないだろ。しかし、映像を見る限り、そうとしか言えない。他の映像もスローで見ると、俺たちの理解が追いつかない。

「彼女の武偵ランク、どうするのでしょうか…。」

別の試験官が疑問を口にする。

「彼女の実力、映像が全力だと仮定して、便宜上Sランク、実質Rランクだな。他の受験生のレベルならともかく、隠れた試験官を一瞬で見つけ、一撃で沈めているあたり、まだ実力を出し切っていない可能性

の方が妥当だがな。その場合の評価は…、S D Aランキングにでも任せた方がいいだろう。」

強襲科の教諭が、遠山をそう評価する。

「私としては、彼女が、一般中学で、どんな生活を送ったのか？そっちの方が気になりますね。」

緑松校長の言葉に、全員が、「確かに」と笑って頷いた。そして、誰も、彼女の合格を疑わなかった。

その日以降、教務部では、件の受験生、『遠山金虎』の話題で持ち切りだった。特に、直接ぶん殴られた、試験場内にいた教官たちには、聞き取りまで行われる程であった。そして、ある教諭は、「あれ程の才能を、どう伸ばしていくか」、また、ある教諭は、「あれだけの戦闘力を持った生徒が騒動を起こした場合、どう対処するか」、その他にも、様々な議題で、遠山金虎への対策が練られた。それは、合格発表の日まで続いた。

合格発表の日、遠山金虎の合格を確信している俺たちは、結果を見ずに、いつも通りに業務と雑談をこなす。昼休みの最中、ひとり、暇になり、合格者の確認を始めた教諭がいた。

「無い…、無いぞ!!」

合格者名簿を見ていた教諭が、突然叫び、何事か？と注目が集まる。「無いって、なにかなくしましたか？」

隣に座る教諭が尋ねる。

「違う、無いんだよ。遠山金虎の名前が…。」

その言葉に、全員が一斉に、名簿の確認を開始する。部屋のあちこちから、「嘘だろ…、本当じゃないぞ!!」、「もう一度確認しろ!!」と声上がる。俺も、何度も名簿を確認するが、無い。あれ程の実力を見せた遠山が不合格になる理由…、

「もしかして、射撃か!？」

俺の思わず上げた叫びに、『射撃 不可能』の文字が全員に浮かぶ。「いや、しかし、それで不合格はおかしい。」

反対の声が出る。「そもそも、素手の方が強いし」など、声が続く。

「じゃあ、なんでだ?」、様々な憶測が飛び交う。そんな中、ひとりの教諭が、恐る恐る声を上げる。

「あのお、これじゃないですか?」

そう言つて、ノートパソコンの液晶を指す。全員が殺到し、液晶を覗き込む。

そこには、

『遠山金虎 筆記試験 五科目合計点 0 』

の文字が表示されていた。

あいつ、本物の馬鹿だ。

こうして、伝説となつた受験生は、もうひとつ伝説を作り、不合格となつた。

|||||

— 緑松武尊視点 —

東京武偵高校校長、緑松武尊は、入学試験が終わり、帰路につく受験生たちの波に逆らいながら、校内を、その、ある意味特殊な容姿によつて、誰にも気付かれることなく、歩いていった。頭の中では、今日の入学試験で見た、ひとりの受験生、「遠山金虎」について考えていた。最初は、『拳銃を握りつぶした問題児』と認識していたが、模擬戦闘の試験を見た後の感想は、『将来の日本を背負つて立つ武偵』だった。その圧倒的強さは、治安が悪化の一途を辿る社会における、強力な抑止力と成りえる。

今まで、何人のも才能豊かな武偵や、生徒を見てきたが、彼女は桁が違う。彼らが指輪サイズのダイヤの原石なら、遠山金虎は、バスケットボールサイズくらいの原石になるだろうか。いや、もっと大きいかもしれないな。そんなことを考えていると、

「来年は、面白いことになりそうですね。」

思わず、声と笑みが漏れる。彼女が、どのように武偵高で学び、ど



れ程の武偵となるのか…、楽しみで仕方がなかった。

さて、受験生も帰ったようですし、仕事に戻りますかね。

そう思い、歩みを早めると、ひとり、黒いロングスカートのセーラー服を纏った、ブロンド髪の少女、遠山金虎が、キョロキョロしながら歩いている。武偵高は広い。受験で初めて来た彼女は、迷子になったのだろうか？彷徨う彼女を見ていると、ひとつの感想が湧き上がる。『見たい、彼女の実力を、この目で見て、確かめたい。』この感情は、教育者でも、校長としてのものではない。ひとりの、プロの武偵としての感情だ。どんな反応をするのか、そんなことを思い、私は、？消えた”。

完全に気配と殺気を消し、私は、消える。『見える透明人間』、それが私の通称だ。そうして、消えた私は、彼女に近づく、攻撃は流石に不味いか…、さて、どうやって反応を見るか？とりあえず、肩でも叩くか、そう思った瞬間、

「すみません、道に迷いました。」

遠山金虎は、私の目を見て話しかけてきた。まさか、いや、後ろに人が…？振り返るが誰もいない。彼女に再び顔を向ける。不審者を見る目で私を見ている。仮に、彼女に私が見えていたとしたら、私は通報レベルで挙動不審な動きで、中学生女子に近寄る男だ。しかし、私は現に？消えているの”だ。見えている、そんなはずはない。しかし、彼女は、私をちよんちよん、とつついて、

「すみません、聞こえてますか？」

「ごめん、聞こえているよ。迷子になったのかい？」

私は、なんとか、平静を保ち、答えると、彼女はこくりと頷いた。

「君は、遠山金虎さんだね、君の模擬戦闘の試験を見せて貰ったよ。余りも凄かったから、覚えてしまったよ。ところで、君は、私が見えていたのかい？」

その問いに、彼女は、きよとんとした顔で、首を傾げる。

「見えているも、なにも、そこに人がいて、見えない訳がないでしょう

？」

彼女の回答を聞き、もう一度確かめるべく、再び「消えた」、そして、少し移動する。

「む？そつちですか？」

移動する私を、彼女は目で追い、ついてくる。そう言った。？見えて「いる。そう確信する。心の中で白旗を上げる。

「じゃあ、案内してあげよう。」

「ありがとうございます。」

2人で並んで歩き出す。そして、私は、彼女に聞きたかったこと、本題に入る。

「遠山さん、君の模擬戦闘の試験、素晴らしいものでした。前代未聞の成績です。でも、君は全力を出せたましたか？」

恐らく、彼女は全力を出してない、武偵の勘がそう告げる。

「ごめんなさい、手加減することで、頭がいつぱいでした。」

予想以上の答えに、思わず私は、彼女を見る。手加減がバレ、怒られると思ったのか、申し訳なさそうにしている。：嘘ではないようだ。

「そうかい、それは、残念だったね。ああ、別に手加減したことを怒ったりしないよ。寧ろ、安全の為に、手加減してくれてありがとう。ところで、君が試験で見せてくれた、移動と攻撃を、再現してくれるかい？ああ、勿論、攻撃は寸止めでお願ひしたいな。」

私の依頼に、「分かりました。」と答え、距離を取り始めた彼女。彼女が止まり、向かい合う。

「それじゃあ、お願いするよ。」

私が促すと、「では。」と彼女の声が聞こえた時、彼女の拳が、私の目の前にあった。そして、

「寸止めとなると、さらに加減に意識を割かれて、少し遅くなってしまうました。」

すみませんと謝る彼女。

「いや、十分分かったから、大丈夫だよ。」

全く見えなかった、これで、あの時よりも更に加減したと言う彼女

…。本気を見るつもりでしたが。好奇心は猫をも殺す。

「本気は見たくねえな。」

思わず素が出てしまった。：良かった彼女は聞いてないようですね。さて、一応の目的は達成しましたしね。武偵高の校門が見えた。「遠山金虎さん、いろいろすみませんでした。それに、私のお願いを、聞いてくれてありがとう。長々と悪かったね、気を付けて帰りなさい。」

一礼し、去る彼女を、私は、見送る。そんな彼女の背中に私は、希望と恐怖を抱いた。

入学試験の翌日、校長室で、筆記試験の結果を見ながら、私は、彼女、遠山金虎について考える。

彼女は、地中に埋まった『途方もなく大きいダイヤモンドの原石』だ。地中であって、今はまだ、誰も知らない。それが地表にでしまったら…、当然、誰かが取りに来る。しかし、それが、動かすことの出来ない程に巨大だったならば、人々は、それを割ろうとするのか、動かして、加工できる機械を開発するのか、どっちもだろう。そして、それを奪い合い、争う。彼女は、そんな存在だ。

私が、最初に考えた『抑止力』、それに十分に成りえる。あの圧倒的力が、『正義』として振るわれたなら、犯罪は激減するだろう。悪事を行えば、あの力が降り注ぐ、その恐怖が、人が犯罪へと導かれるのを阻害する。しかし、その一方で、争いの火種にもなる。彼女の力を、我が物にせんと、動く連中も出てくるのも間違いない。

彼女を武偵として、世界に周知させてよいのだろうか？教育者としては、彼女を育ててみたいし、彼女の目標をこちらの都合で潰したくない。そして何より、正しい武偵として、平和を作って欲しい。しかし、武偵という、裏の世界を知る者としては、彼女は危険だ。あまりにも強すぎる。彼女の力を利用、支配しようとする輩は、必ず出てくる。場合によっては、彼女を巡って、戦争が起こる可能性もある。それ程の力を有している。どうしたものか…、これ程、受験生の合否に悩んだことはない。

武偵高は、余程のことがない限り、学生を受け入れる。今見ている、筆記試験の結果もそうだ、普通の高校では、合格出来ないような学力の受験生にも、合格を与えている。そのせいで、偏差値が低くなっていたりもするが……。とはいえ、一応、武偵高も学校である為、最低限のラインを設けている。もつとも、そのラインを下回った受験生はいない。そんな低すぎる合格ラインを越えさせて、武偵としてすべきか、落とすべきか、そんな思いが、頭を駆け巡りながら、結果の用紙をめくった時、校長室をノックする音がした。

「校長、武偵庁の長官をお連れ致しました。」

その言葉に、やはり来たか。と思う。間違いなく、『遠山金虎』の件だ。

「どうぞ、入って下さい。」

そう言つて、応接用のソファーに移動する。移動する前に、先程めくった用紙を見る。そこには、偶然にも『遠山金虎』の名が書かれた用紙、その内容を見て、私の決断する。

「失礼します。緑松校長、アポもなく、申し訳ない。」

そう言つて、武偵庁長官が私の誘導で、ソファーに腰を下ろす。

「いえ、お気になさらず。それで、長官自らお越しのいたたく程の用件とは？」

分かっているが、形式上尋ねる。

「分かっているだろう、君の察しの通り、『遠山金虎』、彼女の件だ。」

入学試験の情報を、見ることが可能な武偵庁が、彼女に目をつけるのは、分かっていた。そして、要求は、ふたつにひとつ、「彼女を寄越せ」か、「彼女を隠せ」だ。

「我々、武偵庁としては、彼女を、そのままこちらに寄越して欲しい。とても優秀な人材だ。」

予想通りの要求ですね。そう思っていたら、長官の言葉が続く。

「まあ、その要求は政府に棄却されたがな。なので、今回、私は別の依頼、政府からの使者としての要求を伝えに来た。政府は彼女に、我々よりも、更に前から目をつけていたらしい。」

「それで、その要求とは。」

長官は、小さくため息をつき、

「彼女を『不合格』にしろ、そして、『彼女の記録を全て消せ』。このふたつだ。彼女は、あらゆる組織に属さず、政府によって、秘密裏に管理する。」

「なるほど、そうになりましたか。残念です。とても魅力的な受験生でしたので。」

私がそう言うと

「同感だ、最強の武偵になれただろう。試験の映像を見たよ。彼女の力は素晴らしい。しかし、危険だ。そして、危険だと、身を滅ぼすと、分かっているけど、欲しくなる。そんな魅力がある。だから、政府の意見に賛同した。」

長官も、私と、同じことを考えたようですね。では、こちらの決定を出しましょうか。

「彼女の危険な魅力に関して、同感ですね。政府からの要求、確かに承りました。しかし、私の中では既に、答えが出ているんですよ。」

私の回答に、長官が強烈な殺気を放った。

「何故、私が来たのか、分かっているよな。」

分かっていますよ。要求を飲まなかった場合の始末ですよ。この殺気、長官は、私が、彼女の魅力に飲まれたと思っているようですね。

「すみません、落ち着いて聞いて下さい。そんな要求以前に、彼女は不合格です。東京武偵高の校長として、彼女の入学は、認められません。」

長官の殺気が萎む。

「どういうことだ。」

「これを見て下さい。」

私は、長官に一枚の用紙、『遠山金虎の筆記試験の結果』を差し出す。「彼女は、驚くべきことに、合格点に達していません。学力不備で、不合格を出すのは、我が校初のことです。なので、要求以前に、彼女は、『不合格』なんですよ。」

『どんな馬鹿でも合格出来る武偵高』そこに、落ちる奇跡の馬鹿に長官も開いた口が塞がらなかった。

## 小話集―遠山金虎、被害者の会―

―サイオン・ボンドのトラウマー―

「うんは。」

目が覚め、周りを見る。：本部の治療室か？体を起こそう動いた時、左腕に痛みが走る。その痛みで、思い出す。

「俺は、負けたのか。」

某国の秘密工作員の処理、その任務を終えた直後に、現れた女。女とは関わらない、そう決めている俺でさえ、一瞬、見とれてしまう美女だった。

しかし、俺が気づけないレベルで気配を消していた時点で、警戒すべき相手と分かったが、そいつが、俺の利き腕を当てたことで、更に警戒を強めた。

その女は、英語が通じず、日本語を扱うことで、日本人だろうと予測した。そのせいで、ひとりの日本人、俺の認めた男、『トウヤマ・キング』を思い出してしまった。そして、その名を出したことが、間違이었다。女は、トウヤマを知っていた。そして、そのトウヤマに勝ったと言った直後、奴は戦闘を開始し、俺は、負け、ご覧のあり様だ。

あいつが何者かは分からないが、トウヤマの敗北に反応し、俺を攻撃したということは、奴は、トウヤマの女か、敵なのだろう。そんな予想を立てる。前者なら、トウヤマの評価を改める必要がある。後者なら、とんでもない奴に目をつけられたな、と生きていることを祈るばかりだ。

サイオンは前任者の養父のことを振り返る。養父は女好きで、優秀なエンジニア

であったが、女に足を引つ張られていた。だから俺は、女との関わりを避けてきた。

そして、今回の出会い。

「女とは、恐ろしい生き物だ。」

サイオンは誓った。絶対に女とは関わらない、いや、関わりたくない。

サイオンの女嫌いは、これまでの倍の速さで加速したのであった。

|||||

—シャーロック・ホームズ一世が最も推理を外した日—

僕は、シャーロック・ホームズ。自分で言うのもなんだが、世界一の探偵だ。今の武偵制度の元にもなった。僕の推理力は、日々向上し、今では未来予知の域に達した。僕はこれを『条理予知』と呼んでいる。

そして、僕は、イ・ウーという組織のリーダーを今はしている。ここには、様々な超人たちが所属しており、日々、研鑽を積んでいる。また、新たなメンバーを加える為に、世界中の有能な人材を求め、勧誘している。

そんな中、僕が目をつけた一族、『遠山』と『間宮』だ。実に興味深い。彼らが加われば、イ・ウーは、僕が、あの子に譲る時に、更に素晴らしい組織になっているはずだ。『間宮』の勧誘は、メンバーに任せるとしよう。もつとも、『間宮』は加入しないと推理してしまっただれど。

『遠山』の勧誘は、僕が、いや、推理したら、僕以外、行けないだろうね。『遠山』には、面白い人物が多数いる。金叉を筆頭に、金一、金次、ああ、他にも、人工的に作られた、『遠山』もいると推理したよ。

でも、僕が勧誘はしたいのは、『遠山金虎』だね。彼女は、日本政府が存在を秘匿していた。まあ、秘匿していてくれたおかげで、推理出来たけど。強すぎる故に隠された。興味深い『遠山』の中でも、そんな彼女に一番の魅力を感じた。しかし、推理してみると、確かに彼



女は、強い。メンバーたちだと、全員で行っても、返り討ちにされる  
と推理出来た。だから、僕が行くことにした。僕の好奇心もあるけれ  
どね。

さて、ここにいるはずだ。うん、やはりいた。僕は、盲目となつて  
いるが、分かる。あそこにいる、ブロンド髪の女性が、『遠山金虎』だ。  
僕の推理では、人気のない所に行つて、殺気でも出したら来るはずだ。  
僕は、殺気を徐々に強めながら、移動する。

ここでいいかな、人気も監視もない海辺に立つ。ここなら、本拠地  
—原子力潜水艦・ボストーク号—も寄せられる。最高の立地だ。

「推理通り、来たようだね。」

遠山金虎が、僕の殺気を追つてやってきた。

「強者の気を感じたが…、貴公で違くないか？」

「君の言っている、気というのが、これのことなら、僕で間違いない  
よ。」

そう言つて、殺気を強める。あの、自由気ままに振る舞う、イ・ウー  
のメンバーたちを纏めてきた、彼ら以上の強者である証明。その殺気  
を放つ。

「む、この気、確かに貴公に相違ない。」

この殺気で怯まない…、推理はしていたけれど、日本政府が隠す訳  
だ。では、勧誘を始めようか。僕の推理では、彼女と一戦交える必要  
があるけれど。

「なかなかの気、強者とお見受けする。出来れば一戦交えたい。」

推理通りだね。でも、その前に、

「その前に、ひとついいかい？僕は、君を勧誘しに来たんだ。イ・ウー  
という組織にね。僕はシャーロック・ホームズ。その組織のリーダー  
をしている。僕の推理では、君は、僕の話しを聞けば、興味を持つは  
ずだよ。」

僕の言葉で、彼女が、ピクリと反応する。それを見て、勧誘を続け  
る。

「イ・ウーでは、自己の鍛錬や目的の実現、それぞれの目標の為の組織だ。メンバーたちは、時に教師となり、自身の技術を伝え、時に生徒として学び、自己を高める。僕の推理では、強さを求める君に、ピツタリだと思うんだ。」

勧誘の第一段階を終える。僕の推理では、彼女は、僕との戦いを求める。

「出来れば一戦交えたい。その返答はないのか？」

「推理通りだ。では、僕への返答は、その後に行しよう。」

ここまで、推理通りだ。お互いに構えを取る。彼女に笑みが浮かび、口を開く。僕の推理では、彼女が、直ぐに仕掛けてくるはずだった。

「失礼だが、貴公は、目の光を失っていると見受ける。しかし、今まで相対した者たちよりも、強いようだ。なかなか心躍るぞ。」

僕の推理が外れた…、何故、彼女は、僕が盲目と見抜いた？今まで、誰にも気付かなかった。

「まさか、僕の推理が、外れるとはね…。何故、僕が盲目だと、分かったんだい？」

彼女は、僕の問いに、

「分かったからだ。」

答えになつてないね。いや、直感で察知した、ということなのだろうか？彼女の評価を上方修正する必要がある。戦闘力に直感を加える。その上で推理すればいいだけだ。

さて、推理出来た。僕が、盲目と分かった彼女は、手加減したカウンターでくる。僕の左の手刀を右手で止め、左の拳で、僕の脇腹を狙う。

「では、始めようか。」

僕が踏み出して、左の手刀を振り下ろす。推理通りに、彼女は動いた。

「推理していたよ。」

そう言つて、彼女の拳を止める。お互いに、再び距離をとる。

「もう少し、力を出してよさそうだ。」

「そうだね、そうなるのも推理していたよ。」

そう、推理通り。次は…

「先程より、推理、推理と…」

彼女が怒気を含み、ブツブツと呟き出す。推理通り、そして、『条理予知』の説明を聞いて、驚愕する、と推理する。

「すまないね、僕はシャーロック・ホームズだから。推理は、癖みたいなものなんだ。僕は、推理が極まって、予知になってしまったみたいだけどね。僕はこれを、『条理予知』と呼んでいる。」

さて、驚いたかな？

「ええい、推理、推理と五月蠅い!!それに、シャー…、なんとやらなど、知らぬわ!!」

彼女が怒声と共に襲い掛かる。まさか、この短時間で、二度も推理を外すとは!!僕は、一瞬で、彼女の攻撃を推理する。ここだ!! 彼女の右の拳が届く位置を推理し、それを捌く。

「ぐはっ。」

彼女の拳が、腹部に炸裂し、肺の空気が吐き出される。速い、推理よりも、速い。ふらふらと立ち上がる。先程の彼女の発言から、ひとつの可能性を推理する。恐らく、それが、推理が外れた理由だ。

「ほう、加減はしていたが…、立ち上がるのは、貴公が初めてだ。だが、決めた。私は、貴公の組織には入らぬ。」

「何故か、聞いていいかい。」

何故だろう、先程、可能性を推理してから、彼女を推理することが出来ない。元々、女性の感情を推理するのは、苦手だったけど、彼女はそれ以上に分からない。

「戦に推理など不要!!ただ、正面突破あるのみ!!貴公とは相容れん。」

彼女は所謂、『脳筋』と言われる存在だろう。しかし、そうなれば、勧誘は簡単だ。勝てばいい。彼女よりも、強いと証明すれば、必ず従うはずだ。それに、もう二度も外れたが、推理通りなら、攻略法を見つけた。

「なるほど、それでは、仕切り直しと行こう。」

構えを取る。動いた!!

「6＋8はっ。」

攻略法、それは、考えさせる。僕の推理では、彼女は、失礼だが、馬鹿だ。彼女に、思考させ、動きを散漫にさせる。人は、問題に対して、無意識に反応し、思考してしまう。更に、『分かる』、または『分かりそう』な問題に対しては、特に反応する。彼女の頭脳だと、程よい問題だろう。タイムラグが生まれる、そこを叩く。

ピクリと彼女が反応する。勝った!! そう確信し、拳を繰り出す。  
「分からぬ!!」

僕の拳よりも先に、彼女の拳が届く。吹っ飛びながら、考える。思考の放棄? いや、それでも、もう少しタイムラグが、生まれるはずだ。導き出した答えは、彼女の言葉の通り、『分からなかった。』。彼女の頭脳を推理出来なかった。それが、敗因だ。

地面に落ちる。薄れゆく意識の中で、彼女の勧誘は辞め、別の『遠山』の勧誘を決意する。イ・ウーは、教え、教わる、学びの場だ。だから、僕が、推理出来ないレベルの馬鹿に、それは無理じゃないか。

|||||

— 蘭豹、命を懸けた逃走劇 —

香港で最強、無敵の武偵。それが、ウチ、蘭豹や。

今日は、麻薬組織の拠点と構成員の制圧。あつちゆう間に終りよつた。ちいっとぼつかし、暴れすぎてもうたが、関係あらへんな。

一仕事を終え、海を眺めて酒を飲む。美味い。しつかし、暴れ足らへんな。最近じゃあ、ウチを見たら逃げよる。逃げる奴らの相手ばつかしで、つまらんなあ。酒を呷る。香港は、故郷やけど、飽きてきたわ。

海を眺め、異国に思いをして馳せていた時、海から、人が上がってきた。髪と衣服を海水で濡らした女が、ウチに近づいてきた。なん

や、えらい別嬪さんやな。

「すまぬ、ここはどこだ。」

別嬪さんは、ウチに日本語で話しかける。海難事故にでもあったんかいな？

「ここは香港やで。」

とりあえず、日本語で教えてやると、別嬪さんは、

「おお、それはよかった。香港に『無敵の武偵』なる人物がいると聞いて、思わず、日本からの泳いできたが、無事にたどり着けたか。」

なんちゆうか、見た目のイメージとちやうな。まあ、おもしろい奴やな。退屈しているウチは、この、破天荒な別嬪さんに興味が湧く。

「ところで、『無敵の武偵』なる人物を知らぬか？」

別嬪さんが、ウチに聞く。ウチのことやで。そう言おうとしたが、ひとつ思いつく、

「日本の姉ちゃんは、そいつ見つけて、どないするんや？」

「無敵というくらいだ、とてつもなく強いに決まっている。私を倒せる人物か、戦って確かめる。」

ほう、やろうっていうんかい、ええで、おもしろくなってきた。ウチが、その『無敵の武偵』なんかは、ぶっ飛ばしてから教えたる。

「そうか、ほなら、ウチに勝てたら、教えたる。」

「分かった。」

その言葉に、酒を置き、銃を向ける。ええで、久々に逃げへん相手や。まずは、小手調べや。引き金を引く。別嬪さんが銃弾を掴みよつた。ウチの気分は、最高潮に達する。これや、こんな奴とやり合いたいんや。別嬪さんは武器を持ってへんし、

「力比べというや。」

銃をしまい、別嬪さんに近づき、両手を取る、プロレスでいう『手四つ』、別名『フィンガーロック』。徐々に力を入れていく。別嬪もウチのやりたいことが分かったようだ。

「ほな、いくで。」

ウチの力には、男でも、勝てるやつはおらへん。一気に力を込め、ぐっと押す。びくともせえへん!!

「では、私の番か。」

別嬪が、力を入れると、ウチの手に激痛が走る。なんちゅう握力や。そして、押してくる。

「ぐぐぐつ…。」

歯を食いしばって、なんとか押し返そうとするが、あかん、無理や、押し倒され、ブリッジのような体勢になると、手を離され、仰向けに倒れる。

力比で負けた…。こんなこと初めてや。でもな、戦いは、力だけやないで。起き上がり、素早く懐に飛び込み、攻撃を放つ。放った右の拳が掴まれる。すかさず左の拳を叩き込む。だめや、これも掴まれた。そんなら足や、右足を上げる、その瞬間、

「安心しろ、加減はしてやる。」

掴まれていた左の拳が放され、掴んでいた右の拳が振り落とされる。強烈なボディブロー、地面に叩きつけられる。あかん、速すぎて、見えへんかった。ウチは、目の前が真っ暗になった。

ズキツという、鈍い腹部の痛みで目が覚める。

「ここは…、ウチ、生きてる…!!」

痛みを堪え、身体を起こす。ウチは、負けた、それも完敗。悔しさが、一瞬、込み上げる。

「起きたか。なかなか早い目覚めだ。愚弟よりも頑丈かもしれないな。」

ウチ気絶させた人物がそんなことを言う。その人を見とつたら、負けた悔しさが、無くなる。ウチと同じ女、それなのに、圧倒的な強者。尊敬の念が湧き上がる。

「あの、ウチ、蘭豹言います。姉御と呼んでも？」

「む？まあ、別に構わぬが？」

この人についていこう。そう決意する。

「して、蘭よ、私が、勝ったのだ。教えてもらおう。」

教える…？ああ、『無敵の武偵』か!!そりゃ、ウチのことでした。つて言わないかな。そう思い、口を開きかけた時。

「ふふ、楽しみだ。『無敵』というのだから、多少、気合いを込めた拳程度なら、なんともないのだろう。とりあえず、出会い頭に、軽く一撃を入れるか。もしかしたら、初めて本気で戦えるやもしれん。」

楽しそうに呟きながら、笑みを浮かべる姉御。とりあえず…、出会い頭に…、あかん、ウチや言うたら殴られる。と、とりあえず、どの程度の攻撃がくるんか、知らな。だ、大丈夫やろ…、さっきのくらいやったら、気絶ですんだし…。

「あのお、姉御…、その軽く一撃とやらは、どの程度のもんです？」

「おお、そうだな、蘭にも見せてやろう。ここなら、人気もないし、周りは海で建物もない。大丈夫だろう。」

そう言つて、姉御は波打ち際に立つ。

「では、いくぞ。」

そう言つた姉御の右の拳が、金色の光を纏い、  
「せいっ!!」

拳を地面に叩きつける。大地が抉れ、海が割れた。そして、何事もなかったかのように振り返り、

『無敵』なのだから、この程度の攻撃なら耐えられだろう。」

あんなん食ろうたら、骨も残らんで…、あかん、ウチが、『無敵の武偵』言うたら、あれが問答無用で叩き込まれる…。尊敬の念が、一瞬で恐怖に代わつた。

「して、蘭よ、『無敵の武偵』はどこにおるのだ？」

死にたない、生存本能が、脳内アラームを響かせる。

「いや、その、それがですね、姉御、実は、そんな奴、おらんのですわ。デマです。デマ。」

と？..を伝える。

「なんと!!それでは、私の求めた相手はおらぬのか…。」

よっしや、信じてくれた。更に騙さな。

「そうなんです。なんや、どこの国かは忘れましたが、そこに『無敵の武偵』がおるんですが、何故かそれが、香港におる、っちゅうデマを誰かが流しよつたんです。」

「ならば、世界のどこかにおるのだな。こうしてはおれん。蘭よ、私は

もう行く。そ奴を探しにな。また、ここ、香港にも来るが、その時は、案内を頼むぞ。」

そう言つて、姉御は走り出し、海の上、水面を走り、去っていく。水の上走れるのに、なんで泳いできたんや？

いや、そんなことは、今は、どうでもいい。とりあえずは、騙せた。でも、また香港に来くる言いよつた…、その時に街の人間が、ウチが『無敵の武偵』や、つてばらしよつたら…。死んでまう。いや、騙しとつたこともバレて、もつと恐ろしいことになるかも…。

逃げるで、香港から。姉御は日本人やし、日本に『無敵の武偵』がおらんのは、知つとるやろし、探さへんやろ。灯台下暗し、姉御の祖国に逃げるで。思い立ったが吉日、すぐに日本へ向け出発する。出国時に永久追放だなんだと言つてきよつたが、そんなん、どうでもええ。今は、ただ逃げる。それだけや。

それから、ウチは、日本の東京武偵高の教諭になり、さらに時が流れた。

お、弟やと…。隣に立つ、元教え子の遠山を見て、出会つてしまつた姉御を見る。

「嘘やろ、全然似てへん。」

もし、遠山がウチのことを話したら…、死ぬ。あかん、逃げな。

「あ、あの、教員の飲み会があつてまして…、失礼しますっ!!」

脱兎の如く逃亡。飲み会の席に辿り着く。

「すまんが、急用や。」

自分の荷物を掴み、立ち去る。綴が、

「んー、蘭が酒ほつたらかしか、おかしくねエ?」

と言う。綴、お前、知らんのやな。

「死んだら、酒も飲めへんのや!!」

蘭豹は、恐怖の女大魔王の手から逃れるべく、夜の街を駆け抜けていった。





まだ若い後輩が、俺の眩きに反応した。

「なんだったか、思い出せないな…。」

そこから、皆で昔を懐かしみ、思い出を語りながら、仕事をこなす。そんな中、ひとりの女性武装検事が、

「私は、高校上がった時は、彼氏を作ることばかり考えてたなあ。」

彼氏、だと…。俺の殺気が放たれる。

「そ、そうだ、模擬戦闘の映像、手に入れたんですよ。娘さんの活躍を見ませんか？」

俺の殺気を受けた後輩が、話題を逸らすべく、申し出る。確かに、見たい。

「ああ、見せてもらえるか。」

俺は、殺気を抑え、映像を見る。同僚たちも集まって来た。映像は、カナコによる、一方的な蹂躪。皆が、やべえ、だのスゲエ、だの言っているが、俺の感想は違う。

「カナコ、よくここまで、力を抑えられるようになった。」

強すぎる力に悪戦苦闘していた娘が、見事に手加減を覚えた。娘の成長が嬉しい。

「手加減してんのは、分かるんですけど、本当の実力が分かりませんね。どうなんですか？」

映像を見ていた内の、ひとりが聞いてくる。

「そういえば、この間の休日に、海に行った時が、少し力を入れて地面を殴っていたが、地面が抉れて、海が割れていたな。確か、ビデオに残してたな。」

俺は、ケータイのフォルダを探す。あった、あった。

「これだ。」

俺は、その動画を見せてやる。どうだ、俺の娘は可愛いだろう。

「俺、政府の対応が正解だと思います。」

どうした急に、お前、最初に聞いた時、断固反対すべき、って言うてたじゃないか。他の同僚、上司でさえ頷いている。何故だ、何故可愛いと言わない。しかし、こんなに可愛いと、悪い虫がつかないか心配だな。先程の言葉が蘇る。彼氏…。

突然噴き出た、俺の殺気に、周囲が慄く。彼氏、そんな奴がいたら、遠山家の家訓『できるだけ殺人はするな。』に従い、殺しのライセンスのある武装検事になっても、守り抜いたそれを…

俺の緊急連絡用携帯が鳴る。思考を破棄し、応答する。

「どうした。」

「父さん、大変だ、姉さんが…」

キンイチが焦った様子で話す。カナコがまさか、男を!!一瞬、そんな考えが過るが、そうか、と思い直す、カナコの受験に関することは、まだ家族に教えていない。カナコが、『どんな馬鹿でも合格出来る武偵高』に落ちたと、ショックを受けているのだろうか。

「キンイチ、落ち着け、カナコが落ちたのだろう。帰って話すから…」  
「違うんだ父さん、いや、それもだけど、姉さんが、家出した!!」

そこからは、政府も武偵庁も、公安も、当然俺たち武装検事も大慌て。大捜索が始まった。

2日後、岩手県沖、海上を走るカナコの姿が、海上保安庁によって確認される。制止する職員を無視し、

「アメリカに強者を探しに行く。」

と告げ、疾走、行方不明となり、捜索が再開するも、発見には至らなかった。

それから2か月後、

「父上、おかえりなさい。」

帰宅した俺を、何事もなかったかのように玄関で出迎えるカナコ。

「おかえり」は、俺の台詞の気もしたが、愛しい娘の姿を見て。

「ただいま、カナコ。」

捜索で疲れた体に元気が湧く。しかし、少し、お説教せねばな。そう思い、口を開く前に、

「では、行ってきます。」

カナコが駆け抜けていく。

そして、再び、我が愛おしい娘は、旅立った。搜索する者たちの気も知らずに。

## 姉、買い物に行く

—金虎視点—

キンジとの食事を終え、帰宅し、入浴後に、

「カナコ、せめて、あと数着は、服を買いなさい。」  
と婆様に言われる。

「婆様、私は、別にいらないのだが。」

「まったく、この子は、少しは、女らしくなれないのかね。」

「体は女らしき十分じゃがな。」

爺様が、婆様にぶっ飛ばされた。

「カナコ、少しは、大人の女っぽい服を持ちなさい。女の子が、私服で戦闘服なんて持つてるのは、あんたくらいだよ。」

「しかし、婆様、あれは丈夫で便利なのだ。」

「まったく、こりゃあ、当分結婚は無理そうだね。」

婆様が、呆れた様子にいう。結婚は無理…、それは困る!!私は、私よりも強い男と結婚したいのだ。

「婆様、大人っぽい服を買いなさい、結婚出来るのか!？」

婆様の肩を掴み、問う。

「そういう訳じゃなくてね。まあ、ただ、少しはましになるだろうねえ。」

婆様は、何かまだ、言いたいようだが、それどころではない。今すぐに行かねば。

「では、買いに行ってくる。」

「このお馬鹿、もう店は閉まってるよ。」

玄関へ向かう私を、婆様が呼び止める。

「明日のお昼にでも行きなさい。分かったね。」

「致し方無い、寝るとしよう。」

翌日、支度を済ませ、家を出る。しかし、どこで買えばよいのだろうか?そもそも、私は服を買ったことがない。旅に出る以前は、母上

や父上が、買って来てくれていたし、旅に出てからは、相對した者たち gave くれた、戦闘服などの衣服が、非常に良いものだったため、買う必要が無かった。今も、部屋に残っていた、Tシャツにジーパンだが（サイズが合うのがこれしかなかった）、これの何がダメなのが、分からない。

分からないものを考えても、仕方がない。とりあえず、街へ出るか。歩いていれば、何か良いものがあるかもしれぬ。

ぶらぶらと街を歩く、成程、驚く程に店が多い。衣類系だけでなく、美容に飲食、大小様々な業種の店舗が並んでいる。さて、何処に入ればよいのだろうか？大人っぽい服…？不意に、宣伝用の録音音声がかえった。

「新素材のストレッチスーツ、動きやすさを追及した―」

これだ。スーツ、実に大人ではないか。しかも、動きやすいと、まさに私の為の服だ。宣伝の音声を辿り、店に着く。私は、店員に商品を伝えた。それから、試着だ採寸だの面倒ではあったが、なにも分からないので、言われるがままになる。気が付くと、Yシャツだけで5着、スーツも上下2着（スカートとパンツ）、フォーマルベストなるものを2着、更に、それに合わせた履物までも買うことになっていた。会計を済ませ、買ったのを着て帰りたいと伝え、着替える。そして、他の買った商品と、着ていたTシャツたちを袋に纏めて、店を後にする。

ストレッチスーツとは、戦闘服程ではないが、なかなか動きやすいな。しかし、もう少し動きやすくはならぬだろうか？試行錯誤の結果、シャツのボタンをふたつ開け、結局、ジャケットは脱ぎ、シャツとベストのスタイルに変更する。腕が動きやすくなったな。この格好であれば、婆様にも叱られぬだろう。さて、少し、街を散策して帰るか。

カツ、カツとヒールを鳴らして、喧騒の街を進む。ヒールの高い靴など、初めて履いた。安定感がなく、動きにくいのが、成程、良い鍛錬だ。世の女たちは、日々、このように鍛錬に励んでいたのか。己に枷を付け、高める。私もまだまだ未熟だな。まだ見ぬ強者との戦いの為

に、更に、力をつけねば。更に、歩く、時折、話しかけてくる男がいたが、強者の気を感じないので無視し、歩く。

ヒールの高い靴での歩き方、その感覚を掴むまで歩き続け、学園島まで来ていた。無意識に歩いていると、強い気を感じる方へ向かってしまうようだ。武偵高があり、戦闘能力を持つものが多い、ここ一帯に、自然と体が引き寄せられてしまった。

「さて、どうするか。」

ただ、適当に歩いていただけで、目的もなにも無い。ふと、この人工島の片隅に住む、弟を思い出す。

「差し入れでもしてやろう。」

弟の気を探り、歩き出す。途中でスーパーに立ち寄り、適当に、保存食やレトルト食品を買い漁り、向かう。

「ここだな。」

弟の気を発する部屋の前に、立ち、扉を叩いた。

|||||  
|||||  
|||||  
|||||

—キンジ視点—

俺は、自宅で勉強している。来る奴らは、狭いだの、日当たりが悪いだの文句を言うが、住めば都、慣れてくれば、落ち着ける空間となっている。問題とにらめっこしていた時、玄関をノックする音が聞こえる。

俺の家を人が訪ねてきた時、碌なことにならない。言ってる悲しくなるが、事実だ、室内で乱射事件起こしたり、騒動を持ち込んだり。それは、今の家でも、前の部屋でも変わらない。

俺が居留守を決め込んでいると、

「金次、いるのは分かっている。開けぬのなら、私が開けるぞ。」

姉さんの声、まずい、物理的に開けられてしまう。

「開ける、開けるから。」

急いで玄関を開ける。そもそも、なんで姉さんに、ここが分かったのかとか、いろいろと疑問はあるが、扉の安全が優先だ。破壊されたら、修理代だけじゃなく、追い出される可能性もある。

「まったく、直ぐに開ければ良いものを…。」

荷物を大量に抱えた姉さんが、立っていた。そして、玄関に上がり、どきどきと、荷物を置く。袋の隙間から食品が見える。

「姉さん、これは…?」

「うむ、差し入れだ。幼少の頃より、常に、金がない、と騒いでいたお前のことだ。どうせ雑草でも食べているのだろうと思つてな。」

そう言つて、ごそごそと、袋から食品を取り出していく姉さん。カップ麺やレトルト食品を山積みにしていく。極貧の俺にとって、実に有難い差し入れだ。雑草食つてんのもバレてるし。

「ありがとう、姉さん。でも、なんでここが分かつたんだ?」

「気を探つて来た。金次の気は分かりやすい。」

あんた、ドラゴンボールの世界で修行してきたの?つまり、俺は、姉さんから逃げられないのかよ。

姉さんが、部屋に上がる。

「いい部屋だな。」

うそつ、初めて褒められたよ、俺の新居。

「雨風をしのげるし、水も出るようだな。」

姉さんは、どんな生活してたんだろう?褒められても、ちつとも嬉しくない。ところで、姉さんは、なんでスーツなんて着てるんだろう?しかも、扇情的な着こなしをしている。

「姉さん、その格好…」

「おお、これか、婆様に服を買えと、られてな。どうだ。」

そう言つて、胸を張る姉さん。どうだ、と言われてもなあ。似合つてはいるけど、中身があれなのを知つてると、見た目とかどうでもいいし、何より、服を買えつて言われて、なんでスーツなのかも分からない。しかし、下手なことを言つて、殴られるのも嫌な訳で、

「うん、いいんじゃない?」

当たり障りのないことを言うのが吉だ。疑問形にしておくのもポ



イントだ。否定も肯定もしない、日本人スタイル。姉さんは、納得したのか、そうだろう、と頷いている。

「でも、姉さん、いいの？昨日も奢ってもらったのに…。」

俺は、積み上げられた食品を見て言う。

「気にするな、今日は、買い物が終わってから、暇で歩いていたら、辿り着いただけだ。それに、久々に戻ってきたのだ、私は、あまり良い姉ではないが、それでも、弟を思うくらいの気持はある。」

確かに、姉さんは、世間一般の姉とは違っていた。それでも、優しい姉さんつてのは、俺たち兄弟は分かっている。

「俺ばっかり構ってもらって、兄さんに悪いな。」

「そうだな、金一のところにも、今度行くでしょう。しかし、金一は、弟だが、私よりもしっかりしているからな。」

自覚はあつたんだ。でも、それだと、俺が、姉さん以下みたいじゃないか。

「それに、金次、お前を見ていると、以前父上が言っていたことが、なんとなくだが、分かる気がするのだ。」

「父さんが？」

『馬鹿な子程、可愛い』とな、確かに、しっかり者の金一より、危なっかしい金次の方が、気になってしまう。」

ああ、だから父さんは、姉さんを溺愛してたのか。だって、その理論だと、姉さんが、全宇宙で、一番可愛いことになるじゃないか。

それから、姉さんの差し入れを収納に入れたり、じゃあ、帰って下さい、というわけにもいかないのです、姉さんにお茶をだしたり、してから、勉強を再開する。姉さんは、俺が教材を開くと、それが視界に入らない所まで退避する。どんだけ勉強嫌いなんだよ。

しかし、姉さんの来訪で、俺は、この部屋に近づくと、奴らに気づくことが出来なかった。

「金次、先程から、こちらに、殺気を放つ者が近づいている。なにかしたか？」

勉強中の俺に、姉さんが、突然そんなことを言う。姉さん、あなたのセンサーどういう仕組みなの？

「なにそれ、怖いんだけど。」

主に姉さんが、というのには言わないでおこう。

「安心しろ、『返對』したお前なら、ほど良い相手だろう。それに、強者だった場合、私が殴る。」

なんだろう、この安心感。普段は、馬鹿でポンコツな姉さんだけど、戦闘になると、姉さんがいるだけで、負ける気がしないし、なんなら姉さんが、ひとりで暴れた方が強い。あと、『返對』って言い方やめようよ。言ってるの、爺ちゃんとか姉さんだけだぞ。

「姉さん、出来ればなりたくないんだけど。」

「お前は、まだ自在に『返對』できないのか？まったく、修業が足りん。」  
ため息をつき、玄関に向かう姉さん。やった、俺の安全は確保された。だけど、一応防弾シャツ着とこ。

「来たな。」

姉さんの声で、警戒を強める。ドンドン、と激しいノックの音が室内に響く。

「バカキンジっ！なんで電話に出ないのよ！いるのは、分かってるわ、さっさと開けなさい！」

扉の向こうから、キンキンのアニメ声が聞こえてくる。アリアさんだ!!ヤバイ、スマホ電源落ちてた。

「キーくん、早く開けないと、アリアが蹴破つちゃうよー。」

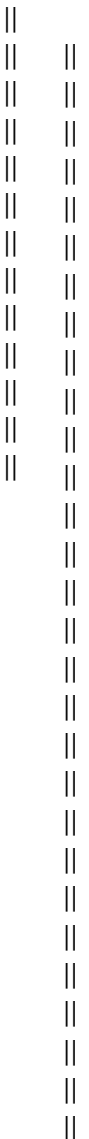
理子までいるのかよ。姉さんといい、アリアといい、お前らは、俺の家の扉になんか恨みでもあんの？

「狙撃手の気もあるな。金次よ、お前は、借金でもしたのか？」

レキまでも!!それよりもマズい、あいつら、姉さんを見たら、問答無用で発砲してくる。

「仕方ない、開けるぞ。」

やめて、せめて俺が開けるから。姉さんはどこかに隠れて。そんな俺の思いは届かず、姉さんが扉を開ける。なんでこういう時に限って、事情が分かる白雪だけいないんだよ!!



—アリア視点—

「もーっ、なんで出ないのよっ!!」

何度掛けても繋がらない電話。

「キーくんのことだから、どうせ電源落ちてるんじゃない?」

理子が、ぴよこんと出てきて言う。そして、

「それともー、もしかしたら、キーくん、わざと電源落としてるう?」

くふっ、と口角をあげる理子。

「どういうことよ、理子。」

「んー、キーくん、もしかしたら、別の女の子とおー、お部屋で遊んだりして。」

「い、行くわよっ!! バカキンジ、理子の言ってる通りだったら、風穴っ!! そうじゃなくても、風穴っ!!」

ほいほーい、返事する理子と、無言のレキが着いてくる。

キンジの部屋の前に着く。

「バカキンジっ! なんで電話に出ないのよ! いるのは、分かってるわ、さっさと開けなさい!」

ドンドンと扉を叩く、

「キーくん、早く開けないと、アリアが蹴破っちゃうよー。」

いつものあいつなら、慌てて扉を開けに来るのに、返事も足音もない。まさか、キンジになにかあったの!? 扉を蹴破ろうとした時、扉が開いた。

「む、武偵高の学生か?」

「あ、あんた誰よっ!!」

扉を開け、立っているスーツ姿の女、凄い美人…、バカキンジ、またやったわね!! ガバメントを引き抜く。

「おおー、美人さんだー。キーくん、相変わらずのタラシっぷりだねえ。」

理子もそう言いながら、戦闘態勢をとる。レキも無言でドラグノフを抱える。

「あんたが誰だか知らないけど、怪我したくなければ退きなさい。キンジ、出てきなさい。」

「金次の友人か？待っている。」

女が、部屋に入って行く。

「なっ、待ちなさいよ!!この、バカキンジーっ!!風穴開けてやるんだからっ!!」

部屋に飛び込んで、壁を蹴り、女を飛び越える。キンジが、ひいつ!!とって尻餅をついている。ジャキツとガバメントをキンジに向ける。

「ま、待て、アリア、話せば分かる。だから、とりあえず、落ち着け。」

「あら、私は落ち着いてるわよ、落ち着いて、あんたを狙ってるの。」

引き金を引こうとした時、

「金次、正直に言え、なにをやらかした？」

女が、突然キンジの前に現れた。なに、今の？緋緋神の力を使った、私の瞬間移動みたいなことをしたの？

「姉さん、誤解だ、誤解なんだ。とりあえず、姉さんも、お前らも、落ち着いて話を聞いてくれよっ!!」

キンジの叫び。あれ、今、姉さんって…。プルプルと震える指を、その人に向けて、

「お姉さん…？あんたの…？」

「そうだよっ!!この人は俺の姉さんだ。」

うそっ、変なところ見られちゃった。どうしよう。部屋に入ってきた、理子も、レキでさえ驚いている。

「つまり、このお姉さんは、間違いなく、キーくんのお姉ちゃんだど？」  
「だから、何度もそう言ってるだろ。この人は俺の姉さん。もういいか？」

その後、急遽始まった質問タイム。私と理子が、キンジを質問攻めにしていたけど、それも、終わりを告げようとしている。だけど、私には、ひとつ、どうしても聞きたいことがあった。あの時に、お姉さんが見せた瞬間移動。私は、緋緋神の力を身につけたけど、まだ、全然使いこなせていない。だから、教えて欲しい、そんな思いがあった。「最後に、あんたのお姉さんは、超偵なの？」

私の質問に、キンジは、

「なに言ってるんだ、アリア？姉さんはただの無職だぞ。」

無職…、武偵でもないの!?

「待ちなさいよ、キンジ!!じゃ、じゃあ、あの瞬間移動はなにによっ!!超偵じゃなくても、超能力かなんかでしょ!!」

なにか特別な力がないと、あんな事できないわ。

「いや、俺に聞かれても…。姉さん曰く、気合いらしいから、超能力とかじゃない、…と思う。姉さんが、なんか不可解なことやっても、俺たち家族は、『姉さんだから』で済ませてきたし。」

自信なさげに、チラチラと、隣に座るお姉さんを見ながら、キンジが言う。そんなキンジを見て、お姉さんが口を開く。

「金次、なにを言っている。あれは、走っているだけだろうが、友人に？を教えるな。」

「えっ、あれ走ってたの!?!」

キンジが、驚く。なんで、あんたが一番驚いてんのよ。というより、あの瞬間移動って、走ってたの!?!あれ、待って、理解が、いいえ、訳が分からないわ。

「まったく、金次よ。見たら分かるだろうに、修行が足りぬ証拠だ。それに、気合いを使うときは、こうなると昨日見せたであろう。」

そんなことを言いながら、突然、空中を歩き出すお姉さん。何故か、足が金色の光を纏ってる。あれ？私、今、夢を見てるのかしら…?

お姉さんは、何も無い空中から、階段を下りるようにして、床に立った。そして、呆然としている私たちを見て、

「金次、お前が下らぬことを言うから、友人たちが混乱しているではないか。」

何故か、キンジを叱る。

「いや、姉さんのせいだから!!突然、空中を歩いたらこうなるよ!!」  
キンジ、今回ばかりは、あんたが正しいわ。でも、  
「キンジ、私、あんたがお姉さんって言ったの言い訳だと、少し疑って  
たわ。それに、あんまり似てなかったし。でも、分かったわ。この人  
は、間違いなく、あんたのお姉さんね。」

「どういう意味だ!!」

だって、普通に考えたら、こんな出鱈目な存在、理解できないわ。で  
も、キンジのお姉さんって考えたら、その出鱈目っぷりも、納得でき  
るんだもん。

「お前たち、菓子と茶を買ってきたぞ。」

突然、玄関から、コンビニの袋を持って現れるお姉さん。いつの間  
に…、いいえ、考えるのは、やめましょう。

||||||  
||||||  
||||||  
||

—キンジ視点—

姉さんが買ってきた、お菓子やお茶を、皆で分け合いながら、俺は、  
勉強を再開。時折、アリアや理子が教えてくれる。レキは、何故か、し  
ばらく姉さんと、無言で見つめ合った後、俺の横にやってきて、

「キンジさん、私は、貴方に従いますが、貴方があの方と敵対すること  
があつたら、私は、逃げます。」

と言って、部屋の隅に座った。あの数秒の睨み合いで、生物としての  
格付けが済んだのか、レキには、俺にも分かる程度の怯えがあつた。  
そういうや、子どもの頃、姉さんと出くわした犬も、あんな感じだった  
な。そんな姉さんは、爆睡している。俺たちの、勉強の話が聞こえた  
からだ。

まだ、俺が小学生になる前、昼寝しすぎて、眠れない日があつた。眠  
れない俺に、姉さんは、

「寝むれないのか金次、寝れない時は、難しいことを考える。ぐっすり眠れるぞ。」

と言つて、数秒で爆睡していた。俺は、そのアドバイスのせいで、思考の渦に飲まれ、結局眠れなかった。

爆睡する姉さんを見て、そんなことを思い出した。そりゃ、勉強出来る訳ないよな。ちよつと頭使ったら、あれだもん。

結局、姉さんは、アリアたちが帰る頃になつても起きなかった。

「キーくん、じゃーねー、お勉強、頑張るんだぞお。」

「お疲れ様です、キンジさん。」

理子とレキが、玄関を出る。

「キンジ、あんたのお姉さん、いろいろと、分からないことが多いけど…、優しい人ね。それは、分かったわ。お菓子のお礼も伝えなさい。」

アリアは、そう言うのと、

「じゃあね、キンジ、勉強、ちゃんとやりなさいよ。」

「ああ、分かつてる。アリア、お前たちも、ありがとうな。」

3人が見えなくなるまで見送り、部屋に戻る。

水を飲み、勉強を再開しようとした時、姉さんが目を覚ました。

「おはよう、姉さん。もう、夜だけど。」

「ああ、おはよう、お前たちの会話が難しいから、寝てしまった。」

ぐーっ、と伸びをする姉さん。

「友人たちは、帰ったか。見送れず悪かったな。」

「気にしなくていいよ。あと、アリアたちが、お菓子とお茶、ありがとうつてさ。」

「そうか。さて、私も帰るか。」

立ち上がる姉さんに、服の入った袋を差し出すと、

「おお、忘れていた。」

と、袋を受け取る姉さん。玄関まで姉さんを送る。靴を履いた姉さんが、振り返り、

「金次、良い友人を持ったな。大切にしろ。それと、頑張れ。」

俺の頭をガシガシと撫でる。

「それでは、またな。」

去っていく姉さん。俺は、姉さんによって、ぼさぼさになった髪に、手櫛をかけながら、アリアの言葉を思い出す。

分からないことが多いけど、優しい人。確かに、そうだな。  
フフツ、と小さく笑いながら、勉強に戻った。



## 姉と義妹

—金虎視点—

金次の家を訪問した日の夜。自室で、金次に言われた通り、確かに、私は、金一をあまり、構っていなかったと、振り返る。帰省した日も、ほとんど話していないしな。会いに行くべきだろう。

「そうと決まれば、明日、早速行こうとしよう。忘れぬうちにな。」

それでは、寝るとしよう。金次の家で、寝てしまい、眠気はないが、難しいことを考える。8+3は…。

ぐっすり眠った私は、朝食をとり、金一の気を探る。：移動が多いな。仕事でもしているのだろうか？ 仕事の中に会いに行くのは、流石に迷惑になるのではないか？ 帰宅を待つべきなのだろうか？

考えていると、頭が痛くなってきた。やはり、私らしく、正面突破だな。とりあえず、金一の気を探って、会いに行こう。では、着替えるとするか。私は、昨日買った、スーツに着替え、自室を出る。

階段を下りると、私の服装を見た、婆様に声を掛けられる。

「あら、出かけるの？」

「うむ、金一に会いに行こうと思ってな。」

「あら、金一の家の場合、知ってたかしら？」

「いや、知らぬ故、気を探って行こうと思っている。移動が多い故、仕事でもしているのだろう。」

私が、そう答えると、婆様にドンツ、と頭を小突かれる。

「このお馬鹿!! 金一が仕事してるって分かってるのに、なんで行くのかしら？ カナコは、もう少し姉として、自覚のある行動をしなさい。弟に迷惑掛けてどうするの!!」

「いや、迷惑か、とか、帰宅後に行くかと考えたが、考えると頭が痛くなるので、行くことにしたのだ。」

ゴスツツ、ゴスツツ、婆様が、二発連続で拳を叩き込んできた。お、これが、『秋水』という奥義だな。

「その頭には、何が入ってるのかしら？ とりあえず、もう少し考えて行

動しなさい。」

「婆様、考える暇があったら、正面突破した方が早いぞ。」

ゴスツツ、ゴスツツ、ゴスツツ、ゴスツツ……。婆様が、無言で『秋水』を、私に打ち続ける。しかし、面白い技ではあるが、威力が低く、効かぬな。

「はあ、もう、この馬鹿娘は、身体の強さを、少しは頭に回せないのかしら。」

殴り終えたのか、ため息をつきながら、婆様が言う。

「金一の家住所を教えるから、探すのはやめなさい。」

「分かった。」

婆様は、メモ紙に住所を書き、それと一緒に、紙袋を渡してきた。

「今日、届けに行こうと思ってたんだけど、町内会の集まりがあったのを、思い出してね。ちようどいいから、持っていつてちようだい。」

紙袋の中には、料理の入ったタッパーが、数個入っている。

「引き受けた。では、行ってきます。」

紙袋とメモを持ち、玄関を出る。後ろで、婆様が、

「まだ、金一がいらないのに行つてどうするの!!」

と言っているが、早い方がいいだろう。

「私も、土産を持つて行つた方がいいだろうか？」

近所の和菓子屋により、団子と饅頭を買い、メモを見る。字が多いな……。む、乃木神社の近くと書いてある。流石婆様だ。とりあえず、乃木神社まで走り、後は人に聞くとしよう。

人混みの間を縫つて駆け、乃木神社に辿り着いた。さて、ここからが分からない。キヨロキヨロと人を探す。おお、警ら中の警官がいるではないか。

警官に案内され、マンションに辿り着いた。警官が、案内中、こちらを盗み見ていたが、なにか、不審に思われてしまったのだろうか？

金一の、部屋番号は101、これは読めたので、その部屋を探し、インターホンを鳴らす。はて、金一の気を感じぬし、何故鳴らしたのだろうか？そもそも、いないと分かっているのに、何故来たのだろうか？まあ、よいか。どこかで時間を潰そう。

帰ろうとした時、金一の部屋の中に気を感じる。この気は、金一ではない。何奴、と思い、玄関を蹴破ろうかと考えた時、パタパタと、部屋の中から音が近づき、玄関を開ける。

「誰ぢゃ?」

「誰だ?」

玄関から、異国の女が出てきた。

|||||

—パトラ視点—

一通りの家事を終え、休んでおると、インターホンがなった。パタパタとスリッパを鳴らして、玄関に向かい、扉を開ける。

「誰ぢゃ?」

「誰だ?」

誰だとは、お主が、インターホンを鳴らしたのではないか!! 無礼な奴じゃ。そう思い、訪問者を見る。なかなかの美女ぢゃな。まあ、わらわ程ではないがの。

「お主こそ、誰ぢゃ。わらわの家を訪ねておいて、無礼ではないか。」

「お前の家だと…。ここは金一の家ではないのか?」

この無礼者は、そう言うのと、「間違えたか?」といい、部屋番号を見る。

この女、キンイチの名をだしておったな。知り合いのお?…もしや、キンイチの昔の女!?

「ええい、わらわの質問に、答えぬか!! 貴様は誰ぢゃ!! キンイチは渡さぬぞ!!」

「私は、金一の姉だ。渡すも何も、金一は留守であろう。」

…姉とな? 女の顔を見る。…似ておらぬな。それに、留守と分かっておるのに、何故、インターホンを鳴らしたのぢやろうか?

「婆様から、料理を預かってきた。置いてもいいか?」

女が、紙袋をズイツ、と見せ、玄関に置く。なんぢやこれは? 料理

とメモ？メモを手取る。

『パトラちゃん、料理を届けようと思ったけど、用事があったので、家の馬鹿孫に届けさせます。温めて食べてね。 遠山雪津 』

メモを読み、女を見る。本物の姉ぢやと…、つまり、わらわの義姉上!?

とりあえず、義姉上を部屋に上げる。しかし、何故キンイチは、わらわに、義姉上のことを教えなかったのぢや？

「それでぢやの、義姉上。」

「姉上？お前も最近増えた妹なのか？何故妊娠している？」

あれ？もしかして…、

「あのお、義姉上、わらわは、キンイチと結婚したのぢやが…、それは…？」

義姉上は、ガタツと崩れ落ちた。

「け、結婚…だと…。聞いておらんぞ…!!」

あれ？キンイチ、言うておらぬのか!?これは、まずいのではないぢやろうか。

義姉上は、ふふふ、と小さく笑い、

「そうか、つまり、お前は義妹か。成程、子まで既に…。」

「義姉上、挨拶がなかったのは、その…。」

「よい、お前は、私を知らなかったのだから。義妹よ名は、なんと？」

「あ、パトラぢや。」

「そうか、私は金虎だ。」

そう言くと、義姉上は、わらわの手をとり、

「愚弟を、頼む。」

頭下げた。

「こ、こちらこそ、よろしくなのぢや、義姉上。」

わらわは慌てて、頭を上げさせる。

それから、義姉上の土産の、団子と饅頭を食べながら、キンイチの昔話を聞いたり、キンイチとの出会いを話したりしておった。

「む、帰ってきたようだな。」

義姉上が玄関の方に視線をやると。玄関から、ガチャガチャ、と鍵

を開ける音が聞こえてきた。

「キンイチー。」

わらわが立ち上がり、玄関に向かおうとする。あれ？義姉上がおらぬ。玄関から、キンイチの声が聞こえてきた。

「ただい…痛たたたた。」

何事ぢや!?義姉上もおらぬし、キンイチにも何かが起こっておる。慌てて玄関に向かうと。

「頭蓋骨が…割れるっ!!」

義姉上が、キンイチにアイアンクローをかけたまま、腕一本で、空中に吊るしておった。

「義姉上え!?なにをしておるのぢやあ!」

わらわの声に義姉上が、そのまま振り返る。

「なに、少し教育しているだけだ。」

教育…?虐待ではないのかのお?「があああ。」とキンイチの痛みに呻きが響く。

「義姉上!!やめるのぢやあ!!」

キンイチを助けねば、と義姉上の腕にしがみつく。義姉上は、わらわを見て、小さくため息をつき、キンイチを放した。解放されたキンイチは、痛みに蹲りながら、顔を上げる。

「キンイチっ!!」

キンイチにわらわは駆け寄る。報告を、ひとりだけ受けていない、義姉上の怒りは分かる。結婚の報告をしていない、キンイチに非があるのも分かる。ぢやが、何故、大の男を片腕で持ち上げれるのぢやろうか?

「姉さん、結婚報告が遅れていたのは、謝る。だから、パトラだけは…。」

わらわの命乞いをするキンイチ。

「もとより、義妹に手は上げぬ。それに、もう済んだ。金一、私に言うことがあるだろう。」

キンイチが、わらわの肩に手を回し、

「報告が遅くなつてごめん。姉さん、俺、結婚した。」

キンイチの、その手に、わらわの手を添える。

「そうか、良き妻を貰ったな。お前には勿体ないくらいだ。」

義姉上が、キンイチとわらわの頭をポンポンと撫でる。

それから、義姉上と共に3人で夕食を食べる。食事終えた後、キンイチと義姉上が話しておる。わらわも片付けを終え、キンイチの横に座わろうとした時、キンイチがタブレット端末を取り出す。

「姉さん、GⅢから、こんなものが送られてきたんだが…。」

義姉上にタブレットが見えるように、机に置くキンイチ。わらわも覗き込む。動画が再生されるた、これは、義姉上が映っておるな。動画は、義姉上が分厚い鉄板に拳で穴を開けた後、虎の姿をしたなにか、を出し、その鉄板を消し飛ばしておった。その後、空中を走ったりしておったが…。

「おお、あの時のか。」

義姉上が映像を見て、思い出したように言う。

「なんぢや、これは？よく出来た映像ぢやの。義姉上は、映画に出ておるのか？」

キンイチを見て、そう聞くと、キンイチは、苦い顔をして、

「パトラ…、信じられないかもしれないが、これは、実際に姉さんがやったことだ。」

なんぢや、キンイチも冗談が下手ぢやな。

「ふふ、キンイチよ騙されぬぞ。」

「パトラ、俺が帰宅する直前まで、姉さんはどこにいた？」

キンイチが突然、違う話題の質問してくる。

「なんぢや、突然。そうぢやの、わらわの前に座っておったが。それが…。」

わらわも、思い出し、ハツとする。あの時は、いろいろとあって、その疑問が生まれなかった。

「分かったようだな。俺の帰宅と同時に、玄関まで、一瞬で移動した。」  
「つまり、義姉上は、わらわと同じ様な魔女なのぢやな？」

瞬間移動、先程の動画で見せたことも、魔力で、身体能力を向上させたり、魔術によるものと考えると、一応納得できる。あれだけのこ

とを、平然とやれるなら、とんでもない魔力を持つておるな。

「いや、姉さんは、魔女でも、超能力者でもない。」

「は?」

キンイチよ、なにを言っておるのぢや? あんな事、魔術や超能力、それも超一級の能力であつても難しいのぢやぞ。

「姉さん、空中に立つてくれるか?」

そんなわらわを見て、キンイチが義姉上に声をかける。

「構わぬぞ。」

義姉上はそう言うと、階段を上がる様に、何も無い空中を歩き、立つた。

「パトラ、魔力や、それに準ずる力を感じるか?」

「:な、何も感じぬのぢや!! キンイチ、どういうことぢや!？」

訳が分からぬ。魔力も無しに、何故この様なことが:。

「パトラ、姉さんについては、考えたら負けだ:。それが、どんなに有り得ないことでも、『姉さんだから』仕方ないんだ。」

理知的なキンイチが、説明も理解も放棄しておる。キンイチは続けて、

「いいか、パトラ。人類の歴史は、常に強い力を持つ者が勝者となつてきた。その為に、武器、剣や銃が生まれ、その後も様々な兵器が生まれ、今も生まれ続けている。」

「それがどうしたのぢや?」

「その歴史に逆らい、己の身体ひとつ、拳こそが最強と本気で信じて、知性を代償に力を手に入れた怪物が、姉さんだ。」

「知性を代償:~?」

「ああ、姉さんは、宇宙一の馬鹿だ。」

キンイチ、お主の姉ぢやろうに、流星に言い過ぎではないかの? と思っている、

「馬鹿とはなんだ!!」

義姉上が、キンイチに詰め寄ると、キンイチが、

「姉さん、4+7は?」

「キンイチよ、突然難しいことを言うな。眠くなるではないか。」

あ、アホぢや…。

「キンイチ、私は馬鹿ではない。私は勉強が嫌いで、考えるのと覚えるのが苦手で、忘れることが多いだけだ。」

しかも、自覚のないアホぢや…。わらわ、この義姉上と、上手くやっていけるのぢやろうか…。

その後、キンイチと義姉上の、「馬鹿だ」「馬鹿ではない」の言い合いを聞きながら、わらわは思う。

とりあえず、生まれてくる我が子に、悪影響を与えるのだけは、勘弁して欲しいのぢや。



## 最強の虎（姉）と百獣の王（メイド）

—キンジ視点—

姉さんが帰国して、数日が経った頃、リサが俺の家に来て来た。リサ曰く、

「ご主人様に、ご奉仕するのがメイドの努め。」

と、俺の家に乗り込んで来るなり、掃除や洗濯を開始し、今は、格安で仕入れてきた食材を使い、料理を作っている。旨そうな匂いに、鼻腔をくすぐられ、食欲が高まる中、俺は勉強に集中している。

だから、リサの動きに気付けなかった。

突如、俺の左腕に抱きついてきたリサの腕に当たる胸の感触—に、俺のヒス的な血流が高まる。

「おい、リサ、なにを—」

俺がリサを引き離そうと、しがみつくリサに右の腕を伸ばした時、「……、ご主人様つ……助けて……」

リサが、消え入るような小さな声で、呼吸を乱し、俺を抱き寄せる。俺の伸ばした右腕を掴み、自らの胸に押し当てる。ロンドンで、シャーロックの奴が現れた時、いや、それ以上に怯えている。リサは、今にも死んでしまいそうな顔をして、乱れた呼吸を、俺の首筋に吐きかけながら、俺をヒスらせようと、必死に俺に、胸を、体全体を押し当てる。

そんな、リサのお望み通りに、なれてしまったよ。リサの勇者様にね。

ヒステリアモードとなった俺に、気付いたリサが、怯えた表情のまま、俺の顔を見て、

「ごめんなさい……ご主人様……、リサを……、リサを連れて逃げて下さい……!!」

そう、俺に懇願する。おかしい、シャーロックが現れた時でさえ、『守って下さい』と頼んだのに、今回は、『逃げて下さい』なのだ。シャーロック以上の敵……、あらゆる動物を従える、百獣の王を怯えさ



気がつけば、ご主人様に抱きつき、

「…ご主人様つ…助けて…」

自らの主人を危険に晒す、許されないことだと分かっているとしても、僅かな生の希望に、縋りつかずにはいられませんでした。私は、勇者様となった、ご主人様に、

「ごめんなさい…ご主人様…、リサを…、リサを連れて逃げて下さい…!!」

唯一の希望、あの牙から逃れる手段を、伝えます。

「リサ、怯えなくていい、君の隣には、俺がいるだろ。」

ご主人様の、優しい眼差しと、背中を撫でる手の温度に、安堵の心が一瞬だけ、芽生えますが、近づくその気配に、

「ああ、ご主人様…、いいえ、いけません、今、近づいてくるそれは…」

そう、例え、勇者様であっても…、そんな私の思いは、

「リサ、大丈夫だ。君が怯える、？それを、俺はよく知っている。とても美しく、優しい虎だよ。」

ご主人様の言葉に、遮られました。そして、玄関に向かうご主人様。虎…？

それが、玄関の前に立った時、ご主人様が、扉を開けました。私は、部屋の隅で、ガタガタと震えるので精一杯です。

「姉さん、いらっしやい。」

「金次、何故、返對しておる？それと、獣の気を微弱だが、感じるが？」

「中で、説明するよ。」

ガタガタと震える、私の耳に入った、『姉さん』の言葉。

「リサ、こっちにおいで。」

ご主人様の優しい声に、私は恐る恐る顔を上げます。目に映るのは、ご主人様と、美しい女性。この人から、あの恐怖が放たれているのが、分かります。この方が、ご主人様の『姉さん』…、

「おい、金次、あの者は大丈夫なのか？私の前に現れた犬の様になっているが。」

その犬が、気の毒でなりません。ふらりと現れた先に、貴方がおら

れたら、そうなってしまうでしょう。

「子どもの頃、家族で行った動物園、楽しくなかったなあ。姉さんがいると、動物が怯えて出てこなくなるから。」

「お前たちは、よいではないか、兎を触ったりしていただろう。私はそのコーナーに近づくと、動物たちが気絶して、追い出されたのだぞ。動物は懐く方だと思っておったのに。」

「お願いします、動物たちの為にも、動物園なんて行かないで下さい。懐いているではありません、従っているだけです。恐怖と言う名の支配に。」

「リサ、怯えるな、とは言わない。だけど、安心していい、この人は、俺の姉さん。君に危害を加えたりしないよ。」

「そう言つて、リサの手をご主人様が、握つてくれます。」

「獣の気は、お前か。」

「ご主人様の握つて下さっている手を支えに、弱々しく立ち上がり、私は、リサ・アヴェ・デュ・アंक、ご主人様にお仕えしております、メイドです。リサとお呼びください。」

「一礼し、自己紹介をしますが、怯えは消えません。」

「リサは、凄く優秀なメイドで、俺も何度も助けられてる。」

「ご主人様が、私の肩に手を添え、笑顔を向けながら、そんなことを言つてくれます。」

「遠山金虎、金次の姉だ。愚弟が世話になつていようで、感謝する。」

「かなこ様…、」

「金に虎と書いて、かなこと読むんだ。」

「ご主人様が、私に優しく耳打ちしてくれます。『美しく、優しい虎』ご主人様が、言っていた言葉、…そういう事ですか。」

「なんとか、落ち着きを取り戻した私は、料理の仕上げに戻ります。台所にいる私に、おふたりの会話が聞こえてきます。」

「して、何故返對しておる？リサと情事の最中であつたか？」

「姉さん、俺は、不義理を働くことはないよ。」

「そうか、女中とそういう事になるのは、珍しくないと思うがな。」

「姉さんの時代感覚が、江戸時代以前なのは分かったよ。」

かなこ様は、私の味方ですね。

さして、料理が出来ました。

「お夕食が出来ました。」

机にいそいそと料理を並べていきます。かなこ様が、

「しかし、あれだな、返對した弟と、向かい合つての食事はしたくない。」

そう言つて、「喝ッ！」と一声、ご主人様の纏う空気が変わりました。

「姉さん、あんた…。」

ご主人様が驚いた様子で、かなこ様を見ます。まるで、ブラド様の『ワラキアの魔笛』の様に、ご主人様のHSSを解除してしまつたのです。

「では、頂くとしよう。」

何でもないと言うように、かなこ様は手を合わせ、「いただきます。」と言つて食事を始められます。私とご主人様もそれに習い、食事を始めます。

「旨いな。私は、この様に手の込んだ食事は作れんな。」

かなこ様から、お褒めの言葉を頂きました。

「ありがとうございます。かなこ様も料理をなさるのですか？」

「あれは、料理とは言えないだろ。」

ご主人様がそんなことを言います。どんな料理なのでしょう？

「何を言う、ちゃんと焼いてただろう。」

「表面だけ炙つた塊肉を、料理とは言わない。」

「ローストビーフでしょうか？」

私の問いに、ご主人様が、

「違う、本当に一瞬炙つただけで、味付けもしてなけりや、中身はただの生肉だ。」

「でも、食べたではないか。」

「結局、俺と兄さんは、切り分けて、焼き直してただろ。姉さんはそのまま食べてたけど。」

サバイバルでも、されていたのでしょうか？

「そもそも、姉さんは、包丁も使えないんだから、料理は出来ないでしょ。」

「使えないのではない、使わないのだ。包丁よりもこっちの方が切れるからな。」

そう言つて、右手を見せる、かなこ様。

「切れすぎて、台所破壊して、母さんに大目玉食らつてただろ。」

「それは、小学生の頃だ、忘れる。今は、うまい具合に加減出来る。」

小学生の女兒が、台所を手刀で破壊する…、

「どうした、リサ、顔色が悪いぞ。」

かなこ様が、私の顔を見て、そう言います。

「いえ、大丈夫です。おふたりの会話が、あまりにも衝撃的で…。」

「リサ、『姉さんだから』そう思つて、思考の止めないと、精神が崩壊するぞ。」

ご主人様が、そう、私に助言をしながら、スープを啜ります。

その後、

「暴走した大型ダンプカーを、片手で止めたのって、小学何年の時だったっけ？」や「海割ったのは、中学生の時だったよね？」、「道に迷つて、やくざの組ひとつ潰したのは、小学生の時だったっけ？」の様な、おふたりが、懐かしむ様に、昔の記憶を掘り起こしながら、会話をしながら、食事を進めておられます。

その間、私は、ご主人様の助言通りに、思考を停止しながら、おふたりの会話に、相槌を時折、入れながら食事をします。味は分かりませんでした。

食事を終え、片付けも終えますと、そろそろ、帰る頃合いになつておりました。帰り支度をしながら、作り置きしている料理の場所を、ご主人様に伝えておきますと、

「金次、リサ。」

かなこ様が、私たちをお呼びになります。ご主人様とふたりでトコトコと、かなこ様の前に行きます。

「小遣いだ、必要なことに使え。」

そう言つて、私たちに一万円札をそれぞれに渡してこられました。

「ありがとう、姉さん。」

そう言つて、即座に受け取るご主人様。しかし、私はそうも行きません。

「そんな、受け取れません。」

そう言つて、拒む私に、

「遠慮すんな、貰えるもんは、貰つておけよ。」

そう言うご主人様ですが、

「いいえ、リサは、メイドです。お小遣いは——」

「何を言つておる？女中は、家族であろう。家族に小遣いをやってい  
るのだ。気にせず受け取れ。」

私の言葉を遮り、かなこ様がそう言つて、私の手に一万札を握ら  
せます。

「…家族。」

「そうだ、血の繋がりのある家族、それを支える奉公人たちのを含  
めた、もうひとつの家族。日本では、家中と言う時、後者を指す。故に、  
女中であるお前は、私の家族だ。」

ご主人様にお仕えする際、『家族の一員となれるよう頑張ります。』、  
私は、そう宣誓致しました。かなこ様は、それをご存知ないのですが、  
私を受け入れてくれました。

「姉さんが、そんなことを知つてるなんて…、病院に——」

「金次、殴るぞ。」

「ごめんなさい。」

そんなおふたりの会話も耳に入らず、私は一万札を握りしめる手が  
震え、ポロポロと涙が溢れ、零れ落ちていきます。そんな私に、おふ  
たりがギョツとして、

「おい、リサ、大丈夫か。姉さんが怖かったのか？」

「待て、何故、私のせいになるのだ！」

「だって、最初は、ずっと姉さんに怯えていたし。」

私を氣遣われるおふたりに、私は涙の止まらない顔を向け、

「いいえ、嬉しいのです。リサは、ご主人様の家族の一員となれるよう  
にと、ずっと思つておりました。だから、かなこ様に家族と言つて頂

けて、嬉しくて、涙が止まらないのです。」

涙の止まらない顔で、笑顔を見せる私の頭を、かなこ様が撫でてくれます。

「私も、日本に戻り、弟や妹が増え、義妹まで出来た。更に、もう一人、家族が増えて嬉しいぞ。」

かなこ様の言葉で、以前の様な怯えや、恐怖は無くなりました。

かなこ様は、『美しく、優しい虎』、本当に、ご主人様の仰っておられた通りの、素敵な方でした。

|||||

—キンジ視点—

リサが泣き止んだ後、姉さんが、リサを送って、そのまま帰る。と言ってふたりで、俺の家を後にしてから、十数分経った頃、スマホが、電話を告げるべく着信音を鳴らす。この着信音は、アリアか。出て、出なくても怖い相手だ。しかし、出なかった場合、部屋に強襲をかけられるので、仕方なく出ることにした。

「なんだ—」

「遅いわよ、バカキンジ!!私が掛けたら、ワンコール以内に出なさい!!」

「悪かったよ、で、なんだよ?」

適当にアリアのお説教を流す。

「まったく、キンジは…、あんたのお姉さん、今いる?」

「ちよつと前に帰ったけど。」

姉さんに、何の用だ?

「私の直感では、いると思うってたけど、連絡が少し遅かったわね。」  
相変わらずスゲーな、ホームズ譲りの直感。

「姉さんに、なんか用か?」



「あなたのお姉さんに、少し訓練を見てもらいたいの。」

訓練…、アリアが、姉さん直伝の格闘スタイルまで身につけたら、俺の身がもたない!!

「あー、アリア、姉さんは、人にものを教えたり出来ないぞ。驚く程に残念で、ポンコツな脳みそでな、会話が成立しない。だから、やめておけ。」

「違うわよ、緋緋神の力を見て欲しいの。」

「アリア、この間も言ったが、姉さんのあれは、超能力とかそれ系じゃなくてだな。」

「分かってるわよ、バカ。能力じゃなくても、同じ様なことができる人から、感覚とか聞いてみたいのよ。私は、早くこの力を使いこなさなきゃいけないの!!」

藁にも縋るって訳か。

「分かったよ、姉さんに連絡ついた時か、会った時に連絡する。」

「絶対よ、頼んだわよ、キンジ。」

電話が切れる。

「アリアも、あいつなりの目標持って、頑張ってるんだな。」

俺も、頑張らなくては。

俺は、ペンを握り、勉強に立ち向かう。俺も、負けられないんだ。

## 訓練と不穏な言葉

—アリア視点—

緋緋神の力を完全に扱う為、SSRに出入りすることも増えた。それでも、一向に上達する気配がない。少し焦りを覚える私は、キンジのお姉さんに出会った。走って瞬間移動したり、空中を歩けたりするのに、超能力者でもないと言う、理解に苦しむ人だった。だけど、私の直感が、あの人に教われれば、活路が開くと訴える。その直感に素直に従ってみることにした。

スマホが震える、着信先は、キンジね。慌てずに、ふーつ、と深呼吸をして、電話を取る。

「キンジ、あんたから連絡ってことは、お姉さんのことね。」

「ああ、明日でも大丈夫か？」

「問題ないわ、何処に行けばいいかしら？」

「それなんだが、その前に、お前に大切な話がある。午前中に俺の部屋に来れるか？姉さんとは、その後、合流する。」

た、大切な話って…、ウソ…、まさか…、色んな考えが、頭を巡り、顔が紅潮していく。

「おい、アリア、聞こえてるのか、本当に大切な話なんだ。絶対にお前ひとりで来いよ。いいな。」

「…はい。」

そういう事よね…、切れた電話を放り投げ、枕をギュツと抱きしめる。どうしよう、声にならない叫びを、消すように枕に顔を埋め、ゴロゴロと転がる。

しばらく転がり続け、ピタリと止まる、いいえ、あのバカキンジのことだもの、どうせ的外れなことを言ってくるに違いないわ。…でも、指輪貰って時みたいに…。ボフィン、と顔が紅潮する。まあ、とりあえず、明日はひとりで、キンジの部屋に…。悶々とした気持ちを抱いて、眠りにつく。

|||||  
|||  
—キンジ視点—

アリアに連絡した翌日の早朝、起床したての俺の鼻腔を、旨そうな匂いが刺激する。

「おはようございます、ご主人様。朝食の用意が出来ております。」

「ああ、おはよう、リサ。ありがとう。」

俺は、返事をした後、…え、寝起きの脳が覚醒する。

「ちよつと待て、リサ、なんでいるんだよ。」

「ご主人様から、本日の午前中に来いと言われましたので…?」

確かに、今日、リサとアリアを呼び出したが、問題は、そこではない。

「なんで入れたんだよ。」

「かなご様に、合鍵を頂きました。」

リサが、ニツコリと、俺の部屋の合鍵を見せる。ガタガタつ、と合鍵を入れていた棚に駆け寄り、中を見る。…無い。姉さん、何してんの？

「かなご様に、定期的に、ご主人様の様子を見てくれと、頼まれました。」

頑張ります。と言わんばかりに、ぐつと両手を胸の前で握るリサ。更に、続けて、

「かなご様より伝言です。『リサに合鍵を渡したのは、私なので、文句があれば私に言え。』とのことです。」

なんて、恐ろしいことを言うリサ。リサから、この場で、合鍵を取り返した場合、姉さんによる鉄血制裁の後、リサに合鍵が戻る仕組みが、出来上がっている。

「えーっと、リサさん、合鍵を返してくれたりは…」

「駄目です。リサが、かなご様に叱られます。」

はい、詰んだ。一旦、合鍵を取り返すことを諦め、朝食を取る。姉さんが忘れたタイミミングを狙おう。

朝食を終え、食器を洗うリサとコーヒーを啜る俺。指定した時間まで、まだあるな。さて、アリアが来るまで勉強しよう。俺が勉強、リサが、掃除やら家事をこなし、アリアを待つ。

指定した時間の数分前に、玄関を叩く音がする。来たか。リサがパタパタと玄関に向かう。

「お待ちしておりました。アリア様。」

「リサ、なんであんたがいるのよ!!」

あれ、なんか嫌な予感が…

「ちよつと、バカキンジ! どういうことよ!」

ズンズンと、足音を鳴らし、アリアが近づいてくる。

「ま、待て、なんで怒ってんだ!？」

「あんたが、ひとりで来いって、大切な話って…、なのに…、ううっ…。」  
赤くなつて俯くアリア。なんか勘違いしてたのかこいつ？

「ひとりで来いってのは、間宮とかが、つけてこない様に巻けてことで…。」

「あんたって、いっつもそう!! 勘違いさせるようなことばかり言つて!!」

「お前が何を勘違いしたのかは、知らんが、大切な話なんだ。落ち着いてくれ。」

「それで、ご主人様、お話とは?」

リサが、絶妙なタイミングで、合いの手を入れる。

「話すから、アリアも座れよ。」

アリアとリサが並んで座る。

「いいか、これから話すことは、他言無用だ。まあ、姉さんのことなんだがな…。」

「かなこ様の?」「お姉さんの?」

ふたりが、キョトンとした顔で俺を見る。

「ああ、まあ、姉さんのことを、お前たちは知ってしまったからな。」

「なにそれ、お姉さんのこと、知られちゃいけないわけ?」

「察しがいいな、アリア。そうだ、姉さんのことを誰にも言うな。姉さんの存在は、日本の特別機密事項になっている。」

「どういうことでしょうか？かなこ様は普通に出歩いておられますし、海外にも行っておられると、かなこ様本人からも聞きましたけど。」

リサが首をかしげる。

「それは、諦められてるからな。何十人もの武装検事が、姉さんの監視と身柄の確保を試みたが、全部無駄だったんだよ。どんな包囲網だろうが、監視網だろうが、すり抜けて、好き勝手やっちゃうんだよ。姉さんは。」

「武装検事が大人数でも、逃げられるって、本当に人間なの？」  
「分類学上はな。」

アリアが、信じられないという表情を浮かべる。

「上海で戦った、猴。あいつのレーザービームが、貫けなかった、高張力鋼、あれを、最低出力の攻撃で、核シエルターの床ごと消し飛ばすような人だ。動画もある。」

そう言っつて、信じていないアリアに、GⅢから送られてきた、あの時の動画をパソコンで再生する。それを見終わり、  
「分かったか。姉さんは、出鱈目に強い。強いのは、しょうがないんだけど。その力が、世界中で知られると、悪用する奴らとか、狙う奴らが出る可能性が高いだろ。だから、姉さんのことは、他言無用だ。いいな。」

動画を見て、啞然としているふたりに、そう伝える。

「ねえ、キンジ。意味が分からないんだけど。」

「俺も、分からん。『姉さんだから』仕方ないんだ。」

「モ、モーイ、かなこ様は、リサの想像以上に…。」

リサが、途中で言葉が詰まり、プルプルと小刻みに震えている。せつかく怯えがなくなつたのに、ぶり返してしまった。

「とりあえず、お前たちを信頼しているから、伝えたんだ。頼むから、誰にも言うなよ。特に間宮、あいつ、俺が嫌がるって分かったら、言いふらす恐れがある。」

「それって、言いふらすと消されるわよね。」

「武装検事と公安が、乗り込んでくる。後はご想像にお任せします。」

だな。」

「まあ、そうなるでしょうね。」

はーつ、とアリアが、ため息をつき、

「まあ、お姉さんのことを隠さなかつたつてのは、私たちを信頼して  
るつてことみたいだから。私も、その信頼を裏切る様なことはしない  
わ。」

「私もです。ご主人様。」

アリアとリサの口止めに成功した俺は、ひと息つく。

「はーつ、これで、姉さんのことがばれた面子の口止めは終了だな。」

そう言つて、コーヒーを啜る。

「待ちなさい、キンジ。終了つて、理子とレキには、先に話したのね。」

どういふことよつ！とアリアが大噴火。

「ま、待て、理子は口が軽いから優先してだな、レキは、なんとなくタ  
イミングがあつたからでだな…。」

「なんで私が最後なのよつ！」

ヤバい、このままだと、拳銃を抜くぞ。

「し、信頼してたから、アリアを一番信頼してたからだ。」

ははは、と誤魔化しにかかる。アリアは、ボンっ、と赤くなり、

「そ、そう、そういう事なら許してあげる。でも、次からは、私に何で  
も最初に言いなさいよね!!。」

と怒りを収めてくれた。よし、誤魔化し成功。

それから、姉さんが来るまで、アリアとリサを家庭教師にして、勉  
強を進めた。

|||||

—アリア視点—

お姉さんと合流し、事前にチェックしていた、訓練出来そうな廃工  
場に行く。ここなら、夜は、不良の溜まり場になつてるけど、昼間は  
人が来ないし、周りからも隔離されているから、ちようどいいでしょ。

と思つてたけど、さっきの動画みたら、少し、不安ね。

廃工場に入ると、キンジとリサに、周囲の警戒をさせ、お姉さんと向かい合う。

「キンジから、大方の話は聞いたが、要するに、なんとやらの力を見て欲しいと?」

「はい、緋緋神の力で、瞬間移動が出来るんですけど、思い通りに使いこなせなくて…。目に見える範囲だけしか出来なくて。」

「分かった、見せてくれ。」

お姉さんの言葉に頷き、瞬間移動をする。移動した先に、お姉さんも既にいる。

「成程、走っているわけではないな。原理が分からぬ。」

「そうですか、それで、何で私が、移動する位置が分かったんですか?」  
「勘だな。」

「そうですか、と答える。あれ、私の直感って外れたのかな、この人から教われる気がしないんだけど。」

「しかし、見える範囲には移動できるなら、それを繰り返せばいいのではないか?私だって、走っている以上、障害物を避けたり、破壊しなければ進めぬからな。神崎のそれは、原理は分からぬが、結局は、同じことだ、難しく考えるのが悪いのではないだろうか?」

予想外にも、まともな回答を貰えた。

「難しく考えるな…。」

「そうだ、物事は単純明快、分からぬことは、正面突破だ。」

ニヤリとお姉さんが笑う。

「考えるより、使い続け、体に慣らし、身につける方が早いと思うぞ。では、鬼ごっこでもするか。」

「えっ?鬼ごっこ?」

「そうだ、ほら、逃げろ、捕まったら、そうだな…、こうだ。」

「そう言つて、地面を殴るお姉さん。地面がボーリングされた様に穴が開いている。」

「制限時間は、そうだな最初は、三分でいいだろう。金次、時間を計れ。」





言われても、分からない。息を整え、一度やってみる。トンツ、とキンジの前に、移動する。確かに、若干だけど、前よりも違和感なく出来てる気がする。気がするだけで分からないけど。

「何事も実践と、その反復で上達する。たまには、頭を空っぽにして、こういうことをしてみるのもいいと、私は思うぞ。」

私の後ろに、移動してきたお姉さんが、そう言う。私が振り向いて、その顔を見上げると、ニコリと笑う。

「姉さんの場合は、いつでも頭空っぽだけだな。」

キンジが拳骨を落とされる。それを見て、ケラケラと笑う。そうね、たまには、何も考えずに、遊ぶ感覚で、力を使ってみるのもいいかも、子どもの頃、遊びで色んな事を覚えたように。行き詰ってた道が、少し開けた気がする。

「あの、お姉さん、ありがとうございます。少し、道が開けました。」ペコリと頭を下げる。

「金虎でいいぞ。それと、気にするな。私もなかなか楽しかった。」「姉さん、鬼ごっここの相手いなかったからな。すぐ捕まえちゃうから。」

その後、かなこさんが、私のレーザーを拳で打ち消したり、緋緋神の力を使つて、いろいろとした、訓練というより、遊びだったけど、こんなに、思う存分に力を使えることがなかったし、どんなこととしても、かなこさんが打ち消すから、絶対に安全というのも心強かった。

緋緋神の力を存分に使い、疲れた果てた頃。スマホが震えた。

「なによ、理子?。」

「アリアー、女子会しよ。今夜理子の部屋に集合で、よろしくう。」

「ちよつと、いきなりなに―」

ブツツリと電話が切れる。

「まったく、理子ったら、突然女子会なんて。」

「行くのか?。」

キンジが聞いてくる。

「仕方ないから、行くわよ。行かなかつたら、後で色々と詮索されるのもあれだし。」

仕方ない、と疲労感の残る体に喝を入れ、

「かなこさん、今日はありがとうございました。また、機会があったら、お願いします。」

「ああ、気を付けて帰るんだぞ。」

かなこさんに一礼し、帰る。

最初は、どうなるかと思っただけど、曾祖父様譲りの直感は、流石ね。それに、キンジのお姉さん―かなこさん―とも仲良くなれたみたいだし。

体は、疲労感で思いけど、気持ちは、少し軽くなった。

|||||

―キンジ視点―

アリアと別れた後、俺と姉さん、リサの3人も帰宅を開始する。3人で並び、歩いていると、

「おい、リサ。『女子会』とはなんだ。」

姉さんが、先程アリアの発したワードをリサに尋ねる。

『『女子会』とは、女性だけで集まり、お話しをしながら、食事をしたり、遊んだり、とりあえず、女性だけで集まる会と思っただけじゃ。』

「成程、それに、何の意味があるだろう。」

姉さんは、生物学上、女性になるけど、俺たち兄弟で一番『漢』つて感じの人だからな。理解出来ないのだろう。俺も、分からんし。「かなこ様も、一度『女子会』をしてみてはいかがでしょう？百聞は一見に如かずと言いますし。」

リサ、余計なことをっ!!

「そうか、『女子会』か…。」

姉さんの不穏な呟きが、俺の恐怖を駆り立てるのであった。

## 女子会と二次会

—キンジ視点—

俺の嫌な予感は、何故か当たるもので、姉さんの『女子会』発言から、数日後にカナから、連絡があった。

「キンジ、今日、姉さんが奢ってくれるから、食事会をするわ。店と待ち合わせ場所を送るから、来なさい。勿論、クロメートルでね。」

「嫌だ、絶対に嫌だ!!」

「そう、残念だわ、キンジとも今日でお別れになるのね。」

「カナさん、どういうことでしょうか?」

「姉さんが、そちらに行くことになるわ。これが、キンジとの最後の会話になるのね。寂しくなるわ。」

「行きます!! 女装でも何でもするから、それだけのご勘弁を。」

最悪の札を切られたら、折れるしかない。

「あら、よかったわ。キンコも来るから、遠山6姉妹全員集合ね。」

うふふと笑うカナ。6人中3人男ですけどね。まあ、この間の5人中3人よりもまし…なのだろうか。というより、GⅢの奴、こっちに來てたのか。

「じゃあ、キンジ、後でね。」

そう言つて、電話が切れる。その後すぐに、カナから、メールが送られてくる。都内の高級和牛専門店と、最寄り駅が記載されている。和牛と、俺の命の為、仕方ないんだ。そう、自分に言い聞かせ、クロメートル変装セットのダンボールを開く。

クロメートルとなり、待ち合わせ場所に着く。既にかなめとかなで、そして、全ての元凶たる姉さんが、立っている。

「あつ、かなこお姉ちゃん、クロメートルお姉ちゃん來たよ。」

かなめが、俺を見つけて、姉さんに教えながら、俺に手を振る。俺は、ため息をつき、3人に歩み寄る。

「カナさんとキンコさんは、まだですか? 早く店に入りたいのですが。」

これ以上衆目に晒されたくない俺が、そう言うと、  
「もうすぐ着くつてよ、クロメートルお姉ちゃん。」

2人を待つ間、俺たち4人が、行きかう人々の注目を集める。傍からみりや、美女・美少女4人組で年齢もバラバラだし、何かの撮影でもするのかな、とでも思われているのかもしれない。

「ごめんなさい。待たせたわね。」  
「おう。」

そこに、美女2人組（女装）が合流する。ますます注目を集める中、移動を開始すると、それまで無言だった姉さんが、口を開いた。

「しかし、カナは知っていたが、クロメートルにキンコ…。お前たちまでとはな。遠山家の男らしさは何処へ行ったのやら。」

姉さんが、女装3人衆を見て嘆く。俺だつて好きでやつてる訳じゃない。男らしさは…、全部姉さんに行ったんじゃないですかね。

ほぼ貸切状態の店に入り、6人で席に着く。

「それで、なんでこんなことになってるんですか、姉さん？」

『『女子会』をしようと思った。』

男女比が3：3のこの会を、『女子会』と呼ぶ気なのだろうか、この姉は。

「それで、パトラに相談に行ったら、ややこしくなった。私もよく分からない。」

この姉は、大丈夫なのだろうか、主に頭が。自分で企画しておいて、分からないって。

「キンジ、その話は、食事の後にしましょう。折角、姉さんが奢ってくれるんだから、楽しく、美味しく頂きましょう。」

カナが、話題を切り上げる。それと同時に、姉さんに酒、俺たちには、水が運ばれてくる。それで、乾杯し、前菜が運ばれてくる。

「それで、キンコさんは、いつこちらに来たんですか。」

「一昨日だ。急用があつてな。」

「急用？」

「まあ、仕事の話は、後にしようぜ。折角かなが、奢ってくれんだか

らよ。それよりも、姉貴こそ、勉強は大丈夫なのか？」

さつきから、話がことごとく食後に持つていかれるな。姉さんを『姉貴』から『かなこ』に変更されたのは、クロメートルを姉貴と呼ぶからか。

結局、たわいのない会話をしながら、運ばれてくる料理に舌鼓を打つ。姉さんは、店員が心配するくらいには、酒を飲んでいるが、ケロツとしている。

コースの最後、デザートが運ばれたところで、カナが話を切り出す。「キンジ、食後に話すっていつてたわね。今回、姉さんが、事の発端ではあるのだけど、色々ややこしいことになってしまったのよ。」  
「どういうことですか。」

話がさっぱり見えない、俺は、首をかしげる。

「順を追って話すわ。まず、姉さんが『女子会』をすると行って、パトラを誘いに、家に来たの。で、私とパトラが巻き込まれた訳ね。」

まあ、姉さんは友達いなさそうだし、身内を誘うのは、なんとなく想像できる。

「それで、それじゃあ後日改めてって、追いついたわけなんだけど、それからややこしくなってね。」

カナがそう言うって、キンコさんを見る。

「面倒な奴に目えつけられてな、アメリカから、戦略的撤退して、来たんだよ。」

キンコさんが、苦虫を噛み潰したように言う。負けたって言いたくないんだな。

「その、面倒な奴って言うのは？」

「フレディ、フレディ・ジエイソン。」

ぼそりと、キンコさんが名前を口にする。

「誰です？」

「元SDAランク、総合で13位のヤローだ。」

バケモンじゃねえか。

「何をやらかしたんです。」

「何もしてねえ、勧誘を断っただけだ。」

「どういうことだ。首をかしげる俺を見て、カナが、」

「フレディは、S D Aランク、総合13位になる実力者だったけど、その裏で、任務以外での、大量の殺人が発覚したの。すぐに、各国の武偵や、警察が逮捕すべく動いたけど、逃げられたの。」

「んで、追手を殺しながら、仲間を集めてんだよ。恐怖で支配する世界を作るとかほざいてな。」

「吐き捨てる様に、キンコさんが言うので、俺が疑問を口にする。」

「その仲間候補として目をつけられたと？仲間になるわけないのにな？」

「フレディは、自身よりも弱く、それでいて優秀な相手を勧誘をするの、断られても、消せるようにね。でも、キンコは上手く逃げる事ができたのよ。」

「それで、日本に来たんだよ。流石に、あいつ相手に、俺ひとりじゃ、分が悪い。」

「二昨日、家に来たから、匿いながら、作戦を立てたのよ。それがこの会。」

「この『女子会』が作戦？」

「日本に逃げ込んでるのは、バレてるし、フレディは、必ず殺しにくるわ。現に昨日、この近辺で目撃されてる。更に、遠山家の兄弟も顔が割れてるみたいね。だから、この格好になってもらってるのよ。」

「遠山家を狙って来るってこと？」

「かなめがカナに尋ねる。」

「ええ、恐らく。ついでに勧誘をして、誰かひとりでも、仲間になったらそれでよし、ならなかったら殺すって感じでしょうね。」

「無茶苦茶な奴だな。それだけの実力と、自信があるってことだろうけど。」

「カナさん、それで、勝機は？」

「俺が質問する。防衛にせよ、奇襲にせよ、俺ひとりでは勝てそうにない。」

「普通にやり合えば、私と妹たち全員で奇襲しても、良くて相打ち、ま

あ、全滅は必至でしょうね。」

SDAランク、総合13位。父さんよりも弱いが、それに、近い実力者。そうなるだろうな。

「でも、私たち、遠山家に喧嘩を売ったのが、奴の運の尽きね。」

ふふ、とカナが笑い、姉さんを見る。

「あいつ、かなこのことを知らねえ。俺たちを5人兄弟と言いやがった。つまり、あいつは何も知らずに、のこのこと俺たちを追いかける。」

「後は誘導して…、ね。」

カナとキンコが、安心感を持って言う。成程、確かに、父さんよりも弱い奴が、姉さんに勝てるわけがない。でも、

「姉さんが、暴れても大丈夫ですか？」

姉さんのことは、特秘だ。普通に暴れたら大問題になる。

「ええ、そこは大丈夫よ。根回しも済んでるわ。」

「準備が終わったようね。」

カナが立ち上がると、貸切状態だった店内に、数人の男たちがいる。

あの感じ、

「武装検事…」

「そうよ、フレディが日本で発見されて、まだ被害は出てないけど、野放しにしていたら、間違いなく被害が出るわ。」

カナに続き、キンコが、

「ついで、フレディは、世界中で超一級のお尋ね者だ。身柄を抑えて、希望する国に引き渡して、手柄を譲ってやりや、その国の武偵や、政府にデツケエ恩が売れるって訳だ。」

「でも、武装検事も、公安も、慢性的な人材不足だし、負傷者や殉死者は出したくない。フレディ相手だと、武装検事でも、かなりの被害が出るの。」

「じゃあ、なんでここに武装検事が…」

「バックアップってことですか。」

俺の疑問にかなでが答える。

「そうよ、遠山家で身柄を抑える。その時の監視兼、警戒つてわけ。姉さんのことが知られない為にね。それじゃあ、始めましょう。」

カナの言葉の後、ひとりの武装検事が近づいてくる。

「これを。」

俺とキンコに紙袋を渡す。

「着替えてらっしゃい。」

カナがトイレを指す。紙袋の中には、俺たちの服が入っていた。

「女子会は終わり、二次会に行きましょう。」

着替えを終え、遠山家が集結し、作戦の最終確認を終え、

「姉さん、店を出たら、完全に気配を消して、キンジたちに着いてくれるかしら。」

カナが姉さんに指示する。

「分かった。」

カナを先頭に姉さん以外の兄弟が店を出る。カナと妹たちは、タクシーに扮した武装検事の運転する車に乗り込む。

「んじゃ、行くな、兄貴。」

「ああ。」

俺たちが移動を開始し、人混みに入る。俺たちが油断していると見せかけ、見つけてもらうのが、俺たちの任務だ。マバタキ合図でGⅢと会話する。

「掛かったか?」

「ああ、誘導するぞ。」

しばらく、普通に歩き、予定通りのルートを進み、第一予定地点から、尾行に気付いたふりをして、走り出す。

「兄貴、おかしいぞ。あの野郎、作戦に気づいたみてえだ。」

「どういうことだ!!」

「尾行の気配が消えた。」

失敗した!?!?どうする、作戦の地点はもう目の前だ。

「随分と稚拙な作戦だな。思わず先回りしてしまった。」

作戦地点に、顔に火傷の痕のある男が立っている。



「兄貴、避けろっ!!」

GⅢが発砲しながら、叫ぶ。ヒステリアモードではない俺は、訳が分からず、横っ飛びをする。男は、右手に持つナイフで、GⅢの弾丸を弾くのが見える。と同時に、俺のいた場所に、ナイフが飛んでくる。そのナイフはそこで止まり、男の左手に戻る。

「今のは、挨拶だ。殺す気もない、GⅢにトウヤマ・キンジ、俺の仲間になれ。力を持ちながら、正義だ、法律だに縛られていくのか?力を持つ者たちが、支配してやるべきだと思わないか?」

フレデイが両手を広げて、俺たちには問いかける。

「己の欲望のままに生きられる世界、俺と作ろうではないか。」

「お断りだな!!」

俺とGⅢが、フレデイに向かって発砲する。両手のナイフで、弾丸を切り払い、フレデイが笑顔を見せる。

「残念だな。仕方がない、殺すでしょう。」

「残念?そっちが目的だろ。」

GⅢがフレデイにそう言つて、発砲する。

「ふふ、その通りだな。だからこそ、お前たちの稚拙な作戦にも乗つてやった。武装検事とやらを、数十人配備している様だが、俺が気づかないとでも思つたのか?確かに、全員と殺り合うのは、骨が折れるが、お前たちを殺し、逃げる程度であれば、造作もないこと。俺のターゲットになった時点で、お前たちは、終わっているんだよ。」

飛来する弾丸を又しても切り払い、そう告げるフレデイ。武装検事数十人を相手に逃げ切れる自信、そして、殺すと宣言してからの殺気、こいつは、父さんクラスの化け物。元S D Aランク総合13位は、マジみてえだな。しかし、

「終わってる?終わってるのは、お前だ。この作戦に乗り、ここに来た時点で、お前の負けなんだよ。」

俺の言葉に、フレデイが、ピクリと眉をひそめる。

「武装検事どもの位置は、全て分かっている。お前たちを殺すのには、数秒あれば十分だ。それでも、勝機があると…。面白い見せてくれ、この俺に、どう抗う。」

フレデイの言葉に、俺とGⅢが思わず吹き出す。そんな俺らを不気味に思ったのか、フレデイが、一瞬動揺する。

「どうした、恐怖でおかしくなったか？」

「いいや、『見せてみろって』って、ずっとお前の後ろにいるんだ。いい加減気づけよ。」

GⅢが、腹イテエ、と笑いながら言う。その言葉の後、フレデイの肩を、背後にずっといた姉さんが、ちよんちよんとつつく。

「ば、馬鹿な…、いつからいた…。」

フレデイが、びくりと反応し、振り向きながら、驚愕している。

「お前が、ふたりを追い始めた時から、ずっと後ろにいたが？」

なに言ってるんだこいつ、という感じで姉さんが答える。瞬時に、フレデイの顔色が変わる、攻撃姿勢…、いや、違う。

「絶対に逃がすなっ!!」

GⅢが、叫ぶ。一瞬で彼我の戦力差を見抜き、逃亡の選択肢を選ぶあたりは、流石だな。でも、相手が悪すぎるぜ、フレデイ。

「ぐっ!!」

GⅢの叫びと同時に、ゴシヤア、という音と共に、フレデイの身体が、宙に浮く。顎が砕けている。逃げる隙も与えず、姉さんのアツパーがもろに入った様だ。そして、姉さんが、宙に浮いたフレデイに連撃を叩き込む。オラ、オラ、オラ…、と聞こえてきそうなラツシユが、フレデイの骨を砕いていく。

「終わったな。」

GⅢがそう言って、端末を弄る。武装検事たちに連絡している様だ。見事にボロ雑巾となったフレデイが、地面に落ちる。

「死んだのか？」

俺が姉さんに尋ねる。

「逃げぬ様に、手加減して、骨を粉碎したが、死んではおらん。…多分。」

姉さんが、こちらにそう言って、ボロ雑巾となったフレデイに歩み寄る。

「まあ、そいつは、捕まりや、確実に死刑になるんだから、死んじまつ

ても、問題はねえよ。必要なのはフレディ・ジェイソンの死体なんだからよ。」

連絡を終えたGⅢが、殺してしまったか、と心配する姉さんに声を掛ける。

「殺すのは、私の信念に反する。どんな悪人であろうと、私に、殺す権利も資格もない。その判断は、然るべき人物に任せる。」

そう言いながら、ボロ雑巾の脈や呼吸を見る姉さん。どうやら気絶しているが、生きてるみたいだな。ショック死してないし、タフな奴だ。改めて、こいつが、化け物だったと思い知らされる。

数分後、武装検事数人と、カナが現れる。かなめたちは、帰したみたいだな、学校もあるだろうし。

「流石姉さんね。もう二次会が終わっちゃったわね。」

カナが、フレディをチラツと見て、姉さんに言う。

「流石もなにも、お前たちが騒ぐ割には弱かったぞ。加減が難しかった。」

姉さんの発言が聞こえた、武装検事たちがドン引きしている。まあ、姉さんだからね。

武装検事たちが、いそいそとフレディの身柄を抑え、搬送の準備を行う中、ひとりの武装検事が近づいてくる。

「お疲れ様です。ご協力、ありがとうございました。」

物腰柔らかな、若い武装検事が俺たちに、軽く一礼し、そう言う。姉さんと、同じくらいの歳だろうか。

「こちらこそ、突然の出来事に、対応して頂きありがとうございます。」  
カナがペコリと頭を下げる。

「いいえ、こちらにもメリツトの大きい話でしたから。労せずして手柄を貰え、拳句、他国にも恩を売れる。何よりも、抑止力も手に入れた訳ですし。」

若い武装検事が、チラチラと姉さんを見ながら言う。

「それでは、身柄は頂いて行きます。遠山家の皆さんには、後日改めてお伺いさせていただきます。謝礼もありますので、都合の良い日をご

連絡ください。」

カナに、紙切れを渡して、去って行く。謝礼、金欠の俺には、随分と心躍る言葉だな。まあ、あいつの懸賞金に比べたら、子どもの小遣い以下になるんだろうけど。

「それじゃあ、帰りましようか。それとも、三次会でもする？」

カナがいたずらっぽく笑い、俺たちに声を掛ける。

「奢りならな。」

「相変わらず、しみつたれてんな、兄貴。」

GⅢが、俺を小突きながら、言う。

「それじゃあ、今度こそ姉さんの奢りで行きましようか。」

カナが姉さんの手を取り、促す。

「いいだろう、では行くか。」

俺たち4人は、夜の街へ向かう。

「ところで、姉さん。『女子会』の感想は？」

姉さんの隣を歩くカナが、尋ねる。

「二次会の方が、楽しかったな。あれなら、普通に家族との食事の方がましだな。」

そりゃ、ただの家族の食事会だったからな。女装3人いるし。

「そう、三次会も『女子会』にしようかと思って、持って来たけど、いらないみたいね。」

カナが、俺たち兄弟の女装セットの入った袋を、残念そうに下ろす。

俺たち兄弟は、普段の姿で、夜の街を、姉さんとカナの後ろを着いて歩く。途中、姉さんとカナがナンパされたりしながら、手頃な店に入る。大捕り物の後、なんやかんや興奮状態にあった、俺たちアホ兄弟は酒が入り、謎のハイテンションに。結局、何軒か梯子することになり、4姉弟は朝まで、遊び尽くした。

俺は、翌日、二日酔いと、まったく、勉強していない事实に、酷く後悔することとなる。

## 姉を追う者

—キンジ視点—

あの『女子会』から数日後、カナから戻り、長い睡眠を終えた兄さんから、連絡が入った。例の武装検事が、実家の方に来るらしい。兄弟全員集合するから、来いとのこと。謝礼を受け取る為に、俺はウキウキと実家に向かう。

「ただいま。」

実家の玄関を潜る。

「おお、兄貴、来たか。」

GⅢが、出迎える。

「爺ちゃんたちは？」

「昨日から、箱根に旅行中だ、姉貴の金でな。」

姉さんが、割と孝行していることに驚く。まあ、実際は、兄さんがそうさせたんだろうけど。すると、二階から、かなでがトテトテと下りてきた。

「あ、お兄ちゃん様。」

「かなで、何してたんだ？」

かなでが、手に持っているものを、俺に見せる。小学生の計算ドリル。

「お姉ちゃん様と、お昼寝してました。これを、かなこお姉ちゃん様に見せて…。」

「えっ、じゃあ、姉さんまだ、爆睡してるんじゃ…。」

「はい、ぐっすりとお休みです。」

小学一年生の計算ドリルですら、姉さんには難解なのに、かなでの持つ小学五年生の計算ドリルなんて見たら、一瞬で眠りに落ちてしまっているだろう。以前、俺が姉さんを怒らせて、しばかれてた時に、眠らせようと問題言ったら、「知らん」の一言で効かなかったけど。どうやら、殴るモードに入ると、殴るということ以外、考えてないらしく、眠くならないみたいだ。まあ、それはそれとして、

「なんで、姉さんを眠らせたんだ？武検も来るのに。」

「話がややこしくならない様に、俺が、かなでに頼んだ。」

居間から出てきた兄さんが、そう言って、

「とりあえず、居間に来い。」

と、俺たちに指示する。

居間に、姉さんを除く5人が座る。

「全員分かつていると思うが、もうすぐ武装検事が来る。用件は、先日  
の事となつているが、本題は、姉さんについてになるはずだ。」

俺以外が、こくりと頷く。あれ、俺だけ分かつてないパターンだ、これ。俺は、完全にこの間の口止めと、謝礼と言う名の口止め料を貰えると思ひ込んでいた。

「この間の件で、姉さんの評価が、変わっているのか、そのままなのかは、分からないが、一手打ってくるのは間違いない。俺としては、姉さんの自由を奪う様な、内容なら、拒否するつもりだが。」

兄さんが、お前たちはどうだ、と目で語りかける。俺と兄さんは、姉さんが、解き放たれる、メリットとデメリットを分かっている。だから、今の扱いにも、多少の不満はあれど、納得している。しかし、その扱いを悪い方に方向転換された場合―拘束や、完全な隔離等―、どうするつもりか、ということらしい。姉さんを眠らせた理由はこれか。

「そんなの決まってる。断固拒否だ。それで、攻めてくるなら、徹底抗戦、最悪、姉さんに全力で暴れてもらおう。」

そう、滅茶苦茶な姉さんだけど、俺たちの姉さん、家族なんだ。他の都合なんて知ったことか。

「俺も同じ意見だ。」

「私も。」

「私もです。」

全員、意見が一致する。

「分かった、その時は、覚悟を決めろ。まあ、恐らく、姉さんをそんなに扱うことはないと思うが、最悪は想定しておくものだからな。」

そう、それは最悪の可能性。相手も馬鹿ではない、姉さんの怒りを買うリスクは、分かっている以上、下手は打たないはずだ。

「今回は、現状維持、あとは、俺たちへの注意喚起だろう。家族も増え、姉さんを知る者も増えたからな。」

兄さんが、新しい弟と妹たちを見る。

「話は以上だな、確認しておきたいことはあるか？」

「姉さんを起こすタイミングは？」

兄さんに、俺が尋ねる。

「恐らく、睡眠に入った時間から逆算すると、ちょうどいいタイミングで起きてくるはずだが、起きなかった場合は、かなめとかなで頼む。」

「りよーかーい。」

「分かりました。」

かなめとかなでが返事をする。

「そろそろだな、お茶とお菓子の準備を頼む。」

兄さんが時計を見て、そう言つて、玄関に向かい、妹たちが、台所へ向かった。

「すみません、お邪魔します。」

「ご足労いただき、ありがとうございます。」

玄関が開き、武装検事と兄さんの声が聞こえてくる。来たな、兄さんの誘導で、この間の若い武装検事が、居間に入ってくる。

「皆さん、集まって頂いて、ありがとうございます。∴、あれ？遠山かなごさんは？」

頭を軽く下げて、姉さんの不在に気付く。

「ちよつと、色々とあります、今、二階で休んでいます。」

「まさか、体調でもわるいのでしょうか!？」

兄さんのぼかした回答に対して、驚いた様子で、そう言う。その顔は、本気で心配している感じがする。

「いえ、その、ただ、寝ているだけです。末の妹と昼寝をしていたので∴。」

兄さんが、歯切れの悪い返事をする。まあ、アホ過ぎて寝てますとは、言えんわな。

「そうですか、怪我や体調不良ではないんですね。よかったです。」

武装検事が、心底安心した様に、ひと息つく。なんか、姉さんをやたらと氣遣ってるなこの人。

「どうぞ、座って下さい。」

「ああ、すみません。失礼します。」

そいつが座ると、かなめが、お茶とお菓子を持ってくる、それに、礼を言い、全員が座るのを待ってから、

「まずは、先日は、ご協力ありがとうございました。」

座ったまま、頭を下げ、

「ええつと、自己紹介がまだでしたね。私、冷泉為和と申します。武装検事としては、まだ新米ですが、よろしく願います。」

また、ペコペコと頭を下げる。この人、サラリーマン並に腰が低いなあ。武装検事は、プライドが高い人が多いイメージだったから違和感あるなあ。

「それで、この間の謝礼をと来た次第です。」

おお、きたぞ口止め料。

「謝礼ですが、俺は結構です。元は弟が持ち込んだ厄介事、それに協力頂いたわけなので。第一、そんなものがなくとも、一切公言しませんよ。」

兄さんが、そう言う。

「俺もだ、悔しいが、俺が自力で解決出来なかったのが、原因だからな。」

「私も、GⅢ助けてくれたんだしい。」

「私も大丈夫です。それに、食事代も出して頂いてるので。」

みんな無欲だね。貰えるものは貰つとくのが、俺の流儀なので、俺は貰うけどね。

「それじゃあ—」

「ところで、奴の身柄は？」

俺の発言を遮り、兄さんが尋ねる。



「ああ、悩んだのですが、英国に引き渡しました。」

「アメリカじゃねえのかよ。」

少しGⅢがガツカリしている。

「ええ、外交上の機密なので、あまり詳しくは言えませんが、最近、英国で暴れた日本人が…、MⅠ6の、007と喧嘩した人と、負傷させた人がいましたね。前者は、その他にも色々やっちゃったみたいですが。その火消しもありましてね…。ああ、それが全ての理由では勿論、ないんですけどね。」

冷泉は、少し疲れた様な笑みを浮かべながら、そう言う。途中、俺に目を向けながら。たらたらと、冷や汗が流れる。これじゃあ、謝礼下さい。って言えねえじゃねえか。だって、それやったの俺と姉さんだもん。最初から謝礼払う気なかったな、こいつ。

「あのお、俺も謝礼いらないです。」

仕方なく、俺も謝礼を辞退する。

「そうですね、噂通り、遠山家の皆さんは、義の方々なんですね。」

冷泉がニツコリと笑う。先手打つといてよく言うぜ。尽く金運に見放された俺は、今回もただ働きだ。いや、飯代は出してもらってんのか。普段よりはましだな。

「それで、遠山かなこさんの謝礼なんですけど、ご本人がおられません…。」

「いえ、それも結構です。多大なご迷惑をお掛けしていますし。」

兄さんが、そう言う。

「そ、そうですね…。分かりました。」

冷泉が、少しガツカリした様にそう返す。俺と姉さんの扱いが違いすぎませんか？

「さて、もうひとつお話がありました。」

口止め料の話が終わり、冷泉が本題を切り出す。その瞬間から、纏う空気が変わる。ああ、どんなに物腰柔らかかでも、間違いなく、こいつは武装検事だな。雰囲気で分かる、強い、それもかなり。これからの話に対して、拒否・反対はない。そういう無言の圧力がある。

「遠山かなごさんの扱いですが、変更事項があります。まず、彼女の担当者に私が任命されました。前任者の時には、一度も連絡がありませんでした。今回からは、改善をお願いします。」

「すみません、その連絡とは？」

兄さんが、尋ねる。

「ご存知ではありませんでしたか。彼女が、何かしらの行動を起こす際、例えば、海外等へ行く時などは、所在地が分かるように、事前に連絡をして頂くはずだったんです。まあ、そもそも、パスポートを所持していないので、海外に行かれるのは困るのですがね。」

「えっ、姉さんパスポート持って無かったの!!」

俺が驚きの声を上げる。兄さんも声には出さないが、同様に驚いている。当然の様に海外に行ってるから、てっきり姉さん専用のパスポートでも、渡されてると思ってた。何やってんのあの人。

「今までは、渡航許可を日本政府としては、出していなかったもので…。今回から、こちらを用意させて頂きました。」

冷泉がそう言つて、テーブルの上に、スマホとパスポート、更に、分厚い封筒を置く。

「これは、本人に直接お渡しする決まりですが、一応ご家族でも、確認をお願いします。」

兄さんが代表して、それらを確認する。スマホは、最新型で、連絡先に冷泉が既に登録されている。というより、電話以外特に何も機能を入れてない。勿体ないな。パスポートは、パツと見では分からないが、特殊な細工をしているのだろう。中身は完全に偽造してあるし。そして、封筒、これには何故か札束が入っている。

「この金は？」

兄さんが尋ねる。

「それは、前回同様、特別手当です。金銭的困窮から、犯罪組織等に雇われない様にという配慮です。必要でしたら、毎月支給致します。まあ、前任者の時は、最初の支給以外必要なかったようですが。」

無職の姉さんが金を持つてるのはそれが。姉さんはどうせ使わないんだから、俺に支給してくれないかな。

「実質、変更があるのは、担当者だけです。私としては、正直、遠山さんには申し訳なく思っておりまして、改善していける様に努めていきたいと考えています。」

「申し訳なく思うとは？」

兄さんがピクリと反応する。裏で何かしらの取り決めでもあったのかと、疑いを向ける。それを察したのか、

「ああ、違うんです。私個人の感情の問題でして。武装検事になって知ったんです。遠山さんが、政府の圧力で武偵高の入学を拒否されたって。だから…。」

それは、当時、父さんの同僚たちも言っていた。『子どもの夢を潰すのは心苦しい』って、冷泉も同じことを考えたのだろうか。まあ、実際はアホ過ぎて、普通に落ちただけだ。そのことを、冷泉は、知らないようで、

「遠山さん、武偵になるのが夢だって言ってたのに、あんまりですよ。」と、本当に悔しさをにじませながらそう言う。なんか、申し訳ないなあ。あれ、言ってたのに…？

「あれ、冷泉さん、姉さんと知りなんですか？」

俺が、冷泉の発言から生じた疑問を口にする。すると、冷泉が、しまったという顔になる。

「いや、その、た、ただ中学校の同級生ってだけです!!」

両手をバタバタと振りながら、そう言うが、明らかに同様している。「かなこお姉ちゃんの、中学生の時ってどんな感じだったの？」

「私も知りたいです。」

その頃を知らない妹ふたりが、目を輝かせて、冷泉に詰め寄る。確かに、家での姉さんは知ってるけど、学校での姉さんは知らないな。少し俺も気になる。

「その…、遠山さんは、入学時から、とても注目を集める人でして、その、大変魅力的な容姿でしたし、誰とも関わらずに孤高の存在と言いますか、僕みたい人間にとっては、高嶺の花で—」

学生時代の姉さんの話しになった途端、饒舌になる冷泉。なんか、アニメとかゲームの話してる理子に近いな。一人称も『僕』になって

るし。

「もしかして、冷泉さんて、お姉ちゃん様を好きなのでしようか？」

かなでが、冷泉の語りを聞きながら、かなめにぼそぼそ耳打ちする。冷泉に、それが聞こえたのか、

「す、好きとか、そんな、畏れ多いことは…。」

顔を真っ赤にして俯く。その反応を見て、妹たちは、キヤーキヤー騒ぎ始める。俺と兄さんは、

「おい、キンジ。この人、ヤバいぞ。」

「ああ、あの姉さんに惚れるなんて、かなりの変人だ。」

と冷泉に憐みの目を向ける。見た目はともかく、中身を知ってこれなら、救いようがない。

妹たちに質問攻めに合う冷泉をよそに、冷泉の悲しき恋から救うべく、俺たちはGⅢを巻き込み、緊急会議を行う。双方白熱し、喧騒が起こる。

「お前たち、五月蠅い…。」

寝起きの姉さんが、不機嫌な顔で立っていた。姉さんは、眠たげな目で、俺たちを見渡す。その姉さんの姿を見た冷泉が、顔を赤くしてぶっ倒れた。

わーっ、と言って妹たちが、下着姿の姉さんを二階に押していく。

「かなこお姉ちゃん、なんで服着てないのっ!!」

「ん？ああ、寝ている間に脱いってしまったか。」

「お客様も来てるんですよっ!!」

妹たちの説教を受けながら、姉さんたちが退席した。

残された男どもは、倒れた冷泉を見る。

「どうすんだ、これ…。」

|||||

— 冷泉為和視点 —

中学生受験、都内でも最高峰の進学校の試験、その最中、緊張のせ

いか、お腹を下してしまい、模試でも、合格確定だったのに、失敗してしまった僕は、都内の公立中学校に通うこととなった。

入学式の日、憂鬱な気分で校門を潜る僕の横を、ブロンド髪の子が過ぎ去っていく。髪、染めてるのかな、不良なのかも。いや、ハーフだったりするのかもしれない。その時は、その後ろ姿に、そんな、感想を抱いた。

入学式、苗字が冷泉の僕は、体育館の後方に座っていた。ちょうど、真ん中辺りに、先程のブロンド髪が見える。周囲と異なるその色は、大変目立っており、彼女の周囲も、チラチラと見ていた。入学式が終わり、割り振られたクラスに移動する。それぞれが、決められた席に座る中、空席がひとつある。クラスの全員が、その空席をチラ見しながら、各々が、席の前後と会話したりしていた。

ガラガラと、教室の扉を開ける音と共に、担任と、ブロンド髪の彼女が現れる。

「遠山、お前の席はあそこね。」

担任がそう言っつて、席を指し、彼女が頷き、全員の注目を集めながら、席に着く。注文の理由は、遅れてきたことと、髪の色もそうだが、何よりも、その容姿にあった。まだ、幼さは残るが、テレビや雑誌で見るアイドルや女優、そんな、いや、それ以上、そう思う程に美しい。そんな周囲に気を留めることなく、彼女は、黒板を眺めている。それから、自己紹介が始まる。生徒たちが起立し、名前や出身小学校などを言っつていく。そして、彼女の番となった。起立した彼女は、

「遠山金虎。」

そう言っつて、座る。それだけ？と周囲がざわめき、担任が、

「あー、遠山、小学校は何処だった？」

と、質問して場を鎮めようとした。遠山さんは、少し考え込み、

「すみません、忘れしました。」

と、言っつた。ざわめきが大きくなる。

「わ、分かつた。それじゃあ、次の人。」

担任がそう言っつて、無理やり、場を進行させた。それから、ざわめきは小さくなつたが、全員が、遠山さんを気にせずにはいられず、他

の人のことなんて、入ってこなかった。その後、オリエンテーションが終わり、解散となった。それと同時に、一斉に女子が遠山さんに駆け寄ろうとしていた。しかし、彼女は既にいなかった。突然消えた彼女に、騒然となり、教員も総動員で捜索が行われたが、見つからず、家に連絡したところ、帰宅していたそうで、彼女への謎は、深まった。

学校初日、入学式の騒動などどこ吹く風で、遅刻寸前で登校した遠山さんは、朝礼終了後、席を女子と一部の男子に囲まれ、質問攻めに合い、その輪に入っていない僕も、聞き耳を立てる。

「その髪、染めてるの?」

「生まれつき。」

「じゃあ、ハーフ?」

「ハーフ?分からん。」

「なんで入学式の時、遅れてクラスに来たの?」

「迷った。」

「あの後、なんで消えたの?」

「帰った。」

と質問に対して、碌な説明をもらえず、謎が深まっていく。

そんな喧騒も、授業開始のチャイムと、教員の入場によって終了する。教員が自己紹介し、授業が始まる。全員が教科書を開いた数秒後、遠山さんが爆睡していた。教員が起こすが、全く目覚めず、病気を疑われ、保険医が呼ばれる事態となったが、診断は、ただ寝ているだけだった。その後の授業でも眠り続けた遠山さんは、昼休みに目覚め、ひとりで弁当を食べていた。その昼休み明けの授業で、事件が起こった。

いかにも怖そうな教員が、教室に入ってきた。その教員が高圧的な雰囲気を出しながら、授業を開始した数秒後に、遠山さんがまた爆睡した。教員が隣りの生徒に起こさせるも起きず、遠山さんの前に、教員が行き、怒鳴っても起きず、周囲が戦々恐々とする中、教員が遠山さんの頭を何度も叩いた。それでも起きない遠山さんに、怒髪冠を衝いた教員が、遂に拳を遠山さんに振り下ろした。全員が、教員の度を越した怒りへの恐怖と、遠山さんがどうなるかという好奇心に支配さ

れた。

振り下ろされる拳、それが遠山さんの頭に当たる直前で止められる。その拳の付け根―手首―を遠山さんの右手が掴んでいた。それを掴んだまま、左手で目を擦りながら、顔を上げた遠山さんは、

「五月蠅い…。」

と言つて、教員を見た。それと同時に教員から、大量の汗が噴出し、呼吸が乱れ、掴まれた手首を放されると同時に、膝から崩れ落ちた。遠山さんは、ぐーつと伸びをして、ひとつ欠伸をした後、誰もいない教卓を見て、

「終わった?」

と言つて帰り支度をし、教室を後にした。

その事件以来、寝ている遠山さんを起こそうとする者は現れず、クラスでも、誰もが彼女を避ける様になった。いい大学に入って、人よりも少しだけいい生活をする。そんな将来を描いていた僕も、同様に彼女に関わらないようにした。

それでも、彼女の容姿に惹かれる者はおり、他のクラスの生徒や、先輩たちが、彼女に告白し、振られたと言う噂も流れた。中には、遠山さんに強引に迫り、反撃した彼女に気絶させられた先輩まで現れた。それから、遠山さんは、『ヤクザの跡取り娘』なんて噂を立てられて。気が弱く、喧嘩なんてしたこともない僕は、益々遠山さんを避ける様になった。

そんな日々が続く、2年生に進級した僕は、又しても遠山さんと同じクラスになった。だからといって、関係は変わらず、少ない友人と生活を送る僕と、ひとりぼっちの遠山さんは、今まで、挨拶すら交わしたことはなかった。

その日、僕は、酷く後悔していた。

学校が終わり、普段は私服に着替えて通っていた塾に、その日に限って制服のまま行き、ひとりで帰ってしまった。だから、

「おらっ、中坊が粋がってんじゃねえよっ!!」

「これっばちなわけねえだろっ!!」

バキツ、と顔を殴られ、鼻血が出る。帰り道の途中、ガラの悪い男たちに絡まれて、小道に連れ込まれて、カツアゲされていた。武偵制度が導入される程に、治安が悪化した街をなめていた。小道から聞こえる男たちの声に、チラツとこちらを見る人はいるが、立ち止まったり、助けてくれたり、警察に連絡してくれる人もいない。あの人たちからすれば、夜出歩いている中学生の僕も、彼らと同じに見えるのだろう。更に、腹を殴られる。ゲホゲホと咳き込みながら、倒れる。誰か、助けて。そんな思いは届かず、男たちの蹴りが僕を襲う。痛みと恐怖で、涙が零れ落ちる。そんな最中、

「どいてくれ、通りたいのだが。」

女性の声があった。

「なんだてめえ!!」

男たちが振り返る、

「おい、この女、こいつと同じ学校じゃね。」

「かなりいい女だな。大人しくしてたら、優しくしてやるよ。」

ゲラゲラと男たちが笑いながら、そちらに寄っていく。今なら逃げられるかも、そう思っ立ち上がるうとするが、散々蹴られた体が痛み、立ち上がれない。それでも、芋虫の様に地面に這いつくばりながら、逃げようとする僕は、

「邪魔だ。」

その声に思わず振り向く。群がっていた男たちが、倒れており、遠山さんが立っていた。遠山さんは、無様に這いつくばった僕を見下ろす。

「お前、同じ学校の生徒か…、大丈夫か？」

そう言っ、軽々と僕を持ち上げ、立たせる。男たちを倒したことや、僕を持ち上げれることや、色々と言いたいことはあったけど、

「あ、ありがとう、と、遠山さん…。」

ボロボロになった僕は、立たせてもらっても、膝が笑って、がくがくとしながら、遠山さんにお礼を言う。

「ん？私を知ってるのか？」

じつと、僕の顔を見てくる遠山さんに、思わず俯いて、



「う、うん。一応同じクラスだから…。」

「そうか、すまぬが、名前は？歩けるか？」

「れ、冷泉です。」

そう答え、一歩踏み出そうとしたら、力が入らず、倒れる。

「仕方ないな。」

遠山さんがそう言って、僕を抱える。何故か、お姫様抱っこで。

「えっ、えっ…？」

突然のことに驚きと、今の自分を、客観的に見た時の恥ずかしさで、小さく抵抗してしまう。

「あまり動くな、持ちにくくなる。家はどこだ？」

抱えている僕を見下ろして、遠山さんが尋ねてきた。そのきれいな顔立ちに見惚れ、目が合った事の恥ずかしさで、言葉が出ず、五月蠅い程に、自分の心臓の鼓動が、耳に響く。

「おい、黙ってないで答えろ。」

呆然としている僕に、遠山さんが少し強くそう言った。

「ご、ごめんなさい。えっと…。」

彼女に、場所を伝えると、

「分かった。」

そう言って、遠山さんが僕を抱えたまま、小道を出て、街を歩いていく。セーラー服の美少女が、ボロボロの中学生を抱えて歩く姿に、行きかう人々の視線が集まる。当然、その視線は、僕にも向けられる為、顔から火が出る思いだ。そんな視線も気にせず、遠山さんが僕に尋ねる。

「何故、こんな時間に出歩いていたのだ？」

「その、塾の帰りだったから…。それこそ、遠山さんだってなんで？それになんであの場所に？」

「私は、仕事が忙しく、泊まり込みになった父上に、荷物を届けに行ってきただけだ。あの道は、近道だったからな。」

「そうなんだ、お父さんは何してるの？」

「武装検事だ。」

僕の質問に、遠山さんは嬉しそうに答える。武装検事…、『ヤクザの

跡取り娘』の噂とは、真逆の仕事だ。物騒なものには変わりないけど。「私も、高校は武偵高に行つて、ゆくゆくは父上と同じ、武装検事になるのだ。」

目を輝かせて、夢を語る遠山さん。学校では見たこともない、生き生きとした表情だった。

「あの、ここで大丈夫です。もう歩けるので。」

自宅付近にきたところで、遠山さんにそう言う。流石に、この姿を親に見られるのは、恥ずかし過ぎるし、勘違いで、遠山さんに迷惑をかけるのも嫌だった。

「そうか。」

そう言つて、遠山さんが僕を降ろす。

「あの、本当にありがとうございました。」

深々と頭を下げる僕に、

「気にするな。しかし、せめて自衛する力くらいは、つけた方がいいぞ。」

そう言つて、遠山さんが去つて行く。それから、家に帰り、ボロボロの僕を見た母が、大騒ぎしたりしたが、頭の中は、遠山さんの姿と言葉が、何度もフラッシュバックしていた。

翌日になつても、脳裏に遠山さんの姿が映り、爆睡する彼女を盗み見る。本当は、話しかけたかったけど、僕に、その勇気はなかった。

そんな日々が続く、遂に受験シーズンとなる。志望校を書くプリントに、僕は、『東京武偵高校』を第一志望と書いた。

武偵高受験の日、受験者の中に、この2年間、眺め続けたブロンド髪を見かけた。受験生のグループでは、一緒にならなかつたが、筆記は簡単だったし、楽勝だと思つていた。

筆記の後、射撃やら、格闘の試験があり、心が折れかけた。拳句の果てに、模擬戦闘の試験が待ち構えている。何故か、一時中断となっているが、辞退しようかな。そんなことを思つた時、

「おい、聞いたか、ひとつ前のグループにいた、外部受験生の話。」

恐らく、武偵中からの内部受験生たちの会話が耳に入る。

「あのブロンド髪の美人？」

「そうそう、そいつ、模擬戦闘、ひとりで全員倒したらしいぜ。」

「まじか、とんでもない奴が入ってくるな。強襲科の首席候補になるかもな。」

「ちげえよ、全員って、教官たちも含めて全員だ。しかも、最上階からのスタートで、2分以内で終わらせたんだよ!!」

「それって、SDAランクの上位ランカー並なんじゃ…。」

遠山さんだ!! 彼らの言葉を聞くに、どうやら合格確定のようだ。

「武装検事…。」

無意識に口が動く。彼女の夢、この2年間、彼女への思いが募り、それが僕の夢にもなってしまっていた。辞退する、そんな気は失せていた。どんなに無様でも、食らいついてやる。彼女に相応しい男になるた為に。

結果は、ボロボロだった、普通の気弱な中学生として生きてきた僕が、武偵としての教育を受けてきた、彼らに敵うはずもなかった。不合格かも…、そう思い、トボトボと歩く。

「おい、お前、般中出身だろ? いい根性だったぜ。」

男らしい豪快な笑顔浮かべた少年が、僕の肩を掴みそう言う。模擬戦闘で僕を倒した人だ。

「あ、ありがとう。でも、全然ダメだった…、不合格だと思う。」

絶望に満ちた顔と声で答える。

「大丈夫だ、『誰でも合格出来る武偵高』だ、それに、外部生が、そういうことを出来る方が珍しいんだ。気にすんな!」

バシバシと、僕の背中を叩く。

「入学したら、色々教えてやるよ。」

じゃあ、と言って去って行く彼を見送る。彼なりの励ましなのだろうか、落ち込んだ気持ちは戻ることはなく、しよぼくれながらも遠山さんを探しつつ帰路に着く。結局、彼女を見つけることは出来なかった。

後日、武偵高の合格通知書が届いた。落ちたと思いい込んでいた分、僕は舞い上がって喜んだ。高校も遠山さんと同じ学校に行ける。思いを伝えることも出来なかった中学生活、高校では必ず…。

東京武偵高校入学式、並ぶ生徒の中に、遠山さんはいなかった。僕と同様に、彼女を探していた生徒は多かつたらしい。模擬戦闘で残した圧倒的な成績、実際に彼女に倒された生徒たちは、血眼で彼女を探した。自分たちに圧倒的な力を見せた彼女が、不合格なんて有り得ない。しかし、彼女は入学すらしていなかった。名簿のどこにも名前が無かった。

「引き抜かれたんじゃないか？」

誰かがそう言う。

「あれだけ圧倒的な力を見せたんだ、人員不足の武検あたりは欲しがるだろうな。」

その話を盗み聞きしていた僕は思わず、彼らに尋ねてしまった。

「そんなこと、あり得るの!？」

全員が、誰だこいつ?という目で僕を見る。

「まあ、有り得ない話ではないと思うぞ…。」

僕の熱に引きつつもそう答えた。遠山さんは一足先に夢を叶えたのか…。武装検事、新たな目標が定まる。絶対になってみせる。そうして、彼女に認めて欲しい。それから、死に物狂いで武偵高の授業と環境に食らいついていった。入学時の武偵ランクはEだったが、鍛錬と勉強を続け、試験や武偵ランク定期外考査を受け、卒業時にはSランクにまで登り詰めた。教官たちからは、

「才能もあつたが、なによりも狂気にも似た努力で成長した。」

と評価されたが、好きになった女の子を追いかける為に、ここまで出来たのは、自分でも狂気を感じてしまった。そして、東大文Iに合格し、武偵兼大学生として過ごす。そして、遂にその日が来た。武装検事の試験をギリギリで合格し、東京地検特捜部、武装検事の本拠地に入る。教育担当となった先輩が色々教えてくれ、最後に、

「何か聞きたいことはあるか？」

その質問に、武偵高入学以来、胸にしまっていた名前を出す。

「遠山金虎さんは、どこにおられますか？」

その瞬間、先輩だけでなく、周囲にいた武装検事たちも、一斉に殺気を僕に向ける。

「てめえ…どこで知った。新人はまだ、説明を受けてねえぞ。」

言わなければ殺す、言っても殺す。殺気のこもった声で先輩がそう言う。

「えっ。」

どういうことだ!? 彼女は武装検事になっているんじゃないや…

「さっさと言え! まさかここに潜り込むとはな…。」

ガンツ、一瞬で押さえ込まれ、頭に銃を突き付けられる。

「ま、待って下さい。遠山さんは武装検事になってないんですか?!」

「どこでそんな話になったかは知らねえが、今話せば、楽に死ぬ。話さねえなら…、分かるよな。」

さーっ、と血の気が引いていく、彼女を追いかけて7年間頑張った、しかし、彼女はいないどころか、人生の幕を下ろしそうになっている。

「中学校の同級生なんです!! 武装検事に引き抜かれたって聞いたから…。」

「おい…」

先輩が、誰かに声をかけた様だ。それからしばらく、押さえつけられたまま、長い時間が過ぎる。

「間違い、同級生で同じクラスだ。しかも、三年間。経歴の詐称もなかった。」

その声で、拘束が解かれ、殺気も収まる。

「悪かったな。まあ、なんでこうなったかは、すぐに分かる。」

先輩が手を差し伸べ、起こしてくれる。

「どういうことですか?」

「後で新人に、部長から話がある。聞けば分かる。」

部長から、守秘義務や色々と言われたが、先輩の言葉の意味が分かった。遠山さんは武装検事になったんじゃない。彼らが隠さなければならぬ、危険な切り札であった。話が終わり、席に戻ると、先輩がニヤニヤしながら話しかけてきた。

「分かっただろ。しかし、愛しの彼女を追って、武装検事になるとか前代未聞だな。しかも、それがねえ…。」

それから、他の検事たちからもイジられ、僕の彼女への思いは、この場の全員が知ることになってしまった。本人には、告白どころか、7年会ってすらいないのに…。

一年後、遂に僕は遠山さん係に任命された。前任者は引継ぎ後、

「ようやく解放された。ほれ、餞別だ。」

と言って胃薬と頭痛薬を渡してきた。

そして、その時がきた。日本に凶悪犯、フレディ・ジエイソンが侵入したという連絡が、元・武偵庁特命武偵、遠山金一から入った。武装検事も、犠牲を覚悟で逮捕に踏み出そうとした時、彼から、ある策を提案された。上からの許可もあり、それが実行された。そして、それらが終わった時、カナという女装した遠山金一に接触する。その時、遂に彼女を見れた。彼と話しながらも、遠山さんを何度も盗み見てしまった。

遠山さんのお家にお邪魔し、先日のことについて話すこととなったが、彼女はその場にいなかった。体調でも悪いのではと心配したが、寝ているだけらしい。相変わらず、よく寝る人だなあ、と中学時代、いつも寝ていた彼女の姿を思い出す。

それからしばらく、仕事の話を終え、ボロが出た。色々とバレてしまい、彼女の妹たちに質問攻めに合う。場が想像しくなった時、

「お前たち、五月蠅い…。」

遠山さんの声が聞こえた。以前より、少し低くなった声は、大人の女性という感じがする。彼女との再会、追いかけても、追いかけても、すり抜けていく存在が、振り返ると目の前にいるんだ。これまでの8年が報われた気がする。意を決し、振り返った。

何故か、下着姿の遠山さんがいた。8年間恋焦がれた、念願の再会

は、余りにも刺激的過ぎた。彼女の下着姿を脳裏に焼き付け、僕は卒倒した。

## 姉のHSS

—冷泉為和視点—

「—さん。冷泉さん。」

誰か、僕を呼んでいる？肩を揺すられ、瞼が開く。

「……は……？」

僕を心配そうに覗き込む顔が見える。この人は確か…、遠山キンジくん。その隣には、遠山キンイチくん…。そうだ、遠山さんの弟たち…。そこで脳が、機能を回復し、思い出す。

「わあっ、すみません。」

跳ね起きた僕に、

「うちの馬鹿姉が申し訳ありません。大丈夫ですか？」

キンイチくんがそう言う。倒れる直前の記憶、脳裏に焼き付けた光景—遠山さんの下着姿—がフラッシュバックされる。

「だ、大丈夫です。ご心配をおかけして申し訳ありません。」

そう、僕は武装検事になったんだ。この程度で動揺してはいけない。

「あの、鼻血出てますけど…。」

キンジくんがそう言つて、箱ティッシュを差し出す。えっ？鼻の下を触る。べったりと手に血が着く。

「うわっ、なんで？すみません、畳には…、よかつた落ちてない。」

差し出されたティッシュを取ろうとした時、

「起きたか？」

遠山さんが居間に入ってきた。そして、

「む？何処かで会った様な…、鼻血…。」

突然、遠山さんが僕の目の前に現れ、鼻と鼻がくつつく程に近づき、僕の顔を見る。遠山さんが、僕のことを覚えてない事へのショックも感じない程に、彼女の瞳に釘付けになる。そして、脳裏に浮かぶ下着姿…、危ない、また意識が飛びそうになった。何を考えているんだ僕は!!



遠山さんが、鼻血顔…、と眩きながら僕を見つめ続けていると、  
「中学校。」

キンジくんがボソツと言う。その声が聞こえたのか、遠山さんは、  
「鼻血、中学校…。」

と何度か眩き、

「おお、思い出した!! 冷泉だ。お前、相変わらず鼻血を出しているのだな。」

彼女が、僕のことを記憶の片隅ではあるが、覚えていてくれた。その事実の前に、鼻血で覚えられていることなど、些細なことだ。

「覚えていてくれたんですね。」

あれ、何故だろう、涙が止まらない。

「おい、大丈夫か?どこか痛むのか?」

彼女が、僕の涙を見て、キンジくんの持つティッシュを数枚取り、それで、僕の顔を拭いてくれる。鼻血を拭きながら、涙を拭ってくれるせいで、顔は、ぐしゃぐしゃになっているだろう。でも、

「ありがとうございます…。」

嬉しくて、嬉しすぎて、涙が止まらない。何故か、礼を言う僕に、遠山さんは、首をかしげながらも、それを拭い続けてくれる。

「冷泉、本当に大丈夫か?何か悪い病気なのでは?」

遠山さんが、そう言つて、周りの弟・妹たちを見る。

「えーっと、多分大丈夫だと思うよ。」

かなめちゃん、そう答える。

「はい、もう、大丈夫です。ご心配をおかけしました。嬉しくて、思わず…。」

まだ止まらない涙が流れる顔で、遠山さんにそう伝える。

「そうか、私も、久々に会えて嬉しいぞ。」

「忘れてたくせに。」

キンジくんがボソツと言う。ゴン、とキンジくんが拳骨が落とされる。

「忘れてなどいない、ただ、記憶の片隅に閉ざされていただけだ。」

「それを忘れてるって言うんだよ…、ごめんさい、殴らないでっ!!」

遠山さんが、拳を握った瞬間、キンジくんが土下座する。遠山さんは、呆れた様のため息をつき、

「しかし、本当に久しぶりだな。中学校以来だから…、何年ぶりだ？」  
遠山さんが、僕の方を向き、指を折って数えようとしたが、すぐにやめた。

「8年です。」

「そうか、そんな経ったか…、少しは強くなったようだなにより。」

僕の答えに、彼女が、小さく微笑み答える。春の陽射しの様に、眩しくも優しい、その笑みに、雪が溶かされる様に、僕の積みあがった思いが、現れだす。

「遠山さん、僕、中学卒業後、東京武偵高に行つて、武装検事になったんです。」

「おお、凄いぞ。頑張ったのだな。」

遠山さんが僕を褒めてくれる。

「はい、貴女に会うために、頑張りました…。」

その空気が伝わったのか、妹さんたちが、キャー、つと黄色い悲鳴を上げる。さあ、言うんだ、僕…、

「なんだ、私に会う為に？なにか用事でもあったか？」

「はい、伝えたいことがあります。遠山さんがどこにいるのか分かるのに、8年掛かりました。」

さあ、あと一息、言うんだっ！！

「そうか、それは悪かったな。なにぶん結婚の為に、旅をしていたからな。」

…結婚？えっ？どういうこと？どうやら、戸惑っているのは、僕だけではないらしく、キンジくんを除く全員が、言葉の失っていた。キンジくんだけが、頭を抱えている。

「姉さん、どういうことだ!!結婚って、俺たちに黙っていたのか!?というより、あの旅はそんな目的だったのか…。」

キンイチくんが、遠山さんに詰め寄る。

「何を勘違いしている。結婚はまだしていないぞ。相手を探しているのだ。」

遠山さんとキンジくん以外の全員が、僕を見る。これは、チャンスなのだろうか？何故か、キンジくんは、胃まで痛くなっている様だ。大丈夫かな？

「かなこお姉ちゃん、その、まだ、見つかってないの？」

かなめちゃんが、そう尋ねると、

「うむ、まだだ、何処を探してもおらぬのだ。」

「どんな人が好きなんですか？」

今度は、かなでちゃんが、質問する。

「条件は、ひとつだけだ。」

遠山さんの次の言葉を待つ。

「私よりも強い男なら、それでいい。」

そんな人、この世にいないと思う。

「姉さん、無理を言ったらダメだ。」

「無理だろ。」

「無理だな。」

「かなこお姉ちゃん、別の人を探そうよお。」

「私もそう思います。」

みんな、思ったことは同じようだ。

「何故、そう決めつける。何処かにいる筈なのだ。」

「頼む、姉さん、それ以上、見つからないものを、探す旅はやめてくれ。

姉さんの旅は、色々な国と人に、迷惑を掛けて過ぎてるんだ。」

「迷惑など掛けておらんど。様々な場所へ行き、強者と呼ばれる者たちと、

相對しているだけだ。」

「それが、一番の問題なんだよ。頼むから、妥協してくれ。」

「無理だ。私は自分よりも強い者にしか魅せられぬ。」

告白する前に振られた。元SDAランク総合13位のフレディ・

ジェイソンを、手加減しながら、簡単に倒せる彼女よりも、僕の方が

強いなど有り得ない。

「それで、用件とはなんだ？」

「こちらのお渡しを…。」

スマホとパスポート、そして、札束を差し出し、説明する。こいつ

逃げたな、という視線を感じる。告白？振られるのが分かってるのに、するわけないでしょ。それに、これで、遠山さんと連絡出来る様になった、一歩前進だ。そう、一歩ずつ進めばいいんだ。

「必ず、連絡してください。」

一通り説明を終えると、

「使い方が分からぬ。」

と支給したスマホを指す。

「それでは、教えますね。隣りに座ってもいいですか？」

「頼む。」

遠山さんの隣に移動し、座る。なんだかいい匂いがして、くらつとするが、なんとか理性で持ちこたえ、

「まず、――」

使い方を教える、ふたりで並んで、ひとつのスマホを触りながら、言葉を交わす。なんだろう、まるで、恋人同士みたいではないか。

遠山さんへのスマホ講座を終え、帰ることとなった。

「すみません、お邪魔しました。遠山さん、それに、ご家族の皆様も、これからよろしくお願いします。」

遠山兄弟から見送りを受けながら、玄関をくぐり、歩き出す。歩きながら、遠山さんの連絡先の入った、自分のスマホを見つめると、思わず顔がにやける。∴、誰かがつけている？尾行だろうか？警戒しながら、歩みを進めると、

「冷泉さん、待って下さい。」

キンジくんが追いかけて来ていた。

「キンジさん、なにか？あ、もしかして忘れ物してましたか、僕。」

カバンを見ようとすると、

「いや、そうじゃなくってですね。その、俺、大変金に困ってまして。その…」

なんだろう、やっぱり謝礼欲しいとかかな？

「この写真、買いませんか？2千円でいいんですけど…。」

気まずそうな笑顔で、スマホの画面を僕に見せるキンジくん。これはっ  
はっ！！

先程、遠山さんにスマホ講座をしていた時の写真だ!!まさか、撮られてることに気づかなかったとは、いや、あの時は、遠山さんが隣りに座っていたから、崩壊寸前の理性を保つのに精一杯だった。しかし、まさか、キンジくんが、こんなことを言うなんて…

「遠山キンジさん…、この写真を2千円…、なにを言ってるんですか?」

怒りと殺気が混ざった言葉が出る。それを受け、彼は、しまったという顔をする。

「あ、これは、その、冗談でして…」

はは、と冷や汗を流しながら笑うキンジくん。

「そうですよね、冗談ですよね。遠山さんの写っている写真が、2千円なんて。」

そう言いながら、財布を出す。

「そんなに安い訳がないでしょう!!これで、どうですか。足りないなら、下してきます。」

とりあえず、入っていた全額を差し出す。キンジくんは、僕の勢いに引いた様子で、

「あの、そんなに…。その、姉さんがお世話になるので、それじゃあ、これで…」

一万円札を一枚取り、

「その…、画像、送りますね。」

「ありがとう。」

僕のスマホに、僕と遠山さんが隣り合った画像が届く。画像だけ見ると、恋人のようだ。

「それじゃあ、失礼します。」

キンジくんが、軽く一礼し、帰って行く。

「本当に、ありがとう。」

僕は、お礼を言っただけを見送る。こんな素晴らしいものを一万円でくれるなんて、キンジくんはなんていい子なんだろう。僕のボーナス、全てを差し出すつもりだったのに。

画像を見つめると、顔がにやける。おっと、いかん。道端で、こん

なにやけ面していたら、不審者みたいだ。さあ、急いで職場に戻って、仕事を終わらせよう。家に帰ったら、とりあえず、30枚くらい現像して、バックアップも必要だな、ひとつでは不安だ。帰りに電気屋に寄って帰ろう。

ああ、なんて最高の日なんだろう。空でも飛んでしまいそうな心地で、道を歩いていく。

|||||

—キンジ視点—

冷泉と別れた後、実家に戻る道中、思わず声が漏れる。

「ヤバい、あいつはヤバい。」

冷泉の姉さんへの愛。拗らせ過ぎて、変な方向に行っている。あいつ、本当に武装検事なんだろうか？さっきの言動みると、どつちかというと、捕まえられる側に見えてしまう。

「また、変な知り合いが増えてしまった…。」

何故、俺の周りには、変わり者が寄ってくるのだろうか。余計な欲を出さなければよかった。ポケットに突っ込んだ一万円札に後悔が宿る。

「ただいま。」

玄関をくぐる。

「キンジ、何処に行っていた？」

兄さんが尋ねてくる。正直に言ったら、ぶっ飛ばされるのは分かっているのです。

「いや、冷泉に話を聞きに行ってたんだ。武装検事の勉強とか。」

予め用意していた言い訳を伝える。

「そうか、それよりも、緊急の家族会議だ。来い。」

「家族会議？」

「議題は、姉さんの結婚だ。」

ああ、このままだと、一生出来そうにないもんね。  
遠山兄弟全員が、机を囲み、座る。

「まず、姉さん。本当に結婚したいと思っっているのか？」

兄さんが、姉さんに質問する。

「無論だ。」

「分かった、別にそれはいい。問題は…」

そう、実現不可能な条件。

「姉さん、結婚したいなら、その条件では無理だ。」

姉さんよりも強いなんて、もう核兵器と結婚とかになり兼ねない。

…流星に負けるでしょ？

「無理ではない。必ず何処かにいる筈だ。」

「姉貴は、まず自分の強さを、理解する方がいいと思うぜ。」

GⅢが言う。全くもってその通りだ。

「自分の力なら分かっている。私は、まだ弱い。更に強くならなければ。」

なに言っただこの人は。あと、これ以上強くなつてどうするの？  
世界と、戦争でも始めるつもりなのだろうか？あんたのどこが弱いと  
言うんだ？ああ、弱かったですね、頭が。

「金次、お前なにか失礼なことを考えてないか？」

姉さんが、俺を睨む。

「いえ、そのようなことは決してごさいません。姉さんが、どうやっ  
たら結婚出来るか、必死に考えてました。」

勘だけは、異様にいいんだよなあ。頭は弱いのに。

「それで、なにか思いついたのか？」

「いや、それはまだ…」

頭が弱い…、弱い…、そうだっ！！

「そうだっ！！姉さんが、弱くなればいいんだ。」

そう、姉さんが弱いなら、万事解決する。

「キンジ、虎が何故強い分かるか？元から強いんだよ。」

兄さんが、悲しい表情で俺を諭す。そう、この姉は、生まれた時から強い。俺たちの知る一番弱い頃―幼少期―でも、普通に熊を素手で

狩ってくる人だ。

「あつ。」

かなめが、なにか思いついたのか、声を上げる。

「ヒステリアモード、ヒステリアモードだよっ!!」

かなめの声に、

「その手あつたか!!」

兄さんが、合点がいった様子で、手を叩く。そう、遠山に遺伝する体質、ヒステリアモード。男は、強くなるが、女は、弱くなる。姉さんにもそれは遺伝している。しかし、

「弱い姉さんが、想像出来ないんだけど。」

「確かに。」

俺の言葉に、兄さんが同意する。

「しかも、女のヒステリアモードって、『男が守りたくなるような女になって、男心をくすぐるような仕草をする』んだよな…。」

俺は、そう言いながら、そうなった姉さんを想像する。

「なんか、気持ち悪くなってきた。」

「俺もだ。」

兄さんも、同じことを考えていたのだろう。

「お前たち、いい度胸だな。」

姉さんが、パキパキと拳を鳴らしながら、俺たちに近づいてくる。

「待ってくれ、姉さん!!」

「問答無用。」

姉さんの拳が、俺たち兄弟に突き刺さる。

「あと、3発だ。」

姉さんの無情な声が聞こえる。

「あつ、死んだわこれ。」

「安心しろ、遠山の男は、この程度で死にはせん。」

遠山キンイチ・キンジ死刑囚の刑が執行された。

「あの威力で、気絶も怪我もさせずに、的確に痛みだけ与えるって、おかしいだろ。三途の川が見えたぞ。」

「この痛みを幼少期に日常的に受けていたから、俺たちは、今まで生き



てこれたのかもな。」

痛みに蹲りながら、そんな会話をする俺たち。兄さんの言う通り、銃で撃たれるのよりも、遥かに痛いからな。数々の修羅場を潜ってきたが、姉さんの拳より痛いことはなかった。

「でもよお、ヒステリアモードのトリガーって、あれだろ。」

GⅢが蹲る俺たちを無視して、そう言う。ヒステリアモードのトリガー、それは、性的興奮。

「そもそも、かなこお姉ちゃんは、ヒステリアモードになったことあるのお？」

そう、俺たちは、姉さんがヒステリアモードになったところを見たことがない。

「あるぞ、一度だけだが。」

「?!」

俺と兄さんが、驚愕する。いつ?どこで?誰で?全然知らないんだけど。

「私が4歳くらいの時だから、お前たちは、知らないだろうな。」

えっ?4歳?

「あれは、父上にくつついて、武装検事たちの鍛錬場へ行った時だった。若い武装検事たちと組み手して勝っていたのだが、最後のひとりに負けたのだ。」

父さん、4歳の娘に何させてんの。

「負けて、最初は悔しかったのだが、なにやら体の力が抜けて、自分ではない様な感覚になった。そうなってからは、その人に対して、言い表せない感情が生まれたのだ。その時は、分からなかったが、あれが恋なのだと、大人に近づくにつれ理解した。後で、その体の異常を父上に伝えたら、それが『返對』だと教えられたのだ。」

しみじみと語る姉さん。それなら、

「じゃあ、姉さん、その人と結婚すれば?年の差はあるだろうけど。」

そう、それが解決策ではないだろうか。

「いや、その数ヶ月にもう一度挑んだら、普通に勝ってな。それから、その人に対して、そういう感情がきれいさっぱり無くなった。父上に

そう伝えたら、異様に喜んでいたがな。」

父さん、姉さんを溺愛してたからな。それはいいとして、

「つまり、姉さんは、自分よりも強い相手がトリガーだと…。」

「そういう事になるな。」

詰んでるじゃん。長い沈黙に包まれる。

「分かった。姉さん、もう好きにしてくれ。解散。」

兄さんが諦めた。

「お兄ーちゃん、将棋しよー。」

かなめが俺にくつついてくる。

「あ、宿題しなきゃ。」

かなでは、ランドセルを取りに居間を出ていく。

「姉貴、キャッチボールしようぜ。この間の速いやつ、取れるようになりてえ。」

「いいぞ。」

姉さんとGⅢは、庭へ出ていく。

そう、こんな会議、無駄だったんだ。だって、分かったことじゃないか。姉さんについては、深く考えない。だって、『姉さんだから』。

そうやって、思考を停止させていたんだ。それを、今更動かしたところで、結果は見えていたじゃないか。

一度動き出した思考を、再び止める。そして、誓う、もう二度と動かさない。

そうして、遠山兄弟は、無駄なので、姉について、考えるのをやめた。

## ラーメンと腕相撲

—金虎視点—

冷泉と再会した数日後、起きてから、特にすることもなく、暇だったので、庭で正拳突きを繰り返していたら、夜になっていた。

「爺様も、婆様も、寝てしまったか。」

起こしてはいけないな、仕方ないが、食事は外で済ませよう。手早く身支度を終え、家を出る。

寝静まった道を進む、確か近所にラーメン屋があった筈だ。子どもの頃、家族で何度か行った店だ。しばらく歩くと、ラーメン、と書かれた看板が目に入る。

「おお、ここだ。」

見覚えのある店の看板、間違いないだろう。しかし、シャッターがしまつて、『本日閉店しました。』の木札が掛かっている。

「なんだと、今は何時だ？」

ポケットに突っ込んだスマホを見ると、23:50の数字が目映る。こんな時間になっていたのか。しかし、参った。この近辺だと、もう店は開いていない。

「仕方ない、街に出るか。」

道を一気に駆け抜けていく。途中、24時間営業の牛丼屋やらが目に映るが、今はすっかりラーメンの気分になっている。ラーメン屋がありそうな場所、呑み屋街に向かう。

ガヤガヤと騒がしい街に着く。道には、酔っ払いの集団や、客引き、それらを避けながら、ラーメン屋を探す。数店舗あるが、

「何処にするか…」

そもそも、ラーメンを食べるのが数年だし、詳しくもない。醤油に味噌、豚骨に塩…、魚介豚骨や醤油豚骨などもあるようだ。しかし、ここは響きの豚骨だろうか。

「よし、豚骨にするか。」

こういう時は、即決するに限る、悩む程、答えが出なくなる。豚骨

ラーメンの店に足を進めていると、別のラーメン屋に入っていく、サ  
ラーマン2人組の会話が聞こえる。

「やっぱり、メはラーメンだな。」

「普通に食っても旨いけど、メで食うとなんか、いつもより旨いよな。」  
なるほど、メのラーメン。聞いたことはあるが、やったことはない。  
しかし、そっちの方が旨いのだろうか？折角食べるのなら、旨い方が  
いいに決まっている。

「では、酒を飲まなければならないな。」

しかし、呑み屋に入って、ラーメン屋の位置を忘れると困る。

「なにやら分からぬが、目の前の店に入るか。」

それなら、店を出た瞬間に、ラーメン屋が目に入る。そう考え、目  
の前の呑み屋へ行くことにした。

|||||  
|||||  
|||||

—灘視点—

週末の今日、仕事終わり、獅堂に誘われて？みに繰り出したが、男  
くさい居酒屋をはしごして、三軒目、「いい加減、女の子と飲みてえ」  
と言った俺を、獅堂はスナックに連れて行きやがった。そういう事  
じゃねえんだよ。キャバクラとか、クラブとか、他にもあるだろうが。  
店の前でそう言うのと、

「まあ、いいじゃねえか。奢ってやるからよ。」

と面白いやがる。まあ、奢りならいいか。女の子は、明日休みだし、そ  
の時に。そう考え、ふたりで店に入る。

カランカランと、扉を開けると、ベルが鳴り、

「いらっしやいませ。」

スナックのママが、音に反応し、そう言って、カウンターにおしぼ  
りとお通しを置く。まだ、他に客はおらず、俺たちだけみたいだ。

席に着き、獅堂のキープしている焼酎をふたりで飲みながら、時折  
ママを交えながら会話をしていた。一時間経っただろうか、そろそ

る日付が変わろうかという時に、カランカランと、扉が開く音がする。「いらつしやいませ。…あら、ひとりですか？」

入ってきた客をママが見て、そう言う。なんだ常連だろうか？その客を見た獅堂が、間抜けに口を開けている。

「いや、ひとりだ。ここで酒は飲めるのだから？」

少し低音の、若い女の声がある。おお、と思い店の入り口を見ると、ブロンド髪の超美人が立っている。しかも、スーツに包まれた、そのスタイルも抜群だ。こんないい女が、ひとりでスナックに来る。違和感はあるが、そんなのは些細な問題だ。今日一のテンションになる。「ええ、ここはお酒を飲む所だけ…、こういう店は初めて？」

ママがそう言いながら、おしぼりとお通しを、俺の隣の席に置く。ナイスだママさん。

「初めてだ、何の店か分からなかったが、酒が飲めればそれでいい。」俺の隣に座り、おしぼりで手を拭きながら、そう言う女。思わず大きく開いたワイシャツの胸元に目がいく。

「なかなか度胸があるわね。若い女の子が、ひとりでスナックに入るなんて。何飲む？」

ふふ、とママが笑いながら、注文をとる。

「とりあえず、ビールを。この向かいのラーメン屋に行こうと思っていたが、ラーメンはメで食うのが旨いと聞いてな。それでとりあえず、飲もうと思ったのだ。」

なんとも珍妙な理由で入店したらしい。しかし、これはチャンスだな。

「ああ、メで食うラーメンは、格別なんだよなあ。」

俺が、合いの手をいれると、

「やはりそうなのか、私は、メのラーメンをしたことがなかったのにな、今回挑戦してみようと…、ん？」

俺の方を向き、そう言っていたが、何かを見つけたのか、言葉が止まる。しかし、近くで見ると、ますます美人っぷりが分かるな。しかし、この美人さん、どこかで見た気がするな。こんな美人がいんのに、獅堂の奴は、さつきからずつと黙り込んで、俺を壁にして隠れている

し、どうしやがったんだ？そう思っていると、

「お久しぶり。」

美人さんが、獅堂を見て、そんなことを言う。

「なっ!?獅堂、お前、知り合いなのかよ。」

なのになんで黙り込んでんだよ。

「いや、人違いじゃないか?」

獅堂を見ると、顔に、尋常じゃない量の汗を浮かべてそう言う。明らかに怪しい。

「いや、この気、間違いなく獅堂殿であろう。」

「ああ、こいつは獅堂で間違いはないが、知り合いか?」

明らかに、何かしらの異常が出ている獅堂を見て、俺が聞く。もしかしたら、昔の女だったりするのかな?

「二度、腕相撲をしただけが、よく覚えている。今のところ対戦相手としては、暫定一位だからな。」

そりゃあ一位だろうな。獅堂は、金剛力士のモデルとなった仁王の子孫で、常人の256倍の力が出せる特異体質だからな。しかし、なんで腕相撲を…?そう思い、獅堂を見ると、なにかを思い出したのか、右腕を擦っている。

「へえー、俺ともしてみねえか?」

合法的に触れるチャンス。そう思い、右腕をカウンターに置こうとした瞬間。

「やめろっ!!」

獅堂が、俺を止める。

「なんだよ。」

俺が、少し不機嫌に獅堂がを睨むと、

「バカか、死ぬぞ。というより、お前、なんでまだ気付いてねえんだ。」  
なに言ってるんだこいつ?

「GT」

ボソツと俺の耳元で、獅堂が囁く。秘匿名称GT、特別機密：遠山金虎。その資料が頭に蘇る。その顔写真…、

「?」だろ、なんでこんなところにつ!!」

なんか見覚えがあると思っていたが、機密資料かよ。

「遠山さんよお、お前さん、この間、暴れたらしいじゃねえか。」

獅堂が、焼酎を飲みながらそう言う。

「この間…？ああ、あれは金一の作戦通りにしただけだ。暴れてなどおらん。」

遠山かなこも、グラスのビールを一気に飲み干してそう言う。

「普通、元とはいえ、SDAランク総合13位とやり合うことは、暴れたことになるんだぜ。」

獅堂が、呆れた様に言う。元SDAランク総合13位…、この間、武検が秘密裏に逮捕して、英国に引き渡したフレディ・ジェイソンかよ。俺も密かに狙っていたが、正直、一対一だと、勝ち目が薄かった相手だ。

「金一や金三が騒ぐので、どれ程の強敵かと思ったが、がっかりだったな。あれでは相手にもならんな、弱すぎる。逃がすなと言われていたので、仕方なく殴りはしたが、本来ならば、逃げる相手に手は出さんですよ。」

また、グラスのビールを呷り、そう言う。フレディを弱いつて…、噂通りの化け物かよ。こんな美人なのに…。

「逃がすなって言われて、背骨と頭蓋骨以外の骨を全部砕くかねえ。」

「砕くつもりはなかった。思っていたよりも脆かっただけだ。」

怖えよ。死刑が確定しているような野郎だが、少し同情してしまう。

「それよりも、獅堂殿、少しは強くなったか？」

「多少はな、あんたからしたら、相変わらずミジンコだな。」

自嘲気味に獅堂が答える。いや、あんたも十分強いよ。

「そんなことはないぞ、現に腕相撲は、獅堂殿が暫定一位だ。」

「腕相撲の話はやめてくれ。痛みが蘇っちまう。」

獅堂が、右腕を擦りながら、そう言う。

「いや、あの時はすまなかった。少し力を入れてもいい相手が現れ、嬉しくて、加減を間違えた。」

「だからって、折るかよ、普通。」

獅堂は、トラウマが蘇ったのか、また、顔に汗が浮かび上がる。馬鹿力の獅堂を腕相撲で倒すどころか、腕まで折る化け物。獅堂の様子からしても、事実のようだな。獅堂、あの時、止めてくれてありがとう。折られずに済んだ右腕を見つめる。

「どうだろう、久しぶりにやるか？」

遠山かなこが、カウンターに腕を置く。

「安心してくれ、あれから加減は上手くなった。」

いや、あんた、さっき思ったより脆かった、ってフレデイの骨を砕いた話してただろ。

「俺の実力を見るだけでなら、してやる。反撃は勘弁してくれ。」

獅堂が右腕を置く。

「仕方ないが、いいだろう。」

ガシツ、とふたりが手を握る。

「いつでもいいぞ。」

「んじゃ、遠慮なく。」

獅堂が力を込め始め、

「~~~~っ！！！！」

顔が真っ赤になる程に、遠山かなこの腕を倒そうと力を込めるが、ビクともしない。

「っ、はーっ。参った。」

獅堂が息を乱しながら、手を放す。

「確かに、以前よりも強くなっているな。」

「そいつはどうも、ちつとも傾きもしなかったがな。」

そう、遠山かなこの腕は、全く動かなかった。

「私も、日々鍛錬を積んで、強くなってるからな。」

あんたは、これ以上強くなったらダメな気がする。

「おめえさんからも、うちに来いって言ってくれよお。」

完全に酔いの回った獅堂が、遠山かなこに遠山キンジの勧誘を頼んでいる。そういや、姉弟だったな。全然似てないから、忘れてたぜ。

「キンジは、武装検事になるつもりだ。私は、それを応援する。」

「はーっ、人手は足りねえ、事業仕分けで武検の部下扱い…、なんでこ



うなるのかねえ。」

ベロベロになり、愚痴りだす獅堂。

「そもそも、最近の武検の新人にせよ、いや、公安もだな、どつちにしても、あんたを知らない…、名前だけ知ってる奴らは、どこかで舐めてる、自分の強さを過信してんだ…。一回くらい、組み手くらいしてやってくんねえか…。」

限界みてえだな。もう、瞼が閉じかかっている。そりゃあ、焼酎を二瓶開けてるんだ、仕方ねえか。

「考えておこう。」

こっちは、焼酎もビールも、ウイスキーまで、二瓶ずつ開けておきながら、酔った様子さええない。酒まで化け物なのかよ。

「会計を頼む。あと、水を一杯頼む。」

そう言って、俺たち含めた三人分を支払い、獅堂に水を渡す。

「いや、俺の分くらい出すぜ。」

そう言って、財布を出す俺を手で制し、

「それでは、ラーメン代をお願いする。」

そう言って、ふわりと笑う。あれだな、こいつが普通の女だったら惚れてるな。

「おい、獅堂、ラーメン食いに行くぞ。」

俺が潰れてる獅堂を揺するも…、ダメだなこりゃ。

「仕方ない。」

そう言って、軽々と獅堂を俵担ぎする遠山かなこ。

「失礼する。」

そう言って、扉を開け、出ていく。漠らしい後ろ姿だった。

「あー、なんでこんなに旨いんだろう。酒の後のラーメンは。」

麵をすすり、そう言う。

「確かに、普通に食べるのとは、なにか違う旨さがあるな。」

人生初のメラーメン（叉焼大盛り）を食らいつくした、遠山かなこがそう言う。食うの早えな。

「うめえ…、あれ、なんでラーメン食ってたんだ？」

ラーメンをすすりながら、酔いが醒めたのか、獅堂がそう言う。

ラーメンを食い終わり、店を出る。

「なんやかんや、世話かけたな。いつまで日本にいるつもりだ？」

獅堂が遠山に問いかける。

「特に決まっていらない。気の向くままだな。」

羨ましい生活してんな。

「そうかい、まあ、暴れなけりや、それでいいさ。」

「暴れたことなどをないのだが。」

その言葉を無視し、

「そんじゃあ、酒代ありがとよ。」

獅堂が、軽く手を振り帰路に着く。

「ああ、失礼する。それと獅堂殿、あの話、受けることにしたので、よろしく頼む。」

そう言つて、

「灘殿も、今日は楽しかった。」

俺を見て、小さく笑つて言う。

「おお、それじゃあ、またな。」

思わず、惚れてしまいそうな笑顔だった。ダメだ、あんなのに惚れたら、碌なことにならねえ。獅堂に追いつき、

「初めて会ったが、ヤベエ相手だな。敵じゃなくてよかったよ。」

「ホントにな。」

そんな感想を言い合う。

「ところで、あの話つてなんだ。」

獅堂が、そんなことを言う。

「いや、俺が知るわけねえだろ。泥酔するから、そうなんだよ。」

まさか、酔った獅堂の愚痴じゃねえよな……。

酔いの残る帰路、眠気とアルコールの入った頭は、深く考えることを拒否してしまった。

## 虎と東・西洋忍者

—キンジ視点—

「それで、なんの用なんだ？」

いつも通り、連絡もなく突然やって来た姉さんに尋ねる。

「昨日、いや、日付的には今日か。獅堂殿たちと飲んだのだが、お前を勧誘していると聞いてな。」

姉さん、獅堂と知り合いなのか。友達いないと思ってたから、少し意外だな。

「まあ、されてると言えばされてるけど、公安になる気はないかな。今は、とりあえず、大学入って武装検事になるのが目標だし。」

「そうか、それならそれでいい。お前はやりたいことをやれ。悪事以外なら、どうしようも応援している。」

「うん、姉さんありがとう…。」

「さて、もう昼か、早いな。」

えっ？それだけ？本当に何しに来たの？

「昼飯を食いに行くとしよう。金次、お前も来るか？」

「奢り…？」

「奢りだ。来るか？」

「行きます。」

何しに来たのかは分からんが、奢ってくれるならそれでいい。

「では、行くか。店はお前に任せる。」

台場まで出て、街に行く。久しぶりに新都城—アクアシティお台場—のラーメンが食いたくなった。レキに狙撃拘禁されていた時以来だな。店に入ると、

「師匠、いらっしやいませでござる。」

戦妹—風魔—が、エプロンつきのウェイトレス服で俺たちを店内に迎える。そうだった、こいつがバイトしてるんだった。

「師匠、そちらの女性は…？」

風魔が、姉さんを見ながら、俺に尋ねる。どうするか、下手に誤魔

化す方が、めんどくさいことになりそうだな。こいつなら、ベラベラ喋ることはないだろう。

「あー、この人は俺の姉さんだ。いいか、これは絶対に他言無用だ。いいな。」

「師匠の姉上様?!:似てないでござるよ?」

疑った目を向ける風魔。

「風魔、修行が足りないぞ。見た目で判断するとはな。」

「金次、どうかしたのか?」

風魔とひそひそと話す俺に姉さんが近づく。

「武偵高の後輩だった、風魔だ。ここでバイトしているんだ。」

俺が、風魔を姉さんに紹介する。

「乱波か…。弟が世話になっている。」

すぐに風魔が忍びと気付くのは、流石だな。

「ほ、本当に師匠の姉上様でござったか…。しかし、何故故に某が、忍びと?」

「足運び、あと、纏う気だな。」

「某…、まだまだ未熟者と思っておりますが…。」

自信を無くした様に言う風魔、

「風魔、姉さんは相手なら仕方ないんだ。落ち込むな、これから頑張ればいいだろう。」

「師匠…。」

いたたまれなくなり、俺が励まし、それに対し、風魔が目を潤ませる。

「後ろが問えているぞ。」

そんな俺たちに、そんなことを言う姉さん。あんた本当に空気読めないな。

「失礼いたしました。こちらへ。」

風魔が、俺たちを席に案内する。

「じゃあ、俺はチャーシュー麺を。」

「金次、この超壺麺とはなんだ?ラーメンで5000円とは…。」

「挑戦するのも馬鹿らしいくらい大盛りなんだ。やめとく方がいい

よ。」

レキは食ったけどね。

「そうか、ではそれにするか。」

「なんで!？」

俺、やめろって言っただろ。

「それ程の強敵なら、正面突破せねばな。」

あんたの価値観どうなってんの?馬鹿な?ああ、馬鹿でしたね。

「畏まりましたでござる。」

風魔が、注文をとり、厨房へ向かう。

「しかし、べのラーメンを食べた後にラーメンとは。」

「獅堂と飲んだんだ。」

「ああ、公安と武装検事の若手たちに、組み手でもしてくれと頼まれた。」

獅堂、馬鹿なのか?そんなトラウマを植え付けなくてもいいだろうに。恨まれるぞ。

「それ、受けるの?」

「ああ、私も久しぶりに組み手をしたいな。」

公安、武検の皆様、姉がご迷惑をお掛けします。この人が勝手にやったことなので、俺に八つ当たりはしないでね。

「それで、お前も参加するかと思ひ、誘おうかと思つたが、今は勉強の方が優先だろう?」

「はい、そうです。」

受験生でよかったよ。本当に、トラウマの上塗りはもういい。

「お待たせしたでござる。師匠、ご注文の品をお届けに上がったでござるよー。」

ごごとり、とチャーシュー麺を俺の前に置く。そして、

「師匠の姉上様—」

どすんっ。以前も見た、重量感のある壺を置く。

「本当に、大丈夫でござるか…。」

風魔が、不安そうに見る。

「ほう、旨そうだな。では、伸びる前に頂くか。」

パキン、と割り箸を割り、いただきます。と言う姉さん。

「そ、それでは、計測を開始致す。」

全く躊躇も戸惑いもなく、食事を開始すると姉さんに、風魔が、慌ててストツプウオッチを押す。

姉さんは、スープを蓮華で掬い、一口啜る。

「旨いな。」

そう言つて、ズルズルと麺をすすり、具を口に運び、また麺を啜る。間断なく食事を進めていきながら、

「どうした金次、冷めるぞ。」

呆然と見る俺にそう言つて、また食べる。そして、みるみるうちに、麺と具が消えていき。スープだけとなる。

「持ちにくいな。」

そう言つて、壺を片手で持ち上げ、ぐつ、ぐつ。とスープを飲み始め、

「ぐちそうさまでした。」

壺を置き、手を合わせてそう言う。

「5分…。」

風魔が、ストツプウオッチの数字に驚愕する。

「旨かった。…金次、まだ食べてないのか。」

箸を握つたまま、呆然とする俺に、姉さんがそう言つて、俺はチャーシュー麺を啜る。そうだ、姉さんがすることを気にしていたら身が保たない。摩訶不思議、奇々怪々な姉さんを気にしてはダメだ。

「…あああ…。」

風魔が、目の前で起きた怪奇現象に、へたり込む。以前見た、レキどころではなかったからな。そんな風魔を気にもせず

「なんかチャーハンが食べたくなった。」

とチャーハンを頼む姉さん。頼む、後輩をイジメないでくれよ。

結局、俺もチャーハンを頼み、食事を終える。

「会計を済ませて来る。」

そう言つて、席を立つ姉さん。その隙に、

「師匠、師匠の姉上様は、何者でござるか?。」

立ち直った風魔が、若干怯えながら、俺に尋ねる。

「あー、まあ、ここで説明しようもないからな…、今度説明する。ただ、姉さんのことは、さつきも言ったが、他言無用だ。これだけは必ず守れ。いいな。」

説明は後回しにしつつも、釘だけは刺しておく。中途半端に知って、情報漏れたら、風魔の身も危ないからな。

「御意。」

こいつは、口止めが楽でいいな。

「姉さん、ごちそうさま。」

店を出て、姉さんにそう言う。

「気にするな。」

「あのさ、姉さん。さつき言ったた、組み手の件だけど。」

「なんだ、お前も参加するか？」

「そうじゃなくて。」

恐ろしい行事に誘わないでくれよ。

「冷泉さんに、連絡した？」

まあ、絶対してないだろうな。

「してないな。」

ほらね。

「こういう場合も連絡せねばならんのか…、面倒くさいな。」

それ、冷泉に言うなよ。マジで泣くぞあの人。

「その為にスマホ貰ったんだから、活用しようよ、マジで…。」

「仕方ない、面倒だが、後で連絡しておこう。」

「今しなよ。」

「置いてきた。」

携帯は携帯しようぜ、マジで。なんの意味もないじゃん。

「帰ったら、絶対連絡しろよ。そういう約束なんだから。」

「分かった。」

本当に、大丈夫だろうか。この人、すぐ忘れるからなあ。

「では、忘れないうちに帰るか。」

自分でも忘れると思ってるあたり、流石の鳥頭だな。

帰路に着き、ふたりで道を歩いていると、短く響くクラクション、その音の方向に顔を向ける。

「やあ、奇遇だね。トウヤマ、なにしてるんだい。」

ポルシエ911カレラ・カブリオレから、ワトソンが声をかけてきた。なんで姉さんという時に限って、知り合いと会うのだろうか。

「昼飯食った帰りだ。」

姉さんの存在はスルーして、さっさと立ち去ろう。

「金次の友人か？お前は女の友人が多いな。」

俺の考えを一瞬で砕く姉さん。空気読んでくれよ。…待て、なんでワトソンが女だと分かった!?ワトソンが驚いた様に、

「な、なにを言っているのかな？僕は男だよ。そもそも、貴女は誰なんだい？トウヤマと親しいようだけど…。」

そう言いながら、俺に『喋ったな』とマバタキサインを送ってくるので、『喋ってない』と同じく返す。

「いや、男装していても、それくらい分かるぞ。それと、私は金次の姉だ。」

この人の野生の勘はどうなっているのだろうか？

「ト、トウヤマの、お姉さん…。」

ワトソンは、驚きに目を見開き、俺を見てきたので、頷いておく。

「そ、そうか、失礼した。僕はエル・ワトソン。トウヤマの友人で、チーム・バスタービルの衛生武偵だ。」

「遠山金虎だ。愚弟が世話になっている。」

「それと、僕が女であることは、秘密なんだ。他言無用でお願いしたい。」

「分かった。」

あっさりと答える姉さんに、不安を感じたのか、

「あー、トウヤマ、彼女は信頼してもいいのかな？」

ぼそぼそと、俺に耳打ちする。

「安心しろ、約束は必ず守る人だ。たまに忘れてるけど。但し、口を割らせようとしても、絶対に割らないのは保証出来る。」

というより、仮に姉さんを拷問しようにも、その前に返り討ちにさ



れるだろう。

「そうか、義理堅いのはトウヤマのお姉さんらしいな。見た目は似てないけどね。」

似てないのは分かっている。

「それは置いといて、姉さんのことは他言無用で頼む。もし言ったら、お前が女だとバラすし、それ以上に恐ろしいことになる。詳しくは後日説明するから。」

「恐ろしいこと…？どうなるんだい。」

悪戯っぽく笑うワトソン。

「お前が武装検事の襲撃を受ける。」

「トウヤマ…、君のお姉さんはいったい何者なんだい…。」

武検が守る存在と知り、表情が変わる。

「秘密の化け物だ。サイオンを手加減して、ワンパンで倒す程度のな…。」

「007が敗北して、負傷したと情報が入っていた…、確か、『日本人の女』にやられたって聞いてるんだけど…。」

まさか違うよね。という目で問いかけるワトソンに、

「ごめん、それ姉さん。」

はは、と引き攣った笑いを漏らすワトソン。

「MI6が今、彼女について、調査を行っているけど、情報が無いのはそういう事かい。どうやら、008とも接触しているみたいだけど、彼も知らないの一点張りらしい。なにをしたのやら…。」

最強のエージェントナンバー00の8が黙秘を貫くって…、姉さんが、ヤバいことしてないことを祈り、顔も知らない008に心の中で姉に代わり謝罪しておく。だから、俺に八つ当たりはしないで下さい。

「まあ、話が早くて助かる。そういうわけで、姉さんのことは他言無用だ。分かったな。」

「そうだね、僕としても、危ない橋を渡る趣味はないよ。」

姉さんがサイオンを殴っていたおかげ？で、話が早く済んだな。

「トウヤマ、ついでに乗って行くかい？送っていくよ。ああ、勿論、お

姉さんも。」

ワトソンからのドライブのお誘いに、

「ああ、助かる。」

電車代が浮くのはありがたいと、ポルシェに乗り込む俺に対して、  
「私は大丈夫だ、運動がてら走って帰る。」

姉さんはドライブのお誘いを断ったので、俺たちを乗せたポルシェ  
が発信する。

「先日、日本が、フレディ・ジェイソンの身柄をイギリスに引き渡した  
のは、そういう裏があつたんだね。彼を倒したのも…?」

「そうだ、可哀想になるくらいボコボコにされた。」

勝負にすらなつてなかつた。ただ一方的な蹂躪。

「いい判断だつたとは思うよ。日本に007もSDA上位ランカー  
も、容易く倒せる武装検事がいると認識させられたんだ。下手に探り  
を入れれば、返り討ちに合つて、貴重な人材を失うリスクを負うこと  
になる。暫く様子見に徹するしかないからね。」

そういう意図があつたのは、なんとなく分かつていたが、

「あの人、武検じゃないんだよなあ。」

「なっ!?!?どういふことだい…、ああ、公安の方だったのか。」

「いや、ただの無職。」

わけがわからない、という表情で俺を見るワトソン。

「危ねえ!!前、前、前見ろよ。」

「ああっ!?!」

慌ててハンドルを切るワトソン。運転への集中力を取り戻してか  
ら、

「すまないトウヤマ、意味が分からない。彼女のような戦力が、なんで  
野放しになっているんだい。」

「俺も分かんらん。言えることは、『姉さんだから仕方ない』これだけ  
だ。」

すまんワトソン。姉さんを理解できる程、人間やめてないんだ。

「君のお姉さんだろうに。」

「一番近くにいたから分かるんだよ。どう考えても分からないってこ

とがな。」

「なんだいそれ。」

ふふ、とワトソンが小さく笑う。

そこから、姉さんの理解不能なエピソードを話していると、

「トウヤマ、着いたよ。」

ワトソンが、停車させる。

「遅かったな。」

停車したポルシェの前に、姉さんが現れる。

「途中、コンビニに寄って買ってきた。」

そう言っつて、俺たちにコンビニの袋を渡す。まだ暖かい、その中を覗くと、肉まんがふたつ入っている。

「あ、ありがとうございます。」

目の前で起こった怪奇現象に、ワトソンが戸惑いながらも礼を言う。ワトソン、理解しようとするだけ無駄だぞ。

「しかし、やはりヒールを履くと、走りにくいな。いい鍛錬にはなるが。」

姉さんは、自分の履くハイヒールを見ながらそう言う。もうやめて、ワトソンの処理能力が追いつかないから。

「トウヤマ…。」

ワトソンが、困り果てた表情で俺を見る。

「考えるな、肉まん美味いぞ。」

肉まんを差し出す。そう、姉さんについて考えるだけ無駄なんだ。

あー、肉まん美味いなあ。

「うん、美味しい…。」

「それは良かった。では、私は帰るとしよう。」

姉さんが、俺たちに背を向け、一瞬でその場から消える。

「トウヤマ…、お姉さん消えちゃったけど…。」

「いつも通りだ、気にするな。」

さて、ワトソンへの口止めは大丈夫みたいだし、後は風魔だな。まあ、後でメールでも入れて予定しよう。



## それぞれの災難

—冷泉為和視点—

デスクワーク中、ひと息つく為にコーヒを口にし、ふう、と息を吐く。事務処理は嫌いではないが、こうも長くパソコンと書類に向き合うと、体が凝り固まる。ぐーっと伸びをすると、パキパキと背中が鳴る。

「さて、もう一息だな。」

パソコンに向き合う前に、気合いを入れるべくスマホを見る。先日、キンジくんから、一万円で譲って貰った画像—僕と遠山さんが隣り合う—を見ると、気合いとやる気が高まり、頬が緩む。エナジードリンクなんかよりも遥かに効く。こんなに素晴らしいものを、一万円で譲ってくれたキンジくんには、今度お礼をしよう。

緩んだ頬を引き締め、パソコンに向き合い、作業を再開する。カタカタとキーボードを打ちながら、考える。遠山さんにスマホを渡してから数日が経ったが、未だに連絡がない。忘れているのだろうか。もしかして、僕に連絡したくない、とか思われていたらどうしよう…。ネガティブな思考に陥る。確認の為に、彼女の所に行くのはどうだろうか。いや、連絡がないからと直接訪ねるのは、流石に気持ち悪かられる。

キーボードを打つ手が止まる。いかん、工作中だ。余計なことは考えるな。あれ、でも僕は、遠山さんの担当なのだから、これも仕事なのでは。そうだ、仕事という名目で何時でも会いに行けるし、監視しただっていいんだ。こうしちやいられない、今すぐ彼女の元に行かなければ。スマホを手に取り、立ち上がろうとした時、スマホが震える。この着信音は!!

「遠山さん、どうしました。」

裏返りそうな声をなんとか抑え、平静を装う。

「一応、連絡しておこうと思ったのだが—」

なんだろうか、海外に行くとかかな? そんなことより、電話越しに

聞こえる遠山さんの声に脳が溶けそうだ。

「武装検事と公安の者たちと組み手をしようと思っっている。」

「えっ、なんですかそれ!？」

溶けかけた脳が復活する。何故、公安までそんな恩恵に与ることが出来るのだ。

「先日、公安0課の獅堂殿と飲んでな。その際に、最近の若手は腑抜けているから、気合を入れてくれと頼まれたのだ。」

公安0課（元だが）の獅堂さん、あの人か、凄い筋肉の。特殊体質なんだっけ？なかなか素晴らしい提案をしてくれた。でも、そんな話聞いてないぞ。もしかして、本当に、飲みの席で話しただけなんじゃ…。しかし、遠山さんと飲みに行っていたというのは…、とりあえず、絶対に許さないリスト入りは確定だな。

「なるほど、お話は有難いんですけど、それって上層部に連絡いってないと思うんですよ。僕の方から、上に確認してみますね。場所の確保とか、参加者の予定とかの調整もあるので。」

「そうか、分かった。」

遠山さんの声のトーンが少し下がる。組み手、楽しみにしてたんだな。上司のデスクを見る。よし、今なら暇そうだ。

「えーっと、ちよつと確認してから、再度連絡しますね。」

そう言っつて、電話を切る。さて、遠山さんが楽しみにしている組み手だ、なんとしても開催してみせる。

「今、お時間大丈夫でしょうか?」

デスクで、資料に目を通してしている上司に声をかける。

「なんだい冷泉くん?」

資料から視線を外し、僕の方を見る。

「先程、遠山金虎さんから連絡がありました。」

「なんだって、それは凄い。今まで一度もなかったのに。君の熱意を買って担当にして、正解だったみたいだね。」

嬉しそうに頷く上司。理想的な上司だよなこの人。ここで一番強い人でもあり、凄いなあ。

「それで、なんと言っていたのかな?」

「はい、元公安0課の獅堂さんと会った際に、武装検事と公安職員への組み手、稽古を依頼されたそうで、それをやって頂けるそうでした。」  
上司の笑顔が凍る。あれ、こんなに素晴らしいことなのに、なんでちよつと嫌そうなんだろうか？

「獅堂くんがねえ…、君は金虎ちゃん―失礼、遠山金虎さんの強さを理解しているかい？」

「はい、一応は。ただ、実際に戦ったことなんてないので、知っているのは、話と映像だけです。」

多分、映像も遠山さんの噂も、僕が一番詳しい自信がある。

「そうだよね、金叉くん…ああ、金虎ちゃんのお父さんね。実際に彼女とやり合ったのは、彼がいた時までだからね。若い人たちには、いい経験になるかもしれないね。ただ、凄くトラウマを植え付けられる人たちも出るんじゃないかな。」

「4歳で武装検事を倒してたんですよ。」

噂で聞いた話だ。彼女の父親、遠山金叉さんが、当時4歳の彼女を連れて来て、若い武装検事相手に組み手をやらせていたらしい。

「よく知っているね。流石担当者だ。そう、自分は強い、と自信を持って武装検事になった若者たちが、たった4歳の幼児に負けた、正確には連戦の最後のひとりに負けたんだけどね。」

「負けたんですか!？」

そんな、遠山さんが負けたなんて…

「まあ、ほとんど相打ちだったけど、その時彼女は、初めて組み手をやったわけだし、基本的なこと知らない4歳児が、武装検事と連戦して勝ち続ける方がおかしいんだけどね。」

そう言つて、コーヒを口にする。

「その数日後に、金叉くんに基礎的なことを教わつてからリベンジした際は、圧倒的な強さで、全員を蹂躪してたけどね。」

虎に翼を与えてしまったね。と言い、また一口コーヒを啜る。

「そのせいで、若い武装検事たちが、自信を無くしてね、大変だったよ。でも、そのおかげで強くなつたとも言えるかもしれない。」

「私も、一度遠山さんと組み手をしてみたいと思います。」

とりあえず、自分ひとりでも参加する。そう意思表示をする。

「いい機会と考えるべきなのかもしれない。今、超能力者たちも多く日本に入ってきて来ているみたいだし、武装検事たちのレベルアップは必要だね。」

「では。」

「分かった、僕の方から上に報告しておくよ。恐らく大丈夫だよ。結果は連絡するから。」

「ありがとうございます。」

深々と一礼する。やったぞ。遠山さんは喜んでくれるだろうか？

後日、上司から、開催日と場所について連絡を貰った。そして、武装検事だけでなく、公安も参加が認められていた。自由参加ではあるが、若手はほぼ強制参加になっている。あと何故か、獅堂さんも強制参加になっていた。

その日時を遠山さんに連絡するため、スマホを手取る。

|||||  
|||||  
|||||

—リサ視点—

これは、あまりよろしい状況ではないのでしょうか。

私の隣には、かなこ様。それと向かい合う様に、理子様と、その後輩たちである島麒麟様と火野ライカ様。そして、その真ん中に倒れて動かない風魔陽菜様。

なによりも、かなこ様に向けられた銃口。かなこ様の存在が知られるのはマズいですね。ご主人様に連絡した方がよろしいでしょう。

携帯を取り出し、ご主人様に連絡をします。

こんなことになってしまふ、数時間前。私は、ご主人様の部屋で、家事をこなしておりました。ご主人様は、風魔様にかなこ様についての説明をしています。その説明も終わり、私も家事が一通り終わりました。そんな時に、私の携帯にかなこ様から着信があります。



服を買いたいが、よく分からないので来てほしい、というかなご様  
のお願いに従い、そちらに向かうことにしました。

「ご主人様、かなご様のお買い物のお手伝いをして参ります。」  
そう伝えます。

「あー、姉さんが迷惑かけて悪いな。よろしく頼む。」

そう言うご主人様に一礼し、部屋を出ました。

かなご様に指定された場所に向かいますと、既にかなご様はその場  
所でお待ちでした。2人組の男性に声を掛けられています。ナン  
パでしょうか、かなご様の容姿だけででしたら、致し方ありませんね。  
「かなご様。」

男性たちをあしらうかなご様に、声をかけて駆け寄ります。

「リサ、来たか。失礼する。」

かなご様がそう言うって私の方に、歩みを進めます。

「ちよつと、待ってよく。」

「今来た子も可愛いじゃん。リサちゃんって言うんだ。」

2人組の内、ひとり、かなご様の手を掴み、もうひとりが、私の  
方へ向かってきます。可哀想ではありますが、この人たちは儂い犠牲  
となるのでしよう。

「私の家族に手を出すな。」

身内と認めて頂いている私でさえ、震え上がる様な殺気を放ち、2  
人組にアイアンクローを決め、持ち上げます。

「リサ、大丈夫か？」

ふたりの男性を軽々と持ち上げながら、そう尋ねられ、

「はい、リサは大丈夫です。なので、それ以上は…。」

そう答えると、

「失せろ。」

そう言うって、2人組を放り投げて、私に歩み寄られます。

「煩わしい奴らだ。では、行くか。」

「お待たせして、申し訳ございません。」

「構わん、こちらが急に呼び出したのだ。礼を言う。」

そう言うのと、

「スーツ以外の服を買えと言われたが、よく分からぬ、案内と、品定めを頼む。」

私の行動を待たれます。

「はい、では、案内とお手伝いをさせて頂きます。」

私を家族と言つて下さる、貴いお方に相応しい服を選びます。そういう意気込みを込めて、元氣よく答えます。

かなこ様の依頼は、動きやすく、大人らしい服装で、スカートは嫌とのこと。何店舗かをはしごし、ストレッツチ性のジーンズやパンツと、それに合うシャツや、上着を選びます。最後の店舗で選定をし、かなこ様が会計を済ませます。

店を出ると、かなこ様が、

「さて、買い物も済んだな、もういいだろう。少し待っている。」

そう言つて、荷物を私に渡して、一瞬で姿を消します。どうされたのでしょうか？荷物を抱えて、待ちます。その数秒後に、流行りのスイーツ店から知った顔ぶれが、現れます。理子様を先頭に、島様に火野様。放課後、一緒に遊ばれていたのでしょうか。私を見つけたらしい、理子様が声を掛けてきます。

「おー、リサじゃん、なにしてるの。」

左手に、飲み物を持ち、右手を振りながら私の方へ向かって来られます。

「リサ先輩ですの。」

「お疲れ様です。」

後輩のおふたりも一緒にこちらへやって来ます。

「リサ、どうしたのその荷物？服？」

理子様が、私の抱える袋を覗きながら、尋ねてきます。それに、「かなこ様と買い物に来てまして…。」

後輩のおふたりに聞こえないように、理子様に答えると、纏う雰囲気が一瞬変わり、

「マズいな。」

そう呟き、後ろのおふたりの元に下がります。状況を察してくれたように、私から離れようと動いてくださります。

「あー、リサは今忙しいみたいー」

理子様が、おふたりにそう言っている途中で、

「待たせたな。」

右手になにかを持って、突然現れます。マズい、というようにかなこ様を見た理子様の表情が曇ります。間に合いませんでしたか。

「風魔っ!!」

火野様が、かなこ様が掴んでいる、見慣れた武偵高のセーラー服に自称丁髷のポニーテール…、風魔様ですね。それに反応します。風魔様は、かなこ様の移動速度に耐えられず気を失っておられる様子です。

「む、気を失ってしまったか。乱波故、耐えられると思っていたが、悪いことをしたな。」

そう言つて、風魔様を掴む手を放すと、ポトリと風魔様が、地面に倒れます。

「風魔から離れろっ!!」

火野様が、銃を取り出し、かなこ様に向けます。恐らく、かなこ様が風魔様に危害を加えたと思い、激昂されているのでしょう。しかし、マズいことになりましたね。かなこ様の存在は秘匿せねばならないのに、この状況は、最悪でしょう。かなこ様に被害を及ぼすことは、この場の全員でも不可能ですが、それだけ強い存在が記憶に残らないわけがありません。

ここは、事前にご主人様に連絡をすべきでしょう。そう思い、携帯を取り出しますと、理子様も、小さく頷きます。同じく意見のようですね。すぐにご主人様に電話を発信します。コール音の最中、ガシヤンという音と共に、

「街中でそんなものを出すな、危ないではないか。」

かなこ様が、火野様の背後に立ち銃を払い落としていました。

|||||

—火野ライカ視点—

理子先輩の誘いで、麒麟と一緒に？華街で遊んでいた。可愛らしいふたりなら、相応しいであろう店に何軒か入店し、服やアクセサリーを見る。そんな、ふわふわな改造制服を纏うふたりを見て、可愛いなあ、と惚けてしまう。

「喉渴いたく。」

理子先輩の声に、麒麟も

「私もですの。」

と続き、流行りのドリンクショップに行く。その店を出ると、

「おー、リサじゃん、なにしてるの。」

理子が、手を振って歩き出す。その方向に、リサ先輩がいる。メイド服風に改造されたセーラー服を身に纏う先輩は、複数の袋を持ち、立っている。大量に買い物したんだな。

「リサ先輩ですの。」

「お疲れ様です。」

理子先輩の後ろから、麒麟と共に挨拶する。

理子先輩が、リサ先輩に近づき、会話を交わすが、聞こえなかった。

「あー、リサは今忙しいみたいー」

理子先輩が振り返り、こちらへ歩み寄りながらそう言っていると、  
「待たせたな。」

ブロンド髪の女性が突然現れる。165cmある私よりも高い身長に、大きな胸。そして、身に纏うスーツ。大人の女性だろう。そして、右手掴んでいるもの…、その姿に、

「風魔!!」

同級生が気を失い、セーラー服の襟を掴まれたている。その女は、なにかを呟き、ポトリと風魔を地面に落とす。

「風魔から離れろっ!!」

仲間をやられた怒りから、感情が高ぶった私は、銃を取り出し、女に向ける。慌てた様子でリサ先輩が携帯を取り出す。援軍を呼んでくれるのだろうか。正直、さつき一瞬で目の前に現れた時点で、只者ではないのは分かる。時間を稼ぎつつ、風魔を助ける。そんなことを

考えていると、ピシッ、と銃を握る右手に痛みが走り、銃が地面に落ちる。

「街中でそんなものを出すな、危ないではないか。」

真後ろから聞こえる声、目の前にいた筈の女が立っている。

「クソッ!!」

背後の女に得意なCQCを素手で仕掛けるが、軽くあしらわれる。次元が違う。本能が刺激される。天地がひっくり返ろうと勝てない、女からそんな余裕を感じる。その為、一切反撃もない。

「センスはいい。しかし、速さも力も足りないな。あと—」

私の攻撃をあしらいつつながら、そう言い、

「はあ?」

ガツクリと膝から崩れ落ちる。なんだ今の、私は死んだのだろうか。とんでもない重圧が襲ってきて、力が抜ける。

「胆力も足りんな。この程度の気で膝を折るとは。」

気?…今のは攻撃でも何でもなく、殺気を放っただけなのか。次元が違うとか、そういうレベルではない。絶対に戦つてはいけない相手だ。

「お姉様っ!」

崩れ落ちる私を見て、麒麟が叫ぶ。そして、パン。女に向け、発砲してしまった。

「だから、街中でやめろと言っているだろう。」

撃たれても表情ひとつ変えずに、そういう女。麒麟が驚愕し、目を見開いている。

「何者ですの…。」

麒麟に恐怖が宿る。

「全く、お前たち武偵高の生徒だろう。蘭はどんな教育をしているんだ。」

そう言うと、カンッ、という金属とコンクリートがぶつかる音がする。女の手から、麒麟の放った弾丸が落とされた。弾丸をキャッチしていたのか。だから、麒麟が驚愕し、怯えるわけだ。遠山キンジ先輩、退学したらしいから元先輩だけど、が弾丸を掴めると噂を聞いたが、

実際に見るのは初めてだ。

「はい、そこまでー。」

理子先輩が、麒麟の銃を下ろさせて、間に入る。

「峰、こいつらはお前の友人か？」

「ぶーっ、理子って呼んでよお。」

むうっ、と膨れる理子先輩。知り合いなのか。

「この子たちは、後輩だよ。仲間をやられたと勘違いしちゃったみたいなの、かなこさん、ごめんねえ。」

可愛らしく謝る理子先輩。

「風魔の友人か、確かに、状況だけ見れば私が悪いな。すまなかった。」  
かなこさんと呼ばれた女が、私に謝る。勘違い…？

「うーん、師匠…、はっ!!ここは!？」

風魔が目覚める。リサ先輩が介抱していてくれたらしい。

「起きたか、速度を出し過ぎたようだ、悪かったな。」

かなこさんが、風魔に歩み寄る。

「か、かなこ殿は悪くないでござるよ。某が未熟であっただけのこと、お見苦しいところを見せて申し訳ないでござる。」

風魔も知り合いだったのか、どうやら私の勘違いで間違いないらしい。  
い。

「あの、すみませんでした。てつきり風魔を襲ったと思って…。」

「気にするな、こちらも紛らわしかったのだ。身体に異常はないか？」

「は、はい、大丈夫です。」

本当に、攻撃はしなかったようで、怪我もなにもない。あの時、殺気に当てられて、脱力しただけのようだ。

「そうか、よかった。しかし、お前は蘭に手ほどきを受けたか？戦い方が似ている。」

蘭？もしかして、蘭豹先生のことだろうか。

「蘭豹先生のお知り合いですか…？」

「私の弟分…、いや女だから妹分と言ったところか。武偵高の教員になったと聞いたが。」

妹分…、戦妹ってこと？つまりこの人は、蘭豹先生の戦姉なのか。

「はい、蘭豹先生には、よくして頂いてます。」

「あいつが教員とは、想像もしていなかったが、上手くやれているようだな。しかし―」

かなこさんが消えて、一瞬にして私の目の前に立つ、

「まだ、指導が甘いな。」

額に突き付けられた人差し指、実戦なら、今の一瞬で死んでいた。

「身体能力は悪くない、鍛錬次第でまだまだ伸びるぞ。」

「トン、と軽く額を突き、そう言う。」

「かなこさん、蘭豹と知り合いなんだあー。」

ムフフと、悪そうな笑みを浮かべる理子先輩。

「まあな。お前たち、少し待っている。」

「そう言つて、姿を消す。」

「待たせた。風魔、腹が減っているのだろう。先程の詫びだ。」

数十秒後に現れ、パンやおにぎり、お茶の入ったコンビニの袋を風魔に差し出す。

「あ、かたじけないでござる。」

おずおずと風魔がそれを受け取る。かなこさんは、リサ先輩の抱える荷物を受け取り、

「失礼する。行くぞリサ、風魔。」

立ち去ろうとする。そんな彼女に聞きたいことは山ほどある。でも一番気になるのは、

「すみません、あの瞬間移動は何ですか？」

私の質問に振り返り、

「走っているだけだが。」

「そう言つて、ふたりを従えて去って行く。」

走っているだけ…？あり得ない、そんな人間やめた存在がいるのか…。蘭豹先生なら知っているのだろうか、彼女のことを…

「あんまり深入りしない方が、身のためだと思うよおー。」

私の考えをよんだように、理子先輩が言う。

「世の中には、知らない方がいいこともあるし、知ってはいけないこともあるからねえー。」

ゾクリと背筋が凍る。彼女は後者、そう言っているんだ。  
「でもお、蘭豹にカマかけるのはオツケーかな？面白そうだし。」  
また悪い笑みを浮かべる理子先輩。そうだな、蘭豹先生にとりあえ  
ず、聞いてみるか。

|||||  
|||||

—蘭豹視点—

ゾクツと悪寒が走る。

「なんや、急に寒気が。」

「なんだ、風邪か？お前でもひくんだな。」

綴がそう言う。

「どういう意味や、あと風邪ちゃうな、なんかこう…」

そう、嫌な予感がする。よく分からないが…

「んじや、酒だな。」

「せや、酒や!!飲むでえ。」

酒やな、そう、酒が切れたんや。そう信じることにした。



## それぞれの裏側

― 獅堂虎巖視点 ―

デスクワーク中、上司から書類を渡される。俺だけでなく、全員に。「なんだ？」

渡されたA4用紙を見る。

『武検、公安合同強化訓練』

という表題。それだけなら、まあいい。しかし、続く文字に胃が痛み始める。

『特別講師 遠山金虎』

訓練じゃねえだろ、これじゃあ、トラウマ製作所だ。開催日時、場所、そして、

「自由参加とはいえ、若手は強制参加かよ。」

可哀想に…不参加を決め込んだ俺は、三式班の部下たちを見る。

「珍しい催しであるな。しかも、発案者が…。」

大門坊が、資料に目を通して俺を見る。

「ええ、以外ですね。」

可鷓韋がそう答え、俺を見る。待て、お前たち、何故俺を見る。

「この間言ってた引き受けるって、これかよ。獅堂、余計なこと言いやがって。」

灘がそう言う。この間…まさかこの前あいつと飲んだ帰りのあれか？

「なあ、灘…俺、酔って何言ったか覚えてないんだが…。」

「おめえが、一回くらい若手と組み手してくれ、って頼んでたよ。」

俺、そんなこと言っちゃってたの!?

「だからなんですな。」

可鷓韋が納得した様に言う。どういうことだ？

「獅堂さん、ちゃんと最後まで読みました？」

俺の疑問を感じ取ったのか、そう尋ねてくる。不参加決め込んで、最後まで読んでなかったな。再び目をA4紙に落とす。最後の行で、



「姉さんの事を説明するのは、お前の安全の為でもあるから、しっかりと聞けよ。」

「御意。」

それから、師匠から姉上殿の説明を映像を交えながら受ける。：特別機密、格好いい響きでござるな。忍者っぽい響きでござるよ。しかし、

「つまり、姉上殿の事を不用意に話すと、某が、武検や公安に消されるよ…？」

「そうなる。だから、絶対に話すな。何かあったら俺に連絡しろ。いいな？」

「御意！」

しかし、師匠の説明と映像を見る限り、見た目からは、想像できない規格外な人物でござるな。師匠が言っているのだから、間違いないのでござろうが、少し疑問が残る。本当に、そんなに強い人物が存在するのでござろうか？

某と師匠が話を終えようとしていると、リサ殿の携帯がなり、通話を始める。

リサ殿の通話の中から、『かなこ様』と聞こえ、姉上殿からの連絡だと分かる。通話を終えたりリサ殿は、

「ご主人様、かなこ様のお買い物のお手伝いをして参ります。」

と師匠に伝える。

「あー、姉さんが迷惑かけて悪いな。よろしく頼む。」

師匠の返事に一礼し、部屋を出ていく。

「風魔、お前も説明は済んだし、帰って大丈夫だぞ。まあ、疑わしいと思うなら、リサを追ってみたらどうだ、姉さんのところに行ってるだろうし。」

「御意、師匠、失礼するでござるよ。」

ボフンと煙玉と共に師匠の家を出る。師匠の言葉を疑うことは致さぬ。されど、自身の目で観察し、正確な理解をするのも忍びの努め、リサ殿を追跡し、姉上殿を観察するでござるよ。

リサ殿を追跡し、？華街に出る。姉上殿と合流されたようでござる

な。

それから、おふたりは、買い物をされていく。普通の女子にしか見えんでござるな。随分と買い物を買った様子…、姉上殿がリサ殿に荷物を預けた。それと同時に姉上殿の姿を見失う、

「なっ!?!」

何処へ行かれた!?!探そうと視線を動かす。

「つけていたのは、私の方か。」

背後から声をかけられる。

「姉上殿…」

尾行対象が背後から現れる。

「たしか、風魔だったな。何か用か?」

「姉上殿の調査でござる。某は忍び故、この様な形での尾行を、お許しください。」

バレた以上、正直に話す。師匠の身内に?はつきたくない。

「では、飯でも食いながら話すとしよう。リサも一緒にいいか?」

「是。」

「安心しろ、奢りだ。」

「かたじけないでござる。」

「では、行くぞ。」

姉上殿が某を掴み、グンツ!!急激にかかったGに意識が薄れていく、なんという移動速度…:師匠の話は、間違いなく本当でござった…:目覚めると、リサ殿の姿が映る。どうやら介抱してくれたらしい。

「起きたか、速度を出し過ぎたようだ、悪かったな。」

姉上殿が某に謝る。

「か、かなこ殿は悪くないでござるよ。某が未熟であっただけのこと、お見苦しいところを見せて申し訳ないでござる。」

忍びたる某が、移動速度に屈するのは、修行が足りぬ証拠、不甲斐ないでござる。

「あの、すみませんでした。てつきり風魔を襲ったと思って…:」

「気にするな、こちららも紛らわしかったのだ。身体に異常はないか?」

「は、はい、大丈夫です。」

姉上殿と火野殿が会話をしている。どうやら某が、姉上殿に攻撃されたと勘違いしたらしい：あれ、これは不味くないでござるか？姉上殿の存在は知られてはならぬ筈、島殿と火野殿に知られているのでは：

「風魔様、今のところ、かなこ様がご主人様の姉とはバレておりません。」

リサ殿が耳打ちして下さる。

「二応、おふたりと接触してしまったことは、ご主人様に報告済みです。遠山の苗字と、ご主人様の姉と分かなければ、ギリギリセーフだそうです。」

「早急に引くべきかと。」

リサ殿の言葉を聞き、そう伝えて、姉上殿を見ると、火野殿と何か話している様子。その間に峰殿が入り、会話が終わる。こちらを見た姉上殿より、「少し待っている」と指示を受けると同時に姿が消える。出鱈目な移動速度でござるな。数十秒後に現れ、

「待たせた。風魔、腹が減っているのだろう。先程の詫びだ。」

姉上殿が、某にコンビニの袋を差し出す。中には、パンやおにぎり、お茶が入っているでござるな。

「あ、かたじけないでござる。」

おずおずと受け取る。師匠の言った通り、姉上殿については考えない方が正解なのかもしれないでござるな。

「失礼する。行くぞリサ、風魔。」

姉上殿が、3人に背を向けて歩き出す。リサ殿と並び、姉上殿の後ろについていく。

「すみません、あの瞬間移動は何ですか？」

後方から、火野殿の声が聞こえる。その声に姉上殿が振り返り、「走っているだけだが。」

そう答える。某は師匠に聞いていた故、知っているが、実際に見た今でも信じられないでござるよ。

少し歩いたところで、

「リサ、この辺りで旨い店はあるか？」

姉上殿が、リサ殿に尋ねる。

「そうですね…。ああ、ここはいかががでしょうか。」

リサ殿が、焼肉店に案内する。

「焼肉か、いいな。風魔もここでよいか？」

姉上殿が、某に尋ねる。

「是。」

奢ってもらおう身、反対などござらぬ。それに焼肉など、なかなかの贅沢でござるよ。

「そうか、ではここにしよう。」

姉上殿が、先陣を切り店に入る。

「かなご様は、肉類が好きなんですよ。」

席に案内される道中、リサ殿が教えてくださる。白雪殿の時も思ったが、リサ殿は人に取り入るのが上手い。某も忍びとして、見習うべきところでござるな。

「好きに注文しろ。遠慮はいらん。」

そう言われても、やはり気を遣うでござるよ。とりあえず、白米で安く仕上げるでござる。そう考えながら、メニュー表を見る。

「ご主人様も、こちらに向かっているそうです。」

リサ殿が、隣に座る姉上殿にそう伝えている。師匠も来るでござるかっ!!

「そうか、金次は、奢りだと言うとすぐ来るな。」

呆れた様に姉上殿が笑う。そして、

「リサ、私の分は適当に決めてくれ、少し席を外す。」

2, 3言リサ殿と言葉を交わし、姉上殿が席を離れていく。何かあったのでござろうか？

「風魔様、注文を済ませてしまいましたしょう。ご遠慮なくご注文してください。遠慮されると、リサがかなご様に叱られます。」

姉上殿は、某の為に席を外したのでござるか!?

「かなご様は、不器用ですがお優しい方ですから。ご主人様と同じですよ。」

確かに、師匠もそんなところがあるのでござるな。それから、ふたり

で注文を済ませて、会話をする。注文したものが届いた、少し後に姉上殿が戻ってきた。

「先に食べていてもよかったのだぞ。」

テーブルに並ぶ生肉を見て、そう言う。流石に、そこまでの不躰な振る舞いは、出来ないでござるよ。

「では、頂くとしよう。」

姉上殿が、

「いただきます。」

と言う。それに従い、某たちも同様にし、肉を焼き始める。ジューツという肉の焼ける音と共に、匂いが鼻腔をくすぐり、食欲を促す。

「かなこ様、焼けましたよ。」

リサ殿が、焼けた肉を姉上殿の皿に載せる。

「ああ、お前も世話ばかりでなく、しっかりと食べるよ。風魔、お前も遠慮なく食べる。」

そう言つて姉上殿が、肉を口に運ぶ。

「旨いな。」

肉を飲み込み、そう言う。

「風魔様も焼けてますよ。」

リサ殿が某の皿にも肉を載せていく。

「かたじけない。では―」

肉を口に運び。口に広がる肉の油と旨味に、たまらず白米を掻っ込む。

「美味しいでござるよ。」

火のついた食欲は、燃え上がる。箸が止まらない。うおオン某はまるで人間火力発電所でござる。

ひたすら食べ続ける。姉上殿もリサ殿に世話されながら、黙々と食べている。ようやく食べ始めたりサ殿を見て、姉上殿が

「して、風魔よ、聞きたいことはあるか。」

本題に入る。そうでござつた。しかし、

「某は、姉上殿がどれ程の実力者か、調べておつたのでござるが…先程

の移動速度で、分かったでござる。某の想像を超えており、これ以上の情報は頭が混乱するでござるよ。」

そう、某よりも遙かに強い。それは十分に分かる。これ以上は、頭がおかしくなるでござるよ。

「乱波の仕事は生き延びること。如何なる状況でも生還し、情報を伝えるのが第一。彼我の力量を見極めるのは立派だ。」

「姉上殿からは、逃げ切れる気のは無理でござるよ。」

後ろに立たれても、気付けなかった。逃げれるなんてあり得ない。

「それは、誰も出来ない気がしますよ。ただ、かなこ様なら見逃しては下さるでしょうね。」

「殺しは、私の流儀に反する。例え極悪人相手であろうとな。」

殺されなくても、再起不能になりそうでござるよ…

「来たようだな。」

姉上殿がそう言うと、店の入口に師匠が現れる。どういう察知能力でござろうか？店員に案内され、師匠が席にやって来る。

「師匠。ささ、こちらへ。」

某の隣へ誘導する。

「姉さん、風魔にいつから気づいてた？」

席に座りながら、師匠が言う。

「リサが来た時だな。どっちをつけていたかは、分からなかったがな。」

そんな段階で、でござるか!?

「まあ、危害を加える感じはなかったから、買い物を済ませるまで、放置していたがな。」

次元が違うのが分かっただろ。師匠がそう耳打ちしてくる。

「某、まだまだ未熟者だと再認識したでござる。」

「まあ、姉さんは別に考えた方がいいぞ。」

世界は広い、そう認識させられたでござる。

|||||



—キンジ視点—

風魔に、姉さんについての説明をするため呼び出した日。リサがやって来て、家事をしていた。しばらくして、風魔が来る。風魔への説明を終える頃、リサの携帯に着信がある。どうやら、相手は姉さんのようだ。通話を終えると、

「ご主人様、かなこ様のお買い物のお手伝いをして参ります。」

とりサが言う。姉さんから呼び出されたようだ。

「あー、姉さんが迷惑かけて悪いな。よろしく頼む。」

俺の返答に対し、一礼すると、リサは部屋を出ていく。姉さんはリサを気に入っているらしく、度々リサを連れまわしているらしい。まあ、リサが一緒だと安心だし、助かっているのだが、リサの負担が心配だ。リサが部屋を出たのを確認して風魔を見る。こいつは俺の言う事を疑うわないだろうが、どこか姉さんについては、信じきれない雰囲気がある。

「風魔、お前も説明は済んだし、帰って大丈夫だぞ。まあ、疑わしいと思うなら、リサを追ってみたらどうだ、姉さんのところに行ってるだろうし。」

百聞は一見に如かず、姉さんを観察してみたら、疑いもなくなるだろう。そもそも、姉さんの監視なんて不可能だろうが。

「御意、師匠、失礼するでござるよ。」

ボフンと煙玉と共に風魔が去る。あのバカ、部屋が滅茶苦茶になるだろうが。窓を開け、煙を外に出すべく換気する。とりあえず、俺の仕事は終わったな。勉強するか。

数時間後、勉強していた俺は、スマホの着信音で集中が途切れる。「なんだ、折角集中できてたのに。」

リサからの着信。姉さんと一緒に行動している筈、何かあったのだろうか？

「どうした、リサ。」

「ご主人様、申し訳ございません。かなこ様が火野様と島麒麟様に遭遇し、交戦してしまいました。」

最悪だ。

「状況は？」

「とりあえず、かなこ様のご主人様の姉だとはバレておりません。理子様ที่ タイミングを見て、仲裁に入られる予定ですが…」

リサが気まずそうに言う。

「なんだ？」

「気絶している風魔の対処は、いかがすればよろしいでしょうか？」

なんとなく状況が読めた。追跡していた風魔を、姉さんが気絶させてしまい。そこを、理子と一緒に行動していた火野たちに見られた。つてところか。

「とりあえず、姉さんの事がこれ以上知られない内に、風魔を起こして離れてくれ。」

後は、うまいこと理子が対処してくれるだろう。

「かしこまりました。理子様とその様に対処致します。」  
「頼む。」

通話が切れる。とりあえず、素性がバレなければギリギリセーフだ。遭遇した面子に間宮がいなかったのが救いだな。あいつがいた場合、間違いなくややこしいことになる。

「面倒だが、いつでも動けるようにしておくか。」

姉さんが絡んだ案件だ、状況が変わる場合も大いにあり得る。最悪の場合、俺が火野たちに事情を説明する必要がある。

準備を終えた頃、スマホにメールが届く。リサからだ。

内容は、無事に火野たちから離れたらしい。また、姉さんが風魔に焼肉を奢るらしく、俺もご相伴にあずかれるとのこと。丁寧に店の名前と地図まで添付されている。最悪の事態に備えて準備していたが、いい意味で準備が無駄にならなかったようだ。

いそいそと玄関に向かい、店に向かう。焼肉か、姉さんらしいチョイスだな。？華街に着き、リサから伝えられた店の前に立つ。扉を開き中に入ると、店員がこちらに来る。中にいる姉さんたちの席に案内される。

「師匠。ささ、こちらへ。」

俺の到着を見て、風魔が席に誘導する。

「姉さん、風魔にいつから気づいてた？」

席に座りながら、姉さんに尋ねる。

「リサが来た時だな。どっちをつけていたかは、分からなかったがな。」

風魔はアホだが、諜報能力は、流石忍者という程度には優れている。それを合流時点で見つけているのは、格の違いということだろう。

「まあ、危害を加える感じはなかったから、買い物を済ませるまで、放置していたがな。」

姉さんは、気配とかを探知する能力が異常に優れ過ぎているせいで、忍者にとつては最悪の相性だろう。更に戦闘能力はそれ以上に高い。姉さんは、何かしらのバグが発生しているのだろう。

そんなに早くバレていたとは思っていなかった風魔は、驚愕と若干ショックを受けている。次元が違うのが分かっただろ。そう耳打ちすると、

「某、まだまだ未熟者だと再認識したでござる。」

「まあ、姉さんは別に考えた方がいいぞ。」

そう、姉さんのレベルで考えると、誰しも未熟者になってしまう。でも、姉さんは別枠で考えず、己を磨こうとする風魔は、今よりも強くなっていくだろう。俺たち遠山家は、姉さんと接する時間が長すぎて、比較してたら精神が持たないからやめたけど。

姉さんの奢りで、焼肉を食べ終え、店を出る。

「では、私は帰るとしよう。リサ、今日は助かった。」

「ごちそうこそ、ごちそうさまでした。」

リサが、姉さんに礼を言う。それを聞き終えると、荷物を抱えて、姉さんが消える。

「ご主人様、これ以降の火野様たちの扱いですが…」

リサが切り出す。これ以上、深入りされると困るということだろう。

「火野殿は、姉上殿に興味が若干ある様子。まあ、あの力量差を見せつけられたので、仕方ないでござるが。何かしらの行動を起こす可能性はあるかと。」

「風魔、可能な限り監視を頼む。」

「御意。」

とりあえず、風魔に頼むしかない。

「火野様は、蘭豹様に話を伺う可能性が高いかと思えます。」

「たしか、姉上殿の妹分と言っておられた。驚きでござるが、蘭豹殿ならそのあたりは、わきまえておるのでは？」

蘭豹と姉さんの関係は、俺も知らないから、どういう対処をするのかは分からない。しかし、以前遭遇した際の反応から、蘭豹は姉さんに対し、強い恐怖心がある。下手打って怒りを買わない様に、余計なことは言わないだろう…多分。

「火野の監視をしつつ、理子と連携して情報収集するしかないか。風魔、リサ、頼んだぞ。」

「御意。」

「かしこまりました。」

武偵高の中で起きることは、退学している俺には対処仕様がなく、後手に回るしかない。まあ、このふたりに理子が加わったら、ある程度のことには対処できるだろう。特に駆け引きの面では、リサと理子は俺よりも優れているし。

「それじゃあ、頼んだぞ。」

そう言つて、俺は帰路に着く。

姉さんのことだ、どんだけ考えて悩んでも、それ以上のことをやらかしてきて、そんなものは吹き飛んでしまうだろう。

## それぞれの想い

—冷泉為和視点—

遠山さんとの組み手の日程が決まり、連絡を取るべく、電話を掛ける。プルルル、というコール音が耳に響く。4コール目、出ないかな？コール音が長くも短く感じる。彼女の声が聞きたくて、早く出てほしいのに、心の準備を整える為に、もう少し出ないで欲しい自分がいる。

「冷泉、何用だ？」

5コール目で彼女の声が聞こえる。スマホ越しに聞こえる彼女の声に、何とも言えない高揚感に、舞い上がりそうな声を必死に抑え、「突然の連絡で申し訳ありません。遠山さん、先日お話しして頂いた組み手の件ですが、日程が決まりましたので、ご連絡です。」

なんとも事務的な対応になってしまう。

「おお、そうか。それで、何時だ？」

楽しそうに日程を尋ねる遠山さん。彼女が喜んでいる。その声が僕の耳に届く。頑張つてよかった。そう心から思う。

「日程ですが—」

連絡事項を伝達する。

「成程、了解した。」

「あの、それで当日なんですけど、お迎えに伺ってもよろしいでしょうか？」

意を決して、そう尋ねてみる。送迎は職務外だが、僕の裁量に任せて貰っている。当然、ただの送迎ののだが、車の中でふたりきりになれる。もし、彼女が送迎車に乗ってくれるなら、まるでドライブデートの様ではないか。

「ん？送迎まで付くのか。至れり尽くせりだな。よろしく頼む。」

「かしこまりました！それではよろしくお願いいたします！」

「うむ。」

通話が切れる。ああ、なんということだろう。天にも昇らん気分

だ。こうしてはいられない。今すぐ公用車の予約と清掃をしなければ。遠山さんが乗るのだ、砂の一粒も残っていてはいけない。そうだ、車用の芳香剤も買わなければ、むさいオッサンが乗りまわっている公用車、そんな汚らわしい匂いで、彼女の鼻腔を汚すわけにはいかない。

頭に、清掃と公用車のカスタムプランを描きながら、公用車利用表に名前と時間を書く。さあ、まずは芳香剤を買いに百貨店に行こう。最高級の物を買わなければ。

|||||

— 武偵庁長官視点 —

仕入れた情報の中に、ひとつ気掛かりなものがあった。

『武検、公安合同強化訓練』

東京地検特捜部にて行われる予定の訓練。本来部外秘であるその紙を、あるつてで入手した。もつとも、武偵庁も地検も双方情報の奪い合いをしており、あちらの情報は、ある程度、定期的に入手出来ている。もつともこちらと同じであるだろうが。

しかし、気掛かりなのは情報が入ってきたことではない。その訓練の講師の名前、それが原因だ。

『特別講師 遠山金虎』

7年前、武偵高の合格を取り消す為に、圧力を掛けた者の名。もつとも圧力など—頭がポンコツ過ぎて不合格だった為—不要だったが。しかし、その知能に反して、戦闘能力はべらぼうに高い。武偵高受験当時の実力でも突出していたが、時折入ってくる情報や噂を精査すれば、強いとかそういう次元ではない。我々が木の枝や石を投げて戦えつついるレベルだとすれば、彼女は大気圏外から、レーザーやミサイルを撃っているレベルだ。一方的に虐殺できる力を持っている。当時、彼女の存在を秘匿する為に動いた私の判断は、間違っていない。

かったと確信できた。

しかし、その一方で口惜しくも思う。政権交代が起き、国際的な立場が不安定になり、更に各国から超能力者たちまで日本に入ってきている。武偵や武検たちでは数が足りない。こんな状況の中で、もし、彼女が武偵ないし武検になっており、事に当たっていた場合、強烈な抑止力と成りえただろう。

終わったことを考えても仕方ないのだが、胃が痛くなるような状況に、思われないものねだりをしてしまった。

「当日、様子を見に行ってみるか？」

実際、どれ程強いのか、伝聞と映像でしか知らないそれを、自身の目で見てみたいという純粹な好奇心と、彼女の真意を知る為に思う。

|||||

—冷泉為和視点—

その日が来た。隅々まで磨き上げ、黒く輝く公用車。車内は砂一粒残さず清掃し、買ってきた高級な芳香剤の香りが広がっている。遠山さんを迎えるには、まだ物足りないが、やれるだけのことはやった。

巣鴨にある、彼女の家。その前に車をつける。エンジンを止め、車を降りる。玄関に向かおうとして時、玄関の扉が開く。ぴっちりとしたスーツを身に着けた遠山さんが、出てくる。

「おはようございますー！」

彼女に声を掛ける。扉を閉めた彼女が、

「ああ、おはよう。冷泉。時間通りだな。」

そう返してくれる。朝から彼女と挨拶を交わすなんて、僕の人生は今が最高潮なのかもしれない。彼女がこちらへ歩いてくる。僕は急いで助手席側に向かい、

「どうぞ。」

その扉を開ける。

「ありがとう。」

遠山さんが席に座るのを見届けて、扉を閉める。そして、急いで運転席側に向かい、乗り込む。

「では、発進します。」

「頼む。」

エンジンを掛け、アクセルを踏み、車が発進し、道を進んでいく。車内にエンジン音が響く中、沈黙が流れる。どうしよう、緊張してなにも言葉が出ない。なにか会話のきっかけを…

そんなことを考えるながら、左折の為にウィンカーを上げる。歩道を確認する際に、助手席に座る遠山さんが見える。相変わらず美しい容貌に見惚れそうになる。いかん、運転中だぞ、しっかりしろ僕。強い意思で視線を彼女の顔から逸らす。助手席のシートベルトに目が行く。そして、その線を視線がたつていく。その先にあったのは、豊かな双丘、その谷間に食い込むようにシートベルトがのっかっている。大きく開いた胸元のボタンからは、その深入り谷間が見える。

ガスツ!! 自らの右の拳を、己の顔面に叩き込む。運転しているんだ、遠山さんが乗っているのに、事故なんて起こせない。しっかりするんだ、僕。

「突然どうした?」

遠山さんが、自分の顔を殴った僕を、不可解そうに尋ねる。

「いや、ちよつと気合いを入れようと…今日の訓練は頑張りたいので。」

貴女の谷間に見惚れて事故りそうでした。なんて言える筈もなく、そう答える。それに、今日の訓練を頑張る、これも本心なので嘘ではない。成長した姿を彼女に見せたいし、目標とする彼女の強さを知る為にも大事な日だ。

「そうか、私も楽しみにしていた。武装検事との組み手はいつ以来だろうか。」

ふふ、と笑う遠山さん。

「それに、父上の同僚や、上司の方に会うのも久しぶりだ。幼き頃、遊んでもらったな。」



懐かしむように言葉を紡ぐ。

「今日は、楽しんで下さい。」

そう伝えると、遠山さんは、ニコリと笑い、窓の外を眺めていた。駐車場に車を止め、ふたりで会場となる鍛錬場へと向かう。鍛錬場の入口の扉を押し、中に遠山さんを誘導し、自身も後に続き入る。

「遠山金虎さん、到着しました。」

ズラリと並ぶ武装検事たちに、公安の面子、部長の姿もある。…隣には武偵庁の長官まで来ている。どこで嗅ぎつけたのだろうか？部長が、こちらへにこやかな笑顔を浮かべて歩いてくる。

「やあ、かなこちゃん。久しぶりだね。」

「お久しぶりです。」

遠山さんが部長に一礼する。

「中学校の入学以来だね。今日はよろしく頼むよ。」

「お任せ下さい。」

ふたりが会話する中、立ち並ぶ面々は、異様な空気に包まれる。遠山さんの力は、ここにいる面々には未知数であり、今見える姿からは、噂のような強さは窺えない。殺気どころか、強者の雰囲気さえない。スーツ姿もあり、ただの美人OLにしか見えない。ただ一人、公安0課の獅堂さんだけが、油汗を流し、

苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「それじゃあ、主役も到着したことだし、始めようか。」

話を終えた部長が、手を叩きながら立ち並ぶ面々にそう発する。その言葉が終わると同時に、殺気が満ちは始める。武装検事、公安たちが戦闘態勢に入っている。

「そうだ、かなこちゃん。今は人員不足なんだ、怪我はさせないようにお願いするよ。」

「分かりました。大丈夫です。力加減は以前より上手くなりました。」

そう答え、ぐーっと伸びをする遠山さん。普通の武偵程度なら、気絶してしまうような殺気を一身に受けながら、

「これで本気ではないでしょう？実力を知る為に、最初の10分くらいは、守りだけ…攻撃も反撃も無しでどうですか？」



「大丈夫です。力加減は以前より上手くなりました。」

と、伸びをしながら答える。更に、

「これで本気ではないでしょう？実力を知る為に、最初の10分くらいは、守りだけ…攻撃も反撃も無しでどうですか？」

と続ける。奴の実力を知らなければ、挑発だと思っただろうな。現に、その言葉を聞いた武検共は殺気を強める。そんな中、奴は、検事部長とまたふたりでなにかを話していた。

検事部長が見学席に着き、振り向く。

「さあ、みんな、遠山かなこさんから、お情けの10分を頂いたよ。全員、全力…殺す気で挑みなさい。では、始め。」

更に武検共を煽る。プライドの高い奴らだ、容赦なくいくだろう。

銃声が響き渡る。予想通り、早速おっぱじめやがった。

「獅堂さんどうします？」

可鷓韋が俺に聞いてくる。

「どうする？決まってるんだろ、巻き添え食らわねえ様にしとけ。それとも、洗礼を受けてくるか？俺は、ごめんだね。」

四方から放たれる大量の銃弾を、片手でいとも容易く払い落とし、刃物を持ち襲い掛かる奴らを見切って躲している遠山を見ながら答える。反撃も攻撃もしていない。お情けの10分ってのはこれか。

「どうやら、お情けタイムなら、ぶっ飛ばされないうだぜ。行かねえのか？」

灘がそれに気付いた様子だな。

「じゃあねえ、行くか。」

三式班の面子にそう言うと、全員が頷き、戦闘態勢に入る。

「行くぞっ!!」

俺たちも乱戦の輪に入る。

さて、一撃くらいは入れたいもんだぜ。

|||||

—冷泉為和視点—

訓練開始と同時に、遠山さんへ弾丸が大量に飛来する。やり過ぎだっ!! 思わず言葉が出そうになる。殺す気で挑め、部長がそう言ったとはいえ、これは流石に…、既に刃物を装備した同僚たちも攻撃を仕掛けています。

そんな心配は杞憂に終わる。遠山さんは飛来する弾丸を片手で全て払い落とし、近接攻撃を仕掛ける連中の攻撃は見切った様子で躲している。それも、最初の立ち位置から、ほとんど動かずに。

2分程経過したが、遠山さんを取り囲み、幾度も攻撃が仕掛けられるが、未だに一撃すら入れられていない。そこに獅堂さん率いる公安0課の3式班も加わる。

「獅堂殿、遅かったな。」

獅堂さんからの攻撃を躲しつつ、遠山さんがそう言う。その言葉を聞き、嫉妬の炎が燃え上がる。彼には負けたくない。気安く彼女と言葉を交わすなんて、許される行為ではない。なんならどさくさに紛れて、絶対許さないリストのランクが上がった獅堂さんを狙って攻撃しようか…そんな悪い考えは、

「どうした冷泉、遠慮はいらんぞ。」

遠山さんの言葉でかき消される。この乱戦の中で、僕を見ていてくれていた。

「では、いきますよ。」

そうだ、助けられたあの時よりも、強くなった姿を見せるんだ。僕が素早く踏み込み、拳を突き出す。それに合わせる様に、取り囲む面々も一斉に仕掛ける。これなら躲せない。

彼女は、そんな僕たちの期待を一瞬で打ち砕く。攻撃を見切り、垂直に跳ぶ、そのまま宙を蹴り、浮かぶ。

「おい、あいつ超能力者か?」

その姿を見て、誰かがそう言う。遠山さんは、宙に浮きながらトントんと、空中を歩き、包囲の輪、その外に着地する。

「良い連携だな。…ん?」

着地した彼女がそう評価している時、地面から生えた鎖が彼女を縛

る。超能力者の武装検事、穴戸梅。彼女の能力だ。

「動きは封じました。」

穴戸さんがそう言うと、遠山さんに鎌が襲い掛かる。全員がそれに続き、攻撃を放つ。超能力に弾丸、その他飛び道具が、縛られた遠山さんに襲い掛かる。

「成程、そういう類の攻撃もあるか。」

その言葉と同時に、彼女を縛る鎖が千切れ飛び、瞬時に飛来するそれらを払い落とす。

「少し力を込める程度で千切れたか。面白い技だが、脆いな。」

「そんな…」

穴戸さんが愕然とする。破られたことの無い技が、一瞬で碎かれる。そのショックは計り知れない。

目の前に立つ、強者、その実力差に、武装検事も公安も恐れを抱く。噂通り、いや、それ以上に強い。それを倒すには…

お互いの立場、その垣根を越え、武装検事と公安が連携して行動を開始する。超能力者たちがそれぞれの能力を發揮し、近・中・遠、全ての距離、方向から何度も、繰り返し攻撃を加える。

「まあ、そうなるだろうな。」

全ての攻撃を打ち消し、平然と立っている遠山さんを見て、撃ち尽くした弾倉を交換しながら、獅堂さんが呟く。力を使い果たした超能力者たちは息を切らし、汗をかいている。どうやったって勝てない。そんな感情が蔓延する。自分たちの持てる全てをぶつけ、有効な一撃すら入れられていない。全員に諦めが生まれる。

遠山さんとの距離をとり、睨み合う形にはなっているが、誰も動かないし、仕掛けない。静寂の中、時間だけがゆっくりと過ぎていく。その静寂を破る様に、部長の声が聞こえる。

「さあ、10分経過したよ。」

その声を聞いた遠山さんは、部長を見て、頷く。

「安心しろ、怪我はせぬよう加減はする。」

その言葉と同時に、尋常ではない殺気が放たれる。息をするのも苦しい程の圧迫感。疲労の強い超能力者たちの中には、その殺気だけで

膝をつく者もいる。

なんとか気を強く持ち、踏ん張る僕たちの視界から、彼女が消える。そして、ひとり、またひとり、と倒れていく。目の前で起こる現象に、戸惑いと恐怖が宿る。しかし、僕は立ち向かう覚悟を決める。遠山さんに実力を示す。僕に少しでも彼女の視線が向くように、その為になんまで頑張ってきたのだ。ここは最高の舞台なのだ。そう自分に言い聞かせ、構えをとった。

|||||

— 武偵庁長官視点 —

今後、彼女は、どのように扱っていくべきなのだろうか？ 飛び入りで無理矢理見学している『武検、公安合同強化訓練』、その様子を見て考えていた。与えた10分間のハンデ、それを眺めながら周りを見る。予想はしていたが、実際に目の当たりにすると、やはり驚きがある。見学中のお偉いさんや政治家たちも、その力量差に驚愕している。ただひとり、検事部長だけが、さも当然の様に、眺めている。

「さて、時間ですね。」

その彼が腕の時計を見て、そう言って、立ち上がる。

「さあ、10分経過したよ。」

大きくはないが響く声で、睨み合い状態となった彼らに告げる。その声に遠山かなこが頷くのが見えた。その後、

「うっ!」

隣りに座るお偉いさんが圧に屈する。当然だろう、彼女の放つ殺気がこちらまで届いている。この距離でこれだけ圧だ、それを近距離で当てられる彼らが気の毒になる。

「始まります。しっかりと見ていないと見逃してまずよ。」

私に、検事部長がそう告げる。一瞬だった。言われなければ見逃しただろう。彼女は、とんでもない速さで移動し、彼らを一撃で沈めていく。彼らのほとんどが、その速度を捉えることが出来ておらず、見

えない敵に倒されている恐怖を感じていることだろう。

「凄いな。」

そんな感想しか出て来ない。倒した者に怪我也負わせていないようだ。あれだけの動きをしながらも、しっかりと手加減している。強者故の余裕だろう。

「ええ、凄いですよ。これだけ手加減出来る様になったんですから。金叉くんも、これを見たら喜ぶでしょう。」

「…ん？」

検事部長は、私とは違う感想を抱いたようだ。

「昔は、怪我をさせないように加減しても、威力が高すぎて、相手を吹っ飛ばしてしまっていました。今はその場に倒れる程度まで抑えられている。随分と努力したでしょうね。」

「つくづく化け物だな。」

素直な感想を口にする。

「加減が上手くなったということは、力のコントロールが上手くなったということ。以前よりも格段に強くなっているでしょうね。」

「私と君で、彼女とやり合ったら、どうなる？」

「彼女が本気なら、数秒耐えたら上出来でしょうね。それこそ、一瞬でこの世から跡形もなく消えている方が、可能性としては高いでしょうね。」

この化け物は、世に解き放つてよいのだろうか？私の考える二択、そのうちのひとつが、候補から消えかけていく。

「残ったのは、獅堂くんだけですか…」

検事部長がそう呟く。鍛錬場には、死屍累々と化し、立っているのは、遠山かなこと公安0課の獅堂だけだ。もつとも、彼が強かったから立っているのではない、ただ単に最後の標的になっただけだ。

なんとか逃げようともがく獅堂に、容赦なく一撃が加えられる。ドサツと獅堂が倒れる。終わったな。さて、帰るか。そう思った時、

「冷泉くん…!?!」

検事部長が呟く。その言葉には驚きが含まれている。私も、鍛錬場に再び目を向ける。倒れている武装検事、その中からひとり立ち上

がる者がいた。

「タフだな。」

「いえ、彼はどちらかという頭脳派で、戦闘能力は新人の中でも下の方です。」

「なんだと!?!」

だからこそ、検事部長は驚いたのだろう。ふらふらと立ち上がり、戦闘態勢をとる彼に、遠山かなこも少し驚いた様子だ。そんな彼は、果敢にも遠山かなこへと攻撃すべく、踏み出していく。そして、当然の如く打ちのめされる。今度こそ終わったか。そう思う我々の考えを否定する様に、再び立ち上がる。もう意識もほとんどないだろうに。

それから、何度も何度も、打ちのめされては起き上がり続ける。無謀だが、素晴らしい根性だな。仮に私が同じ立場であったなら、最初の一撃で諦めていただろう。勝てるわけがない相手に、必要以上に挑むことはしない、足元にも及ばないと悔しくは思うだろう。だからといって、この場でそれを越えようと、立ち上がることはしない。私なら、再度挑む時までには、対策を考える。そう言い訳し逃げるだろう。

何度も起き上がる彼に、思うところがあつたのだろう。彼女も、一撃で倒すのをやめ、彼に攻撃の時間を与えている。全ての攻撃をあしらわれて尚、彼は攻撃をやめず、進み続けているが、限界なのは、誰の目で見ても明らかだった。

それは、彼女も感じていたのだろう。彼の攻撃を避け、一瞬で彼の首、そこに足を絡め、床に仰向けに倒す。そのまま、動脈を絞め上げ、落としにかかる。彼は必死にもがいているが、意識が遠のいているのだろう。そして、落ちる瞬間、

「ありがとうございます。」

彼の声が聞こえた。大した奴だ。

もう起き上がる者はいない。彼女だけが立っている。その光景を見ながら、

「彼の名は?」

「冷泉為和です。」



「そうか、覚えておこう。彼は強くなるな。」  
そう言つて、席を立つ。

|||||

—冷泉為和視点—

姿が見えなくなった遠山さんの攻撃は続いている。次々と倒れていく仲間たち。どこだ、今、どこにいなんだ。目を凝らし、彼女の姿を追う。またひとり倒れる。ダメだ、見えない。その時、鋭い痛みと共に、意識がかき消される。速すぎる。なにも出来なかった。

「さて、獅堂殿は頑丈だからな。一発では足りないだろうか？」

「待て、なんでそうなる。」

「なに、遠慮はいらん。存分に受け止めよ。」

「だからなんで——」

遠山さんの声が聞こえる。その声で意識が戻り始める。もうひとりの声は…獅堂さんか。

「さあ、いくぞ。」

「ぶっ。」

うつ伏せに倒れた体から、頭だけを上げて、臆気な意識でその様子を見る。獅堂さんに遠山さんの拳が放たれたのだろう。

「なんで俺だけ6発も…」

獅堂さんがそう言い残し、倒れていく。その言葉で意識が覚醒する。『俺だけ』…獅堂さんの言葉に奮い立つ。彼だけが特別扱いなんて許せない。痛む体を起こし、立ち上がるうとする。痛みはあるが、彼女の宣言通り、怪我はない。あれだけの威力の拳で怪我をさせないのは、どういう原理なのだろうか？違う、それは今考えることではない。

フラフラと立ち上がった僕に、彼女も気付いたようだ。

「起きれたか…、私はお前を見くびっていたようだ。」

遠山さんが、少し驚いた様に言う。

「僕も、少しは強くなりましたから。」

そう、今立ち上がったのは、彼女が知る、ひ弱な中学生だった僕ではない。貴女に認められる為に、努力してきたのだ、たった一発の攻撃で倒れるわけにはいかない。

「そうか…しかし、無理はするな。」

フラフラな僕を見て、彼女がそう言う。

「無理ですか…無理してでも挑みますよ。負けられないんです。」

そう言っつて、戦闘態勢をとる。そう、負けられないのだ、獅堂さんには。

「…男の覚悟を無碍には出来ぬ。お前の納得いくまで相手してやろう。」

そう言っつと、姿が消える。そして、

「ぐはっ。」

鳩尾に衝撃が走り、膝をつく。痛い、しかし、最初に食らった一撃よりも弱い、加減してくれている。

「ぐううっ。」

歯を食いしばって立ち上がる。痛い、痛い、遠山さんの拳が僕に触れている。そう思うと痛みが快感に変わってくる。少し過激なスキんシッブ。そう考えると、なんとも幸せな気分になる。なんだ、最高のご褒美じゃないか。

「大した奴だ。金次よりも根性があるかもしれないな。」

立ち上がった僕を、遠山さんが褒めてくれる。ご褒美を貰えて、更に褒められる。なんて最高のシチュエーションなのだろう。

「まだまだ…」

そう、まだまだ足りない。獅堂さんは6発、なら僕はそれ以上。何度も攻撃を受け、何度も倒れる。その度に起き上がる。彼女が僕に与える痛みは、快感に変換され、恍惚の表情で起き上がる。

このやり取りが続くこと12回目、獅堂さんの2倍稼いだ僕に、

「あれだな、なんというか、こころも無抵抗だと、やりづらい。」

遠山さんが僕から距離を取り、そう言う。なんと、僕は彼女を困らせていたのか!? 気まずそうする彼女を見て、思わず自害してしまいた

くなる衝動を抑え、

「では、遠慮なくいきます。」

彼女が求める通りに動く。彼女へ近づき、攻撃を行う。当然の如く全てのあしらわれながら、

「根性はあるが、技量が足りんな。強く、速く、この2点を追求するだけで変わるぞ。」

アドバイスをくれる。

「ありがとうございます。」

僕の拳を、彼女の手が払っていく。彼女と会話し、手と手が触れ合う、その嬉しきで天にも昇りそうだ。

しばらく攻撃を続けていたが、異変が起こる、痛みを快感に変換していた脳内麻薬が切れた。痛みが体がふらつく。

「限界だな。」

遠山さんが、この素敵な時間をやめようとする。

「まだ…やれます。」

終わらせたまるか、おぼつかない足をなんとか踏み出して、拳を、繰り出していく。

「仕方ないか…」

僕の拳を、くぐり抜けながら、彼女が眩く。

彼女の姿を見失う。それと同時に、首に圧力と重みがかかり、仰向けに倒れる。

「もういい、眠れ。」

彼女の声と同時に、首にかかる圧が強まる。苦しみから、なんとか拘束を解こうと、首を絞めるものに触れる。…あれ、これって遠山さんの脚だよな…

脳内麻薬が急激に分泌される。苦しみも、痛みも、全て快感に変換される。頭を動かし、手を動かし、彼女の脚の感触を堪能する。スーツの生地越しに伝わる感触、最高です、遠山さん。

しかし、それも長くは続かない。酸素が不足した脳が意識を閉ざし始める。その前にやらねばならないことがある。こんな最高のご褒美をくれた彼女に伝えなければ。

「ありがとう…(´▽`)いりましたっ！」

その言葉と同時に、意識が飛んだ。

|||||

—遠山金虎視点—

はじめは、起き上がってきた冷泉に、少し驚きを覚えた。私には、中学生の時のひ弱な冷泉のイメージしか持っていなかった。しかし、あれから何年も頑張っていたのだと、素直に感心する。だが、その脚はおぼつかない。

「そうか…しかし、無理はするな。」

怪我などとしては意味がない。これは鍛錬であり、実戦ではないのだから。

「無理ですか…無理してでも挑みますよ。負けられないんです。」

負けたくないか…意地だけで向かってくる気力、随分と男らしくなったな。

「…男の覚悟を無碍には出来ぬ。お前の納得いくまで相手してやろう。」

冷泉に向かい、移動する。大した覚悟とはいえ、先程のダメージも残っているだろう。更に威力を落とす、鳩尾を軽く拳で叩く。そのダメージで膝をついた冷泉は、歯を食いしばって再び立ち上がった。

「大した奴だ。金次よりも根性があるかもしれないな。」

そう言うと、冷泉は薄っすら笑みを浮かべて、

「まだまだ…」

と呟くので、仕方なく、再度拳を放つ。それを受け、冷泉が倒れる。そして、起き上がってくる。その繰り返しが続く。起き上がる度に笑みを浮かべる冷泉に、気味の悪さを感じる。それに、無抵抗の人間を殴るのも気が引ける。逃げるなり反撃なりの気概を見せてくれたら、ここまでやりづらいという気は起きないだろう。

「あれだな、なんというか、こうも無抵抗だと、やりづらい。」

そう、このよく分からない感覚は上手く言葉に出来ない。気味が悪いというべきか、気持ち悪いというのか？とりあえず、この不可解な状況の変化を求めなるべく、そう伝える。

「では、遠慮なくいきます。」

私の言葉を聞いた冷泉が、こちらに踏み込み、拳を放ってくる。それを手で受けたり、払ったりしながら、根本的な速度と威力が足りないとアドバイスを送る。それに対し、礼を言ってくる冷泉と、しばらく組み手を続けていると、奴の足がふらついた。

「限界だな。」

これ以上の鍛錬は無意味だ。

「まだ…やれます。」

ふらつく足を踏み出し、更に攻撃を繰り出してくる。これは言っても聞かないのだろう。ならば、

「仕方ないか…」

冷泉の攻撃をくぐり抜け、スルリと奴の首に脚を絡めて体重をかけると、仰向けに倒す。

「もういい、眠れ。」

そう伝え、絞め上げていく。言っても聞かないなら、強制的に休ませてやるしかない。幼き頃、金一や金次が寝れない時に、よくやってやったやり方だ。何故かあいつらは難しいことを考えても寝れないらしく、こうやって寝かしつけていた。他にもチョークスリーパーなどもしていたな。

昔を懐かしみながら、冷泉を絞めていると、苦しいのか抵抗する奴は頭や手を動かし、藻掻くが、抵抗が弱くなってくる。そろそろ落ちるな。そう思った時、

「ありがとう…ごいしましたっ！」

そう叫び、落ちた。殊勝な奴だ。ここまで痛めつけられ、恨み言ではなく礼とはな。

眠った冷泉を丁寧に寝かせてから立ち上がる。

「終わりました。」

部長殿に向かつてそう言う。

「見事だったよ。随分と加減が上手になったね。」

「ええ、父上の教えに従い、今までその鍛錬を行ってきました。おかげで以前よりも拳にキレが出ました。」

シユツ、シユツと正拳突きをしてみせると、拳から衝撃波が放たれた。：しまった、加減を間違えた。

ドガンと音が響き、壁に穴が開く。

「あー、上手くなつたけど…まだまだのようだね。」

「すみません、つい。」

申し訳なさと、少し気を抜くと加減を誤る己の未熟さに頭を下げる。

「まあ、今回は気にしないでいいよ。壁はこちらで直しておくから、お茶でも飲んでおいで。」

そう言つて、部長殿が鍛錬場の出入口を指す。

「すみませんでした。」

そう言つて、鍛錬場を出る。自動販売機でお茶を買い、それを飲みながら自分の拳を見つめる。思いのままに、力を加減出来る様にならねば…ここ数年の鍛錬で上手くなったと過信していた。今日は、己を見つめ直す良い機会となつたな。

その後、目覚めた冷泉に送られて、家に着く。食事を食べ、風呂に入る。湯船に浸かりながら、拳を握る。

「まだ私は弱い。」

更に強くならねば。そう決意した。

## 幕間―動き出す人々―

―遠山金一視点―

引退、パトラと結婚した時点で考えていたことだ。そして、その挨拶に職場である武偵庁へと赴いていた。同僚や上司に挨拶を済ませ、帰ろうとした時、

「遠山くん、長官がお呼びだよ。」

内線を受けた上司が俺にそう伝える。わざわざ長官自ら？厄介なことに巻き込まれる予感がするが、まだ籍は武偵庁にある。従わざるをえない。

重厚な扉を叩くと、

「はい。」

扉の向こうから声が聞こえる。

「遠山です。」

扉越しに名乗ると、

「どうぞ。」

その声を聞き、扉を開ける。

「呼び出して済まないね。」

長官は、そう言いながら、応接用のソファ―に座るように手で促す。一礼し、座る。

「いえ、それでご用件は？」

「優秀な武偵が引退するのは、少し困る。武偵の数は多いが、君ほどの人材は数える程だ。出来れば、もうしばらくいてはくれないだろうか？」

「随分と高い評価を頂いて、恐縮ですが、決めたことなんです。長官も俺の体質はご存知でしょう。本題は何ですか？」

そう、この引き止めは口実だ。長官は、ふーっ、息を吐くと、  
「優秀な武偵が辞めてしまい、人員不足に困るのは本当だ。だからといって無理に引き止める気はない。君の意見が聞きたい。」

「俺の意見？」

「君が一番詳しいだろうからな。」

嫌な予感がする。良くないことが始まる、そんな予感だ。

「君の姉、遠山かなこについて聞きたい。」

「何故です?」

何故今更聞くのか、その思惑が分からない。

「先日、遠山かなこの戦いを見た。武検と公安相手に稽古をつけていた。」

「は?」

「なんだ、知らなかったのか?」

何やってんだあの人は。そもそもなんでそんな催しをするんだ。

「ええ、全く知りませんでした。それで?」

「まあ、強くとは知っていたが、やはり実際に見ると違うな。存在を隠す、その判断は間違っていたようだ。家族である君には悪いがね。」

確かに、姉さんの扱いに納得はいつていない。しかし、上の判断もよく分かる。姉さんの力は、世界の均衡を容易く破壊する恐れがある。そもそも、ギリギリで保たれているのだ、そこに姉さんという不確定要素が入れば、碌なことにならない。

「仕方のないことだと、分かっています。」

だから甘んじて受け入れているのだ。

「しかし、我々が今までしてきた努力は、無駄になりそうだ。」

「どういうことですか?」

「新政権。」

長官はひと言呟き、

「新しい政権のお偉い政治家様たちは、前政権の全てを破壊し、行ってきたことの逆をしたいらしいのは知っているだろう。」

心底呆れた様に、長官が言う。

「遠山かなこについては、新政権の奴らに知られぬ様、必死に隠してきたが、それをリークした馬鹿…裏切者がいる。最悪の方向に舵を切られる可能性がある。」

「姉さんを公の場に出すつもりだと?」



「それが最悪の選択肢だな。そうならないように動くつもりだ。」

知られた以上、放置ということはないのだろう。それこそ、証人喚問なんかで姉さんが国家に呼ばれてしまえば、連日報道されるだろうし、あの残念な脳みその姉さんなら、放送事故必至の爆弾発言さえやりにかねない。そもそも、質問の意味も理解できないだろう。身内の恥を世間に晒されるのは勘弁願いたい。

「落としたところはどのあたり？」

しかし、何かしらのアクションは起こされるのは確定事項だ。なら、最悪の状況で最善の手を打たねばならない。

「まだ決まっていないが、諦めてもらおうと考えている。」

「そう簡単に諦めますかね。」

無理だろう、政治家のしつこさは一筋縄ではいかない。

「いきなり諦めてもらうわけではない。一度渡して、その上で諦めさせるしかないだろう。」

「姉さんを引渡すつもりですか？」

「ああ、心配しないでくれ、直接身柄を渡すわけではない。肩書だけだ。かつての公安0課の様に、総理の私兵にすればいい。最強の武力が手に入ると言えば、虎の威を借るのが好きな奴らだ、食いつくだろう。もつとも——」

「平和ボケした小動物が、虎を飼いならせるわけがない。」

そういうことか、確かに、それなら諦めるだろう。それにその後、姉さんについて追及しようにも、形式上私兵としていたなら、それも出来なくなる。最善の一手だ。しかし、

「そんな分かり切った罠に引つ掛かりますかね？」

「難しいだろうな。だから、最悪に備えて、遠山かなこのそばで、我々のバックアップをして欲しい。そういう依頼だ。」

「成程、了解しました。お引き受けします。」

「助かる。ではよろしく頼むよ。」

政治家相手、武力でどうこうできない以上、厄介な戦いとなるだろう。だが、姉さんの今後に関わる、大切な一戦だ。

翌日、気を引き締め、準備をしていた俺に連絡が入る。あっさりと



「本当に…」

そう呟く。もつと頑張れという意味で言ったのだが、求められている答えは違ったような。

「本当になかったって人の妹分だったんですか？」

「かなこ…？」

ブワツと冷や汗が全身から噴き出る。

「はい、ブロンド髪で背の高い—」

姉御の特徴を伝えてくる火野。間違いない姉御や、

「お前、ウチのこと、なにか話したりしとらんよな。」

「はい、まともに話も出来ずに帰られましたので。」

よかった、余計なことは言っていないようだ。思わず安堵の涙が溢れそうになる。

「先生、大丈夫ですか？」

様子がおかしいウチを心配そうに見つめながら、火野が聞いてくる。

「ああ、大丈夫や。」

あかん、生徒の前や、しっかりせんとな。

「お前が会ったんは、正真正銘の化物んや。命があっただけ有難いと思とけ。ええか火野、よう聞け、姉御に関わろうなんて考えるな、忘れろ。それが賢い生き方や。」

可愛い教え子にウチと同じ恐怖を与える程、鬼やない。

「ええな。」

「はい。」

念を押すウチに、火野は納得いつていないようだが返事をする。それを見て、一目散に立ち去る。

これ以上逃げられへんのやないやろか？殺される前に事情を説明して、ついでに泣きながら土下座したら許してくれへんやろか？

もし、会ってしまったらそうしよう。姉御は神出鬼没、もう恐怖に怯えて生きるんは嫌や。

|||||

少しの気の緩みで、力の制御が御座なりになる。分かつてはいたが、まだまだ未熟、しかし、まだ伸びしろがあるということだ。

山に入り、気を練り、鍛錬を行う。力の制御が向上すれば、自身の能力は更なる飛躍を遂げるだろう。力、速度それらが相まって破壊力となる。その為の鍛錬に励んできたお陰で、申し分ない破壊力を身につけた。しかし、如何せん我流、制御はいまいちだった。その為、ここ数年はそれに力を注いできた。そして今、心血注いだ甲斐もあり、真髓へと近づきつつある。

右手の小指、その爪のその先端、その一点に力を集中していく。

「はああつ!!」

小指を大岩に突き立てる。当たった箇所小さな傷がひとつ、小指を離すと、ピキピキと大岩が音を立て、バコンという破裂音を響かせ、崩れ去る。

この感覚を忘れぬ内に、繰り返す。三日三晩繰り返す、遂にその境地へと辿り着いた。

「ざれど道はまだ長い。」

真髓に至るも、道のりは続いていく、更なる極みを求め続けることが武の真髓だ。

しかし、ここに至り、ひとつの自信が宿る。己の理想とする戦い方、それに近づいている。『攻撃は最大の防御』、攻めて攻めて攻め続ける戦い方、それが出来なかつた理由はふたつ、相手が脆く攻められないことと、まだ、己の拳に確信的な自信が持てなかつたことだ。

だが、今は違う。

「我が拳に砕けぬものなし…」

確固たる自信がある。

更なる強者が現れることを願い、山を降りた。

まだ使いたくなかったが、仕方ない。借りを返してもらおうべく、去りに際に交換していた連絡先を開く。

「あいつのどこに惚れちまったのやら。」

思い返せば、良かったのは、見た目だけな気がする。世界各国で任務を行う俺は、かなりの数の美女を見てきたが、確かに、あいつはそこの中でもトップクラスだ。

しかし、そんな容姿はどうでもよくなる程、出鱈目な強さとアホさを持つ。普通なら、俺が惚れることはない、地雷臭がプンプンする相手だ。なのに何故か惹かれてしまう。あいつのことを上にも、同僚にも隠してしまう程度には。

今回の任務、本来ならば007に回される予定だったが、負傷中の為、俺に白羽の矢が立った。任務の内容自体は00セクションが出る必要もない、簡単なもの。過激新興宗教によるテロを防ぐべく、先手を打つ破壊工作だ。それだけなら、大した戦闘力もない集団相手に00セクションが出る必要はない。では、何故俺にこの任務が回ってきたのか。内部に潜入していたエージェントの情報で、傭兵を雇っている事が分かった。そいつが問題で、並のエージェントでは太刀打ちできない相手だ。

突如現れた、新進気鋭の傭兵、？要塞”そう呼ばれている。最近ついた異名は？動くマジノ線”。調査してみたが、情報はほとんどなく、どこぞの特殊部隊で訓練されたという噂と、あらゆる攻撃を防ぎ、火力にて制圧する様から、その通り名がついたらしい。

正確な戦力は測れないが、奴の依頼料はRランク武偵よりも遥かに高い、それでもなお依頼が絶えないのを見る限り、かなりの手練れだろう。それこそ、俺たちM16最強のエージェントたる007よりも強い可能性もある。傭兵故、こちらがそれ以上の金を払い、雇うという方法もあるが、予算的に無理だ。

そこで、俺の打てる最善の手として、切り札を切ることにした。

数回呼び出し音の後、

「エイトか、久しぶりだな。どうした?」

トウヤマ・カナコの声が聞こえてくる。

「おう、いきなりで悪いが、お前が言ってた『借り』を返してくれねえか。」

|||||

—??? 視点—

請け負った依頼、その契約満了日、契約延期を頼まれた。金額は増額、期間は同条件、依頼主たちは反吐が出る程嫌いだが、仕事自体は楽だ。それに、そもそもが、好き嫌いで依頼を断ることはしない。金さえ払ってくればどうでもいい。そういうわけで、契約延期に合意し、多めの前金を受け取り、今日一日だけ休暇となった。

大通りから小道に入り、入れ組んだ道を歩いていく。久々に来た街だが、なんとなく道は覚えていいる。普通の人間は近づかない場所、スラム。この一角に傭兵たちの斡旋所、溜まり場となっている酒場がある。

自身の記憶は、こことは違う国のスラムから始まった。気がついたらそこに立っていた。それが記憶の始まりで、その前は思い出せない。何日も洗っていない薄汚れたボロボロの服を纏い、服と同様に汚れた体と髪、その姿で立ち尽くしていた。何故ここにいるのか、何があったのか、それは分からない。分かるのは、捨てられたこと、そして、誰も助けてくれないこと、そして、腹が減っていること、それだけだった。

空腹で幽鬼の様にさまよい、ふらふらと歩いていた時、食料を見つけ、思わず手に取り口にした。当然の如く、持ち主が激昂し、何度も殴られた。止める者はいない、死んでしまってもなんとも思われな。い。そんな街だ。しかし、殴られながら思った。全然痛くない。それ

どころか、本当になぐられてるのかと、疑問に思うほど、何も感じない。

何度殴られようと、平然と立ち、盗んだ食料を食べ続ける姿に、業を煮やし、遂に刃物を手にし、襲ってきた。本能的に避けようとするが、相手は大人でこっちは子どもだ。簡単にその刃物が腹部に届き、思わず目をつぶった。

「ば、化け物っ…!?!」

攻撃していた男の震える声に目を開ける。突き出した刃物が折れ、体には傷ひとつない。何故かは分からないが、どうやらこの体には攻撃が効かないらしい。最悪の境遇に絶望していたが、そうではないらしい。知らなかった自身の力に、思わず笑いがこみ上げ、ケラケラと笑う。

余程不気味に感じたのだろう。攻撃していた男だけでなく、周囲にいた人間までも逃げ去って行く。ひとり佇みながら、残った食料や、価値の有りそうなものをつさう。手頃なズタ袋を見つけ、それに詰め込み、ふらふらと歩き出した。

数日もすれば、ここいらの連中は、この体の異常性を恐れ、近づいて来なくなった。記憶がないせいで、年齢も名前も分からないが、体の大きさからして、10歳以下だろう子どもに、荒くれ者の大人たちが怯える、その姿を横目でみながら過ごしていた。そんな日々もすぐに終わりを告げた。

大規模な空爆、あらゆる場所で爆風が起こり、崩れた建物から瓦礫が落ちる。爆風に吹き飛ばされる者、瓦礫に潰される者、重症を負い呻く者、まさにこの世の地獄、阿鼻叫喚の中に呆然と立ち尽くす。なにが起きているのか分からなかった。分かったのは、無事なのは私だけということ、瓦礫が、爆弾が直撃しようと、痛みもなければ、傷ひとつ受けなていないこと、ただ、それだけだ。怪我也痛みもなくとも、所詮は子ども、連日続く爆撃による精神的なダメージと、水も食料も無くなり、干からびるのを待つだけだった。

「対象発見、辛うじて生きています。」

意識が途絶える直前にそんな声が聞こえた。

目覚めると、白い部屋の中、ベッドに寝かされている。訳が分からないし、意識もはつきりしていない。何よりも、空腹と喉の乾きが尋常じゃない。ベッドの脇、小さなテーブルに水入れを見つけ、横にあるコップには目もくれず、口をつけ、そのまま飲んでいた。そんな最中、白衣の大人たち数人が、部屋に入って来た。

「起きたようだな。体に異常は？」

「ない、けど腹が減ってる。」

喉の乾きが和らぐと、空っぽの胃が気になる。

「食欲があるなら、元気だな。」

「いいから食い物をよこせ。」

白衣の男が溜息をつき、後ろの白衣の男に、分からない言葉で話し始める。話しが終わると、後ろの男が部屋を出る。

「あの空爆でも無傷とはな…」

白衣の男が、私を眺めながらそう言う。

「そんなのどうでもいいから、食い物よこせ。」

「今、取りに行かせてる。来るまでこっちの話も聞いてもらおうぞ。」

男から説明を受ける。空腹でそれどころではなかったが、どうしようもないので、仕方なく聞いていた。ここに来る前にいたのはユーゴスラヴィア連邦共和国、その中のセルビア共和国という国で、そこで爆撃にあつたらしい。記憶がスラム街での数週間しかないの、そんなのかという程度の感想しかない。そこで行き倒れており、保護されたそうだ。

「ほら、飯が届いたぞ。」

ボケツと話を聞いていたら、白衣の男がそう言い、器に入ったカーシヤを差し出される。それを貪り食う姿を見て呆れた様な視線を受けるが、どうでもいい。

「足りない。」

空になった器を差し出す。白衣の男が、溜息をつきながら受け取り、また指示を出していた。結局、3度おかわりをして、食事を終えた。

その後、



「いつかいつか。」

という男の後ろを歩き、個室に入れられた。しばらくして、分かったが、ここは超能力者を集めた研究施設らしい。記憶がなく、名前も分からなかったので、適当にМилица・Миха？ロヴィ？と名付けられた。セルビアで多い名と父称らしい。

それからは毎日、超能力と戦闘の訓練、そして言葉の勉強。少しでも手を抜いたり、覚えが悪いと食事を抜かれるので、必死になった。おかげで何か国語も覚えた。超能力者がわらわらという施設の中でも、この身に宿る力は、群を抜いていた。どんな攻撃も通らないのだ。それを毎日訓練し、能力を向上させ、戦闘能力を身につけていった結果、もはや敵などいなかった。

施設での生活も数年が過ぎ、外に出る機会が多くなった。目隠しをされ、施設の外に連れ出される。車やヘリに乗せられ、戦場へと送り込まれる。それが終われば施設へ戻る。当時知らなかったが、施設の宣伝を兼ねた、兵器としての売込みだった。何度かそんなことをしていると、施設に買い手が殺到した。

一方で施設を脅威と感じた連中も当然出た。考えてみれば、人間兵器製造所だし、軍事産業で利益を得ている国家にとっては、権益を脅かす存在だっただろう。例の如く戦場に出て、施設に帰って来ると、そこは、ただの瓦礫の山と化していた。行く当ても、金もないので、飢えない為に自身が唯一知っている生き方、傭兵の道に進んだ。

戦いの中に身を置き、行きついた自分なりの考え、『守りこそ最大の攻撃』。如何なる攻撃も通さないこの体に高い戦闘能力も、素早さもいらぬ。実際、射撃も格闘も人並みの能力しかないが、他を圧倒している。

相手の攻撃を気にせず、ひたすら火力と制圧能力の高い火器をぶっ放せばいいだけだ。それに、攻撃せずとも、相手に為す術は無い。この能力がある限り、負けることはない。そんな自信は、確信に近づきつつある。

ともあれ、たんまりと貰った前金で、酒でも飲みたい。そんな思いから、酒場の扉を開けるのだった。

## 占いと旅立ち

—キンジ視点—

土曜日の午後、我が家の台所にリサと白雪が立っている。白雪は、実家である星伽神社に戻っていたらしく、土産として様々な食材を持ち込み、リサと共に調理中だ。

「奥様、味付けはいかがでしょうか？」

「うん、美味しいよ、リサ。」

リサは白雪を『奥様』と呼び、うまいこと取り入っており、関係は良好だ。他の面子と白雪が一緒の場合と違って、争いも起こらずに、平和なのは良いのだが、その呼び方はやめて欲しいところだ。

和気藹々と料理をするふたり、完成も近いのだろう。旨そうな匂いが部屋に広がっている。

「キンちゃん、そろそろできるよ。」

台所から白雪が声をかけてくるので、勉強をやめ、机の上を片付ける。食事が終わったら、白雪に教えてもらおう。

豪華な料理が皿に盛られ、運ばれてくる。久々の本格的な和食に、日本人としての本能が刺激される。どんなに美味しいものを食べても、結局、最後は和食に戻ってくる。それが祖国の味ということなのだろう。普段は大したもの食べてないけどね。それこそねこじやらしとか。

「美味そうだな。」

並べられた料理に、素直な感想を述べると、ふたりは嬉しそうに笑顔になる。

「ご飯よそつてあげるね。」

白雪が俺の茶碗を手にし、炊飯器を開ける。

「ああ、ありがとう。」

「大盛りでよかったよね。…ふふ、まるで夫婦みたい。」

茶碗を受け取る。なんか、最後の方が聞こえなかったが、まあ、いいか。

「あれ、リサ、どうしたの?」

突然、なにかに反応したように、ピクリと動いたリサに白雪が声をかける。

「かなこ様がお越しのようです。」

リサの野生のセンサーが、姉さんを察知したらしい。毎度思うけど、どうなってんのそれ?

「えっ!? かなこ様って…、あのかなこ様…?」

恐る恐る俺に聞いてくる白雪。

「あー、言ってなかったな。姉さん今は実家に戻ってるんだ。」

白雪は姉さんについて十分知ってるから、伝えるの忘れてた。

「もう少し早くお戻りされてたら、キンちゃんは留年も退学もしなかったかもね。」

どういうことだ? 首をかしげる俺に、

「極東戦役も、色金の時も、かなこ様がいたら、すぐに終わってただろうし。」

「それは反則じゃないか。」

極東戦役に姉さんが俺たちの傍にいたら、アリアの殻金も外れなかっただろうし、全勢力が潰しにかかっても一瞬で返り討ちにしてるだろう。緋緋神だって、姉さんならワンパンで倒しそうだし、なんなら力で従えそうさ。そしたら俺も活躍することもなく、SDAランクも上がらずに、普通に授業も出れただろうし、留年なんて、しなかったから退学もない…あれ、姉さんが早く帰ってきてたら、今抱えてる問題がほとんど無いぞ。

「出迎えぐ苦勞。食事中だったか、悪いな。」

リサが姉さんを玄関で出迎える。姉さんの声が聞こえると、白雪は、三つ指をついて迎える。

「ご無沙汰しております。かなこ様。」

「おお、白雪も来ておったか、久しぶりだな。ちょうどこの後、星伽神社にも行くこうと思っていたが、手間が省けた。」

「姉さん、今日は何の用なんだ?」

相変わらず突然やって来る姉に呆れながら用件を尋ねる。

「ああ、少し日本を離れるので、教えておこうと思ってな。」

「またどっか行くのか?」

「まあな、以前の様な旅ではない為、用が済めば帰ってくるつもりだが。」

姉さんに用事なんてあるんだ…

「用事って、どこ行くんだ?」

「さあ?知らんぞ。とりあえず、しばらく日本から離れる故、なにかあれば連絡しろ。」

「どこ行くか分からないって…どんな用事だよ…」

このバカ姉は何を考えて生きているのだろうか?

「友人に借りを返してくる。それが用事だ。」

「姉さん友達いたんだ。」

姉さんが借りを作ることよりも、そっちの方が驚きだった。

「友人くらい普通にいる。お前は私をなんだと思っているんだ?」

姉さんは宇宙一の馬鹿で戦闘狂で…口に出すと後が恐ろしいので、沈黙を貫き、心の中で悪態づく。

「金次、失礼なこと考えているだろう。」

「考えてない。姉さんが宇宙一の馬鹿なんて考えてないから。」

威圧的な剣幕で迫られ、思わず口を滑らせてしまう。

「金次、お前とは一度じっくりと語り合わねばならないようだな。」

そう言って、拳をパキパキと鳴らす姉さん。それって拳で語るきだろ。このバーバルコミュニケーションめ。なんとか話題を逸らさねば。

「それは置いといて、姉さんは星伽神社になんの用があったんだよ?」  
「ふんっ!!まあ、少し占って貰おうと思ってな。白雪がいるので手間が省けた。」

結局、一発殴られたが、普段より痛くないし、一発で済んだので、話を逸らした意味は多少あったようだ。

「占いですか…何を占えば?」

「今回の旅を頼む。少し思うところがあったてな。」

姉さんにも乙女なところがあったようだ。占いとか女は好きだよなあ。どうせ碌でもない結果しかでないし、それが大体当たる俺は、

「ご遠慮願いたいが。」

「思うところ…？かなこ様、少し纏う空気が変わりましたが、それになにか関係が？」

リサが、姉さんに尋ねる。なんか変わったか？いつも通りの大馬鹿っぷり全開だけど？

「よく気付いたな。少し己を見つめ直し、鍛錬していたが、ようやく真髓へと至った。それを極めるのにあたり、此度の旅がなんとなく意味がある気がしてな。まあ、勘だが。」

姉さんの野生の勘は恐ろしく当たる。普段はそれに従って生きてる姉さんが、占いに頼るなんて珍しいな。それよりも、

「いや、真髓ってなんだよ？十分強かっただろ、頼むからこれ以上人間やめないでくれよ。」

切実な思いを伝えると、姉さんはキョトンとして、

「何を言っている。私はまだまだ弱い、己の未熟さを痛感している。」

ダメだ、このバカ姉は人間であることを否定したいらしい。

「それでは占いますね。」

白雪が占いを始める。結果が出るまでの間、俺は姉さんと会話する。

「ところで姉さん、前も言ったけど、それ、冷泉さんに言った？」

「…忘れていた。」

あんた学習能力ないのか？ああ、なかったですね。あつたらこんなアホになるはずがない。

「絶対連絡しとけよ。母さんがずっと言ってただろ、人に迷惑かけたらだめだつて。」

「むう、弟に説教される日が来ようとは…」

「毎日の様に何かしらやらかして、母さんに られていた姉さんを見て育ったからな。」

「生意気を言うようになりおつて。」

そう言いながら、姉さんは少し嬉しそうにしている。

「出ました。」

白雪の占いが終わったようだ。

「結果ですが、かなこ様のおっしやっておられる通り、なにか実りのある旅となりそうです。ただ―」

白雪が言い終わる前に、姉さんからとんでもない気が放たれる。あまりの重圧感に白雪は言葉を紡げずにいる。リサが姉さんに感じているのはこれなのか？恐怖とかそういうのではない、明白な死、それが迫ってくる。そんな重圧感、殺気とかそんなちやちなものではない。

「ね、姉さん…」

なんとか言葉を紡ぎだす。

「ああ、済まない。嬉しさでつい気が漏れた。リサ、大丈夫か？」

スウットと、さつきまでの気が引いていく。

「は、はい。なんとか。」

真つ青な顔をしながらも、なんとか気丈に振る舞うリサ。

「悪かった。無理をしなくていい。」

姉さんがリサを優しく横にさせて、休ませ、

「金次、悪いが詫びとして、これでリサになにか買ってやってくれ。私はもう行く。」

そう言いって俺に、万札を握らせる。

「白雪、感謝する。」

姉さんは、そう言い残し姿を消した。

「あ、行っちゃった…。」

白雪が不味い、という顔をして言う。

「白雪、大丈夫か？」

「うん、大丈夫だよ、キンちゃん。ただ、かなこ様、占い最後まで聞いてないの。」

そういえば、確かに、途中までだったな。

「なんだ、なんか悪い結果でも出たのか？」

「悪いのかは分からないけど…：なんでか女難の相が出たから。」

俺ならともかく、姉さんに女難の相？姉さん、またなんか、また変なことを起こすんじゃない？

とりあえず、俺には累が及ばない様に、祈るしかない。

現政権は、遠山さんを私兵としようとしている。そう聞かされ、怒りが湧き上がる。他の武装検事たちも同様に怒りを隠しきれない。

何のために今まで隠していたと思っっているのか、俺たちへの牽制のつもりか、そんな風には紛糾している。先日、嫌という程見せつけられた力、それが私兵として、権力の維持の為に使われる。正義感を持って武装検事となった者たちには許せないようだ。

僕も、遠山さんを我が物にしようなんて、当然許せない。なんなら今すぐにでも、霞ヶ関に強襲をかけたいくらいだ。怒り騒然の場を収めたのは、部長だった。

「落ち着きなさい。冷静に考えてご覧、誰が彼女を従えられるんだい？手厚く保護されて生きてきたハムスターが、何匹集まったところで、虎を従えられると思うのかい？食われるのが落だよ。」

虎の威を借りに行き、虎に食われる。彼女の力を知った今、それは分かる。ただ、

「アレを表に出して、平穏に済みますかね？」

中年の武装検事が発言する。

「そう、そこが一番の問題だ。扱える代物でないと分かった馬鹿どもがどうするか、その予想がつかないし、存在が認知され、欲しがる連中も出てくる筈だ。その前に手を打つ、それが今やるべき事だよ。」

対策会議が始まり、部長が武偵庁や様々な部署と協議した結果、現在上がっている候補を説明している時、遠山さん専用のスマホから、着信音が鳴り響く。部長が目に出ていいと指示する。

「遠山さん、どうされました？」

全員の注目が集まる。

『冷泉。用事ができたので、旅に出る。』

「旅って、何処に行くんです？それに用事って!？」

突然の旅立ち宣言に、パニックになる。

『借りを返しに行く、行き先は知らん。』

「ちよっ、待って下さい、遠山さん！行き先も分からないって!?待って」

『ではもう行く。切るぞ。』

ブツリと通話が切れる。

どうしよう…、恐る恐ると周りを見る。これって担当者の僕の責任になるんですか？

「こりゃあ、飼いならせるわけねえよ。」

「だろう、今回の担当者は大したもんだよ。一応連絡があるんだから。一度も連絡がなかった前任者の俺が保証してやる。」

「相変わらずだねえ、かなこちゃん。」

ベテランの方々が各々、感想を述べ、笑っている。彼女をよく知る者たちには、これはマシな方らしい。

「さて、いなくなったと協力側の各方面に伝えてくるよ。滑稽に彼女を探し回る連中を一緒に笑ってやろうじゃないか。」

そう言つて、席を立つ部長。それに習い、解散する。

少し分かってきたと思つていた遠山さんが、ますます分からなくなつた。

|||||

— 遠山金虎視点 —

山を降りた翌日、エイトから連絡があつた。なんでも、この間送つてくれた恩を返して欲しいらしい。『借りは必ず返せ』遠山家の家訓にもあるし、返さないのは私の流儀にも反する為、内容も聞かずに、二つ返事で答えると、とりあえず、明日の夕方、成田で落ち合うこととなつた。

旅立つことを伝えねばな。金一は忙しそうだし、金次でいいだろ





る。

「姿が見えたのでな。」

そんな理由で心臓に悪い出会いを演出するのかこいつは。

「たく、寿命が縮んだぜ。ほれ、お前さんの航空券だ。…失くしそうだから搭乗まで俺が持つておく。」

事前にとつておいたチケットを渡そうとしたが、思い直す。

「…馬鹿にされた気がする。」

馬鹿にしたからな。

「ところでパスポートは持つてきたのか？」

ノンパスポートで世界旅行をしていた大馬鹿女だからな、一応こつちで用意はしてあるが、

「ちゃんと持つて来たぞ。これだろう。」

巾着型のバックから、緑色のパスポートを取り出し、見せるカナコ。緑って確か、公用パスポートだろ？

「ちよつと、借りるぜ。」

写真は本人：だろうか？若干違和感があるが、押し通せる程度にはそつくりだ。名前は、

「カナコ、本名をフルネームで言えるか？」

「馬鹿にしてるのかっ!!それくらい分かる。遠山金虎だ。」

名前も分からない馬鹿だと思われ、心外なのか怒り心頭だ。全く違う名前が記入されている。恐らく本当の情報は何ひとつ載つてないのだろう。カナコが？をついでいる可能性も無くはないが…この馬鹿がそんな器用なことは出来ないだろうし、すんなりとパスポートを見せるのもおかしい。

国ぐるみで存在を隠してる。こいつと出会った後、それなりに調査したが何ひとつ情報を得られなかったのは、そういうことだったのだろう。

「返すぜ、ありがとうよ。わりいが、今回はこつちを使つてくれ。」

俺が用意したパスポートを渡す。旅券をこのパスポート名義でとつてるし、そつちの方が、スムーズにことが運ぶだろう。

「了解した。」

どうやら先程の怒りは忘れた様だ。

「ところで、行き先は何処なのだ？」

「そういうや言つてなかつたな。頼んでおいたなんだが、よくそれで尾いてくる気になつたな。」

「スコットランドだ。ゴミ掃除をしなきゃなんねえんだが、邪魔する奴がいてな。そいつが中々に強いらしくてな、その相手を頼む。」  
「了解だ。」

嬉しそうに頷くカナコ。強い奴とやり合えるのが楽しみらしい。  
バトルジャンキーかよ。

「金は持つてるか？」

「一応持つてきた。」

「そう言つて、むき出しの札束をひとつ出す。財布持つてねえのかこいつ？」

「んじゃ、両替しに行くか。それで全部か？」

「うむ。」

現金での100万以上の持ち出しは禁止だが、ギリギリセーフか。  
まあ、いくらでもやりようはあるからどうでもいいが。

両替を終え、搭乗時間まで適当にふたりで空港内をぶらつく。

「時間だな。行くぞ。」

「了解した。」

問題なく搭乗し、座席に着く。離陸後、カナコが話しかけてくる。

「それで、行き先の…ダメだ、名前が出ない。」

「スコットランドな。」

もう忘れたのか、

「そこはどこだ？」

まあ、国名も分からんのに場所が分かるわけないか。恐らくこいつはブリテン島が全部イングランドだと思つてるのだろう。タブレットを出し、世界地図を見せる。

「イングランド、イギリスって言えば分かるか？」

「イギリスなら知つている。」

「なら場所はどこだ。」

恐らくブリテン島を指す。そう思っていた。

「これが日本だ。」

何故か日本を指しやがった。

「で？」

「アメリカ。」

それはアメリカ大陸だ。アメリカ以外の国に謝れ。なんでお前は満足そうなんだ？

「イギリスの場所を聞いてるんだが？」

「難しいことを聞くな。眠くなるだろう。」

俺の想像が甘かったらしい。超弩級の大馬鹿に説明を始める。

「いいか、ここがブリテン島。お前ら日本人がイギリスって言う場所だ。だが、正確にはここがイングランドで、ここがスコットランド、んでウェールズ。この3つの国で構成されてて――」

随分と反応がないな。

「すう、すう。」

寝てやがる。なんだ？話しが難しいから寝たのか？お前の脳の処理容量少な過ぎるだろ。規則正しく寝息を立てるカナコの横顔が見える。黙ってりや最高にいい女なんだがな。その顔に触れようとするが、直前で手を止め、CAを呼ぶ。

「いかがなさいました？」

「ブランケットをくれ、連れが寝ちまった。」

「かしこまりました。」

届けられたブランケットをカナコに掛ける。こいつが欲しい、カナコという女を我がものになりたい。俺の男としての欲望が、先程手を伸ばしてしまった。だが分かる、こいつは俺のものにならない。それなのにここで触れてしまっただけは意味がない。最後の最後に手にするから意味がある。

なによりも、眠っている猛獣を触って噛みつかれたら、死んじまうからな。俺も寝るとしよう。

エディンバラ空港に着き、市内へ向かう。まずは宿に入り、作戦の説明（理解できるとは思っていない）だ。

「いいか、今回お前に相手してもらいたいのは、ミラ・ミハイロヴィチ。『動くマジノ線』なんて呼ばれる傭兵だ。」

「まじの…せん…?」

まあ、そうなるか。

「マジノ線ってのはフランスが築いた要塞だ。まあ、迂回されて使われなかったから、無用の長物扱いされたが、難攻不落の鉄壁要塞だ。」

「要塞か…。」

「日本人のおめえさんなら、旅順要塞って言った方が分かりやすいか?」

「おお、乃木大将。」

そういうのは知ってるのか。

「要塞ってのは動かねえが、そいつは人間なんで当然動く。そんなもんが動いてたらゴミ掃除もおちおち出来やしねえ。そこでカナコには足止めを頼む。最悪殺しても問題ないが。」

「殺しは私の流儀ではない。」

「まあ、そこはお前の判断に任せる。頼めるか。」

「当然だ。面白いではないか。旅順要塞、正面突破して見せよう。」

大馬鹿だが、戦闘に関してはなんとも頼もしい味方だ。

「頼んだぜ。行動開始は明日からだ。今日は適当に観光でもするか?」

「うむ、弟たちに土産も買いたい。最近兄弟が増えたからな。」

元氣なご両親だことで。

「赤子に土産って何買うんだ?」

生憎そういう知識は不足している。

「赤子? 増えた家族は、一番下が小学生で他は高校生だ。菓子とかでいいだろう。」

は? なんでそんな年齢の兄弟が突然増えるんだよ、隠し子か?

「待て、意味が分からん。家族ってそんな突然増えねえだろ。」

「どこぞの研究所で生まれたと聞き、私も驚いたが、遠山の血が流れているなら私の家族だ。」

研究所、トウヤマの血…それってGⅢか!! つまりカナコはGの血

族、トウヤマ・コンザの娘つてことか。最近名前を聞くルーキーもトウヤマだったな、サイオンの奴が気にかけていた。名前は――

「トウヤマ・キンジ。」

俺が名前を呟くと、

「愚弟を知っているのか？」

確定だな。

「まあ、新進気鋭のルーキーだ。名前くらいは知ってる。」

「あいつが新進気鋭か、まだまだ未熟者だな。」

そう言いつつ、少し嬉しそうにしている。弟が可愛いらしい。カナコの正体が分かったところで、街に繰り出す。

「いいか、お前は言葉が分かんねえんだから、離れるなよ。」

「分かった。」

十分後、俺はカナコを探していた。

|||||

||

――ミラ・ミハイロヴィチ視点――

酒場の扉を開けると、中にいた客の視線を受ける。知った顔も何人かいるが、無視してカウンターへ向かう。

「とりあえず、エール。」

「あいよ。」

マスターがグラスにエールを注ぎ、カウンターに置く。

「依頼、終わったのか？」

「終わったけど、期間延期してくれてよ。額は上がったんで引き受けた。今日は休暇。」

そう言つて、グラスのエールを一気に飲み干す。

「おかわり。」

「あいよ。羽振りがよさそうだなにより、うちにもたつぱりと金を落としてくれよ。」

「ああ、今日は飲むつもりだ。」

「有難いね。ほらよ。」

差し出されるエールを受け取る。それを飲みながら横に座る少女に話しかける。

「んで、セーラ。ガキがなんで酒場にいった。おめえにやまだ早えぞ。」

「依頼待ち。」

そう言いながら、ブロッコリーを頬張る。

「ところで、ミラの依頼は何処？」

「よくわかんねえ胡散臭い宗教団体だ。なんかしようとしてるみてえだが、金払いはいいし、興味ねえからどうでもいいけどな。」  
「そう。」

モグモグとブロッコリーを咀嚼しながら返事するセーラ。

「俺がどこで何しようとおめえにや関係ねえだろうに。」

エールを煽り、そう言うと、

「ミラとは殺り合いたくない。だからそれに関係する依頼は受けない。」

「ガキの癖に分かってんじゃねえか。おめえじゃ俺には勝てねえよ。」

バフバフとハットの上から頭を叩く。

「た、叩くなあ。それに、ここなら勝ってる。」

ムン、と胸を反らすセーラ。僅かな胸の膨らみが強調される。

「いい度胸してんじゃねえか、糞ガキ。」

顔が引き攣り、青筋が立つ。会話が聞こえてたのか、周囲から笑いが起こる。

「鉄壁の要塞様は、絶壁だからな。」

そんな声が聞こえる。おめえらまとめてぶつ殺すぞ。

「死にてえ奴が多いみてえだな。」

背負っていたPK機関銃を構える。

「ま、待ってくれ、悪かったって。冗談だ。勘弁してくれ。」

平謝りするクソ共に一瞥し、

「ガキが大人をからかうんじゃねえよ。」

セーラの首に銃口を突き付ける。

「ミラ、ごめん。許して、そんなに気にしてるなんて思ってたから。」

「おい、頼むから店を壊さないでくれよ。」

そう言っつて、エールを一杯差し出すマスター、サービスってことか。「マスターに感謝しな。二度目はねえぞ。」

機関銃を背負い直し、席に着くと、ビビった連中が席を立ち、店を出ていき、店内にいた客はほとんどいなくなつた。

ウイスキーを一瓶空け、帰ることにした。

「ごちそうさん。」

マスターに金を渡す。

「おい、多すぎるぜ。いいのか?」

「迷惑料、俺のせいで客が減つたからな。」

「また来てくれ、次はサービスするよ。」

「おう、楽しみにしてるよ。」

店を出ると、ほろ酔いの頭に新鮮な空気が送り込まれる。道にはガラの悪い奴らがたむろしているが、背中の機関銃にギョツとしたように、絡まれることはない。

「もう一軒行くか。」

もう少し飲みたい。そう思い道を歩いていくと、スラムに相応しくないブロンド髪の美人が絡まれている。ガラの悪い男どもに、卑猥な言葉をかけられているが、状況が分かっていないようだ。迷い込んだのか? バカな奴だ。誰も助けてはしないだろう。そういう場所だ。それに、

「バカみてえにデケエ乳しやがつて、自業自得だ。」

巨乳憎し、その女の胸がデカイ、それが一番許せない。無視して道を進むと、ひとりの男の手が、女の胸に伸びた、

「痴れ者め。」

日本語? 女の声に反応し、そちらを見る。手を伸ばしていた男が崩れ落ち、気を失っている。あの女、強えな。戦いの勘がそう告げる。

間抜けどもはまだ気づかないのか、ギャーギャーと騒ぎ立てる。

「煩わしいな、弱い男に興味はない。」



女が殺気を放つ、それでようやく気付いたのか、蜘蛛の子を散らす様に、逃げていく。何者だあの女？興味が湧いた俺は、

「おい、姉ちゃん、日本人か？何してんだこんな所で？」

日本語で話しかけてやる。

「日本語が分かるのか、有難い。友人と観光にきたが、そいつが迷子になっててな。探していたが言葉も分からぬし、場所も分からぬ。」

「友人も日本人か？」

「イギリス人だ。」

迷子になってるのはこいつだな。なんで自分が迷子の可能性を考えないんだ？あれか、胸に栄養取られて、頭にいつてないタイプだな。「高いところから探せよ。」

とりあえず、この巨乳バカをからかうことにする。

「成程、賢いな。」

こいつは本物だな。バカと煙は高いところが好きと言うが、本当らしい。

「助言、感謝する。」

「構わねえよ、見つかるといいな。」

笑いを堪え、そう言う。からかい足りないが、まあ、いいだろう。そう思っていた時、

「上空から見る、盲点だった。」

バカが、そう言いながら、空中を階段の様に、昇っていた。

「いやいや、ちよつと待ておかしいだろ。」

なんで空中を歩ける？バカだから信じたら出来ちゃうのか？俺の言葉は届かず、

「お、見つけた。」

そう言って、消えた。

「そんなに酔ってるつもりはなかったが…」

明日から仕事だし、帰ろう。飲み過ぎたみたいだ。

## 矛盾

—遠山金虎視点—

エイトと観光に出て、ふたりで街を歩いている。初めて訪れた街というのは新鮮で、あちこちに目移りしてしまう。弟や妹たちへの土産はなにがいいだろうか？ そうだ、リサとパトラにも買って行こう。占いの礼もある、白雪にも買っておかねばな。

む、不思議な気を感じる。こっちからだな。小道に入って行き、進むと、怪しげな店が建ち並ぶ通りに出る。気の変化が変ったな。戦いを終えたか、辞めたのか、とりあえず、落ち着いてしまっている。

「確かここ辺りだったと思うが…どう思う？」

感じた気の変化を頼りに場所を探るが、正確に分からず、共に観光している友人に声を掛けるが、返事がない。

「おい、聞いているのか。」

振り向くが、友人の姿がない。

「迷子か、仕方のない奴だ。」

全く、あれ程離れるなど言っておきながら、自分が離れるとは。気の正体を探るのをやめ、搜索を開始しようと周りを見る。

「ここはどこだ？」

看板も英語だろうか？ で書かれて読めない。参ったな。しようがないので、適当に歩いていると、男たちに囲まれる。何を言っているのか分からないが、ニタニタと笑っている。

「日本語で頼みたいのだが。」

…どうやら通じないようだ。男たちの目的も分からないし、困ったな。そんな時、ひとりの男が、私の胸を目指し、手を伸ばしてきた。「痴れ者め。」

手が届く前に、軽く拳を入れると、崩れ落ち、気絶してしまった。弱すぎるな。まあ、男たちの目的は分かった。

「煩わしいな、弱い男に興味はない。」

気を放ち、通じないのだろうが、一応そう伝えておく。強くなって

出直してこい。気を受けた男たちが去った後、

「おい、姉ちゃん、日本人か？何してんだこんな所で？」

日本語で女から話しかけられる。

「日本語が分かるのか、有難い。友人と観光にきたが、そいつが迷子になっててな。探していたが言葉も分からぬし、場所も分からぬ。」

事情を説明する。

「友人も日本人か？」

私と同様に友人が言葉が通じないのでは、と心配してくれてるのだろう。優しい奴だな。

「イギリス人だ。」

だから心配無用だ。女は少し考えて、

「高いところから探せよ。」

と助言をくれた。確かにそうだ、上空から見渡せば道に迷うこともないし、簡単に探せるではないか。

「成程、賢いな。」

素直に感心してしまう。私も、もう少し柔軟な発想というものを持つべきだな。

「助言、感謝する。」

「構わねえよ、見つかるといいな。」

いい奴だ。

「上空から見る、盲点だった。」

そう言いながら、上空へと駆け上る。よく見える、最初からこうしておけばよかったな。

「お、見つけた。」

エイトを見つけたので、そちらに走って向かい、正面に降り立つ。

「全く、探したぞ。」

そういえば、あの女に礼を言ってなかったな。

||

|||||

「いいか、お前は言葉が分かんねえんだから、離れるなよ。」  
「分かった。」

そんな会話の数分後、カナコが消えた。

「あのバカ、早速迷子かよ。」

しばらく搜索を行うが、見つからない。電話も掛けるが出ない。  
「どこ行きやがった。」

人の流れが見やすい場所につくと、溜息をつき、周囲を見みる。いねえなあ。

「全く、探したぞ。」

目の前に突然現れるカナコ。

「と、突然現れるんじゃないやねあって、言っただろうが…」

また寿命が縮んだぞ。あと探してたのは俺の方だ。脈が落ち着くまで深呼吸をし、

「何処行ってやがった、離れるなど言っただろうが。」

「む、離れたのはそっちだろう。」

何故か俺が迷子になったと言いたいらしい。

「カナコ、お前は最初、俺の後ろを尾いてきてたよな。」

「そうだ。」

よし、それは忘れてないな。

「俺は、途中振り向いたらお前がいなかった。おかしいよな。」

「私は、気になることがあったので小道に入ったぞ？なぜ尾いてこない？あれ、尾いて行くのは私か？」

首をかしげ、自分が何を言っているのか分からなくなっている。

「迷子になったのはお前だ。いいか、次は離れんじゃねえぞ。」

「分かった。」

そう言うと、俺の左腕の肘に、右腕を通し、

「これなら離れないぞ。」

と、大発見した!!という顔を向けてくる。いや、これは嬉しいが、こいつ、分かってやってんのか？

「どうだ、凄いだらう。私も柔軟な発想というのを身につけたぞ。」

うん、このバカにそんな計算は出来ないな。

「さあ、行くぞ。」

カナコが、グイグイと俺の腕を引つ張る度に、巨大な胸に肘が当たる。職業柄、ハニートラップに会うこともあったが、そんな計算高い女とはこいつは違う。

天然物つて恐ろしいな。俺以外にもこんなことしてるのだろうか？ 柄にもなく、嫉妬の炎が小さくだが燃える。

まあ、今はこの時間を楽しむとしよう。

「土産買うんだろ？ 何にするか決めたのか？」

「分からん、名産品はなんだ？」

「まあ、ウイスキーだな。あとはタータンチェックの物とか、カシミヤとかだな。」

「ウイスキーは爺様に買おう。あとはよくわからん。」

「見ながら決めるか。」

エディンバラは観光地でもあり、土産向けの店も多い、ぶらつきながら、建ち並ぶ店舗を見ていくと、目に止まったのか、カナコは妹たちに、タータンチェック柄の帽子とベストをきたテイベアを2匹を買い、その後案内した店で弟たちにハリスツイードのタータンチェック柄のハンカチを買っていた。

「あとはウイスキーか？」

店を出て、そう尋ねる。

「そうだな。私は詳しくないからな、お前のオススメを教えてください。」

「それなら任せろ。」

ウイスキー専門店へ行き、あーだこーだと言いながら、選ぶ。

「なんだ、お前も買うのか？」

「晩酌用だ。お前こそ買いきじやねえのか？」

ウルヴァリンの様にボトル持つをカナコにそう言う。というか、握カスゲエな。

「こっちは土産でこっちは私用だ。」

右、左、と腕を上げながらそう言う。酒好きなのか。

「んじや、荷物置いたら酒場でも行くか？」

「おお、いいな。」

そんなじゃあ、こいつは不要だな。晩酌用にと持っていたウイスキーを棚に戻し、カナコの会計を済ませる。そういや、こいつ…

店を出て、少し歩いたところで、声をかける。

「少しここで待ってる。すぐに戻るから、いいか、絶対に動くなよ。」

「別に構わぬが？」

キョトンと首をかしげるカナコを置き、用事を済ませに行く。

「悪い、待たせたな。」

「用は済んだのか？」

「ああ、終わったよ。」

それから宿に戻り、カナコの部屋に荷物を置いてみると、

「そうだ、これを渡すのだった。」

カナコが小さな紙袋を俺に渡してくる。

「開けていいのか？」

「当然だ。」

袋を開けると、黄と黒のタータンチェック柄のハリスツイードのハンカチが入っている。

「今日の礼だ。お陰で土産もたくさん買った。」

そして、同じハンカチを取り出し、

「虎柄だ、いいだろう。」

ニッコリと笑うカナコ。金？虎？ってことか。先越されっちまったな。

「ありがとよ。ほれ、俺からも。」

プレゼント用に梱包された箱を渡す。予想外で驚いたのか、箱を手にし、ポカンとしている。

「開けてくれよ。」

「そうだな。」

俺の声に、ハツとした様子で梱包を剥ぎ、箱を開ける。

「これは…先程買ったのか？」

バーバリーの財布を手にし、聞いてくる。

「まあな、いい大人なんだ、財布くらい持て。」

ウイスキー専門店でこいつが財布を持っていないのを思い出し、急遽思いついたプレゼントだった。

「いいのか、高いのだろうか？」

「気にすんな、まあ、今回の謝礼とでも思ってくれ。」

実際、少々腕の立つ傭兵の契約金と比べれば微々たるもんだ。

「借りを返しに来たというのに、これでは借りを返しきれないではないか。」

そう言いながらも、顔は笑っている。

「んじや、また今度返してくれ。」

もう一度切り札が手に入るのは有難い。

「ああ、任せろ。」

頼もしい返事だな。

ふたりで軽く食事を済ませ、酒場に向かった。

明日の仕事、その心配よりも、今この時間が、最高に楽しかった。

|||||

||

——ミラ・ミハイロヴィチ視点——

暇だな。そういや、昨日見た夢は凄かったな。わけわかんねえ奴だったな。この世界には、あんな奴もいるのかな……いや、その代表格は俺だな。この防御能力も、他から見りゃ同じだな。……ってことは、あれは夢じゃねえのか？まあ、どうでもいいか。

依頼されている施設の入口に陣取り、侵入を防ぐ、今すべきことはそれだけだ。自前のPK機関銃以外にも大量の火器を取り揃えている。俺の防御力とこの火力、正しく要塞だな。

手榴弾のピンを抜き、ポイツ、と上向きに投げる。俺の頭に当たり、爆発するが、なんともないし、熱も感じない。寒い、暑い、そんな感覚さえこの体には与えられない。体内に入った毒さえ跳ね返すことも分かっている。あん時は突然ゲロ吐いて俺が一番ビビった。

最強の防御力、この能力は有難いし、助かってるが、

「退屈だ。」

依頼通り、ここを守っているが、何も起きないし、刺激もない。

「傭兵も飽きてきたな。」

刺激のない日々嫌気が差してきた。だからだろうか、昨日の奇怪な女、あれは中々に刺激があった。

「夢じゃない方が面白いかもな。」

そう呟き、酒瓶を煽る。もし今度会ったら名前でも聞いておこう。そんな空想に浸っていた。

だからだろうか？あの女が目の前に突然現れた。

「俺、寝てんのかね？」

それとも、飲み過ぎだろうか？一口しか飲んでいない酒瓶を見る。そりゃねえか。

「礼を言うのを忘れていたので、気にしていたが、また会えてなによりだ。昨日は助かった。礼を言うぞ。」

冗談を真に受けて、感謝までされるとはな。

「おう、姉ちゃん。俺も会いたいと思ってたぜ。」

ちよつとした願いが叶い、退屈が吹っ飛んだ。

「なんでこんな辺鄙な場所に来てんだ？観光するにも何もねえぜ。」  
怪しげな施設以外はな。

「人を探しているのだ。」

また迷子かよ。

『要塞』と呼ばれている傭兵が、ここにいると言われたのだが。なに  
か知らぬか？」

俺をお探しだったか。依頼か？それとも――

「知ってるぜ、教えてもいいが、ふたつ聞いていいか？」

「おお、知っているのか!!有難い。なんでも聞くがよい。」

「んじや、まずは、姉ちゃんの名前を教えてください。」

「遠山金虎だ。」

トウヤマの名は聞いたことがあるが、その名前は聞いたことねえな。まあいい、トウヤマ・カナコ、覚えたぜ。

「ありがとよ。じゃあ次、『要塞』に会ってどうすんだ？」



「手合わせ願いたい。」

へえ、俺と正面から殺り合おうって奴がまだいたか。面白えが…結局、今までと同じだ、俺に何のダメージも入れられずに終わるだろう。だが、

「そうかい、んじや、俺も教えてやる。俺がミラ・ミハイロヴィチ、ご所望の『要塞』だ。」

ガシャン、とPK機関銃を構えると、口角が上がる。巨乳撲滅委員会のミラ様が、自ら巨乳狩りだ。

「そうか、巡り合わせとは、なんとも奇妙で面白いものだな。」

カナコと名乗った女も口角を上げる。

「んじや、始めつか。」

そう言つて、引き金を引くき、弾丸が連射で放たれる。さあ、どうする？

||

|||||

— 遠山金虎視点 —

人の出会いとは面白いものだ。私に助言を与えた者が、倒すべき強者であるとはな。

「んじや、始めつか。」

ミラと名乗ったその者が、機関銃を乱射する。ではこちらも動くでしょう。

「ふっ。」

ひとつ息を吐き、駆け出す。飛来する弾丸を撃ち落としながら、奴の眼前に迫り、

「はっ!!」

拳を叩き込む。ミラの体が僅かに浮くが、この感触は…

「攻撃で体が浮いたのは初めてだな。驚いたぜ、こんな火力のある人間がいるんだな。」

やはり効いていないか。『要塞』の名は伊達ではないらしい。しか

し、

「久々に加減をしなくてもよいようだな。楽しませてもらうぞ。」

楽しい、こいつ相手なら、存分に拳を振るえる様だ。

「そりゃあ、こっちの台詞だ。俺に刺激をくれよ。」

ならば、遠慮なく行かせてもらおう。

高速のアップercutでミラの体を浮かせると、連撃を叩き込む。

…これも効いていないな。ならば、

「これならどうだ？」

浮き上がった奴の体に、気を纏わせた拳を叩き込み、地面に叩きつける。衝撃で地面が窪み、砂埃が舞う。

「あーあ、壊れちゃった。」

衝撃でスクラップと化した機関銃を手に、起き上がってきた。

「武器チェンジしてもいいか？」

「別に構わぬが。」

多少障壁に傷を入れたと思っただが、ダメージは通らなかつたようだな。

それならば火力を上げてでも大丈夫だな。

ロケットランチャーと機関銃を担いでやって来る『要塞』を見て、口角が上がった。

|||||

||

—ミラ・ミハイロヴィチ視点—

楽しい、記憶の始まり以来、味わったことの無い高揚感がこの身に宿る。あいつが動き出してから驚きの連続だ。

まず、速い、速すぎる。移動も攻撃も全く見えない。気がついたら目の前にいやがるし、気がついたら攻撃されてる。そしてその火力、初めて体験する威力だ。爆撃をモロに受けてもなんともないこの体が衝撃で浮いたのだから。

それになにより、最後に叩きつけられた一撃。

「俺の守りにヒビを入れやがった。」

武器を手に取りながら呟く。常時展開されている最低出力の障壁ではあるが、それにヒビを入れやがった。あのままもう一撃入れられていたら破られていただろう。最も、出力を上げればなんということもないのだが。

「これでいいか。」

ロケットトランチャー<sup>S</sup>とM60機関銃<sup>M</sup>を取り、再びあいつと向かい合う。

「悪い、待たせたな。再開だっ!!」

再開の合図と言わんばかりにSMAWをぶっ放つ。

撃ち落としやがった…、回し蹴りで。

「おい待て、なんで無傷なんだよ!!」

俺も人のことは言えないが、おかしいだろうが!!

「気合いだ。」

意味が分からねえ。

「では、こちらも。」

そう言ったバカ女の体を金色の光が包む。そんな感じはしなかったが、こいつも超能力者なのか？

「いくぞ。」

光が右手に集まり、

「はあっ!!」

右手を突き出す。これはヤバいっ!!本能的に障壁の出力を最大に上げる。

「くうっ!!」

右手から放たれた虎?が俺に襲い掛かる。パリパリと障壁が破壊されていくのが分かる。ヤバイヤバイヤバイ、玉葱の皮を剥く様に、一枚、また一枚と障壁が破られていく。

ドンッ!大きな衝撃音と共に、虎が消える。

耐えきった…:大きなクレーターが出来ており、施設の入口も消し飛んでいるし、火器も全滅だ。マジでヤバかった。バクバクと心臓が脈打つのが分かる。こんなスリル、この身に宿る力を知って以来味わっ

たことが無い。

思わず笑いが込み上げてくる。

「いいよ、最高だよあんた。」

笑いながらそう言う俺に、ニヤリと笑い、

「私も楽しい、あの技を人に向けたのは初めてだ。」

そうだろうな、こいつはパンチでさえ爆撃以上の威力だ、普通の人間ならそれさえ耐えられないだろうからな。こいつも、俺と同じで退屈してたのかもな。

「俺以外に向けんなよ。ありやあ、骨も残らねえぞ。」

「そうだな、気をつけよう。」

ふふふ、とお互いに笑い、

「てか、ありやなんだ？あんたも超能力者…いや、魔女か？」

純粋な疑問をぶつける。

「何故かよくその質問を受けるが、私は超能力者でも魔女でもない。あれは気合いだ。」

何故かって、そりやああれは超常現象の類だろう。その疑問は至極当然だし、気合いと言われる方が理解できない。だが、そんなことはどうでもいい。

「そうかい、まあ耐えたからどうでもいいか。」

「大した堅牢っぷりだな。正直驚いている。ここまでしても突破出来ぬとは、流石『要塞』と言ったところか。」

そう、今まで殺り合ってきた奴らは、俺の守りを突破出来ず、俺に殺られるか、尻尾巻いて逃げるかだった。あんたはどっちだ？

||

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

—遠山金虎視点—

難攻不落、エイトの奴が言っていた通り、『旅順要塞』の様だ。

しかし、乃木大将の第三軍によって旅順は落ちた。ならばそれに倣うのみ。



祈ることはそれだけだ。

## 要塞陥落

—ミラ・ミハイロヴィチ視点—

「我が拳に砕けぬものなし。」

最強の盾、そう言った俺に対しそう言い放つ。そんな話が中国の故事にあつたな。確か、何物をも貫く矛と何物をも通さない盾だったか？今回は拳と超能力だが、どうなるのかねえ？

さっきのよくわからん虎を出してきた技、あれはヤバかった。ギリギリで耐えきった、そう認めるしかない。あれの出力を上げれるとしたら…

消し炭だな。だが、次の技はあれじゃない。こいつはなにか別のことをしようとしている、そんな気がするのだ。じゃあ、防ぎきれぬのか？分からない。こんなことは初めてだ。この力を自覚して以来、そんな不安を抱いたことはなかった。守りきれば俺の勝ち、そんな戦い方をしてきたが、絶対に守りきれぬ、その自信があつた。

だが、今は違う。もしかしたら…それを有り得ないと否定しきれない自分がいる。

「あんと俺の戦い方は真逆だ。」

「そのようだな。」

そう、防御特化の俺に対し、あいつはストロングスタイルの攻撃特化型だ。だからこそ、

「守り抜いたら俺の勝ちでいいか？俺にはあんたを倒せる火力はねえ。でも、あんたが俺の守りを突破出来なかつたら、千日手、決着はつかねえ。」

勝利条件が必要だ。

「構わん。楽しいかつたが、次で終わりにしよう。」

「負け惜しみはなしだぜっ!!」

次の一発で勝負が決まる筈だ。だから、負け惜しみも言い訳も出来ない、最大出力で最強の障壁を纏う。





そんなことを思っていた俺の耳元で、そう呟いてきた。

「なに言ってるんだ？」

もう俺の勝ちが決まったのだろうか？最後の一撃が終わったのだから。ピキッ、ピキッ、と音が聞こえる。

「？だろ…」

障壁に入った傷が音を立て広がっていく。それは大きな亀裂となり、砕け散る。

「は…はは、マジかよ…」

不安と歓喜が混ざり、それ以上言葉が出てこない。これから初めての痛みを感じるのだ、その恐怖と喜び、自分が心の中で願っていたものが、もたらされたのだ。

「ああああっ!？」

拳が当たった場所から、脳まで、一気に信号が送られ、呻きながら蹲る。拳を当てられた箇所が熱を持つち、今まで感じたことのない初めて感覚が脳を支配し、混乱する。

「はっ…はあ…はあ…」

呼吸が乱れ、瞳に涙が薄っすら浮かぶ。これが痛み…これが痛いって感覚…顔を上げ、この痛みを与えた人物を見上げると、膝をつき、視線を合わせてくる。

「楽しい時間だったぞ、ミラ。」

俺の方に優しく手を置く。その手の感触と温度も伝わってくる。驚きの表情を浮かべると、瞳から溢れた雫が頬を伝う。パニツって障壁が消えてるのか…無意識に展開され、消すことの出来なかった障壁が無くなり、手の温もりが伝わってくる。

「人の手って温かいんだな…」

何故だか涙が溢れ出してくる。初めて負けた悔しき、初めて味わった痛み、初めて感じた温もり、様々な初めてが交錯し、

「うわああああっ!!」

声を上げて泣いた。

「存分に泣くといい。」

そう言って、優しく抱きしめられる。その大きな胸に顔を埋め、嗚

咽を上げながら泣きじゃくった。

あれ程憎かった巨乳、そこから伝わる温もりと香りに、不思議と安心していた。

「うう…」

落ち着きを取り戻し、涙も引つ込んだ。脳も正常に戻ったのか、温もりも感触も感じなくなっていた。少し名残惜しいように顔を上げる。

「もう、大丈夫か？」

整った顔立ち、その吸い込まれそうな優しい瞳にドキリとする。

「あ、ああ、もう大丈夫だ…」

思わず顔を逸らし、そう答える。自身の体温が上がり、心臓が激しく脈打つのが分かる。この感情はなんと表現するのだろうか？特別…そう表現するのだろうか？初めての敗北と痛み、そして温もりを与えてくれた、だから特別…

「ミラ。」

俺の名前をあいつが呼ぶ。その声にドキリとし、顔を見ると鼓動が大きくなる。

「な、なんだよ。」

思わず声が裏返ってしまふ。

「楽しかったぞ。」

お前はどうかだった？そう目で問いかけてくる。そうだな、俺も…

「俺も、楽しかった…戦いを楽しいと思ったのは、初めてだ。」

そう、楽しかったのだ。こんなにも感情が動かされたことはない。

「そうか、それは良かった。あちらも仕事が終わった様だな。」

あちら？カナコの視線の先、俺の後ろを確認すると、施設からひとりの男が出てきている。やべ、依頼忘れてた。まんまとこいつらの作戦に嵌ったらしい。

「ちえ、今回は前金だけかよ。」

初めての依頼失敗。今日は初めて尽くしだな。施設から出てくる男に手を振るカナコ。その姿に胸がズキリと痛む。仕事上のパートナーなのだろうか？それとも、恋人なのか…？そう考えると、さつき

のよりも胸の痛みが大きくなる。仕事が終わったから、あいつとどこかに行ってしまうのだろうか？それは嫌だ：

「なんだ？突然どうした？」

気がついたら、カナコに抱きついていていた。俺の行動に驚くカナコに、何も答えず、ひたすらしがみつく。

「案外甘えん坊なのだな。」

小さく笑って頭を優しく撫でられる。その感触も温もりも伝わらないが、それでも嬉しかった。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

||

—008 視点—

仕事を一通り終え、施設から出てこうとしていた。入口だった場所付近（見事に消し飛んでいる）に着くと、カナコと『要塞』の姿が見える。どんな決着となったのか、少し興味がある。予想ではカナコが『要塞』を陥落させてると思っていたが、あの姿を見る限り、決着がつかなかったのだろうか？だとしたら『要塞』もとんでもない化物ということになるな。

こちらに気付いたカナコが小さく手を振ってくる。まあ、あの余裕っぷりからしたら、恐らく格付けは済んだということだから、カナコの方が強かったのだろう。俺も同じく手を振り返していると、『要塞』がカナコに抱きつく。そして頭を撫でられ、満面の笑みを浮かべてやがる。

「何やってんだ？」

「知らん。終わったのか？」

俺の疑問にそう答え、逆に聞いてくる。

「ああ、お陰様だな。少し離れるぞ。…そいつは？」

爆破する為に施設から離れる様に言うと、

「そうか、ミラ、お前はどうするのだ？」

カナコが抱きついていて『要塞』に聞く、

「…ついでく。」

何故か俺を睨みながらそう答え、

「こいつ誰だよ。」

カナコを見上げる、そう言う。

「昨日会った時に言っていた友人だ。」

カナコがそう答える。友人なんだな…分かってはいたが、少しガツカリする俺に『要塞』がニヤリと笑い、

「ああ、迷子の？友人」。

「違い、迷子はこいつだ!!」

カナコを指す。え、なにこいつ、昨日俺が迷子って言って探してたの？マジでやめろよ。あと、？友人”を強調すんじゃないか。

「とりあえず、話は後だ、離脱すんぞ。」

ある程度距離で、爆破スイッチを押すと、爆発音の後、大きな音を立てて崩れ落ちる。

「終わったな。飛行機は明日だが、どうする？」

カナコに尋ねると、

「そうだな、一杯やるとしよう。」

「お、いいな。」

仕事終わりの打ち上げか、中々にいいじゃねえか。

「…俺も行く。」

こいつがいなけりやな。

「なんだ、ミラも行きたいのか？」

カナコの問いに、『要塞』がこくりと頷く。

「そうだな、旅順要塞を落とした乃木大将も、水師営にて敵将ステツセリとの会見で互いの武勇を讃えあった…私たちもそうするか。」

カナコの言葉に、一層強く抱きしめる『要塞』。落とすって、そつちの意味で落としてんじゃないか!!

チラッと『要塞』と目が合った瞬間、べーっ、と舌を出してきやがり、イラッ、とする。ぜってえこいつには負けねえ。そう心に決めた。

|||||

||

—ミラ・ミハイロヴィチ視点—

酒場、誰かと来ることなんて一度もなかった。でも今は違う。隣に座るトウヤマ・カナコを見つめながら、ウイスキーの入ったグラスを口に運ぶ。普段より美味しい気がする。

「ミラ、歳はいくつなのだ？」

「多分22歳。カナコは？」

研究所施設で出された推定年齢を答える。

「私は23だ。多分とは？」

同じくくらの年齢とは思っていたが、1つ上か。とりあえず、カナコに生い立ちを説明すると、

「そうか、苦労したのだな。」

「想像している程苦労はしてないと思うぜ。」

実際、能力のお陰で対して苦労はなかった。でも、

「家族は欲しかったかもな。」

最初からいなかったから、今まで何とも思っていなかった。だが、こうして人の温もりを知ってしまうと、少しそういうものが羨ましく感じる。

「家族はいいものだぞ。私は弟が3人と妹が2人いるが、それが心の支えでもある。」

そう言っつて、ウイスキーを飲むカナコ。

「家族か…」

そう呟いてウイスキーを煽る。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

||

—008視点—

「便所行ってくる。」

本部への任務完了の連絡も兼ね、席を立つ。連絡を終え、小便秘器で用を足していると、

「お前、カナコに惚れてんだろ。」

「おまつ、ここ男子便所だぞっ!？」

用を足す俺の横に『要塞』が立っている。

「どうでもいいだろ、答えろよ。」

どうでもいいことはないだろ、倫理的に。

「自分でもなんでなのか分かんねえけどよ、惚れてる。お前もだろ？」

そう答えると、

「べ、別にそんなんじゃないやねえっ!!…ただ、お前は嫌いだった。」

顔を真っ赤にして叫ぶ、それ好きって言ってるようなもんだぞ。

「嫌いで結構、俺もお前は嫌いだ。」

「うるせえバーカ、小便しながら話かけんじゃねえっ!!」

そう言っつて、便所を後にする。ガキかあいつは。それに、

「いや、おかしいだろ。」

人の小便中に入って来たの、お前じゃねえか。

席に戻ると、顔を赤くして、もじもじとしている『要塞』がいた。己の感情を自覚し、恥ずかしい様だが、俺を見ると、フーツ、と猫の様に威嚇してくる。どうやら敵認定されたらしい。

「もう使ってくれていたのか。」

ハンカチで手を拭いていた俺を見て、カナコがそう言う。

「折角の貰いモンだからな。」

そう言っつて、『要塞』に見せつける様にひらひらと振って見せると、悔しそうに睨みつけてくる。

「私も有難く使わせて貰っている。」

そう言っつて、昨日プレゼントした財布を取り出す。

「そうかい、気に入ってくれてなによりだ。」

そう言っつて、『要塞』に向かってニヤリと笑う。

ガタンツ、と音を立てて『要塞』が立ち上がる。ありや、キレたか？そう思っていると、

「カナコ、俺、お前のモノになるっ!!」

突拍子もないことを言い出した。

「ミラは私の友人だ。私は友人をモノ扱いなどせぬ。」

「友人じゃ嫌だ。」

「友人のなにか嫌なんだ？」

カナコの問いかけに、

「うっ、その…友達よりももっと…その…親密な…」

顔を真っ赤にしてもじもじとします『要塞』。そこで日和るのかよ。

そんな姿を見て、カナコがなにかを察した様に、

「そうか、分かった。…簡略だが、まあ、いいだろう。」

そう言っつて、ウイスキーをグラスに並々と注ぎ、半分より少し多く

飲み、

「ミラ、飲め。」

そう言っつて、そのグラスを差し出し、受け取った『要塞』はよく分

からないという表情で飲み干す。それっつて…

「姉妹の盃を交わした。これよりミラは私の義妹だ。」

ですよね。『要塞』も、えっ!?という顔をしている。残念ながら、カ

ナコには回りくどい表現は通じないらしい。

「家族が欲しかったと言っつていたが、そうか、私の妹分になりたかった

のだな。」

カナコが、ハハハと、笑いながら『要塞』をバシバシと叩く。『要塞』

は、魂が抜けた様に呆然としていたが、

「姐あねさんっ!!」

とカナコに抱きつく。そして俺に勝ち誇った様な笑みを向けてく

る。

…いや、お前、それでいいのかよ。

|||||

||

—ミラ・ミハイロヴィチ視点—

「家族が欲しかったと言っつていたが、そうか、私の妹分になりたかったのだな。」

カナコがそう言っつて、障壁に守られた俺の肩を叩いている。違う!!

そうじゃない!! そう言いたかったが、一世一代の告白が空振りした俺は、呆然としながら考えていた。

待てよ、妹分、いい立ち位置なんじゃないか？ 仮に訂正して、恋人になってくれと伝えても、カナコにそっちの気がなかったら、振られるだけだし、そもそも知り合ったばかりの俺が告白してOKされる可能性は低い。 そもそもあの男に触発されて、思わず言ってしまったのだ。 妹分となり、カナコの傍で障害となりそうな奴らを排除しつつ、お互いを知っていく方がいいのではないだろうか。

考えてが纏まり、今後の計画も決定した俺は、現実に意識を戻し、「<sup>あね</sup>姐さんっ!!」

そう言っつて、カナコに抱きつき、気に入らないあの野郎に勝利宣言の笑みを向ける。俺の勝ちだ。

それから、カナコにベツタリとくつついて勝利の美酒に酔いしれる。

「あ、そういや帰国のチケット、明日なんだが、日程ずらしてもいいか？」

「構わんが、どうしたのだ？」

「本国に仕事の報告に行くことになってな、その日だと送ってやれねえからな。」

「英語が分からぬ故、空港で迷いそうだ。」

カナコ、ひとりで飛行機乗れないのか…バ、いや、可愛いな。 そうバ可愛い。 しかし、これはこの男からカナコを引き？ がすチャンスだ。

「俺が案内するぜ。 姐さん。 そしたら明日帰れるぞ。」

「いいのか、ミラ？」

「おう、俺も日本行きてえ。」

俺がそう言っつと、あの野郎が恨めしいそうに睨んでくるが、気にしない。

「そうか、では一緒に行くか。」

決まった。

「オラオラ、チケット寄越せや。」



男の手からチケットをふんだくろうとする。

「てめえっ!!」

ガンのつけ合いが始まる。

「お前たちも仲がいいな。」

睨み合う俺たちにカナコがそう言う。

「仲良くななかねえっ!!」

なんでこの険悪な雰囲気がそう見えるんだ？

「そうなのか？まあ、いい。エイト、世話になったな。また何かあったら呼んでくれ。これの礼もしたい。」

そう言って、財布を見せるカナコ。それを見て、エイトと呼ばれている男が、

「今回だけ譲ってやる。」

と俺に囁き、チケットを握っていた手を離す。俺はべーつと舌を出し、カナコの隣に戻る。

「楽しみだなあ、日本。」

|||||

||

—幕間〜白雪の記憶〜—

「リサ、大丈夫？」

かなこ様が去った後、横になり、少し顔色が戻ったりリサに声をかける。

「はい、ありがとうございます。大分良くなりました。それよりも奥様の顔色もよろしくありません。リサの心配よりもご自分の心配をなさって下さい。」

リサが気丈に振る舞い、そう言う。：やっぱりバレちゃったか、リサはいい子だね。

「白雪、俺だってヤバかったんだ、無理せず休め。」

私の様子を見て、キンちゃんがそう言う。

「キンちゃん、ありがとう。お言葉に甘えて、少し私も横になるね。」  
「そうしろ。悪かった、事前に伝えておくべきだった。まだ姉さんのトラウマは克服出来てなかったんだな。」

かなこ様と私の間にある過去を知るキンちゃんがそう言う。

「違うよキンちゃん、今回は、あの気に当てられただけ。かなこ様が優しく人だつて知ってるから。」

?をついた。まだトラウマは克服出来ていない。でも未来の義姉様、そんなものはいち早く克服しなければならぬし、義姉様と上手くやれないとキンちゃんに思われるのは嫌だった。

「そうか…今回の一件は全部姉さんが悪いんだ、気にせずしっかり休んでくれ。」

「キンちゃん…」

キンちゃん、義姉様よりも私の味方をしてくれるんだね。流石私の旦那様。

ありがとう、キンちゃん…極限だった精神状態だったせいとか、瞼を閉じるとすぐに微睡に沈んだ。

星伽神社の境内、私の記憶にある中で、一番最初の遠山家との出会い。粉雪が生まれた1年後、キンちゃんたち姉弟がお父さんとお母さんに連れられ、星伽神社に来ていた。いや、くる筈だった。

一緒に来る筈だった、かなこ様だけがいなかった。今思うと、当時のかなこ様は8歳か9歳くらい、そんな歳の女兒が行方不明となれば、大騒ぎになる筈なのに、誰一人気にすることなく普通に過ごしている時点で気付くべきだった。

まだ幼かった私は、

「全く、かなこつたら、突然、高速道路で車から飛び降りて、『後で行く。』なんて言い出すんだから。」

「いいじゃないか、元気な証拠だ。」

「あなたがそうやって甘やかすから—」

という声を気にもせず、男子禁制の星伽神社に初めてやって来た、初めて見る同い年の男の子、キンちゃんと遊ぶのに夢中になっていた。

少し日が落ち、夕暮れになってきた頃、まだ遊んでいた私たちを呼びに、キンイチさんがやって来た。

「そろそろ戻ろう。」

そう言うキンイチさんと一緒に戻ろうとした時、大きな影が私たちを覆った。この影って…

「熊!？」

いち早く気付いたキンイチさんが声を上げる。未だにあの時振り向かなければ、と後悔している。後悔先に立たず、熊の恐ろしさを知らなかった当時の私は、絵本で知った可愛いクマを想像し、振り向いてしまった。

熊がいた。正確には喉を突き刺され、絶命した熊がいた。そして、それを背負う返り血を浴び、真っ赤に染まった少女がいた。

幼心にはあまりにもショッキングな光景に悲鳴を上げる。そんな私に、

「おお、お前が白雪か。そうだ、お前には一番美味しいところをやるう。」

そう言つて、手刀で熊の手を落とし、それを差し出す。そのグロテスクな断面図と、真っ赤に染まった笑顔に恐怖のあまり、気を失った。

目覚めた私の目に映ったのは、赤色の取れた先程の少女。私を覗き込んでいた。思わず恐怖で泣き喚く私、キンちゃんのお母さんに拳骨を落とされる少女。

「母上、頭はダメだ。バカになってしまう。」

「安心しなさい、あんたはもうこれ以上バカになれないわ。」

「そうか、ならいい。」

「バかなこっ!!反省しなさい。」

そう言つて、また拳骨を落とされる。

「母上、『バかなこ』と言うな。私がバカナ子みたいではないか。」

「あんたは天下一の馬鹿よ…」

そんなふたりのやり取りが行われる、片隅で、泣く私をキンちゃんとキンイチさんが宥めてくれる。

「ごめんな、姉さんいつもああなんだ。」

と、キンイチさんが言う。いつも…？それに姉さんって、あの人がかなこ様なの？

「いい加減、服を汚したら怒られるって学べばいいのに。」

キンちゃん、怒られるところはそこなの？

「キンジ、今回は違うぞ、姉さんの非常識な行動が白雪を怖がらせたんだから。」

「兄さん、非常識ってなに？」

「姉さんみたいなことをすることだ。」

「兄さん、それじゃあ、ひじょーしきの姉さんがひじょーしきなことをしたのが悪いの？」

「そうだ。」

「姉さんが姉さんするのって悪いの？」

キンちゃんは、非常識Ⅱかなこ様と認識したらしい。子どもには難しい議題なのか、キンイチさんは少し考えて、

「姉さんだから仕方ない。」

結論に辿り着いた。

「白雪、姉さんが『姉さん』してごめんな。」

「白雪、姉さんが『姉さん』するのは仕方ないんだ、許してあげてくれ。」  
私に、新しい動詞を使い謝罪する兄弟。泣き止みはしたが、かなこ

様への恐怖は消えなかった。

その日の夕食は熊鍋。美味しそうにパクパクと食べる遠山姉弟と対象的に、あの残像がフラッシュバックして、全く食欲が湧かなかった。

食後、女子児童にカテゴライズされるかなこ様が、平然と素手で熊を狩り、担いで持ち帰るという一連の行動に恐怖を抱き、尋ねた星伽神社の大人たちに対して、遠山家の皆様は、『かなこ(姉さん)だから。』と答え、説明は終わった。

それから、数年、何度かかなこ様と会うことも増え、私も成長し、少しずつ慣れてきていた。

まだ中学生くらいの頃に、かなこ様が修行に参られ、数日滞在された。その時、御神体の緋緋色金が暴走し、具現化した。巫女たちが封

印すべく集まっていると、

「強者の気配！」

と言つて緋緋神をワンパンで沈めていた。緋緋神は、封印する際に色々と騒いでいたけど、何故自分が大人しく再度封印されているのか覚えておらず、かなこ様は、神の記憶を飛ばせる程度のパンチを放つたらしい。それ以降、本能的な恐怖からか、かなこ様が近くにいると、色金の力が弱まる様になった。巫女たちの間では、

「かなこ様がいれば殻金要らないんじゃないかな？」

と言われていた。

そう、そんな素敵な義姉様…そう、素敵…

やっぱり無理、怖いよキンちゃん!!

ダメよ私、キンちゃんのお嫁さんになるんだから。義姉様とも仲良く出来なきや、良妻賢母と言えないよ。大丈夫、まだまだこれから、私の花嫁修業は始まったばかりなんだから。

## 虎、世界の舞台に立つ（メジャーデビュー）

—遠山金虎視点—

ミラと共に日本帰国後、適当に観光をしていた最中、  
「姐さん、俺、日本を拠点にする。」

ミラがそう言ってくる。日本を気に入ってくれた様だ。家を買う  
為、不動産屋に赴くらしく、連絡先を交換し、別れた。

ひとりになった私は、手に持っている土産の入った紙袋を思い出し  
た。

「まずは、金一からだろうか？」

金一が留守でもパトラがいるだろうし、土産を渡し、その後は金次、  
その後妹たちに渡しに行こう。金三は連絡しておくか。そう計画を  
練る。

計画が決まり、行動を開始する。

ピンポンというインターホンの音を鳴らすと、中から足音が聞こ  
えてくる。金一だな。いいタイミングだった様だ。

ガチャツ、と玄関の扉が開く。

「金一、土産だ。」

「姉さん、何処行ってたんだ!! 大変なことになってるんだぞつ!!」

|||||

—遠山金一視点—

姉さんがいなくなり、数日、官邸は予想外の行動を取った。

姉さんを私兵として一旦引き渡し、諦めさせる。そういう計画で、  
姉さんの力とポンコツ脳を見せ、諦めもらう予定だった。しかし、官  
邸は資料だけに目を通し、とんでもない決定を下した。

「国連に出席する総理の護衛をしてもらう。」

最も回避すべき選択、姉さんを公の場に出す。そんな決定だった。

当然、関係者は一斉にその決定の取り止めを申し出たが、「旧政権にて、人権侵害に等しい扱いを受けた有能な人材を救済する。」

と全く聞き入れなかった。これは、武偵庁、武検、公安各所の上層の新政権の短絡的な思考を読み切れなかった、読みの甘さ故に引き起こされたことである。早速姉さんの身柄を抑えようと乗り出した内閣府だったが、姉さんはおらず、俺たち遠山家の人間だけでなく、関係者にまで事情聴取が行われた。その際に全員が口をそろえて言った言葉、

「姉さん（遠山金虎）だから仕方ない。」

それが真実だと信じずに、躍起になって姉さんを探していた。そして国連開催が明後日に迫る今日、

「これはパトラと生まれてくる子の分だ。」

そんな渦中の人であるはずの姉は、？気に土産を手に帰国して、俺の家にいる。

「姉さん、俺の話聞いてるの catt!？」

「義姉上、土産は有難いが、とりあえず、キンイチの話聞いてはくれんかの?。」

そう、このバカ姉は俺の話を無視し、土産を並べている。

「聞いている。こくれん?とやらに行き、他国の強者と手合せすればよいのだろうか?。」

「聞いてないじゃない catt!!それは最悪の手だ。」

そんなことをすれば、姉さんは世界中でブラックリスト入りする。まだなっていないのが驚きではあるけど…

「では、かんでい?とやらを殴ればいいのか?。」

「やめろつ!!なんで殴る以外の選択肢がないんだよつ!？」

このバカは、本当にそれをしてしまう可能性があるから油断ならない。

「どうしろというのだ?。」

「頼むから大人しくしてくれ。」

「私は常日頃から大人しいぞ。」

「どこが（じゃ）？」

ダメだこのバカ姉、なんとかしないと…

「分かった。絶対に自分から仕掛けないでくれ。正当防衛だけは認め  
るから…」

「弟の頼みだ、仕方ないが了承しよう。」

なんで俺が我儘言ってるみたいになるのだろうか？

「では、私は金次たちに土産を渡しに行くとしよう。」

と立ち上がる姉さんに、

「そういえば、なんでスコットランドに行ってたんだ？」

純粋な疑問をぶつける。

「…何故私がス…スッコ…そこに行っていたと分かる？」

「スコットランドな。土産で分かるよ。」

タータンチェック柄で埋め尽くされた土産を見てそう答える。

「旅順要塞を落としてきた。」

「スコットランドで旅順？」

何を言ってるんだこの人？

「義姉上、もしかしてそれは人かのお？」

「そうだぞ。ミラだ。」

要塞、ミラ、パズルのピースが嵌る。ミラ・ミハイロヴィチ、『要塞』  
の異名を持つ最強の傭兵。そいつと戦ってきたのか…

「堅牢な要塞であったぞ。私も、奥義を出さねば破れぬ防御であっ  
た。」

姉さんの攻撃をも凌ぐって、化物かよ。それ以上の化物が目の前に  
いるが…

「妹分になったので、今日本にいるぞ、今度お前たちにも会わせるとし  
よう。」

最強で最悪のタッグが誕生してしまった。

「では、失礼する。」

姉さんはそう言い残し、いつも通り姿を消す。

太田胃散飲んどこう。





「上からの命令だと、遠山先輩を人質に取る筈だったんですけどね。」  
可鷓韋がそんなことを言う。

「筈だった、ってことは、その計画は白紙になったのか、正解だと思うぞ。」

姉さんはそういう姑息な真似が大っ嫌いだから、人質の俺諸共殴り飛ばされていただろう。

「たりめえーだ、んなことしたら俺たちまとめて月まで吹っ飛ばぞ。」  
どうやら獅堂がその辺は分かっていたらしい。獅堂の例えに誰も疑問を抱かないあたり、こいつらも姉さんから何かしらのトラウマを与えられてると見た。

「とりあえず、接触して後は知らん。仕事しました感出すだけだ。」

それでいいのかよ、公務員…

こいつらに早く帰って欲しいので、姉さんに早く来て欲しい反面、来たらずややこしいことになりそうなので来て欲しくない。そんな相反する思いが渦巻く中、玄関の扉を叩く音がする。

ピリツ、と連中の空気が重くなる。仕事してます感が出てるなあ。もうどうにでもなれ。そう思い扉を開ける。

「金次、帰ってきたぞ。土産だ。…随分と客人が多いな。」

紙袋を俺に渡しながら、そう言う姉さん。

「姉さん、実は…」

事情を説明しようとする俺に、

「金一から話は聞いた。とりあえず、上がって話すぞ。」

と部屋の中に進んで行く。果たしてあの姉さんが、兄さんの説明を正しく理解出来ているのだろうか？

「よう、遠山の姉さん、この間ぶりだな。」

「公務ご苦労、獅堂殿。」

姉さんと獅堂が相對する。

「早速本題に移らせてもらうが、一緒に来てもらう。いいな。」

「構わん、金一から聞いている。なんとやらの会議に同行し、大人しく殴ればいいのだろう？」

うん、一ミリも分かってないな。

「あんだ、戦争でもおっぱじめる気か？」

「そんな気は毛頭ない。故に大人しく殴ると言っているであろう。」

大人しくと殴る、矛盾してませんか？

「あー、分かった。とりあえず、その辺は武検に任せるとして、俺たちと来てくれるんだな。」

「そう言っているであろう。それで丸く収まるなら、私は構わん。」

丸く収める気あるんですかね？

「よし、んじや一緒に来てもらうぜ。」

そう言つて、大きく息を吐く獅堂、平然を保とうとしているが、かなり気を張り詰めていた様だ。

「金次、そういう訳で金女と金天に直接渡せなくなった。お前から渡しておいてくれ。」

そう言つて、チエツク柄の衣装と帽子を纏った色違いのテディベアを2体、テーブルに並べる。

「あ、ああ、分かった。」

「そうだった、白雪にもこれを。占いの礼だと言っておいてくれ。」

そう言つて、俺にくれた土産と似た紙袋を渡してくる。

「それはいいんだけど…姉さん本当にいいのか？」

今まで自由気ままに生きてきた姉さんが、こんな仕事を引き受けるなんて、考えられない。俺の質問に姉さんではなく、獅堂が

「まあ、武検や武偵庁のエリートも同行する。上手いこと補佐してくれる、心配いらねえさ。…いや、無理だな。」

と答える。やっぱダメじゃん。

「ダメじゃないか!!なんでそんな無謀なことすんだよ。」

「うるせえ!!政治家共に聞けっ!!俺だって嫌だよっ!!」

そんな俺と獅堂の口論に、割って入る姉さん。

「全く、私が同行するのだ、問題など起きる訳がないだろう。集う強者たちを全てこの拳で打ち砕いてみせよう。」

はっはっは、と豪快に笑う姉さん。うん、もうダメみたいだ。

「では行くぞ、獅堂殿。」

と獅堂を引っ張る姉さん。



「確かに。でも俺の仕事は終わったんだ。後は任せるぜ。」

そう言つて、帰つていく。彼の言う通り、ここからは僕の仕事だ。なんとつて、僕は遠山さんの担当者なんだから。

「遠山さん、明日から移動を開始します。僕と別に2人武装検事、それと武偵庁からも3人で今回の護衛任務に当たります。」

「それで？」

「今回、僕は遠山さんの通訳として同行しますが、向こうでは僕の指示に従つて貰います。」

本来ならば、彼女に命令するなど恐れ多くて出来なかつただろう。だけど、今回の結果次第では、彼女の処遇が悪化する可能性がある。心を鬼にして任務に当たる所存だ。

「分かつた、可能な限り従おう。」

大丈夫だろうか？最大の問題は、彼女を止める手段を持たないということだ。同行する全員が束になつても絶対に勝てない相手、それが遠山さんだ。だからこそ、今回の任務において重要な役割となるのが僕であり、そのプレッシャーが胃痛の原因でもある。

「本当に、お願いしますよ…」

アメリカ合衆国ニューヨーク州ニューヨーク市、マンハッタン。そこにそびえ立つ国際連合本部ビル、その中に僕たちはいる。

今更にはなつてしまふが、そもそもが武偵でも武検でも、警察でも自衛官でもなく、そういった訓練も教育も受けていなければ、経験もない遠山さんに、護衛任務をいきなりやらせるつて、なに考えているんだろう。

立ち並ぶ各国の護衛たちが尋常ではない雰囲気を醸し出す。全員が超一流の武偵や軍人だ。少しでも怪しい動きを取れば命はないだろう。そんな中に通訳という名目ではあるが、新人のペーパーたる僕がいるのは異様だろう。ここにいる誰が相手でも勝てるビジョンが浮かばない。

でもそれ以上に異様な存在が、護衛任務だというのに、飛行機の中で爆睡していた遠山さんだ、今はスーツでバツチリと決めた凛々しい姿で腕組みし立っている。立ち振る舞いだけだと、首相よりも遠山さ

んの方が偉そうな感じがする。

そんな彼女を見た他国の護衛たちの一部が、驚愕と絶望の表情を浮かべている。そんな彼らを見て遠山さんが、

「なんだ、強者が集うと思っていたが、倒してきた者たちが多いではないか。」

…は？

「と、遠山さん、それはどういうことですか…？」

「どういうことにも、旅をいていた時に手合せし、勝利した。それだけだ。」

あれとあれと…と立ち並ぶ他国の護衛たちを指していく。指された者たちは、ビクツと小さく震え、大量の汗が噴き出ている。遠山さん、あなた何やってるんですか…

そんな中、彼女に指されなかったひとりが、殺気を放ちこちらに向かおうとした。恐らく侮辱と受け取ったのだろう。そんな彼の肩をがっしりと大男の手が掴み、何かを言っている。彼と同じ国の護衛だ。声が小さく、なんと言っているのか分からなかったが、青ざめた表情の大男の表情と、それを見てこちらに向かっていた男も元の位置に戻る。

「遠山さん、刺激しないで下さい。」

「私はなにもしてないぞ。」

「人を指さすのは失礼ですよ。」

「そうか、悪いことをしたな。以後気を付ける。」

彼女に挑発する意図はなかったらしい。純粹に僕に誰と戦ったのか教えようとしたのだろう。

「しかし、退屈だな。やることはないぞ。」

何も無いに越したことはないんですよ、遠山さん…

「いやあ、噂にたがわぬ武勇みたいですねえ。ただ居るだけで他国の優秀な護衛たちを牽制するとは。」

そう言っつて、遠山さんに話しかける男。確か、総理の第一秘書だったっけ？

「なにかご用でしょうか。」

遠山さんの代わりに僕が尋ねる。なんだか、この男からは嫌な感じがする。

「遠山かなこさん、貴女に大切な話があるんです。」

僕を無視し、彼女に話しかける。

「大切な話？」

「そうです。この短時間で十分に分かりました。貴女は大変優れた能力を持たれている。前政権が貴女存在を隠蔽していましたが、全くもって愚かなことです。貴女に相応しい地位を用意します。これからは我々の為に働いて貰います。よろしいですね。」

こいつは何を言っているんだ。遠山さんをお前たちの犬にするなんて許されない。思わず拳を握る。そんな僕を見て、

「これは総理の意思でもありません。…分かりますよね。」

ニヤア、といやらしい笑みを浮かべる。こいつをぶん殴ってやりたくなる。しかし、職務上それは許されない。悔しさに握った拳が震える。

「断る。こんなつまらぬこと、二度とやるか。冷泉、あとどれ位で終わるんだ？」

「遠山さん…まだ始まったばかりですよ。」

あつさりとNOを突きつける遠山さんに、思わず笑いそうになりながら答える。でも同時にこれで引き下がる連中ではない筈だ。明らかに不機嫌になった秘書が、

「貴女に拒否権はないんですがね…」

怒りを抑えた笑みで彼女に詰め寄る。

「遠山家の兄弟。遠山キンイチ…、遠山キンジ…、ああ、長男には妻とお腹に子がいましたねえ。」

下衆な笑みを浮かべる。こいつらっ…

「手を回しています。貴女が従わなければ…分かりますよねえ。」

「お前たちが用があるのは私だろう…」

遠山さんから、有り得ないレベルの殺気が放たれる。モロに受けた秘書が泡を拭いて倒れてしまった。遠山さんはそれを踏みつけ、ずんずんと歩き出す。

「遠山さん、待って下さい。何処に行くんです。」

まさか総理を…そんな考えが過る。遠山さんの怒りは最もだが、それはマズい。

「日本。弟だけでなく、義妹とその子にまで手を出そうというのだ。容赦はせん。」

そつちか…それでもマズい。それは任務放棄になってしまう。僕は、彼女の行く手を遮る様に立ちはだかる。

「至急、検事局に連絡を入れます。弟さんたちは保護させるので、お願いです。踏みとどまって下さい!!」

別の武装検事がすぐに連絡を入れ始める。それでも、

「どけ、うっかり殺してしまいそうだ…」

殺しは絶対にしない。それが彼女が自身に科した誓約。それさえ破ってしまう程、彼女の怒りは大きい。

「お願いです遠山さん、行っては行けません。貴女が動けば—」

言葉の途中、左手で胸倉を掴まれ、持ち上げられる。襟が締めまり、呼吸が出来なくなる。

「どけと言ったぞ…これ以上怒らせるな。」

先程まで以上の殺気を放ち、遠山さんが静かに僕に告げる。死刑宣告に等しい言葉を受けながら、それでも止めなければならない。彼女とその家族を守る為に…

「遠山さん…貴女が動けば…遠山家にまでも被害が…出ます…」

息も絶え絶えにそう言うと、遠山さんの眉が微かに動き、胸倉を掴む力が少し緩む。

「必ず武装検事が、貴女の家族を守ります…だから、任せて下さい…信じて下さい、遠山さんのお父さんと同じ武装検事たちを…」

手が放された。解放された僕は、床に膝をつき、ゴホゴホと咳をする。そんな僕を一瞥し、遠山さんは元の位置に戻る。この場に留まらせることには成功したが、彼女の怒りは収まっていない。ひと言も喋らなずに、目を閉じて立っているが、漏れ出す殺気は更に増している。今出来ること、それは彼女をこれ以上刺激しない。それだけだった。もし、これ以上彼女の怒り触れる様なことがあれば、ここ、国連本部



ビルは無人の荒野と成り果てる、そんな気がした。

もう何日も立ち続けているのではないかと思う程、精神的疲労が蓄積する数分間、ようやく検事局から連絡がきた。

「遠山さん、対象の保護、完了しました。もう大丈夫です。」

実行犯の確保も完了している。後は依頼人を芋づる式に特定するだけだ。

「そうか。」

遠山さんは、目を閉じたままそう答え、少しずつ殺気を抑えていく。完全に腹の虫が治まった訳ではない様子で、殺気が漏れている。

「くだらぬ計画をした者に伝えておけ。次は無い。私の家族に指一本でも触れたなら、例え世界中を敵にしても容赦はせん。」

ゆつくり目を開き、僕にそう言う。その瞳に優しさなど欠片もなく、僕に対して向けた瞳でも、言葉でもないのは分かっているのに、それでも心の奥底から恐怖がこみ上げてくる。

「わ、分かりました。必ず黒幕を見つけ、伝えます。」

僕の返事を聞き、また少し殺気が弱まる。

「冷泉、先程はすまなかった。止めてくれ、感謝する。」

遠山さんは、さつきとは違う、いつもの優しさのある瞳でそう言った。

会議が終了し、護衛たちも帰国の準備の為に動き始める。しかし、誰もが動きはぎこちなく、遠山さんを警戒しながらも、刺激しない様、細心の注意を払って動いている。

恐らく、ここに集う超人たちは、遠山さんの名前と容姿、そして秘めた力を本国に報告するだろう。今まで隠されてきた彼女は、世界で知られる存在となってしまった。今回の任務は、彼女にとって何一つメリットのない、最悪のものだった。

||

|||||

—サイオン・ボンド視点—

怪我が完治した後、最初の復帰任務として、国連会議に出席する首相の護衛を任された。本会議場付近に待機していると、各国の護衛として選出された者たちも集まっている。武偵や警官、軍人など職業は違えど、誰もが超人と称される実力者ばかりだ。

「なんだ、強者が集うと思っていたが、倒してきた者たちが多いではないか。」

そう言つて、何人かの日本人と共に現れた女を見て、完治した筈の左腕が痛む。何故、奴がいるんだ!?

あの女に驚いているのは俺だけではないようで、この場の半数近くが、奴を見て、驚き、青ざめる。そんな奴が、ひとり、またひとりと指差していく。指差された者たちは、びくりと小さく肩を震わせる。成程、あいつらも俺と同じ被害者か。

そんな奴の態度に腹を立てたひとりが、詰め寄ろうと踏み出した瞬間、同僚の大男に肩を掴まれていた。その表情は必死だ。微かに聞こえた会話の内容は、

「絶対に刺激するな。死ぬぞ。」

大男の気迫に負けたのか、納得していない様子で男が戻っていく。間違っていない警告だと思ふ。止めてもらつてなければ、あいつも俺たちの仲間入りを果たしていただろう。

しばらくして、ひとりの男が奴と話していた。男の感じからして、政治家、もしくはその秘書。立ち振る舞いからして、戦闘に関しては素人なのが分かる。断片的だが、会話が聞き取れる。奴の名はトウヤマ・カナコと言ふらしい。トウヤマ・キンジの関係者だとは思つてしたが、もしかして、姉なのだろうか？

「遠山家の兄弟。遠山キンイチ…、遠山キンジ…、ああ、長男には妻とお腹に子がいましたねえ。」

男の言葉が微かに聞こえた。俺は以前、『トウヤマ・キンジ』の名を出したことがきっかけで奴と戦闘になった。嫌な予感がした。

その後、少し会話をしていたが、なにか、奴の逆鱗に触れたのだろう。今まで感じたことのない程強大な殺気が放たれた。…あいつ、手

加減していたな。以前戦った時とは全く違う殺気、己の全力は、奴の足元にも及ばないと悟らされる。他の連中も同じ様だ、奴の殺気を受け、格付けが済んだ。どう足掻こうと、奴には勝てない。この場の全員、それを思い知らされる。

奴が進む先に、その先にあるのは本会議場。そこに行くつもりなのかは分からないが、職務上、止めなければならない。しかし、足がすくみ、踏み出せない。ただひとりを除き、全員がその場に留まった。「至急、検事局に連絡を入れます。弟さんたちは保護させるので、お願いです。踏みとどまって下さい!!」

俺よりも弱い男が、奴の前に立ちふさがり、そう叫ぶ。なんと無謀な…

その男が胸倉を掴まれ、片手で持ち上げられる。それと同時に、更に強い殺気が放たれる。しばらくして、その手を離れた後、元いた場所に戻っていくが、更に殺気を強め、目を閉じていた。

家族を人質に取られたことが、逆鱗に触れたようだが、愚か奴らもいたものだ。お陰で寿命が縮む思いをさせられた。

その後、奴の殺気も落ち着き、会議も終了した。帰国の準備を進めながら、考える。

トウヤマ・カナコ、奴について報告する必要がある。しかし、同時に必ず伝えるべき事がある。

奴と絶対に敵対してはならない。奴との友好関係は必須条件だ。敵対すれば、英国に甚大な被害を与えるのは必至だ。

## 新たな道

—キンジ視点—

姉さんが獅堂たちに連れられて行った2日後、俺の家に武装検事が乗り込んできた。平穩は続いてくれないらしい。

現れた武装検事は、父さんの同僚だった人で、何度か会ったこともある人だった。その人から漂う硝煙の香りは、今し方、弾丸を放ってきたと分かる。

「えーっと、お久しぶりです…?」

「悪いが、話は後だ。一緒に来てもらうぞ。」

有無も言わせぬ物言いに、間違いなく、なにか良くない事が起きていると察する。ここで反抗した場合、それこそ実力行使で連行されるのだろう。武装検事、しかもベテランの相手にヒステリアモードでもない俺が勝てるなど、流石にそこまで自惚れることはない。

「勉強道具は持って行っていいですか?」

素直に従うしかない。

「構わない。とにかく急いでくれ。」

この様子だと、俺を害する気はないようだ。どちらかというと、俺を守ろうとしている?」

準備を終えると、素早く車に乗せられ、すぐに発進する。

「突然で申し訳ない。お前の姉さんが帰国するまで、保護させてもらう。」

姉さんがなんかやらかしたな。

「なんかすみません。」

「いや、お前が謝る必要はない。今回やらかしたのは、政府だからな。」

「えっ!?!」

姉さんが何も問題を起こさないなんて…信じられない。

「本当に姉さんは何もやらかしてないんですか?」

「やらかしてはいるが、原因は政府だ。お前たち兄弟を人質にして脅そうとしやがった。」

あ、ヤバいパターンのやつだ。

「そういう訳でその実行犯の確保とお前たちの保護が必要になった。」  
「姉さんは大丈夫なんですか。」

洒落にならないレベルで暴れてないだろうか？

「正直、状況は最悪だ。護衛として、各国の最強クラスが集まってる中で暴れられたら、取り返しがつかない。」

それこそ、世界中を敵に回す危険性も大いにあるということらしい。…なにやってんの？姉さんが絡むと碌なことにならないな。

「だが、これで飼いならすことは不可能だと、上の連中も分かっただろう。」

「そりゃあ、父さんでさえ全く手に負えない破天荒な姉ですから。」

「違いねえ。」

姉さんに振り回される父さんを思い出したのか、懐かしむ様に小さく笑ってそう言う。

「キンジ、無事か？」

「ああ、問題ないよ。ふたりも問題なさそうだな。」

検事局に連れて来られると、兄さんとパトラの姿があつた。二人とも問題なく保護されたらしい。最も、政府が兄さんの手に負えないレベルの強敵を、そう簡単に動かせるとは思わないけど。

「しかし、大袈裟ぢやな。わらわとキンイチだけでも十分余裕な相手であつたのぢやが。」

こちらは襲撃犯と戦闘を行ったらしいが、予想通り大した相手ではなかつたらしい。

「いくら正当防衛とはいえ、後からいちやもんつけられるより、武検に任せる方がいいだろう。それに万が一あつては困るからな。」

そう言つて、パトラを見る兄さん。恐らく、姉さんの心配もそこだろう。

「そうぢやな…」

優しく自身の大きくなったお腹を撫でるパトラ。姉さんは俺たち兄弟に危険が迫ろうと、取り乱すことはない。遠山の男なら、天と地がひっくり返ろうと生き残ると信じてる人だからな。ただ、パトラと

そのお腹の子は別だ。そこに手を出そうとしたから、姉さんの怒りを買ってしまったのだらう。

「姉さんは明日帰国予定だ。何も無い事は有り得ないが、少しでもましになるよう願って待つとしよう。」

「そうぢやな、これ以上大事にならぬよう祈るしか出来ぬのぢや…」

根本的な原因は政府にあっても、必要以上に騒動を起こしてしまえば、姉さんにも責任が発生してしまうだらう。そうなった際、今以上に厄介なことになることは間違いない。しかし、今俺たちに出来ることは、そうならないように祈ることしかない。姉さんはそこら辺は全く考えてないだらうし、考える頭があるとは思えない。

「キンイチ君、少しいいかい。」

昔、父さんの上司として何度か会ったことのある検事部長が兄さんに声をかける。

「なんででしょう?」

「かなこちゃんの今後について話しておきたい。」

「分かりました。パトラ、少し待っていてくれ。」

そう言つて、ふたりが席を外す。パトラとふたりつきりになった俺は…うん、話すことがないな。というよりどうすればいいんだ?

「義姉上の今後のお…」

暫くの沈黙の後、パトラが呟く。確かに、姉さんの存在が知れ渡つた以上、日本政府だけでなく、世界各国が何かしらのアクションを起こすだらう。

「どう思う?」

「わらわならば、何かしらの役職を与えて、戦力として抱え込みつつ、流出を防ぐかのお。最もそんなもので縛れるとは思えぬのぢやがな。」

「行き当たりばつたりの人だからなあ。」

しかし、姉さんが戦力として最強なのは言わずもがなであるし、それを自前の戦力として保持すれば、牽制にもなるだらう。

「更に欲を言えば、傭兵か武偵として、他の勢力に一時的に貸し、恩を売りつつ、脅威として見せつけて牽制するかのお。」

姉さんの実力を知れば、喧嘩を売る勇氣は削がれるし、友好的に活用することを考える勢力の方が多くなるだろう。ただ、

「どれも上手くいく気がしないなあ。」

「同感ぢゃ。」

こつちの考えなどお構いなしに我が道を通つ走る姉さんが、思惑通りに動く筈がない。それでもひとつ思うのは、

「武偵になるのもいいかもな……」

武偵高に落ち、武偵になる夢を捨てた姉さん。以前話した時には、向いていないと未練はないように言っていたが、過去の夢を叶え、なにか変わるかもしれない。それに、武偵になったって、今までみたい旅は出来るだろう。

兄さんが戻って来ると軽く説明を受けた。政府の出方にもよるが、姉さんは特例で武偵となり、それと同時に、武偵庁と検事局にも籍だけを置き、特別顧問という名前だけの肩書を得る予定らしい。全ては、姉さんが帰国してから決められるが、一応そういう方向で話を進めることとなったようだ。

中卒無職の姉さんがようやく職に就いてくれるのだから遠山家としては、別に異論はない。強いて言えば、それ以外の扱いが気になるだけだが、そこら辺はまだ分からないらしい。武偵としてのランクなどもどうするのか協議中らしい。戦闘能力だけならRランクを軽く凌駕する姉さんだが、頭が残念過ぎてEランク以下だからなあ。

|||||

—冷泉為和視点—

成田空港に政府専用機が着陸する。実際よりも何十倍もの時間が経過したように感じてしまう。遠山さんと一緒だというのに、全く心躍らない旅路を終え、遠山さんの兄弟が保護されている検事局に向かう。

「パトラ、異常はないか？」

遠山さんは、ふたりの弟には目もくれず、キンイチ君のお嫁さんに声をかけている。

「義姉上、わらわもお腹の子も問題ないのぢや。」

その言葉を聞き、遠山さんから放たれる緊張感は無くなり、僕の肩の荷も下りた。

「冷泉君、よくかなこちゃんを止めてくれた。今回の最大の功労者だよ。」

部長が僕に声をかける。

「いいえ、何も出来ませんでした。」

そう、彼女がお父さんに憧れていたと知っていたからその言葉が出ただけで、僅かな違いで、大惨事を招いていた可能性は大いにある。彼女を止めるだけの力を僕は持っていない。己の無力さを痛感させられた。

「君はまだ若い。向上心があれば目標に近づける筈だよ。」

悔しい思いが表情に出ていたのだろうか、部長がそう声を掛けてくれる。

「それに、今後、かなこちゃんの扱いが変わろうと、君が彼女の担当なのは変わらないし、変えるつもりもない。君が一番彼女の担当に向いていると思っているからね。」

「そう見えますか!?!」

「そうだね、歴代の担当者の中で、君が一番彼女に対応出来ているよ。相性がいいのかな?」

僕と遠山さんの相性がいい…そう見えるのだろうか。羨みかけていた心が再び沸き立った。

弟たちを連れ、帰路につく遠山さんを眺めながら、決意を固める。貴女の為に生きていきます。

||

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

—遠山金一視点—



あれから数日後、武偵庁への呼び出しがあった。姉さんの今後の扱いが決まったらしい。

結局、予定通りに、特別顧問という名ばかりの役職を与えられ、武偵として生きていくこととなったが、問題がひとつおきたらしい。日本政府としての方針が決まる前から、英国が姉さんへの接触を希望し、連絡を寄越しているらしい。姉さんが007をボコったのがバレ、怒り心頭かと思っただが、どうやら姉さんとの友好を希望しているらしい。それに倣ってか、米国を筆頭に、複数の国からも同様の要請があり、姉さんの武偵ランクにまで口出しをされていたらしい。

当初武偵ランクは適当にAあたりにしようとしていたらしいが、英国からは自国最強のエージェントたるRランク武偵の007を容易に倒せる人間のランクが低く、比較的容易に依頼が可能なランクの武偵となると脅威とみなすと言われ、必然的に世界で8人目のRランク武偵となり、手続きに時間を要したそう。

それらの連絡を受け、姉さんに伝える為に巢鴨の実家に向かう。どうせ説明したところで姉さんは気にもしないし、覚えもしないだろうが、伝える義務はある。

「姉さん、大切な話なんだが…その前に聞きたいことがあるんだが？」  
「なんだ。」

居間のちゃぶ台に向かい会って座る姉は、予想通りさして興味はないが、弟が大切な話というので仕方なく聞いてやろうといった雰囲気です座っている。

「隣にいるのは誰だ。」  
そんな姉の横に日本人ではないと一目で分かる金髪で長髪の女が鎮座している。

「以前会わせると言っていたであろう。こいつがミラだ。」  
こいつが、あの『要塞』か…最強のコンビが並んでいる。このふたりに小国なら軽く滅ぼす程度の戦力ということになる。

「おめえが姐さんの弟か。まあ、俺にはどうでもいいけど、さつさと話を済ませてくれよ。この後、姐さんと東京観光するんだからよ。」

心底面倒くさそうに告げるミラ。その言葉に従い、姉さんに要点だけを伝える。

「突然だが、姉さんは武偵になった。ランクはRだ。それと別に武偵庁と検事局の特別顧問ということにもなったが、詳しいことは後で担当の冷泉さんが教えてくれると思うから、しつかりと聞いてあげてくれ。」

そう言っつて、武偵庁から預かっていた姉さんの武偵手帳を差し出す。

「そうか、昔憧れた武偵になったと言われても、あまり実感がないな…。」

そう言っつて、手帳を受け取り、適当に眺めている。本当に武偵への興味が無くなっていたらしい。

「そういうえば、なにやら私に手紙が来ていたのだが、英語で読めぬ。」  
そう言っつて、一通の封筒を差し出す。ミラに見てもらえばいいのに。そう思いながら差出人を見ると、ムーディーズの文字、まさかと思いい中を見ると、予想通りSDAランクの通知書が出てくる。

「総合…一位…」

思わず声が漏れる。姉さんの存在が表に出た瞬間にこれか…今まで謎の女として世界の並み居る強敵をワンパンで沈めて回っていたツケがここで支払われたらしい。

「流石姐さんだな。いきなり一位だぜ。」

姉の傍らに座るミラが当然というよう言うが、世界の動きが早すぎる。俺たちの予想を上回る速度で世界が姉さんを認知し始めている。「なんのランクかは知らぬが、一位というのは良いことだな。」

本人は何も考えていないようだが、きっと、よからぬことが起きるだろう。

「話は終わりみてえだな。姐さん行こうぜ。」

そう言っつて立ち上がるミラ。

「そうだな、金一、わざわざすまなかったな。パトラによろしく伝えてくれ。」

そう言っつて、姉さんも立ち上がる。このふたりにとって、SDAラ

ンク総合一位よりも東京観光の方が大切らしい。

「そういや、姐さんの二つ名はなんになるんだらうな。」

「二つ名？」

「俺の『要塞』みてえなのだよ。」

「それなら、昔『巢鴨の虎』と呼ばれていたぞ。」

そんな会話をしながら家を出ていくふたり。その二つ名は中学生の頃に近隣のヤンキーや暴走族を潰して回った頃についたやつだろ。そんなローカルネームでいいのか？

取り残された俺は、SDAランク通知書を手にちやぶ台に突っ伏した。

||

— 遠山金虎視点 —

手にした武偵手帳を眺める。昔、あれ程憧れた武偵という夢を叶えたというのに、全く心が湧き上がらない。

「姐さん？」

そんな私に横を歩くミラが声をかけてきた。

「なんかあったのか？」

「いや、武偵になったが、いまいち実感が湧かない。」

「んなもん、適当に依頼こなしていけば、勝手に湧いてくるさ。それよりも今を楽しもうぜ。」

そういうものかもしれない。それに、先のことを考えるのは性に合わない。ミラの言う通り、今を楽しむことが大事だろう。一瞬に生きる。刹那主義が私らしい。

「そうだな。なにか行きたいところはあるのか？」

「いや、特にねえが、姐さんと一緒ならどこでも楽しめるよ。俺は。」

「なら適当に散策するか。」

迷った。ここはどこだろうか。まあ、ミラに教わったように、上空

から見ればいいのだが、散策しているのにそれでは味気無い気がする。

「お、姐さん、ちっせえポリがいるぞ。」

ミラの視線の先に、まだ幼さの残る婦警がいる。子どもに見えるが、本物の警官なのだろうか？

「ガキがコスプレしてんのか？日本はコスプレイヤーが多いって聞いてたが、初めて見たぜ。」

聞こえたのだろうか、婦警がこちらに近づいてくる。

「失礼ですが、パスポートの提示をお願いします。」

そうミラに声をかける。

「悪いが、おままごことには付き合ってやれねえぞ。」

「おままごことではありません。」

ムツとした表情で警察手帳を見せてくる。本物だったか。

「ほらよ。しかし、ガキにしか見えねえな。」

パスポートを投げ渡し、そう言うミラ。

「まだ、学生ですから。」

そう答える婦警。学生の身分で警官とは大したものだ。

「貴女もお願いします。」

「私もか？」

「ええ。」

これが噂に聞く職質というやつなのだろうか？しかし、パスポートは家に置いてきているぞ。

「これでいいか？」

手に持っていた武偵手帳を渡してみる。

「武偵でしたか。遠山…これはかなこと読むのでしょうか？」

「そうだ。」

「えっ!？」

婦警が目丸くして硬直してしまった。なにかまずかったのだろうか？

## 初仕事

— 乾桜視点 —

警ら中、目を奪われる様な美人の2人組と遭遇した。その内の外国人の女性が私をガキだのコスプレイヤーだの言っているのが聞こえてくる。ムツとした私は、彼女に職質としてパスポートの提示を求めた。特に悪のニオイはしないけれど、彼女からは、なにかグレーな存在な気配がする。その隣に立つ、友人と思われる女性にも同様に職質を行うと、

「これでいいか？」

そう言つて武偵手帳を差してきた。

「武偵でしたか。」

もしかしたら東京武偵高のOGだったりするのかもしれないなと思いつながら中を確認する。

「遠山…かなこと読むのでしょうか？」

金虎と書かれた名前の読み方を確認する。

「そうだ。」

女性の返事を聞き、ランクに目を移す。

「えっ!？」

衝撃のランクに思わず声が漏れる。Rランク…間宮あかり先輩の憧れにして戦姉、恐ろしく強いSランクのARIA先輩よりも上。小国の軍隊を1人で相手にできる実力をもつと言われるRランク武偵が目の前にいる。

あまりにも驚きが過ぎて、固まってしまふ。

「なにか、まずいことでもあっただろうか？」

そう声が掛かる。

「し、失礼しました。なんでもありません。ご協力、ありがとうございます。慌てて手帳を返しました。」

慌てて手帳を返した。

「そうか、それなら良かった。」

そう言って手帳をしまう。彼女は、ミラという（パスポートで名前を確認した）女性の護衛なのだろうか？それにしても彼女の方が立場が上のように見えるし、友人？Rランクの友人となれば、相当な実力者なのだろうか？

ランクが全てではない。そう思いはするが、初めて目にするRランクの衝撃は消し去れるものではない。しかし、万が一に備え、その一挙手一投足に注意を払う。

「ところで、ここはどこだ？」

「はあ？」

予想外の発言に思わず間抜けな声が漏れる。

「道に迷ってな。」

Rランクでも迷子になるんだ…とんでもない超人と思っていた相手から人間らしい言葉が出ることに、驚きつつ、

「こちら側に進むとお台場に出ますが…目的地はどちらで？」

「いや、ただ散歩してただけで、目的地はなかったが…台場にも行くか。」

「俺はどこでもいいぜ。」

Rランクって暇なのかな？まあ、とんでもない依頼料になるから仕事も少ないのかもしれないけど。

「では、失礼します。大丈夫だとは思いますが、この辺りも治安はあまり良くないので、お気を付けてください。」

興味はあるが、これ以上関わらない方がいい。そんな気がして、職務に復帰すべく立ち去ろうとした時、携帯が振動する。教務部からの緊急連絡。マスターズ

『お台場の商業施設で元Sランク武偵とその手下による施設内の客を人質を取った立てこもり事件。人質のCVRの生徒より通報と救援要請。付近にいるBランク以上は現場へ急行し、教務部到着を待て。』  
Bランクの私も向かわなければ。

「お、姐さん。お台場で事件だってよ。人質取って立てこもりだよ。」

「勝手に見ないでください!?!」



なんとか耐えてはいるが、状況は良くならない。それどころか、敵の応援が先に到着し、むしろ悪化している。

「応援はまだですよっ!」

こちらの弾は尽き、もう敵は目の前に迫っている。一か八か鷹捲を…ダメだ一人を倒せても敵は複数。もうダメかもしれない。それでも…アリア先輩なら諦めたりしないっ。

覚悟を決め、立ち上がる。

「あかりちゃん!」

私の無謀な行動に志乃ちゃんが驚いた様に声を上げる。

「絶対に諦めたりしないっ!!」

立ち向かおとする私、皆も覚悟を決めたのか、頷き合う。

「行くよっ!!」

踏み出そうとした瞬間、

「動くな。姐さんの邪魔すんなよ。」

女性の声が響き、敵と私たちの間に着地する。金髪の女性。顔立ちからして日本人ではない。その手にはM60機関銃。…援軍? 突然現れた外国人の女性に、敵は一斉に発砲する。

「危ないっ!!」

思わず声を上げる。そんな私の心配など不要というように、女性は避けることもなく全ての弾丸をその身に受けた。それにもかかわらず、平然と立っている。

「まさか、『要塞』…!」

敵の一人が驚きの声を上げる。

「だったらなんだよ。」

そう言っつて機関銃を乱射すると、蜘蛛の子を散らした様に散り散りに逃げていく。『要塞』ってなんなのか分からないけど、あの人を恐れて逃げ出した様に見える。

「逃がさないっ!!—っ!」

逃げ出した敵を追撃しようとする私たちに弾丸が放たれる。あの人、なんで?

「姐さんの獲物だ。邪魔すんじゃねえよ。」



どういうこと？意味が分からない。

「あんだ、援軍じゃないのかよっ!!」

ライカが詰め寄ろうとする。

「援軍？俺は姐さんの手伝いだ。おめえらとは関係ねえが、姐さんの邪魔するなら容赦しねえ。」

「姐さん？」

彼女の口から度々出る『姐さん』なる人物。その人があいつらを狙っているの？

「それもおめえらには関係ねえ。それに、そろそろ終わるだろ。」

「どういうー」

尋ねようとしたその時、逃げ出していた敵たちが、凄い勢いで吹っ飛んで来て、壁や柱に当たり倒れていく。私たちがさつきまで戦っていた相手だ。手強い敵があつきりと倒れていく様に驚愕していると、  
「全く、弱すぎる。人質など姑息な手を使っているからそうなるのだ。」

男を一人引きずりながら、女の人が現れる。引きずられている男は：主犯格の指名手配されている元Sランク武偵だ。気を失っているのか、それとも心が折れたのか、なんの抵抗もなく、ただぐったりとしている。

「姐さん、終わったみてえだな。」

「ああ、曲がった根性を叩き直してやろうと思ったが、一発でこれだ。」  
ぽいつ、と投げられた男が私たちとミラと呼ばれた女性の間に着ちる。気絶しているみたい。

「弱すぎて教育すら出来ぬ。困ったものだ。」

仮にも元Sランク武偵が弱すぎるって…

「そこにいるのは武偵高の生徒だな…そのふたりは以前会ったな。」  
姐さんと呼ばれた女性の視線が、ライカと麒麟ちゃんに向けられる。

「ライカ、知り合いなのっ!？」

私の疑問に

「知り合いじゃないが、以前会った。」

緊張感の籠った言葉で答える。

「お前たちの仕事を横取りしてしまったな。悪かったな。」

女性がこちらに歩み寄りながらそう言ってくる。

「いえ、助かりました。私たちだけだったら負けてたかもしれない。」

志乃ちゃんが警戒しながらそう答える。

「姐さん、こいつの身柄はどうする？一応懸賞金かかってるけど。」

ミラと呼ばれた女性が気絶した男を指してそう言う。

「私は金はいらぬが。」

「俺もこんなはした金いらねえよ。」

確か数百万の懸賞金だった筈、それをはした金って…志乃ちゃんや麗ちゃんみたいにお金持ちなのかな？

「お前たち、いるか？」

私たちにそう言ってくるが、

「い、いりません。」

手柄だけ貰うなんて出来ない。

「そうか、参ったな。」

「その辺に捨てとくか。」

犯罪者を放置しようとする彼女たちに、

「その、とりあえず、教務部に引き渡してみるのはどうでしょうか？恐らく、現場に来ている筈です。」

志乃ちゃんがそう提案する。

「そうするか。」

そう言って、片手で軽々と男を持ち上げ、

「ミラ、行くぞ。」

「あいよ。」

ふたりで出口へと向かって行く。私たちは、その姿を只々呆然と見送っていた。

「あかり先輩!!無事でしたか。」

外に出ると、桜ちゃんが私たちの前に駆け寄ってくる。事件は無事解決。被害は軽く、軽傷者が数人で済んだらしい。先程の2人組は綴



と思われる数人が回収していく。

「他のフロアはどうだ？」

「一か所を除いて制圧済みです。」

「抵抗する奴がいたのか？」

「女の生徒が4人地下駐車場でこちらの部隊と交戦中です。」

「援軍を送れ。直ぐに制圧しろ。殺しても構わん。」

「了解です。」

交戦中の生徒がいるのはマズイ。人質に危険が及ぶ可能性が大いにある。

「さて、愚かにも抵抗する馬鹿どもがいたようだ。仕方ないが死んでもらうぞ。恨むなら、その武偵たちを恨んでくれ。」

額に突き付けられた拳銃を握る手に力が加わるのが分かる。引き金に指がかかる。こんな所で死んでしまうのか：自身の命運が尽きかけている事に自然と涙が頬を伝う。いや、武偵憲章第10条『諦めるな、武偵は決して諦めるな。』今打てる手を全て出すんだ。隠し持つ銃に手を密かに伸ばそうとした時、

「な、なんだ!？」

ドンツ、という大型トラックが衝突した音が響き、男の真横を何かが凄い勢いで通過していく。壁にぶつかり、それが停止した。男の部下だ。

「誰だっ!?!なにをしゃがった!?!」

振り向き、起き上がらない己の部下の姿を確認し、男が動揺した様子で叫ぶ。その間にも男の部下がひとり吹き飛ばされる。隙が出来た、今だっ!!隠していた拳銃を握る。

「てめえ、CVRかっ!?!」

「くそっ。」

一瞬の隙を突こうとしたが、握っていた拳銃を奪われる。失敗してしまった。腐っても元Sランクということか。しかし、

「うわああああああ。」

男の部下たちから悲鳴があがる。突如としてひとり、またひとりと吹き飛ばされていく。見えない何かがかしらの攻撃を加えている。

その恐怖に士気はだだ下がりだ。もしかしたらこの中超偵がいるのかもしれない。いや、もしかしたら援軍が到着したのだろうか？それは男も感づいたのだろうか。

「超偵かつ!?誰だっ、何処にいやがるっ!?」

男の視線が人質の中を彷徨っている。男の部下は全員倒れている。形勢逆転した。

「さて、お前が大將首だな。」

突然ブロンド髪の女性が現れる。

「お前か、お前がやったのかっ!?」

男が怯えと怒りの混じった声で叫び、拳銃を発砲する。

「その曲がった根性を叩き直してやろう。」

その女性は慌てた様子もなくそう言っ、弾丸を左手で掴み、右手で男の拳銃を握り潰した。：訳が分からない。男は目の前で起こる理解不能な現象に言葉を失っている。

「教育だ。歯を食いしばれっ!!」

女性がそう言うと、その拳が男の左頬を打ち抜く。錐揉み回転しながら男が飛んでいき、床に落ちる。

「起きろ、あと2、3発程殴れば、その曲がった根性も多少は戻るだろう。」

男の元にゆっくりと歩いて行きながらそう言い、

「なんだ、伸びてしまったか。手加減に手加減を重ねた一撃というのに、情けない。」

片手で床に伏した男を掴んで持ち上げてそう言うと、

「おい、その武偵高の生徒たち。」

「は、はいっ!」

啞然としていた数人の生徒が慌てて返事をする。

「この始末は任せた。私は他の奴らを教育してくる。」

「わ、分かりました。」

生徒たちの返事を聞き、倒れた男の部下たちを目で指し、男を引きずりながら地下駐車場へと向かっていく。

残された私たちは部下たちの身柄の拘束や人質の誘導をしながら

同じことを考えていた。  
…誰？

## 性悪

―高天原ゆとり視点―

事件発生の一報を受け、教務部として現場に急行する。事件の首謀者は元Sランク武偵の指名手配犯。単独犯ないし、寄せ集めの集団であればそれこそ神崎さんの様なSランクの生徒でも十分対応可能だけれど、今回は元プロたちが組織として動いている。そうなれば余程圧倒的な力量を備えた生徒でなければ一人で制圧することは困難だろう。それに、人質の数が多く、被害を出さずに制圧するのは更に困難を極める。加えて肝心のSランクの生徒は現在別の依頼で遠方にいる。現状集められる生徒はAランク数人とBランク数十人。しかも寄せ集め集団だ。生徒たちに経験を積ませるとはいえ、彼らを指揮する人間が必要だ。そういう理由もあり、助手席に座る綴と共に現場に車を走らせる。

「たく、蘭の奴、こんな時に限って有休とりやがって。」

助手席に座る綴が携帯を見ながらそういう。有休で飲み歩いていた蘭豹と連絡がようやくついた様だ。

「最悪に備えて、蘭は必要ですからね。」

強襲科の教諭としての蘭豹の実力は確かなもので、最悪の場合彼女に出撃してもらわなければならぬ。

「現状の戦力じゃ厳しいだろうな。」

綴が煙草をくゆらせながらそう言う。

「ええ、Sランクの生徒の到着まで上手いこと時間を稼げればいいんですが。」

「おい、どういうことだ?」

現場に近づくと、綴が身を乗り出し、ダルそうな目を見開く。現場では生徒たちの誘導で人質が施設外に出てきている。

「まさか…」

現場に到着している生徒たちで制圧したというのだろうか?もしそうだとしたら我々が見つけられなかった才能を秘めた生徒がいた

ということだろうか？それは教師としては複雑だが嬉しいことだ。しかし、生徒たちもよく分からないといった表情で人質の誘導と犯人たちの連行をしている。まるで突然全てが解決してしまい、戸惑っているかの様に。

車を止めると同時に、綴が助手席のドアを開け、外に出て、

「おい、どうなってんだ？」

近くにいた生徒に詰め寄る。

「綴先生…それがよく分からなくて…」

詰め寄られた女子生徒が本当に分からないといった様子で答える。

「分からないって、どういうことなの？」

私も車を降り、その生徒に尋ねる。

「それが、突然現れた女の人が全員倒したみたいで…私たちも訳が分からないんです。」

彼女の言うには、突然現れた女性が一瞬で制圧し、彼女たちに後処理を任せ本人は殲滅戦に移行したという。

話を聞き、思い浮かんだのは、偶然居合わせたプロの武偵が解決してしまった、という可能性。これが一番有難い。実はその女性こそが真犯人でこれから何かしらの行動を起こそうとしている。これが最悪の可能性。

私と綴はお互いに小さく頷き、生徒からその女性の特徴を尋ねる。

「えっと、ブロンド髪の美人で…背は170cmくらいで…あっ!!あの person ですっ!!」

説明の途中で、地下駐車場の入口から出てきた2人組を指す。一人は人を引きずり、一人はM60機関銃を手にしている。

「っ!?!」

その2人組、その内の一人を目にし、私は驚愕する。そして警戒を最大にする。私が殺気を放ったことで綴の警戒を強める。

「ゆとり、知り合いか?」

「ええ、あれが相手だと蘭でも分が悪いですね。」

ピリピリとした空気に生徒がゆっくりと後ずさっていく。

「ん? 『ブラッディ・ユトリ血塗れゆとり』じゃねえか。何してんだ?」



私に気付いた奴が緊張感もなくこちらに向かいながら声を掛けてくる。

「久しぶりですね。『要塞』ミラ・ミハイロヴィチ。私は武偵高の教師としてここに来ました。あなたこそこんなところに何用ですか？」

かつて傭兵として働いていた頃に味方として、そして敵として戦った相手に挨拶をする。警戒は緩めない。

「戦えなくなったと聞いてたが、教師ねえ…：姐さん、ちようど良かったな。」

姐さん…：一匹狼の彼女が慕う相手がいたとは…：それにちようどとはどういうこと？

「生徒の仕事を奪って悪かった。」

姐さん、と呼ばれた彼女が私たちに詫び、引きずっていた男、今回の事件の首謀者をこちらに放り投げる。

「どういうことだ？」

綴が怪訝そうに警戒しながらそう尋ねる。

「人質を取るなど姑息な奴がいると聞いてな、根性を叩き直してやろうと思ったのだがな。」

そう言っつて、完全気を失った男をちらりと見る。

「かなり手加減したのに一発でこれだ。あと数発殴つて根性を叩き直そうと思っつていたが、殺してしまいそうなのでやめた。なので後は任せた。」

なんとも無茶苦茶な言い分だ。

「そいつの懸賞金もいらねえつてよ。姐さんに感謝しな。」

「貴女がただ働きなんて、明日は隕石でも降るんじゃないですかね。」

ミラの依頼料を知る私は毒づく。

「そんなはした金いらねえよ。それに姐さん一人でやった仕事だ。俺に権利はねえ。せいぜい助けてやったガキどもに請求する程度だ。」

ミラではなく彼女が一人で…：何者なのだろうか？

「あんだ、武偵か？それとも傭兵か？」

「一応武偵ということになっているようだ。」

綴の質問になんとも言えない回答をする。答える気がないと判断

したのか、

「まあいい、あんた、名前は？」

少しでも情報を引き出そうと綴が質問を続ける。

「遠山金虎。」

「遠山あ…？」

綴がその姓にピクリと眉を動かす。私も退学した一人の生徒が脳裏に浮かぶ。まさかね…

「そうか、東京武偵高の教諭だったな。愚弟が世話になった。」

「？だろ…」

「嘘っ…」

まさかでした。遠山くんのお姉さん。

「蘭はいないようだな。あいつにもよろしく伝えてくれ。では失礼する。」

ミラを連れ、去っていく背中を見送る。

「引っ掛かるな。」

帰りの車の中、助手席に座る綴が呟く。

「何がです？」

「遠山に姉がいるなんて知らなかった。生徒の個人情報は大抵抑えてたのにな…」

情報通の綴が、まして注目株であった遠山キンジ、彼のことは調査済みだった筈だ。

「確かに、不自然ですね…でも妹が現れた時も知らなかったでしょう？」

彼には突然妹が現れたりしている。突然姉が現れてもおかしくないというのには思考が吹っ飛び過ぎているだろうか？

「確かにそうだが、あいつの口から姉の存在をほのめかす言葉が一度でも出たか？兄のことは言っていたけどな。」

仲が良くないとしても、一度くらいは存在を示唆することはあってもいい筈だ。それがまるで禁じられた様に全く出てこないというのは不自然過ぎる。まるで隠されているように…

「少し調べてみるか…」



スでキンジを圧倒した007ことサイオン・ボンドの様な存在だ。確かにそれ程の実力者であれば今回の事件程度であれば容易に解決するだろう。しかし、疑問が残る。何故この程度の事件にわざわざ出張ってきたのか？偶然居合わせた？そうだとしたら何故こんな所に？…情報が足りないわね。そもそもそのRランク武偵が何者かも分からない。

「そのRランク、名前は？」

「遠山かなこ、金に虎でかなこです。」

私の問いに桜が回答する。…は？いや、待って、おかしい。なんでかなこさんがこんな所で堂々と暴れてるのよっ!? 武装検事は何やってるの？

「えっ、遠山…」

あかりは知らなかったのか、その姓に不快感を表している。

「もしかして、遠山キンジ…元先輩のお姉さんとかじゃないですよね…」

キンジへの敵意を見せつつ私に聞いてくるが、状況が理解出来ない。存在を隠すこととなっていた彼女が武偵として活動しているらしいし、堂々暴れたという。なにかあったのは間違いないわね…

「…あんたたち、この一件、忘れなさい。今後一切口にも出さないこと。いいわね。」

「えっ、なんで…?」

「答えは、はいかYes。じゃなければ風穴。分かったかしら。」

「は、はいっ。」

あかりが返事をする。納得していない様子のその他の後輩たちにも一睨みすると、渋々だが頷く。それを確認し、

「急用が出来たわ。あんたたち気を付けて帰りなさい。」

これからの行動に移す。…バカキンジ、報告を怠ったわねっ!! 風穴開けてやるんだから。

|||||

||

—間宮あかり視点—

「アリア先輩、どこ行くんですかーっ!？」

私たちの報告を聞くと、すぐに走り出したアリア先輩の背に向かって叫ぶ。

「あかり、やめとけ。恐らく、アリア先輩も知ってる側の人間だ。」

「ライカ、どういうこと?。」

追いかけてようとする私を制止するライカに尋ねる。

「蘭豹先生だけじゃない。理子先輩にも言われた。その人に関わるなってな。理子先輩とアリア先輩は同じチーム、恐らくあの人についてなにか知ってるが、絶対に言えないんだろう。」

「なんで…。」

隠し事なんてしてほしくない。そんな思いが湧き上がる。

「私たちの為なんだから。蘭豹先生や理子先輩の言っていた通り、絶対に関わったらダメな相手、時期が来たら教えてくれるかもしれない。それまで待つんだ。」

きつと、ライカの言う通りなのだろう。でも…

「アリア先輩を信じてるんだろ。」

その言葉にハツとする。そうだ、私はなにを考えていたのだろう。それこそなにか危険が及ぶから隠しているのだとしたら、アリア先輩のその思いを裏切ることになる。

「ライカ、ありがとう。」

私の返事にライカが小さく笑った。

||

—高千穂麗視点—

「麗さん、お久しぶりです。」

父の書斎から出てきた女と鉢合わせる。

「あら、貴女がいるなんて珍しいわね。」

狐崎みずす。父の元で働く若手の武装弁護士だ。

「ええ、少し休職させていたくので、ご挨拶に。」

「休職…」

探偵科Sランクだけでなく、鑑識科と情報科でもSランク相当という評価を受ける優秀な武偵。それだけでなく、武偵高を卒業後、東大に合格し、法科院に進まずに司法試験予備試験を合格し、司法試験に一発合格をした秀才でもある。弁護士としてはまだ一年目の新人だが、既に担当した案件の全てで最高の結果を残し、お父様も将来的にはNo.2に添えるつもり有望株だ。だからこそ、お父様がそんなにもあつさりとは休職を認めるのだろうか？それこそ他の事務所からの引き抜きの可能性だってあるのだ。

「引き抜きではありませんよ。」

そんな私の考えを読んだ様に言う。

「では、体調でもわるいのかしら。」

「まあ、確かに業務が多く疲れてはいますが、体調は崩していません。ならばなんだというのだ。退職ではなく休職だ。正当な理由なく許可出来ることではない。」

「あまり話したくはないのですが、要らぬ疑いをかけられるのもあれです。遠山案件とでも言っておきましょうか。」

遠山案件：そんな言葉を聞いて思い浮かぶのは、『遠山金次』退学となったらしいが、武偵高の先輩で強襲科では一目置かれた存在、そしてその妹の『遠山金女』。そして次に思い浮かぶのは、かつて父が話していた『遠山金叉』武装検事であり、1989年のSDAランクで総合8位に載った超人。確か親子だった筈。思い浮かぶ人物だけでも恐るべきラインナップだ。

それこそ『遠山金叉』は殉職したらしいが、武装検事だった訳で、それに関する案件であれば休職も許可されるのかもしれない。

「復職の予定は？」

「さて、早ければ2、3日で終わると思いますが、長引けば一生かかっても無理かもしれません。」

彼女はいつたいなにをしようとしているのだろうか。

「私の心配よりもご自分の成績を心配されたらどうです? 『戦略基礎』の成績、酷いですよ。専門の強襲科もAランク止まりのようですし。」  
「くうっ—!! そういう貴女こそ、射撃も格闘もからつきでしょうに。」

「私には必要ないので。そもそも直接手を下すのはそれしか能がない連中に任せておけばいいでしょう。」

心底馬鹿にした様に邪悪な笑みを浮かべる狐崎に怒りが湧き上がる。

「相変わらずいい性格ですこと。」

少しでも心配した私が馬鹿だった。この女はそういう奴、人を嘲笑うのが生き甲斐の性悪女。あまりの性格の悪さに、一度彼女を厚遇するお父様に苦言を呈したことがある。その時は『まだまだ青いな』と言われたが、この件ばかりはお父様の慧眼を疑ってしまう。

「では失礼します。」

ふっ、と見下した様な笑みを浮かべて去っていく。

「性悪…」

去りゆく背中にわざと聞こえる様に呟く。優秀なのは分かるがどうしても好きになれない。しかし、遠山…関わらない方がいいわね。興味はあるが深入りはしない方がいいでしょう。好奇心は猫をも殺す。仮に遠山の一族を敵に回すような案件であつたならば…考えるだけでもゾツとする。

それに、それよりもやるべき事あかりのストーリーキングがある。この一件、忘れるとしましょう。パチリと扇子を閉じ行動を開始した。

|||||

||

—狐崎みすず視点—

やっと見つけた。

数日前、使えそうな武偵を探していた序に定期的に確認しているものを見る。遠山金次、SDAランク世界で93位、アジアで40位…





「これからは姉さんの存在を隠さなくていい。」

そう伝えてきた兄さんの声はどこか晴れやかだった。そう、あんなだけでも俺たちの姉さんだ。自分の姉を隠すというのはやはり納得はいつていなかっただ。俺も兄さんと同様に、心の中で喜んでいて。そう、あの言葉を聞くまでは。

「キンジ、姉さんが表舞台に立ったという事は、喜ばしい。しかし、忘れるな。今後、アレが堂々と暴れ回ることになる。…胃薬を用意しておけ。」

そう、そういうことになる。もうすでにMI6に喧嘩売ってたり、世界中で最強クラスを倒して回っていたみたいだが、それが更に加速する可能性が大いにある。…なんかもう胃が痛くなってきた。

「太田胃散あつたけ…?」

薬を探すべく戸棚を漁っていると、玄関をノックする音がする。

「こういう時に来る奴は碌な奴じゃないな。」

不幸体質による長年の経験から居留守を決め込んでいると、  
「キンジ、いるのは分かっているわ。大人しく玄関を開けなければあなたを社会的に抹殺するわよ。」

この世で会いたくない奴ランキングトップクラスの女の声、もう何年も会っていないから俺への興味が無くなったと思っていたのに、何故…いや、心当たりはある。あの姉<sup>バカ</sup>だ。間違いない。それ以外にあの女が来る理由がない。胃の痛みが増してくる。

「仕方ないわね。それじゃあ、あなたが3歳の時にやらかしたことから始まり、今に至るまでの全てのことを拡散してみようかしら。」

「やめろおーっ!!」

恐ろしいことを言い出し、思わず玄関を開ける。普通に良識ある人間なら有り得ないが、こいつならマジで平然とそれくらいのことやる。それを身をもって経験していた。

「あら残念。すぐに出来る様に準備していたのに。」

そう言ってスマホの画面を見せる。家族でさえ知らないような俺の隠し事まで事細かに記されている。…怖っ!!

「おい、開けたんだ。消せよそれ。」

「分かったわ。」

素直にデータを削除する。こいつがあつさり従うなんて…

「バックアップは取ってあるし、それ以上のものもまだあるわ。…と  
ころでキンジ大切な話があるのだけれど。」

「やっぱりか。あとそれお願いじゃなくて脅迫だろ。相変わらずだな  
みすず…」

俺の知る中で最も性格が悪い人間、狐崎みすず。

「…不快だから名前と呼ばないくれるかしら。当時のあなたは子ども  
だったから許してあげていたけれど、今は大人よ。」

「狐崎、久々に会ったが本当に相変わらずだな。」

嫌味たらしく言うと、

「狐崎さんでしょう。あなたは中卒無職、私は弁護士、ああ、狐崎先生  
でも構わないわよ。」

すぐさま社会的ステータスでマウントを取ってきやがった。

「はいはい、狐崎さん、なんの用だよ。俺でストレス解消したいのな  
ら、頼むから帰ってくれ。」

みすずの目的は分かっている。だが、それ以上に帰って欲しい。俺  
の胃が限界突破する前に。

「分かっているでしょう。分かっているなければあなたはあのバカと同  
レベルかそれ以下よ。」

「おい、それは最高の侮辱だぞ。」

「分かっているようね。それじゃあ上がらせてもらうわよ。」

俺の制止を無視し、ずかずかと玄関へと上がり込む。

「お邪魔するわ。…狭いし暗いし、酷い部屋ね。」

「勝手に上がり込んでそんなこと言うか、普通?」

そんな俺の正論に対し、

「事実を述べただけよ。…それにしても客にお茶も出さないのかしら  
?」

「…ちっ、インスタントコーヒーしかないぞ。」

「構わないわ。」

コーヒーを淹れみすずに差し出す。みすずはその香りを嗅ぎ、一口

口にし、

「酷いわね。雑巾の搾りかすかしら。」

「いい加減にしろよ。」

「冗談よ。私も普段はインスタントかコンビニのコーヒーだわ。」

人をおちよくるのが生き甲斐の性悪女が自然と笑うのを初めて見た。『みすずは悪い奴ではない。』以前姉さんが言っていたな。もしかしたら…

「ところで本題に入っていないかしら。こんな汚い所にあまり居たくないの。」

いや、やっぱり性格悪いな。

「どうせ姉さんのことだろ。」

「話が早いわ。何処にいるの…かはあなたが知る訳はないでしょう。あのバカが来たら私の名前を出しなさい。その程度ならあなたでも出来るでしょう?」

「そんなのでいいのか?」

滅茶苦茶馬鹿にされてる気がするが、無理難題を申し付けられるよりは遥かにいい。だが、

「それだけで姉さんが会いに来ると思ってるのか?」

「ええ、あのバカならそれ充分よ。」

大した自信だな。

「8年も会ってない癖に…」

「関係ないわ。大方あのバカのことだからきつかけがあればすぐに来るわ。この8年はそのきつかけを与えられてなかったただけなもの。」

姉さんをバカ呼ばわりする割には信頼してんだな。

「要件は済んだわ。帰っていいかしら?この汚らしい空間から早く出たいのだけど。」

「勝手に上がり込んで随分な言い草だな。頼むからさっさと帰ってくれ。」

なんでこいつは、そこまで根性がねじ曲がれるのだろうか。

「それじゃあ失礼するわ。…そうねお礼にいいことを教えてあげる。」

みすずが玄関のノブに手を掛け、振り向いて言う。

「どうせ碌なことじゃないんだろ。」

「あら、東大に入りたいのでしよう？先輩の助言は聞いておいた方がいいんじゃないかしら。」

「そーいやくいっつ東大卒のエリートだったな。気に食わないが聞いておくとしよう。」

「教えてくれ。」

「頼み方が気に食わないけれど、今回だけは大目に見てあげる。次からは土下座でもしてもらおうかしら。」

腹立つなあこいつ。

「キンジ、よく聞きなさい。」

玄関を出て、扉を閉めながら言う。

「大学って、毎年、いくつになっても受けれるのよ。」

ガチャンと音を立てて扉が閉まる。

「浪人するって言いたいのかあーっ!!」

やっぱりあいつは碌な奴じゃない。そう確信した。

## 虎と狐

—キンジ視点—

みすずが帰った後、暫くしてまた来客があった。

「つまり、あんたもつい先程知ったって訳ね。」

「そうだって言ってるだろ。」

姉さんのことに関して報告を怠ったとカンザキ春のパン祭り（通称風穴祭り）を開催したエリアに俺の無実を訴えていた。

「ランクがRなのはまあ、納得出来るわ。だからっていきなり目立ちすぎよ。」

「仕方ないだろ。姉さんは考えなしなんだから。」

実際なにも考えてないと思う。

「とりあえず事情は分かったわ。バスカービルのメンバーには私から伝えておくからあんたからは連絡しないこと。いいわねっ!!」

「そりゃあ、構わないけど。」

俺としても説明する手間が省けるのは有難いしいんだけど、なんでだ？

「ところであんた玄関にあんなもの貼ってるけど、正気なの？」

「はあ？なんのことだ？」

「あんたが貼ったんじゃないの？」

「いや、俺は何もしてないぞ。」

…まさか！玄関へ駆け出し外側の扉を見る。

『中卒武偵事務所』の張り紙…

「みすず！てめえーっ！」

バリツと張り紙を剥がしながら叫ぶ。あの性悪女、ふざけやがって。

「ちよつと、みすずって誰よっ!!あんたまたやったわねっ!!」

何故かエリアさんが拳銃を抜き、構えている。

「待て、意味が分からん。とりあえず俺の話を聞けえーっ!!」

「問答無用っ!!風穴っ!!」

あの性悪女、絶対に許さんぞっ!!

|||||  
—狐崎みすず視点—  
|||||

性格が悪い、性根が腐っている。私へのそんな評価は知っているし自覚している。

普通の人ならそれを。隠したり、表立って分かる様なことはしないのだろう。せいぜい影で工作したり、貶めたり…

だけれど私はそれを隠さない。いや、隠せない。面と向かって相手を貶めるし、罵詈雑言も言う。他人が苦悶している様や絶望している様を見るのが楽しいし、その様を見る為に工作する。それに対してちつとも良心が痛むことも無い。

その上、俗物的で金と権力、それに社会的地位が大好き。

自分自身を客観的に見てみるとこれ以上無い最低の人間なのでしようけど、そういう風に生まれてしまったのだから仕方がないわ。

そんな性格と性分なので、普通だったなら社会に出る前に叩きのめされていたでしょうね。

しかし、私にとっては幸い、周囲にとっては最悪なことに勉強やこの性格を活かす才能は豊富に持っていた。学生時代における勉強の成績というのは、自身の安全を確保するのにはもってこいで、有名大学や進学校へ容易に合格出来る生徒は、学校の実績の為に重宝され、教師という盾を持つこととなる。更に、人を貶めることに抵抗の無い性格と能力の高さであらゆる情報を収集し、周囲を貶め、脅すことも可能だった。それに加えあるプラスαにより、恨みや妬みを排除出来、有意義な学生生活を送ることが可能となった。

そんな性格と考えなので、当然だが、小学校に上がるまで友達などは出来る筈も無かったし、必要も無いと思っていた。ただひとりを除いて。

出会いは小学校。初めての学校生活に浮かれる同級生たちを遠目に見ながら、私は名簿と顔を覚えていた。

帰宅したら情報を集めるとしましょう。利用出来そうな人間をピックアップして弱みを握り、害になりそうな人間は排除しましょう。そんなことを考えていた。

話かけてくる同級生たちには適当に受け答えしながら、その一挙手一投足を観察し、癖や本性を探っていた。

そろそろ時間かしら。教室の前方に掛けられた時計をチラリと見る。入学式の予定を思い返し、この喧騒から解放されるのを待っていた。

「はい、静かにしてね。ほら、自分の席に着いて。」

前方の扉からまだ若い女教師が入って来る。彼女がこのクラスの担任ね、気が弱そうで御し易そう、ラッキーだわ。

「あなたの席は…そこね。」

担任の後ろからブロンド髪の子がついて来ていた。担任はその子に座席表を見て席を教えている。

入学式で迷子になったのかしら？それにしても落ち着いてるわね。取り乱した様子も無いみたいだし…

その子が妙に気になり、特に注意して観察しようと思ったのは、その容姿も原因のひとつだろう。

髪の色もそうだが、それ以上に目を引く顔立ち。今はまだ子どもらしい愛らしさがあるが将来的にとんでもない美人になるのを確約されている。

あそこまですば抜けた容姿は、良い意味でも悪い意味でも人を惹き付ける。彼女は学生生活において、上に立つか標的となるか、その2択しかないだろう。

周囲の注目を集めながらも、それを気にする様子もなく、指示された席に向かう彼女。

あの子は使えそうね。彼女との友好的関係を築けば、あの容姿を利用出来る。彼女が孤立したならば、唯一の友達と思いつまませ、信頼を勝ち取る。上に立ったなら、周囲を蹴落とし、No. 2の座に就く。そんな計画を練っていた。

「遠山かなこ。」

彼女は自身の自己紹介をそれだけで済ませた。

そして、まるで興味が無いと言わんばかりに席に座り、他の生徒の自己紹介をうわの空で聞いている。

私と似たタイプなのかしら？少し親近感が湧いてくる。

全員の自己紹介が終わり、初日は終了となった。式に来ていた保護者と共に生徒たちが帰宅して行く。

家に帰り、ひとり考える。どの様に彼女に接触するか、どの様に友好関係を築くか、様々なシミュレーションを行い、最善の策を練る。

「周囲の動きも考慮しないと…」

相手は小学生、まあ、私もだけれども。予想外の行動や理性の弱さ故に信じられないことも平気で言う。そこを考慮して動くのは中々に骨が折れるわね。

「少し様子を見ようかしら？」

正直、人との関わりを極力避けてきた私に、いきなり小学1年生の行動予測をたてるのは困難だった。

それに情報が少な過ぎる。今の状況で下手を打ち、敵に回すのが1番の悪手だ。だから暫く様子を見る。そうすることにした。

様子を見る、その選択は間違っていないかった。そう確信するまでに、全くの時間を要さなかった。

初日の授業、その一限目から爆睡し、起きない。それこそ、他人の不幸を最大の楽しみとしている私でさえ気の毒になる程に、気の弱い担任は頑張っって起こそうと頑張っていたが、全てが無意味だった。その一方で、体育での体力測定では、なにか不満そうにしながらも、大人を遥かに上回る成績を残していた。

そこで大方察する、彼女は俗に言う脳筋という人種だろう。私と対極に位置する者だ。

その後も、彼女は様々な信じられないこと行い、私はひとつの決断を下す。友好関係を築くのは難しそうね。精々敵対しない様に心がけましょう。

|||||



台場で、姑息な男を武偵高の教師に引き渡した後、適当に散策していたが、日も落ち始めている。学園島も近いので、ついでに金次のところにも行こう。そう思い立ち、同行するミラに伝える。

「もう一人の弟に、お前を紹介したい。構わぬか？」

「弟…家族に紹介…既成事実…勿論構わないぜ。よし、行こう。」

「そうか、お前も乗り気で良かった。」

妹分となったミラが、嫌々私に付き合っているのではないかと心配したが、大丈夫そうだな。

「金次、妹分のミラだ。」

「もつと言うことがあるんじゃないか、姉さん。」

火薬の匂いと弾痕の残る部屋で、ボロボロになった金次がそう言う。

「なんでお前そんなボロ雑巾になってんだ？」

隣に座るミラが、金次の様子を見て、質問する。

「いろいろあったんだよ…というより、妹分って？」

なにか疲れた様子で金次がため息をつくように言う。

「いろいろあって妹分となった。」

「いろいろあって姐さんについて行くことにした。」

私とミラが答えると、

「深くは詮索しない、というよりしたくないから、その話は置いておく。それよりも姉さん。みすずが来たぞ。」

黒いセミロングで小柄な少女の姿が脳裏に浮かぶ。そういえば、暫く会っていない気がするし、最近会った様な気もする。

「みすずは今、なにをしている？」

「武装弁護士、若手のくせに、随分と有名だぞ。悪徳弁護士ってな。」

弁護士という仕事はよく分からないが、悪徳と枕詞がつくあたり、みすずらしいな。

「姐さん、みすずって？」

ミラが少しムツとした表情で尋ねてくる。

「私の友人…いや、親友というべきか。」

「親友っていうなら、会ってやれよ。8年もほったらかしにして。お陰でこっちにしわ寄せがきてるんだぞ。」

金次が抗議してくる。相変わらずみすずが苦手な様だ。しかし、8年も会っていなかったのか…先月会った気がしていたのだが…

「親友ねえ…」

ミラの呟きが聞こえた。

「そうだ、会いに行くとしよう。」

8年も会っていないことに気づくと、無性にあの無愛想な顔が見たくなつた。

「会いに行くつて、姉さん。何処に住んでるのか知ってるのか?」

「知らん。気を探る。あいつのどす黒い気は意識すればすぐに探れる。」

懐かしい。かつて同じ様に、あの黒い気を探ぐり、あいつの居場所を見つけたことがあつたな。

「姐さん…」

「どうした、ミラも来るか?」

少し寂しそうにするミラに声をかける。

「当たり前だ。姐さんについて行くつて言つただろ。」

「では行くか。」

目を閉じ、意識を集中する。…そこか。みすずの奴、見つけると言わんばかりに、分かり易くどす黒い気を存分に放っているな。その距離なら、あつという間だな。

「ミラ。」

「あいよ。」

私の傍に来たミラを抱きかかえ、駆け出した。

|||||

||

—狐崎みすず視点—

諜報科と探偵科で培い、Sランクの評価を受けた変装技術、それを存分に発揮し別人になります。

「みすず。久しぶりだな。」

ビルの屋上に立つ私の背後から聞こえる声。姿形を変えても無駄みたいね。しかし、ようやく来たようだけど、相変わらず前触れもなく現れるわね。

「久しぶり、と言いたいところだけど、8年も何していたのかしら？  
そもそも、久しぶりの前に言うことがあるんじゃないかしら？」

そういつて振り向いた。…いろいろと言いたいことがあるが、

「かなこ、あなた何しているの？」

「?…何もしていないが？」

首を傾げてそう言う。

「聞き方が悪かったかしら、その手に抱えているのはなに？」

何故このバカは8年ぶりの再会の場に、機関銃を背負った西洋美女をお姫様抱っこしてやって来るのだろう。しかもその女は薄っすらと頬を染めているし。

「おお、そうだった。軽いのですっかり忘れていた。」

機関銃一丁と人ひとりを軽いつてのける異常なかなこに呆れつつ、

「説明が済んでいないわよ。それに、それ以上に言いたいことが沢山あるのだけれど。」

「こいつはミラ、妹分だ。」

「ミラ・ミハイロビッチだ。」

少し敵意の籠った目で名乗る女。聞き覚えのあるその名を記憶と照らし合わせる。

「あなた、まさか『要塞』かしら？」

「さっきの雑魚共もそうだったが、日本でも俺は割と有名みてえだな。」

『要塞』で間違いないようね…しかし、随分と大物を妹分にしたわ

ね。

「まあいいわ。それよりかなこ、あなた私に言うことがあるでしょう。」

「おい、待てよ。俺にだけ名乗らせるのか？」

ミラが私とかなこの間を遮る。

「はあ：面倒くさいわね。狐崎みすずよ。詳しくは、かなこから聞きなさい。それよりもかなこ。」

「うむ、元気そうで何より。」

このバカは他に言うことがあるでしょうに。

「バかなこ、8年間何処に行っていたのかしら、それに連絡のひとつも寄越さないどころか連絡もつかなかったのよ：あなたが言うべきことは謝罪ではないのかしら。それに、この姿への言及もないのかしら？もしかしたら別人の可能性もあるわよ。」

変装に一切の言及もなく話す彼女は、

「バかなこと言うな。：8年会わなかった程度で壊れてしまうのか、私たちの仲は？それに、例えば姿形が変わり、雑踏の森に紛れ込んでも、私ならば間違えることはない。」

そう言っつて真っ直ぐな瞳を向けてくる。その程度で壊れる程脆い関係ではない、本気でそう信じている目だ。性根の腐りきった私が、あなたを切り捨てたり、見捨てることがないと信じている。私を信頼してくれている。

「全く、相変わらずズルいわね。どこでそんな口説き文句を覚えたのかしら？だからといって許しはしないわよ。突然いなくなつて、無駄な時間を使つてしまったのよ。」

あながいなくなつて、どれだけ探していたと思つているのかしら。

「心配させてしまったな。すまなかつた。」

「別に心配なんてしてないわ。あなたが死ぬ姿が想像出来ないもの。だけど、あながいない時間は、中々に退屈だったわ。」

いいえ、かなここと過ごした時間が刺激的過ぎたのね。

遠山かなこと私は会話するどころか、視線を合わせることもなく、学校生活を送っていた。しかし、ずっと寝ている彼女と徐々に化けの皮が？がれてきた私は、クラスで浮いた存在になっていく。だからといって私は周囲に媚びることもなければ、むしろ群れる者たちを見下していた。

ある昼休み、クラスの全員でグラウンドでドッチボールをすることが決まったが、私はひとり、教室で本を読んでいた。運動は得意ではないし、好きでもない。だからこうして本を読んでいた。

誰もいない教室。いつも寝ている遠山かなこの姿もない。あの子も参加しているのかしら？わいわいと騒がしいグラウンド、あの喧騒の輪に彼女も加わっている？まあ、体育の成績だけはずば抜けていたし、不思議ではないのかしら。

そんなことを考えていたのだが、さして興味もなく、また目の前に本に集中し直そうとした時、教室の扉が開き、遠山かなが入ってくる。参加してなかったのね。それとも輪に入れなかったのかしら？せっかくひとりで集中出来るのに、邪魔ね。

「遠山さん、グラウンドでドッチボールをしているわよ。」

グラウンドに行けと遠回しに伝えてみた。それが彼女との初めての会話だった。

「知っている。私は見学しろと言われたので教室に戻った。」

輪に入れないどころか、弾かれたのね。

「あら、残念だったわね。」

「私がボールを投げると破裂するからダメだと言うのだ。たった3個割っただけではないか。」

輪から弾かれたことをご立腹のようだが、弾いた生徒たちが正解じゃないかしら？そもそも、ボールが破裂するって、どういうことなの？

「お前は何でも参加しないのだ？」

ひとり本を読んでいた私に彼女が問う。

「私は本を読んでいる方が好きなの。」

簡潔な私の答えに、

「そうか、ならいい。」

そう言う。

「なにがいいのかしら?」

彼女の発言の真意が分からずに問う。

「好きでしているのなら別にいい。」

その言葉で分かった。彼女は私がいじめられていて仲間はずれにされていると思ったのだろう。随分と正義感が強いよね。私とは正  
反対だわ。

彼女との初めての会話はそれで終わった。相容れない存在、それが  
彼女への感想だった。

それ以降、会話もなく一年が過ぎ、学年が上がリ、2年生になった。  
その頃にはすっかり私の性根が腐っていることは知れ渡り、同級生だけ  
でなく、上級生からも嫌われていた。だからといって、それを直そう  
とか、媚びようという考えはちつともなく、なにかやられたら、数百  
倍にして返してやろうと、収集した情報を活用する日がくるのを楽し  
みにしていた。

しかし、また同じクラスなのね。

同じ教室に座る遠山かなこの姿を見る。問題児をひとつのクラス  
に纏めるのは如何なものなのかしら?と、クラス編成に疑問を抱く。  
自分で言うのもなんだが、協調性というものが欠落した私と彼女は別  
のクラスにした方が学級崩壊のリスクを軽減出来ると思う。

彼女は相変わらず毎日爆睡、私も榮譽ある孤立を保ち、それによつ  
て、ひとりぼっちがふたりいる教室では、更なる孤立は生まれなかつ  
た。

新たな孤立が生まれないということは、必然的に既に孤立した者を  
弱者として扱い、標的とする。ではどちらの弱者を狙うのか、という  
ことになる。いつも眠っているが、その身体能力は大人以上の超絶美  
少女。方や運動は苦手で、勉強は得意だが、それを鼻にかけている性  
格破綻者。標的となるのは当然の流れだった。勿論その予兆は去年

からあり、それを見逃す程私は間抜けではない。幾重にも予防線を張りつつ、迎撃の準備を完了させている。寧ろ、そうなることを望んでいた。

先手必勝で仕掛けないのは、正当防衛としての理由付けと的の絞り込みの為だ。全員を脅すことも出来ない訳ではないが、効率が悪い。効率の優先と正当性を主張する為に仕掛けられるのを待っていた。

「狐崎ちゃんって感じ悪いよねえー。」

クラスを中心人物の女子が数人の仲間と共に、聞こえる様に私を貶す。それは彼女による号令、私を標的に定めたという命令だ。

女社会において、カーストの順位は軍隊における階級と同意義。司令官が命令すれば逆らえない。但し、実際の軍隊と異なるのは、下剋上も階級の降格も簡単に起こり得ることだ。故に指揮官となる者は、自ら地位を脅かす者に対して容赦しないし、自らの地位が揺らぐ可能性を全力で排除する。その為に、自らの独裁に対する不満の捌け口を用意する必要がある。

その捌け口は当然反撃のリスクが低く、叩きやすい方がいい。そういう観点から見れば、容姿に優れた遠山かなを標的とした場合、指揮官たる女子は彼女の容姿に嫉妬したという大義名分を掲げられ、彼女を神輿に反逆の狼煙を上げられる危険性があるし、個人としての身体能力も高く、実力行使に出られると大変な痛手となるのに対し、私の容姿は彼女程優れていないし、性格も悪く、嫌われ者、更に運動が苦手。正しく格好の獲物となりえる。そこは想定していたので動揺もないが、やはり彼女の容姿は利用出来るという思いが再燃する。

そういう算段で私を標的とした彼女は、私の幾重にも張り巡らせた罠を尽く踏み抜き、晴れて政権交代、カースト最上位から下野するこ  
ととなる。

ここで想定外だったのは、彼女は最上位から落ちたが、下位には落ちなかったということだ。通常であれば、転落した彼女が標的となる筈だった。権勢を誇った者が落ちぶれた時、その権力を引き継いだ者たちはかつての権力者を迫害するのが歴史的に見ても常であった。しかし、彼女は権力の多くを失ったが、カーストの上位に君臨してい

る。

随分と嫌われてるわね。

想定を上回る私へのヘイトは、独裁者をも上回っていた。まあ、多少は私を脅威とみなして動くでしょう。全力で潰しにくるか、それとも休戦か。どちらの道でも備えは充分だ。それに所詮小学生同士の争い、カーストもそれ程強いものではないし、簡単下剋上、いや革命さえもあり得るのだ。これは小学生さらに下級生という幼さ故に起こり得ることだ。この機会にクラスのパワーバランスを崩壊させるのも面白いかもしれない。

私は、自身の道楽の為にクラスの崩壊を目論んだ。私の撒いた不安や疑惑という毒は、徐々に生徒たちを蝕み、緩やかに崩壊を迎えていく。

そういう予定だった。そんな崩壊の序章、それを眺める筈だったのに、私は季節外れのインフルエンザにより、公休となっていた。

「折角面白いものが見える筈だったのに……」

高熱にうなされながら、熱のせいで潤んだ瞳で天井を見ていた。

それから数日後、熱は下がったが、潜伏期間として公休が続く。

「退屈ね。」

郵便受けに投げ込まれた宿題のプリントは余りにも簡単過ぎて、数分で片付いてしまった。本を読もうにも、この家にある本は全て読破済みだし、内容もしつかりと頭に入っており、読み返す気にもならない。その上、パソコンは

「寝ないでずっと弄ってるから。」

という理由で没収されてしまっている。如何に悪知恵が回ろうと、所詮は子ども、親には逆らえなかった。

「眠くもないわね。」

寝てしまい、退屈な時間を潰そうと考え、ベットに横になつてみたが、十分に睡眠をとったこの身体は、睡眠を必要としていない。

退屈というのがこれ程にも苦痛であると初めて実感した。

「みすずー。お友達が来てくれたわよ。」

退屈にしていた私は、部屋に入って来た母の言葉で頭に疑問符が浮



かぶ。

「お母さん、私に友達はいないわよ。」

「悲しいことを平然と言わないでよ。それに折角来てくれたんだから。失礼よ。」

確かに、退屈なものもあつたが、昨日までは、郵便受けに投げ込まれていたプリントをわざわざ手渡そうとする人物に興味が出た。

「どんな子？心当たりが全くないのだけど。」

「本当に友達がいらないのね…お母さん悲しくなってきたわ。」

「お母さん、私の質問に答えてないわよ。」

「遠山かなこちゃんって言ってたわ。ハーフなのかしらね？ブロンド髪の毛すつごく綺麗な子よ。」

なんであの子が…予想外の母の答えに戸惑う。

「それじゃあ上がって貰うわね。」

「待って—」

私の制止を無視して部屋を出る母。どうしよう…彼女がくるなんて想定していなかったわ。

「お邪魔します。」

母に連れられて、遠山かなこが部屋にやって来る。

「お菓子持ってくるわね。」

そういつて母が退室し、彼女とふたりきりになる。

「渡せと頼まれた。」

そう言つて、プリントを差し出してくる。

「あら、ありがとう。郵便受けに入れてくれたら良かったのに。」

感謝を述べつつも、私の領域に入って来るなど遠回しに言つてみるが、

「頼まれた以上、本人に渡さねばならん。」

と無駄に強い責任感を見せてくる。つくづく私と正反対ね。そんな感想を抱きながら、彼女の容姿は利用出来そうとは思っていたし、ここで味方につけておくのもいいかもしれないわね。本当はもう少し後の予定だったけど、今は退屈なわけだし。

「ところで遠山さん。」

彼女に探りを入れようと話しかける。

「なんだ？…えーつと…」

私の顔を見ながら何度も首を傾げながら悩んでいる。その様子から察する。この子、私の名前覚えてないのね。

「狐崎、狐崎みすずよ。遠山かなこさん。」

「狐崎みすず…狐崎みすず…」

何度か私の名前を繰り返し、

「よし、多分覚えた。なんだ狐崎？」

多分なのね。大丈夫なのかしらこの子。少し不安になってきたわ。

「聞いてみたかったのだけど。何故あなたはいつも寝ているの？」

純粹な疑問。私の様に夜更かしして眠いとしても、あれ程の爆睡

(起こしても全く起きない)するのは異常だ。

「難しいことを考えると熟睡してしまうのだ。」

彼女は何を言っているのかしら？仮に、そういう特殊な体質だったとしても…

「小学生の勉強は簡単よ？」

そう、簡単な内容なのだ。そんな私の言葉に対し、

「簡単…？狐崎は凄いな!! 凄く賢いのだな!!」

キラキラ尊敬の眼差しを向けてくる。あれ、この子、本物のアホの子なの…その容姿と落ち着いた雰囲気から、想像していなかった。

「遠山さん、2+3は？」

「ん？」

私の問いに少し考えようとしていたが、瞼が落ちてきている。

「ごめんなさい。答えは5よ。お願いだからここで寝ないで。」

「むう…」

ゴシゴシと瞼を擦り、必死に眠気を払っている。想定外だったわ。これ程までにアホとは。しかし、扱いやすそうね。計画通り彼女との友好を…いや、扱いやすいのかしら？そもそも私の意図を汲み取れるのこの子？利用するどころか、身を滅ぼす起爆剤にも成りえるわよ。

「お菓子とジュースよ。かなこちゃん遠慮せず食べてね。」

私が初めて家に招いた(勝手に来た)級友を母は喜んでいるのか、普

段よりも豪華なお菓子を持ってきた。

「ありがとうございます。」

ペコリと頭を下げる遠山さん。そういうところはしつかりしているのね。

「あら、礼儀正しいのね。とつても綺麗だし、みずず、いいお友達ね。」

「お母さん、用は済んだでしょう？」

「可愛くない子ね……」

家族に対してですら対人能力×の特性持ちの私に、呆れた様子で部屋を出ていく。

「…友達？狐崎と私は友達なのか？」

「そうね。広義的に捉えれば、同じクラスでこうして家に来て話しているのだから、そういうふうには言えないこともないわね。でも——」

「友達…初めて出来た。」

私はそうとは思ってないわ。そう言う前に彼女の呟きが耳に入る。

「違っ——」

「初めての友達だっ!!」

否定するよりも前に彼女が飛びついてくる。信じられないジャンプ力ね。ぎゅうつと抱きしめてくる彼女の喜び様に戸惑う。抱きしめる力が増してくる。

「痛い、痛いわよっ!!離しなさいっ!!」

「おお、すまなかった。」

パツとしがみつくのをやめる。腕が折れるかと思った…とんだ馬鹿力だわ。

「狐崎は友達だ。」

そう言って笑う姿に私としたことが見惚れてしまった。それに、その悪意のない純粋な笑顔に柄にもなく絆されたのか、

「ええ、そうね。」

否定しなかった。

その日、私は初めてにして唯一の友人を得た。

## あの日の日曜日

— 狐崎みすず視点 —

遠山かなこと友達になった。そのことをすぐに後悔することになった。

「狐崎、遊びに行こう。」

友人となつてからというもの、休日の度にやって来る。彼女にとつて私は初めての友達（私にとつても初めて友達だが）、はしゃいでいたのだろう。

「あら、みすず、行きなさいよ。一日中パソコンと睨めっこより遥かに健康的よ。」

そんな彼女の誘いに母は大賛成で、家から追い出される。

春先の日差しが眩しい…憂鬱だわ。

「何処に行くのかしら？ 図書館？」

「山。」

何処の？ 答えになってないわね。

「ちよつと、何する気っ!？」

彼女が突然私をお姫様抱っこする。

「こっちの方が早い。」

「はあ？ っ——」

風景が加速する。住宅街の壁や屋根、看板が線の様に駆け抜けていく。何が起こつてるの？ そんなことを考える間もなく、気を失った。

真つ暗な世界。死んだのかしら？

「狐崎、起きろ。」

体を揺さぶられ、三途の川から帰還する。瞼が開き、意識が覚醒すると同時に強烈な吐気に見舞われる。胃から込み上げるものを必死に抑える。

「着いたぞ。」

なにが起こつたのか、可能な限りの記憶を呼び起こす。この子に抱えられて、世界が加速した？ 駄目ね、全く思い出せないし、思い出せ

たとしても理解出来そうにないわ。

「ここは何処かしら?」

吐気が収まらず、グラグラと頭が回っている。船酔いの様な感覚の中で周囲を見渡し尋ねる。

「山だが?」

この子、バカだったわね。

「それは分かるわ。山の名前は?」

「山は山だろう?」

ダメだ、会話が成立しない…

ここは山の中腹辺りだろうか?そこから広がる風景、田園…駄目だわ何処だかさっぱり分からない。

「ここで何するのよ…」

帰りたくない、しかし、帰り道も分からない。もしかして私をここに遺棄する気かしら?恨みつらみは十分買って来たとは思えけれど、流石にまだ死にたくはない。

「ピクニック?」

何故ここに連れてきたあなたが疑問形なの…不安しかない。しかし敵意がない事は救いだ。

ピクニックを提案した彼女は、私を無理やり引きずながら、山の中を進んでいく。

「ひいっ、虫っ!!」

この世で最も嫌いなものが虫の私にとって、地獄の様な空間。

「お、きのこだ。」

白くて綺麗なツバとツボのあるきのこ、頭の中の記憶を呼び起す。日本で最強の毒を持つきのこ、以前手軽に入手出来る毒を調べていた時に見た記憶がある。…ドクツルタケね。

虫が多い山に入る気も起きなかったので記憶の片隅に留めていたけど、こんな状況で実物を目にするなんて思ってたわ。

「美味しそうだ。」

迷いなくドクツルタケをむしり取り、口に運ぶ。何故きのこを生で食べようとするの?それ以上に危機感はないの?

「やめなさいっ!!」

私の制止は間に合わなかった。パクリと口にしてしまった。終わった、この子がここで死んだら、私はどうやって帰るのよ…しかし、症状が出るまでに最短でも6時間、最長で24時間と書かれていたわね。まだ間に合うかもしれない。この子の命はどうでもいい、早急に帰宅しなければ…

「味は普通だな。」

のほほんとそんな感想を述べている彼女を誘導しなければ…

「おお、こっちは赤いぞ。」

それはベニテングダケ…

「こっちは面白い形だ。」

カエンタケ：触ったら大変なことになるんじゃない…

ひよいひよいとそれらを収穫し口に運ぶ。終わった、もう終わった。即効性の毒きのこを食べてしまった。何故止めなかったの私…いや、止められないわよ、あんな速度で動かれたら目で追うことさえ出来なかったもの。私は悪くない。

「うーん、肉の方がいいな。」

この期に及んで、きのこの感想を述べているバカに、私は泣きそうになる。そしてバカは思い出した様にドクツルタケを手に取り、

「そうだ、狐崎も食べるか？」

私に差し出してくる。

「いらないっ!!いらないわっ!!やめて、近づけないでえーっ!!」

全力で拒否する私に、

「遠慮しなくてもいいぞ? いっぱいある。」

と私が遠慮していると勘違いして、ズイズイとドクツルタケを差し出す。

「いやああーっ!!」

私の人生において一番大声を出した瞬間だったと思う。私の悲鳴が木霊した。

— 間宮もえぎ視点 —

間宮家の夕座として、お家第一に生きてきた。そんな一族の安全を祈願しに、筑波山神社を訪れ、帰路についていた時だった。

「いやあああーっ!!」

筑波山から微かに聞こえた悲鳴。一般人には聞き取れなかった可能性もあるが、間宮の術を修めたこの身には聞こえた。幼い子ども、それも女の声、表と裏の仕事を受け持つ一族として、その技を大ぴらに見せることはまかりならぬ。そんな考えがあったが、一族の者たちにも子、儂の孫にあたる者たちが生まれたり、生まれそうだったりする。そんな状況だっただろうか、その声の下に自然と体が向かっていた。

「きのこと嫌いなのか？好き嫌いは良くないぞ。」

「違うわよ。それは好き嫌いの問題じゃないわ。なんで致死性の毒を進んで食べるのよ。」

登山道からも大きく外れ、全く人気の無い山の中腹で、黒髪とブロンド髪の少女が騒いでいる。遭難したのじやろうか？しかし、あのブロンド髪の少女が手にしておるのは…ドクツルタケじゃな…黒髪の少女が正しい判断をしておる。見捨てるのも目覚めが悪い。全く、世話が焼けるのお。

止めに入ろうとした時、ブロンド髪の少女と目が合った、いや合った気がした。こちらは完全に気配も姿も消しておる。気付かれる筈がない。間宮家は元は公儀隠密の家系、それらの術は身に染みついていて。そう考えていた。

「きのが欲しいのか？いっぱいあるぞ。」

突然目の前に現れるブロンド髪の少女、手にはドクツルタケ。

「いや、いらぬのじゃが…」

冷や汗が背中を伝う。

「意外といけるぞ。」

そう言つてパクリとそれを口にする。いや、食べたらいかんじやろ

…呆氣に取られておると、少女の姿が消える。

「熊でもいればいいのだが…」

先程の場所に一瞬で戻り、尻餅をついている黒髪の少女に話しかけている。尻餅をついた少女は、

「あ、あなた消えて、また現れて…なに、なにをしたのっ!？」

そりゃあ、腰をぬかしてもおかしくないのお。修羅場をくぐってきた儂も驚いておるし。

「そこからここまで走っただけだが？」

なにかおかしいことでもあつただろうか?とでも言わん様に首をかしげている。…おかしいじゃろう。

「ここに来る時もそうやって来たではないか。」

「あんな速度でここまで私を運んだの…」

「そうだが？」

「バカじゃないのっ!?!死ぬわよっ!!というよりなんで私死んでないの?おかしいでしょっ!!」

なんじゃろう、全く状況がわからぬ。

「それに、ドクツルタケだけじゃなく、ベニテングダケとカエンタケまで突然食べるし、訳が分からないわっ!!…もう嫌…帰りたい…」

最後は力なく崩れ落ちた。いや、としてはもいかぬ少女がそんな状況で泣きもせず、冷静にきのこの種類を判別するのは充分に凄いと思うのじゃが…ブロンド髪の少女の奇行に目を奪われがちじゃが、お主も大概なメンタルじゃぞ。

「見ただけきのこの名前が分かるのか。狐崎は凄いな。」

…違う、違うじゃろ!!あのブロンド髪の少女が食した毒きのこのラインナップは駄目じゃろう!!

「お主、なんともないのか…」

思わず少女たちの前に姿を現す。

「なんともないぞ。」

「ああ、人、人がいた。教えて下さい。ここは何処なんですか?」

ケロッとした様子で答えるブロンド髪少女を押しやり、黒髪の少女が希望の光を見つけた様に目を潤ませ尋ねてくる。



「筑波山じゃが…儂の方がいろいろ聞きたいくらいあるのじゃが…」  
そう、儂の方が状況が分からない。分かるのは、このブロンド髪少女はなにかがおかしいということだけじゃ。

「筑波山っ!?茨城県じゃない。あなた何考えてるのっ!?いえ、なんで数分で巢鴨からここに着いてるのよっ!!」

「だから走ったと言っただろう。」

頭が痛くなってきたのじゃ…

「あー、その、なんじゃ、儂としては、そっちの黒髪の女子おなじが言っておった様に、帰った方がいいと思うぞ…」

大人として常識的な判断を下す。というより、全く理解出来んし、このままだと黒髪の少女が死んでしまいそうだし、気の毒で仕方がない。

「まだ来たばかりなのに…」

しょんぼりと落ち込んだブロンド髪の少女に対し、

「ああ、良かった…普通の人で良かった…」

黒髪の少女は歓喜の声を上げる。…儂も普通の人かと言われれば怪しいのじゃがな。

「帰り道は分かるかの?」

落ち着きを取り戻した黒髪の少女をブロンド髪の少女がお姫様抱っこしている。

「分からないが、なんとかなる。」

その発言で黒髪の少女が青ざめる。

「嫌ーっ!!降ろしてーっ!!」

ジタバタと暴れるが、

「大丈夫だ、南に下ればいいのだろう?」

そんな単純な考えでいいのかのお?

「こっちだな。」

「そっちは西じゃ。」

不安しかないのじゃが…

「それならこっちだな。」

「そっちは北じゃ。西の方角が分かったなら南は分かるじやろっ!!」

きよとんとしている少女。なんじゃこのアホは。

「ふふふ、死ぬのよ、私は今日で死ぬのよ…」

いかん、黒髪の少女の精神が限界じゃ!!

「南はこっちじゃ。いいか、分からなくなったら、必ず誰かに聞くのじゃ。頼むから…」

儂までおかしくなりそうじゃ…

「よし、それでは行くか。」

「お願いだからゆっくりでお願いするわ…」

生気の抜けた表情で懇願する。

「分かった。」

「お願いするわーひいつ!!」

速いのお。もうあんなところにおる。いや、そもそもなんで空を走っておるのじゃ?もう考えたらダメな気がしてきたわい。

間宮の家にとどり着く。

「あら、遅かったですね。」

「うむ、狐に化かされたようじゃ。」

「まあ、なにかあったんですか?」

「ちいとな。」

今日起こった夢物語のような出来事を話してやる。皆、冗談話と思つて笑つておつたが、儂もそう思う。

|||||

— 狐崎みすず視点 —

「もう、お願いだから山に連れて行かないで。」

なんとか家にたどり着き、降ろされている時に、彼女へそう懇願する。

「山、嫌いだったのか?すまなかつた。」

そうじゃない、もっと常識的な範囲での遊びなら嫌々だが付き合つてあげなくもないが、こんなことをしていたら身が持たない。

この子と友達になつたの、間違ひなく間違ひね。

「それじゃあ、次は狐崎が決めてくれ。」

「行き先を？」

下手なこと言うと、地球の裏側にだって連れて行かれかねない。

「やりたいこと。」

「やりたいこと…？それはなんでもいいの？」

「構わぬぞ。」

いや、待ちなさい。なんでまた遊ぶことになってるの!?そもそも、今日のこれは遊びなの？死にかけたのだけれど。それに、あなた毒きこの食べてるし、明日死んでたりしないわよね…

「決まったか？」

「いいえ、まあ、考えておくわ。」

「そうか、楽しみにしている。それじゃあまた来週だな。」

「遠山さん。明日学校よ。」

遊ぶことしか頭にならないのか、それとも学校に行く気がないのかしら？

「もう来れるのか？」

ああ、まだ私がインフルエンザで来れないと思ってたのね。…なんで連れまわしたの？

「ええ、もう治ったわ。」

「少し学校が楽しくなった。」

そう言っって、手を振って去っていく。あなた、ずっと寝てるじゃないの…

そう思いつつも、純粹に向けられた好意、あの言葉と表情…少しだけ嬉しい。私どうしたのかしら？こんなこと思うことなかったのに…

部屋に戻り、ベットに倒れ込む。訳が分からない一日だったわ。あの子突然空を走るし、あんなの身体能力が高いとかそういう次元じゃない。いろいろと聞きそびれたわね。まあ、来週もあるのだし、その時にでも…

無意識に来週のことを考えている自分がある。なんでなのかしら…

「全く、訳が分からないわ。」

今日の出来事が楽しかったかと聞かれれば、断じて否。全く楽しくないし、二度とごめんだと思う。だけど、衝撃的だった。今までは、ある程度自分の思い通りに物事を動かすことが出来ていたし、そうやれる自信も多少はあった。なのに今回のあれはなに？全く道理が通じないし、物理法則を無視したことを平然と行う意味不明な生き物：正直あれと友達ということになってしまったことに、後悔しかない。でも、

「退屈とは無縁ね。」

私の考えていたあらゆる計画、そのどれよりも刺激的だった。それこそ、刺激的なんて言葉では生温い程に。

|||||

—てんのうずあいらり天王洲愛梨視点—

夢だった小学校の先生。そんな夢を叶え、今年から新米教師として赴任した小学校は私の母校でもある。頑張ろう。そう思うけど、それ以上に不安もある。私はあんまり気が強い方でもないし、おどおどしている事が多い。教育実習の時も：弱気になったらダメよ!!明日から先生になるんだから!!

入学式の日、体育館に並ぶ新生とその保護者たち。1年3組、私が受け持つクラス。喜びと不安でわたわたしていると、学年主任に励まされた。そうよ、頑張らなきゃ!!決意を固める。

入学式が終わり、オリエンテーションの為に教室に移動が始まる。私も教室へと向かっていた。

「かなこ!!どこ行ったの!?!」

「落ち着け、お前はじつとしていろ。お腹の子に障るといけない。」

眠っている小さな男の子を抱えた、2mはあるんじゃないかという大男と綺麗な女性が子どもを探している。

「あのお、大丈夫ですか?」

「先生ですか!?!娘がいなくなつて…」

「あの、お子さんのお名前は？あと特徴とか…私も探しますので落ちて書いて下さい。」

入学式についてきたが退屈で何処かに行ってしまったのだろう。幼稚園児くらいの子だったらそんなに遠くには行ってない筈。

「遠山かなこです。それで—」

あれ、なんか聞き覚えのある名前…クラスの名簿を見る。やっぱり、私のクラスの生徒だ…えっ、どうしよう!?落ち着かせようとした私の方が慌てふためく。

「あ、いた。」

校舎の屋上から、スカートなのも気にせず飛び降りてそう言う、ブロンド髪の少女。

「ひいつ!？」

衝撃映像に腰をぬかす私。なんでこの子怪我ひとつないの!?

「いた、じゃないわよ!!なんで勝手に何処か行くのよっ!!」

「退屈だったから。」

「このおバカっ!!」

お母さんの拳骨が少女の頭に落とされ、ドゴンツと人からしてはいけない音が響く。それだというのに、痛そうな素振りさえ見せず、

「金一が起きてしまうぞ。母上。」

とお父さんに抱えられた男の子を見ている。

「かなこ、勝手にどこか行ったら駄目だろう。」

お父さんが優しく諭すように言う。

「ごめんなさい…」

しゅん、と項垂れる少女。片腕で男の子を抱き、もうひとつの腕で少女を抱き寄せ、猫可愛がりしている。

「あなたがそうやって甘やかすから。」

お母さんがお父さんに怒りを向けている。

「あ、甘やかしてなんかいないぞ。」

お父さんはそう言っているが、その間でさえ少女の頭を撫で回している。娘が可愛くて仕方ないんだなあ。傍から見ても分かる親バカっぷりだが、実際、その子はビツクリするくらい綺麗でお人形さん

かで見紛う程愛らしい。

あ、そうじゃなかった。なんかいろいろと言いたいことはあるけど、

「遠山かなこちゃんね？」

膝を曲げ、少女と同じ高さまで視線を落とし、話しかけると、少女はスポンツとお父さんの腕から脱出し、私の前で首をかしげる。

「えーっと、私はかなこちゃんの担任の天王寺愛梨です。よろしくね。」

出来るだけの笑顔で自己紹介する。正直、いろいろと衝撃が多すぎて笑顔は引き攣っていたと思う。

「遠山かなこです。」

ペコリと頭を下げる。あれ、意外と礼儀正しい…

「一緒に教室に行きましょう。」

「すみません、ご苦労をおかけします。」

お母さんが申し訳なさそうに言うと、かなこちゃんはコクリと頷く。

「かなこ、いいわね。絶対に約束を守るのよ。」

お母さんがかなこちゃんの手を握り、真剣な眼差しでそう言う。お父さんもこの時だけは娘への甘えを捨てた目をしている。

「分かってる…」

少し不服そうにかなこちゃんが答える。約束ってなんだろう…？

それから無事にオリエンテーションを終え、一日が終わった。

「疲れた…」

先生って、こんなに沢山することがあるんだ。学生の頃には知らなかった大人の、仕事の世界の大変さを身に染みて感じていた。

翌日から、この程度は比ではない程大変になるなど、全く考えもしていなかった。

あれ、この子ヤバいんじゃない？

そう思い始めたのは、件の少女、遠山かなこちゃんだった。

初日の最初の授業から爆睡。どんなに頑張って起こしてみても、起きる素振りさえない。まさか病気!?

そんな心配をした時、小さく欠伸をしてかなこちゃんが目覚める。ああ、よかった。寝ているだけだった…大事ではなかったことに胸をなでおろす。そんな安心も束の間、ちらりと教科書を捲り、また眠ってしまう。

どうしたらいいの…ああ、そうだ、きつと初めての学校生活に緊張して、夜眠れなかったのね。大事なイベントの前日とか私もよくなるし、そうよね…

とりあえず、寝かせてあげよう。本当はダメなんだろうけど、今日だけ特別だよ。そんなことを思いながら授業を進めた。

体育の授業、最初の授業は体力測定。明らかにやる気のない生徒がいる。50m走でほとんど走っていないというより歩いている。

「狐崎さん、運動は苦手？先生も苦手だからなんとなく気持ちは分かるけど、でももう少し頑張ってくれるかな？」

優しく、笑顔で語りかけてみる。

「ええ、苦手だし、嫌いだし面倒くさいです。そもそも、体力とか運動で明確な指標を出したら、単純な小学生の価値基準に支障をきたすんじゃないんですか？こういうところからいじめって始まるんですよ。」

あれ、この子もなにかおかしい…あなた本当に小学生だよね？

「あー、そういうのは先生に言われても…」

「分かっています。そういうのは文科省から基準と必須科目だなんだと定められてるんでしょう？結局古い己の価値観を押し付けるだけよね、お役人様は…」

なんか怖いなあ…多分凄く頭がいい子なんだろうなあ…

現実逃避したくなかった私の精神をさらに追い込むもうひとりの生徒が現れる、そう遠山かなこちゃん。

眠りから覚めた彼女は、少し暗い表情で測定に挑んだ。

…ここ、小学校だよね？国立競技場じゃないよね？

彼女は小学1年生の身でありながら、走らせても、投げさせても、跳ばせても、全てでオリンピックピックの様な記録を叩き出す。測定ミス？違うだって明らかにひとりだけ動きがおかしいもん。もしかして凄

スポーツの才能を持った子なの：？いや、それでもおかしい、だってまだ小学生、しかも1年生なのに、なんで大人よりも凄い記録がでるの!?

凄い才能の生徒がふたり、これは教師として喜ぶべきことなんだろうけど、それ以上に、胃が痛くなった。

そんなふたりの生徒に胃と精神を削られる日々、そして家庭訪問の日、

「うちの子、学校でちゃんとやれてますか？」

酷く申し訳なさそうな顔でふたりの生徒のお母さんから尋ねられた。やれてません。なんて言えず。

「その、みすずちゃんは凄く頭がいいみたいでして、その、他の子たちと会話のレベルが違い過ぎて、その：まだうまくなじめてないみたいです：ごめんなさい。」

「ああ、謝らないで下さい。悪いのはこの子なので：凄く捻くれてるけど、根はいい子：そう、いい子なんですよ。：多分。」

お母さんも自信がないみたい。狐崎さん大丈夫なのかなあ：それを聞いて、お母さんの隣に座る狐崎さんは、

「仕方ないじゃない。そういう風に生まれたんだから。それに、友達なんていなくても、私は私の楽しみ方があるのよ。」

と気にする様子もなく紅茶を啜っている。

一方の遠山さん家では、

「あの、凄く運動が得意みたいです。ただ：あのお、かなこちゃんお家でちゃんと寝れてますか？」

「ええ、毎日20時には爆睡してますよ。ビックリするくらい寝つきがよくって：」

あれえ？なんでじゃあ授業中に寝ちやうの？

「かなこ、もしかして授業中寝てないわよね？」

隣に座るかなこちゃんに察したお母さんが尋ねる。

「授業中かは分からないが、学校では寝ているぞ、母上。」

？が付けない子なのね：そんな真っ直ぐな目で答えることじゃないよ…



「なんで寝るのっ!？」

「難しいことを考えると、眠くなるのだ。」

まさかの回答に、お母さんと私の時間が止まる。

「あんた、バカとは思ってたけど、まさかここまでなんて…」

お母さんの驚愕の眩きが妙に悲しく感じた。

そんな不安しかない生徒たちのクラスをなんとか1年乗り切った。終業式の日、帰宅した後なんか安堵で緊張が解けたのか、部屋に帰るなり、涙が溢れ出て、止まらなかった。

翌年は2年生の担任、そんな話を受けて、嫌な予感しかしなかった。渡された名簿、予想通りあの方たりの名前がある。

ああ、もう胃が痛くなってきた。だって、1年生の終わり頃から狐崎さんはなんか悪い噂ばかり聞くし、かなこちゃんは相変わらずだし、またもう1年!?!絶対去年よりも酷いことになるよ。出来ればお断りしたかったけど、そこはNOと言えない日本人の私は、受けてしまった。

2年生の初め、狐崎さんがインフルエンザになったりはあつたけれど、家庭訪問の頃にはすっかり回復して、元気にクラスの勢力図を書き換えて遊ぶなど手が付けられなくなってきた。かなこちゃんは相変わらず寝てる。

そして家庭訪問の時、狐崎さんのお母さんから驚愕の事実を伝えられる。

「友達が出来たみたいで安心しました。」

えっ!?!、だって学校だといつもひとりぼっちなのに…

「インフルエンザの時にプリントを届けに来てくれたから知ったんです。遠山かなこちゃんって凄く綺麗な子。あれ以来毎週休みの日にみずずと遊んでるんです。」

嬉しそうにそう言うお母さん。ええ、あのふたりが…正直正反対だと思ってたけど、逆にそれがよかったのかな?

「別に好きで遊んでるんじゃないわ。お母さんがあの子が来ると私を追い出すじゃない。だから仕方なくよ。」

つつけんどんにそう言って紅茶を啜ってけど、狐崎さんの頬に薄っ

すらと朱が差している。

「担任失格です…学校ではそんな素振りも全くなかったから、気付けませんでした。」

意気消沈する私に、

「仕方ないと思いますよ、だって遠山さんは学校だとあれだし。」

そうだよ、寝てるもんね。話せないよね。ああ、なんで気付けなかったんだらう。もっと早く知っていたら少しは気が楽になれたのに。

だけど凄く嬉しかった。去年は友達なんていらないうつていた狐崎さんに友達が出来た。他の生徒たちと接して、嬉しいことも沢山あったけど、なんだか一番嬉しい。彼女の大切な出会い、その空間の背景として残る。教師としても私個人としても凄く嬉しかった。

あれから16年、様々な学校に異動しながら教師を続け、結婚もして子どももふたり生まれました。

ある土曜日の午後、子供たちは友達と遊びに行っただので、ひとりで買い物に行っていた帰り道、買い物袋を下げて道を歩いていた。

「あら、天王洲先生？」

私と同じくらいの身長で黒い髪を黄色いシュシュで纏めた、スーツの女性、出来るキャリアウーマン感が滲み出ている。教師生活の記憶が1年目から鮮明に蘇った。

「ウソツ、狐崎さん。凄い、久しぶり!!髪、伸ばしたのね。」

あの問題児の内の片割れ、当時は肩口までだった黒髪は束ねられ、胸元のまで垂らしている。彼女たちのお陰で、それ以降どんなクラスを受け持つても動じることは無くなっていた。あの子たちに比べたら、なんということも無い。私を強くした子。一番思い入れがあったふたり。懐かしくて涙が出てくる。

「ええ、お久しぶりです。先生はまだ教師を？」

相変わらず落ち着いたクールな話し方ね。ふと、彼女の襟に輝くバッチが見えた。

「今はそこの小学校で学年主任よ。狐崎さんは弁護士になったのね。」  
成績は凄く優秀だったし、あまり驚かない。

「武装弁護士ですけどね。離婚、遺産相続、なにかありましたらご相談下さい。」

私の左手の薬指の指輪を見てそう言って名刺を出してくる。

「相変わらずの性格ね。残念だけど離婚の予定は無いわよ。」

そう言いながら、名刺を受け取る。『高千穂弁護士法人 弁護士 狐崎みすず』

「凄いわ。高千穂弁護士法人ってCMもやってるわよね。私でも知ってるような有名なところじゃない。」

「まあ、もうしばらくしたら肩書が代表補佐になるんですけどね。」

凄く黒い笑みでそういう。この子、絶対出世レースであらゆる手段でライバルを蹴落とす気だ。この子なら実際蹴落として上に立つのでしょうね…

「ところでそのシユシユ、随分と古いみたいだけど、大丈夫なの？」

一切の隙を見せない彼女が、何度も縫い繕ったシユシユをつけていることに驚いて、思わず指摘してしまう。

「ああ、これはプライベートル用なので。仕事の時はちゃんとした物に変えますのでご心配なく。」

お気に入りなのかしら？この子にもそういうこだわりとかあったのね。

「ところで遠山さんは元気？」

きつと凄く美人さんになってるんだろうなあ。しかし、その名を出した瞬間、狐崎さんの表情が先程とは毛色の違った黒い笑みに変わる。あれ、地雷踏んじやった!?

「あのバカ、何処にいるのかも分からないですよ…もう7年も連絡も顔見せにも来ないし、なに考えてるのかしら、いいえ、なにも考えないわね。あのバカのことだから。」

「7年もっ!?!それって…!」

最悪の可能性を考えてしまった。

「ああ、それは大丈夫ですよ。あのバカが死ぬのは、世界から武器も争いも完全に無くなるのよりも難しいので。」

あり得ません。と言い切る狐崎さん。

「あの子が体力測定で凄い数字出してたと思いますけど、あれ、手加減に手加減を重ねてあれですからね。本気出さないって両親と約束してたらしいですし。」

あの時言ってた約束ってそれだったんだ…でも、

「ちよつと待って、おかしいよね。あれで手加減してたんだとしたら超人とかそういうレベルじゃない…」

全く信じられない話だ。

「まあ、普通は信じられないでしょうね。でもあの子、普通じゃないので。」

「あー、それは分かるかも…」

まあ、それはあなたもなんだけどね…

「じゃあ7年も探しているのね…」

「ええ、見つかるまでは何年でも。なにか知ってることがあればそこに連絡してくれますか?」

そう言っただけ渡された名刺を指す。

「勿論よ。でもあなたがそんなに友達を大切にするなんて…成長したのね。」

感慨深いものがある。きっと友達も増えたのだろう。

「私が友達と認めた唯一の人ですから。そこいらの有象無象と違ってあの子に代わりはきかないんです。」

増えてなかった…それに周りへの価値観が以前よりも悪化している様な気もする。

「そうだ、同窓会でもやってみる?」

「え、嫌です。なんでそんな無駄な時間使わなきゃいけないんですか?それに、あの子も私も友達いないから行くわけじゃないじゃないですか。」

「あなたたちって大概よね…」

異動となり、2年生までしか彼女たちを見ていないが、恐らくずっとあんな感じだったのだろう。

「まあ、全然期待してないんで大丈夫です。記憶の片隅にでも留めておいてもらえればそれでいいので。」

「あ、でも私、狐崎さんの連絡先知らないわよ？今は一人暮らしなの？それともご実家？そっちなら分かるけど…」

名刺も事務所の番号しか書かれてないし、

「ああ、大丈夫です。」

そう言つて、狐崎さんがスマホを触れると、私のバックの中で携帯が震える。

「あ、ごめん。電話みたい。」

携帯を開くと知らない番号。

「それ、私の番号です。登録しておいて下さい。」

「ちよつと待つて!?なんで、私番号教えたことなんてないわよねっ!」私が焦つてそう言つと、何言つてんのこいつと言わんばかりの表情で、

「なんで私が知らないと思つてたんですか?」

怖いっ!!この子怖すぎるよ。ドン引きする私に、

「それじゃあ、失礼します。私忙しいので。」

と去つていく。呼び止めたの狐崎さんだよね…

相変わらずだなあ…と思ひながら帰路につく。

狐崎さん、早く遠山さんと会えるといいね。もう大人になつてしまった教え子の背中が、あの時の姿に戻つて見えた。

|||||

— 狐崎みすず視点 —

あれから毎週、彼女はやつて来る様になつた。それは、3年生になりクラスが変わつても続いた。そして週交代でお互いのやりたいことをすることになつていた。彼女にとっては退屈な図書館でも、買い物でも文句ひとつ言わずに隣をついてきて来る。

そういつた時間を過ごしていく中で、彼女について分かつたことは、理解出来ない程身体が強いということと、バカだということだった。あらゆる毒も効かないし、訳が分からない運動能力を発揮するし、べらぼうに強い。

正直、頭が痛くなる様な事ばかりするが、それでも刺激的で何よりも誰かと過ごす時間が苦痛でなかった。それが楽しいということだと、彼女が私にとって大切なものになっていたので、強がりだ認められなかったから、あんなことになってしまったのだろう。

4年生になってから半年も過ぎた辺り、ふたりに街を歩いていた。今日は私が遊びを決める日、今までは肩口で切り揃えていた髪を、これからは伸ばそうと思い、髪を纏めるヘアゴムでも買おうとやっていた。ついでに彼女の服でも見繕ってあげましょう。

彼女自身はそういうものに一切興味がないらしく、今までは彼女の母親が見繕っていたらしい。何度か彼女の家にお邪魔した際に彼女の母親が嘆いていた。そんな母親が先月亡くなり、暫く意気消沈していた彼女が復活した最初の休日、私も柄になく少し優しくしていた。

「遠山さん、少しは身嗜みも気に掛けたらどうかしら？」

彼女の綺麗なブロンド髪は所々跳ねてしまっていた。母親がいた頃にはそんなことはなかったのに。

「母上の様な事を言うのだな。」

少し驚いた様な表情でそんなことを言う。

「ブラッシングくらいはした方がいいと思うわ。」

草葉の陰で泣いてるわよ。とは流石に言えなかった。

それから、店を眺めたりしたが、彼女は全く興味を示さない。本人曰く、機能と耐久性が一番大事らしい。：作業着でも着たら？そう言うのと多分本当に着てしまうので言わなかったが、この子にはなにを言っても無駄なんだと諦めた。

「気に入るのが無いわね。」

自分のヘアゴムを探していたが、あまり気に入るものが無い。

「髪伸ばすのか？」

「ええ、変かしら？」

「いや、いいと思う。」

ファッションや髪型に興味の無い彼女からお墨付きを貰う。：：当てにならないわね。伸ばすのやめようかしら。

そんなこんなで特に何を買うこともなく店を後にし、街を歩く。後

は帰るだけね。特になんの収穫もなく家路に着く。

「金一がクワガタを友人と取ってきたぞ。」

「しばらくあなたの家に行くのはやめるわ。」

クワガタつて、見た目が少し違うゴキと同じじゃない。あんなものがある所には行きたくないわ。そんな会話をしながら道を歩いていると、視線を感じる。この子と一緒にいるとよくあることだけど、その視線の先にいたのは同じ学年の女子生徒。あの子、今は遠山さんと同じクラスだったわね。

3年生の時に同じクラスだった少女、少し容姿が優れていることを武器に私に攻撃を仕掛けてきたので、散々に打ちのめしたんだっけ。まだ諦めてなかったのね。

私に向けた敵意の籠もった眼差し、まあ、どうでもいい。また何かしてきたら、今度は立ち直れないくらい叩きのめそうと気にも留めなかった。

そんなことがあったことさえ気にもせず、暫く学校生活を送っていた。

ある日の昼休み、特にすることもないので、図書館に行こうと廊下に出た。

そういえば、ここ遠山さんのクラスね。

彼女のクラスの前に差し掛かる。給食を食べたら直ぐに寝ていた彼女は珍しく起きていた。チラツと目が合う。私を見つけた彼女がこちらへ来ようとした時、あの時の少女が彼女に話しかける。

「ねえ、かなこちゃん。今度一緒に遊ばない？友達になろうよ。」

予想外の言葉だった。あの少女の性質上、自分よりも優れた容姿の子には攻撃的だった筈。なのに彼女にそんな提案をしてきた。私の唯一の友人で唯一の味方、それを削ぐことを優先したのだ。読みが甘かった。自分の信念を曲げてでも私を貶めたいという覚悟を見た。

「なんでだ？」

少女の誘いに、彼女は首を傾げる。その間、私を視界から逃さなかった。

「今までずっとかなこちゃんと話しかかったけど、いつつも寝てるん

だもん。今日は起きてたでしょ。だからこれを機に思っ  
ねっ、いいでしょ?」

あくまで今までずっとそう思っていた、今回は偶然機会があつたか  
らと言いつて見せた。

「別に構わないが…」

彼女の回答に胸が張り裂けそうになる。私に気づいていたのか、少  
女が勝ち誇った笑みでこちらを見る。それを見えなかった振りをし  
て、止まっていた足を進める。あの笑みの意味、それが分かる。お前  
なんか嫌われ者、唯一の友人でも簡単に離れてしまう。

今までにない程動揺している。それこそ全く頭が回らない。なに  
も最善の策が思い浮かばない。どうしたら彼女の気を引けるのか、そ  
んなことは彼女を見つけた時に考えていた筈なのに…それさえ思い  
出せないし、思い出しても最善だと思えない。

「狐崎?」

後ろから呼び止められる。ああ、彼女の声だ。振り向くのが怖い。  
その後に発せられる言葉が怖い。

「狐崎っ!!」

全く振り向きもせず、足も止めない私の肩を掴まれる。

「何かしら、遠山さん?」

下らないプライドで平然を装って振り向きそう言う。

「なんで無視した?」

「あら、新しい友達と楽しくお話みたいだったから。それに、私は図書  
館に行きたいの。ほっておいてくれる?」

ああ、なんでこんな言葉しか出ないのだろう。

「じゃあ一緒に行く。」

「来ないで、もう友達は私だけじゃないでしょ。私に構わないで。…  
別に私は友達なんていらないんだから。」

言ってしまった。彼女が目を見開くのが分かる。彼女が離れてい  
くくらいなら私から突き放す。少しでも痛みを減らす為…

「…好きにしろ。」

彼女が教室に戻っていく。これで良かったのよ。そもそも私とあ



の子は対極の存在。むしろ今までがおかしかったのよ。

ふらふらと図書館にたどり着く。…もう読んだ本ばかりね。本棚に並ぶ背表紙を指で撫でている。あれ、なんだか上手く息が出来ない。

ヒュウヒュウと喉が音を立てる。あれ、これって過呼吸かしら？

膝から崩れ落ちる。指が掛かっていた本が本棚から落ち、音を立てる。

「ちよつと、大丈夫っ!？」

司書の先生がその音で私の異変に気付く。それからの事は覚えていない。気がついたら保健室で寝ていた。

「みすずっ!!」

目覚めた私の耳に母の声が響く。

「私、過呼吸になって…」

「よかった、よかったわ…」

母が私の手を痛い程握りしめて泣いている。

「今日は帰った方がいいみたいですね。なにかあつたらすぐに病院に行って下さいね。」

私の様子を確認した保健医が母にそう言う。そして私の前に来て、

「みすずさん、過呼吸は…」

「知ってます。過度のストレスとか不安、特に鬱病の人に出やすい症状ですよね。」

「噂通り賢いのね。分かっているなら話は早いわ。なにか心配事があるなら、お母さんでも私でもいいから相談して。」

「善処します。」

Noと返した。

あれからもう一度夜、ベットに入った後に症状が出た。余計なことを考えただろうか。私を心配して部屋に来た母に発見され症状は収まった。

「みすず、お母さんにも言えないの…」

悲しそうな母の表情に微かな罪悪感を感じる。それに答えずベツトに潜り込んだ。

「みずず、まだ学校行きたくないの？」

あれから2日学校に行つてない。彼女が私以外の人と楽しそうにしている姿を見るのが嫌だった。全くもって幼稚なメンタルだと自分でも分かる。しかし、今までに積み上がった下らないプライドと虚栄心で、彼女に謝りたくなかった。それでも彼女の一番の友達でありたいという馬鹿みたいにな考えで、学校行くのが怖かった。今日は金曜日、明日は半ドン。日曜日は普段であれば彼女が遊びに来る日。だけどもあんなことを言った後だもの…考えたくない。

日曜日、いつもの時間、彼女は来なかった。

## 黄色のシュシュ

—狐崎みすず視点—

彼女が来ない日曜日、それで母もなんとなく察したようだ。

「みすず、かなこちゃんと喧嘩したの?」

「別に、どうでもいいでしょ?お母さんには関係ないわ。」

?だ、どうでもよくなんかない。彼女は今この時、あの少女たちと遊んでいるのだろうか?考えるだけで胸が痛く、張り裂けそうになる。

「みすず…」

「出て行って、お願い。」

今までにない程悲しそうな母の顔、ひとりつきりになった部屋で涙が溢れる。

「ごめんなさい…」

言えない言葉、だって、彼女は新しい友達を手に入れてしまった。今までは私というひとりしかいなかった友達。それが増えた。きつと彼女も私と他の子を比べて嫌気が差す。こんな性格の悪い私と友達のままできてくれる訳がない。そうなるのが嫌だったから先手を打った。だけど、後悔しかない。私は知っていた筈。彼女は私と違って、そんな薄情な人間じゃない。だって私と対極の人間だから。それなのに自分でその希望の糸を切ってしまった。

涙が止まり、ベットに蹲ったまま、どれだけの時間が過ぎたのだろう。

「目、赤くなってるわよね…」

こんな顔、誰にも見られたくない。この期に及んで下らない虚栄心が働く。柄にもない自己嫌悪、また涙がせり上がってくる。

「もう、嫌っ…」

それを止めようと躍起になる。

そんな時、コンコン、という音が耳に入る。

「外?」

その音の方向に顔を向ける。息が止まった。窓ガラス、その向こうには本来見える筈の風景は無い。僅かな棧に足を掛け、ガラスをノックする女の子。

「何しに来たのよっ!!」

窓を開けて強い口調で言う。今は見たくなかった。だって心の準備も出来てないのだから。

「すまない、遅くなった。」

丁寧に靴を脱いで窓から入って来る。いつもなら来ている時間をとつくに過ぎている。

「なんでこんなところから来るのよ。」

「遅くなったから、少しでも早くと思って。」

なんで、なんで来るの…

「なんで来たのよ…」

ダメだ、泣いたらダメだ…

「だって今日は遊ぶ日だろう?」

雪を溶かす春の日差し、涙が頬を伝う。

「なんで、なんでよっ?! 私あんなこと言ったのに…」

ボロボロと涙が零れ落ちる。

「そりゃあ、喧嘩くらいするだろう。それに私にも落ち度があったのだろう? すまなかった。」

ペコリと頭を下げる。違う、あなたは全く悪くない。悪いのは私。下らない虚栄心を捨てきれず、あなたを切り捨てようとした私。

「ごめん、なさいっ…」

彼女に縋り付き、わんわんと泣く。もう下らない虚栄心も無い。あるのは嬉しさと彼女を手放したくないという思いだけ。

「泣くな。私はもう気にしてない。…まあ、あの時はムツとしたが。」泣くなど言われても涙が止まらない。そんな私を彼女は優しく抱きしめた。

「落ち着いたか?」

「ええ、私が泣いたこと、誰にも言わないでよね。」

気恥ずかしさと蘇った虚栄心でそう言う。

「ああ、ふたりだけの秘密だ。」

それに笑ってそういう彼女。

「ところであの子と遊ぶんじゃないの？」

気になつていたことを尋ねる。場合によっては全力で叩き潰す。それこそ二度と立ち上がれない様に。

「それなら、昨日遊んだぞ。いや、遊びと言つていいのだろうか？」

「なによそれ？」

「…人の悪口ばかりでつまらない。私の友達にまで口出しするので途中で帰った。」

少し言いにくそうにしていたのは、私の悪口大会が開催されていたからだろう。だけど、

「友達って、あなた私しか友達いないじゃない。」

クスリと笑つてしまうと、しまったという顔になる。全くバカね：

「違う、その、違つてだな…」

なんとか言い訳を考えているのだろうそんな姿が嬉しい、

「大丈夫よ。知ってるから。皆私のこと嫌ってるのよ。」

あなた以外ね。

「だから友達をやめるなら今のうちよ。」

前と違つて今は笑つて言える。だつて分かつてるから。

「やめる訳がないだろう。次言つたら殴るからな。」

ほらね。

「あら、あなたに殴られたら死んじゃうわね。それは勘弁願いたいから、そうね、ずっと友達でいてくれるかしら？」

初めて素直な言葉が出た。

「当然のことを聞くな。」

顔色ひとつ変えずにそう言い切れるのは大したものね。彼女が男だつたら惚れてたかも。

「それじゃあ、なんで遅れたのよ？」

それじゃあなんで今日はいつも通りに来なかったのか？その疑問に行き着く。

「おお、そうだった。狐崎が泣くから忘れていた。」

「五月蠅いわよ。」

思い出してまた恥ずかしくなる。ゴソゴソとズボンのポケットに手をつ込んだ彼女。

「これをやろうと思つて探していたら遅くなったのだ。」

そういつて握つたものを私の手に落とす。

「これは…?」

新品同様の黄色いシユシユ。ポケットに突つ込まれていたせいで少し生地が縊れてるけど、簡単に戻せそうだ。

「昔母上がくれたのだ。私は使わないから、代わりに使つてくれ。この前髪を伸ばすと言つてただらう?」

「覚えてたのね…」

やめようと思つていたけど、伸ばさなければならなくなったわね。

「狐崎には似合うと思うぞ。」

ニツコリと笑つてそう言う。

「スケコマシ…」

ぼそりと呟く。なんなのこの子…頬が熱くなる。

「なにか言つたか?」

「バカな子つて言つたのよ。」

私なんかの為にお母さんの形見を渡すなんて…

「バカなことつ!!母上と同じことを言うなつ!!」

ああ、そういえば、この子のお母さんが言つてたわね。バカかなこ、略して『バカかなこ』。

「違うわ。バカ、な子、よ。」

「もつと悪いではないか!!」

その反応にクスクスと笑う。でもいい機会なのかもしれないわね。

「ねえ、『かなこ』。」

名前で呼んでみる。

「…なんだ狐崎?」

「あら、酷いわかなこ。私だけ名前で呼んでたら。私しか友達と思つてないみたいじゃない。それとも私の名前を忘れたのかしら?」

実際にありそうね。

「覚えてる。みすずだ。」

「あなたにしては上出来だわ。かなこ。」

「どういう意味だ。みすず。」

ふふつと笑みが漏れる。有象無象に先を越されたのは気に入らないけれど、まあ良しとしましょう。

「バかなこの頭にしては上出来ってことよ。」

「みすずっ!!」

ベットに倒れ込み、じゃれ合う。

「かなこ、私は陰湿だし、性悪だし、根性は腐りきってるわ。」  
でも、

「それでもあなただけは裏切らない。約束するわ。」

だって、あなたを失いたくないもの。

「なら、私は、お前が裏切ろうと友達でいる。」

頭は悪いのに、そんな言葉は簡単に紡げるのね。

どんなに離れても、いつまでも友達、そういう約束。それだけで私の不安は消し去った。

|||||

—ミラ・ミハイロビッチ視点—

場所を変え、居酒屋でみすずという女と向かい合って座る。姐さんはそいつの隣に座った。

「おめえと姐さんが友達だったのは分かった。」

変装を解いて茶髪美人から黒髪の別人となったみすずという女にそう言う。姐さんの反応からして、今が本来の顔、姿ということだろう。その身長や骨格さえ変える変装技術の高さを見るに、武偵としての評価は高そうだな。

「そう、まだなにか聞きたいのかしら?」

心底面倒くさそうに、冷え切った目で俺を見る。こいつも俺のライバルなのか、それとも本当に友達までの関係なのか…そんな考えを察したのか、

「はあ…あなたと敵対する気も理由もないわ。私はノーマルよ。これでいいかしら『要塞』さん。」

「信じていいのか？もし？なら…」

分かってるよな。全面戦争だ。

「私、武装弁護士だから、一応武偵でもあるのだけれど。偵の方は自信があるけれど、武の方はからつきしなのよ。正直武偵中のEランク学生にも負ける自信があるわ。」

「だから？」

お前の身の上なんて知ったことじゃねえ。

「世界最強クラスの傭兵と戦うなんてごめんだわ。それくらいなら、あなたに協力するわよ。」

目を見る。嘘はついていないみたいだ。…嘘はついてないみたいだが…得体の知れない不気味さがある。まるでその申し入れが悪魔との取引の様に感じる。

「手助けなんかいらねえよ。」

「そう、残念だわ。協力者としてあなたは欲しかったけど仕方ないわね。」

そう言った後、仕事以外で掛かることの無い俺のスマホが振動する。

「一応私の番号よ。気が変わったら連絡して。」

「お前、マジかよ…」

この短時間、それも片手間で俺の番号を引き当てやがった。偵の方は自信があるってのは間違いじゃねえな。

「そうだわ、かなこ。あなたの携帯を貸しなさい。」

会話の輪に入らず。徳利を数十本空けていた姐さんにそう言う。

「構わんぞ。」

そう言つて古い携帯と新型のスマホを卓に並べる。それをみすずが手に取り、両の手で素早く2台を弄る。

「やっぱり、番号が変わってるわね。それに調べられない様にしてる。無理矢理調べようとしたら武検に見つかる様にされてるわ。」

下手に調べなくて正解だった。そう呟く。



「それにこのスマホは何かかしら？全ての履歴が武検に行く様になつてるじゃない…」

古い携帯を置き、スマホを弄りながら頭を抱えている。

「武検って日本じゃあ最強クラスの武偵だろ？姐さんがその所属なら納得がいくけどな。」

姐さんについてあまり詳しく無い俺は得た情報からそう考える。

「残念ながら、かなこは武検じゃないわ。そもそも組織に属せる様な子じゃないし、なる頭もないもの。」

ああ、姐さんアホの子だったな。あんまり頭には自信のない俺から見てもスゲエアホだと分かる姐さんだ。検事となりやあ司法試験通らなきゃなんねえから無理か。俺だって無理だし。

「なにか馬鹿にされてる気がするのだが…」

姐さんが少し不満そうに呟く。

「あら、よく気付いたわね。バかなこにしては上出来よ。」

「バかなこ言うな。」

バかなこことバかな子を掛けてんのか。

「まあ、それは置いておきましょう。それより、この『冷泉』って武検の冷泉君のことかしら？」

そう言つてスマホの画面を見せる。

「みすずも知り合いなのか？」

姐さんが驚いた様に言う。

「同じ東京武偵高で、更に大学で同じ学部だったのよ。おまけに法廷では何度かやり合ったわ。同じ中学出身なのは調べていたけど、あなたの担当みたいね。」

はあ、と溜め息をつく。まあ、検事と弁護士、いろいろとあるのだろう。

「まあいいわ。気に入らないし、呼びましょう。」

そう言いながら姐さんのスマホで電話を掛ける。ワンコールで出た様だ。

「残念ながら、かなこじゃないわよ、次席さん。寝ぼけているのかしら？あの事をかなこに言うわよ。随分なご挨拶ね。ええ、かなこ居る

のよ。場所は、どうせ位置情報で分かるでしょう。お話をしましょう。来るの？来ないの？別に来なくてもいいけど、その時は…そうよあなたに選択肢はないの。そうね10分よ。それ以上は待たないわ。はあ？知らないわよ。それじゃあね。」

相手の言葉は分からないが、サディスティックな笑みを浮かべてそんなことを言っている。

「さて、今日は冷泉君の奢りよ。好きなだけ頼みましょう。」

黒い笑顔でメニュー表を眺める。その姿は邪悪の権化と言っても過言ではなかった。

「ところで『要塞』さん、貴女、かなこにアレなのよね？」

「ミラでいい。そうだったら文句でもあんのか？」

「別ないわ。でも覚悟しておきなさい。この子、男殺しで、女殺しでもあるから。しかも天然モノよ。」

ライバルは多いわよ。暗にそう伝えてくる。確かに、姐さんの容姿なら男は腐る程寄ってくるだろう。

「中学の時は大変だったのよ。毎週金曜は校門でかなこが待つてるんだから。」

その言葉に違和感を覚える。

「幼馴染なんだろう？なんで姐さんが校門で待つんだ？」

「私は私立に行ったから。特待でね。」

勝ち誇った様な笑みを浮かべてそう言う。

「全く、経歴は大事、などと言っても別の学校に行くのだからな。」

姐さんがムスツとしてそう言う。よっほど嫌だったのだろう。

「あら、かなこだって武偵中に行くつもりだったのだからおあいこよ。まあ、あなたはお父さんの反対で行けなかったけど。」

そう言って姐さんを見る。

「だったら一緒の学校でもよかっただろうに…」

「それは悪かったと思ってるわ。だから毎週文句言わずに付き合っただけだよ。」

姐さんは少し不満そうに酒を煽り、その隣で、みすずが口を湿らせる程度にジョッキの中身を口に含む。そこで俺は気になっていたこ

とを聞く。

「みすず、なんでお前オレンジジュース飲んでんだ？」

居酒屋だぞここ。すると、

「ミラは友達じゃないのだから、名前で呼ばないでくれるかしら。そう呼んでいいのはかなこと家族だけよ。どうしても名前で呼びたいなら、私に協力することを誓約書にサインしなさい。」

「孤崎、なんで酒飲まねえんだ？」

あ、こいつヤバい奴だと確信し、すぐさま言い直す。

「残念ね。：私、アルコール駄目なのよ。」

「タツパもガキみてえだが中身もガキかよ。」

こころぞとばかりに鬱憤をぶつける。

「あなた基準で語らないでくれるかしら。日本人女性の平均身長は154.5cmで私は平均より3.7cm高いのよ。かなことあなたが高過ぎるのよ。」

俺が168cm、それよりも少し高い姐さんは170cmはあるだろう。

「それに、あなたはこつち側じゃないかしら？」

「どういう意味だ？」

そう尋ねる俺に、孤崎は隣に座る姐さんの胸を驚掴み、

「はあ、憎たらしいわね。なんでかなこみみたいな女捨てた人間に与えられるのかしら…」

ああ、悲しきかな格差社会。神は生まれながらにして格差を与えるのだ。だがな、俺はお前も認めない。だって俺よりも大きいから。

「おい、私は女を捨ててなどいないぞ。」

胸を掴まれた姐さんが孤崎の顎に手を添え、グイツと顔を向けさせる。

「：化粧をするようになったのだな。」

孤崎の顔を見て姐さんが感慨深そうに言う。

「社会人ですもの。むしろ24にもなってスッピンでいられるあなたがおかしいのよ。」

「やり方が分からぬからな。」

俺でさえ薄っすらと化粧してるのに、姐さんはやり方さえ知らないらしい。

「神様って不公平ね。」

呆れた様に狐崎が呟く。

「私も化粧をすればこんな風に綺麗になるのだろうか。」

狐崎の頬に優しく指を這わせながらそう囁く。俺は何を見せられているのだろうか？狐崎は顔を背け、

「ミラ、交代。」

席を立ち、俺を姐さんの隣に追いやろうとする。俯いてよく見えな  
いが、アルコールも取っていないのに赤くなっている。

「お、おい、待ってって。」

俺の腕を掴み、無理やり立たせようとする。そして、俺の耳に口を  
寄せ、

「分かったかしら？あんなことを誰に対しても、息を吐く様にするの  
よ…あのスケコマシ…」

ああ、中学の時苦労したつてのが少し分かる。初心な奴らならコ  
ロツと落ちちまうだろうな。正直俺も心の準備が出来ていない。

「安心しなさい。これは貸しにはしないわ。」

そう言つて俺を席に押し込む。

「なんだ？席替えか？」

隣に押し込まれた俺にそう言う。

「ええ、そうよ。かなこ、ミラを見てどう思うかしら？」

悪魔<sup>狐崎</sup>が笑みを浮かべながら、そう問いかける。おい、マジでやめろ  
よ。

「そうだな…」

姐さんが俺の頬に手を添え、向き合う。

それからのことは覚えていない。ただ、最高に幸せで、同じくらい  
恥ずかしかつたのは分かる。

|||||

—冷泉為和視点—

「おのれ、高千穂の奴め…」

佐々木検事がそう言いながら執務室から出てくる。高千穂弁護士とは犬猿の仲なのは武装検事の全員が既知である。

「お疲れ様です。また次の相手は高千穂弁護士なんですか？」

自分の担当する裁判の資料を纏めながらそう尋ねる。正直相手が高千穂弁護士だと決まった時はいつもこうなので慣れてしまっていた。

「ああ、私が担当だと分かった途端にこれだ。新人相手に楽だと思っていたと言うのに。」

そう言いながら、少し楽しそうだ。喧嘩するほど仲がいいとはこういうことなのだろうか？

「新人って誰の予定だったんですか？」

高千穂弁護士法人は最王手の弁護士事務所で、毎年優秀な武装弁護士が入ってくる。特に僕と同級生の彼女なんかはその最たるものだ。「なに大したことない奴だ。同じ新人でも狐崎が出てきたならば、私も気を引き締め、全力で挑まねばならんがな。」

そう、狐崎みすず弁護士。武偵高、東大と共に同級生で、東大では首席入学、首席卒業した秀才。弁護士の様な、弁舌をする為に生まれてきたような女性。あらゆる情報に精通し、その収集を怠らない。更に、裏の裏まで根回しし、完全な有利な状況を事前に作り上げる手腕もある。実際、新人の身でありながら、圧倒的な勝率を誇り、敗訴の場合でも、実質的な勝ちをもぎ取る。それは、『彼女から戦術的に勝利にするのは可能だが、戦略的勝利を勝ち取ることは不可能だ』とベテランの検事や弁護士に噂される程だ。

確かに優秀な弁護士であり、相手とするのはかなり嫌な相手だが、僕は知っている。何よりも性格が悪い。この間雑誌で特集を組まれていたのを見たけれど、『小悪魔系』なんて書かれていた。なにを言ってるんだ？あの人は『サタン』とか『大魔王』とかの方が適切な表現だ。思わず出版社にクレームを入れてしまいそうになる程度には性格が悪いし、狡猾だ。

「そういえば、冷泉は狐崎弁護士と同級生だったな。」

「ええ、高校と大学が一緒にでしたが。」

「なら、今後戦う機会も多いだろう。負けるなよ。」

「そういつて僕の肩を叩き、出ていく。それを見届け、

「苦手なんだよなあ、あの人…」

大学時代に、同じ武偵高出身ということで接近したのが間違いだった。彼女の策略の片鱗を味わい、無様な姿を晒した。そして、それを楽しそうに眺める笑顔は決して忘れないだろう。

「これの証拠は…」

引き続き、裁判所に提出する書類を纏めている。もう少しで終わる。定時を過ぎ、これが終わったら帰ろうと考えていた。

デスクに置いていたスマホが遠山さん用の着信音を立て、振動する。

「はい、冷泉です。遠山さんにかありましたか？」

光よりも速く。そんな勢いで応答する。遠山さんを待たせるなど許されないのだ。

「残念ながら、かなこじゃないわよ、次席さん。」

ああ、僕は疲れているのだろうか？愛しいあの人からの電話なのに、この世で最も恐ろしい女性の声が聞こえる。

「あれ、おかしいな。遠山さんの番号ですよ。遠山さんどうしたんですか？そんな性悪のものまねなんかしないで下さいよ。」

分かっている。この声の主は遠山さんではない。ただ、この残酷な現実から逃げたかった。

「寝ぼけているのかしら？あの事をかなこに言うわよ。」

「分かっていますよ!!狐崎さん。この性悪、あんたに人の心はないんですか!?!」

あの事、彼女が脅してくるとしたらアレだろうか、いやアレかも…「随分なご挨拶ね。」

「あなたに対していい思い出なんてありませんから。なんで遠山さんのスマホから掛けてるんですか？はっ！もしかして一緒に…」

「ええ、かなここと居るのよ。場所は、どうせ位置情報で分かるでしょ

う。お話をしましょう。」

お話：絶対碌なことじゃない。行かない方が得策なのは分かる。しかし、そこに行けば遠山さんに会える…

「来るの？来ないの？別に来なくてもいいけど、その時は…」

ああ、きつと遠山さんに嫌われる様な事を洗いざらいぶちまけられるのだろう。1割の真実と9割の？で作られた話を…

「行きます…」

「そうよあなたに選択肢はないの。そうね10分よ。それ以上は待たないわ。」

何を言ってるんだろう、位置情報からしても到底10分で辿り着ける所ではない。それに、

「僕、仕事でなんですけど…」

「はあ？知らないわよ。それじゃあね。」

ツーツツツと通話が切れた音が耳に響く。

「あの性悪女あつー！ー！！」

上着と財布、スマホを掴み、駆け出す。仕事？そんなもの、今迫る危機の前では些細なもの。あの性悪女なら、本気で10分でペラペラと僕の悪評を垂れ流すだろう。

遠山さん、待ってて下さい。いま、会いにゆきます。

|||||

— 狐崎みすず視点 —

「姐さん、そういえばiPS細胞というので同性の間でも子供ができるらしいぜ。」

復活したミラはそんな売り込みをしている。そんな遠回しに言っても伝わらないわよ。潔く告白して、振られればいいのに…

「そうか、ならばこれからは男女関係なく強者を探すとしよう。」

「かなこ、あなた8年間なにしてたのよ。」

そう言つてオレンジジュースをチビチビと啜る。甘いわね。次はウーロン茶にしようかしら。

「結婚相手を探していた。」

ああ、なんでこの子は突拍子もないことで8年も放浪するのだろう…いや、そういう子だったわね。

「呆れた、高校行かなかったのね。せっかく勉強教えてあげたのに。」

正直、すぐ寝てしまうので教えても意味は無かったけど。

「落ちたからな。行けなかったのだ。それでふと、母上の言葉を思い出したのだ。」

どうせ、間違った解釈をしたのでしようね…

「良い人を見つけて結婚しろとな。そこで良い人とはなにかを考えた。」

「あら、無い頭でよく考えられたわね。痛っ!!」

デコピンすることないじゃない。骨にヒビ入ってないわよね。尋常じゃなく痛いんだけど。

「私よりも強い者、その結果に辿り着いた。」

そう、結婚する気が無いのね。よく分かったわ。

「かなこ、そんな下らない理由で8年も私をほったらかしてたのね。」

「下らないとはなんだ!!私にとっては大切なことなのだぞ!!」

「だからといって、連絡ひとつ寄越さなかった言い訳にはならないわ。怒ってるのよ、私。」

ジトツとかなこの目を見る。

「悪かった。埋め合わせはする。」

「ええ、あの時私がした様に、どんな嫌なことでも付き合ってもらおうわよ。」

思い出すだけでも吐き気がするあの埋め合わせ、忘れるもんですか。

「狐崎は何やったんだ?」

約束の日の前日、大喧嘩し、遊ぶ事をボイコットした私に課せられた埋め合わせ、それは…

「虫取りよ…あんな地獄、2度とごめんだわ。」

「いや、虫取りくらい…」

「ミラ、あなたなに言ってるのかしら、虫よ。この世で一番見たくない



生物、なんであんなものがあるのかしら。生態系に必要なのは分かるけど、私の目に入らない所で生きれないのかしら…」

幸いにして、いなかったが、夏休みの自由研究で昆虫採集を提出する生徒が同じクラスにいたなら、無条件に、全力で排除していただろう。カブトムシやクワガタを有難がる連中が理解出来ない。あんなもの角の生えたゴキじゃない。

「あれは、キンジに頼まれたから仕方なくだな…」

「ええ、知ってるわ。私、今でもキンジのこと許してないもの。」

「大人げねえ…というより器が小せえ…」

「なんとでも言いなさい。それくらい許せないのよ。」

ミラがなにか言ってるが、知ったことか。まあ、採集した昆虫たちが中々にいい値で売れたので財布は潤ったが、それとこれとは話は別。私に虫を見せるだけでなく、触らせようとしたキンジを、私は一生許さない。

「だから、かなこも同じくらいのことをしてもらおうよ。8年分。」

繋いだ手をすり抜けて駆け出してしまったかなこ。あなたを探すのに掛かった時間は取り戻さなければならぬのよ。

「それに、高校だって、あなたが中学が別になったことを恨みがましく言うからあなたの志望校だった武偵高に行ったというのに…」

まあ、入学してみたなら武偵高という水は合っていた。だって、授業料は安い上に、好き放題に情報を収集して、脅迫したりすることで成績が上がるし、依頼をこなせばお金が貰える。割と天職だと思ったのは内緒にしておきましょう。

「落ちたんだ。仕方ないだろう。」

「開き直らないでよ。あそこに落ちるって大概よ。」

まあ、いろいろと裏事情がありそうだけど。でも学力的にはどっちみち落ちたでしょうね。

「それでもなんやかんやで武偵になれたみたいだし、良かったじゃない。」

「あまり実感はないがな…そうだみすずとコンビを組むのはどうだ？」

それを考えなかつた訳じゃないけど。

「私、武装弁護士よ。おまけに最王手の事務所に入つて、ゆくゆくはN O. 2になるのよ。そんな大切な社会的地位を捨ててまで、なんで独立しなきゃいけないのよ。」

独立しても、上手くやつていく自信はあるけど、それ以上に高千穂弁護士法人の肩書は大きい。：上手いこと乗っ取れないかしら。

「お前はいつもそんなものを有難がるのだな。」

地位とか権力、名誉、そんなものに一切の興味を示さないかなことは、以前そういつた議論で大喧嘩したこともある。未だに理解出来ないのだからうけど。

「お生憎様、私は俗物的なのよ。知ってるでしょ。」

私は金と権力が大好きだから。そこは譲れない。

「お前、よく姐さんと友達でいれるな。利益度外視で暴れる姐さんと正反対だぞ。」

「そうね、だけど対極だからこそ一緒にいられるのよ。」

そう、お互いを埋め合っていた。それは自覚している。だからこそ喧嘩も沢山して、離れても、引かれ合う様になっていたの。

「そうだな。しかし、もう少し人に優しくしたらどうだ？」

「あなたが優しい過ぎるのよ。」

ふふ、と笑い合う。

「それ、まだ使っていたのだな。」

ボロボロになった黄色いシュシュ。

「当然でしょ。それよりも、本日の会計係が来たわよ。追加注文しましょう。」

店内に入ってきた冷泉君を見つけ、そう言った。

## 天使と悪魔

—冷泉為和視点—

あの悪魔からの誘い（脅迫）を受け駆け付けた居酒屋。クソツ、15分の遅刻だ。最速ルートと全ての移動を全力のダッシュだということにこれだけの時間を要した。どこまで鬼畜なのだあの悪魔は。

「あら、私としたことが時間を見落としていたわ。」

そう言っ腕時計を見つめる悪魔。その奥では天使が謎の外国人女性と隣に合っ酒を飲んでいる。

「あら、15分も遅刻したのね。武装検事さんは時間厳守という言葉をご存知ないのかしら。」

邪悪な笑みを見せながらそう言う。

「お言葉ですが、武装弁護士様は移動時間の計算も出来ないのですか？」

バチバチと視線の火花が散る。

「あら、遅刻したというのに言い訳なんて、あの頃と変わらないのね。」  
「なんのお話でしょうか…？」

ダラダラと冷や汗が流れる。この悪魔と言い争いをする事自体が間違いなのだ。あの時の大失態が脳でフラッシュバックし、ガタガタと震える。

「なんの話って、ご存知でしょうか？あら、不思議ね？今回のお会計をどなたか払って頂いたら一時的に忘れそうだわ。」

「払います。払えばいいんでしょう!!」

僕を財布にする為だけに呼んだのだろうかこの悪魔は。

「あら、口の利き方がなっていないわね。口が滑りそうだわ。」  
「払わせて下さい!!」

土下座せんばかりに頭を下げる。プライド？そんなものはかなくなり捨てた。あれを遠山さんに知られるよりは、ここで無様な姿を晒す方がましだ。

「まあ、お犬様にしては上出来としておきましょう。」

次の法廷では覚えてろ…全力で潰してやる…

「みすず、そんなに冷泉をイジメるな。」

天使が僕に救いをもたらす。

「…あなたは優しすぎるのよ。敵は叩ける時に叩いておかないと。直ぐに調子に乗って面倒くさいのよ。」

ため息をつきながらも攻撃の手を止める悪魔。流石僕の天使。ものが違う。

「敵とは言うが、冷泉はいい奴だぞ。それに根性もある。」

「かなこ、この男は検事で私は弁護士。職業上、不？戴天の敵であるのよ。それに…」

「と、遠山さんの言う通り、一時休戦といきましょう。さあ、今日は僕の奢りです。なんでも頼んで下さい。」

この悪魔、なにを言おうとしたんだ…

「てか、誰だお前？」

遠山さんの隣に陣取る謎の外国人女性がそう言う。いや、あなたこそ誰ですか？

「ミラ、この男は冷泉君。私と同じ武偵高と東大の同級生で、かなこと同じ中学の同級生よ。碌な男ではないわ。」

「狐崎さん、ひと言余計ではないですかね？」

笑顔でそう言うてみるが、額に青筋が立つ。

「まあ、席に着いたらどうだ？」

天使こと遠山さんの有り難い申し出に従おうとするが、空いてるの、悪魔の隣だけかあ…

「ちよつと、かなこ!!私は嫌よ。こんな男と隣り合ってお酒飲むなんて。」

僕だって嫌だ。

「では私と席が変わるか？」

流石遠山さん。素晴らしい提案だ。

「嫌だ。俺は姐さんの隣がいい。」

ミラと呼ばれた女性が遠山さんにしがみつき離れようとしな。僕はどこに座ればいいんですかね？

「はあ、冷泉君の嫌われっぷりに同情するわ。非常に不快だけれど。仕方ないから隣に座っていいわよ。私は大人だから、嫌で嫌で仕方ないけど譲歩してあげる。」

「ええ、大人な狐崎さん。ありがとうございます…。」

思わず銃に手が伸びそうになるのを抑え、笑顔を引き攣らせて、そう言うて座る。

「冷泉は飲めるのだな。」

「ええ、あまり強くはないですが。」

隣に悪魔がいなければ、夢の様な遠山さんの酒の席。そんな他愛もない会話が癒しのエキスとなり、ストレスフルなお隣さんとの睨み合いに癒しを与えてくれる。

「よっしやーっ、追加だあ。」

酔いの回ったミラという女性がハイボールを一気飲みして声を上げる。この人誰なんだろう？

「かなこもミラも飲み過ぎよ。…もっと飲んでこの男の財布を涼しくしなさい。」

ホント、この悪魔がいなければなあ…

「遠山さん、隣の女性は誰ですか？僕が知らない人なんですけど…。」

「こいつはミラだ。」

ダメだ、サッパリ分からない。遠山さんも大分酔いが回っているのだろうか？

「かなこ、説明が足りてないわ。あなたっていつもそう。」

ウーロン茶らしき液体の入ったジョッキを持ちながら狐崎さんがそう言う。なんでこの悪魔が僕の天使と友達なんだろう…

「冷泉君、彼女は『要塞』さんよ。」

「まさか、あの『要塞』…。」

目の前でベロベロに酔っ払った彼女が世界最強クラスの傭兵なのか?!…そうは見えない。

「んだあ〜眼鏡、何見てんだ？割るぞ。」

「あら、武装検事さんがセクハラかしら？」

酔っ払い女と悪魔が絡んで来る。なんだろう、遠山さんがいるのに

帰りたくなってきた…

「全く、飲み過ぎだぞ、ミラ。」

遠山さん、この悪魔には言及しないんですか？

「やだあー。まだ飲むうー。」

「ハイボールでいいかしら？」

そう言つてタッチパネルで注文する。悪魔は僕の財布に氷河期を迎えさせる為に、『要塞』を急性アルコール中毒で殺す気なのだろうか？

「しかし、お前たちがいたなら、武偵高には行きたかつたな。」

『要塞』が酔い潰れ、寝落ちした後、しみじみと遠山さんが呟く。

「かなこが武偵高に来ていたなら、学園島は消し飛んでいたわね。」

遠山さんとの学園生活を思い描いていた僕は、狐崎さんの言葉で現実に戻還する。そう、僕の天使は恐ろしく強い。それこそ拳の一撃で1つの都市を無人の荒野に出来る程に。

「流石に私も加減はしていたと思うぞ。多分。」

加減しないとそれくらい容易に出来てしまうのだから凄いです。遠山さん。

「まあ、あなたがなにかの間違いでナゴジョに行かなかつたことが幸いね。」

「そうですね…」

こればかりは悪魔に賛同する。名古屋武偵女子校、通称『ナゴジョ』。生徒の9割が強襲科の軍人気質な女子校で、校訓に『強きは美なり』や『邪魔する奴は皆敵とみなす』、『他者の下に敷かれる事まかりならず』というものがあるヤバイ学校。そんな所で遠山さんが学んだら…世界は終わっていたかもしれない。

「なんだ？ナゴジョとはそんなに凄い所なのか？」

「知らなくていいわ。いいえ、お願いだから忘れて頂戴。」

遠山さんとの相性が最高にして最悪のナゴジョは関わらない方がいいに決まってる。

「そ、そうだ、遠山さんは、武偵庁の特別顧問にもなっているので、武偵高の見学でもしてみますか？」

ナゴジヨの話題から逸らそうとそんな提案をしてみる。その程度の希望なら通るだろう。

「試験の時に見たからなあ…それよりは武偵の仕事をしてみたい。まだ実感がないのでな。」

僕の提案は、あまり関心を持って貰えなかった。しかし、彼女に相応しい仕事って…

「かなこが通常レベルの依頼を受けたらオーバーキルもいいところよ。」

それなんだよなあ…それこそ特撮映画みたいに、怪獣でも現れない限り、彼女に相応しい依頼はないだろう。それに、そもそもが彼女への窓口がない以上、武偵庁や政府、公的機関からの依頼以外、彼女の下に届くことがない。

「まあ、気長に待ちましよう。」

それからは話題も変わり、悪魔によって胃の障壁を破壊されては、天使によって回復されるという無限スパイラルをくぐり抜けていた。「さて、お開きとしましょう。」

狐崎さんのその言葉で時計を見ると、もう結構いい時間になっていた。

「そうですね。明日も仕事ですし…」

やり残した仕事を思い出し、頭が痛くなる。

「あら、大変ね。それじゃあ、お会計はお願いするわ。お財布君。」

「いや、あなたも仕事でしょう?」

他人事の様について伝票を渡してくる狐崎さんにそう言う。

「あら、知らなかった。私、今休職中よ。」

「ああ、遂に悪事が暴かれたんですね。」

そりゃあ、同じ弁護士からも恐ろしい程恨みを買ってる様な人だからな。

「失礼ね。用事があったって休職申請したのよ。まあ、粗方終わったけれど…」

そう言ってチラリと遠山さんを見る。彼女が用事だったということだろう。しかし、

「ちよつと待って下さい…え??ですよねこの金額!？」

渡された伝票の合計金額に目玉が飛び出そうになる。なんで普通の居酒屋でこんな金額になるんだ?!意地汚い悪魔だ。

「あら、甲斐性なしね。それ、6割方、かなこのお酒代よ。」

「遠山さん、遠慮せずにもっと飲んでよかつたのに。」

熱い掌返し。遠山さんへの奢りなら、なにも財布に痛くない。そう痛くないのだ…

「あのお、ここカード使えもすよね…」

小声で悪魔に耳打ちする。

「ええ、残念ながら使えるのよね。ホント、残念だわ。」

カードが使えることにこれ程感謝したことはない。この悪魔、現金払いだったら、恐ろしい条件で金を貸してきたに違いない。

会計を済ませ、店を出る。2ヶ月くらい、節約生活だなあ…

「ご馳走様、冷泉君。」

「冷泉、私も出すぞ。」

そう言つて財布を出そうとする遠山さん。ああ、どつかの悪魔とは大違いだ。

「今日は僕の奢りですから。気にしないで下さい。」

その優しさだけで、自腹を切つてもおつりが来ます。

「それじゃあ、またお願いするわね。かなこ行きましょう。冷泉君は、明日仕事みたいだし、引き留めてはダメよ。」

「む、そうだな。冷泉、またな。今日はありがとう。」

またな。そう言つて貰えるのが嬉しい。彼女の隣に悪魔がいなければ、最高だったのに…

「ところでかなこ、ミラの滞在場所知ってるの?」

「いや、知らんぞ。」

「仕方ないわね。あなたも一緒に家に泊まっていきなさい。」

「いいのか?」

「ええ、話したいことも沢山あるのよ。その前に少し寄り道するわよ。」

「ああ、構わんぞ。」



そんなふたりの会話を聞きながら、僕も家路に着いた。

翌日、ある武装組織が突如壊滅したという一報があった。その組織は狐崎さんを恨んで襲撃計画をしていたなんて噂もあったが、寄り道ってそれか？

虎の威を存分に扱う狐の顔が怪しく笑っている気がした。

|||||

—狐崎みすず視点—

この動き方は久しぶりね。久々の感覚にあの頃の感覚が蘇る。

きっかけは、かなこが迷子になって違法な取引をしていた暴力団の現場に偶然にも遭遇してしまったことから始まる。その現場に居合わせてしまった為に、かなこは致し方なく反撃に転じ、ものの見事に制圧、武装検事の父に連絡し、その一件は終わったにみえた。しかし、その件で恨みを買ったかなこは度々襲撃を受けた。幼心に思ったのは、如何に社会的に見れば小学生だったといえど、ひとりで武装した大人を数十人無力化し、制圧した時点で引き下がるのが正解だと思った。だが、連中にも面子があるのか、かなこへの襲撃は終わらなかった。

そこで、解決策を打ち出したのが私だった。だったら大本を叩きましよう。その一言でかなこは、その組事務所の門を叩いた。そこからは圧巻の一言、かなこは迫りくる銃弾も白刃も、ものともせず、圧倒的な力を見せつけた。この時僅か10歳である。

制圧を終えた後は私の仕事、お話をして、今後一切、かなこに私に危害を加えないことを誓約させ、私たちに害を成すものの排除を命じた。最も最初は反抗的だったので、かなこを差し向けつつ、その父である武装検事の存在を仄めかしながら交渉をしていた。

そのお陰もあり、私たちの学校生活は中学卒業までは安泰と安寧を極めながら、周辺の暴力団や暴走族、反グレといった連中を次々に制圧していき、かなこは、『巢鴨の虎』と恐れられ、行方を晦まし、8年

が過ぎた今でも伝説的な存在として語り継がれている。

それはさておき、

「あら、間違えてこんなところに来てしまったわ。」

「狐崎…おめえよくものこのこと顔を出せたなあ…」

殺気だったチンピラのような武装集団が私たちを取り囲む。私としたことが、うっかりと私に殺意を持つ武装集団の本拠地に来てしまったわ。ああ、なんということかしら。

「みすず、随分と殺気立ってるが、お前また何かしたな。」

「あら、失礼ね。今回は逆恨みよ。違法な取立と人身売買の実態を暴いただけよ。」

自分で言うのもなんだが、今回は珍しく相手に全ての比がある。以前、法外な金利による取立で、娘を誘拐された被害者の弁護に立った際に、必要以上に叩き過ぎて恨みを買ったただけだ。

「彼らの罪は、武器の密輸、違法な金貸し、人身売買、それに…」  
罪をあげつらう。

「成程、今回は本当にみすずは無実のようだな。」

「失礼ね。私は何時でも正直よ。」

自分にね。

「飛んで火にいる夏の虫とは、お前のことだ。」

「ここがお前の墓場になるんだよお。」

「隣の女とそいつが担いでる女も上玉だ、土産まで持ってくるとはな。」

連中が騒いでるが、

「かなこ、ミラを預かるわ。あいつらの頭はあいつよ。」

正直、かなこがいる状況で、こいつらはなんの脅威にも成り得ない。

「全く、仕方ないな。」

それから、雑魚を制圧し、首領をアイアンクローして私の前に引きずり出すまでに数秒と要しなかった。

「そういえば、こいつら、公安にマークされてたわね。婦女暴行未遂で通報しましたよか。」

こいつらは私の手駒には相応しくない。そう判断した私は、以前連

絡先を仕入れていた男にスマホから電話を発する。

「こんばんわ、元公安0課の獅堂さん。手柄を譲ってあげるわ。…私が誰か？そんなのどうでもいいでしょう。場所は…」

さて、用事は済んだわね。

「かなこ、お疲れ様。帰りましょう。」

「そうするか、ミラをこちらに。」

そう言っつてミラを背負い直すかなこ。

「しかし、みすずの家は久しぶりだな。」

「実家からは離れたわ。今はひとり暮らしよ。…お願いだから物を壊さないでよね。」

そう言いながら、昔の様にふたり並んで歩いて行く。8年合わなくても、なにも変わってない。それをこんなことで実感できる。

「そうだ、コンビニにでも寄って酒とヤクルトでも買っていこう。」

「お酒はまあ分かるけど、なんでヤクルトよ。」

何故この子は乳酸菌飲料を求めなのかしら？

「みすずはヤクルトが好きだっただろう？」

「覚えるなら、ちゃんと覚えておきなさい。私が好きなのは、東京ヤクルトスワローズよ。」

それも古田がいた頃までで、今は野球中継を見る暇なんてない。精々つば九郎のグッズを買う程度だ。なんでそういうことは(中途半端に)覚えてるのかしら？

「まあ、ミラが起きたら酒をせびるだろうし、買っておこう。」

「いいけど、絶対に私は飲まないわよ。」

飲んだら死んじゃうから。お酒を飲むと体が暖まる、そんなことを言えるのは、アルコール耐性がある人間だけで、私の様に耐性0どころか、マイナスにいつてるんじゃないかという人種は、体が震え、寒くなるし、それを超えると意識が飛ぶ、寝落ちとかじゃなく、三途の川を渡るレベルで意識が飛ぶ。だから2度と飲まない。

コンビニで適当なつまみを手に取りながら、お酒や炭水化物、タンパク質となるものを籠に入れていくかなこ。

「だから、ヤクルトは要らないって言ったでしょ。」

しかもそれミルミルだし。私は別に乳酸菌を求めている。

「なら、何を飲むのだ？」

ため息をつきながら、久しぶりにコーラというのかもしれない。最後にコーラを飲んだのは何時かしら？記憶している限りでは：4年前だったかしら？そんなことを考えながら、コーラを手取る。

「みすず、それはペ○シだぞ。コ○はこっちだ。間違ってるぞ。」

「はあ？ペ○シのなにがいけないのよ!?!ペ○シマンはセ○サターンのファイ○イングバイパーズにも登場する素晴らしい存在なのよ。バかなこにペ○シとセ○の何が分かるのよ!?!」

何故かこのバカは私の趣味を理解しようとしな。正直、ペ○シはどうでもいいけど、セ○への侮辱だけは許さない。

「まで、セ○に関してはなにも言っていないぞ!?!」

「前にも言ったわよね。セ○は至高、時代を先取るあの叡智、人類の宝だわ。」

「みすず、落ち着け、ここはコンビニだ。」

「仕方ないわね。これからセ○の素晴らしさを叩き込んであげるわ。とりあえず、指が折れるまでセ○サターンをしましょう。」

ええ、偉大なるセ○た三四郎も言っていたわ。セ○サターンしろ、指が折れるまでってね。バー○ングレンジャーでいいかしら？

「かなこ、こうしてはられないわ。さあ、すぐに行くわよ!!」

「みすず、お前、相変わらずだな…」

帰宅後、私は昔かなこにメガ○ライブのコントローラーを馬鹿力で破壊されたことを、セ○サターンのマルコンを破壊されたことでの思い出し、絶望し、泣いた。

|||||

—神崎・H・アリア視点—

「ナゴジヨですか?」

「せや、なんや女子武偵の強化研修やと武偵庁からのお達しや。お前だけやなく、チームでの参加やけどな。」

教務部からの呼び出し、バカキンジが退学処分となったせいで、代理リーダーとしてやって来た。その案件は名古屋武偵女子校への強化研修への出席命令。正直、イ・ウーや極東戦役を経験した私やバスカービルの面々にとつて、今更強化研修なんて…と思ってしまうが、「それって、バスカービルだけなんですか？」

「いや、去年の成績を鑑みて、お前らのチーム、都合よく遠山のアホが抜けて女子だけやし、去年お前の戦妹やった間宮のチームもやな。それに見どころのある女子武偵、それも強襲科メインに参加要請が来とる。引率でご丁寧なウチまで来いやと。」

その言葉と目で理解する。教員の蘭豹までも半強制参加ということとは、生徒である私たちに拒否権はないに等しい。

「了解です。」

あかりたちも参加する。そうなれば、先輩、そして戦姉としての立場もあるし、強制参加だけでなく、ある程度の見本となる行動(戦果)を求められている。

「まあ、面倒でしゃあないけど、名古屋旅行と思つて楽しもうや。手羽先を肴に酒でも飲んでな。」

蘭豹もなにか引つ掛かるのか、微妙な回答をした。

「ナゴジヨかあー。まあ、それはいいんだけど、なんか臭うよねえ。」  
伝達事項として、バスカービルのメンバー(キンジを除く)を集め、通達すると、理子がそう言う。私もなにか嫌な予感がしていた。

「去年、武極さんのクーデター未遂があつたばかりだしね…でも、武偵庁からの要請なんだよね？」

あかりたちが解決したナゴジヨでのクーデター未遂事件。無事に解決したとはいえ、反対派の残党が関わっている可能性も捨てきれない。しかし、武偵庁直々の要請ということは、それらの可能性を排除しているという暗示でもある。それなのに、私の直感は、何か危険を伝えようと警鐘を鳴らしている。

「拒否権が無い以上、最大限の警戒をしながら行くしかないんじゃないかな？」

ワトソンの言う様に、それ以外の選択肢が無い。

「それに、そもそも研修って、何をするんだい？」

「なにも伝えられてないわ。ただ、その日にナゴジョで行われるということだけよ。」

恐らく、蘭豹のあの様子だと、教員たちにも伝わっていないのだろう。ただ、上からの命令。組織人としては、疑問や不安を抱いても、従うしかないのだろう。

「んん、ますます怪しくない？」

「怪しいというより、なにか隠してる…？あつ!!」

私の直感が、推理を省いて答えを導き出す。それと同時に冷や汗が溢れ出す。

「ねえ、これって…」

気付かなければ良かったのか？それとも気付いた方が良かったのか、それは今となっては分からない。だけど確かに分かるのは、

生きて帰れるのかしら？

それだけだった。

|||||

— 武偵庁長官視点 —

思った以上に早い訪問だな。

遠山金虎、手に負えない猛獣が武偵となり、武検と武偵庁の特別顧問となって数日、海外の諜報機関や武偵組織だけでなく、国内の組織からも問い合わせが殺到している。

Rランク、それだけならまだ良かった。しかし、SDAランク総合1位。これはなんだ？何故こんなことになってしまった。

「長官、こちらの問い合わせですが…」

「マニュアル通りに対応してくれ。」

そんな感じで事前に作成されたマニュアルを基に対応しているが、当然追及され、その対応に追われ、ただでさえ足りていない人員は対応に追われ、パンク状態だ。

「長官、名古屋武偵女子校の校長からの問い合わせですが…」

「それもマニュアル通りに頼む。」

一番知られたくない所じゃないか。

「それが、ご本人が来られてまして…」

なんでそうなるのだ。遠山金虎、彼女は不幸をまき散らしているのではないかと疑ってしまう。

「不在だと伝えてくれ…」

そう言いながら、引き出しから胃薬を取り出ししていた。

「酷いですね、長官殿。居留守なんて、全部聞こえていますよ。」

扉をこじ開け、ナゴジヨの校長が突入してくる。私が言うのもなんだが、武偵の連中は、なにか大切な頭のネジを落としているんじゃないだろうか？

「君、マナーというものがだね…」

「それよりも、女性初、しかも日本人初のSDAランク総合1位、そんな素晴らしい人材を何故今までの隠していたのですっ!!」

そう言いながら、詰め寄り、バンツとデスクを叩き、絶叫する。

「私にそれらの決定権もなにもない。」

「しかし、状況が変わったのでしょうか？ だったら、名古屋武偵女子校の教諭、いえ、この様な快拳を成し遂げたのです。校長職を彼女にするのなら、喜んで私はその座を降りますよ。」

「待て、落ち着くのだ。そもそも君は、彼女に会ったこともないのだ。それに分かるだろう？ 功績や力だけが教育者に必要なものではないと：彼女には真に必要なものが欠けている。よって、その要請は許可出来ん。」

そう、遠山金虎には、教育者としてはならない理由が明白にある。学力、最低限のラインに届いていないのだから、なんと言われようと不可能なのだ。まあ、彼女の名誉の為にそこは伏せておくが。

「それに、彼女に名古屋武偵女子校の校訓や教育方針は合わない。それも理由だ。」

正確に言えば、合わないのではなく、あってはならないだ。もし彼女がナゴジヨに染まってしまった場合、国家転覆さえあり得てしまうのだから。

「教育者と名古屋武偵女子校が合わぬとおっしゃるなら、では、こうし

ましよう。全国の有望な女子武偵と教育者を集め、彼女、そう、遠山かなこ特別顧問に実技研修を行ってもらいましょう。」

そう来たか：彼女は名ばかりとはいえ、武偵庁特別顧問という役職にある。役職である以上、拒否すれば職務放棄とみなされてしまう。ただでさえマスコミからの風当たりが強い武偵庁だ、公にされれば遠山金虎が今以上に表に出てしまう。しかも悪いイメージで。それにより彼女が武偵庁や武検の役職を外れば、国外の勢力や違法組織からの勧誘も活発化する。それを見こうしての脅しだろう。

「：分かった。1日だけ、遠山特別顧問の出張を認めよう。しかし、彼女への干渉、取引等は禁止とする。違反した場合には、武偵庁だけでなく、武検や公安も動く。その意味は分かるな？」

「ええ、それで結構です。彼女の力を見て、次代の女子武偵たちが奮起し、意欲の向上に繋がることこそが私の望みです。」

彼女は教育者として本気でそう思っているのだろう。それを分かっているからこそ校長に指名したのだし、正しい考え方だ。しかし、彼女の實力の一端を見た私は思うのだ。あまりの實力の差に、奮起どころか、心が折られるんじゃないかと。

「それともう一つ条件が、遠山特別顧問と学生の研修は、ハンデにハンデを重ね、圧倒的生徒有利の状態で行うことだ。」

「私としては、彼女の全てを出し切って頂きたいのですが：」

アレの全力だと：

「やめてくれ、私の胃どころか、地球が耐えられない気がする。」

|||||

— 狐崎みすず視点 —

あら、もうこんな時間なの：

寝ぼけ眼で枕元の時計を見て、ぼんやりと考える。休職中で仕事に行く必要もなく、厄介な連中をかなこミラに制圧させ、その後私はその連中とお話をして、(私の)平穏を生み出す。そんなことをこの数



日、行いながら、彼女たちの酒に付き合ったり、下らない話をしたり、私の部屋が溜まり場になっているのは気に入らないけど、まるで大学生に戻った様な生活を送っていた。まあ、友達いなかったから、そんな感じだろうというイメージだけで。

そんな生活も、昨日仕事が入ったミラが旅立ち、私とかなこだけになると、あの頃に戻った様な錯覚に陥る。しかし、そうも言ってもらえない。かなことの再会を果たし、連絡手段も確保した。ついでに私の生活の障害となりそうな勢力は潰すなり、配下にするなりして、当初の目的は達成されている。となれば、いつまでも休職というわけにもいかないのだ。

「はあ、お仕事したくない…」

長い休み、その終わりが近づき、あの激務に戻ることを思うと憂鬱になる。時折、ミラのように一度に大金を得ることが可能な人々を羨ましく思う。毎日働いて、月に得られる給料は彼女の100分の1以下。それでも一般的なサラリーマンや武偵に比べれば高額だし安定しているのだから、贅沢な悩みなのだろうけど…そもそも、私には傭兵の様な腕つぶしが必要とされる仕事は出来ないのだから、ないものねだりなのだ。

「あなたは気楽でいいわね…」

何も考えていない様な、いや、絶対に何も考えていないであろう、床で眠るかなこを見て呟く。気持ちよさそうに眠るその寝顔に、不思議と腹が立たないのは、かなこだからだろう。私の気分が沈んでいるというのに、近くこんな気楽な人間がいれば、普通なら社会的に抹殺しようとはつ当たりしている。

「全く、なんでこんな寝方で風邪をひかないのかしら?」

床に直で、毛布も布団も掛けず、下着姿で眠る彼女を見て、そう呟く。

「まあ、バカだから仕方ないわね。」

「…ん?今、バカと言わなかったか…?」

眠そうに目を擦りながら、寝ぼけた様子で上半身を起こし、そう言う。

「あら、おはよう。かなこ、寝ぼけているわね。あなたがバカなのは分かり切ったことでしょ。」

大きく伸びをしながら、欠伸をしているかなこにそう正論を述べる。

「何度も言っているが、私は座学が不得手で、考えるのが嫌いなので、バカではない。」

「世間一般では、それをバカと呼ぶのよ。」

何故この子は、頑なに己がバカであることを認めないのかしら？長い付き合いだけれど、それは未だに謎だわ。そもそも、この子に関しては、考えたら負けな部分が多すぎるのよ。

「まあ、そんな下らない話は置いておいて、ご飯にしましょ。」

「む、そうだな。」

身支度を始める私を、下着姿のまま眺めるかなこ、

「かなこ、あなたも着替えて出掛ける準備をしなさいよ。」

「今日も外食なのか？てつきりここで食べると思っていたのに。」

「仮にそうだとしても、服くらいは着なさいよ。あと、悪いけど、この部屋で私の料理が出ることなんて無いわよ。」

だって、出来ないもの。そもそも、キッチン用品もお湯を沸かす用小型鍋と、電子レンジくらいだし。包丁もまな板もなければ、食器さえ、ラーメン丼一つしかないのだ。それに、下手に料理なんかして、出た生ゴミから虫でも湧いたなら、直ぐに引越すだろう。だから、料理なんてしない。ひとり暮らしだと、出来合いのものを買う方が結果的に安くなるし。そう、私はなにも間違っていないのだ。

「そんなことでは、嫁の貰い手がないぞ。」

「あなたにだけは言われたくないわ。」

恐らく、料理の実力に関しては、団栗の背比べな気がする。

「私は、出来ないんじゃないかと、必要ないからしないのよ。その気になつて、やればきつと出来るからいいのよ。」

「私は旅をしていた時は、ちゃんと作っていた。火を起こして――」

「どうせ焼くだけでしょ。それも適当な野生動物を。」

それ以外にかなこがやれることはないだろう。

それから、不毛な議論を続けながら、身支度を終えた私たちは、遅めの朝食兼昼食を取りに街に出る。

「何処に行くのだ？」

「平和島の方に、元一流フレンチシェフがやってる洋食店があるわ。そのステーキとハンバーグは絶品だし、ランチタイムだとお手頃なのよ。」

かなこの好物を食べさせてあげようと、少し遠出してそちらに向かうとしていた。

「ハンバーグ…」

少し嬉しそうなかなこの様子、効果はあったようだ。

「みずず、まだ恨みを買っている連中はいるか？」

駅までの道すがら、真剣なかなこの声、

「そりゃあ、沢山いるわね。でも、白昼堂々狙える程肝が据わった連中でもないし、それだけの実力もないわね。」

「なら、私への用事か…」

そう呟くと、かなこが一点をジッと見つめる。そこにいるのは分かっている、そう知らせているのだろう。

「あなた、恨みを買った覚えは？」

「無い、しかし、手合わせなら、歓迎する。」

相変わらずの戦鬪狂いね。バトルジャンキー

「待て、戦いに来たんじゃない。」

そう言っちょよこんと現れたのは…子ども？いいえ、確か公安の、「公安0課、加納ユキ、冷泉検事の代理で遠山金虎に連絡で来ただけだ。」

潜入調査のプロが使い走り、政権交代で、武検と公安の立場に明確な上下関係が完成されてしまってるわね。それでも？元〃を付けないあたりは、彼女の意地とプライドかしら？

「なら、これは捨てていいのだな？」

加納の言葉を聞き、かなこが人差し指と中指で挟んだ針を見せる。含み針、そんなもの撃たれていたのね。

「ああ、本人確認を兼ねて実力を量ったただけだ、気にしないでくれ。と

いうより、獅堂さんにくれぐれも暴れさせるなど釘を刺されている。「そうか。」

回答を聞き、少し残念そうに指を動かし、針をパキリと折る。「して、連絡とは？」

「それだが、私は本当にただの伝令と案内役であって、用件は知らん。とりあえず一緒に来てもらうぞ。」

人使いが荒いのは、武検かしら、それとも武偵庁、いや、もっと上？まあ、それはさておき。

「加納さん、悪いけど、今すぐは無理よ。これから私たちランチに行くのよ。」

「狐崎弁護士、それこそ後回しに出来るだろう。こちらは任務なんだ。」

「無礼ね、親切で言ってるのに。それに約束は謂わば契約よ、契約違反は犯罪であって、違法行為を推奨するのが元公安0課さんの任務かしら？」

悪いが、譲る気はない、親友との久しぶりのふたりきりの時間だ。それに、親切で言っているのも？ではない。

「絶品のハンバーグとステーキか……」

空腹を堪え、肉を胃に入れることを心待ちにしているこの虎を、そのまま連れて行く方が大変なことになると私は思う。

「狐崎弁護士、あまり悪態を吐くな、侮辱罪というものがあるのだから。」

「ええ、勿論あるわ。でも、今回はそれに該当しないわ、事実を摘示しているのだから。それを罪とするのなら、事実陳列罪にでもなるのかしら？そんな罪は無いわよ。ここはソ連かしら？」

「みずず、直ぐに喧嘩するのはやめろと言っただろう……」

呆れた様子でかなこが間に入る。

「かなこ、あなたの為に言っていたのよ。加納さんについていったら、ハンバーグもステーキも食べられないわよ。」

「なんだと、すっかり肉の気分になっていたのだぞ!？」

よし、かなこを味方につけた。これで負けは有り得ない。

「待て、お前たち優先順位がおかしいだろうっ!？」

いや、間違っていない。かなこがすっかり肉の気分になっているのだ、それを無視した場合、後が怖い。そう、説明が足りていないのは意図的だけれど、これは親切なのだ。

「それじゃあ、こうしよう。お前も一緒に来るといい。その後にお前の用件に従うとしよう。」

かなこが妙案だと言わんばかりにそう言う。

「加納さん、従った方がいいわよ。かなこお腹が減ってるのよ。人間って、お腹が減っていると不機嫌になるのよ。」

遠回しに暴れるぞと脅してみる。意図は伝わったのか、少し悩み、  
「もう、それでいいから…」

疲れた様子で呟く。英断ね。いい財布が手に入ったわ。

「それじゃあ、行きましよう。」

加納の奢りでランチを満喫した私は、かなこに休職を解き、復帰する旨と必ず私からの電話には出ることを約束させ、解散となった。

しかし、かなこを呼び出すことは、

「碌なことではないわね。」

コンビニで買ったウーロン茶で肉の油を流しながら、そう呟く。まあ、苦勞するのはあの子じゃなくて周囲の人間でしようから、どうでもいいわね。それに、それ以上に今は、

「お仕事行きたくないなあ…」

短い休職が終わりを迎えることへの悲愴感、そっちの方が向き合うべき課題であった。

## 集結、名古屋女子校

—御幣島あびこ視点—  
みてしま

大阪武偵高3年B組の教室、その扉を勢いよく開け、  
「出来た、遂に出来たんや!!ウチだけの特注バット!!」

「いや、教務部呼び出しから帰ってきて第一声がそれ!？」

歡喜のあまり、チームメイトでクラスメイトで幼馴染の阿部野遥あべのはるか  
に突撃をかました。

「せやから、出来たんやて、ウチの特注バットが。」

発注したのは高校入学前、それが3年になった今、遂に完成したのだ。熊本県にいる多国籍刀工集団、『ビヨンド』。そんな肥後もっこすたちが試行錯誤を繰り返して、手塩をかけて完成された特注のバット。

特殊繊維とカーボン、鋼を絶妙に織り交ぜ、戦車の装甲以上の強度を持ちながら、従来の金属バットとさして変わらない重量という、(いい意味で)変態技術が遺憾なく発揮された最高の逸品。

「よっしゃー!この『ビヨンド・もっこす』で阪神優勝や!!」

「いや、それあびこ関係ないやん。それは阪神の選手に頑張ってもらわんと。そもそも、プロ野球は金属バット禁止やし。あとその名前、いろいろとアカンやろ。」

「ツツコミ長いなあ、もっこす、短くスナップを効かせた感じやないとアカン。」

「知らんがな。それよりも御幣島先生の呼び出しなんやつたん?」

「なんや、『ビヨンド・もっこす』よりもそっちが大切ななんかい。ちなみに御幣島先生はウチのオカンや。」

「オカンが言うには、名古屋で研修やさかい、チームで行けやと。」

「は、え、めっちゃ大事な連絡やんつ!?!なんでそんな大事なこと言わんとしてようもないバットの話なんかしよるん!?!」

「なんやと!!ウチの『ビヨンド・もっこす』のどこがしよるもないんや、言うてみい。あんたを試し打ちの第一号にするで!!」

「このドアホオっ!!」

ゴチンと頭頂部に拳骨が落ちる。

「何すんねん、オカン!!」

「あ、御幣島先生。おはようございます。」

「阿倍野、おはようさん。あびこ、あんたあ、さつきからの聞きよったけど、アホばつかり言いよつて。さつきとチームに伝えてき。あんた一応リーダーやろが。あと、学校ではオカンやのうて、御幣島先生や。何回言わせんねん。」

あ、これはアカンな、ガチで怒つとる。

「直ぐ行つて来ますっ!!」

「:私もついて行くわ。あびこだけやと不安やし。」

「すまんなあ、阿倍野。頼むで。」

「しかし、柴島くじまと私市みやちらは2年の教室やし、ヒラパー姉さんはいつもの実験室かあ。メンドいなあ。」

「取りあえずひらパー姉さんの方から行こか。実験室近いし。」

「せやな。」

バットを担ぎ、はるかど並んで廊下を歩く。

「いや、ちよつと待つて、なんでバット持ってきたん!?!置いてきいよ。邪魔くさいわ。」

「せやかて、これウチのメインウエポンやし。携行せな教務部に怒られるやん。」

そう、拳銃と刀剣の携帯が義務付けられている武偵高やからな。

「あんた、あの日本刀やったやん!!アレ、どうしたんや!?!」

「ああ、アレな、アレは売った。だって『ビヨンド・もっこす』ごつつ高いねん。」

そう、最新技術と匠の技を遺憾なく用いて制作されたこの特注バットは恐ろしく高い。それこそ今までためてた依頼料だけじゃ足りんくらい。

「試合で使うんやと思つとつたわ:」

「アホやな、公式戦でこないな魔改造バット使えるかいな。即退場やぞ。」

「ならなんで買ったん!?!アホ、ドアホ、前の日本刀で良かったやん。そ

ないなバットでどないやって戦うねん!! 私らチンピラとちゃうねんで!!。」

「だってウチ、4番サードで掛布の再来やし…」

「わけわからんわ…」

そんな会話をしながら実験室に辿り着く。

「邪魔するでえー。」

「邪魔すんねやったら帰ってやあ〜。」

「あいよー。…ってなんでやねん!」

「毎回この下りするんやめえや。」

お決まりのネタをしていたら、はるかに睨まれる。

「あびやん、今日はどないしたん〜? ウチ、実験中やねんけど〜。」

「すまんなひらパー姉さん。話があつてきたんやけど、今回はなに作つたん?」

ひらパー姉さんことひらかた枚方パトリシア、略してひらパー。同級生やけど、なんか大人の色気ムンムンやから姉さん。そんな、ひらパー姉さんの制作した謎の機械? 何やろう銃口ぽいのついとるから、最新兵器かいな?

「これなあ〜、すつごいんやでえ〜。なんと、弾丸要らずの銃なんやあ〜。」

「えつ!! めつちや凄いやん。姉さん、ノーベル賞取れるんちゃう。」

「弾丸要らずって、どうやって撃つん?」

はるかの質問に、姉さんは、

「これはなあ〜、心で撃つんやでえ〜。」

「それ、サ○コガンやん!」

「せやでえ〜、サイコ○ンやでえ〜。」

「あかん、遂に宇宙海賊になる時がきたんか…」

「いや、いろいろとアカンやろ…」

サイコガ○の実験中やったんか、そんな大事な場面に遭遇するとは、ウチはついとるな。

「ほないくでえ〜。」

姉さんが左腕にサイ○ガンを嵌める。



「よつしや、ウチがアーマロイド・レイやるから、はるかはクリボーナ。」

「いやや、私撃たれるやん。私の身体やと貫通して死んでまう。」

姉さんの左腕の○イコガンに光が集まる。

「ビューッ！エネルギーが集まってやがる、こいつはやるかもしれないえ…」

「いや、ダメでしょっ！！ここ室内だし。」

そんなことは些細な問題だ。なんせサイ○ガンの完成に立ち会えるかもしれないのだ。

ボンツ、という音の後、爆発が起き、建物が揺れる。

「アカン、失敗やあゝ。」

「コルアツ枚方あーっ！！またやりよつたなあーっ！！」

「あびやん、はるちゃん、逃げるでえゝ。」

「あ、姉さん待つてえな。」

「なんでえー、私なんも悪ないのにいー。」

「御幣島に阿倍野、またお前らかい。今日という今日は逃がさへんぞ！！」

「ほらほらゝ、逃げな地獄のお仕置きコースやでえゝ。」

「姉さんが悪いんです。私何も悪ないんですう。」

はるかが必死に弁明しているが、その腕を掴んで姉さんと共に駆け出した。ウチは仲間を見捨てたりせえへんからな。

「それでゝ、なんやつたん？」

なんとか逃げ切り、姉さんが用件を尋ねてくる。

「ああ、それな、かくかくしかじかで。」

「まるまるくまぐまなんやねゝ。」

「いや、そんなんで分かるかいな。ちゃんと説明せえ！！」

「ツツコミ大変やなあゝ。」

「分かつとんなら、ボケんの自重してえや…」

それは無理やな。だってウチ大阪人やし。

「説明すんなら、いずみんとつるみん呼んで纏めてでええんちゃう。」

そう言つて、姉さんがスマホを取り出す。

「せやつた、なんでケータイ使わへんかつたんや!!」

「自分ら、アホやなあ〜。」

姉さんがスマホを操作し、

「あ、いずみん? せやでえ〜ウチやで〜。つるみんなもおる? ほならふたりで旧校舎の中庭に来てえな〜。」

通話を終えた姉さんは、

「ほな、待つとく間、チンピラ装備のおふたりとお話でもしよか〜。」

「チンピラ装備やと!! ウチの『ビヨンド・もっこす』に文句あるんか!?

姉さんとて容赦せんで!!」

「なんで私までチンピラ扱いなん…」

「いや、あんたは完全にチンピラ装備やろ(〜)。」

メインウエポンがボールと鉄パイプのはるかは、絶対にチンピラ装備や。

「武偵中の時からボールやからな。高校上がってちやんとしたもん買つてくるかと思いきや。」

「ボールそのままで、鉄パイプ追加で二刀流やからなあ〜。」

「じゃあないやん。家にあるもんで済ますんがコスパええんやから。」

はるかの家は、阿倍野建設という、そこそこ大きい建設会社やからな。

「お嬢様のくせにケチ臭いねん。」

「ケチちやう、節約家や!!」

「まあ、それで強襲科Aランクなんやからええんやけど〜。それに〜、ボールのフルスイングはマジでアカン威力やからなあ〜。」

はるかのスイングスピードはプロ野球選手並。ウチらの女子野球部入ってくれんかなあ、四番任せれるで。なんでボール持って茶道部やねん。

「あ、来たみたいやでえ〜。」

「お、ホンマやな。」

タツタツタ、とこちらに駆け寄ってくるショートカットの少女、  
柴島和泉。その背中に背負われた小さな少女が私市鶴美。

「すみません、お待たせしました。」

「いずみ、急に呼び出してごめんな。」

「いえ、それで、話はなんですかの？ほら、つるみも起きい。」

「アカン、眠すぎて死にそうや…」

つるみがいずみの背中から降ろさ、青白い不健康な顔で弱々しく呟く。

「ほら、つるちゃん、こっちいきいよ。」

はるかがつるみを呼び寄せ、膝に座らせる。

「はる姉え。」

はるかをつるみは従姉妹で実の姉妹の様に過ごしてきた為に、はるかは小さくて病弱なつるみを可愛がっているし、つるみもはるかに甘えている。

「それで、話なんやけどな—」

「成程、名古屋へ…。」

「せや、投高打低でバッター不利やけど、ウチらならやれる。ライトスタンドに叩き込んだるで。」

「いや、ナゴドには行かへんから!!行くんはナゴジヨ!!」

「はるか先輩、流石のツツコミです。」

流石はるかやな。野球興味ない癖に、ツツコミの為に知識だけは詰め込んでる。

「せやけど、2日間の研修ってなにするん〜。」

「ああ、それな。オカンが言うにはな、全国から選りすぐりの女子武偵が集められて、なんやするんやと。」

「いや、そのなんやが大事なんやけど。」

はるかの言う事も尤もだが、

「初日は学生同士の交流らしいんやけど、2日目はオカンも知らされとらんらしいねん。せやからウチも知らん。」

「はあ、大丈夫かいな。つるちゃんも行くやろ。心配やわ。」

「せやなあ〜。つるみん死ぬかもなく。」

病弱なつるみをはるか姉さんが心配している。

「え、ウチ死ぬん?」

ボーっと聞いていたのか、つるみがそう言う。

「せやで、死ぬで。」

「そっか、短い人生やったなあ。」

「いや、そんな達観せんという。死なへんから。大丈夫やから。」

3人のコントを見ながら、野球部の後輩でもあるいずみに声をかける。

「なんやようわからんけど、行くで名古屋、ウチといずみの無敵の4、5番でドラゴン退治、そして阪神優勝や!!」

「はい、先輩!!」

「我ら『浪花の虎乙女』名古屋に殴り込みや!!」

「そのチーム名変えられへんのかなあ…」

そして、その日がやってきた。名古屋へ向かう新幹線に意気揚々と乗り込んだ、

「あびこ先輩とひらパー姉さん、随分と大荷物ですね。」

「せやねん、いろいろ持ってきたらこうなつたんよ。」

「いや、たった1泊2日なのに、そない何があるん?」

あれ、なんでウチこない大荷物なんやつけ?持ってきたんは、暇な時間あったら野球しよう思つて、グローブとボールと…詰めた荷物を思い出してみる。

新幹線の発車後、いずみと姉さんの会話を聞きながら、とんでもないことに気付き、ウチはガタガタと震える。

「あびこ、どないしたん。めっちゃ顔色悪いで?」

はるかが心配している。

「昨日の夜寝れへんかったんかあ?遠足前の小学生みたいやわ。」

「姉さん、それはちやうで、ぐっすり寝た。もつとヤバいことやねん。拳銃と間違えて、スピードガン持ってきてしもうた…どないしよう、オカンに殺される…」

よう考えたら、バックも野球部の遠征用のやつやし。

「あんだ、何しに行くん?」

「コレは教育やろなあ。」

アカン、ホンマどないしよう…

— 神崎・H・アリア視点 —

なんか、心配しかないんだけど…

「アリア、もうどうしようもないんだから、今を楽しもうよ。」

名古屋までの移動の新幹線、向い合せにした座席、その中で理子が必死に盛り上げようとしているが、私たちバスカービルの面々はまるで、お通夜みたいな空気が漂う。

「そうですよ、アリア先輩。それに、なんで先輩方はそんなに暗いんですか？名古屋研修ですよ。」

あたりたちのチームも隣の座席を取っていた。

「名古屋研修だからだよ…」

今にも死にそうな表情の白雪がそう呟く。普段から無表情のレキでさえ、顔色が良くない気がする。

「気付かなければ良かった…」

後悔先に立たず、そうはいうけれど、研修の特別講師が誰か気付いてしまったから、なにも楽しみなんてない。あるのは、生きて帰れるのか。ただそれだけだ。そして、知ってしまった以上、この新幹線は、私たちバスカービルにとって、生きて帰れぬ戦場へ送り出される兵員輸送列車となったのだ。

「なんや、湿気た面しよつて、そんなんじや他校の生徒に負けるで。」  
ビールの500ml缶を片手に蘭豹がやって来たが、なんと言われようと、地獄へと送られる私たちには響かない。

「あ、蘭豹先生えく、ちよつと、お話があるんですけど。」

理子が蘭豹を連れ、別の車両に向かう。ああ、蘭豹ってあの人の妹分なんだっけ…理子の奴、言うつもりね。

暫くして、理子と死にそうな顔をした蘭豹が戻ってくる。

「あー、その、お前ら、頑張りいや…」

「はい…」

葬式の様な空気の中、新幹線は無慈悲にも名古屋へと向かって行く。

「東京武偵高のぐに到着だぞー。」

ナゴジヨの校門を潜ると、生徒たちがわらわらと集まってくる。

「あ、ひかちゃん!!」

「あかりっ!!」

ああ、あかりの従姉妹だったっけ、そんな後輩の姿を普段なら微笑ましく思っていただろう。しかし、今はそんな気分じゃない。

「あびこ、そんなにどないするん?」

「オカンにはボコられたし、もうスピードガンでええんちゃうか。」

「サイ○ガンならあるでええ。」

「ほなそれでええわ。」

少し離れた所で、関西弁で謎の会話が繰り広げられていた。

「えっ!?サイコ○ン!?見たい見たい!!」

何故かその会話に理子が反応している。

「サ○コガンってなに?」

「え、アリア知らないのっ!?サイコガ○は心で撃つんだよっ。」

いや、訳が分からないんだけど。

「ほな、試し打ちしよや〜。」

「いや、やめとき。この間爆発しとったやん。」

「芸術は爆発やっ!!」

そう言っつて、何故かバットを持った関西弁の少女が、左腕にサイ○ガンなるものを装着する。

「ええかあくあびやん、サイコ○ンは心で撃つんやでえ〜。」

「ひゅーっ!!分かつとるで、ひらパー姉さん。」

何故かハイテンションでサイコ○ンを構えている。

「いや、アカンて。よそ様の学校で爆発事故とか洒落にならんから。いずみも止めてえな。」

ああ、常識的な人もいるのね。…なんでボール取り出したのかしら?  
?

「先輩、あきまへん。はるか先輩プツン寸前ですよ。ほら、ボール出しちゃってますもん。ホンマあきまへんて。」

いずみと呼ばれた背の高い少女が○イコガンを装着した少女を止めに入る。

「嫌や、ウチは宇宙海賊になるんやーっ!!」

「先輩、そんなんなつたら、一緒に甲子園行くって夢、どないするんです…」

サイコガ○の少女が大人しくなり、

「ウチが…ウチが間違つとつた…なんや宇宙海賊つて。よっしや、行くで、甲子園!!そして阪神優勝や!!」

バシツ、とサイ○ガンを地面に叩きつける。

「はいっ!!先輩!!」

「ああ、ウチのサイコ○ンが。」

なんなのあの一団? 結局サイコガ○つてなによ?

「ねえねえ、サ○コガン見せてえー。」

「あんた誰や。」

ちよつと理子、あんた変な連中に絡むんじやないわよ。

「理子もサイ○ガン撃ちたーい!!」

「ええよく、ただ爆発すんで。まだ調整中やし。」

「え、じゃあやめとく。ほら、アリアたちもおいでよーっ。大阪の人たち面白いよーっ!!」

行きたくないわね…なんか、疲れそう…

「なんや、自分ら東京もんかいな。つてことは、アリアつて、あの神崎・H・アリアかいな!? ビックネームやないか!!」

「ほら、アリア来なよーっ。」

私をキョロキョロと探すバット装備の少女の前に、理子が私の腕を引いて連れていく。だから、行きたくないんだつて…

「ほら、アリア自己紹介。」

にゅふふ、と笑う理子。絶対あんた楽しんでるでしょ…

「はあ、東京武偵高3年、強襲科Sランク。神崎・H・アリアよ。」

「おお、あんたが噂のアリアはんかあ。ウチは大阪武偵高女子野球部

3年、御幣島あびこ。4番サード、右投げ左打ちや。」

…？

「いや、あんたそこはランク言うところやろ!!…ホンマごめんな。あ、私は阿部野遥、あびこと同じ3年でふたりとも一応強襲科のAランクや。」

あ、さっきの常識人。しかし、一応つてなによ？いや、それ以上に「あんたたち、そのボールとバットは何？」

純粹な疑問をぶつける。

「えっ？いや、これウチ（私）のメインウェポンやけど？」

あ、常識人がいなくなった。いや、ダメでしょ。仮にも武偵なのよ!!そんなチンピラ…いや、今時のチンピラ以下の装備つてなによ!?

「せや、なあアリアはん、大阪に移籍せえへん？んでもって女子野球部入ってや。そないしたら3番ファーストで、ウチが4番サードでいずみが5番セカンドになって、1985年の阪神のクリーンアップの再現しよや。」

「ごめん、意味が分からないわ。」

「そうですよ先輩、『ニューヨークからロサンゼルスまで飛ばす』くらいやないとベースは務まりませんで。」

「せやな、ウチが間違つとつたわ。ホンマ凄かったからなあ、すんまへん、そしてホンマありがとうベース。」

どうしよう、この人たちが何を言ってるのか、サッパリ分からないわ。

「研修の予定表です。貰ってない方はまだいますかあー。」

訳の分からない会話を聞いていたら、予定表を配って回っているナゴジヨの生徒たちやって来た。

「あ、ウチら貰ってへん。」

「私たちもよ。」

A3用紙を半分に折っただけの簡易な予定表を受け取る。

「初日は各校の親睦会…他校の後輩を上級生が指導するのね。面白そうじゃない。」

「くふーっ、面白い子はあるかなあー？」



「上手く出来るかなあ…」

「……………」

私たちバスカービルは、意図的に2日目の予定を見ようとはしなかった。

「なんや2日目の予定の、武偵庁特別顧問・遠山とうやまかねとら金虎はんって、初めて聞いたわ。厳つい名前やなあ。ゴツツイ武将みたいなイメージやけど、猛虎魂を感じる、ええ名前やな。」

「これで『かなこ』って読むんやて、フリガナあるんやからちゃんと読み。人様の名前間違えるんは失礼やで。」

「せやけど聞いたことない役職やわ。なんなんやろな特別顧問って、ごつつ強そうやわ。」

「実技研修ってなにするんでしょう?」

「あ、アカン、死にそうやわ…ゴフツ!!」

なんか、あかりよりも小さい子が血吐いてるんだけど…大丈夫なのかしら? いや、それよりも、聞きたくないことが聞こえてしまった…

「あ、つるみんが血い吐いてもうたあ。」

「ちよつ、ひらパー姉さん眺めとるだけやのうて、運ぶん手伝って下さいよっ!!」

「アカン、保健室!!」

「あ、お昼なんに、お星様が見えるで。不思議やなあ。」

「つるちゃん、もう喋ったらアカン!!」

「それ死兆星ちゃう。」

ドタドタと吐血した少女を抱えて大阪組が走っていく。騒がしいのがやつと何処か行ってくれたわ。…大丈夫よね、あの子…

大阪組が去り、静かになった我らがバスカービルは、再びお葬式ムードに戻る。

「帰りたい…」

叶わぬ願いを、静かに呟いた。

|||||

—間宮あかり視点—

「そこは、ホームランコースやで。」

放った弾丸が打ち返され、顔の真横を通過する。この人たち、ふざけてるのかと思ってたけど、強い!!

「他校の先輩から指導なんて、滅多にない機会よ。しつかり学んで来なさい。」

アリア先輩のそんな言葉に送り出される。本当はアリア先輩に教わりたいけど、先輩の言う通り、いい機会なんだし、頑張ろう。

「怖い先輩じゃないといいですね。」

「そうだね、桜ちゃん。」

そんなことを言いながら、意気揚々と向かった先にいた先輩方は、少し、いや、大分予想と違っていた。

「お、来たな。ほな、自己紹介から始めよか。」

制服ではなく、野球のユニホームを身に纏い、ショートカットに野球帽を被り、バットを持った関西弁の先輩。あれ、いろいろとおかしいよね。

「ひらパー姉さん、ホンマにそれ使うん？」

「せやで、おもろいことになるでえ。」

バールを持っていなければ、お淑やかで白雪先輩と少し似た雰囲気  
の先輩と、謎の巨大な機械を弄っている、凄く大人の色気が漂うハ  
ーフ顔の先輩。CVRなのかな？

ハズレ引いた…

「まずは、ウチ。ウチは大阪武偵高3年、御幣島あびこや。」

野球の先輩が名乗る。

「私は阿倍野遥。よろしゅうな。」

「枚方パトリシアやで。」

バール先輩とエロスの先輩が名乗る。

「えっと、東京武偵高2年、間宮あかりです。」

「同じく、火野ライカです。」

「同じく、佐々木志乃です。」

「1年、島麒麟ですの。」

「おっし、ほな始めよか。遠慮はいらへんで、殺す気で来てや。プレイボールや。」

ライカと頷き合い、強襲科コンビで強襲をかける。

「実力の分からん相手に強襲は悪手やで。」

ゴウツ、と私たちを巨大なボクシンググローブが横から弾き飛ばす。何あれ!?

「怪我せんよう、グローブ付けてみたんや。スポンジ製やで。」

枚方先輩が、なんだかよく分からない機械の真ん中に座り、操縦してる!?!先輩がカタカタと凄い速度でキーボードを叩くと、先程のボクシンググローブがブンブンと動き、私たちを襲う。

「ちよつ、なんだよアレっ!?!」

「分かんないっ!!なんなのアレっ!?!」

迫りくる機械の拳を、ライカと共に避け続ける。

「これは、ひらパー印のタイソン君2号やで。1号は先日爆発して修理中なんよ。」

いや、機械の名前とかどうでもいいんです。なんでそんなのがあるのかが問題であって。

「あびこ、思ったんやけど、そのバットで殴ったら死んでしまうんちゃう?」

「いや、それやったら、お前のボールもアカンやろ。」

「どないしよう。怪我はさせたくないし…」

「せや、はるかはこの使いや。」

赤く、短いバットを渡す。

「これプラスチックバットやん。なんで持つて来とるん!?!」

「いや、遊ぼうか思て…それにええやん、丁度いいハンデや。格の違いを見せな。」

隙だらけだ、今なら!!迫るロボットパンチを躲し、弾丸を放つ。

阿倍野先輩が素早く躲し、

「そこは、ホームランコースやで。」

御幣島先輩が体をスライドさせ、バットをスイングし、弾丸を打ち返す。

「ホームランで、ライナーやん。」

「いや、あれは和田曲線を描いてフェンス越えるんや。」

なんか訳の分からない会話をしているけど、この人たちは強い。そう確信する。

「ほなほるか、ダブルプレーいくでっ!!」

「ホンマにこのプラスチックバットで大丈夫やろか…」

そう言いながら、阿倍野先輩がジャンプし、御幣島先輩がフルスイング。そのバットに足を掛け、

「遥ストライクやつ!!」

阿倍野先輩がミサイルの様に飛んでくる。何発か銃弾を放つが、左手の鉄パイプを振るい、叩き落す。

「怪我せんよう気いつけるさかい、勘弁な。」

阿倍野先輩の声と同時に、バシバシと全身に走る痛み。プラスチックバットでもこれだけ痛いのだ、もしあのままボールで来ていたら、大怪我では済まなかつただろう。

「ほな、またなー。」

「ぐうっ!!」

ライカを踏み台に、また先程の位置へと跳躍する。

「「あかり（先輩）ちゃん!!」」

「ライカお姉様っ!!」

3人が駆け寄る。

「せやから、もっと周りを見なアカンで。」

私たちと志乃ちゃんたちの間塞ぐ様に、右のグローブが振り下ろされる。

「んでもって、バックスクリーン三連発や。」

ロボットの左グローブの上に御幣島先輩がいた。バットを振り、白球を打ち出す。

枚方先輩のロボットに気を取られていた志乃ちゃんたち3人に、白球が命中する。

「安心せえ、軟球や。」

「いや、十分痛いやろ。アカンで、怪我さしたら。」

「大丈夫、内野手なら一度は通る道や。」

「てか、やっぱダメやわ。ほら、一回で折れてもうた。」

根本しか残っていないプラスチックバットを見せながら、阿倍野先輩が言う。

ふざけているとしか思えない装備なのに、なんでこんなに強いのか!? それに、コンビネーションも完璧だ。個人としての戦闘能力は分からないけど、チームとしてなら、アリア先輩たちのバスケビルよりも強いかもしれない…

「おふたりさん、後は任せたでえ〜。」

ロボットアームを一凧し、枚方先輩が後方に下がる。アームは的確に私の手に当たり、銃が手から離れる。

「なんや、もうバツテリー切れかいな。生身で行かんかい。」

「え〜、私、素の戦闘力ごみクズやで〜。無理やわ〜。」

「しゃあない、いつもの事やん。姉さんが銃落としとるし、格闘戦といこうや。」

銃を拾おうと、駆け出す。その3歩目、キンツという音、地面を蹴るはずの右足に違和感がある。

「うわっ!!」

勢いよく、後ろに転び、尻餅をつく。

「ボール…」

地面を転がるボール。これを踏んだの?

「ボールは最後まで見いや。内野手の基本やで。」

御幣島先輩が打ったんだ…

「ほな、守備練習や。」

バットの鋭い突きをなんとか地面を転がって避けるが、さらに銃から離れてしまう。御幣島先輩の腰ベルトに珍しい形の拳銃らしきものが見える。鳶穿で…2回目の突きのタイミングでカウンターで鳶穿を試みる。

『『ビヨンド・もっこす』は渡さへんで。』

バットを掴む寸前に地面に自ら落とすことで、私の手をすり抜けていく。でも銃は掴んだ。

「お、スられてもうた。おもろい技やな。」

お気楽にそう言いながら、足でバットを浮かせ、構える。私も奪った銃を構える。

この距離なら打ち返せない筈。引き金を引くけど、弾がでない…？ 感触もおかしい…これ、銃じゃない!?

「それ、スピードガンやで。」

バットで鳩尾を突き上げられ、ゴホツと肺の空気が吐き出され、地面に倒れる。力が入らない…

「アホ、やり過ぎや。」

御幣島先輩を窘める阿倍野先輩。

「いや、あんたの方がやり過ぎちゃうん？ 4人纏めてとかえげつないわ。」

みんなやられちゃった…

「ふたりとも、お疲れさ〜ん〜。少し後輩ちゃんたち休ませたろ〜や〜。」

「せやな、んでもって、基礎錬や。素材はええようやが、集団戦のいろはが分かつとらんみたいやし、教えたるか。」

「なんや、あびこにしては真面目やな。」

「そらそうよ。若手の育成に手を抜いたらアカン。」

その目は優しかった。

暫しの休憩の後、

「よっしやっ、特守や。しつかり声だせっ!! ええんちゃうか。最高ちやう。」

何故か私たちはグローブを詰め、ノックを受けていた。

「いや、なんで人数分グローブ持って来とるん…」

「そら、野球やろう思おて持って来とったんや。」

「せやから、あないな大荷物やったんやな〜。」

「いや、せやったら銃はちゃんと持って来いやっ!!」

なんか、一瞬尊敬したけど…やっぱこの人たちなんかおかしい!!

「こんなので、本当に強くなるんですかあ!!」

思わず叫ぶ。

「安心せえ、武偵なんて皆基本、おかしなことやつとるんや。」  
それは意味が違うのでは…

「せやく、御幣島先生がさつき、あびやんを呼んどったでく。『あびこ、大概にせえよ!!』やてく。」

「あつ、ホンマ…」

絶望した御幣島先輩の顔は、未だに忘れられない。

|||||

—蘭豹視点—

これはあれか？武偵庁を上げてのウチへのドッキリか？

そう思いたくなる程、追い込まれている。居酒屋で遠山のアホに会ったんがきっかけ、そこから姐御の影がウチの周囲をチラつく。

そこから、火野、綴とゆとり、そして今回の研修。なんや、もしかして、皆でウチのこと殺そうとしとるんやないんか？そんな疑心暗鬼に陥る程に、姉御は包囲網を縮めて来とる。生きた心地がせえへん：「蘭豹先生、どうしたんですか？」

「いや、なんでもあらへん…」

そう、各武偵高教員との親睦会、大好きな酒が大盤振る舞いされとるんに、ちいとも気分が盛り上がりらん：だって、気分的には、死刑前に好きなもん出されるんと一緒に気がするで…

「ああ、蘭豹先生、ここにおられたんですね。」

この人は、ナゴジヨの校長やったつけ？

「蘭豹先生の様な、強い女性は、ナゴジヨで教えて頂きたいと思っておりましたのに、東京武偵高に取られて、凄く残念だったんですよ。」

「はあ、そら、ありがとうございます。」  
高く評価してもらうんは嬉しいけど、普段の様に喜べる気分ではない。

「明日来られる遠山特別顧問とどちらがお強いんでしょう？」

校長のその発言で、話題は姐御に切り替わる。酒が入っているから

なのか、やいのやいのと盛り上がる。

「遠山特別顧問って、お会いしたことないんですけど、S D Aランク総合1位って噂本当なんですか?」

「ええ、本当ですよ。武偵庁で確かめました。」

姐御、やっぱ人外やったんやな。

「でも、蘭豹先生も噂通りの強さなら、同じくらいの強さなんじゃないんですか?」

そんな声が聞こえてくる。

「アホ、んなわけあるかい:姐御は、ホンマモンのバケモンや:」  
酒を口へ運びながらボソリと呟いた。

「まあ、蘭豹先生はお会いしたことがありますの!」

「それに姐御って、どういった関係で!」

アカン、聞こえてももうた:

そこからわらわらと群がって質問責めに合う。

こないな状況、飲まなやつてられるかい!!

「酒や、酒や、もつと持つてこおーい!!」

こうなったら自棄や。明日?知ったことか!!アホ程飲んで、全部酒で流し込んだる!!

酒盛りは夜明けまで続いた。



## 虎、尾張に立つ

―遠山金虎視点―

名古屋：尾張の国。信長や秀吉を輩出した地。そんな地なのに、訪れる機会は今までなかった。

「姉さん、そろそろ着くけど…本当に大丈夫かしら？」

「ふつ、何を心配しているのか分からぬが、今までもひとりで旅をしていたのだ、名古屋程度の近場なら、わざわざついて来なくともよいのだぞ。」

早朝、私は、何故かカナとなった金一と共に、始発の新幹線に乗っていた。

「それに、私一人なら、新幹線など不要というのに…」

まあ、偶にはゆっくりと移動するのも悪くないのかもしれないが、新幹線の中というのは、思った以上にやることがない。

「私がついていくのは、名古屋駅までよ。姉さんひとりで行かせたら、絶対に違う場所に行くでしょ。私だって行きたくなんてないわ。姉さんと旅行なんて、胃に穴が開いちゃうわよ。」

「む、カナは一緒に来ないのか？」

「名古屋駅にナゴジヨからのお迎えが来てるって説明したでしょ。もう忘れたの？」

「そんなことを言っていた気もしないではないな。」

「はあ…忘れてたのね。本当に大丈夫かしら、心配しかないわ…」

妹（弟）にこうも心配されると、少し悲しくなるな。私は良い姉だとは自分でも思っていないが、そこまで信用されていないのか…

「これからは、もう少し家族との時間を増やすべきか…？」

中学卒業から、ほとんど家に帰らずに旅をしていたことに、少しだけ後悔する。新しい弟と妹たちも出来たことだし、もつと家族と接する様にしよう。

「それはいいことだけれど、母体教育に悪いから、家には来ないでね。」

私は、妹（弟）にどの様に思われているのだろう…しかし、カナが

言うのならそうなのだろう。そう考えることにする。義の為とはいえ、死んだふりをして金次を悲しませた件については説教をしたが、基本的に私は、金一に対して負い目を感じている。母上がこの世を去った時、私は、母上の代わりになれなかった。そのせいで幼い金次は悲しみ、それを慰める為に金一はカナとなってしまった。

カナの姿でいられると、私は金一の言葉に従う様になっているし。それはせめてものの償いとしてだ。実際、金一は私よりも賢いし、善く考えているし、異論なく賛同出来ることが多い。家の長子として、情けない言葉ではあるが、金一が遠山の長者として相応しいと思う。

「そうだな、しかし、姉として、義妹にたまに会うくらいは許してくれぬか？それに、何かあれば直ぐに連絡しろ、地球の裏側に居ようと、お前たちに降りかかる火の粉は薙ぎ払ってやる。」

「火の粉は払うものよ。まあ、姉さんの場合、薙ぎ払うの方が的確な表現な気もするけど。まあ、姉さんと連絡が取れる様になったのは、本当に心強く思ってるわ。姉さんが味方にいる限り、負けることは有り得ない訳だし。」

「買い被り過ぎだ。私は、まだまだ弱い。更に己の拳を磨き、鍛えなければな…」

修業と家族サービス、両立していくのは難しいかもしれない。しかし、それを乗り越えてこそ更なる高みへと至る道になる筈だ。

「弱いって…なにをトチ狂ったことをいつてるのよ。姉さんが父さんの『陸奥』で起こした地震を地面殴って止めた時点で最強の生物だと思ってるわよ。」

「また随分と懐かしい話を、初めて父上と喧嘩した時だな。あの程度で強いなど…カナ、世界は広いのだぞ。」

武偵中への進学で揉めに揉め、親子喧嘩となった時だな。

「はあ…もう強さへの論議は不要よ。それよりも、名古屋でのお迎えの話だけど、もう一度、ちゃんと説明しておくわ。しっかりと覚えておいて。」

真剣なカナの瞳に、小さく頷く。

「お迎えはナゴジヨの教諭と、公安7課の斑鳩警視正が来るわ。尾張

守教諭は、まあ、格好がアレだけれど、そこまで気にする必要はないわ。ただ、斑鳩警視正は、姉さんを間違ひなく調べに来ているわ。姉さんは超偵ではないと言ったけど、彼女は、その異常な戦闘力は特殊な力だつて思つてゐるみたいだわ。だから、変なことしないでね。」

「案ずるな。そもそも、此度の件、もとより依頼をこなす。それ以外の考えは持ち合わせておらん。学生への指導だ、100分の1程度の力で大丈夫だろう。」

私だつて、旅の中で鍛錬を続け、加減出来る様になつたのだ。カナが心配しているようなことにはならないだろう。

「不安だわ…」

やはり、信頼されてないようだ…

「さあ、姉さん着いたわよ。」

新幹線が名古屋駅にて停車する。日帰りということもあり、手回し品と簡素な荷物を持ち、ホームへと降り立つ。カナの後ろに続いて改札を通り、駅を出る。

「お待たせ致しました。遠山金虎特別顧問をお連れ致しました。」

ふたりの女性、ひとりは星伽とは違つた巫女装束、もうひとりは眼鏡を掛けた女性。

「この方が、遠山特別顧問…私わたくし名古屋武偵女子校教諭、尾張守無夜美おわりのかみむやみ」

眼鏡の女がそう名乗り、

「私は公安7課斑鳩警視正です。よろしくお願いします。」

巫女装束の方がそう名乗る。

「遠山金虎だ。よろしく頼む。」

尾張守殿という教諭、カナ曰く恰好がアレとの事だつたが、至つて普通だな。

「それではこれで、私は失礼します。」

「カナ、これでパトラに土産でも買って帰つてくれ。」

この為だけにわざわざ東京と名古屋を往復するカナに、せめてもの礼として、無理やり金を握らせる。

「仕事だから気にしないでいいのに…そうね、なにかパトラが喜びそうな物を探してみるわ。それじゃあ、くれぐれも皆さんにご迷惑をお

掛けしないようにね。」

「それでは、名古屋武偵女子校までお送り致します。」

尾張守殿の運転する車が発車する。

「また、乗り物か…」

「乗り物はお嫌いですか？それとも乗り物酔いでも？」

隣に座る斑鳩殿がそう聞いてきた。

「いや、嫌いではないのだが、長く乗ることがないのでな。こうも座つてばかりだと、体が訛りそうだ。」

正直、走つて行きたかった。

「それでは、普段の移動は徒歩や自転車で？」

「そうだな。基本走っているな。そっちの方が運動にもなるし、速いのでな。」

「特別顧問は冗談がお上手ですね。」

尾張守がそう言う。冗談を言ったつもりはないのだが？

「ここが名古屋武偵女子校です。まだ始業時間ではないので静かですが。」

校門を車が通り抜けていく。グラウンドには数人の生徒がおり、自主的に鍛錬に励んでいる。朝練か、良い心がけだな。しかし、

「射撃とは、それ程大事なのだろうか？銃というものあまり関心がない故、重要性が分からぬ。」

的に向かって拳銃を構える生徒たちを見ながらそう思う。拳の方が強いのだろうか…

「特別顧問は、なにをお使いなんですか？」

尾張守の質問、恐らく銃のことを聞いているのだろうか、

「持っていないぞ。」

「は…？」

車内の空気が、一瞬凍った。なにか不味いことを言っただろうか？

「銃をお持ちではない…では他の特殊な武器をお使いに？」

「いや、なにも持っておらぬ。このふたつの拳があれば十分だ。」

再び沈黙が訪れる。

「ああ、ハンドレの件ですね。驚きましたよ。」

ハンデ？なんのことだ？

「名古屋武偵女子校へようこそ。遠山特別顧問。」

「遠山金虎です。よろしくお願いします。」

校長に挨拶をする。

「大変納得いかないのですが、武偵庁からの命令で、遠山特別顧問には、今回の研修では手加減をして頂かねばなりません。私としては、SDAランク総合1位の力を存分に発揮して頂き、学生たちの刺激に思っていたのですが…」

まあ、私もいい大人だ、学生相手に本気を出す気など元よりさらさら無い。

「構いません。元より、学生相手に本気を出すのは、危険なので。」

うっかり殺してしまつたらお話にならないからな。

「それでは、ハンデとして、武器の使用の禁止を。」  
「？」

それでは手加減にならないのだが？そもそも、銃とは手加減の道具だろうに。

「それでは、手加減にならないのでは？」

率直に申し上げてみる。

「なんと!!では、それでは、『エンブレム』で一度に3チームを相手に…」

「全員纏めてでお願いします。」

そのシミュレーションをしていたしな。

「…本当に宜しいのですか？学生といえど、Sランクの生徒だって数人、それ以外も全国の選りすぐりの女子武偵ですよ。」

「それくらいの方が面白いでしょう。」

さて、加減を誤らぬよう気を付けねばな。

「…ではそれで。時間まで、お待ち頂きます。」

「了解です。」

さて、準備運動でもするか。

アカン：頭が痛い。二日酔いやな。

目覚めると同時に襲ってくる頭痛。慣れたもので、寝起きの頭でも二日酔いだと直ぐに分かる。

「迎え酒…」

手っ取り早い二日酔いの治し方。それは迎え酒。あつという間に二日酔いとおさらばや。

「お、まだ入つとつたな。」

無数に転がる酒瓶の中から、まだ中身が残っている酒瓶を見つけ出し、中身を煽る。

「復活やで。」

やはりこれに限るなあ。二日酔いが一発で治りよる。

「なんか、とんでもなく恐ろしいことを忘れとる気がする…」

二日酔いから解放され、回るようになった頭がなにかを思い出そうと働き始める。

「まあ、香港無敵の武偵のウチが恐れることなんぞあらへんわな。」

そう豪快に笑いながら、2口目を煽る。

「香港無敵の武偵か…」

後ろから聞こえる声に、壊れたブリキのおもちやの様に、ギギギとぎこちなく、ゆっくりと振り向く。そうや、忘れとつたんちやう、忘れようとしとつたんや…

「あ、姐御…お早いお付きで…」

錆び付いたロボットの様にぎこちなく口角を上げて、挨拶してみるのが、笑みは引き攣ってしまふ。

「蘭、生徒の引率ご苦労。まあ、それはいい。…やはり、お前が香港無敵の武偵だったか。」

「いや、あの…」

ああ、終わった…殺される…グツと強く目を閉じてその時を待つ。もう、逃げおおせるとは思えなかった。それならば、潔く…あれ、何

もせえへんな。そういや、やはりって言いよったし、知つとつたん…？

「あのお、姐御…気付いとつたんですか？」

「あの後、様々な地で最強や無敵の武偵だの傭兵だの名乗る者たちと手合わせしたが、蘭と同等か弱い者ばかりだった。そこでなんとなく、負けて言い出せなかつたのだと気付いた。」

いや、殺されるから言えへんやつただけです。…いや、そんな最強名乗る奴おるんかい!! 地元最強名乗る暴走族かい!!

「そ、そうなんです!! いや、ホンマ申し訳ありまへん。なかなか言い出しにくくて…」

しかし、分かった。大勢のご当地最強さんたちの尊い犠牲によって、ウチは生き残つたんや。ありがとう、ご当地最強さんたち。

「そうだな、あの時言い出されていたら、問答無用で殴っていたが、私も経験を積み、最強や無敵を名乗る者はさして強くないと分かつたからな。真の実力者はその力を隠すのだな。いい勉強になった。」

ああ、やつぱりあの時逃げとらんやつたら、死んどつたんか…ホンマありがとう、ご当地最強さんたち。暴走族みたいや、とか思つてごめんな…

「それで、ご用件は…？」

「学生相手に、どの程度の手下加減が必要だろうか？正直、学生の強さが分からぬ。以前軽く指導した神崎が平均と見てよいのか？」

神崎って、神崎・H・アリアのことやろな。峰と神崎は遠山と同じチームやったし、あのチームは全員姐御の知り合いと見てええな。

「いや、神崎とあいつのチームのメンバー、峰、星伽、レキ。この4人が全国の学生の中でもトップクラスの実力です。基本的にそれ以下と思つてもらえれば…」

「成程、となれば、どこまで加減するか…蘭、助かった。また後で。」

「は、はい!!」

姐御が去っていく。その後、一気に襲い掛かる脱力感。…生き残つたんや…

「遠山特別顧問、ここにいらっしゃいましたか。」

蘭のいた部屋から出ると、尾張守殿から声を掛けられる。

「すまん、探しておったか…ん？その格好は…」

尾張守殿の恰好に目を疑う。カナが言っておったのはこれか…

『教』『育』『者』の文字がそれぞれ刻まれた札の様なもので、局部のみを隠すという斬新な格好の尾張守殿。教育者としてその格好はど  
うなのだろうか？女子校だからよいのか？まあいい。

「ナゴジヨでは衣服の面積が小さい程、強さの証です。教官として生徒よりも露出を多くせねば示しがつきませんので。」

「成程…私もそうした方がよいのだろうか？」

郷に入りては郷に従えと言うし、私もその風習に従うべきなのだろうか？

「そう思い、用意してきました。こちらにお着替え下さい。」

差し出される紙袋、中身は下着…いや水着か？

「防弾繊維の水着です。あと、『エンブレム』です。これを身体のどこかに貼って下さい。」

『エンブレム』という競技の説明を序に受ける。要は身体に貼り付けたシールを取られたら負けらしい。とりあえず空き教室で着替えを済ませる。面積の小さい水着を着け、右の脇腹に『エンブレム』を貼り、教室を出る。

「これでいいか？」

「ええ、素晴らしいです。生徒たちも感服することでしょう。しかし、見事な…」

尾張守殿が私の腹部を見つめる。なにか付いてるのか？

「失礼いたしました。では、そろそろ生徒も集まってきた頃でしょう。グラウンドまで参りましょう。」

「了解した。」



研修初日の夜、宿泊用に開放された複数の教室、そのひとつに私たちバスカービルも入った。各校の生徒たちが情報交換を兼ね親睦を深める中、私たちはその輪に入らず、隅に集まっていた。

「それで、なにか善い案は浮かんだかしら？」

そう、明日の対策、もとい、生き残る為に来ること、そのアイディア発表会だ。

「もう、素直に特攻かまして、意識を刈り取ってもらうのが一番いいと思うよー。」

と、理子。実質、なにも思いつかないということだろう。

「どの様な対戦形式になるかによります…」

「レキユの言う通りだねー。正直、総掛かりで攻めても、一瞬で返り討ちでしょ？」

かなこさんの移動速度とパワー、それだけで十分にここにいる生徒全員をあつという間に蹂躪される。

「如何に動けなくするか、ね…」

勝ちの道筋としては、まずあの異常な速度と、陸海空関係なく移動できる強みを消すしかない。

「仮に、足止め出来たとして、狙撃が有効なの？」

恐らく、この場で一番かなこさんについて知っているであろう、白雪に話を振る。

「…逆に効くと思う？」

研修が決まって以来、メンバーの中で一番テンションが低くなった白雪が呪詛を吐く様に言う。

「なんか、ごめん…」

あまりにも悲痛な姿に、思わず謝罪してしまう。

「レキはどう思うのかしら？」

「勝算はゼロに限りなく近いかと…」

レキの見解を聞き、皆がため息をつく。

「そうだ!!キーくんに聞いてみよー。」

理子がスマホを取り出し、キンジに電話をしようとする。

「待ちなさいよっ!!それなら私がするわっ!!」

「えー、なんでー!!キーくんはアリアよりも理子の方が喜ぶと思うけどお。」

「聞き捨てなりません!!泥棒猫ども!!ここは正妻である私が!!」

「私が適任かと…」

ピタツ、と一瞬の静寂、ガチャツ、と武器を構え、張りつめた空気が漂う。

「おー、喧嘩はやめえや。それよか、パワ〇ロやろ。ウチ、本体ごと持ってきたんやで。」

「あんだ、大阪の…」

御幣島だったわね。なんで野球のユニホームなの…?

「せんぱーい。2003年と2005年しか持って来てないんすかー?」

テレビに繋がれたゲーム機の前で、後輩らしきボーイッシュな少女がバックを漁りながらそう言う。

「せや、阪神優勝の年だけや。1985年版出らへんかなあ…」

「2005年は、縁起悪いんで2003年でいいすかーあ。」

「せやな、2005年はな…」

何故かお葬式のような雰囲気になる御幣島。

「悪いけど、遊んでいる余裕はないわ。明日の準備がまだなのよ。」

そう、生き残りがかかっているのよ。

「せやったら、喧嘩しとる場合ちゃうやろ。てか、明日の準備って、武偵庁のなんとか顧問はんが来るやつやろ。なに準備すんねん?」

知らないって幸せなのね。

「直に分かるわよ。嫌でもね。」

「なんや、教えてくれへんの。」

どうせ明日分かることかと思ひ、

「死なない為の準備よ。あんだがどの程度の力を見積もってるか知ら

ないけど、想像の数千倍以上と思っておいた方がいいわよ。」

「知り合いなんか…?」

御幣島のふざけた雰囲気霧散し、一流の武偵の空気を纏う。こいつ、出来るわね…

「私の義姉様、つまり私の旦那様のお姉様です。」

白雪がズイツと前に出てくる。

「はあーっ!?何デマ言ってるのよッ!!風穴空けるわよ!!」

「雪ちゃん何言ってるの?キーくんは理子の旦那さんだよおー。」

「……………」

無言でドラグノフを構えるレキ。

「あんたら、ホンマにそのチームワークで大丈夫なんか…」

御幣島の真剣モードが解除され、呆れた様に呟く。

「ねえねえ、キーくん、キーくんがかなこさんと戦うことになったら、どうする?」

結局、スマホをスピーカーにし、4人でそれを囲む様に座り、キンジに連絡を取ることになった。

「え、普通に開始と同時に全力の土下座だけど。」

情けない回答が、スマホから響く。

「情けないわね。バカキンジ!!どうやったら勝てるか聞いているのよ!!」

「いや、無茶言うなよ。戦闘態勢に入った姉さんと戦うくらいなら、イ・ウーのメンバーを全員一斉に相手する方が、はるかにマシだ!!」

流石にそこまで…と思うが、そのキンジの回答に、無言で力強く頷いている白雪を見ると、あながち間違いじゃないのかも…と思ってしまう。

「ところで、白雪もそっちにいるのか?参ったな、姉さんから渡せと頼まれてたのに…」

「キンちゃん!!やっぱり私が必要なんだね!!」

ちよつと、なんでそうなるのよ!!

「いや、まあ、用事が済んだら、取りに来てくれたら構わんから。」  
キンジが引き気味に答える。

「待つててキンちゃん、必ず行くから!!」

そう高らかに宣言し、通話を終了させる白雪。

「ちよつと!!なんで切るのよ!!」

「やるべき事が決まったからだよ。待つててキンちゃん、直ぐ行くからね!!」

逃げ出そうとする白雪を理子とふたりで押さえつける。

「あんただけ逃げようたって、そうはいかないわよ!!」

「死ぬなら、皆一緒がいいよねえー。」

「いやあああ、キンちゃんの所に行くーっ!…キユウ…」

押さえつけた白雪に、レキの容赦ない銃床アタックが決まり、落ちた。

「こうなったら、ぶっつけ本番で行くしかないわ!!」

「まあ、いい経験になるんじゃない?」

「……………」

武装の確認して、寝る。明日は明日の風が吹く、ケセラセラよ!!

|||||

—遠山金虎視点—

「遠山特別顧問、お願い致します。」

グラウンドに集結した、全国の武偵高の女子生徒たちが立ち並ぶ様を眺めていると、マイクによって拡声されたナゴジヨの校長の声が聞こえる。出番のようだな。

「紹介に預かった、遠山金虎だ。」

生徒たちの死角から校長の立つ朝礼台の前に立ち、そう言う。

「なんと勇敢な…」

丈の短い制服を纏った生徒たちからそんな声上がる。成程、この格好は正解だったな。郷に入りては郷に従えというが、正しくそう通りだと言えるだろう。尾張守殿に感謝だな。

「遠山特別顧問との実技研修ですが、『エンブレム』を行います。全員

で顧問の『エンブレム』を奪いなさい。それが勝利条件です。ハンデとして、顧問は武器の使用しません。」

その言葉を聞き、分かりやすい様に、右の脇腹に貼った『エンブレム』を軽く叩いて見せる。

しかし、その条件だと、実につまらぬな。蘭が言っていたが、神崎が恐らく生徒たちの中で一番の実力者となれば、数秒でケリがついてしまうな。

「物足りぬな、そうだ、こうしよう。」

生徒たちの中心部まで移動すると、生徒たちは私の姿を捉えることが出来ず、ざわついている。

「やはり、この程度の速度も目で追えぬとなれば、話にならない。なので、こうしよう。」

肩幅よりも少し広く足を開き、左脚を軸にぐるんと回転する。砂埃が舞い上がるが、仕方ないだろう。

「よし、こんなものでいいだろう。」

想像通り、グラウンドに、私を中心に半径1・5 m程の溝が刻まれる。

「追加条件だ。この円から私が出でたら、お前たちの勝ちとしよう。」  
多少ましな戦いが出来るだろう。

生徒たちがざわめき立つ。

「遠山顧問：流石に生徒たちを見くびり過ぎなのでは…」

校長が怪訝そうな視線を送りながら、そう言う。

「いや、もうちよいいハンデ与えないかんのちやいます?」

蘭の言葉に、

「安心しろ、本気など出すわけがなからう。」

未来ある若人たちをうっかり殺してしまうわけにはいかぬからな。しかし、蘭以外の教員たちからの視線に敵意を感じるな。私なりに配慮したのだが、まずかったのだろうか?

「…分かりました。それではその条件で始めましょう。」

校長がそう言って、上空に向けて拳銃の引き金を引く。その音と同時に始まった。

まあ、とりあえず、こいつらを振るいにかけるか、これに対処できねば、話にならないからな。

生徒たちが銃を抜くよりも早く、大地に拳を打ち込んだ。

|||||

—御幣島あびこ視点—

実技研修開始の合図、その音と同時に生徒たちが一斉に遠山特別顧問とやらの襲い掛かろうとする。開始の前から、生徒たちはピリピリと殺気が漏れとる。まあ、あんだだけ挑発されたらなあ：確かにぶっ潰そうと思う気持ちは分かる。明らかにウチらは舐められとるからな。せやけど、あの神崎が恐れる程の相手らしいし、あの余裕、様子を見るべきやな。

「いずみ、一旦退くで!!」

決断を下し、叫んだのと同時やった、大地が震え、グラウンドが隆起する。その衝撃でバランスを崩し、ドミノの様に突っ込んでいた生徒たちが転倒している。

：バケモンやんか!!今のをパンチ一発で起こしたんか!?!神崎の言つとつた通り、想像の数千倍以上。いや、それ以上を想定せなホンマに死ぬで!!

「お前ら、無事かつ!!」

「いや、なんなん!?!アレ!?!おかしいやろっ!?!」

流石、はるかやな。ウチと違って、事前の情報も無く、テンパりながらも、ウチよりも迅速に動いとるところか、つるみを抱えて退避しとる。実力だけなら余裕でSランクやのに、武器がアレでAランクになつとるけど、ポテンシャルだけやったら、神崎にも負けへん。

「先輩、どないしましたよう!?!」

なんとか退避出来たはずみが叫ぶ。

「どないするかやと?そんなん分かるかい!!あんなん反則や!!」

あの破壊力、あの拳の射程圏内に入ったら、間違いない死ぬ。それだけは避けなアカン。

「ほな、様子見といこか。」

宙に浮かぶ、タイソン君2号に乗り込んでいるひら姉さんの声、その通りやな、如何せん雑魚が多過ぎるで、手を打とうにも邪魔やな。

「戦略的撤退や!! つるみ!! 頼むで!!」

そう告げ、安全圏まで下がる。プライドとかあらへん、ここはそんなん捨ててでも下がらな死ぬ。

|||||

—神崎・H・アリア視点—

「紹介に預かった、遠山金虎だ。」

そんなセリフで登場したかなこさんの姿に啞然とする。面積の小さなビキニを身に纏い、私が、あかりの戦妹試験で使用したものと同じ『エンブレム』を右脇腹につけている。何よりも目が向かうのはその見事に割れた腹筋、完璧なシックスパックに、白雪やりサよりも大きな胸、スラリと伸びた脚、肉体美というものを見せつけんばかりの登場だった。

「うひゃーっ、凄いねえ…」

理子でさえ思わず声を漏らす程の訳の分からない登場、そして、あの人の力を知らない人間からしたら、挑発行為としか取れない発言と行動の数々、生徒たちでなく、校長や教員たちでさえ殺気立っている。いや、なんで教員たちがかなこさんの実力を知らないの?! それを把握せずに呼んだの?! バカじゃないの!?

そして、開始と同時に放たれた拳の一撃で、大地が揺れる。そんな出鱈目を想像出来る私たちは、全力をもって回避し、事なきを得る。

「かなこ様、戦力を振るいにかきましたね…」

最初の一撃を見て、白雪が言葉を漏らす。その通りだろう。あれを回避出来ないなら、そもそもあの人と相対など不可能なのだ。

「足手まといが減るまで、下がるわよ!!」

バスカービルとしての判断はそれだった。かなこさんが他と対峙

している間に、時折攻撃を加えつつ、態勢を整え、対策を立てる。それしかないのだ。無言で、狙撃ポイントを取りに走るレキを横目に見ながら、状況を見極める。

今ので、3分の1は減ったわね。最初の一撃で戦意喪失した者の数がそんな所だ。そしてそれ以外の3分の1が恐怖と混乱で半狂乱に発砲を繰り返す。

バンバンと銃声は響き渡るが、その弾丸たちは、悉く撃ち落とされるか、掴まれるかのどちらかだ。そして、かなこさんは、掴んだ弾丸を親指で弾き、生徒たちに当て、無力化していく。そんな光景を見ていると、対策とか作戦だとかが無意味に感じる。

「いやあ、チートだねえー。」

理子の言葉に全面的に同意する。残存戦力を見れば、最初の一撃を退避した者たちだけだ。あの一瞬で危険を察知し、退避したところを見るに、恐らく各校のEース級だろう。

「!?あかり!!」

そんなかなこさんに近づこうと、駆け出す後輩の姿に思わず声が漏れた。

|||||

— 間宮あかり視点 —

各校の生徒たちだけでなく、仲間たちまでも倒れていく。本物のバケモノ、アリア先輩たちがあの人から、私たちを遠ざけようとした意味を理解する。好奇心でつついていい相手ではない。そんなことをしていたら、全滅は必至だっただろう。

絶望的な力量の差。そんな中でただひとつ、勝機がある。そう、『エンブレム』という競技であるということだ。鳶穿なら：アリア先輩との『エンブレム』でもそうやって奪い取った…

だけど、私の鳶穿はカウンター技、もし失敗した場合、あの拳が突き刺さるということ。大地を割る一撃、多分死ぬだろう。それに、弾



丸を容易に掴む動体視力、見切られるのではないか。そんな不安もあるし、何よりも素の実力差、無理だろう。だけど、アリア先輩に言われた言葉を思い出す。

「あたしにはキラいな言葉が3つあるわ…『ムリ』『疲れた』『面倒くさい』人間の持つ無限の可能性を自ら押し留める良くない言葉。」

そう、無理だと言って、可能性を消すのは違う!! あの人に向かって駆け出す。

「!? あかり!!」

アリア先輩の声が聞こえる。きっと止めてくれているのだろう。だけど、この足は止めない。

「反撃の技か? いいだろう、来るがいい!!」

遠山顧問の声、分かりやすく拳を繰り出してくれる。ああ、この人、私たちに指導してくれているんだと分かる。最初の一撃で、私たちの心を折りに来たのかと思っただけど、違う。私たちの可能性を見ている。だからわざと私に鳶穿を打たせようとしている。

胸を借りる思いで、伸びた左腕をぐり抜け、鳶穿を仕掛ける。いや、仕掛けようとした。

「半筒取り…いや、少し違うな。お前、間宮か?」

鳶穿を放つ前に、ぷらんと襟を掴まれていた。両の腕に走る痛みで分かる。一瞬で腕を叩き、鳶穿の動きを止め、私を掴んだのだ。反応さえ出来ない速度だ。

「間宮あかりです。」

「そうか、先祖が世話になった。しかし、鍛錬が足らんぞ!!」

くんつ、と一瞬だけ首に衝撃が走る。襟を掴んだまま、腕を野球のピッチャーの様に振りぬいたのだ。周りの景色が流れていき、グラウンドの端にある、木にぶつかる。

ガサガサと枝と葉にぶつかり、止まる。

そのまま、地面に落ちる。ドサリと倒れる。なんで、人間を投げられるの…

|||||

昨日指導した東京の2年生、確か間宮やったけ？が投げ飛ばされた。スピードガンで速度を測ってみると、170km/h。人間放り投げてあれっちゆうことは、

「おいおい、マジか!!ありや、シーズン20勝は余裕やな。」

「いや、受けれるキャッチャーがおりませんよ。」

そんなことをいずみと言いながら、危険を察知し、横方向に飛び退く。

「うわっ!!」「?やろ!!」

衝撃波が防弾制服の袖を掠める。グラウンドの中心に立つ顧問を見れば、正拳突き構え。今のがパンチかいな。ハンデで武器を使用しない?ハンデになつたらんやんか!!むしろ武器つかう方がハンデやんか。

「武器無しの方が強いでしょ!!あの人!!」

いずみも同じことを考えていた様やな。

「ホンマやで、セガールかと思つたわ!!」

冗談言つとる場合じゃないのは分かるが、こうやって軽口たたいておらんと、精神持つてかれるわな。

「あびこっ!!いずみ!!いくで!!」

はるかの声、それだけで分かる。長年積み上げてきた腐れ縁故の連携、チームワーク。

背負っていたバックから硬球を取り出す。

「地獄の千本ノックや!!」

硬球をノックすると同時に、いずみとはるかが発砲する。ひらパー姉さんも動いとるし、つるみも逃げておらん。いつも通り完璧な連携やな。

いつもと違う点があるとすれば、相手に対して全く有効打になつたらんことやな。弾丸を掴んだり殴って撃ち落とすだけでなく、硬球はご丁寧に蹴つてこちらに打ち返してくる。試しにその球を打ち返してみるが、その衝撃で手が痺れる。

「ひらパー姉さん!!」

「了解。」

タイソン君2号が顧問の頭上から拳を振り下ろす。後輩の指導で使った時とは違う、本物の鋼鉄の拳。

ガンツ!という音が響き、タイソン君2号の左腕が破壊される。しかも、顧問は、その間、タイソン君2号を殴った右腕とは逆の腕、つまり左腕だけでウチらの攻撃を軽く払う。

まいったで、どないしよう。キレたオカンよりも、怖いんやけど…

## 反撃と決着

―神崎・H・アリア視点―

大阪組が動き出したことで、各校のチームも様子見を終え、動きが見え始める。

「私たちも続くわよー！」

正直、勝ち目があるなど思えないが、各校の精鋭が立ち向かっているこの時がチャンスだろう。

理子と白雪も獲物を構え、覚悟を決めたようだ。

「レキ、任せたわよ。」

インカムでレキに言葉を送る。あかりがかつて、私との『エンブレム』でそれを奪い取った技が破られた今、最も勝率の高い方法は狙撃しかない。近・中距離での勝ち目は無い。ならば出来る限り意識を引き付けて、回避不可能な状況を作るしかない。

バリバリと両手に握ったガバメントの弾倉が尽きるまで撃ち続け、エマーゼンシーリロードを繰り返す。弾を打ち尽くした生徒たちが、複数での接近戦に持ち込むが、それこそ虫を払う様にあらわれ、吹っ飛んでいく。曾御爺様の条理予知を超える純粋な動体視力と、一撃で決着をつける火力、時間を稼ぐことすら不可能に近い。

「いやあ、笑えないねえ。マジでチートだよ。あんなのと一緒に過ごしているんだから、そりゃあ、キークンも人間やめてる訳だよ。」

「ほんと、笑えないわよ。バカキンジは偶に人間やめたことをするけど。かなこさんの場合、常時それを超えた動きしてるのよ、去年の1年間で、超常現象起こす連中には慣れていたつもりだったけど、そんな驕りが吹っ飛んだわ。」

去年戦った、イ・ウーや極東戦役での超人や怪物との戦いで、ビツクリ人間や生物には慣れた気でいたけど、今対峙している相手は、規格外過ぎる。ブラドの様に、不死身に見えても弱点があるならば、勝ち目はある。しかし、弱点が分からないし、見当たらない場合に、どうすればいいのか。

「いやあ、正直、敵じゃなくてホントに良かったよ。」

「激しく同意するわ。」

仮に極東戦役なんかで敵として対峙していたなら、バスカービルどころか、師団<sup>ディレクション</sup>が全滅していただろう。まあ、強者を求めるあの人なら、中立で両勢力潰すんだらうけど。

「参ります!!」

白雪が日本刀を構え、突撃する。無謀な攻撃だが、レキの狙撃のタイミングを作る為に必要な犠牲なのだ。

「かなこ様、いえ、義姉様、お覚悟!!」

白雪の振り下ろした白刃は、左手の人差し指と中指で挟まれる。

「ナイスファイトや、巫女のねえさん!!」

その隙を見逃さず、大阪組のバットとボールが振り抜かれる。それで終わらせない。私と理子、それに大阪組の2年生が引き金を引き続ける。

恐らく、特攻を仕掛けた3人はここでK.Oだろう。タイミングは今しかない。

「私は一発の銃弾―」

インカムから聴こえるレキの呟き。左手で白雪、右手で大阪の2人の武器を抑えながら、右足だけで私たちの弾丸を捌き続けていたかなこさんへの狙撃、小さな円の中から出来ない以上、回避は出来ない。ペツ、と唾を吐く様に口から何かを地面に出す。7.62x54mm R弾、レキの放った銃弾だ。

「良い連携だな。なかなか楽しめた。」

その言葉と同時に、白雪と大阪の2人が弾き飛ばされる。いつでもそうすることが出来たと言わんばかりに。それによって、私の勝機は尽きた。最初の宣言通り、手加減に手加減を重ねているのだと痛感させられ、心が折られる。

私たちの作戦にわざと乗り、全てを出し切らせ、力の差を見せつける。正しく横綱相撲、生物としての格の違い、それが鮮明に理解させられる。

ひとり、またひとりと、碌に抵抗も回避も出来ずに拳圧によって飛

ばされる衝撃波に倒れていく。

|||||

—おわりのかみむやみ尾張守無夜美視点—

これは何が起こっているのか。

大地が割られ、拳を振るう度に起こる衝撃波、生徒たちが構え、放つ銃など、無意味と言わんばかりに弾丸を撃ち落とし、即興であることを考慮すれば、完璧と称賛出来る連携も無情にも圧倒的な個の力で無効化された。

初めて遠山特別顧問の話を校長に聞かされた時、感動と憧れを抱いた。身体能力や腕力が必要とされる武偵の世界で、頂点に立った女性。ナゴジョで教育者をする身としては、憧れない理由などなかった。その一方で少し嫉妬もあつた、如何に努力を重ねようと、ランキングの末端にさえ名を刻まぬ教え子がいること、そして、その頂きへと至れないことを分かってしまった自分自身の複雑な感情がそうさせていた。

しかし、名古屋駅で初めて姿を見て、それ程の人物なのか疑ってしまった。第一印象は、頂きに立つ者とは思えない程、普通の武偵。容姿からして、CVRだと言われても、なんの疑問も抱かなかつただろう。

だが、私が渡した衣装に着替えた時、その肉体を見て、その疑問が払拭された。見事に割れた腹筋に、女性としての柔らかさを残すしなやかな筋肉。野生の肉食動物の様に、獲物を狩る為の体。その美しさに思わず見とれる程だった。

「安心しろ、本気など出すわけがなからう。」

そんな尊敬や憧れという柱が崩れ落ちていくのを感じた。圧倒的不利な条件を次々と定める、最後に言い放った言葉がこれだ。それが生徒たちを本気にさせる為の、意図的な挑発だとしても、この研修への招集が掛かる程の実力を身につける為に努力を重ねてきた生徒たちへの冒瀆、そのように感じてしまい、教育者として、彼女に敵意の

目を向ける。

それは、私だけでなく、校長や、ただひとり、ハンデが足りないと言った蘭豹教諭を除いた教員たちも同じだった。

この場にいる教員たちが言葉を失っている中、

「言うたやん、ハンデが足りひんて。」

蘭豹教諭がそう呟く。彼女が何故彼女を知っていたのか、それは分からないが、この圧倒的な戦況を予測していたのだろう。

「…どの程度のハンデが必要だど？」

思わず、そんな疑問が漏れていた。

「姐御とやり合うなら、両手両足使用禁止でも勝てる気せえへんわ。でも、ええ経験になったんとちやいます？世界にや上の上、そのまた上がおるって分かったやし、そんな奴と会った時どないすりやええか：逃げの一択、それが生き残る為の最善策や。ホンマええ教訓やで。天狗になって殉職する前に知れてな。」

死地をくぐり抜けてきた教員たちには、心に響く言葉だった。

勇敢さや、諦めないという精神、それは素晴らしいものだし、評価されて然るべきだとは思う。しかし、そんな立派な精神論も、圧倒的強者と相対した際に有効なのか？それは否だ。それは、武偵や軍人、様々な前職の教員がいるが、全員が身をもって分かっている。

彼我の戦力差を見極め、戦いを避ける。これが戦いにおける最大の基本事項であり、絶対的で普遍的な事実である。しかし、自身のランクや評価、実力を過大に評価し、驕り、それによって戦力差を誤り、殉職する者たちも見てきた。真の一流とは、如何なる状況、戦況でも生きて帰ってくる者だ。敵を知り己を知れば百戦殆からず、簡単な様で、これを誤る者は多いし、後を絶たない。

そういう意味では、蘭豹教諭の言っていることは正論で、核心をついている。この研修に来るまで、武偵高という世界で上に立ち、慢心していた者もいただろう。それらを正し、世界の広さと、自身に向き合う機会となるかもしれない。しかし、一方で不安がある。

「生徒たちは立ち直れるでしょうか…」

圧倒的な力量差を見せつけられ、心が折れる者もいるだろう。

「そこで立ち直れんのなら、元から武偵なんぞ無理や、つちゅことでしよう。蹴落とされ、路頭に迷おうと、猫じゃらし食って生きて、這い上がろうとしとる、そういう奴が生き残る世界でしよう？武偵つちゅう世界は。」

そんな生徒を知っているという語り口で蘭豹教諭が言う。

「それに、まだ終わつとらん。姐御がまだ構えを解いとらんぞ。」

|||||

—間宮あかり視点—

「——りっ!!あかりっ!!」

私の名前を呼ぶ声で意識が戻る。そうか、私、投げられて、気を失っていたんだ。

「あかり、大丈夫か!？」

「ひかちゃん…」

ナゴジヨの制服を身に纏った従姉妹の姿、つばめやこまち、他の従姉妹たちの姿もある。

「寝てる場合じゃないぞ。アリアさんに頼まれた。あかりを連れてこいってさ。」

アリア先輩が？グラウンドの中央に目を向けると、未だに戦い続けている先輩の姿が見える。それだけじゃない、ボロボロになりながらも、何度も立ち上がり、食らいついていく他校の先輩たちの姿。その中には、昨日指導してくれた御幣島先輩たちもいる。

「正直、勝ち目は無い。だけど、『エンブレム』というルールなら、まだ可能性がある。」

「でも…」

完全に手加減された上、鳶穿を使わせて貰って、それでも無効化されて、この有様なんだ…

「ひとりじゃない、ボクたちも一緒に行く。」

従姉妹たちも頷く。

「間宮の力、見せてやろう!!」



ひかちやんの言葉に立ち上がった。

|||||

―神崎・H・アリア視点―

「どうする？キークンが言ってたみたいに、土下座する？」

なんとか軽口を叩く理子。言葉は軽いが、その表情や動きは、かなり追い込まれ、限界に近い様だ。

「そんな情けない選択肢はないわ!!」

そう返すが、私も限界に近い。なんせ、今立っているのは私たち2人だけなのだ。頼みのレキは右肩に衝撃波を受け、狙撃位置の変更と回復を待たなければならぬ。白雪は先程の一撃でまだ意識が戻っていない。

「っ!!」

横っ飛びして、飛来する衝撃波を躲す。ゴロゴロと地面を転がり、ガバメントの引き金を引く。何度もこんな事を繰り返し、制服だけでなく、顔にも砂がついている。しかし、それを払う暇も与えられない。

「六甲風に 颯爽と〜♪」

歌が聞こえてくる。

「すまん、遅おなったわ。」

ふらふらながらも、立ち上がった大阪組、それだけでなく、他校の生徒たちも立ち上がり始める。

「いつまで寝てるんだ、白雪。」

理子が白雪の耳元で金次の声を模写して呟くのが聞こえた。

「キンちゃん!!」

白雪も復活した。それも、元気一杯に。

「狙撃、何時でも可能です。」

インカムから聞こえるレキの声。諦めた者にはいなかった。

「アリア先輩!!」

「遅いわよ、あかり!!」

そして、私たちにとっての切り札も到着した。



キープし続ける。

遠山かなりさんと目が合う。一瞬だったけど、優しい目だった。まるで、年の離れた妹たちと遊んでいるかの様に。

「あかり!!」

アリア先輩の声、

「ひかちゃん!!みんな!!」

レキ先輩の狙撃、一斉の包囲攻撃、そして私たち間宮のとどめ。

「届く前に撃ち落とす、それは簡単だが、楽しくないだろう?」

気が付くと、両手を掴まれ、ぶら下がり健康器に掴まった様な格好になる。私以外の生徒、間宮のみんなも、一瞬で吹き飛ばされていた。

「一回目よりもいい動きだった。しかし…」

右手に突然触れる、銃の感触。

「相手に気付かれようと、奪える速さを身につけよ。」

右足のホルスターから、銃の重みがなくなっている。掴まれた手を、離された感覚は無かったのに…感覚さえ感じさせない速度で私の銃を抜き取った!?

「それに、反撃でしか放てぬのは改善した方がいいな。まあ、片手でも使えるという点では、半筒取りよりも使い勝手は良いが。」

何故かぶらりと宙吊りのままで話を聞かされる。しかし、完全に油断している。背後で地べたを這いながら、近づいているひかちゃんに気づいていない。

「こっちも間宮か?」

サッカーボールをリフティングする時に足の先で上げる様に足を動かすと、ひかちゃんの体が宙に浮き、左腕で拘束された。気がついたら、私は右手ひとつで両腕の手首を掴まれている。

宙吊りとなった私たちふたりは、必死に藻掻くが、少し手に力を込められるだけで、激痛が走り、抵抗する気力も、体力も瞬時に奪われる。

「鍛錬も、技術もまだまだ未熟、されど、良い目だ。」

見惚れる様な笑顔でそう言う。その一言とその笑顔だけで、吸い込まれる様に引き込まれる。アリア先輩に初めて会ったあの時の様な

衝撃と、憧れ、尊敬が沸き起こる。

「私を―」

「もう一度立ち上がって見せよ。さすればもう一段、登れるやもしれぬ。」

私の言葉を遮り、そう言う。そして、その言葉と同時に、景色が高速で流れていく。さっきよりも速いんですけど!!

ボールの様に投げられながら思う。さっきの感情は一瞬の気の迷いだ。そう、一種のストックホルム症候群の様なもので、あの人はアリア先輩と違う。

アリア先輩がエベレストの頂きだとすれば、あの人は、大気圏を突破し、神の怒りに触れず、壊れなかったバベルの塔。それに、何よりも…

ついていける気がしないし、あの人を目指してはいけない。そう思う。多分、人間に戻れなくなる。

|||||

―神崎・H・アリア視点―

あかりとその従姉妹（ひかりだったかしら？）が投げ飛ばされていく様子が見える。

万策尽きた、それ以外の言葉がない。勝てる見込みが無くなった。こうなった以上、残された選択肢はふたつ。玉砕か、降伏か。

後者の選択、これが実戦、命が掛かった戦いだとすれば、それが正しいと私の直感が告げる。しかし、それは意地やプライドが邪魔をする。真っ先に『土下座』という選択肢が出せるキンジが羨ましくなるとは思わなかった。意地もプライドも捨て、生きて再起を図る。傍から見れば、無様で情けなく映るかもしれない。だけど、それが戦いという世界に身を置く上で、最も必要な覚悟かもしれない。

今回ばかりは意地もプライドも捨てて、素直に白旗を揚げようかしら。今あるのは、かなこさんの圧倒的な力への敬服と恐怖。不要な戦いと怪我のリスクは避けるべきだろう。

パアン、静まり返ったグラウンドに銃声が響く。

「良い心構えだ。峰…いや、理子と呼べと言っていたな。」

かなこさんが弾丸を掴み、そう言う。理子、あんたまだやるつもりなの!?

「くふふ、覚えててくれたんだあー。そうだよ、理子って呼ばないと。だって、遠山理子ですから。」

かなこさんへ向けて駆け出す理子

「はあーっ!!」

その発言に、私と白雪が、青筋を立てて叫ぶ、

「この泥棒猫、キンちゃんの正妻たる私を差し置いて、何を言ってるの!?!」

「キ、キンジは、私を選んだの!! 風穴開けるわよ!!」

ピリピリとした空気です3人が額をぶつけ合い、メンチを切る。そんな3人の間に着弾するレキの狙撃。

「ちよつと!!レキ!!なんのつもりよ!!」

インカム越しに叫ぶが、返答はなく、沈黙を貫くが、更にもう一発弾丸が飛来する。

そう、あんたも敵ってわけね…

「なんだ、金次の奴、随分と好かれておるな。金一の奴にも子が出来、遠山家も安泰だ。」

そんな修羅場を見て、ははは、と豪快に笑うかなこさん。

「また義妹が増えるな。それも4人とは…家族が増えることは良いことだ。お前たち、強い子を産むのだぞ。安心しろ、子は私が鍛えてやる。」

上機嫌で私たちの肩を叩くかなこさん。

「「あつ。」」

私たちの後ろに立つかなこさんを見て、私たちが声を漏らす。その声に、かなこさんが首を傾げ、私たちと同じところに視線を合わせる。「あ。」

かなこさんも自分の足元を見て、間抜けな声を漏らす。

円を出たら負け、自分で定めたルールを、自ら破り、そこに立つて

いた。

「しゅ、終了です!!」

暫しの沈黙の後、ナゴジヨの校長が声を響かせる。勝った、のかしら？正直これなら負けの方がいいんだけど…

|||||

—おわりのかみむやみ  
—尾張守無夜美視点—

勝った、いや、勝ったといっていいのだろうか？

「決まり手が痴情のもつれてなんやねん!!」

蘭豹教諭が隣で手を腹を抱えて笑っている。勝利を腕ぎ取った東京武偵高の生徒たちも、何とも言えない表情で佇んでいる。

「全く、情けない負け方をしてしまった。負けたというのに、湧き上がるものが何もないぞ。」

腹を抱えて笑う蘭豹教諭の背後から声が聞こえる。その声に、私たちを含めた教員たちが振り返る。

「しかし、なかなか将来有望な学生たちだな。蘭、あれはお前の教え子だったな。でかした。」

ポン、と蘭豹教諭の頭に手を置く遠山特別顧問。いつの間そこに：教員の誰一人にも気づかれず、一瞬で背後をとっている。何よりも衝撃を受けたのは、グラウンドの中心にいる姿を見ていたのに、その動きが何一つ見えなかったということだ。

「そうだった。狙撃手：レキだったな。あやつも新たな義妹となるのか。」

そう言っつて、姿が消える。新幹線よりも速く移動出来ると送迎した際言っつていたが、冗談ではなかったのか…

「ウチ、首繋がつとるか？」

蘭豹教諭が、青ざめた顔で苦しそうに、そう言っつてくる。青ざめた顔には、油汗が滲み出ている。

「ええ、繋がってますけど。」

当たり前のことを何故そんなに切羽詰まった様子で聞くのだろうか？理解に苦しむ。

「ほな、生きとるつちゆうことか…」

何度も遠山特別顧問に触られた頭と首を撫でながら、そう言う。

「生きてるって、ええなあ…」

彼女と遠山特別顧問の間に何があつたのだろうか？とても気になるが、恐ろしくて聞けなかった。

|||||

— 遠山金虎視点 —

「本日は遠い所から、ありがとうございます。」

名古屋武偵女子校の校長がそう言つて、私を見送る。名古屋駅までは、行きと同じ面子で車に乗る。

「遠山かなごさん。貴女は、何者なのですか？」

隣に座る斑鳩殿が、こちらを見ずにそう言った。

「分からぬ。それは他人が決めることだ。ただ、言えることは私は私だ。」

己が何者なのか、遠山という家に生まれ、遠山金又の長女、遠山金虎。それ以外の何があるというのか。

「貴女からは超能力ステルスの反応がありません。何故あれ程の力が…」

「知らん。獅堂殿と似たようなものかもしれないな。」

私は家族と髪の色も違えば、瞳の色も違う。血の繋がりを疑われたこともあつた。それでも家族は誰も私の存在を疑うことはなかった。ならば、それでいいのだ。

「では、率直に申し上げます。貴女は何を考えているのですか？」

ようやく、こちらに顔を向けてそう言う。

「私よりも強い者に会いたい。今はそれが一番か。…いや、最近家族が増えたのだ、弟や妹たちとのコミュニケーションを取らねばならんな。…どつちを優先すべきだろうか？」

「いや、私に聞かれなくても…」

それもそうか、しかし、考えるのは苦手だ。みすず当たりに聞いてみるか？金一に、いや、あの時はカナの姿だったか。まあ、それはいいか。あそこまで信頼されていないとは思っていなかった。割とシヨックだったな。ということは、先に優先すべきは弟や妹とのコミュニケーションだろうか？

そういえば、金一だけでなく、金次と金三まで女装しているのは驚いたな。しかも、カナに負けず劣らずというのは、なかなか悲しいことだ。遠山の男は女装が似合うのだろうか？

いや、弟たちが女装するのなら、私はそれを頭ごなしに否定せず、同じ立場に身を置き、同じ視点を得るのが家族として、姉として重要なことかもしれない。

「私も男装してみた方がいいのだろうか？」

「ですから、私に聞かれましても…でも、似合うとは思いませんよ。」

この場合は喜ぶべきなのだろうか？分からぬ。何やら難しくなってきた。仕方ない、やはり、みすずに相談するとしよう。

名古屋駅に着き、忘れる前に行こうと思いい立ち、新幹線には乗らず、みすずの元に駆け出した。



## 金虎（かねとら） 爆誕

— 狐崎みすず視点 —

「まず、聞きたいことがあるのだけど…」

「なんだ？」

眉間を指でトントンと叩きながら、目の前に座るバカに対して言葉を紡ぐ。

「なんでここに来るのよ。」

突然職場（私のデスク）にアポも、予兆すらなく現れたバカに頭を抱えたている。持ち前の異常に高い身体能力で受付もセキュリティも突破してきたらしい。当然、大騒ぎになったが、そんなことはどこ吹く風、平然と私を連れ去ろうとしたので、全力で止め、オフィスの端にある応接スペースに押し込んだのだった。

「相談と頼みたいことがあってな。」

悪びれる様子もなく、腕を組んだままそう言う。

「それが人に頼みごとをする態度かしら…まあ、かねだからそこは大目に見てあげるわ。それ以上に言いたいんだけど、あなた、なんで携帯使わないで突然来るのよ。それもわざわざ職場に。職場にくる意味が分からないし、仮に来たとしても受付で待ちなさいよ。なんで強行突破してくるのよ。」

「そうした方が早いからな。」

せつかちにしても程度というものがある。というよりただ、面倒くさかっただけでしょ。

「あなたが滅茶苦茶なのは今に始まったことじゃないけど、流石に社会人として、最低限の常識は持ち合わせていると思っていた私の考えが甘かったみたいね。」

苛立ちとかを通り越して、呆れや諦めといった感情が先にくる。

「名古屋から全力で走って来たのだ。そんなに言わずともいいだろう。」

「かなこの事情なんて知らないわよ。…待って、なんで名古屋…」

なんだか嫌な予感しかしない。

「名古屋の武偵高に呼ばれてな。少し指導してきた。」

かなこの回答に、頭を押さえる。また謎の信者が増えるわね。学生時代（中学生まで）もそうだったけど、この子が暴れると、基本的にドン引きか恐怖の二択なのだが、偶に異常なまでの信者が現れる。それがあの特殊な教育方針のナゴジョなら尚更だ。

「それで、わざわざお越し頂いたということは、何か急ぎの要件かしら？」

通じるとは思わないが、皮肉を織り交ぜて言う。

「うむ、男装を試してみようと思うのだが、どう思う？」

かなこが真剣な表情でそう言った。

「バカなの？…ごめんなさいバカだったわね。」

「人が真剣に考えて、それでも答えが出ぬから相談しているというのに、なんだその言い草は!!」

真剣に考えているなら尚更バカよ。溜息しか出てこない。

「かなこ、よく聞きなさい。」

「おお、流石みすずだ。もう答えがでたか。やはり相談して正解だった。」

前のめりになって話を聞こうとするバカに対する答えはひとつしかない。

「仕事中のよ、私。そんなバカな相談、聞いてる暇なんかあるわけないでしょ!!帰れ!!」

むしろ、ここまでバカに付き合ったことを褒めて欲しいくらいだ。私も大人になったわね。以前だったら来た時点で追い返してたわ。

「おい、なんで怒ってるんだ!?!待て、私の話は終わってないぞ!!」

「黙りなさい。なんで怒ってるかですって?普通、それが分かかってない時点で怒るわよ!!」

げしつ、と足蹴りし、追い出す。こんな下らないことで、貴重な時間を無駄に浪費したわ。

かなこを追い出し、自分のデスクに戻る。

「狐崎さん、今のは…」

仕事を再開しようとした私に話しかけてくる男性社員。

「あら、セクハラですか？ 弁護士なのにモラルの欠片もないんですね。」

PCのモニターから目を離さずにそう言うと、そそくさと逃げていく。これでいい、私に必要なものは、この手に戻ってきた。別の学校に進学し、ああやって相談に来ていた中学生の頃を思い出す。そう、あの頃のように、私だけを頼っていればそれでいい。突き放してもあの子は私の元に戻って来るし、私を待っている。

そう信じている。だから、一秒でも早く仕事を終わらせなければならぬ。8年という空白期間で私は変わったが、あの子は何ひとつ変わっていない。

「全く、世話が焼けるわね。」

無意識に小さな笑みが零れた。

|||||

— 遠山金虎視点 —

追い出されてしまったな。何故怒らせてしまったのだろう？…：そうか、名古屋土産を持って来ていなかったな。

そうと決まれば、一度名古屋駅に戻るとしよう。そういえば、名古屋武偵女子校の教員方に土産を持って行ってなかったな。先に東京駅で土産を買って向かうとしよう。

「斑鳩殿ではないか。まだ名古屋駅におったのだな。」

名古屋駅の土産売り場に斑鳩殿の姿を見つけ、声を掛ける。

「と、遠山さん…貴女こそまだおられたのですね。走って帰ると言われて戸惑いましたが、やはり、冗談だったのですね。」

「いや、帰ったぞ。名古屋の教員方に土産を忘れていたので、東京駅で買ってきた。」

そう言って東京バ○ナの入った袋を見せる。斑鳩殿が少し硬直し、

「すみませんが、購入した際のレシートはお持ちですか？」

「ああ、これか？」

ポケットにお釣りと一緒に突っ込んでいたレシートを渡す。

「…ありがとうございます。では、お気を付けて。」

レシートを返し、そう言う斑鳩殿。顔色が少し悪くなったが、大丈夫だろうか？

「体調が悪いのか？顔色が悪いぞ。」

「いえ、大丈夫ですので、お気遣いなく。」

本人が言うのなら、大丈夫だろう。では、私も行くとしよう。

「では、失礼する。」

—斑鳩視点—

遠山特別顧問が走って帰ると宣言し、別れた後、乗る予定だった新幹線が、新大阪―名古屋の間で武装集団によるジャックに遭い、ダイヤが乱れた。事件自体は問題なく解決されたが、車両の安全確認と点検で遅れてしまった。

仕方がないので、名古屋駅構内を散策しながら土産物店を眺めていた。

「斑鳩殿ではないか。まだ名古屋駅におったのだな。」

背後から掛けられる声、

「と、遠山さん…貴女こそまだおられたのですね。走って帰ると言われて戸惑いました。やはり、冗談だったのですね。」

走って帰るとか言っていたが、この人も新幹線の遅延でここで時間を潰していたのか。

「いや、帰ったぞ。名古屋の教員方に土産を忘れていたので、東京駅で買ってきた。」

掲げられる東京バナ○の紙袋。思考が一瞬止まる。いや、有り得ない。有り得てはいけない。そう、これは彼女なりのジョークなのだから。

う。

「すみませんが、購入した際のレシートはお持ちですか？」

しかし、一応の確認として聞いてみる。

「ああ、これか？」

ポケットから出されたしわくちゃのレシート、それを目を皿にして見る。日付：間違いなく今日だ。時間は…おかし、何故3分前の時間か…

「…ありがとうございます。では、お気を付けて。」

公安0課の獅堂や大門坊が彼女に怯え、関わるなど忠告していた理由の一端が見えた。それで十分理解出来る。彼女は人が踏み入れてはいけない領域にいる。理解しようとか、その力の源を探ろうなどと、やるだけ無駄、世界の理、それから外れ、高みにいる存在。これ以上の関わり合いは身を滅ぼす。

「体調が悪いのか？顔色が悪いぞ。」

「いえ、大丈夫ですので、お気遣いなく。」

彼女への無意識の恐怖が顔に出ってしまったのか、しかし、これ以上関わりたくない私は、そう答えた。

「では、失礼する。」

そう言つて、姿が一瞬で消える。超能力の反応や気配は無い。

直後、新幹線の運行再開のアナウンスが流れ、安堵の溜息と共に改札へと向かった。

— 遠山金虎視点 —

尾張守殿に土産を渡し、今ある用事は片付いた。

「しかし、暇になってしまったな。」

ようやく正午を回ったところ、みずずの仕事が終わるまでかなり時間が空いている。なにか時間を潰す必要がある。東海道新幹線の線路に沿ってを走ってみるか。とりあえず、新大阪まで行って、少し観

光してから東京に戻るってみるか。線路に沿って走れば、迷うこともないから安心だ。

新大阪、初めて来た私には、駅周辺は企業やホテルがひしめき、勤め人を中心とした街となっている様に感じる。

「大阪か…有名なものと言えばたこ焼きなどの粉ものだろうか？」

如何せん初めて来た場所、持ちうる知識はステレオタイプのものしかない。

「まあ、食い倒れの街と言うし、適当に食べ歩いてみるか。」

迷っても空から見ればいいし、もう少し飲食店が集まっている場所に行ってみるか。

心齋橋商店街と道頓堀、観光客で溢れる道を歩く。たこ焼きを食い、お好み焼きを食べ、串カツやイカ焼きというものも食べてみた。尽く酒に合う食べ物が多い。しかし、観光客が多いな。東京でも浅草や築地なんかは日本人よりも観光客の方が多いのではないかと思う程、外国語が飛び交っているが、ここも同じくらい観光客と地元の人間の両者による活気に溢れている。

それだけではない、あれだけ食べ歩きして尚、食欲を刺激する食べ物の香りや、食べ歩く人々の表情。どれもが旨そうなに見えてしまい、際限なく食べてしまいそうになってしまう。

「この街は誘惑が多過ぎる…」

建ち並ぶ飲食店、その全てに独特な個性があり、好奇心を刺激する。楽しい、楽しいが、これ以上はよろしくないと本能が訴えてくる。

時間は16時を過ぎたばかり。今から東京に戻っても後2、3時間程時間が余っている。どうしたものか…

そういえば、みすずへの土産をまだ買っていないかったな。またもう一度名古屋駅まで戻ってみるか。ついでに大阪土産も買って行こう。

|||||

— 狐崎みすず視点 —

しかし、突然何を思いついてしまったのか：仕事がキリのいいところまで終わり、一息つく為にコーヒを啜りながら、あのバカの謎の行動の要因を推測してみる。

突然の襲来、これは別に考え無しのあのバカなら、思い立ったからという理由でするだろう。むしろ、あの程度で済んだ辺り、マシと言える。あのバカの行動はいつだって常識から外れているから。

引つ掛かりがあるのは、男装、その脈絡の無い言葉。何故その結論に至ったのか、かなこの思考を読もうとすれば、頭が痛くなるし、最悪発狂しそうになる程度には理解出来る範疇を超えている(悪い意味で)。

「しかし、男装ねえ…」

変装として男装することは私もあるが、それは仕事であり、趣味ではない。そもそも変装を必要とする場合というのは、自身を偽る必要がある場合だ。潜入捜査や尾行、はたまた追跡の手から逃れる場合、様々な状況で使用出来る便利な技術ではあるが、かなこにそれが必要だとは思えない。

潜入、これはあのバカにはそもそも不可能だろう。尾行だって変装の必要が無い程気配を消して追跡出来る謎のスペックを誇るし、追手から逃げることもない。アレが何かに追われていたとしても、追手をぶん殴って終了だ。そうなると、なにかをきっかけに唐突に思いついたということだろう。

なんとなくだが分かってしまった。あのバカの弟はふたり揃って女装する。キンイチの方はあの子たちの母親が亡くなつてから始めている、女装のベテラン。キンジの方も、最近何か脅迫の材料はないか調べていたら、クロメートルという名で女装しているのを知り、キンジ脅迫リスト入りをしていたわね。

弟たちが女装しているから、自分もやろうと思った。恐らく、こんな下らない理由だろう。多分これが正解だと思う。

「適当に男物の服着せて終わりでもいい気がするわね。」

溜息をついて、仕事を再開した。

「先程は土産を忘れて悪かったな。」

仕事を終え、高千穂弁護士法人、その巨大なビルを出ると見計らった様に、かなこが姿を現し、そんなことを言う。怒った理由はそんなことではないが、今となってはどうでもいいわね。

「これ、大阪土産であるじゃない。」

外郎ういろうと556の豚まんを渡された。行ったのは名古屋じゃなかったかしら。

「暇だったのな。ついでに大阪まで行ってきた。」

「ところで、少しお土産の袋多過ぎない？」

私に渡した袋以外に、両手に5、6個ずつ袋を下げているかなこ。

「名古屋駅で名古屋女子武偵校の生徒たちに会ってな。よく分かんが、くれたのだ。昔、みずずの通っていた中学校に行った時も、よく物を貰ったが、あれも、何故私にくれるのか分からないまままで終わったってしまったな。」

かなこは昔から性別問わずモテる。勿論、かなこの残念な頭やハチャメチャっぷりを知ると、大抵の人間は離れていくのだが、如何せん、その見た目と天然のタラシの才能で被害者を多数世に送り出してきた。

なので、このバカを私の全力をもって男装させた場合、絶対に碌なことにならないだろう。別になこの被害者が増えようと、どうでもいいのだけれど、とばっちりを受けるのは御免蒙りたい。

「まあいいわ。家に帰る前に夕食を取って行くけど、構わないわよね。」

「肉がいいな。」

「何を食べたいかは聞いてないわよ。下らないことに付き合わされるんだから、今日はかなこの奢りでいいわよね。」

近場にある少しお高い焼肉店に入った。

「それで、出来るのか？」

焼肉を食べながら、かなこの男装について話していた。男装しようと思った経緯は私の推測で凡そ合っていたので、改めてそんなアホな理由で思い立ったのかと呆れた。

「二応これでも探偵科Sランクよ。変装くらい朝飯前よ。ただ、かな



このサイズに合う服がスーツしか無いわ。それに、私は明日も普通に仕事なんだけど。」

私が男に変装する際に使う服はスーツのみ。仕事柄、スーツ以外の格好をしても余り意味がないからだ。

「私はそれで構わぬが、そんなに時間が掛かるのか？」

やはり、何も考えてないみたいね。

「それじゃあ聞くけど、今から帰って男装したとして、寝るだけよ。まさかそのままの格好で数日過ごすわけにもいかないでしょう？」

風呂や睡眠、化粧を落とし、変装を解かなければならない場面が、日常生活を送っていれば必ず訪れる。勿論、すぐに変装し直せばいいのだが、その技術を持ち合わせていないかなこは、変装を解いたらそれで終了となるのだ。

「なんだと…」

絶望したかなこの表情、恐らくこのバカは、変装を半永久的に保てる都合のよいものだと思っていたのだろう。

「そこで質問なのだけれど、かなこがしたいのは男装であって変装ではないのよね？」

「そうだ。」

期待する眼差しをこちらに向けながら、若干身を乗り出してそう答えてくる。

「なら、ひとつ案があるわ。凄く簡単な方法よ。」

焼肉店を出た後、閉店間際の男性向けのアパレル店に入る。客もいなくなつた店内で閉店作業を始めていた店員たちが女ふたりで入店した私たちを怪訝な顔で見る。スーツ姿の女性ふたり組、仕事帰りに駆け込みで来たOLに見えなくもないが、そういう問題ではないのだろう。

「あのお、お客様、彼氏さんのプレゼントとかでしょうか…?」

店長の名札を付けた男が、探る様に声を掛けてくる。生憎、恋人など生まれてこの方いないわ。

「いえ、この子の服を探してるの。女物より男物の方が似合うし、サイズも丁度いいのよ。」

あたかも普段から男物を買っている様な口振りでそう告げる。店員よりも少し背が高いかなこを見て、納得したような表情で「ああ」と呟く。

「時間は掛けないわ。」

そう言つて店内を素早く見て周り、数着を選び会計をかなこにさせ、店を後にする。

「男物の服を着れば男装よ。簡単でしょう?」

言葉の意味としては間違っていない。

「そうだな。」

「今日はそれで我慢しなさい。明後日は休みだから、その時ちゃんと化粧もしてあげるから。」

一応焼肉を奢らせたからには頼まれたことはやる。休日以外対応出来ないのは勤め人なので、仕方がないのだ。

「明後日か、了解した。ところで着替えてみたいのだが、部屋を借りてもよいか?」

「まあ、そのくらいならいいわよ。着替えたらすぐに帰つてよ。何度も言うけど明日仕事なんだから。」

かなここと並んで家へと歩いて行く。

|||||

— G III 視点 —

面倒なことになりやがったな。

世界各地で紛争や抗争を解決する為に介入しているせいで、暗殺者を送り込まれることは日常茶飯事と言える程度には慣れたものだが、今回はいつもとは状況が違う。

数日前、アメリカの南部にある秘密基地を爆撃され、拠点を転々とするも、止むことの無い奇襲が続いている。

「マッシュ、敵さんの情報、何か分かったか?」

「恐らくペンタゴン米国防総省からの刺客の様だが、それ以外に分からない。僕

たちの知らない、新世代の人工天才の可能性がもあり得る。」

それだけでなく、敵は正体を掴ませない時点でかなりの実力がある。それに、的確な奇襲から、敵は複数という可能性もある。

「これ以上防戦を続けてもジリ貧だな。」

「君の言い分も分かる。しかし、相手の情報が何一つ無い以上、こちらから攻勢に出るのは余りにも無謀だ。」

どちらの言い分も理がある。この状況で仕掛けても戦果は期待出来ないどころか、甚大な被害を出す可能性が大いにあるが、このまま敵勢力の調査をしながら逃げ回っても、ジリ貧となり圧倒的に不利な状況での決戦を余儀なくされる。進むも地獄、退くも地獄とは正にこのことだ。

「日本に逃げるとというのが最善の策じゃないかな。」

「兄貴に加勢を頼むってことか?」

姉貴が表に出たお陰で兄貴のSDAランクが落ちてるし、ここらでひと暴れさせてランクを上げさせるつても面白れえが、ここまで俺たちを追い詰める相手だ、間違いなくその道中を狙い撃ちされるだろう。

「まあ、リスクは当然大きいが、敵を撃退ないし戦意喪失させる打開策としては一番だと思う。」

そう言うマッシュユの顔は曇っている。成功の見込みは無いに等しい表情が語っている。

「なら決まりだ。おめえら、兄の所に行け!! 敵は俺が引き付ける。」

殿は俺だ。今回の戦闘に大将首は無い。なら一番可能性が高い方法を選ぶ。

「サード様、無謀です!! 私も一緒に…」

九九藻がそう言うってくるが、

「けつ、舐めんじゃねえ。兄貴程ではねえが、俺も葬式とは無縁なんだよ。いいか、これは命令だ!! 兄貴を連れて来い!!」

俺の声に、部下たちはなかなか首を縦に振らない。それによって忠誠心を疑ったりはしない。敵が未知である以上、俺が必ず生存出来る保証は無い。俺の身を案じてのことだと分かる。だからこそ、尚更こ

いつらを死なせるわけにはいかない。

「俺が負けると―」

俺が負けると思ってるのか。そう言おうとした時だった。警報音が鳴り響く。

「マズい、侵入者だ。…どういうことだ!!映像にも映つらない!!」

マツシユの絶叫。高性能の監視カメラのどれにも姿形さえない。分かることは何か基地に侵入したという事実だけ。

どうする…姿が映らない以上、どこから奇襲を受けるか分からない上、迎撃しようにも対抗する術がない。考えろ、考えろ…

「なんだ?随分楽しそうだな。」

背後から聞こえてくる声、なんの策も思いつかないまま、本丸への侵入を許してしまった。

|||||

—狐崎みすず視点—

神様って残酷ね。

目の前に立つ、衣服を脱ぎ捨てたかなこを見て、つくづく実感させられる。

「ホント、なんで女を捨てたバかなこにこれを与えるのかしら。」

目の前にそびえる双丘を憎たらしく鷲掴みにし、そう言う。

「待て、私は女を捨てた覚えは無いぞ。」

「生まれてこの方、化粧ひとつせずに生きてきたあなたが言っても説得力が皆無だわ。」

その癖に身体だけは私の数十倍は女らしい。…腹筋を割ってるのはどっちになるのかしら?まあ、それを置いておいても憎たらしい程に育ったそれは、私を苛立たせるには十分だった。

「こんな感じでどうかしら?」

胸を潰し、男性らしく見える様に手を加えた姿がを鏡に写し、そう尋ねる。顔は少し男性的にする程度でほとんど化粧を施していない。素で男前かなこには下手な男装メイクは必要が無い。最大の難点

は腹立たしい程に育った巨大な胸を如何に無くすかであり、それを上手くやれば後はどうということはない。

「胸がキツイ…」

Bホルダーという胸を潰す為のインナーを用いて尚足りず、その上から更にさらに潰した胸だ。キツくて当然だろう。しかし、その成果もあり、どこからどう見ても長髪の男前にしか見えない。…また被害者が増えるわね。

「問題なければ、それで完了よ。」

鏡の前で、クルクルと己の姿を写しながらそれを眺めるかなこ。

「…胸を潰しただけではないか？」

そう、胸を潰した以外、驚くほど変わっていない。しかし、男装と言うならばこれで十分だ。

「あなたはそれで十分よ。疑問に思うなら街を少し歩いてみたら？」

きつと、黄色い視線を集めることになるわよ。

「みずずが言うのなら、間違いないのだろうか…」

謎の納得をし、軽く体を動かしている。

「胸がキツイ以外は問題ないな。それでは行って来る。」

どこへ？そんな質問をする間もなく、かなこの姿が消える。

…はしやぎすぎて、いつも以上に問題を起こさなければいいのだけ  
れど…

|||||

—遠山<sup>かなめ</sup>金女視点—

「えーっと、かなこお姉ちゃんだよね…？」

武偵高の寮の自室に突然現れた人物にそう尋ねる。

「そうだ。ん？男装しているから今はお兄ちゃんか？名前も変えた方がいいのだろうか？」

素っ頓狂なことを抜かす我らが遠山家の長女が言葉の通り男装して立っている。何故妹の部屋に無断で気配を消して侵入し、心臓が止まるかと思う程突然目の前に立つのかとか、いろいろと指摘したいが

何よりも、

「なんで男装？」

一番指摘すべきことはそれだと思う。元々背が高く、顔立ちも美人だけど男前なかなこお姉ちゃんに恐ろしく似合っているけど、全く意味が分からない。

「弟たちが全員女装しているだろう、ならば姉として弟たちの心情を理解する必要があると思っただけ。この姿の時は金虎かねとらと名乗ることにしよう。」

ダメだ、益々分からない。

「うん、似合ってると思うよ……」

どうしよう、とんでもなく疲れてきた。

「そうか、なら良かった。金女もしてみるか？」

「今は気分じゃないかなあ。」

とりあえず、今は頭を整理したいかな。

「次は金三の所にも行ってみるか。邪魔をしたな。」

嵐の様に現れ、嵐の様に去っていく。

早くこれにも慣れないとなあ……遠山家の一員と認められている。それは嬉しい。だけど、あの姉の破天荒っぷりに慣れるのは、私には遠山家としての経験がまだ足りていなかった。

## 疑念と真実

—GⅢ視点—

「なんだ？随分楽しそうだな。」

俺の背後からから聞こえる声に、部下たちが一斉に発砲する。誰もが未知の敵の侵入を許したことによる軽度のパニック状態だったのだろう。俺もすぐさま身体を回し、流星<sup>メテオ</sup>を放つ。

「元氣そうで何より。して、なんの催しだ？」

全ての弾丸を払落し、俺の流星を掌で受け止めながら、余裕綽々なその声の主。こんな事を息をするよりも簡単にこなす人間はひとりしかいねえ…いや、他にもいたらそれはそれで困るんだがな。

「姉貴か…」

侵入者の姿を見る。…なにか違和感がある。

「違う、今は兄貴だ。」

その言葉で、疑念は綺麗さっぱり無くなる。こんな頓珍漢ことを抜かす辺り、間違いねえ。姉貴だ。

「いきなり来やがって、驚いたじゃねえか。だがよお…」

驚いたし、とんでもない危機感も感じた。しかし、姉貴が現れたことで現状の全てがひっくり返る気がする。いや間違いなくひっくり返る。そんな確信を持てる程、戦力としての安心感がある。その為か、自然と笑みが浮かぶ。だが、ひとつ引掛かる部分がある。

「なんで男装してんだ？」

それが全く分からない。何故俺の居場所が分かったのかとか、何故セキュリティシステムを作動させずにここまで侵入出来たのかなんてことは、この姉貴なら出来て当然で、気にすることではない。しかし、何故男装してやって来たのか、それだけはさっぱりだ。

「少しでも弟たちの気持ちを知らうと思つてな。どうだ、似合ってるか？」

恐ろしく似合っているが、逆に、突然男装して現れた姉に対する弟の気持ち、というものも考えて欲しい。しかし、それを指摘してここ

ろで、何ひとつ改善せず、更に突拍子もないことをしてくる気がする為、ここは適当に流しておく。

「ああ、よく似ているぜ。ところで、姉貴はいつこっちに来たんだ？」  
ほとんど有り得ない話だが、仮に俺たちが姉にの訪問（襲撃）を謎の敵勢力による攻撃と錯覚し、逃げ回っていたという可能もゼロではない。

「今し方来たばかりだ。金三の気を探って来たが、何故ここは夜なのだ？私が出発した時は昼だったぞ。そんなに時間は掛かっていない筈だが？…うむ、数分だな。もしや時計が壊れてしまっているのか!？」

腕時計を見て、慌てている姉貴。まさか、時差を知らないのか…どこか来たのかは知らねえが、数分でここに辿り着くって、やっぱり兄貴の数千倍人間やめてるな。

「安心しろ。時計は壊れてねえ。」  
壊れているのは姉貴の頭だな。

「では何故突然夜になるのだ!？」

「それは今度教えてやる。それよりもひとつ頼みてえことがある。」

姉貴に時差の勉強をさせている暇はない。

「頼み事が…なんだ、何でも言ってみろ。」

頼もしい限りだ。

「今俺たちは正体不明の敵勢力に攻撃を受けてんだ。手伝ってくれるか?」

「そんなことか、任せておけ。…もしやあの時周辺に居た者たちか？  
金三の友人だと思っていたが、違うのか?」

基地の外に部下を置いてはいない。間違い、そいつらだな。

「ああ、そいつらだ。何人いた?」

「姿を確認したのは2人。それ以外にひとり潜んでいたな。私には気づいていなかった様だった。」

3人か…どう打って出る?いや、姉貴が来た以上、作戦なんか必要ねえな。

「よし、おめえら、最強の助<sup>姉</sup>つ<sup>貴</sup>人が来た。だったらここで無駄な時間を



これ以上過ごす必要はねえ!! 正面突破だ!!」

「正面突破か。いい言葉だ。私が全員相手してもよいが…お前はもう少ししたい?」

「売られた喧嘩を全部姉貴に丸投げする気はねえさ。」

随分と男心が分かつてるな。兄貴が言ってたな、『姉貴は遠山家で一番? 漢らしい』って。違いねえな。

「ではふたりは私が相手する。後はお前たち…遠山の者に喧嘩を売ったことを後悔させてやれ。」

「言われなくともそうするつもりだ。」

行動を開始する前に姉貴にインカムを渡す。

「一応渡しておくぜ。離れて行動する以上万が一もあり得る。使い方は—」

インカムの使い方を説明する。説明と言っても、簡易なインカムなので、ボタンを押しながら話すだけだ。

「簡単だろ。」

「そうだな、力加減を間違わねばな。」

何故握りつぶすのが前提なんだ? まあいい、姉貴に万が一が起こる相手なら、俺たちは全滅必至。ここで尽きる命運だったってことだ。ただ一応の保険っただけだからな。

「そんじゃあ、行動開始だ!!」

俺のその声で姉貴の姿が消える。相変わらずの出鱈目な移動速度。負ける気がしねえな。

「どこのだいつかは知らねえが、いるんだろ?」

基地を出る前にヒステリアモードになっておいたお陰か、基地から地上に出て、確かな気配を感じた俺は、そう言う。

「ふ、諦めたか…こうして顔を合わせるの初めましてかな? GⅢ。」  
最新型の光屈折迷彩を身に付けた俺よりも少し背の高い男が現れる。纏う空気からしても、かなりのやり手。そりゃあそうか、俺やIQ407のマッシュの警戒網を潜り抜け、何度も奇襲出来る奴だ。並大抵の奴ではない。

「俺を狙う理由はなんだ?…いや、いい。ぶっ飛ばしてからゆっくり

聞くとするか。」

「口だけは達者なようだな。上も何故この程度の奴に俺たち3人を送ったことやら。俺一人でも十分だな。」

上：…こいつらを送り込んだ奴らがいるってことか。

「言うじゃねえか。後で泣いても知らねえぜ。」

兄貴のスタイルをマネた、二丁の拳銃を構える。

「強がりがいままで持つか、見物だな。」

グロック18Cを構える。戦闘のスタイルも手段も何ひとつ分かってるいない未知の敵。

「GⅢよ。お前はトウヤマ・キンジとその部下のニンジャと組んでベイツ姉妹を撃退したそうだが、あの程度に苦戦しているようでは俺の相手ではない。」

それに対して俺のことは調査済みってわけか。

「そのデータがいままで信じられるか、見物だぜ。」

両手に持った拳銃から放たれる2発の弾丸。狙い通り、奴の胴を目掛けて軌道を描く。

ダン、ダン、と俺の発砲に続いて銃声が2回響き、俺の放った弾丸の軌道を変えた。銃弾撃ち、やってくれるじゃねえか。

それを皮切りに、お互いに銃弾を放ちながら接近していき、  
拳銃格闘戦  
アルカタとなる。

「へっ、こそこそ奇襲を繰り返してやがったから、どんな臆病モンかと思っていたが、乗ってくるとはな。」

近接戦闘、俺たち遠山の血が最も得意とする間合い。そんなことは俺のことを調べている以上承知の筈だ。それでも距離を詰めてきたってことは、よっぽど自信があるってことだ。

「怖がらせてしまったな。俺も本当はさっさと楽にしてやりたかったのだが、上からの指示で回りくどい方法になってしまったのだ。許せ。」

挑発に挑発を返しながら、弾丸と拳が飛び交う。一瞬の隙、お互いにそれを狙い続ける、緊迫した戦い。しかし、突然、奴が距離を取る。右耳に手を当て、後方へ飛び退いた。

「お前たち、何をした…」

明らかに男に動揺が見える。インカム越しに何が聞こえたのかは知らねえが、おめえのお仲間是最強のベビーシッター貴によって今頃おねんねの時間だろうな。チャンスだ、奴が動揺し、冷静ではない今なら一気に畳み掛けられる。

「さて、なんのことやら。何があったか知らねえが、お仲間がおねんねしてんのか？だとしたら優秀なベビーシッター貴だな。」

奴の動揺は更に大きくなる。未知の敵として俺を奇襲していた奴らが、今未知の敵に襲われているのだ。その隠し玉が俺の作戦だと思いつき、精神的にも状況的にも追い込まれている。

さて、こつちもさっさと終わらせるか、聞かなきゃならねえこともあるしな。

踏み込もうとしたその時、インカムに音が入る。

「マズいことになった。」

かなり動揺した姉貴の声が聞こえる。

「お、おい!!どうした!?何があつた!?!」

姉貴の声からして、かなりマズい、状況ということか？だとすれば、目の前に立つ敵の仲間はそれ程の実力を持っているということか？仮にそうだとすれば、目の前に立つ男も同レベルの実力者の可能性がある。だとすればこちらに勝ち目は無い。

「ダメだ!!耐えきれんっ!!」

姉貴の切羽詰まった声の後、バキツという音が響き、通信が途絶える。

？だろ…最強だと思っていた姉貴が…いや、姉貴に限ってそれは有り得ない、有り得ちゃいけねえんだ。

なんとかかそう自分に言い聞かせるが、正常な判断を下せる心理状態では無くなってしまうている。当然、その動揺は奴に感ずかれる。

「俺としたことが…さっさと終わらせるとしよう。」

俺の方へと一歩踏み出そうとしたが、

「どうした、戦う気力さえ無くなったか？」

そう言いながら、その一歩がが止まる。まだ奴の中で育った疑念は

払拭出来ていないようだ。

「なんだ、口だけ達者だな。踏み込む勇気がねえのはお前だろ。」

そんな奴の動きを煽り、挑発してみるが、俺の中に蔓延る不安や懸念も払拭されていない。

「ふ、強がりを…」

「へ、そりゃあお前だろ。」

間拔けな睨み合いが続く。お互いの懸念材料が払拭出来ず、攻め込めない。覚悟を決めた方が勝ち。そう思うが、実力が俺よりも遙かに上という可能性を捨てきれない俺。奴は恐らく、正体不明の伏兵に警戒している。まるでどちらかがハツタリで作り出した状況の様だが、その実情はただのお互いの疑心暗鬼、グダグダだ。そんな睨み合いの最中、何度か大地から振動を感じる。こんな時に地震か？ここはアメリカだつていうのに珍しいこともあるもんだ。

そんな均衡を破る様に、発砲音と共に、一発弾丸が俺の真横を通過していく。完全に油断していた。よく見ると奴の足が一分分横にずれている。それを見て、ひとつの思惑を察し、予定調和の様に奴の真横に銃弾を放つ。

それを受け、奴は更に真横に動く。間違わねえ。仲間の確認に行く気だ。このままグダグダと殺り合っても時間の無駄だ。いいぜ、乗つてやる。俺の懸念も晴れるかもしれないねえからな。

お互いに当てる気のない弾丸を走りながら放ち合う。

そんなことをしながら、ふと思う。こんな風に少しの懸念や疑念で進むことをやめる奴と同格の奴らに、姉貴が負けるなんてことがあるのか：奴が踏み込めないのは、援軍があつた場合、俺に対して勝てる100%の確証がないからだ。つまり、その程度の実力ということだ。

姉貴は負けてねえ。いや負ける筈がない。何故こんな簡単なことを分からなかったのか。あの絶好の機会を逃した自身が腹立たしくなる。

遊びは終わりだ。油断しきつたアホに、一泡吹かせてやる。

|||||  
——イーサン・ムーア視点——  
|||||

ムーア三兄弟、俺たち三つ子の通り名だ。米国防総省直属の実働部隊に所属し、三つ子ならではの連携と、兄弟それぞれの特化した戦闘スタイルで入れ替わりながら戦闘を行い、敵を攪乱・混乱させながら殲滅するのが俺たち兄弟の戦い方で、その不規則で予測不可能な戦闘スタイルで、格上と思われてきた敵にも勝利を重ねてきた。

そんな俺たちに与えられた任務はふたつ、最近敵対行動の多いGⅢへの制裁と、突如現れたGの血族、トウヤマ・カナコの調査。GⅢに關しては、十分なデータがあり、その戦闘力は分かっている。ベイツ姉妹に3人掛かりで辛勝する程度であれば、俺たちの敵ではないし、兄弟の一人だけでも十分に勝ちを収めることが出来ると踏んでいた。

もうひとつの任務、トウヤマ・カナコの調査、これに關しては上層部だけでなく、俺たちにも多くの懸念事項がある。そもそも彼女に対する対応は米国政府によって決められている。友好的中立。国連の会議終了後、すぐさま英国の誇る最強のエージェント、007ことサイオン・ボンドが恐怖に怯え、英国政府へ彼女との敵対行動を全力で避ける様に提言したことが始まりだ。真つ先に世界最強クラスともいえるサイオンが恐怖し怯える相手、それにその会議に警護で行っていた米国のエージェントたちも、一様に敵対は自殺行為と提言し、敵対しないに越したことはないと判断した政府により、英国と同じ歩調を取ることに決まった。

だが、如何せん、彼女に關する情報が少なすぎるだけでなく、彼女の思想や行動原理も不明で、いつ敵となるか分からない。分かっているのは名前と顔だけだ。しかし、それだけなら、政府から日本政府へと圧力を掛ければ多少の情報は取れただろう。だが、米国にはひとつ懸念の材料がある。トウヤマ・コンザだ。彼女の父親に当たる人物の身柄は現在、米国にある。それに対しての彼女の反応と対応が予測出来ない。

それだけでなく、国防総省上層部の一部には、彼女の實力に対して疑問を抱く者たちが多数いる。突如現れ、サイオンの提言で危険人物として世界に認知されたが、それは本当のことなのか？日本政府と英国政府が連携して謀をしているのではないか？そんな疑念があるようだ。

それに関しては俺たちも同意見だった。現状分かっていることはサイオンがヤバいと言っただけ。それで信じれる人間もいるだろうが、その逆もいる。なにかの間違いではないのか？そんな思いがあった。そういうわけで、今回の任務における目標は、最低でもトウヤマ・カナコに関する情報の入手をすることであり、GⅢに関しては彼女を誘き出す為の餌であって絶対的な目標ではない。

そんなGⅢを炙り出し、捕獲ないし殺害することを最初に着手したのが間違いだったのだろうか。今まで感じたことの無い程の不安に駆り立てられていた。

GⅢとのアルⅡカタの最中に右耳のインカムから聞こえてきた切断音。それ以降弟たちからの連絡は一切ない。

先ず思い浮かぶのは機材の故障、しかし、その可能性は低い。そもそも任務開始前に入念な確認をしているし、そう容易く壊れる様なチャチなものではない。次に考えられる可能性はGⅢとその部下たちによる意図的な通信障害。この可能性が一番有り得ると考えていた。突然の通信障害で俺の気を逸らす。そうだとすれば、まんまと策に嵌ったということになる。

しかし、その可能性にも疑問が生まれた。その後のGⅢの様子だ。明らかに好機と見て攻勢に出ようとしていたが、突然動揺し、動きを止めた。

そのせいで、俺の中に疑念が残る。もしや伏兵がおり、弟ふたりをやったのか？？仮にそうだとすれば、その伏兵との連絡が途絶え動揺したとも考えられる。では何故弟たちとの通信が出来ないのか？まさか相打ちか？いや、それさえも奴の罠の可能性がある。

考えれば考える程、疑心暗鬼に陥る。あと一歩が踏み出せない。硬直した睨み合いの中で、ひとつの単純な考えに至る。

疑念の元を絶つ。弟たちが潜んでいた場所に行けばいいのだ。情報不足の状態で思考し、疑心暗鬼になるくらいならそっちの方がましだ。そんな時に大地が何度か震えた。地震か？珍しいな。しかし、これで踏ん切りがついた。

その考えに従い、GⅢの真横に銃弾を放ち、弟たちの潜む場所へ一歩動く、奴の様子からして、俺と同じ心理状況の可能性が高い。この一発でそれが演技なのかどうかも見抜ける。

俺の思惑通りに、奴は俺の真横に銃弾を放つ。乗ってきた、そこで重大なミスに気付く。奴も状況が分かっていたいなかった。俺と同じ方向に奴が動くのを見て、直感がそう告げる。先程、疑念を振り払い、一歩踏み込めていれば、容易に奴を始末出来ていた…

後悔は先に立たない。こうなった以上、万全な精神状態で奴を殲滅する。ここまでコケにされたことへの報復として絶対だ。そんなことを思いながら、足は加速していく。

|||||

—GⅢ視点—

走りながら弾丸を放ち続けていた。そうしながらも、徐々に奴との距離を縮めていく。まだだ、奴はまだ俺への警戒がある。つくづく疑心暗鬼になっていやがるな。

まだだ、まだだ、そう心の中で呟きながら、走り続ける。走る方向を一瞬見た奴に明らかかな動揺が現れる。俺はその方向を見ない。それではさっきの二の舞だ。もう覚悟も確信もある。こいつは俺が仕留めるし、姉貴は負けない。

一気に奴との距離を詰める。

「流星<sup>メテオ</sup>」

兄貴風に言うならば『桜花』。必殺の拳を奴に放つ。

「くっ」

動揺していたせいか、反応が鈍く、ガードが一瞬遅れてくれる。ガードした腕ごと拳を振りぬくと、奴の腕の骨が折れる感触が拳に伝

わってくる。ギリギリで衝撃の方向を変えたのか、走っていた方向に吹っ飛んでいく。

その方向に目をやり、追撃を仕掛けようとした。

「ダニー、グレッグ、生きてるか!？」

奴の叫び声、砂埃の先に折れた腕を庇いながら、奴とよく似た倒れた男たちへと近づいていく。

「一発ずつ殴っただけだ。十分手加減していたので、死んではおらん。」

「ト、トウヤマ・カナコ…」

突如目の前に現れた人物を見て、奴が絶望した様子で呟く。

「姉貴。」

やはり、遠山家で最強の存在が負ける筈などなかったのだ。こちらからは奴の姿で姉貴の姿は見えないが、恐らく、余裕の表情で立っているのだろう。疑心暗鬼に陥っていた自身を恥じる様に苦笑いしながら、姉貴の方へと向かう。

「金三、随分と時間が掛かったな。」

「あの通信は何だったんだ?」

あの通信がなければ、ここまで時間も掛からなかった筈だ。それに何故よりにもよって、追い詰められた様な雰囲気を出したのか?疑問は沢山ある。

「ああ、あれか。」

姉貴が口を開くと同時に、奴が膝を付く。心が折れたのだろうか。それによって姉貴の姿が見える様になると同時にそれまでの疑問が吹っ飛んだ。

「あれは—」

「前を隠せ—っ!!」

姉貴の言葉を遮り、叫ぶ。シャツの胸元が弾け飛び、際どい、本当にギリギリのラインまで胸が露になった姉貴の姿があった。

|||||

—遠山金虎視点—



「そんじやあ、行動開始だ!!」

金三のその言葉を合図に、駆け出す。とりあえず、最も近くにいる敵を金三に残し、後のふたりを片付けておいてやるとしよう。手っ取り早く済ませ、後は金三の様子でも見ておくか。あれは金次と張り合う程度の実力はあるが、ふたりとも私からすれば、まだまだ未熟な段階だ。弟の喧嘩に手を出したくはないが、状況によっては手助けも必要だろう。

上手いことやれば、姉としての威厳も取り戻し、もう少し慕ってくれる様になるかもしれんな。

そんな打算的なことを一瞬考えたことによる天罰だったのだろうか…

「ぐっうっ—」

一人目を殴り飛ばす。無理矢理潰した胸が、拳を振るう際に窮屈で、普段よりも動きも速度も劣るが、相手は倒れ、動かなくなる。

「加減はした、死んではおらんだろう。」

ここに倒れたままにしておく和金三の邪魔になるな。そう思い、そいつを左腕で抱え、もう一人が潜む場所へと移動しようとした時、背中でバチつと小さく聞こえる。己以外の気配はない。振り返るがやはり、誰もいない。

「気のせいかな?」

若干胸の窮屈さが緩和された気がするが、私の身体が適応してきたのだろう。さつさと終わらせ、金三の様子を観に行くとしよう。

再び移動しようとして少し力を込めると、再度バチつと小さな音が聞こえる。気のせいかと思っていたが、誰か他にいるのか…

そうだとすれば、私が気を探れぬ強者、今まで相対したことの無い強者が潜んでいるということになる。得も言われぬ高揚感と漸く私の飢えを満たす者が現れたのかも知れぬ、という期待に胸が膨らむ。

…気のせいだろうか?少し胸が膨らんでいる気がする。まあ、そんなことはどうでもいい。今すぐにでもその者を探し出し、死合いたいという思いが勝る。しかし、弟からの頼みもある。優先すべきは…

「私は金三の姉だからな、私利私欲よりもそちらを優先せねばな。」

それと同時に思う。その者は私と同等かそれ以上の強者。私と同じく、己を超える強者との戦いを渴望している筈だ。邪魔者がいなくなった上で私と正々堂々一対一で死合うことをも望んでいるに違いないと。私だったらそう思う。

そう思うと、駆け出す脚が普段以上に軽やかに前に出る。再びバチッと小さな音が聞こえてくる。それと同時に、また胸の苦しきから解放される。

なんとという高揚感。血が滾ってくる。名も顔も知らぬその者に相対する時を、今か今かと待ちわびる私がいる。これが恋と言うのだろうか。

「げふっ—」

「準備運動にもならんな…」

もう一人を殴り飛ばし、思わず声が漏れる。確かに準備運動にもなっていないが、身体は今までにない程滾っている。今なら、全力で何日も戦い続けられる、そんな気がする。

「さあ、死合おうぞ。」

無意識に口角が上がり、笑みがこぼれる。なんとという高揚感と幸福感なのだろう。

「ふ、ふふふ、はあーっははは。」

笑いが抑えられない。こんなにも幸せな気持ちになれるのか。乞いに乞い続けた、己よりも強い者。それと死合うことが出来るやも知れぬ。長かった、本当に長かった。思わず、力が入ってしまう。

バチツイ!! バチツイ!!

今までと違い、2回音が聞こえる。力を込めたというのに、胸の胸の苦しきは軽くなっていく。しかし、それは一瞬だった。シャツやさらしが引つ張られている感覚に苛まれる。

違和感に己の胸を見る。…普段よりは小さくなっているが、膨らんできてないか? そういえば、先程見た時も少し膨らんでいた気がするな…

「まさかな…」

恐る恐る、背中に手を伸ばす。胸を押さえつけていたサポーターの金具が弾け飛んでしまっているな…一番下にある金具が辛うじて残っているが、時間の問題の気がしてしまう。

「ま、マズい!!みすずに られる!!」

このサポーターはみすずの所有物だ。それを壊してしまったとなると、間違いなく延々と説教を食らうことになる!!

「な、なんとかせねば…」

それまでであった高揚感など、消し飛んでしまっていた。

「そうだ、金三の奴が連絡を取る機械を渡していたな。」

己の右耳に付けた機械を触る。確かこのボタンを押すのだったな。壊さぬ様に、全身全霊を掛け、力加減に気を使う。

「マズいことになった。」

ボタンを押し、近況を伝える。マズいことという以外の表現がないだろう。このままでは、みすずの所有物（Bホルダー）の金具どころかシャツも破れてしまいそうになっている。

「お、おい!!どうした!?!何があった!?!」

予想以上に動揺した金三の声が聞こえてくる。ちゃんと聞こえていたのか。凄いなこの機械は。…はっ!!そんなことを考えている場合ではなかった。そうだ、現状を伝えねば、情けないが、弟に助けを請わねば、この状況を打開する策を私では思いつけない。

頼む、助けてくれ。そう伝えようと、ボタンを押し、口を開こうとした瞬間。背中から伝わる感覚、

「ダメだ!!耐えきれんっ!!」

最後の金具の限界、それが如実に分かってしまった。焦りから力が入ってしまう。

バキツという音聞こえ、恐る恐る手を見る。マズい…弟の機械も壊してしまった…それと同時に胸を締め付けていた金具が弾け飛び、バチツイ!!という音が聞こえた。

「この音だったのか…」

己が期待に胸を躍らせていた正体、親友と弟の物を壊してしまった

という情けなさに思わず膝を付く。

「情けない…」

己の不甲斐なさに拳を地面に打ち付ける。地面に亀裂が入ると同時にさらしとシャツが避けるのが分かる。まるで私の心の様だ。

声にならない叫びと共に更に拳を叩きつけた後、こちらに近づいてくる金三ともう一人の気を感じる。

「これ以上情けない姿を見せるわけにはいかぬ。」

立ち上がり、無惨に千切れたさらしを岩場の陰に隠しに行く。

「流星<sup>メテオ</sup>。」

「くっ—」

金三が拳を放ち、男を殴り飛ばす。勝負あったな…殴り飛ばされた男の方に目をやる。

「ダニー、グレッグ、生きてるか!？」

私が殴っておいたふたりに声を掛けている。腕は折れている様だが心はまだ戦う気力があるな。戦いの行方を見るのも一興だが、それ以上に金三に謝らねばならぬし、このまま戦わせても、勝負は見えてるな。

「一発ずつ殴っただけだ。十分手加減していたので、死んではおらん。」

男の前に立ち、そう告げる。

「ト、トウヤマ・カナコ…」

男が、私の名を呟く。なんだ？私のことを知っていたのか。何処かで会ったことがあっただろうか？まあ、いいか。

「姉貴。」

金三が私を呼ぶ声。まあ、今やるべきことはこっちだな。

「金三、随分と時間が掛かったな。」

「あの通信は何だったんだ？」

ああ、それも説明せねばならないな。あの時は取り乱してしまっただけからな。

「ああ、あれか。」

男に軽く気を当てると、膝を付く。なんと説明したものか…

「あれは―」

「前を隠せーっ!!」

私の言葉遮り、金三が叫ぶ。前?己の身体を見下ろす。裂けているし、さらしやサポーターを身に付けていたから下着も身に着けていないが、見せたくないと思う所は隠れているし、大丈夫だな。名古屋で会った尾張守殿に比べたら、肌を隠し過ぎているとも言える程だ。そんな私の姿から必死に顔を背ける金三。

「初心な奴だな。そんなことでは子を持つことは出来ぬぞ。」

全く、金次といい、どうしてこうなのだ。そういうことを含めて、金一はやはり長男として、弟たちの良い見本となっているな。嫁を持ち、子も成した。

私の言葉に、ポカンとした金三を見て、金次と金三は大丈夫なのだろうかと心配になってくる。まあ、金次の方は周りに女子おなごが多いし、白雪辺りが手解きするだろうから問題はなさそうか。

機械を壊してしまったという罪悪感よりも、弟たちへの心配が勝ってしまうのは、姉心というものなのだろうか。小さく笑い、金三の頭をポンポン、と軽く叩く。

「帰るとするか。そいつらはどうする?」

「あ、ああ、基地に連れて行く。それよりも、姉貴、これ羽織れ。」

金三が纏っていた派手なコートを渡してくる。要らぬと言うのは無粋だな。それを受け取り、ばさりと羽織る。

「では行くか。」

男たちを担ぎ、歩き出す。

「だから、前を閉じろ!!貸した意味がねえだろうか!!」

金三の叫びが木霊した。

## 眠れる虎

—GⅢ視点—

捕獲した男たちを基地に運び、拘束する。目覚めたら尋問だな。その間、とりあえず、あの格好のままうろつかれたらかなわねえから、姉貴は九九藻と口カに連れられ、着替えに行っている。

「また破れたっ！」

九九藻の悲痛な叫びが基地に木霊する。何があつたのかは想像がつくが、想像したくねえ。

「GⅢ…」

「お、お目覚めか。」

拘束した3人の男たちの意識が戻ったようだ。

「ぶっ飛ばしてからゆっくり聞く。そう言っただろ。」

まあ、ぶっ飛ばしたのは半分以上姉貴だが、それは置いておいて、勝ち誇った態度で男たちに近づく。こういういった場合、優位性を示すことが第一だ。

「ふん、お前に負けたのではない。トウヤマ・カナコに負けたのだ。故に、お前に話すことなどない。殺せ。」

どこの部隊なのか、任務がなんだつたのかは分からない。しかし、その忠誠心と覚悟は本物だ。

「…だが、ふたつ、教えておいてやる。別にお前に恨みも何もない。そして、俺たちの今、任務は完了した。」

男たちが、一斉に何かを握り潰した。

「てめえら、なにをしたっ!!」

反応が遅れてしまい、男たちがソレを破壊することを阻止できなかった。

「さあ、殺せ。殺さぬなら、自らこの命、絶つまでだが。」

こいつら、本気だ。…こういう状況なら、兄貴なら間違いなく止めに行くのだろうか。

「下らぬ。何のために私が加減したと思っている。」

「ト、トウヤマ・カナコ…」

毎度の如く、突然現れる姉貴に、男たちは驚きを隠せていない。それは俺も同じくだった。

「あ、姉貴…服を着ろーっ!!」

さらしだけ巻いて現れたこのバカな姉貴に対して叫ぶ。

「騒ぐな、金三。ちゃんと着ているだろう。」

そう言つて、さらしを指す姉貴。それを服とは言わねえだろ…

「そんなことはどうでもいい。何のために私が加減したと思つている。」

バキバキと、男たちの拘束具の結束部分を素手で握り潰しながら、そう言う。

「情けはいらん!!」

姉貴に、そう怒鳴る男。

「情けではない。これは私の我儘だ。不殺は私の立てた誓い、その我儘に敗れた者には付き合つて貰う。」

そんな男の顎を掴み、口説く様に、語りかける姉貴。

「俺たちに、敗者の誹りを受けろと言うのか。」

「そうだ。しかし、敗者は強い。落ちる所が無い。這い上がるだけだ。喧嘩なら何時でも買つてやる。」

聞き分けの無い子どもを諭すように、言葉を紡ぐ姉貴。

「後悔することになるぞ。」

「そうなつてくれた方が面白いだろう？ 私は私よりも強い者に会いたいのだ。」

悪戯が成功した子どもの様に笑う姉貴に、流石に毒気が抜かれたのか、はたまたまともな会話を諦めたのかは分からない。しかし、張りつめた奴らの空気は霧散する。

「ほら、さっさと行け。」

姉貴が、急かす様に男たちを立たせ、

「帰れぬなら、私が送ることになるが、どうする?」

「遠慮させてもらおう。それ程ヤワではないし、そっちの方が命の危険を感じる。」

姉貴にそう返し、邪氣の無い笑みを向ける。

「さつきまで殺せといつてた野郎が、命の危険なあ、おかしな話だ。」  
俺がそう皮肉ると、

「ふ、俺たちを生かしたことを必ず後悔させてやる。それまで眠れぬ夜を過ごすがいい。」

精一杯の捨て台詞を吐く。

「安心しろ、毎日熟睡だ。」

的外れな返答をする姉貴に、締まりがつかなくなったのか、男たちはそそくさと去っていき、その姿が見えなくなる。

「甘過ぎるんじゃないやねえか？そんなことやつてりや、本当にいつか寝首を搔かれるぜ。」

俺が姉貴に向き直ってそう言う。

「先程言っただろう。それならば本望だ。」

一言一句、偽りなど無い。本当にそう思っているのだろう。その真っ直ぐな瞳を見て思う、復讐だ、仕返しだと邪な感情では、決して勝てないだろう。姉貴は、俺たちとは違う次元にいる。それこそ、色金の力さえ軽く凌駕する様な：姉貴の強さが青天井だと、本当の意味で理解している兄貴や金一が、心底恐怖している理由が分かると同時に、心強くもある。なんせこんな、世界に喧嘩を売っても勝てそうな存在が姉なのだから。

「あの、一応服を用意しました。」

一枚のシャツを持って現れた複雑な表情の九九藻と、

「豪快に剥ぎ取られたよ。」

と、上半身裸のアトラス。

「私は別にこれでも構わぬが？」

「いいから着ろ!!羞恥心はねえのか!!」

あられもない姿の姉貴に、シャツを叩きつけた。

「これからどうするつもりなんだ？」

シャツをきた姉貴に、そう問いかける。そもそも、ここまで何しに来たのかも、理由は曖昧だ。

「帰って寝る。」



そう言って、大きく欠伸をする姉貴。

「何しに来たんだよ…」

「男装したので見せに来たのだ。」

マジでそれだけの為に来たのか…

「苦勞をかけると思うが、弟を頼むぞ。」

部下たちにそう言う姉貴。どっちかっていうと、この状況だと部下たちの心労は姉貴への対応だと思っけどな。

「そういえば、お前は玉藻殿の親類か？最近見ぬが、元気だろうか？」

姉貴が、九九藻にそう問いかける。

「は、はい。玉藻様はお元気だと思いますけど…」

「そうか、私が中学校を卒業してから一度も会っておらんが、元気なら良い。最近は星伽の守る緋色の金属も大人しくなったのだな。残念だ。」

その発言に、俺たち全員が目が、点になる。それって緋緋色金だよな…

「姉貴、それって、緋緋色金のことか？アレは兄貴とアリアが解決したぜ。しかし、残念ってどういうことだ？」

「確かそんな呼ばれ方しておったな。金三も知っているのか？昔はよく暴れておってな。あれはいつだったか…小学校に入った頃だったか？私が星伽の社にちょうど遊びに行っていた時に突然暴れ出したので殴ってみたのだ。そうしたら静まってな。それ以来、暴れる度に呼ばれる様になったのだが、そうか、金次たちが解決したのか…割と力を込めて殴っても大丈夫な相手だったので、暴れなくなったのは少し残念だな。」

兄貴の退学、その遠因となった緋緋色金。幼少期に、それを殴って黙らせる姉貴。姉貴が極東戦役に参加したら、早々に解決して、兄貴はまだ、武偵高の生徒だったかもしれない。…いや、この姉貴なら、中立の立場で全員殴り飛ばして、大混乱を巻き起こしていた可能性の方が高いか。

「まあ、それならいいか。我慢しよう。」

ひとりで納得した様に頷き、

「帰るとするか。」

「送って行こうか？」

俺の申し出に、

「結構だ。走った方が速いからな。」

足首を回しながら、そう答える。

「九九藻といったな。金三を支えてやってくれ。アレは金次と同じでアレだが、悪い男ではない。…まあ、そのあたりは、お前の方が詳しいだろう。」

「ひゃ、ひゃい。」

九九藻が、顔を赤くして返事をしているが、何のことだ？

「さらばだ。」

姿形も無く、きれいさっぱりこの場から消える姉貴。フレデイの件に続き、までも助けられた事実を痛感する。姉貴の住む次元が違うとはいえ、俺だって、もっと強くならなければ…

「俺は…俺たちはもつと強くなる。」

俺の呟きに、部下たちが、嬉しそうな笑みを浮かべ頷いた。

|||||

—キンジ視点—

塾が終わり、夜も深くなった街を歩き、我がボロ借家へと辿り着く。腹減ったなあ…いや、それ以上に、眠気が勝る。今日は直ぐに風呂に入って、寝よう。そして早く起きて勉強だ。そう決心して、玄関の扉を開ける。真っ暗な部屋、返事する者などいないが、一応「ただいま。」と小さく呟く。

靴を脱ごうとした時に、違和感を感じる。

「こんな靴、持ってたか？」

いや、持っていないな。そもそもサイズが違う。懐にあるベレッタに手を伸ばす。誰が何の為に？そんな疑問はあるが、それ以上に警戒

することが最優先だ。武偵高だと、侵入を許した時点でこちらの落ち度なんだろうけど、このボロ家と乏しい資金では、そんなセキユリティを構築することは困難だし、そもそも、わざわざ俺を狙う奴などいないと、完全に油断していた。

明かりを付けず、静かに銃を構えながら中に入る。聞こえてくる規則正しい呼吸音。ベッドの辺りか：

もしかして、リサや白雪が家事をしに、部屋に来て、そのまま寝てしまったのだろうか。そんな可能性が頭を過るが、直ぐに有り得ないと思い改める。あのふたりなら、どんなに眠かろうと、起きて俺を待つ。なら理子か？これが一番可能性が高いが、靴のサイズが合わない。

いや、そもそも、靴のサイズだとバスクービルの女たちは全員候補から外れる。ならあれは分かり易い罠で：

ダメだ、そう考える始めると、何もかもが怪しく感じてくる。

ええい、ままよ。一か八か、部屋の明かりをつけた。

「ね、姉さん…」

ベッドで眠る、アホの姉さんの顔が見える。いや、何してんのこの人？

怒りや呆れといった感情が高まり、叩き起こそうと踏み出そうとした。俺の布団に、頼むから女の匂いをつけないでくれ。

踏み出そうとした一歩、その足を止める。そうだ…俺はなんてことをしようとしていたのだろう。危うく命を落とす所だった。

このバカ姉は、寝起きが恐ろしく悪い。叩き起こそうものなら、間違ひなく数発は殴られる。そうなったら、永眠必至だ。

「ちくしょう…なんで俺の部屋は誰かに占領されるんだよ…」

涙を飲み、風呂場に駆け込み、静かにシャワーを浴びる。そして、姉さんを起こさないように、冷たい床に横たわり、眠りについた。

けたたましく鳴るスマホの着信音に、飛び起きる。今何時だ!? 外から少しだけ差し込む光が、やけに眩しく感じる。重い瞼をなんとか開きながら、スマホを取る。げっ、もう昼前じゃん。早起きして勉強しようと思っていたのに、完全に寝過ごした。

そして、肝心の着信相手。そんなものは着信音で分かる。アリアさ  
んだよ…あーあ、ワンコールで取らなかったからどやさされるよ。

「えーっと、どうした？」

「遅いわよ!!バカキンジっ!!」

キンキンのアニメ声が、耳を貫く。

「あー、悪い。寝てた。」

言い訳のしようもないので、正直に謝る。

「全く、だらしないわね。バスカービルの面々でそっちに向かってる、  
と言つても、もうアパートの前だけど、今からそっちに行くから。」

ブチツと切れる電話。えっと…寝起きの頭で考えようとする間も  
無く、ゴンゴンと玄関を叩く音。もう来やがった!!

余りにも突然のことで、俺は多くのことを忘れていた。そう、床で  
寝ている理由さえも…

「あら、開いてるじゃない。不用心ね。」

ガチャリと開く扉。それで完全に思い出す。姉さんがいる!!今も  
規則正しい寝息を姉さん。昨日、あのまま、玄関の鍵を掛けるのを忘  
れていたのだ。

「おっ邪魔しまーすっ!!」

理子が勢いよく、部屋に飛び込んでくる。

「おお!!キーくん大胆だねえ。誰連れ込んだの?」

「はあ?どういふことよバカキンジっ!!」

「キンちゃん…?」

「…」

バスカービルの面々が俺に殺気を向ける。その視線の先、俺の背後  
に、ゆっくりと顔を向ける。

「は?」

何故昨日気付かなかつたのだろうか…

「ゆうべはお楽しみでしたね。」

某RPGを彷彿させる台詞を理子が口ずさむ。脱ぎ散らかされた  
服と女物のパンツ。姉さん…何やってんの…待て、そうになると、まさ  
か…



目覚めたばかりの、ぼんやりとした意識、それを目覚めさせる様に、その声で現実へと引き戻される。

「ぐおっ!!頭痛えっ!!」

姉さんに掴まれた頭が痛む。あれだけの力で、骨が砕けて無いことに驚いてしまう。

心配そうにこちらを見つめるアリア。

「俺、どんくらい寝てた?」

「ざっと一時間ってところかしら。あまりにもうなされてるから、いよいよお迎えが来たのかと思ったわよ。」

そんなに気絶していたのか・・・

「そういうや、他の奴らは何処行っただ?」

確かバスカービルの面子で来ていた筈。なのに、今ここにはアリアしかない。

「ああ、それならもう少しで帰って来ると思うわ。それより—」

アリアの言葉の途中、風呂場の方から、シャワーの流れる音が響く。

「姉さんか・・・」

「ええ、そうよ・・・」

アリアも困惑気味で呟く様に言う。マジで何やってるんだろう、あの人・・・

シャワーの音が消え、戸が開く音が聞こえる。暫しの沈黙の後に、「起きたか。」

タオルを首に掛け、湿った髪のまま、服も着らずに出て来る姉さん。すぐさま後ろを向き、

「姉さん、頼むから服を着てくれ!!」

姉さんでヒスった、なんてことになったら、俺は間違いなく死を選ぶだろう。

「全く、この程度で動揺してどうするのだ。お前はもう少し—」

全裸のまま、説教を始める姉さん。あんたには羞恥心が無いのか? せめてタオルくらい巻いてくれよ・・・

「かなごさん、その、流石にタオルくらい・・・」

アリア、今はお前だけが頼りだ。

「神崎・・・いや、義妹になるのだからアリアと呼んだ方が良いのか？  
まあいい、お前もだ。遠山家へ嫁に来るなら、金次の女嫌いを治す様  
に頑張つて貰わねば困るのだ、子は多い方がいいからな。」

姉さん、あんた何言つてんだよ・・・

「こ、こどつ・・・子どもつ?!」

ボフツと瞬間湯沸かし器の様に一瞬で顔を真っ赤にしたアリア。  
普段ならガバメント出して風穴祭りなのに、モジモジとしおらしくな  
る。アリアは俺以外の遠山家の人間に対しては、何故か大人しくなる  
が、姉さんでもア祓い結界を張れるらしい。

「ただいまーっ!!..なにこの状況!？」

玄関の扉が開く音と共に理子の声が聞こえる。全裸で立つ姉さん  
とそれに背を向けて座る俺に真っ赤になってぼーっと立ち尽くすア  
リア。そりゃあ誰だつて訳が分からないだろうな。

「理子、どうしたの?..って、かなこ様!?服買ってきたのですぐに着て  
下さい!!」

続いて入ってきた白雪が悲鳴に近い叫びを上げながら、バタバタと  
部屋へと入ってきた。なんとか危機は乗り越えた様だ。

白雪が姉さんを脱衣所に押し込みながら、一緒に入っていく。姉さん  
がちやんとした格好で出てきてくれることを祈るとして、

「なんでアリアは固まつてるの?..」

理子がこちらへ来ながら、座る俺の背後から覗き込む様に顔を寄せ  
ながら、そう聞いてくる。

「知らん。というより近い、離れてくれよ。」

少し動けば触れる様な距離の理子から醸し出される甘ったるい匂  
いに、血流が早まりそうになるのを抑えながら、そう言う。ようやく  
危機が去ったというのに、ここでヒスるわけにはいかない。

「えーっ、いいじゃんー!!」

そう言つて、背後から抱きつかれる。背中当たる柔らかな感触に  
更に血流が早まる。マズい、マズいぞ!!

なんとか理子を引き?がそうとしている時、よりにもよつて、意識  
が別の世界へと旅立っていたアリアと目が合った。それでなにかの

スイッチが入ったらしく、ハツとした顔をした後、額にDの血管を浮かべ、

「あんたたちっ!!何してんのよーっ!!」

俺と理子にガバメントを向けながらアリアが叫び、発砲。俺と理子はワーワー騒ぎながらそれを躲していく。

「お、落ち着けっ!!」

「うるさい!風穴っ!」

ちくしよう、さつきまではやけに静かだったのに:姉さんの姿が無いからアベい結果が無くなったのか?

「騒々しい奴らだな。」

「姉さん!!」

姉さんが俺たちの中央に現れた。ちゃんと服を着ていることに一安心していると、姉さんが握っていた拳を開く。その手の中からアリアの放った弾丸が床にバラバラと落ちる。相変わらずの人外っぷりを発揮した登場だな。

「全く、賑やかにするのは構わんが程々にしておけ。」

そう偉そうに言う姉さんだが、そもその原因は姉さんにあるのだが:そんな姉さんは、深紅のタイトドレスに身を包んでいる。

「しかし、この服、動き辛いな。」

窮屈そうに身を振る姉さん。動き辛い?瞬間移動しておいて?説得力が皆無だぞ、姉さん。

「え、似合ってるのに。」

服を選んだのであろう理子が、姉さんの感想に対して不服そうにの声を上げる。

「ねえ、キークンもそう思うでしょ!」

理子が同意を求めてくる。確かに似合っているのだろう。しかし、その女性らしい格好は、俺が物心ついた頃から知っている姉さんのイメージとかけ離れている。常に動き易さと利便性のみを衣服に求めていた姉さんは、服装というのに対して無頓着だった。

そのせいかな、今日の前で着飾っている姉さんに対して違和感しかないが、この残念な姉も大人になった、成長したのだと(内面は子供の



ままだが)、家族としてそれを受け入れる。

「馬子にも衣装ってこういう事なんだな。」

偽らぬ本音を伝える。チツ、と左頬に摩擦が起きた様な痛みが走る。

「どういう意味だ?...次は当てるぞ。」

姉さんの低い声が耳元で響き、左頬からツウーと血が滲む。

「う、嘘です。冗談です。似合ってる。凄く似合ってるから!!」

怖過ぎるだろ!!死ねない俺が本気で死を覚悟したよ。

「ふ、そんなに褒めるでない。」

満足そうに頷く姉さん。いや、言わせてますよね。服装に倣って、せめてもう少しお淑やかになってくれませんかね、マジで。

## 虎と狐と時々要塞

—??? 視点—

「なんとという体たらく!! GⅢへの制裁は容易ではなかったのか!!」

帰還したムーア三兄弟からの報告が提出され、国防総省の会議室に長官の怒声が響く。

「仕方ないと思いますけどね。なんせ不確定要素であるトウヤマ・カナコが相手だったようですし、むしろ生きて帰ってきたことの方が驚きです。」

「随分と甘い評価ではないか。以前の君なら彼らに失敗の責任を取らせているだろう?」

「普通ならそうなんですけどね。流石に今回は彼らに同情しますよ。彼らの持ち帰った映像や、これまで集めた情報。間違いありません。彼女は本物、少なくとも武偵やエージェントをいくら送り込もうと、何の役にも立ちませんよ。」

会議室がざわつく。

「なら、どうしろと? 君の評価が正しいとして、それなら彼女は合衆国の脅威となりうるのだ。」

「そりゃあ、サイオン・ボンドが言っていた通り、友好の道しかないでしょう。それが不服と仰るなら、陸・海・空軍に総動員と、戦略核の無制限の使用許可を取り付けて下さい。」

ざわつきが一瞬で静寂に変わる。

「ね、友好の道しかないでしょう? 今回はあっさり都合衆国から出て行ってくれて良かったですよ。本土にいる状態だと、核が使えませんからね。」

「妄想話にしか聞こえんな…そこまでの過大評価する確証はあるのかね?」

質問された男の指示で、資料が配られる。

「間違いない情報です。我々が利用しようとしている色金。その最大の力を手加減したパンチ一発で鎮めることが出来ます。もう、彼女を

同じ人間として考えない方がいいでしょう。」

人智を超えた力である色金を凌駕する力、それが明確な証拠と共に言葉で伝えられたことで、時間が停止したかの如き静寂が場を支配する。

「信じられん…」

恐怖なのか、怒りなのか、どちらとも取れる長官の声が静寂を破る。「そりゃあ、私だって信じたくはないですよ。でも、間違いないんです。そんな最悪の爆弾を触りたいんですか？」

答えなんか決まっているだろう。そんな風な言い方だった。

そして、ひとりの初老の男が手を上げ、発言をする。

「それならば一層、同盟でも結んでみては如何かな？」

|||||

—キンジ視点—

理子に姉さんが髪やらを弄られている間、姉さんの脱ぎ散らかした衣服を、白雪が畳んでいる。チラリと見えた姉さんの服は破れていた。只事ではない状態だった。

服だけとはいえ、姉さんにあそこまでのダメージを与えられる人間（人間とは限らないが）がこの世に存在するのか、と驚愕と恐怖を覚え、ゾクリと身を震わせる。全く、おっかないったらないぜ。

そんな俺の気など知らない白雪が姉さんに声を掛ける。

「かなこ様、これは何ですか？フックも壊れてしまっている様ですが…？」

白雪が手にしているのは、さつき見えた破れたシャツではなく、コルセットの様な物で、布地は見事なまでに裂けている。

「しまったー忘れていたー！」

姉さんが慌てた様子で白雪の前に瞬間移動し、それを掴む。

「お、Bホルダーだ！かなこさんもコスするの？」

「コス？」

理子が謎のそれを見てそう言うと、姉さんの頭に疑問符が浮かぶ。「コス？とやらが何かは知らぬが、これはみすずの物なのだ。また延々と説教されてしまう。」

出来れば聞きたくない名前が姉さんの口から出てきた。また面倒なことになりそうだな、

「それじゃあ、買いに行く？3000円位であるよ。」

え、思ったより安いな。理子の言葉にそんな感想を抱く。まあ、俺にとつて3000円は大金だけどね。

「本当か!!」

姉さんの反応に満足した様に理子が頷き、

「くふく、それじゃあ、行きましようか。」

とニヤニヤとそう言う。

「行くって、何処よ？」

そんな理子に、アリアが訊ねる。

「そりゃあ、勿論、理子の庭、アキバだよ!!」

おう、何処へでも行ってこいよ。全員連れてな。そして、もうここへ帰ってくんな。

「秋葉原、来るのは初めてだな。」

「初見さんか、案内は理子にお任せあれ!!」

そんな俺の願いは聞き届けられることは無かった。いや、分かってただけどね。少し位希望を持ったっていいだろう。

「姉さん、痛いです。お願いだから離して下さい。」

強制的に連行された俺は、姉さんから絡める様に腕を組まれたままアキバへと降り立った。

傍から見れば恋人の様な腕の組み方で、腕に伝わる柔らかい感覚が伝わってくる。普通ならヒスリそうなものだが、馬鹿力で完璧に関節を極められており、痛いなんてもんじゃなく、ヒスの気配さえない。…あれ？なんだか腕の感覚が無くなってきたんだけど。

「この程度の関節技を外せぬとは、情けない奴だ。」

姉さんはやれやれといった感じで、腕を解く。いや、あらゆる手段

を尽くしましたよ。感覚が無くなった腕を擦りながら、

「それで、何処行くんだ？」

「とりあえず、まずはBホルダーだよね。」

行く先を尋ねた理子の回答。まずは、つて他の店にも行くつてことかよ：何が悲しくて、無駄に長い女の買い物に付き合かなならんだ。そもそも、俺が女が苦手だと分かっている癖に、女ばかりの店に連れて行くなよ…

姉さんのお目当ての品はあっさりと手に入った。だったらさつきと帰ればいいのに、結局、理子先導の元、無意味なアキバ巡りに付き合うことになる。

電気街というイメージからオタクの街へと移り変わったアキバは、街の至る所にアニメやゲームキャラやメイド喫茶の看板が目に入る。

それだけでなく、個性や独自性を売りにした店舗も多く、あらゆる職業を網羅した喫茶やカフェまで存在する。そのうち武偵喫茶なんかまで作られそうだと。思っていたら、

「武偵喫茶？大丈夫なのこれ？」

アリアが看板を見てそう言う。もうあつたよ。ある意味スゲーなアキバ。

「入ってみる？」

理子がそう尋ねるが、

「結構よ。武偵高でもうお腹いっぱいだよ。」

アリアの返事に、全く同感だと俺も頷き、入店拒否する。

「じゃあ、ゲーセン行こ。」

理子の誘導でやってきたのはクラブセ○秋葉原新館、2010年2月、つい最近オープンしたアキバで最大レベルのミュージメント施設。筐体が放つ光と音、その喧騒に、俺のテンションが少し上がるのに対し、アリアと白雪は少し戸惑っている。そういや、姉さんつてこういう所に来たことはあるのだろうか？

姉さんの方を見ると、何故か天井を見つめている。

「姉さん、どうしたんだ？」

「いや、なんでもない。これも買ったし、大丈夫だ。」

と購入したBホルダーの入った袋を見せる。相変わらず会話が成  
立しないな。

「プリ撮ろー。」

理子がアリアと白雪の手を取り、引き摺って行く。

「ちよつと、離しなさいよ！キンジ、あんたも来るのよー！」

と騒ぐアリアさん。ここでガバを抜かれちやかなわんと、渋々ついで行く。

エスカレータの前を通り過ぎ様とした時、最悪の人物と目が合ってしまった。ああ、姉さんが天井を見ていたのは、上の階にこいつがいたからなのか…

「相変わらず辛気臭い顔ね、こっちまで不幸が移りそうだわ。」

開口一番でそんな事を平気で言える女はみすずしかない。てか、何してんだよ。いい大人が昼間っからゲーセンって、仕事はどうしたんだよ。

悪態には悪態で返そうとした俺の横で、

「狐崎っ…!!」

ギリツと歯噛みし、みすずを睨みつけるアリアがいた。えっ!? 知り合いなの!?

「あら、久しぶりね、神崎さん。」

アリアの睨みなど気にもせず、見下した様な態度でみすずが言った。

|||||

—神崎・H・アリア視点—

狐崎みすず、イ・ウーによって擦り付けられたママの冤罪を晴らす為に最初に雇った弁護士が彼女だった。

「信じてくれるのね。」

誰も信じてくれなかったイ・ウーの存在を、彼女は全く疑うどころか、肯定してくれた。

「ええ、しかし、厄介な相手だわ。冤罪を証明するには、イ・ウーの全

員を逮捕する必要があるの。残念だけど、私だけでは無理だわ。」

『私だけでは』彼女の言葉に希望を見出す。

「私が全員捕まえるわ!」

元よりその覚悟でいたのだから。しかし、私の覚悟を見た彼女は、予想していない答えを出す。

「何を言ってもいるのかしら。私が無理だと言っているのに、貴女一人で何が出来ると言うのかしら?」

「は?」

予想外の言葉に一瞬戸惑う。

「貴女が一人で捕まえられるのは精々1人か2人、話にならないわ。貴女がすべきことは、私の駒として指示に絶対服従することよ。勝手に行動されたら困るわ。」

「はあああつ!!アンタ何言ってるの!!なんでアンタの駒なんかにならなきゃならないのよっ!!」

あまりにも失礼極まりない物言いに、頭の血管が切れそうな程苛立つ。それだというのに、この女は、私の怒りなどどこ吹く風で更に続ける。

「学生でSランク、自信過剰になるのは分かるけど、現実を見なさい。私はね、親切で言ってるのよ。依頼人に死なれたら困るの。今の貴女程度なら、瞬きする暇さえ与えずに殺せる人間だっているのよ。」

「親切!?アンタの都合でしょ!」

「ええ、そうよ。私は勝つのが好きで、負けるのが嫌いなもの。どんな裁判であっても、私が出る以上、負けは許せないの。だから、依頼人だろうと邪魔されると困るのよ。」

全く悪びれる様子も無くそう言う。

「邪魔!?私が邪魔ですって!!」

「そう言ってるでしょう。貴女は私の言う通りに動く、いいえ、言われた以外の事はしないでくれればいいわ。そうすれば、勝てるから。無駄話はこれでいいわね、契約書にサインしてくれるかしら。」

テーブルに契約書を置く狐崎。バンツ、とその契約書ごとテーブルを叩き、

「お断りよ!!アンタなんかいなくても、私がママを助けるわ!!」

—————

———

—

思い出すだけでも腹が立つ。あの忌々しい女があの時と同じ様に、こちらを見下した様な目をして、私の前にいる。なんかキンジとも知り合いみたいね。そういえば以前『みすず』って叫んでたけど、狐崎のことだったのね。

「随分と時間が掛かったみたいだけど、お母様の冤罪が晴れて良かったわね。まあ、私に言わせたら遠回りし過ぎで、無駄が多過ぎると思うけど、相棒がキンジなんかじゃ仕方ないわね。」

「おい、さり気なく俺をデイスるな。」

キンジがそう言うが、

「事実でしょ。それにしても、貴女馬鹿よね、私に任せておけば、さつさと片付いていたわよ。せつかくイ・ウーと色金に関する資料も準備してあげてたし、イ・ウーの親玉が貴女の曾祖父だと分かってたから、邪魔だと言ってたのに、一時の感情で最善策を捨てるんだから。」

「はあっ!?アンタ、あの時そんなこと、ひと言も言っていなかったじゃない!!」

曾祖父様の事だけでなく、色金の事まで知っているのには驚くが、驚きよりも怒りが勝る。じゃあ、最初から言っておけばいいじゃない。

「言うわけ無いじゃない。契約も交わしてなければ、着手金も貰ってなかったもの。あの時貴女が契約書にサインしていれば、全て教えてあげたわよ。」

悪びれる様子もなく、そう言う狐崎にますます腹が立つ。

「確かにあの時感情的になったのは、私の落ち度かもしれないわ。だけど、そもそも挑発してきたのはそっちでしょ!!」

「挑発? 私は事実を述べただけよ。それにしても、もう終わった話で、よくそんなにも感情的になれるわね。」



プチン、と堪忍袋の緒が切れた。ガバメントに手が伸びる。

「みすず、そこまですておけ。」

かなこさんが狐崎の前に立ち、呆れた様に言う。

「あら、私は1ミリ、いいえ、1ミクロンも悪くないわよ。」

「何があつたかは知らぬが、言い方というものがある。昔からそうやって敵を作つてばかりだろうが。」

かなこさんの言葉に狐崎は溜息をつく。

「やめなさいよ、かなこに説教されるなんて、死にたくなるわ。」

「どういう意味だ!!」

「1から言わないと分からないかしら? ああ、ごめんなさい。バかなこには分からないわよね。」

狐崎の言葉に、とかなこさんからゴオツ、と殺気が放たれる。とんでもない威圧感にガバメントに伸びていた両手が震える。

これ、かなりヤバイんじゃないかしら。キンジと白雪なんか顔面蒼白でダラダラと汗を流しているし、理子は逃げる準備を整えている。

「キンジ、なんとかしなさいよ。」

私ではどうすることも出来ないのは分かるので、ボソボソと耳打ちする。

「死ねってことか? 無茶言うなよ。そもその原因はお前だろ。お前が止めて来いよ。」

震える声で痛いところを突かれる。そう言われても、あの間に入る勇氣は無い。立っているのも辛い程の殺気だ。そもそも、あの間に入っていける人物がこの世に存在するのだろうか?

エアコンの風で飛ばされてきたのだろうか、薄っぺらいチラシがふわりと2人の間に飛来する。したと同時に、一瞬でチラシが消える。駄目ね、間に入った瞬間、あのチラシの様に消える事になるわ。

もう止められない、誰もがそう思つた時だった。

「姐さーん!!」

飛び込む勇者、いいえかなこさんに抱きつこうとしたバカがいた。達人の間合いに入ったら当然の事、条件反射で拳が繰り出された。いや、出されたのだろう。私には見えなかった。

ドゴンツ、と人間を殴ったとしても、出てはいけない音が響く。尊い犠牲に、思わず合掌しようとした時だった。

「うわあっ!!ビックリした。どういう状況だこれ?」

殴られた人物が、ケロっとした様子で立っている。嘘でしょ!?人間辞めてたとしても死ぬわよアレ。隣に立つキンジも驚愕のあまり口が開いている。

「遅いわよ、ミラ。おかげで面倒くさい事になったじゃない。」

「こんな状況でも悪態をつけるって、ある意味凄いわ狐崎。」

「すまん、無意識に拳が出てしまった。」

いや、怖いわよ。無意識で出ていい威力じゃなかったわよ!!

「ヘーキ、ヘーキ、なんともねえよこんくらい。なんならもうちよい強くても大丈夫だぜ。」

狐崎にミラと呼ばれた女性が、ヘラヘラとそう答える。類は友を呼ぶとは言うけど、あの人も人外なのね。

「かなこ、貴女と遭遇するのは予想外だったけど、手間が省けたわ。少し話があるの。」

「さっきまでの威圧感が嘘の様に、一瞬で殺気が引く。」

「分かった。場所は?」

かなこさんの言葉に、狐崎がちらりと私たちを見る。

「変えた方がいいわね。少なくとも、ここは人が多過ぎるわ。」

「酒飲める所がいい。」

狐崎の言葉に、ミラと呼ばれた人物がそう答える。

「昼間だから、空いてる居酒屋は少ないわよ。」

「じゃあ、俺の家に酒買ってから行こうぜ。姐さんもそれでいいか?」

「私は構わん。」

はあ、と狐崎が溜息をつき、

「それでいいわ。ただし、私は絶対に飲まないわよ。」

「んじゃ、行こうぜー。」

ミラがかなこさんの腕を取り、歩き出す。どういう関係なのかしら?グイグイと引っ張られながらかなこさんはこちらへ顔を向け、

「理子、今日は助かった、感謝する。」

「あー、うん、また今度ゆっくり回ろー！」

なんとか明るく理子が振る舞う。あんたのそういうところは尊敬するわ。

そんな2人の後ろを狐崎がついていく。かなこさんと違い、振り向くどころか、全く興味が無いとばかりにこちらへ視線を向けることさえは無かった。

かなこさんたちが去ってから少しの間、私たちは呆然と立ち尽くしていた。

一触即発の空気から、一瞬で何事もなかったかの様に飲みに向かう人外2人と性悪1人、彼女たちがどういう関係かは知らないけど、世界にとって、最悪の組み合わせな気がしてならなかった。

## 譲れない人々

—狐崎みすず視点—

連絡先を交換しておいて正解だったわね。

かなこが飛び出していった翌々日、ミラから連絡があった。何かやらかす気はしていたけれど、案の定やらかしているみたいね。

詳しく話を聞くため、ミラを呼び出す。待ち合わせの当日、仕事はあつたけれど、半休を取り、正午には職場を出た。手早く仕事を終わらせる為、久々に本気を出してしまった。

待ち合わせ場所をクラブ〇ガにしておいて良かったわ。ミラが来る迄の時間を、仕事で荒んだ心を癒やす時間へと変える事が出来るから。

ダイナマ〇ト刑事で助けたくないヒロインを助け出し、ハイスコアでランキングを塗り替える。本当ならば、全ての筐体に私の名を刻みたいけど、時間が足りない。

ホント、羨ましい限りだわ。下りエスカレーターに乗り、そんな事を思う。

脳裏に浮かぶのは、現在待ち合わせしている相手と親友の姿。彼女たちの様に、自由気ままに生きていけるならば、どんなに幸福かしら。

一度の仕事で、一般人の生涯収入以上の金を受け取る傭兵と、何故か働かずに生きていける最強の女。自分がどれだけ努力しようと、彼女たちの様な生き方は出来ない。彼女たちは残酷な存在だ。

血の滲む様な努力をしても、圧倒的な才能でその上をいくのだから。

彼女たちの様にはなれない。だけど、私は彼女たちにはない才能がある。それを理解しているのから、こつこつと仕事をしているのだ。

何よりも、あの子の隣に立っていいのは私だけ。その思いがあるから、並び立つに相応しい武装弁護士という地位を築いている。

もつとも、あの子はそんな事を気にもしないでしょうけど。これは私の意地なのだ。

「相変わらず辛気臭い顔ね、こつちまで不幸が移りそうだわ。」

エスカレーターを降りた先、何故かかなことキンジがいる。ついでにキンジの元同級生でチームのメンバーだった女の子たちまでいる。

確か、黒髪ロングの少女が星伽白雪、かなこの従姉妹ね。金髪のふわふわしたのが峰理子、本名理子・峰・リュパン4世、元イ・ウーのメンバー。そして、過去に私と色々あった神崎・H・アリア。もう1人のレキって狙撃手は今日はいないのね。

「相変わらず辛気臭い顔ね、こつちまで不幸が移りそうだわ。」

キンジへ、とりあえず挨拶する。

それにしても、かなこは除くとしても、3人の美少女に囲まれてゲーセンって、いい御身分なこと。少し可愛がってあげようかしら。まあ、それよりも、

「狐崎っ…!!」

敵意?き出しのこの子が先ね。

確かに、言い方というものがあるというのは分かるし、分かっている。でも、『誰にでも喧嘩を売る女』物心ついた頃からそう呼ばれてきた私は、それを改善しないし、する気も無い。そもそも、悪いとも思っていない。

あの時の私の提案は間違っているとは微塵も思っていないし、寧ろ、正解だったと思っている。英国貴族としての権力とコネを持つ彼女が、私の駒としてかなこを捜す。発見次第、イ・ウーにかなこを送り込む。5分もあれば制圧出来るだろう。

これ以上ない提案を彼女は蹴ったのだから、彼女に協力する気も失せた。そもそも、協力してくれと言われたから、仕方なく話を聞いて、提案してあげたというのに、逆ギレって何なのかしら、なんだかいラツとするわね。

やりすぎた、とは思わない。だけど彼女の沸点が低すぎたわね。今にも銃を抜きそうな少女に冷めた眼差しを送る。強襲科の連中って、これだから嫌なのよね。とはいえ、彼女に対する興味はもう失せた。どうでもいいわ。仮に銃を抜いたとしても、かなこがいるもの。なんとでもなるわ。だって、あの子はいつだって私の味方だもの。

「みすず、そこまでにしておけ。」

私と神崎の間に立ち、呆れた様に言うかなこに違和感を感じた。

「あら、私は1ミリ、いいえ、1ミクロンも悪くないわよ。」

「何があったかは知らぬが、言い方というものがある。昔からそうやって敵を作つてばかりだろうが。」

モヤモヤとした感情が全身を駆け巡る。何故、彼女の肩を持つの？

「やめなさいよ、かなこに説教されるなんて、死にたくなるわ。」

「どういう意味だ!!」

あなたは、何があつても私を肯定し、味方でいるんじゃないやなかつたの？これ以上は喧嘩になるのは分かっている。今までもずっとそうだったから。だけどブレーキが効かない。

「1から言わないと分からないかしら？ああ、ごめんなさい。バかなこには分からないわよね。」

かなこから怒りのオーラが目で見える程噴き出る。大体あれだけで人がぶつ倒れるのに、何故か私には何ともないのよね。かなこの拳だつてそう、何故か避けられる。私は、武偵中のEランク生徒なんかよりも、遥かに身体能力で劣るのに、かなこの攻撃だけは避けられる。それは、初めから彼女に当てる気が無いのか、それとも、長い付き合いで、自然と身に付いてしまったものなのかは分からない。

だけど、そのおかげで、周囲が戦々恐々とする中でも平然と立つていられた。

とはいえ、こんな人目が多い所で揉めるのも考えものね。私たちは、子供だった昔と違い、今は社会人、節度というものがある。

なんて考えはある。だけど…謝る気は全くない。私たちは何度も喧嘩してきた。私が先に謝つたのは、最初の一回目だけ、それ以外で私が折れたことは一度もないし、それは今も揺るがない。

さて、どうやってかなこを謝らせましょうか…そんなことを考えていた。

「姐さん!!」

本来の待ち人である人物が、かなこに飛びつこうとして、反射的に殴られる。

…あの子に殴られて起き上がれる人間を初めて見たわ。『要塞』の異名は伊達ではないということかしら。まあ、中々に絶妙なタイムミングでの登場だったわよ、ミラ。

「かなこ、貴女と遭遇するのは予想外だったけど、手間が省けたわ。少し話があるの。」

大切な話がある時に使う声のトーンでそう言う。

本来、ミラの仕入れた情報に、私の持つ情報を加味し、現在のかなこに対する世界の動向を整理し、その対策を考える予定だった。まさかここになこが来ているとは思っていなかったけど、まあ、丁度良かったと思いましよう。

「分かった。場所は？」

こんな喧嘩の終わり方は初めてね。お互い大人になったということかしら。

「変えた方がいいわね。少なくとも、ここは人が多過ぎるわ。」

「酒飲める所がいい。」

私の言葉に、間髪入れずにそんなことを言うミラ。空気が読めてるのか読めてないのか、分からない子ね。

「ごめんなさい、私、貴女を見くびっていたわ。ここまで考え無しだったなんて…」

『姐さんがアメリカで暴れたらしい。』そんな連絡をミラから受けた時点で嫌な気はしていた。だけど、

「なんで自分の事を調査している連中を殴り飛ばして来るのよ…」

別に殴るのはいい、只々なんでそのまま帰すの？調査されるといことは、情報が足りていないということであり、こちらにアドバンテージがあるということ。そのアドバンテージを何故手放すのかしら。そのまま確保した調査員を、私に引渡してくれたなら、情報の漏洩はおろか、こちらの情報アドを増やす好機であり、主導権も握れたのに。

「別によいではないか。相手が如何に姑息な手段を用いてこようと、私は常に正面突破で戦う。」

ふふん、と無駄に大きな胸を張るかなこ。その姿にイラツとする。

「その何も詰まっていらない、空っぽの脳みそに何を言っても無駄なんでしょうけど、少しは私の指示に従ってもいいんじゃないかしら？」  
部屋に似つかわしくない安物の酒を、ミラと酌み交わすかなこに溜息をつきながら言う。

無駄に質の良いソファアに座り、そこから見える窓の外、他に高い建物は数える程しかない。ミラって本当にお金持ちなのね。都内有数のタワマン、その最上階を拠点にするか、位の軽い感覚で買えてしまうのだから。その癖に、質より量だと、安酒を大量に買い込む辺り、金銭感覚が理解出来ない。

「そんなに構えなくても大丈夫なんじゃね？ 姐さんならどんなエージェントが来ても返り討ちだろ。」

ぐびぐびと、ジョッキに注いだラムを飲みながら、そんなことを言うミラ。その飲み方はどうなの？ とは思うが、今それはどうでもいい。

「ええ、別になんかが負ける可能性なんてミクロンも考えていないわ。ただ、無駄に敵を増やすメリットも無いし、事態が思い通りに進まなくなるでしょう。」

「お前が言うな。みすず。お前だって誰彼構わず喧嘩売っては私に殴らせていた癖に。」

「仕方ないでしょ、気に食わなかったんだから。」

「お前、ある意味スゲエよ…」

ソファアの肘置きに腕を載せ、頬杖を付きながらそんなことを言うてくるミラ。その顔には朱が差し、酔いが回り始めている。

「そうだ、みすず。これを返しておく。」

そう言っただけで差し出される紙袋。アキバにあるコスプレ衣装店の店名が書かれている。それでなんとなく察する。

「壊したのね。まあ、買い直しているだけ、以前より成長したわね。」  
まだ封の切られていない、新品のBホルダー。なんで壊れるのよ…  
「壊していない。動いていたら勝手に壊れたのだ。男装は当然も面白い。胸がキツイし動きづらいだけだ。」

耐えられなかったということ…何故、神はこの馬鹿には不要な女ら



しさを与えたの…

己の胸に手を当てる。認めたくないし、気に食わないけれど、現実には覆らないのだ。

「おい、何故睨む。ちゃんと謝っただろう。」

「ええ、壊したことはもういいのよ。ただ、なんか気に食わないだけよ。」

「お、おい!!ちよつと待てよ!!聞き捨てならない言葉が聞こえたぜ。姐さん、男装したのか?」

「ええ、もう飽きたみたいだけどね。」

「うむ、当分やらんぞ。」

かなこの言葉を聞き、ミラは一瞬で酔いが醒めた様な表情になる。

「ちくしょうーっ!!なんでそんな時呼んでくれなかったんだよーっ!!俺も見たかったーっ!!」

泣きながら床を転げ回るミラ。なんだか哀れね。

「ミラ、一応写真を撮ってあるのだけど。」

「いくらだ!!」

そういう躊躇いのないところは好感を持てるわね。

「そうね…いくらまで出せるのかしら?」

「この部屋をやる!!」

「悪くないけど、固定資産税とか贈与税とか面倒なのよね。」

予想以上の金額の物を差し出そうとするミラに口角が上がる。これ、いい商売になりそうだわ。

「因みに、私、かなこの写真、結構持つてるのよね。」

そう言うと、ドタドタと何処かへ走っていき、すぐに戻ってくる。

「これでどうだ!!」

差し出されるクレジットカード。ある意味現金よりも最高の贈り物ね。

「交渉成立ね。」

「良いわけがないだろう。」

背後から飛来するかなこの拳を避ける。

「危ないわね。かなこには関係ないでしょう?」

「私の写真で儲けようとするな。欲しいというのならくれてやれば良いだろう。こうやって、場所や酒を用意してくれているのだ。」

甘っちょろいわね。儲けられる時に儲けないなんて。

「いや、ちよつと待て。なんでアレを避けんだよ。」

驚いた様子でミラが目を丸くしている。

「なんでって、なんでかしら？ 避けれるから避けただけよ。というより、当たったら死んじゃうじゃない。」

貧弱な私にかなこの拳が当たったなら、下手したら骨も残らないんじゃないかしら。

「みすずも姐さん並ってことはねえよな。」

「当たり前でしょう。こんなのが2人もいたら世界はとつくに滅んでるわよ。」

「ふーん、でもある程度はやれんだろ。」

ゴス、と左肩にミラの拳が当たる。

「え!! なんだだよ!!」

「ミラ、みすずは私の攻撃以外は全く避けられない。というより運動とか全滅だぞ。」

「なんで武偵やってんだよ…」

「ふ、ふふふ、ふふふふふ…」

「マズい、ミラ、今すぐ謝れ。」

突然笑い出した私を見て、かなこが焦る。

「ミラ、いい度胸ね。そう、そんなに私と喧嘩したいのね。」

|||||

— 冷泉為和視点 —

都内のとあるバー、カウンターに腰掛ける2人。僕と親友である真中央<sup>まなかあきら</sup>。武偵高入学試験の時に、落ち込んでいた僕に声を掛けてくれたことがきっかけで、入学後も色んな武偵の風習を教えてください、コンビを組んだり、本当に沢山助けられた。それを恩に着せる様

なこともなく、ずっと仲良くしてくれた。

本当にいい奴で、僕は彼の頼みなら、遠山さん以外の全てを捨てて、最優先にする位には彼を信頼しているし、感謝している。

今日はお互いに予定が合い、久しぶりにこうやって飲めることに喜びを感じる。遠山さんに再び会う、そんな僕の1つの夢は叶ったそれも、元をただせば、彼との出会いが会ったからかもしれない。そういう意味でも本当に感謝しかない。

「しかし、冷泉が武装検事なんて、武偵高入学した時の俺に言っても、絶対信じないだろうな。あの時はお前が強襲科ってだけでも信じられなかったからな。」

「はは、本当にあの時はたいへんだったよ。何回死んだと思ったことやら。」

実際、実力も、経験も、度胸も足りなかったあの時の僕は、毎日死にかけていた。自分でもよく生きてるなあと思う程である。

「やっぱスゲエよお前、努力してたのも知ってるけど、才能とか相性とかもあるんだろうけど、それ以上に凄い執念みたいなのがあったし、今考えたら、本当、尊敬する。俺はあんな風になれなかったからさ。」  
「そんなことない。僕だって1人なら諦めていたと思う。アキラが居てくれたから頑張れたんだ。…何か悩んでるの?」

いつもとは少し様子の違う彼に訊ねる。もし悩みがあるなら、全力で助ける。聞かなきゃよかった、そう思うのはその直後だった。

「恥ずかしい話なんだけど、俺、ずっと好きな人がいるんだ。」

アキラもか、僕もずっと遠山さんを追いかけている。

「それで、相手はどんな人?」

「冷泉も知ってる人だ。いや、冷泉が一番仲良いのかな。」

僕と仲が良い女性? 思い当たる人物がない。いったい、誰のことを言っているんだろう…まさか!! いや、まさかね。もし、もしもアキラが遠山さんを知っていて、彼が彼女に恋心を抱いているのなら…僕は親友を失うことになる。

「まさか…」

「ああ、そのまさかだ。やっぱり気付いてたよな。俺、分かりやすかつ

たし。」

そんな…？だと云つてくれ!!懐の銃に手が伸びる。

「そう、みすずちゃんだよ。」

「はい?」

みすずちゃん?みすずちゃんつて…

「もしかして、狐崎さん?」

「そう言ってるだろ。」

頬を朱に染めながらそう言う親友。

「アキラ、悪いことは言わない。あの悪魔だけは駄目だ。」

不幸というゴールしか存在しない茨の道を進もうとする親友を止めなければ。というより…

「それに、なんで僕が狐崎さんと仲良いつて思われてるの?大っ嫌いなんだけどあの人!!」

「見損なつたぜ、冷泉。みすずちゃんの可愛さが分からないなんて…」  
見損なつたのは僕の方だ。あんな悪魔よりも悪魔らしい女のどこがいいというのだろう。一度病院に連れていった方がいいのだろうか?

「みすずちゃんみたいなの、可愛い子と仲良いのに、他の女に現を抜かすなんて、お前大丈夫か?」

「はあ?!僕の天使、いや、女神とあんな悪魔、比べ物になるわけないだろう!!」

あの悪魔と遠山さんを比べるなんてこと自体が失礼過ぎる。

「なんだと!!」

アキラが怒りを露にする。彼と喧嘩なんて、いつ以来だろう。

でもいいんだ、喧嘩してでも、力づくでも、彼を正常な道に戻さなくては…それが親友としての、僕の努めだ。

カランカラン、と扉の開く音。

「あら、やっぱりこの店はやめておきましょう。」

「えーなんでだよ。面倒くせえからここでもいいよ。」

「ん?冷泉ではないか。」

悪魔が天使と変なのを連れて来た。

## 無自覚

—狐崎みすず視点—

とりあえず、ミラ半泣きになるまで言葉で責め続けた。物理的ダメージを殆ど無効化する彼女でも、心の守りは突破することは可能だから。

「みすず、もう勘弁してやれ。」

ミラが目を赤くして、鼻を嚙り始めたあたりでかなこが止めに入る。正直カツとなってやり過ぎたとは思っている。だけど後悔も反省もないし、むしろまだ足りない。ただ、ミラとは良い関係にいる方がメリツトが多い。

「仕方ないわね。」

溜息を吐いて、スマホを弄る。直ぐにミラのスマホが音を鳴らす。「あげるわ。」

かなこの男装写真を一枚送ってみたが…さっきまで泣きべそかいていたミラが、一瞬でパアツと笑顔に変わる。完全に恋する乙女の顔ね。

「とりあえず、今回はそれで手打ち、と言いたいところだけど…正直まだ腹の虫は収まらないのよね。食事くらい奢りなさい。それで許してあげるわ。」

「分かった。」

こちらの声が本当に聞こえてるのか分からない程、スマホの画面に食いつく様に見入っているミラの返事を聞き、とりあえず、自腹では行けない様な所へ行こうと決めた。

「もう一軒！」

案の定酔いの回ったミラが騒ぐ。折角減多に食べられない懐石料理を前にして、それらを酒の肴程度にしか考えず、ガバガバと日本酒を空けていく2人に呆れていたが、まだ飲み足りないのかしら。

かなこことミラ、この2人の共通点は、食べればそれでいい、飲め

ればそれでいい、という感じで、食に対する執着が薄い。もつとも、かなこは肉に対するこだわりは強いみたいだけど。

「飲み過ぎよ。逆になんでかなこは平気なのかしら。」

相変わらず、酔った素振りさええない親友は、ミラの倍近い量の酒を空けても、顔色一つ変わらずに普段と全く変わらない。

「さあな、どうやら私は酒に強いらしい。なんにせよ、強いことはいいことだ。」

いや、やっぱり酔ってるのかしら？いえ、アホなのはいつものことね。

「お、バーがある。ここでいいぜ。」

薄いネオンの光、中の様子も見えないバー。高級店の並ぶ場所にあるから、怪しい店ではないと思うけど、あんまりセンスが良くない店ね。あんなどころをカッコいいと思って好んで使う男たちが店の中にいるとすれば、出来れば入店したくないわね。

「あんまり気が進まないわね。」

「まあ、よいではないか。ああいった店は経験がない。みすずもだろう？。」

好奇心旺盛なかなこは行くつもりらしい。

「当然よ。そもそもお酒飲めないんだから、バーなんて無縁なものよ。」

「じゃあ、行くぞ。折角の機会だ、何事も経験した方がいい。なに、心配するな。何かあったら、私が守る。」

「店、壊さないでよ。」

最強のボディガードが暴れてしまえば、あの店は一瞬で更地になる。不安定な立場であるかなこには、あまり騒動は起こして欲しくないわね。

ミラが店の扉を開ける。その後ろに立っていた私は、店内に2人組の男がいるのが見えた。

「あら、やっぱりこの店はやめておきましょう。」

オフに商売敵とは顔を会わせたくはない。彼の奢りになるのなら、それでもいいけど。

「えーなんでだよ。面倒くせえからここでもいいよ。」

私の反対は聞かずに、ズカズカと店内に進むミラを、扉のところから見送る。そんな私の後ろから顔をだしたかなこも、

「ん？冷泉ではないか。」

面倒臭い男を見つけた。

|||||

—冷泉為和視点—

「飲めないんじゃないですか？ここ、バーですよ。お帰りになった方がいいですよ。」

「何処で何をしようと私の勝手よ。別に犯罪行為をしているわけじゃないんだから、貴方にとやかく言う権利は無いわ。」

店内に入ってきた悪魔を退散させたいが、口で言い合っただって勝ち目がないのは、これまでの経験でも分かっている。

「誰かと思ったら、この間の財布じゃねえか。また奢ってくれんのか？」

そして、この失礼極まりない女が、世界最強とも謳われる『要塞』であるとは、今だに信じられない。

なんだか胃と頭が痛くなってきた。

「おい、なんだよあの美人。あの人がお前の…」

横から、アキラがボソボソと耳打ちしてくる。そう、誰もが見惚れる、この世の宝であり、天使で女神な遠山さんがいるのだ。

それだけで、胃の痛みからも、頭の痛みからも解放される。

「そうだよ。凄い人なんだ。」

僕もボソボソとアキラへ耳打ちする。遠山さんに見惚れている彼が、これであの悪魔の呪縛から開放されるのは、親友として嬉しい限りだが、もし、彼が遠山さんに手を出そうものなら、親友を失うこととなってしまふ。

「冷泉と…お前の友人か？」

そんな僕たちの前に、遠山さんが現れる。彼女とアキラは初対面だし、一応紹介しておいた方がいいのだろう。

「遠山さん、彼は僕の武偵高時代からの友人でして。」

「真中央まなかあきらです!!」

アキラが立ち上がり、名乗る。

「武偵高の…ならばみすずとも知り合いか。」

「…誰かしら?知らないわね。」

さらっと知らない人にされたアキラを不憫に思う。

「そ、そんな!」

案の定、ショックを受けている。

「冗談よ、真中央、強襲科Bランクで、今はしががない武偵事務所働いているみたいね。私にとって、何の魅力も無いから、武偵高卒業前に、告白されてなければ、忘れてたわ。」

辛辣な評価だなあ…ん?告白?

「アキラ!聞いてないよ!」

「当たり前だ!言っただけからな!」

なんてことだ、そんな人生を棒に振る様なことを…

「私も初耳だ。それで、どうなったのさ?」

遠山さんも、少し驚いた様に狐崎さんへ質問する。

「どうもならないわよ。彼と交際しても、私には何の利益もないじゃない。」

この悪魔は、恋愛さえも損得勘定でしか測れないのか。

「利益って、例えばどんな…」

アキラ、こんな悪魔は諦めて、普通の恋愛をしよう。

「そうね、大金持ちか、かなこくらい強いなら、考えてあげるわ。」

可能性があるとすれば、前者か。遠山さんよりも強くなるのは、諦めるしかない。

失念していたことがあった。アキラは、遠山さんの強さを知らない。彼にとっては、ただの美人な僕の思い人としか見えないのだ。

「案外、簡単そうさ。」

ニヤリと小さく笑みを浮かべるアキラ。



「やめるんだ！それは本当にヤバいから。」

武装検事や公安職員が束になっても、手加減した彼女に傷ひとつつけることが出来ないのに、たかがBランクの武偵に、何ができると言うのだ。

「別に、私は構わんぞ。」

特に気にもせず、そんなことを言う遠山さんは、胸元の大きく開いた真紅のタイトドレス、そんな刺激的な格好だというのに、腕を組んでいることで、その大きな双丘が更に強調され、恐ろしいことになっている。

「相手になんねえだろ。そいつじゃ。」

ウイスキーの入ったグラスを片手に、要塞がアキラを見てそう言う。彼女の言う通りだ。

「いや、能ある鷹は爪を隠すと言うし、この男から何の力も感じぬが、この自信、恐ろしく強いのだろう。」

マズい、遠山さんが勘違いしている。このままだと、アキラは、骨どころか、塵ひとつ残らない。

「アキラ、遠山さん、彼女はRランク武偵だ。君じゃあ、いや、僕と君が手を組んで、二対一で戦っても、一秒持てば御の字だ。」

流石に親友を失いたくはないから、そう耳打ちする。

「ア、Rランク…」

アキラから驚愕の声漏れる。彼女のランクを聞いただけで、戦意喪失したようだ。

「Rランク？なんだそれは？」

当の本人は、自分の事なのに頭に疑問符を浮かべている。あれ？金一くんから話聞いてないんですか？

「武偵ランクのことよ、バカナコ。貴方の武偵ランクはRで、SDAランクは総合1位。自分の事なんだから、覚えておきなさいよ。」

狐崎さんが、遠山さんの後ろからそう言う。

「おい、バカナコと言うな。」

ムツとした表情で、遠山さんが狐崎さんの方を向く。

「SDAランク総合1位って…人間辞めた連中を超えた化物じゃねえ

か！」

目の前の麗しく女神の様な女性が、そんな人物だと想像することは難しいから、アキラが取り乱すのも無理はない。しかし、僕の天使を化物呼ばわりとは：アキラ、君には失望したよ。

アキラの無礼な言葉に、遠山さんは、先程以上にムツとした表情でアキラの方を見る。

「失礼な奴だ。か弱き乙女に向かって、化物呼ばわりとは。」

「「か弱き乙女？」」

化物呼ばわりは確かに無礼なだし、失礼だ。だけど、少なからずRランク武偵でS D Aランク総合1位の人物がか弱き乙女？

「かなこ、貴女がか弱いのなら、それ以下のこの男共はどうなるのかしら？」

しれっと自分のことは棚に上げる狐崎さん。

「姐さん、俺でも自分をか弱いと思ったことはねえぞ…」

世界最強クラスの傭兵は、己の力に自覚があるらしい。

「いや、私はか弱き乙女だと父上に言われた。だからか弱き乙女なのだ。それに、私の戦い方も、非力故に、速度重視で威力は軽微だからな。もっと強くならねばならぬ。」

彼女は何処を指しているのだろうか：少なからず、金剛力士の末裔であり、筋肉お化けな獅堂さんに力で圧勝できる人が非力ではないと思う。

「大型トラックを片手で軽々と持ち上げて、海を割ったり、大地を抉って地震を起こすかなこが非力？貴女遂に頭が完全に壊れたのね。もう手遅れでしょうけど、一緒に病院へ行きましょう。馬鹿に付ける薬はないけど、現代医学の進歩具合なら、100年後には開発されてるかもしれないわよ。」

「姐さん、悪いことは言わねえ。病院行こう。絶対頭おかしいぜ。」

遠山さんは、女性陣にガシツと両腕を抱えられ、引つ張られている。

「おい、離せ！嫌だ！私は病院など行かぬぞ！」

頭がおかしいと言われたことよりも、病院が嫌いらしい。なんだか可愛い。

騒々しくバーを後にした女性陣。取り残された僕たちはポカんとしていた。

「あ、お金払ってない。」

あんな短時間なのに、彼女たちの伝票は、僕らの倍近い数字が刻まれている。

財布が氷河期を迎えた僕らは、コンビニで買った缶ビールを片手に、公園のベンチに並んで座っていた。

「なあ、どうやったらみすずちゃんが振り向いてくれると思う?」

「お金持ちになるしかないんじゃないかな。」

缶ビールをチビチビ飲みながら下らない会話をする。お酒がなければ、なんだか学生時代に戻ったみたいだ。もともと、素面ではあの頃のように、戻れないのかもしれないけど。大人になって、お互いに仕事や人間関係、学生の頃みたいに、心の中をなんでもさらけ出すことは出来なくなってしまった。

「金持ちって、どうやったらなれるんだ?」

「知ってたら、とっくにお金持ちになって、公園で缶ビールなんか飲んでないよ。」

「違いねえ。」

笑い合って、お互いの缶ビールをぶつける。

「しかし、あのRランクさん、遠山さんだっけ? 凄かったなあ。」  
「だろう。」

何故か僕が自慢気にドヤ顔する。

「いやあ、スゲエよ。あんなデカいとは…」

そう言って、自分の胸の前を両手で持ち上げる様な動作をする。

「貴様あ! 僕の天使を汚れた目で見えるなあ!」

高2の秋以来、実に7年ぶりに大喧嘩をしたのだった。

## 外伝：緋弾のアリア i f . i f — 極東戦役編 —

|| もしも、極東戦役の際に、かなこが戻って来ていたら ||

— 極東戦役開幕 —

俺たちバスカービルが『師団』に付くことが勝手に決まった流れになる。

「さて…残りは貴方だけです？」

中国服で丸メガネの男、諸葛静幻が、霧の中のもうひとりに話しかける。

「——— どれいつもこいつも取るに足らねエ。ムダ足だったぜ。」

「——— いいのかGⅢ。このまま帰れば、お前は『無所属』になるぞ。」

GⅢが無所属を表明する。

「——— いいか。次は一番強えのを連れてこい。それを全殺しにしてやる。」

と言ったGⅢの体から、ジツ…ジツ……という壊れた蛍光灯のような音がし、姿が見えなくなり始めた時だった。

「なんだ、私は参加出来ないのか？」

誰一人として、その気配に気付くことさえ出来なかった。ただ、その声に、冷や汗がドバッと噴き出る。俺だけじゃない、カナとなっている兄さんも同じだ。

幼い頃から叩き込まれた、圧倒的な、どれだけ研鑽を重ねようと、届かない高み。イ・ウーとの戦いで、いろんな怪物級の敵や、ヴラドの様なまんま化物とも相対してきたが、そんな連中が園児のお遊戯レベル以下に感じれる程の、間違いなくこの世で最強の生物の声。

「おい、カナ。私は本当に参加出来ぬのか？」

カナの後ろに立ち、巨大な胸を持ち上げる様に腕を組んでいるのは、我ら遠山家の長女、俺たちの姉さんだった。

「ね、姉さん…何故ここへ…いつからいたの…」

カナが恐る恐る振り向き言う。

「いつからかと言われれば、そのこの女が何やら挨拶しておった時から

だが？それよりも、これは何の祭りだ？私も参加したいのだが。」

ジャンヌを指し、そう言う姉さん。つまり、最初からいたのに、誰一人としてその存在に気付けなかったということだ。

「待て、姉だとい!? どういうことだ!？」

姿を消そうとしていたGⅢが、驚愕した声を上げる。

無理もない、遠山家には、俺と兄さんしかいないことになってるからな。しかし、それをおいそれと教えてやる必要はない。

そんなGⅢの声を遮るように、玉藻が、ピョンピョンと飛び跳ね、

「おお、かなこー! お主は、俺の仲間じゃからな。『師団』じゃ!」

勝手に宣言する。

「お前、なんで姉さんを知ってるんだ!？」

一部の人間しか知らない姉さんと、旧知の仲の様に接する玉藻に驚く。

「む? そりゃあ、何度か星伽の里で会っておるからのお。それよりも、あやつがおれば、負けは有り得ぬ、いや、勝ちも確定じゃ!」

悪い笑みを浮かべる玉藻。そういやこいつ、星伽がどうたら言ってたな。

「待ちなさい! それは反則よ!」

『無所属』のカナが慌てた様に声を上げる。『無所属』だからといって、安全圏ではない。敵でも、味方でもない、中途半端な立ち位置で、相手が姉さんである場合、なんとなく殴りたくなったとかふざけた理由で、無差別に拳が飛んでくる恐れがある。姉さんの恐ろしさを身に染みて知っているカナ（兄さん）なら、その力が己に向かう可能性があるのは、許容出来る訳がない。

「いいや、反則じゃない。姉さんは『師団』だ!」

しかし、それは俺だって同じだ。もし、姉さんがカナの味方になり、『無所属』なんてなったら、俺が最悪死ぬ。

成り行きでなった『師団』だが、何故かも立場を変えられない様なので、例えカナと戦う事になったとしても、姉さんだけは味方に引き入れるしかない。というより、姉さんひとり対全員となっても、姉さんが勝つと思う。

「そうじゃ、かなこ、こつちに来るのじゃ！」

「ダメよ姉さん。姉さんはここにいて！」

俺と玉藻対カナで、姉さんの奪い合いが始まる。姉さんの所属で勝敗が決まるとか、なにこのクソゲー。

「私はどつちにつくのが良いのだ？」

そんな俺たちの醜い争いを無視し、何故か姉さんはジャンヌの前に瞬間移動し、そんな質問をしている。

「な、何故私に……」

突然、本当に一瞬で目の前に現れた姉さんに、驚愕し、目を見開いている。しかし、ラッキーだな。ジャンヌは『師団』だ。

「お前が場を仕切っていたようだったのだな。それで、どうすればよいのだ？」

訳の分からない状況に追い込まれ、困惑しているジャンヌが、俺の方を見る。頼む『師団』と言ってくれ。必死に祈る俺の姿がジャンヌの瞳に写ったのか、戦術家の一族であるジャンヌは、姉さんの戦力に気付く。

「じゃ、じゃあ『師団』で……」

困惑の表情のまま、『師団』の勝利宣言をする。

大きくガッツポーズをする俺と玉藻。対照的に逃げる準備を始めるカナ。ここに勝敗は決した。

「ジャンヌ、これで全員済んだ。……ということでもいいのかしら？」

「あー、うん、そうだな……そういうことになるのか？」

ヒルダの問いに、なんとも歯切れが悪い返事をするジャンヌ。姉さんがかき乱した場を押しつけて悪いと思ってるよ。

「じゃあ、いいのね？」

ジャンヌが慌てた表情で、短縮マバタキ信号を送ってくる。『逃げろ』。心配してくれるのは有難いし、普段なら、慌てふためき、這う這うの体で逃げ出さるうけど、今回は何の心配も要らない。

なんなら、何もしなくていいままである。

「遠山、逃げろッ！」

ヒルダを筆頭に、『眷属』の連中が動き出す。ジャンヌが何かをしよ

うとしたが、それよりも遥かに早く動いていた者がいる。

「なんだ、手応えのない連中だ。ここにおらぬ連中は、もう少し手応えはあるのだろうか？」

死屍累々と横たわる『眷属』と『無所属』の奴ら。可哀想に、カナも巻き込まれたのか：姉さんのやつ、マジで無差別にやりやがった。

「流石じゃのお：：かなこが『師団』で本当に良かったのじゃ：：」

「本当、もし『無所属』だったら、俺たちがあなってたんだもんな：：」

ジャンヌの判断に感謝しなければ。

「おい、待て！なんだこれは！」

そんなジャンヌは声を荒げている。

「なにって？姉さんが暴れただけだぞ。」

寧ろ、あの程度なら準備運動にさえなっていないのかもしれないけど。

「ジャンヌ、良い判断じゃったぞ。お主の決断次第では、我らがあの様になっっていたのだから。」

理解出来ない、ただ、恐ろしい未来を偶然回避出来たということだけは、ジャンヌに伝わったようだ。

「遠山：：お前の姉、おかしくないか？」

「バカだなあ、ジャンヌ。なに当たり前のこと言ってるんだよ。」

「イ・ウーの残党！セットで逮捕よ！：：って、なによこれ!？」

霧が晴れ、突入したアリアがあっけに取られている。意気揚々と、暴れに来たのに、その標的たちは地面とキスしているのだから、仕方ないか。

「ちよつと、キンジ！どういうことよ！」

「どうもこうもない、終わったんだよ。ほら、さっさと逮捕しようぜ。」

「なんだ、キンジの仲間か：：新しい獲物：：ではなく敵ではなかったのか。」

少し残念そうな姉さん。獲物って：：

「あ、あんた、キンジのなんなのよ！」

おいマジかよ！あの姉さんに若干臆しながらも食って掛かるなんて、アリア凄え。

「姉だ。…しかし、準備運動にもならなかったな。キンジ組み手に付き合え。次いでに、お前もどうだ？」

「キ、キンジのお、お姉さん!？」

驚きを隠さず（隠せず）に、俺と姉さんを交互に、何度も見比べるアリア。しかし、俺はそれどころじゃない。姉さんの恐ろしい提案で、折角回避した死亡ルートに逆戻りしそうだからだ。

「ちよつと、キンジ。どういうこと、聞いてないわよ。」

「すまん、それどころじゃない。」

ぼそぼそと耳打ちしてくるアリアに対し、俺は噴き出る汗も拭わずに、なんとか回避する手立てはないものかと、必死に脳をフル回転させる。

「ほれ、キンジ。さつさと始めるぞ。」

パキパキと拳を鳴らす姉さん。マズいこのままだと死ぬ。

「いやあ、実は今調子悪くて…」

苦しい言い訳。

「それがなんだ？ 敵は待つてくれぬぞ。」

ガシツと掴まれ、前に立たされる。

「早く構えぬか。」

「嫌だ！ 死にたくない！」

逃げようとする俺にアイアンクローをかまし、

「全く、カナといいキンジといい、全く強くなっておらんではないか。

これでは、母上に合わせる顔がない。」

いや、姉さんが強過ぎるんですよ…

俺の断末魔で終わりを迎えた、極東戦役初日。

翌日、自宅のベットで寝ていた俺は、早朝にけたたましく鳴る携帯の着信音で目覚める。

体が痛え…畜生、痣だらけになつてるよ。どうやって自宅に戻ったのかも覚えて無い。覚えているのは、姉さんから数発頂いた拳の痛みと恐怖だけだ。

「誰だ、こんな朝早くに…」

表示された番号はジャンヌのもの、なんかあったのか？



「こんな朝早くに、なんだよジャンヌ。」

眠気と痛みで不機嫌な声で電話に出る。

「すまない遠山、まさか出るとは思ってなかったのだ。留守電を残そうとしていたのだが…そんなことより、お前、大丈夫なのか？」

心配そうなジャンヌの声。

「大丈夫なわけないだろ。全身痣だらけで、体中痛えよ。」

「逆に、何故その程度で済んでるんだ？カナを除いて、他の連中は皆、死人の様になっているというのに…」

そりゃあ、俺と兄さんは散々殴られてきたからな。この程度でくたばっていたら、何千、何万回と死んでいるだろう。

「あんなの、姉さんが実家を出るまで日常茶飯事だったからな。久々だから、滅茶苦茶痛かったけどな。」

「遠山、やはりお前も異常だな…」

驚きと呆れの籠もった声でジャンヌがそう言う。失礼な、俺は普通の平凡な武偵だというのに。

「まあいい、それで、用件はなんなんだ？」

「ああ、極東戦役のことなんだが、『眷属』側が交渉役をこちらへ寄越してきた。午後から交渉が行われるが来てくれ。」

面倒くさいなあ。でも、行かないとそれもそれで面倒くさそうだ。

「分かったよ。場所は？」

午後になり、ジャンヌに指定された交渉場所となる、都内の高級ホテルへやって来る。

武偵高の制服で来てしまったが、場違い感が半端じゃない。

「来たか遠山。」

フロント前のロビー、そのソファアに腰掛けていたジャンヌが俺に声を掛けてくる。ドレススーツを身に着け、コーヒーを片手に新聞を読んでいる姿は、出来る女って感じた。

「随分と立派な場所で交渉するんだな。費用は誰が持つんだ？」

まさか俺じゃないよね。そんな金は無いから土台無理な話だぞ。

「安心しろ、犯人逮捕の礼として、神崎が出してくれている。」

成程、律儀な奴だな。

「しかし、昨日の今日で早速交渉って…よっぽど姉さんの存在が効いたみたいだな。」

「当然だ。あんなのどうしろというんだ！味方だったから良いものの、アレが敵に回ったら『師団』は全滅だ！おまけに、『無所属』の者まで巻き添えを喰らい、『師団』の立場は最悪となっているのだぞ！」

敵味方関係なく被害をもたらした姉さんにご立腹の様だ。

「文句なら、直接姉さんに言ってくれよ。」

しかし、俺に当たるのはお門違いだ。

「無茶言うな！私に死ぬと言うのか！」

やっぱり、姉さんはそういう認識になるのか。味方であり、弟である俺にも容赦なく襲いかかるバーサーカーだもんね。

でも…

「交渉とかつて苦手なんだが、今回は楽勝だな。」

「なんだ遠山、随分と余裕ではないか。油断大敵、『眷属』の交渉役は、かなりのやり手だぞ。それに、交渉が本当に交渉で終わるか…」

なるほど、そういう可能性も考慮しなければならぬのか…武力投入したら、それはもう交渉じゃないじゃん。とは思うけど、平和ボケした日本で生まれ育った俺と、割と殺伐とした欧州育ちのジャンヌの考え方の違いなのか、それともこれは戦争、なんでもありだということか。

どっちにしる俺が甘いということだ。普段ならな。しかし、今回の俺は違う。どんなに格好悪かろうと、姑息で卑怯と罵られようと、使えるものはなんでも使うつもりだ。

「大丈夫、絶対に俺らが有利だ。何があろうとな。」

自信満々で答える俺に、ジャンヌは少し疑った目を向けていた。

会議室を貸し切った交渉の場には、既に2人が座っていた。1人はあの時にもいた中国服の男、諸葛。もうひとりには知らないが、何故かメイド服を着た女だ。

げえ、女か…なんか遣りづらいなあ。

「待たせて悪いな。『師団』の欧州代表として私と、アジア代表として遠山が交渉役となった。」

ジャンヌがそう言って席につく。おい、勝手に俺を代表にするなよ。

『眷属』アジアの代表として、私、諸葛静幻と…」

「欧州代表のリサと申します。」

リサと名乗ったメイド服の女は、礼儀正しく立ち上がって一礼する。

なんか、日本のなんちゃってメイドとは違って、本物みたいだ。なんでメイドが交渉役なんだよ。

「それで、昨日の今日でなんなんだよ。」

礼もへつたくれもなく、高圧的に話を振る。状況はこちらの圧倒的有利どころか、俺的には、姉さんがこちらについていた以上、勝ち確定しているのだ。

「昨日の今日だからですよ。なんですかアレ？反則でしょう？」

諸葛が苦虫を噛み潰したような表情でそう言う。うん、俺も思う。でも、そんなことはどうでもいいのだ。だって俺も殴られたから。

『眷属』についた自分を恨むんだな。どうせお前たちだって、化物行使しようとしてたんだろ。」

これは推測でしかないが、ヒルダとか鬼とかいたし、絶対人間じゃない連中がうじゃうじゃいるに違いない。

凶星だったのか、口を閉じる諸葛。まあ、化物具合が段違いだけど、こっちだけ使うのをやめろというのは筋が通らないだろ。

「しかし、無差別で襲いかかる様なモノをのに放つのは如何なものかと…味方である筈の遠山様までも被害を受けておられたと聞いております。」

完全に全てを破壊するバーサーカー扱いだな。まあ、間違っていないけど。

しかし、つくづく交渉とかに向いてないな俺。もう反論する言葉に悩み始めてるよ。

「遠山…」

心配そうに見てくるジャンヌ。

「大丈夫、任せておけ。」

しかし、俺には切り札がある。こんなに早く切ることになると思っただけだな。

「ゴタゴタと面倒くさい交渉は終わりだ。」

「いえ、始まったばかりですよ。」

何を言い出したんだこいつ、そんな目で諸葛が俺を見てそう言う。うるさい、姉さんをけしかけるぞ。」

これが俺の切り札。虎の威を借る、それも地上最強の虎の。

ジャンヌが、うわあ…という最低のものを見る目で見てくるが、知ったことじゃない。勝てば官軍、戦いにおいて最大の悪は敗北だ。

「ひ、卑怯ではありませんか？ここは交渉の場ですよ。」

諸葛の言葉に、リサとジャンヌが頷く。ジャンヌ、お前は味方だろうが。

「戦いに卑怯もクソもあるか。嫌なら今から『師団』に寝返るか、降伏するか選べ。」

我ながら清々しいまでのクズ発言だが、言った通り、戦いに卑怯もへったくれも無い。勝てばよかろうなのだ。

「申し訳御座いませんが、その様な権限は持ち合わせておりません。持ち帰って、1度相談させては頂けませんか？」

リサが上目遣いにこちらを見てそう言う。だが、ここでブレては意味が無い。

「そっちの願いで設けた交渉の席だ。ここで決めてもらわなければ、姉さんを送り込む。」

有利に話を進めれるって、気持ちいいな。いつつも泣き寝入りだった俺には新鮮な感覚だ。

言葉に詰まる相手を優越感に浸りながら見ていたら、天罰が下った。

「遠山の…俺はもう疲れた…」

突如現れた玉藻が、疲労困憊、生気の宿らぬ青くなった表情でそう言う。

「な、なんでお前がいるんだ!？」

突然の出来事に全員が驚くが、何より俺が一番驚いていた。

「私もいるぞ。」

ひい！姉さん！なんか、リサが死ぬほど怯えてるが、俺も同じだ。  
「昨晚、お主を自宅に送り届けた後、かなこに拉致され、世界旅行じゃぞ：行く先々の『眷属』勢力を勝手にかなこの奴が潰して回って：儂は：儂は：もう疲れたのじゃあつ!!」

見た目通りの幼い感じで玉藻が泣き叫ぶ。12時間位で世界一周『眷属（無所属含む）』潰しの旅（時折手違いで『師団』も潰したらしい）をしてきたのだという。そりゃあ泣きたくもなるよ。

そんな玉藻の言葉に、俺を除く交渉役は一斉に通信端末を取り出す。

「孫が完敗…」

「欧州戦線壊滅…」

…  
なんかとんでもないことになってるみたいだ。大丈夫なのかこれ

「おい、お前たちも入って来い。」

姉さんの声で、会議室の扉が開く。確かあいつはGⅢだったか？なんかボロボロになってるし、その隣の少女は誰だ？その後ろからはあの時いた小さい鬼、覇美だったかが鬼を引き連れて入って来る。なんだこの百鬼夜行は…

「覇美、かなこに負けた！言うこと聞く！」

「はじめましてだな兄貴。俺は『師団』につく事にしたぜ。というか姉貴、強過ぎねえか？」

「お兄ーちゃん、かわいい妹が来たよー。」

なんだこの状況、全く分からんぞ。

「すみません、降伏でいいです。」

こうして、多くの人々に深いトラウマを植え付け、極東戦役は1日と経たずに『師団』の勝利で終結することとなった。

その後、GⅢとの熾烈な兄弟喧嘩の末に勝利した（喧嘩両成敗として、姉さんに一発ずつ拳骨をお見舞いされた。尚、その一発がお互いにとって最大ダメージだった。）り、何故か俺が姉さんをけしかけた事

になっており、その恨みから様々な勢力と死闘を繰り広げる事になった。

その過程でアリアの殻金が外れ、緋々神が目覚めたりしたが、姉さんがワンパンで沈め、その後、緋々神の希望を聞き入れ、母親（金色金）に合わせるために、緋々色金を姉さんが宇宙までぶん投げたり、様々なことがあり過ぎた結果、俺はSDAランクにランクインするわ、留年するわ退学になるわと散々な目に合うこととなったのであった。因みに、極東戦役で存在が明るみに出た姉さんは、当然の如くSDAランクにノミネートされていた。勿論、総合一位で。

俺の人生は、どこで狂ってしまったのか。考えてみれば、姉さんの弟として生まれた時点で、狂っていたのだろう。

## 開幕

—キンジ視点—

みずすとアリアが遭遇し、何故か姉さんとみずすが一触即発となりかけた日から数日後の昼前、再び険悪な雰囲気のみずすと姉さんが俺の部屋へとやって来た。

「相変わらず辛気臭い部屋ね。」

入るなり俺の部屋を酷評するみずす。

「だったら帰れよ。」

さつさと帰って欲しいし、何よりもさつきからひと言も言葉を発さず、不機嫌そうに腕を組んでいる姉さんが恐ろしい。：俺なんかやっただけ？

「帰るわよ。こんなところ居たくないし。これ、渡しておくわよ。」

そう言つてA4サイズの封筒を渡して来る。

「なんだよこれ。」

封筒にかかっているのは、都内の大学病院の名前。まさか俺の對卒、その治し方でも調べてくれたのか？

「さあね、それじゃあ私は帰るわ。かなこも、子どもじゃないんだから、さつきと機嫌を直しなさい。」

姉さんを置いて、みずすは帰っていく。

みずすにそんな優しさがあるとは思えないが、急いで封筒から中身を取り出す。

「診断書？」

なんでこんなものが…というか、これ姉さんの診断書じゃないか！まさか、なにかあったのか!?

読み進めていくが、なんの異状もないどころか、信じられないくらいこの超健康体だ。

そりゃあそうか、病気どころか怪我ひとつしたことがないんだから。家族で釣りに行った時も、釣れた河豚を食べて全然問題なかった人だし。

そもそも、なんの検査なんだよ。

「ああ、そういうことか。」

診断書の最後の1文で全てを悟る。

『とんでもないアホ。』

辛辣だが、何ひとつ間違っていない診断結果。ケチのつけようも無い。

「良かったな姉さん。健康そのものじゃないか。」

「当たり前だ！私に異常などない！それだというのに、みすずの奴が無理矢理病院に連れて行くのだ！」

病院へ行く機会なんかなかったから忘れてた。姉さん病院嫌いだったなあ。

あと、頭に間違いなく異常はあるぞ姉さん。言ったら怖いから言わんけども。

「ま、まあ、みすずも姉さんを心配してやったんだろうし、そんなに怒らなくていいじゃないか。」

まさかみすずの肩を持つ日が来るとは思ってもみなかったが、姉さんの馬鹿さ加減は異常だし、心配や不安になるのは俺も同じだ。

俺の言葉を受け、バツが悪そうに顔を背ける姉さん。なんやかんやで姉さんにとってみすずは大切な存在の様だ。

「昼食でも食いに行くか。」

「そうしよう。」

姉さんの有難い申し出に全力で頷く。姉さんの良いところは、絶対に奢ってくれることだ。万年金欠である俺に、まともな食事をタダで提供してくれる。

ラーメンもいしいし、寿司とかも食べたい。すき焼きとかもいいな。何処へ行くか：そんなことを考えていると、玄関を叩く音が室内に響く。

こういう絶妙なタイミングで来る奴は、碌な知らせを持って来ない。居留守を決め込みたいが…

「なんだ？」

勝手に扉を開ける姉さん。



「ヤッホー、キーくん！…って、あれ、かなこさん!？」

理子か…ってことはあいつらも一緒の可能性があるな。

「理子、それに神崎と白雪、レキも一緒か。」

姉さんが玄関でバスカービルの面子と話している。この隙きに逃げるか…

「ちようどよかった、これからキンジと食事に行こうとしていたが、お前たちも来ればいい。」

姉さんの言葉で、俺の中の天秤が動く。タダ飯か面倒くささか…

若干の差でタダ飯に天秤が傾いた。

アリア行きつけの中華料理店で、チャーシュー麺とチャーハンが俺の目の前に置かれる。理子は見ているだけで汗が出るような、真っ赤な激辛のエビチリと麻婆豆腐を、白雪とレキはシンプルなラーメンを、アリアは安定のももまんを山積みになっている。そして、姉さんのチャーシュー特盛のチャーシュー麺。全ての料理が到着し、食事が始まる。

「ねえ、キーくん。大阪行く。」

突拍子もない理子の言葉に、疑問符が頭に浮かぶ。

「なんでだよ?。」

「キーくんに依頼を紹介したげる。大阪でのお仕事、報酬は150万、どうよ!？」

150万、安くないというより、俺にとってはほとんどもない高額な報酬に心を動かされるが、

「内容は?。」

とはいえ、金に釣られて碌でもない仕事をさせられる可能性も有り得る。

「大阪で草野球の試合だよ。勝てば報酬、負ければタダ働き。あ、旅費は自己負担だよ」

旅費がネックだな…じゃなくて!

「待て!…なんで草野球で150万なんて大金が報酬になるんだよ!?! 絶対ヤバい仕事だろ!!」

「いやー、それがねえ、マジなんだよー。こないだナゴジヨでの研修で

知り合った大阪の子から頼まれてねー。草野球大会の優勝賞金が1000万なんだってー。」

草野球大会で賞金1000万…どんな大会だよ…

「私と理子で裏取りもしたけど、間違いないわ。毎年行われている正式な大会だし、賞金もちゃんと出てるわ。」

ももまんを両手に持ちながら、アリアがそう言う。

「関西一円の大企業がお金を出してやってる大会なんだって。凄いよね。」

白雪が感心した様に言う。関西で野球って、阪神と甲子園ってイメージしかないけど、野球自体が好き人が多いのかもしれないな。「そういうことなら構わないけど、そもそも面子はどうなるんだ？」

以前、武偵高で単位不足でサッカーの試合に出たが、あんな感じの寄せ集めなら、優勝は厳しいだろう。

「今のところ、依頼主の大阪の武偵高生徒が3人と元々のメンバーが2人、それと私たち。キーくんが入ってくれたから全部で10人だけど、依頼主からは6人用意して欲しいって頼まれてるから、あとひとり必要なだけ。」

なんとも微妙な面子だな。大阪の連中の実力は知らないからなんとも言えないが…

「お前ら、野球経験は？」

「無いわ。」

「無いよー。」

「無いよ、キンちゃん。」

「無いです。」

全滅かよ。俺も遊びでやった程度だし、無理だろ。

「よく受ける気になったな、そんな依頼。」

「いやー、なんか楽しそうだったから。」

理子よ、そんなんでいいのか…

「この話は無かったことに…」

「待ってよキーくん！理子思いついちゃった！優勝間違いなしだよ！」

話を切り上げようとする俺に、理子がハイテンションに言う。

「思いついたって何をだよ。下らんことなら俺は下りるぜ。」

「くふっ、理子思いついちゃったんだ。かなこさん、野球しょ！」

こいつ、とんでもない札を選びやがった！

「私は構わんぞ。」

あつさりと承諾する姉さん。

「ま、待ってくれ。姉さん、野球のルール分かってるのか!？」

野球は物理攻撃禁止だ。というより、野球に限らず、格闘技以外のスポーツは物理攻撃禁止だ。姉さんはそれを分かってるのか？

「以前みすずの奴に嫌という程叩き込まれた。あいつ、運動嫌いの癖に、神宮球場でヤクルト戦だけは見に行ってたからな。何度無理矢理連れて行かれたことか。」

以外な事実、昔、何度か姉さんが遅く帰って来ることがあったけど、野球観戦に行ってたのか…

「決まりー!!これ優勝間違いなしだよキーくん!!」

はしやぐ理子。しかし、俺は勝ち負けに対する不安よりも、姉さんというこの世界の不確定要素が野球をするという不安が勝っていた。

|||||

—みてしま御幣島あびこ視点—

「はい、頼まれてたやつ。」

「おお！毎度、ホンマありがとうやではるか！」

毎年、ペナントレースが開幕すれば、甲子園で観戦可能な日程をはるか教えている。何故なら、はるかの父親は、阿倍野建設というデツカイ建設会社の社長であり、阪神の熱狂的なファン。甲子園にもスポンサー広告を出したり、後援会で多額の援助をしたりと、阪神に魂を捧げた男や。当然、スポンサーシートを毎年数席確保しているので、そのチケットを譲って貰っているのだ。

因みに、ウチのオトンは私設応援団の団長で、球場ではるかの父親

と意気投合し、ウチらが生まれる前からの付き合いや。

「なんや、どうしたんや？」

しかし、チケットを渡すはるかの様子がいつもと違う。これは間違  
いなくなんかあったな。

「うん、実はな、今年も草野球大会があんねんけど、うちの会社のチー  
ムで季節外れのインフルエンザが蔓延して、面子足りひんねん。」

阿倍野建設も毎年参加する、阪神優勝祈願祭たる草野球大会。阪神  
の後援会企業が金を出し合って賞金と球場を用意し行われる一大イ  
ベントや。

「え、ホンマ！それじゃあ、おっちゃんめっちゃ落ち込んでんちやう  
ん。」

はるか父親のチームは、毎年優勝を逃しており、今年こそはと息  
巻いていた。勿論、賞金の為ではない、ただ、野球を愛する者として、  
優勝を目指してたのを知っている。

「落ち込むどころか、躍起になって、今から面子を集める言うて聞かん  
のよ。正直私はそない興味ないし、どうでもええんやけど、毎日毎日  
騒ぎよるから、お母ちゃんも大概にせえ言うて怒って大変なんよ。」

同じ野球ファンとして、そして、チケットのお礼もせなあかんから  
なあ…

「よっしゃ！ウチが出たる！それに、いずみも連れてこ。」

「いや、ふたりじゃ足りんて…会社のチームふたりしか残ってへんも  
ん。」

「？やん！そんなインフルエンザって蔓延するんか！おっかない  
わあ。」

「それなら、ウチに任せとき！絶対メンバー集めて、おっちゃんに優勝  
カップを渡したる。チケットのお礼や。」

「そないせんでもええんやけどな…」

早速メンバー集めや！

「参ったで…」

「ええ、ホンマに…まさか全員用事があるとは…」

いずみを連れ、野球部の面子に声を掛けたが、皆依頼や用事が入っ

ており、日程が合わない。

「ピッチャーが残ってたのが救いですね。」

インフル蔓延の阿倍野野球部は、先発ひとりと外野手ひとりという恐ろしい状況。投手がおるんがせめてもの救いやな。

「最悪、ウチがキャッチャーやな。しっかし、思った以上に集まらへんなあー。」

結局この日は、面子を集める事が出来なかった。

「あびこちゃん、ありがとう！ありがとう！」

野球大会に関して話をしに、はるかの家を訪れたら、はるかの父親に泣きながら感謝を伝えられる。

「おっちゃん、泣かんといてえな。泣くんは優勝してからや。それよ、面子なんやけど…」

正直厳しい、言いたくはないが、無償で参加してくれる奴なんか中々おらん。

そう言いかけた時—

「理子ちゃんやん。うわあー、可愛ええな。私もそんなん着てみたいわ。」

はるかがスマホを見ながらそんなことを言っている。…理子？ああ！あのナゴジョに來とった神崎のチームメンバーか！

「なあなあ、この服めっちゃ可愛ええよ。」

そう言ってスマホの画面に映る、写真を見せてくるはるか。間違いない、東京武偵高の奴や。その時ウチに電流が走る。神崎を筆頭に、あいつら身体能力は滅茶苦茶高い。使えるんちゃうか？

「はるか！いつの間に関係先交換しとったんかは知らんけど、ようやくたで！これで草野球優勝、ついでに阪神優勝や！」

なんのこと？というように首を傾げるはるかからスマホを奪い取る。

「ちよっと！なにすんやー！」

怒るはるかを見無視し、

「おっちゃん、賞金はいらんのやんな？」

「賞金なんかいらへん！欲しいんは阿倍野建設野球部の優勝杯だけや

！」

「おっしや！流石おっちゃんや！優勝は決まりやで！」

はるかスマホの電話帳から、理子の名前を見つけ出し、発信する。  
「ヤッホー、はるにやん。どしたの？」

「すまんがはるかやない。ウチや、掛布2世こと御幣島あびこや！」

「おおー！あの時の！どったの？」

「成程、それなら理子にお任せを。優勝すればいいんだよね。」

「頼むで！」

通話が終わる。

「ええのあびこ？あの子たち多分ド素人やで。」

「中途半端な面子よりかは、あの身体能力があればマシや。おっちゃん！対戦チームのデータってあるん？あつたら見して。」

「任せろ！」

おっちゃんが書斎に駆け込む。

「今日から作戦と対策考えるから、数日休むわ。オカンに伝えといてえな。」

「自分で言ったらええやん。なんで私が…」

「だって、絶対オカンがブチ切れるん分かつとるもん。」

「分かつとんなら、ちゃんと学校行って、放課後やったらええやん？」

「いや、阪神戦の中継見なアカンから、その時間考えると、学校行つて暇ないねん。」

「あびこ、あんた学生の本業分かつとるん？」

はるかが呆れた様子で溜息を吐いた。

そしてやって来た大会当日。

大会といっても、参加チームは4チームのトーナメント戦。午前中にそれぞれ別の球場で同時開始で2試合行い、決勝戦を午後から行うことになっている。

はるかの父親を筆頭に、各チームのオーナーは既に火花を散らしている。

「あびこ、ひとつ聞きたいんやけど…」

「なんや？ひらパー姉さんとするみは数合わせで、試合は出らんから

安心してええよ。」

まあ、あのふたりは出らん方がマシなレベルやしな。

「ちやう、そんなことやないねん…」

「ほななんや？」

「なんで私がメンバーになつとるん！私野球なんかしたことないんやで！」

「ドアホー！あない理想的なスイングしといて野球せんなんか、許されるわけないやろ！」

メインウエポンたるバールを手にし、フルスイングをかますのがはるか闘闘スタイル。スイング速度、ヘッドの位置、全てにおいて理想的なスイングをするのはるか野球をしないなど許されへんぞ。

「はるか先輩、代打でいいんで、お願いします！」

いずみも頭を下げる。あんなスイングを見せられて、野球人としてそのプレーを見たくならないということは有り得ないのだ。

「まあ、いずみがそう言うならしやあないな。でも、ホンマに代打だけやからな！」

バールが金属バットに持ち替わる。関西最強のスラッガーが誕生した日である。

「ごめん、遅くなっちゃった！」

「おお！久しぶりやん！」

東京武偵高の面子も到着し、準備万端や。

「はるにやーん！久しぶりー！」

「理子ちゃん久しぶりやなあ！ホンマ今日も可愛ええなあ。」

はるかと理子が楽しげに話している。

「うげえ、女ばっかじゃねえか…」

ひとりげんなりとしている冴えない男。誰やこいつ？

「ちよつとバカキンジ！シヤキツとしなさいよ！」

神崎がそいつに吠える。バカキンジ…？どっかで聞いたような…

「おお、兄さんが例の色男か！いやあ、4人もいっぺんに誑し込むなんて、ホンマ凄いやっちゃな！」

思い出したで、あん時神崎たちの痴話喧嘩で出とった名前や。

「あんたも気を付けなさいよ。バカキンジは、女の子に節操ないんだから。」

んー、まあ、顔はそこそこカッコイイ方かもしれんけど、正直ウチの好みやないな。

「まあええわ、ウチは御幣島あびこ、よろしゅうな。」

「あ、ああ、俺は、遠山金次、よろしく。」

握手でもしようと思ったけど、なんか避けられとるな…しっかし、遠山ねえ…

「ちよい待ち！理子、5人しかおらへんやんけ！」

数えて見れば、5人しかおらへんやん。別にそれでも試合は出来るけど、それじゃあ投手が足りへんで。

「もういるんじゃないか？」

遠山の兄さんがそんなことを言い出す。なにいつとんや？透明人間でも連れてきたんか？

「待たせたな。少々寄り道をしていた。」

「ひいー！」

心臓が止まるかと思ったで！突然目の前に現れたあの時の特別顧問、遠山金虎はん。両手には大きなビニール袋がふたつ。たこ焼きの、鰹節とソースのいい匂いが漂ってくる。アカン、腹減ってきたわ。…つて、ちやう！なんちゆうもん連れて来とんや！確かに、間違はなくこの場の誰よりも身体能力は高いやろうけど、そりゃあ常識の範囲内であってくれなアカンで。

「あびこ、これ大丈夫なん。」

「先輩、相手チームに死人が出ますよ…」

え、これウチの責任なん！

「と、とりあえず全員投げてみてえや。」

投手で使えそうなんがおることを祈りながら助っ人たちにボールを握らせる。

「ピッチャーもいないのか!？」

遠山の兄さんが驚いた様に言う。

「いや、おるにはおるんやけど、ひとりだけやし中継ぎはいるやろ。」



現状先発ひとりという酷い状況やからな。キャッチャーミットを手に取り、中腰になる。

「ほな兄さんから投げてえや。」

スパン、という音を立ててミットにボールが収まる。素人にしては遅くはない、伊達に武偵という荒事に長けた仕事しとらんな。

とはいえ…

「変化球は投げれるん？」

「いや、無理だ。」

それじゃあ厳しいな。

「二応投げ方、いうてもウチが知つとる程度やから大したんじゃないけど教えとくわ。」

勿論、投げれる様になるとは思っていないが、万が一の可能性に懸ける。

「ほな次いくで！」

理子、神崎、レキ、白雪、順番に球を捕る。この中では神崎が一番やな。とはいえ…

「神崎、サイドで投げてみ。」

身長が低い神崎では、投げ落とす様なオーバースローよりも横の変化がつくサイドスローの方がいいやろ。

「分かったわ。」

指示通りにサイドから投球する神崎。スパン！とミットに収まるボール。球速は落ちたが、変則型としてワンポイントで起用するならありかもしらへんな。

「よっしゃっ！おおきに。だいたい考えが纏まったで！」

さて、打順と守備位置決めな。

「おい、私を無視するな。」

「すみません、まだ死にたくないなんです。壁に向かって投げてくれますっ。」

人間投げて170km/h出す怪物の球なんか受けれるわけないやん。

「なんや、そっちのチーム、ガキ、しかも女ばっかやんけ！こりやあ楽

勝やな！」

対戦相手の面々が、ウチらの試合前の練習風景を見てそう言う。

「女やから楽勝？ウチらを見くびんなや！」

女子野球部主将として、何度も男だけのチームに負けてきた。それでも、女やから負けたなんて思ったことなんかない！

見下した様にニヤニヤと見てくる奴らに腹が立つ。

「先輩…」

ウチと一緒に、何度も悔しい思いを飲み込んできたはずみが隣に来る。

「いずみ…絶対負けへんで。誰にも、女やから負けたなんて言わせん…」

「はい！」

いずみが鬨気の籠った返事した。

それと同時に、ドガンという、爆発音が球場に響く。

「加減が難しいな…」

そう言つて、再度投球フォームをとる遠山金虎はん。そして、再び爆発音。啞然とする相手チームと、頭を抱える遠山の兄さん。

「報復死球だけお願いしようや。」

「いいですねそれ！」

ウチの意見に、いずみが賛同する。

「いや、一番アカンやろそれ…」

はるかあの冷静なツツコミ、だけどそれと同時に同じ女でも、あんな怪物を超えた球を放れるんやと嬉しくもある。

「勝てる、勝てるんや…」

「いや、受けるキャッチャーおりませんよ。」

「あ、そうやった…」

でも、相手への牽制にはなったやろ。

|||||

—キンジ視点—

ドガンという、爆発音に頭を抱える。

野球はボールを破壊するスポーツじゃない！見るも無残にはじけ飛ぶ軟球と抉れた球場横のコンクリート製の壁。

こんな球撃てる奴はいないが、捕れる奴もいない。一球一殺でキャッチャーが変わるならありだが、ルールとしても、そして人道的な判断でも、それは出来ない。

姉さんが投げれば負けはないというのは分かっていたことだが、受ける捕手がいないことも分かっていたことだというのに、理子の奴、余計なことしやがって…

「キンジ、どの程度なら捕れそうだ？」

そう言いながら、何度もボールを投げる姉さん。その度に破裂する軟球。

「とりあえず、ボールを割るなよ…」

「むう、なかなか難しいな。」

腕を振り、投げ込まれるボールは、何度やっても破裂する。

「いつそ、指だけで投げたら？」

「こうか？」

ズバーンツ！と壁にボールが当たり音を響かせる。破裂してない！

「おお、うまくいったぞー！」

いや、なんで指だけで投げてあの球速なのかとか、いろいろと言いたい。今は姉さんの成長を喜ぶべきだ。

「御幣島！これならどうだ？」

捕れるか？そう目で訴える。スピードガンを手にした御幣島は、

「いや、無理や…200km/h超えとるもん。」

そりやグローブ越しでも手が壊れるな。

「ま、まあ、最悪登板してもらうかもしれないけど、とりあえず金虎はんはセンター守ってや！打順は3番でお願いしまっせ！」

姉さんが本気で守ったら、内野と外野ひとりで守れそうだな。

こうして始まった草野球大会一回戦、

1番、アリア（遊）  
2番、理子（一）  
3番、姉さん（中）  
4番、御幣島<sup>みてじま</sup>（三）  
5番、柴島<sup>くじま</sup>（二）  
6番、知らんおっさん（補）  
7番、レキ（左）  
8番、俺（右）  
9番、ピッチャーのおっさん（投）

という打順で試合に臨むこととなった。とりあえず、姉さんの前にランナーが溜まっていれば、大量得点が可能だろう。最悪姉さんが投げれば相手も戦意喪失するだろうし。勝てる、勝てるんだ。

そう思っていた。

「おい、握っただけで折れたぞ。」

グリップが握りつぶされ、ぽつきりと折れた金属バットを手に姉さんがそう言った。

駄目かもしれないな…

## 初戦

—みてしま御幣島あびこ視点—

一回表、相手チームの先攻で試合が開始する。キャッチャーとして座るおっさんは本職ではない守備位置である為不安が残るけど、他の面子よりはましやろ。

初球、インハイへのストレートはボールとなる。2球目、すっぽ抜けたカーブが緩く真ん中入る。

アカン！勿論、相手もそれを見逃さない。カキーンと快音が響く。真芯で捕らえられたボールは、ぐーんと伸びていく。

「アウト！」

センター方向に飛んだ打球は、フェンス手前でグラブに収まる。金虎はんナイスや。結構難しい打球やと思ったけど、あつという間に落地点に入り危な気なく捕球しとる。あの人だけは別格、味方ならホシマ頼もしい。

「センターナイス！」

声を掛けると軽く手を上げ、シュツ、とボールを返球する。恐ろしい速度で内野へと戻されたボールに、

「きやあつー！」「うわっ！」

シヨートの神崎とセカンドのいずみ避け。そのまま誰も捕球せずに速度を落とさずに直進する白球は、バックネット下の壁に激突し、大きな破裂音を響かせる。

タッチアップの時、死人が出るでこれ…

「あびこちゃん。」

「ん？なんやおっちゃん？」

ピッチャーのおっちゃんがウチの所へと駆け寄ってくる。

「あの人投げたら優勝できるんちゃうか？」

「それは分かつとんねんけど、誰が受けるん？」

ちらりと2人でキャッチャーのおっちゃんを見るが、全力で手と首を振っている。

「ほらな。無理やねん。せやからおっちゃん頑張つてや。」

ぽんぽんと背中を押し、マウンドへと送り返す。考えることは皆同じやけど、結論も皆同じなんやな。もう1人怪物がおりやあええんやけど、世の中そう簡単にはいかんのやな。

2番打者を三振、3番打者をサードゴロに仕留め、三者凡退で一回の表を終える。即席チームとしては上出来やな。

裏の攻撃は、1番神崎から始まる。素人丸出しのバッティングフォームから外角低めのストリートに当てるセカンドフライに倒れる。初打席の初球を当てれる辺り、やっぱ身体能力はえげつないなあ。とはいえ、小柄な神崎ならストライクゾーンも狭い分、四球狙いで出塁するんも手なんやけど、まあ、しゃあないか。

2番理子の打席、ネクストバッタースークルへとウチが向かう。先に居た金虎はんは、遠山の兄さんからバットの握り方を説かれていた。金属バットのグリップ握りつぶす怪物やからな。しかし、一番期待出来る打者でもある。

「うひい、なにあれ曲がったよく。」

外スラで三振に倒れた理子が戻って来る。新井みたいな三振やったな…

「よし、もう大丈夫だ。」

右手で握ったバットを肩に担ぎ、打席に向かう金虎はん。その頼もしい背中を見送りながら、遠山の兄さんに声を掛ける。

「ホンマに大丈夫なんか？」

「二応、まともに振れる様にはなっただけど、力加減が難しいみたいだな。」

握り潰さんようにする方が難しいって、ホンマおかしな人やなあ…

左の打席に入った金虎はんがバットを構えると、球場がざわつく。

「バースや…」

「バースの構えや…」

阪神タイガースの現人神、ランディ・バース。その打撃フォームは、阪神ファンの集まりたるこの大会の面子にとって、神々しいものだった。

た。

「バ、ベースが相手やからって、手は抜かへんぞ！」

相手ピッチャーのオツサンが気合を入れ直す。いや、ベースではないで。

振りかぶり、内角へと放たれたボール。…いい球やな。しかし、

「ふっ！」

脊柱軸が前傾する独特のフォームで上手く肘を畳み、真芯で捉える。

ピッチャーが投じたボール、その球速の数倍の速度で白球はセンター方向へ飛んでいく。球場を飛び出て、目視出来なくなる打球に皆が啞然とする中、悠々とダイヤモンドを回る金虎はん。

「ホンマにニューヨークからロサンゼルスまで飛ばす勢いやな…」

ゾクゾクと背筋が震える。恐怖ではない、歓喜の身震いや。それはウチだけではない、敵味方問わず、全ての阪神ファンが歓喜に震えた。

「ベースの再来や！」

あちらこちらで阪神優勝の雄叫びや、Vやねん！の雄叫びが上がる。

「いずみ…」

「はい、先輩…」

「ウチらも続くで！伝説のバックスクリーン三連発や！」

「はい！」

士気は最高潮に達した。

|||||

—キンジ視点—

姉さんの特大ホームランに触発されたのか、4番の御幣島、5番の柴島と連打で2アウト1、3塁。何故か2人と大阪のおっさんたちはホームランでなかったことを悔しがっているが、十分だと思うぞ。

チャンスの場面だが、6番、キャッチャーのおっさんがファースト

ゴロに倒れ、チェンジとなり、胸をなでおろす。よかったあ、チャンスで打席回ってこなくて。

その後、打たせて捕るおっさんのピッチングと姉さんの鉄壁の守り（反則的な移動速度で内・外野をひとりで守ってた）で無失点、対するこちららも俺を含めた素人たちが三振の山を築き、両者得点のないまま試合が進行する。素人相手に変化球はズルくないか？まあ、こっちも姉さんっていう反則してるけどね。

そして打者一巡後、3回の裏2アウトで再び姉さんに打順が回ってくるが、敬遠策を取られる。不服そうに一塁に姉さんが向かう。御幣島が左打席に入る。

「おっしやーんいー」

気合いを入れて構える御幣島へ、初球が投じられた。それと同時に、一塁ランナーの姉さんがスタートを切る。

ピッチャーの手がらボールが離れた時には、既に二塁に立っている姉さん。

「セ、セーフ??」

二塁塁審が困惑しながらそう宣告する頃に、ボールはようやくキャッチャーミットに収まる。

「ボ、ボール??」

主審も困惑を隠せないが、そう宣言する。動揺を抑えられない投手の第2球は外角高めにすっぽ抜ける。その間に3盗成功。ノーストライクツーボールでツーアウト。堪らずタイムをかける相手。

監督と投手、内野陣がマウンドに集まり話している。姉さんの鉄壁の守備で得点率が0に近い相手にとって、2失点目は致命傷になり得る。

監督と内野陣が持ち場に戻りプレー再開。吹っ切れたのか、開き直ったのか、先程よりは動揺の治まった相手投手の第3球目、外角低めいっぱいストレートに手が出ない御幣島。

「ストライク!!」

主審が右手を上げる。それと同時にホームベース上に立つ姉さん。ホームスチール成功。



呆然とする相手と御幣島、そして主審。

「2点目だな。」

「セ、セーフ!？」

主審が完全に困惑しながらもそう言い、2点目が入る。勝負しても、敬遠しても本塁に帰ってくる姉さんに、相手投手の心は折れた。マウンド上でガツクリと膝を付き、力なく呆然としている。

その後、相手投手は交代するが、四球で出塁、続く柴島がライトフライに倒れスリーアウト交代。しかし、貴重な追加点を挽ぎ取り? 0―2で4回へと突入した。

そして、安定した守備陣(姉さん)の力によって、毎回三者凡退のパーフェクトピッチングで切り抜けていくが、こちらも凡退が続く投手戦?となる。

そして迎える6回裏、理子から始まる攻撃で相手が動く。2打席連続三振の理子を敬遠し、次の打者である姉さんも敬遠。姉さんの盗塁を塞ぐ作戦をとってくる。

しかし、ノーアウト1、2塁で打席に立つ御幣島は初級を強振し二塁打。一気に2点が入る。更にノーアウト2塁で柴島とおっさんの連打で更に2点が追加される。勢いに乗っている状態で俺の打順が回ってきた。

嫌だなあ…正直打てる気がないので、流れを遮る様なことになりそうだな。

そう思いながら打席に向かって行くと、相手チームの監督が出てきて、コールドゲームにしてくれてと主審へと頼み、俺の打席はお流れになり、決勝進出が決まった。

相手には申し訳ないが、依頼達成に一步近づいた。次の試合も、姉さん個人軍で楽勝だな。

|| ||

— 御幣島あびこ視点 —

コールドゲームが伝えられ、大きく息を吐き出す。なんとかなった

な。正直、金虎はんがおらんかったらどうなってたか分からんで。しかし、試合が早く終わってくれたのは有難いな。こっちはまともな投手がおっちゃんひとりしかおらんから、体力の消耗は最小限に抑えたい。

「おっちゃん、お疲れさん！決勝も頼むで！」

「任せとけ！と言いたいんやが、正直、完投は厳しいで：おっちゃんももうええ齢やからな、正直もうしんどいねん。」

「は？」

あかん、30後半の普通の会社員と、高校生の体力を一緒に考えたった：どないしよう：

「まあ、いけるとこまでいくさかい、後は誰か投げてもらえんか。あの人がおれば、正直誰が投げても変わらんやろ。」

そう言つて、金虎はんの方を見るおっちゃん。

「まあ、そりゃあそうやけど、連続四球とかの可能性もあり得るからなあ：決勝までにもう一回オーダー考えとくわ！」

ストライクゾーンにそれなりの球を正確に投げ続けるというのは、意外と難しい。神崎ひとりでは厳しいやろうし、コントロールだけは良かったレキに頼むか？正直守備はあの人ひとりおりや、どうでもいい状態やしな。

ブツブツ呟きながらオーダーを考えていた。

「あびこー！やったやん！」

ベンチでタオルとお茶を配っていたはるかがバシツと背中を叩いてくる。

「お？おお！せやな。でも、決勝で勝たな意味ないからな。」

「遠山さんおりや、余裕やて。決勝まで時間あるし、お父ちゃんが助っ人で東京から来てくれた子ら連れてお好み焼き行こうやて。」

考えずともあの人がおおりやなんも心配あらへんな、という余裕からくる慢心で有難い申し出に乗っかる。

「おお、ええな！行こ行こ！」

これが、とんでもないミスであったと気付くのは午後、決勝戦直前になってからやった。

「旨いお好み焼きを食べ、士気も上がった状態でグラウンドへと戻って来た時、審判団から追加ルールが告げられる。」

『外野手は内野へ、内野手は外野へ入ってはいけない。』

完全に金虎はんを封じにくるルール。普通やったらありえへんルールに抗議するが、その話し合いの場に、再三呼び出したが誰も来なかったこと、そもそも人外を試合に出すな、というド正論の前に成す術はなかった。

「ほなら、せめてこれだけは許してえな。」

「まあ、それなら…」

最初から外野ひとりで残り全員内野手という守備位置だけは許された。とはいえ、守備力の低下は否めない。いや、普通なら内野手2人増えて、内野守備力低下の方がおかしいんやけど、それ以上におかしな人がおるからな…

こうして、波乱の決勝戦が幕を開ける。

## 試合終了

—御幣島あびこ視点—  
みてしま

先程とは変わり、決勝は先攻、一塁側のベンチとなった。まだ相手チームは来ていない。

「これは大変なことやと思うよ。」

急遽変更されたルールをメンバーに、この危機的な状況を伝える。

「でも、ピッチャーとキャッチャー抜いても、内野6人に出来るんやろ？そない問題ないんちゃうか？」

楽観視するはるか。

「全員経験者ならな。素人の寄せ集めやし、6人おったとしても、内野抜かれる可能性は高いんや。強襲ライナーとか捕れへんやろ。」

守備は素人が思っている何十倍も難しいんや。野球で一番難しいんが守備と言っても過言やない。イレギュラーバウンドする時もあるれば、風向き、太陽の光、あらゆる条件が毎回違うのに、毎回同じ様に捌き、同じ様に送球しなければならぬ。練習どころか、初体験の奴らにそれを求めるんは厳しい。

もつとも、武偵つちゆう荒事になれた奴らやから、なんとか対応出来とるけど、経験者として見れば、やはり危うい場面が多い。

「なるべく、外野フライで打ち取る様な配球にしてもらうけど、ピッチャーかて抜け球やコントロールミスはあるからな。内野もさつきまでとは違って、しっかり集中しとってくれや。」

さっきの試合は、正直することがなかった。キャッチャーの目の前に落ちるバントでさえ、外野からノーバントで捕球する怪物がおったからな。でも、今回はそうもいかん以上、少しのミスも許されん。間違はなく相手は内野のエラーを狙ってくるやろうからな。

なんせ、決勝の相手は、大阪、いや、関西で最王手の武偵事務所たる甘山武偵事務所。数百人の武偵を抱える巨大武偵事務所で、最近は武偵の仕事だけでなく、貿易やら店舗経営など手広く事業を拡大している新進気鋭のベンチャー企業となっているが、裏では、武偵を傭兵

として海外へ派遣している疑惑や、市議会や府議会、果ては国会議員との繋がりなど、黒い噂も後を絶たない。

こつちも武偵が大半を占めるチームになっているが、相手は全員が武偵。しかも、そのメンバーは全員、高校野球、又は大学野球の経験者だ。どう考えたって、相手が有利なんは間違いない。

「なんや、女の子ばっかやんけ。」

到着した相手チームの第一声で、眉間に皺が寄る。こいつらも、性別で決めつけるんか。

「おい、女だからと油断すんな。あの面子よう見てみい。強襲科Aランクの御幣島に阿倍野、それだけやないで、あのピンク髪は、お前らでも知つとる、Sランクの神崎・H・アリアや。武偵として十分以上の実力者、女やからとなめとつたら、足元掬われるで。」

ガタイのいい男たちを押し退け、小柄な男が現れる。甘山篤史。つづやまあつし 甘山武偵事務所の所長だ。

「うちの若いのがすまん、御幣島。」

「かまへんよ。ウチとしては、油断してもらた方がえかったねんけどな。」

「そりゃあ、悪かった。ところで、あの話、受ける気になったか？」

あの話、要はスカウトだ。関西一円ではそれなりに名の知れた武偵であるウチらのチーム『浪花の虎乙女』は、卒業も視野に入った今年から、甘山武偵事務所のスカウトがあった。

「悪いねんけど、もうちつと考える時間貰えへんやろか。大学も視野にあんねん。」

半分嘘で半分ホント。甘山の下に付く気は端から無いが、大学に行きたいっちゆうんは本当や。

そもそも、はるかには家業を継ぐので、経営学を学ぶ為に大学進学が決まつとるし、ひらパー姉さんは研究したいから武偵大へ進学を決めとる。ウチも大学では女子野球があるからもあるけど、オカンみたく教師もええかなって感じで武偵大行こうかなと思つとる。

「ま、なるべく早めに決めてえや。なんなら、野球で決めてもええで。」  
「どういっつちや？」

「俺のチームが勝ったら事務所に入る。阿倍野建設が勝ったら入らん。てのはどや?」

「野球賭博はアカンで。球界追放や。」

ウチの返答に、ケラケラと笑う甘山。

「まあ、ええわ。しっかしまあ、おつそろしい面子やな。神崎にレキ、SDAランク総合93位の遠山キンジ…」

笑顔は消え、武偵の目になった甘山。ええ、遠山の兄さんって、そないな化物んやったんか!!知らんかったわ。

遠山の兄さんの方を見ると、ごつつ嫌そうな顔しとるな。あんまり実力を晒したくなかったつちゆうことかいな?能ある鷹は爪を隠すとは言うけど、武偵かてホイホイと手の内は見せんからな。遠山の兄さんは、頭の先から爪先まで武偵ってことか。

「なにより、名前を見て驚いたで。突然現れたSDAランク総合1位でRランク武偵、顔の写真どころか、名前以外なんの情報もあらへん謎の武偵がこないべっぴんさんやったとはな。」

金虎はんを見る甘山。その目は、未知の存在に対する恐怖と好奇心が宿っている。

「なあ、全員うちの事務所に来いひんか?うちは完全実力主義やから、あんたらやったらあつちゆう間に億万長者やで。」

そう言う甘山だが、冷めた視線を向けられ苦笑いをする。

「すまんなあ、仕事柄、優秀な武偵に目がないねん。堪忍な。ほな、お互いフェアプレイで楽しもうや。」

ニカツと笑い、三塁側ベンチへと戻って行く。フェアプレイねえ: 武偵ばつかやし、めんどい事にならんとええねんけどなあ:

ベンチに置かれた金属バットとは別に、ビヨンド・もっこすをバットケースから取り出す。

なーんか、きな臭いねんなあ:

|||||

|||||

1回表、アリアがセンターフライで倒れ、先程の様に理子と姉さんが敬遠されると思っていたが、理子がセカンドゴロで倒れ2アウトとなる。まさか、姉さんと勝負するつもりなのか!?!さつきこちらのベンチで話していた甘山とかいう男の口ぶりから、姉さんの恐ろしさは十分理解している筈だし、さつきの試合もスコアラーなんかを送って知っている筈だというのに…

少しでも姉さんに関する情報があるのなら、勝負は無謀だし、敬遠さえも通用しないというのは分かる。それなのに、なんで…

左打席に入った姉さんは、初球、デッドボールになる様な、内角高めのシュートがかかったストレートを完璧に捉え、場外へと軽々と叩き込む。それと同時に、奴らの目つきが変わる。それまでどこか見下した目をしていた連中の目は、完全にプロの目になっていた。

バットの届く範囲なら、全て場外へと叩き込む。そんな姉さんの異常さを知るための最小限の出血。野球における1点は大きい。しかし、その1点を失つてでも、あいつらを本気にさせたのが、甘山の戦略ということなのか…

それを証明するように、それまでとは別人の様に球が走る。女子野球部所属の御幣島が、なんとか合わせた当たりも、ピッチャーフライに終わる。

「クソっ!!なんやあのスクリュー!山本昌かいなー!」

左投手が投じた変化球を打ち損じた怒りを露にする御幣島。

「スクリューですか…厄介ですね。」

柴島もグローブを填めながらそう言う。

「1点取れただけマシやと思わんとな。」

ベンチの奥に座る阿倍野が2人を安心させるように言う。

「せやな。ほな、しつかりと守って、さつきと攻守交代といくで!」

しかし、案の定というのか、執拗に内野への強打を狙う相手チーム。それは分かっていたのだが、分かっているてもそう簡単に捕れたら、皆プロになれる。

そういうわけで、内野安打に進塁打、エラーが重なり、あつという間に1点を返され、交代となる。

「正直、これ以降点を取れる見込みはないで…もう失点は許されへん。」

姉さんの恐ろしさが充分相手に伝わり、且つ内野の脆さと、得点力の不足が明白になった今、こちらが勝つ手段は、敬遠される理子と姉さんで得点圏にランナーが進んだ状態となった時だけに近い。それに対し、相手は毎回得点のチャンスがある。

こちらが圧倒的に不利だ。

2回の表、柴島が変化球を引掛けショートゴロ、続くオツサンと俺が三振で、あつさりと交代となる。

これ、マズいんじゃないか…

勝機（姉さんの攻守）を断られた状況では、勝ちの目は無い。このままだとただ働きどころか、大赤字だ。

「なあ、御幣島。このままだと…」  
「負けるな。」

あつさりと言う御幣島に少しイラツとするが、その表情を見て苛立ちは消える。ここに居る誰よりも真剣で、悔しさの滲みだした表情を見て、苛立ちが消える。まるで、全てを賭けた博打に挑んでいるかの如き目に、吸い込まれる様だった。

「金虎はんを封じられたなら、勝ち目は無い。…普通はな。せやけどな、何百点取られようと、コールドがない以上、ゲームセットまで負けとらんのや。」

バットを握り締めながらそう言う御幣島に返せる言葉が無かった。

御幣島の闘気に当てられたかの如く、2回表、先頭打者の柴島が痛烈な2塁打を放つ。それに続く様にオツサンがセンター前に弾き返し、ノーアウト1、3塁で俺の打席が回ってくる。

「キンジ、決めなさいよ！」

「キンちゃん！頑張って！」

「キーくん！」

「キンジさん…」



バスカービルの面々からの檄が飛ぶ。プレッシャーと緊張で、妙に肩に力が入る。

「遠山の兄さん…楽しんでえな。」

今この場で、誰よりも勝ちたいと思っっている御幣島が、なんとか作り出した笑みでそう言う。…お前、なんて顔してんだよ…

「あんまり期待してくれるなよ…」

苦笑いでベンチに答え、打席に向かう。

打てる気なんてしねえなあ…そもそも、素人が仮にも青春の半分近くを野球に捧げた連中に勝てるわけないだろうが…人間、諦めが肝心。そんな風に言う人も多い。俺もそう思うさ。でもな…

あんな顔見て、諦めましたじゃ、寝つきが悪いんだよ！

初球、投手が投球フォームに入ったと同時に3塁ランナーの柴島がスタートを切る。投じられた直球に、俺がなんとかバットを合わせる。ボテボテと転がる打球。ファーストへ全力疾走しヘッドスライディングで飛び込む俺が見た光景は、ショートが捕球し、本塁へと送球する姿。

「セーフ！」

同じく本塁にヘッドスライディングで滑り込んだ柴島が1点を勝ち越す。無言で一塁ベースを殴る俺に、ベンチは沸き立つ。

「だせえなあ、可愛い子が多いんで、いい所見せようってえんか？」

ユニフォームに付いた泥を叩きながら一塁ベースに立つと、相手のファーストがそう見下した笑みで言う。

「素人に負けるセミプロの方がだせえさ。あんたらだつて、武偵の端くれだろ？武偵憲章10条、忘れたとは言わせねえぜ。」

『諦めるな、武偵は決して諦めるな。』依頼を受けた以上、貫いてやるさ。…もつとも、さつきまでは諦めてたんだがな。

見下した様な冷めた笑み、それで分かる。負けないさ、こいつらにはな。正直、今の俺じゃあ役には立たないだろう。でも、腹は括ったさ。泥臭く、みつともなくていい。スマートな勝ちなんかいらぬ。最後に勝っていればいいんだ。そっちのほうが、俺らしい。

三振とゲッツーで2回の表の攻撃は終わる。結局1得点で終わる

が、勝ち越したことに変わりはない。

「遠山の兄さん…」

「御幣島、勝つんだろ？さっさと行こうぜ。」

グローブを手に取り、サードとショートの間へと向かう。

「せやな。しつかり守っていくで！」

パアンとグローブに拳を打ち付ける御幣島。そう、絶対に勝ってやる。

|||||

|||||

—みてしま御幣島あびこ視点—

「せやな。しつかり守っていくで！」

気合を入れてベンチを飛び出る。一瞬でも負けを認めそうになった自分が情けないな。遠山の兄さんの泥臭いプレーで目が覚めたで。

そんなウチの肩を優しく叩く手、振り返ると金虎はんがおる。

「愚弟のやる気を引き出してくれて感謝する。あの愚弟ときたら、何かとやる気がないのでな。そろそろ教育的制裁を加えようと思っておったが、それも無用になった。」

おっかないことを平然と言うなこの人は…あんたの鉄拳制裁とか三途の川を越えるで普通。てか、やっぱ親族やったんやな。

「こつちこそ、ありがとうございますや。腑抜けそうやったけど、喝入れてもらいました。」

ウチの返答に、ふっ、と笑い。

「安心しろ。私は、負けるのが嫌いなのだ。」

そう言つて姿を消す金虎はん。目線を正面へと戻すと、既に外野にいる。ホンマ、味方やったら頼もしい限りやな。

それから、泥臭い試合が続く。4回に1点を返され同点となるも、それ以外、互いに点を許さない攻防が続き6回裏2アウト。見るからにバテたオツサンが2アウト2、3塁のピンチを招く。

最後の力投とばかりに投げ込んだストレートが、フラフラと三遊間へと上がる。

「キンジ！」「遠山の兄さん！」

シヨートの神崎とウチが声を掛けながら、遠山の兄さんのフォロウに回る。よし、アウトや。そう思った時、風が吹き、高く上がったボールは方向を変える。

「アカン！」

風に流された打球を覚束ない足取りで追う遠山の兄さんに不安を覚え、交錯覚悟で突っ込む。

「兄さんどくんや！」

「えっ！」

ボールに意識を奪われていた兄さんの反応が遅れる。目を離れたことで、ボールは兄さんのボールの横を落ちていく。そこへと頭から滑り込む。

「ぐっ！」

2人の体が絡み合う様にゴロゴロとグラウンドを転がる。：ボールは!?

ああ、よかった…入っとる…

白球の収まったボールを掲げる。

「アウトー！スリーアウト！チェンジ！」

三塁塁審の声上がる。

そこで気付く、

「ちよっ！兄さん大丈夫かいな！」

遠山兄さんに馬乗りの様な態勢になってしまつとる。転がつとる時も、クツシヨンになってくれとったみたいやし、怪我しとらへんやろか…

「ああ、大丈夫だよ。御幣島、怪我はないかい？」

「へ？ああ、ウチは大丈夫やで。」

慌てて立ち上がる。なんやろ？兄さんの雰囲気というか、纏う空気が変わつとるで。

「ちよっと！あんたたち！何してんのよ！」

神崎がキンキン声を響かせる。

「アリア、何を怒っているんだい？君が心配するようなことは怒っていないよ。」

「わ、私が心配するようなことですよ！とういより、なったのね、その御幣島で！」

神崎が顔を赤おしてなんか言つとる。

「ああ、ならなきや失礼だろう？勿論、それがアリアであつてもね。」  
霧囲気の変わつた兄さんとベンチに帰ると、金虎はんを除いた助っ人の空気がピリピリとし始める。なんや？なにが起きとんや？

「すまん、あびこちゃん。もう限界や。」

「お、おお、おっちゃん。よう投げてくれたで。後は任せえ。」

見るからに疲労困憊のおっちゃんの降板は致し方ない。7回は神崎で行くとして…

「すまん、白雪はん。次から入ってくれるか？」

「え、うん、大丈夫だよ。」

神崎や理子、レキとバチバチに火花を散らしていた白雪はんに守備を頼む。とはいえ、守備位置やが…

「ああ、それなんだが御幣島、次の回、俺が投げるよ。」

遠山兄さんがそう申し出る。え？神崎に頼もう思ってたんやけど…

不安そうなウチの視線に気づいたのか、

「大丈夫、もう前には飛ばさせないさ。なんせ、君に教えてもらった変化球があるからね。」

「いや、あんとき全然投げれてへんかったやん！」

「大丈夫、任せてくれ。」

耳元で囁かれる言葉。なんやこの人、ちよつと前まで近づこうともせえへんかったのに…

「わ、分かったから、離れてくれへん！ウチ、今汗かいとるし…」

ウチは野球一筋ではるかみたいに男には惚れられることもなかったから、こういう距離感がなんかこそばゆい。そう言つて押し返す。

「ちよつと、キンジ！」

再び助つ人陣が盛り上がる。それを受け流し、遠山の兄さんは、「そうだ、申し訳ないけど、キャッチャーも変えてくれるかい?」  
「変えるって、誰にやねん。」

まともな選手もうおらへんで。

「姉さん頼めるかい?」

「ちよい待ちい!それはアカンて!外野がすつからかんになるやんか!」

金虎はんが外野から消えたら、相手はフライでもいいから外野を狙ってくる。そうなったら、前に飛んだ瞬間終わるやないか。

「断る。」

ウチの意図を知ってか知らずか、金虎はんがそう言い放つ。

「何故私がお前の女房役にならねばならんのだ!私は私より強い者の妻にしかならん!」

アカン、この人何言ってるやろ。そもそもあんたより強い人がおつてたまるかい!

「女房役:」

何故助つ人連中は殺気を放つんや:

ベンチで、味方に殺気を放つ助つ人連中を諫め、1アウトごとにキャッチャーを交代することで落ち着く。:いや、落ち着いたんやろ  
うか:

それからの遠山の兄さんは、別人の様な動きとなり、プロもかくやという剛速球と変化球で相手打線を翻弄するが、こちらも得点を入れられずに9回を迎える。

9回表、9番から始まる攻撃、三者凡退で倒れるのは有り得ないのが救いやな。仮にこの回を三者凡退にで終わらせ、延長戦となれば、10回表の先頭打者が3番、つまり、四球で歩かせようと、勝負しようとして1点を取る金虎はんが控えることになる。それを避けたい相手は、絶対に2、3番を敬遠するやろ。そうなれば、4番のウチに掛かる責任は測り知れない。

柄にもなく、胃が痛おなってきたわ:

「御幣島、9回だが:」

「なんや遠山の兄さん、なんかええ案でもあるんかい？」

ピッチャーのおっさんが降りた今、9番は白雪からやし、正直あんまり期待できんな。

「いや、ただ、折角なんだ。代打を使うのも手じゃないか？」

代打、確かに、こつちには代打の神様かもしれへんはるかがおるが

：

「タイミングはどないするん？金虎はんの前にランナー出して意味ないで。」

既に白雪は打席に立っている。

「勿論、姉さんの前では駄目だ。アリアには申し訳ないけどね。」

「兄さん：あんた何考えとるんや？」

1アウトでランナー無し、2番理子に代わり、代打はるかを告げる。

「あびこー！ちよい待ってえな！こない重要な時に私やなくても…」

「いや、はるか、お前しかおらへんのや。普段ボールぶん回しとる感じでボール打ちや大丈夫やから。」

不満そうな顔をするはるかにバットを渡す。

「簡単に言うなあ：なんや、金属バットってボールより大分軽いやんか。」

軽々とスイングする度にブン！ブン！と風を切り裂く音が鳴る。

うん、なんの心配もいらへんな。

「はるかー！かつ飛ばせ！」

ベンチから声を張り上げる。

勝負は一瞬やった。相手の投じた初級、脱力感がありながらもスイングスピードのある理想的な一振り。バットにボールが当たった瞬間に分かる、完璧な一撃。相手投手もそれが分かったのか、打球を見送ることもなく、グラブを叩きつける。

綺麗な放物線を描きながら、ぐんぐんと伸びていく白球はフェンスを越える。

「やった！やりよった！やっぱりはるかは史上最強のスラッガーやったんや！」

「はるか先輩！最高です！」

ウチといずれもがベンチで歓喜の声を上げる。

それから連続敬遠の後、ウチといずれも、そして遠山の兄さんの連打でこの回一挙5点を取り交代となる。

「さあ、最終回、ぴしゃりと締めて終わるで！兄さん頼むで！」

ポンと遠山の兄さんの肩を叩く。

「いや、この回、俺は投げないよ。」

「は？」

突然なにを言い出すんやこの人は…

|||||

—キンジ視点—

「俺が投げる時、キャッチャーを1アウトごとに代わる約束だったけど、順番的に次はアリアなんだ。アリアはさつき交代してもう出れない。なら俺は投げれないよ。」

「ア、アホぬかすな！そない理由で投げへんとか許されんわ！」

勿論、御幣島が怒るのも分かる。だけど、今の俺は女の子を悲しませることが出来ないんだ。ベンチに座るアリアにウインクし、御幣島に向き直る。

「問題ないさ、俺なんか比べものにならない大エースがいるだろう。なあ、姉さん。」

「死ぬ気か！」

通常時ならそうなるだろう。だが、今の俺なら、姉さんの指先だけで投げた球くらいなら受けれる。

「大丈夫、俺は『殺しても死なない男』らしいからね。」

キザにそう言つて、キャッチャーの防具、ミットを身に着ける。

「ストライク！」

ズバン！と球場に響き渡る様な豪快な音をたててミットに白球が収まる。要領は弾丸キャッチと同じだ。『秋水』で勢いを殺し、ミット

に収めるだけだ。もつとも、なんで弾丸よりも勢いがあるのかは、姉さんだから仕方ないだろう。

全てど真ん中のストリート、三球三振で1アウト。とはいえ、相手も分かっってきただろう。俺は真ん中しか捕れない。少しでも球の位置がズレれば、後ろへと逸らすことになる。

だから、次第にバットを振り始める。しかし、かすりもしない。さあ、あとひとりだ。

「直球でど真ん中、それが分かっつりや、然程難しくはねえ。」

打席に入る打者、ああ、こいつファーストの奴か。

初球見送りストライク。こいつ、多分当ててくるな。打席を離れ、一度スイングをするそいつを見て、なんとなくそう思う。

マウンドを見れば、姉さんは退屈そうにボールを指先で転がしている。

そして2球目、予想通りスイングしてくる。スローモーションの世界で、ボールとバットがぶつかるのが見える。当然、その後も。

「ぐあああつー！」

バットに穴が開き、ボールは直進しミットへと収まる。バットが宙を舞い、打者が手を押さえてうづくまる。自身に満ち溢れていた奴の目には、その面影さえない。あるのは、恐怖と絶望。

相手チームのメンバーが集まり、奴の手にスプレーをかけたたり、様々な処置を試みるが、意味はないだろう。なんせ、怪我とか痛みの問題じゃない。心が折れてるんだからな。

結局、ピンチヒッターが打席に立つが、見逃して三振。ゲームセットとなる。

「よっしゃー！勝った！勝ったで！」

ワーツと盛り上がるチームメイトたち。

「姉さん、お疲れ様。」

「この程度で疲れるわけがないだろう。それより…」

姉さんの野生の勘が何かを察知したのだろう。まあ、俺でも分かる程度だけだよ。

「分かってる。きな臭いな。勝利の余韻には、長く浸れないみたい



だ。」

あんたら、プロならもう少し殺気を隠せよ。駄々洩れだぜ。

|||||

—みてしま御幣島あびこ視点—

表彰式が終わり、すっかり暗くなった球場。

「ホンマようやくってくれた！念願の優勝や！」

はるかのおトロンが笑顔で涙を流すという器用なことをしながら全員に礼を言う。

ワーワーと盛り上がる中、ビヨンド・もっこすに手を伸ばす。

「ホンマ、助っ人の皆、ありがとうな。これで依頼完了やで。報酬は後日改めて、ホンマありがとな！」

手配していたハイエースに助っ人たちを乗せ、そう言う。

これから先はウチが片付ける。正直今日はあんま素晴らしいとこなしやったからな。

「あびこ、あんたひとりで行く気かい。ひらパー姉さんなんか完全武装しとるんやで。」

バールを手にしながらそう言うはるか。

「なんや、折角カッコいいとこ見せたる思たんに、残念やわ。」

「相手は現役のプロやし、数も多いんや、いくらあんたでも、荷が勝ちすぎるんちゃう。」

ふっ、とお互いに小さく笑い。

「おっちゃんごめん！少し寄り道して帰るわ！」

カッコよく決まったと思っただんやけどなあ…

「なんなん、もう終わってるやんけ。」

死屍累々と地面に突っ伏す無数の武偵たち。

「武偵憲章第8条『任務は、その裏の裏まで完遂すべし。』よ。」

「神崎…」

帰らせたつもりやったんやけどな。

「もつとも、理子たちは何にもしてないんだけどね。」

「すまん、うちの暴れん坊が運動不足解消するって聞かなくてな。」

理子と遠山の兄さん。

「それで、その暴れん坊將軍様は何処におるん？」

姿が見当たらない。

「それが…」

「お好み焼き食べに何処か行った!？」

あまりにも自由気ままな生き様に笑いが込み上げる。

「最高やで！ホンマ気に入っけしもうたで金虎はん。」

面白い人、そして、少し憧れる人。勿論、ああはなりたいとは思わへんけど。

## 外伝：緋弾のアリア i f . i f ―開幕編―

### ―キンジ視点―

東京武偵高に入学して一年が過ぎ、2年生となった今、武偵殺しにヤラれた兄さんやその為諸々があり、武偵を辞める決心を決めた俺は、探偵科Eランクとして在籍しているというのに、周囲からの評価は俺の望む方向とは真逆となっている。

そもその原因は入学試験の際にHSSになって無双し、Sランクの評価を得たことであり、HSSを自在に操れない未熟さにあるのだろうが、様々なトラウマとかがあって、それは仕方なかったと割り切っている。

実際、それだけなら実力に波のある昼行灯で済んでいた筈だ。

しかし、そうならなかった理由はなにか？そんなものはひとつ。卒業して6年経つというのに、未だに伝説として語り継がれ、今なお伝説を更新し続ける史上最強と呼ばれる武偵が姉であるせいだろう。

入学試験で圧倒的な力を見せSランクで入学し、面倒くさいという理由で一切試験を受けずに、Eランクまで一時期落ちるが、『あんな化物を野放しにするな』という国際武偵連盟からのお達しで、強制的にRランクに格上げされた、現SDAランク総合1位の姉、遠山金虎のせいだ。

姉さんの弟というだけで、実力以上のものを期待されたり、蘭豹から八つ当たりされたりと、散々な目にあってきた。

でも、それとももう少しでおさらばだ。転入届を提出した俺は、晴れやかな気持ちで過ごしていた。

それだというのに、なんでこんな厄介事に巻き込まれなければならんのだ：

「あんだ、あたしのドレイになりなさい！」

キンキンと響くアニメ声、ひよんなことからHSSの俺を見た神崎・H・アリアに付きまとわれる。

「悪いが、俺にそういう趣味はないし、武偵も辞めるつもりだ。」



そんな中辿り着いたこの事務所は、田園調布の一等地に狭いながらも一軒家として建っている所だった。

立地的には、かなりの収入が必要となる。それを数年維持出来てるといふことは、優秀な弁護士であり、武偵ということなんでしょうね。だからなのかしら？イ・ウーの話題に移ったその時、他とはリアクシヨンが違った。

「イ・ウー…懐かしい響きだわ。」

「懐かしい？あんたまさか…」

関わりがあるのか？ひよつとしたら元メンバー…様々な疑念が渦を巻く。

「貴女が何を考えているか、なんとなく分かるわ。でも、残念ながら大外れ。…あれは16の時だから、もう7年も前になるのね…」

続く言葉に備え、喉がゴクリと鳴りながらも、ガバメントに手を伸ばす。

「この案件、受けてもいいわよ。私、いえ、私たちなら今日にでも解決出来るわ。」

「はっ。」

話が突然飛び、間抜けな声が漏れる。

「ちよ、ちよつと！待ちなさいよ！7年前の話は!?!」

正直、そこが気になってしまう。

「簡単よ、武偵高に退屈したから、適当な無法者相手に暴れてたのよ。その時に半殺しにした中に、イ・ウーがあつたってだけ。」

「待つて、意味が…」

これから決死の覚悟で戦いを挑もうという連中を7年前、彼女が同い年位の頃に半殺しにした？正直、この狐崎という女からは、それほどまでの強さは全くといっていいほど感じない。

「なんだ？客が来ていたのか。」

突然背後から聞こえる声。

「遅いわよ。それに来ていたのか、じゃないわよ。今日は依頼人が来るって、昨日伝えてたわよ。」

「そうだったか？…まあ、そんなことはいい。ほれ、土産に頼まれてい

たバターサンドだ。」

北海道の某有名店のレーズンバターサンドが入った紙袋を手に、狐崎の隣へ座る女。

「それよりも仕事は終わったのよね？」

呆れた様子で包み紙を丁寧に見ながら、女にそう言う狐崎。

「勿論だ。ジンギスカンが食べたくなって店が開くのを待っていたら遅くなってしまったのだ。」

「この女、なんか見覚えがあるような…」

「ああ、神崎さん。紹介するわね。この事務所の武偵で、唯一の従業員、遠山かなこよ。明日貴女が転入する東京武偵高のOGでもあるわ。勿論、私もだけど。」

「遠山かなこ…」

見覚えがあつて当然。それに、この事務所が別格扱いされる意味が分かった。史上最強の生物と畏怖される、Rランク武偵が所属しているなら、例え武装検事であってもやり合うのは気後れするだろう。彼女ならば、イ・ウー全員を半殺しにしたと言われても納得出来る。

ロンドン武偵高にいた頃、絶対に戦つてはいけない相手として、顔写真付きで教わったその人物が目の前でバターサンドを口に放り込んでいる。

「何年だ？」

バターサンドを飲み込み、遠山かなこが私に質問してくる。

「何年？」

質問の意味が分からず、聞き返す。

「学年を聞いているのよ。確か、2年生だったわよね？」

ああ、学年のことね。依頼に関することかと思つたわ。

「ええ、そうよ。それがなにか？」

依頼とは関係ない質問に、少し不機嫌そうに答える。今はそんな話をしていない場合じゃない。

「みずず、依頼の内容は？」

私の答えを無視し、隣に座る狐崎にそう尋ねる。狐崎は溜息をついて、私に聞き取れないように耳元で囁いている。読唇術対策か、狐崎

は口を開かずに腹話術を使っているせいで、話の内容は全く分からない。

「あんたたち、依頼人を無視するの！」

ほったらかしにされ、怒りが爆発寸前になる。なんなのよこいつら！

「ああ、すまない。なんとなくが分かった。」

怒る私に対して、一切態度を変えずに、遠山かなこが口を開く。

「その依頼、受けてもよいが、お前の転入後にしてもいいか？」

「なに？先約でもあるってわけ？」

一分一秒も無駄にしたくないのに：でも、彼女以上の協力者を得る手は他にない。あまり期待せずに来たこの事務所だったけど、まさかこんな大物がいるとは思ってもみなかったわ。

でも、なんでそんな大事なことを、事務所H Pホームページにも、あらゆる情報サイト、広告にも記載してないのかしら？正直理解出来ない。史上最強の生物と称される遠山かなこが所属する事務所と知られていれば、依頼は後を絶たない筈だし、こんな小さな事務所ではなく、高千穂弁護士事務所の様に、巨大なビルを建てることだって可能だろう。

それなのに寧ろ、存在を隠す様にして依頼を待っている。まるで、彼女がそこにいるのを知っている者だけが依頼を出すことを望んでいるみたい…

「悪いけど、そこは守秘義務があるから答えられないわ。」

まあ、そう返されるのは予想通りだ。

「でも、転入後に契約した方が、貴女にとっても良い方向に向かうと思うわよ。」

「どういふことよっ…」

やっぱり、この2人は何か重要なことを知っているみたいね。

「どうもこうも、そういう気がするだけよ。さあ、結論は出たわけだし、今日はお開きとしましょう。」

話す気はないみたいね。無理矢理にでも聞き出したい。ガバメントに手を伸ばすが、

「やめておけ。それを抜くとお前を殴らなければならなくなる。」

ガバに伸びた両手が掴まれる。速すぎてなにも見えなかった…

勝てる可能性は…無いわね。彼女の目を見てそれを察する。今こうしているのに、彼女の瞳は、全く戦う意識が無い。それなのにこれだけの速さ。上には上がいるのね。

世界最強がどの程度の高みにいるのか、今の私とどれだけレベルの差があるのか、試してみたい。そう思わないわけではない。でも、直感が絶対に戦ってはいけないと告げる。

「分かった、今回は従ってあげる。それじゃあ転入後、連絡するわ。」  
やれやれと両手を上げてそう言う。

「ええ、そうしてちょうだい。見送りは？」  
「不要よ。」

狐崎の言葉にそう返し、事務所を後にする。

あのふたりの思惑通りなのか、転入初日、衝撃的で、運命的な出会いを果たす。遠山キンジ、武偵殺しに襲撃されるところに助けに入った後、強猿まがいのことをされ、別人の様に強さを見せつけたその男に惹かれ、そして、パートナーになって欲しいと願った。

仕組まれたのか、それとも偶然なのか、それは今は分からない。だけど、この男となら、イ・ウーを全員逮捕し、ママの冤罪を晴らすことが出来る気がするのだ。

「あんだ、あたしのドレイになりなさい！」

彼が欲しい。彼の部屋に乗り込み、伝えたその言葉は、そんな思いから出た言葉だった。

|||||  
|||

—キンジ視点—

「な、なんで姉さんの命令なんだ！そもそも、お前がなんで姉さんから命令を受けるような立場になってるんだ！」



部屋に乗り込んで来るやいなや、放たれた言葉『ドレイになれ』そんな言葉よりも、更に恐ろしい言葉がアリアの口から放たれた。

姉さんの名前を知っている。それだけなら、東京武偵高の生徒なら皆知っていることでなんの疑問もない。武偵高の学生時代に、姉さんは様々な任務や依頼で暴れに暴れ（本人は暴れた覚えはないらしい）、S↓E↓Rランクというわけのわからないランク変動をやってのけ、更には、在学中にS D Aランク初選出でいきなり総合1位という、これまたわけの分からんことをやってのけた。そのあまりにも突出した戦闘力で、あの暴力・銃撃、なんでもござれな凶暴な武偵高教師陣でさえも、恐れて碌に指導出来なかったという東京武偵高の伝説となった人だからだ。

しかし、何故アリアと姉さんが接触し、アリアが姉さんの命を受けているのかがさっぱり分からない。

「話すと長くなるし、協力関係にもない今のアンタには言えないわ。ただ言えるのは、遠山かなこ、そして、狐崎みずすが私のバックにいるってことだけ。」

更に聞きたくない名前が出てくる。あのふたりが一緒だと、俺は碌な目に合わない。

「みずぐの事務所に行ったんだな…」

「そうよ。それだけは教えてあげる。」

ヒントはそれだけ。しかし、何故アリアがふたりと知り合ったのかは分かった。問題は、武偵か、それとも弁護士か、そのどっちへの依頼かという事だ。そして、それを知りたければパートナーとなれ、そういうことらしい。

ふたりの名前が出た以上、全力で逃げようとすぐさま捕獲されボコボコにされるのは目に見えている。選択肢はひとつしかない。

「分かった、分かった、なってやるよ！ただし、一度つきりだからな！」  
こうして一度つきりのパートナー契約が結ばれてしまった。



「知っているのは名前と性別。キンジから聞き出した情報では、性格破綻者ということ。そして、キンジの姉で、武偵なら知らぬ者はいない、あの遠山かなこの相棒であること。」

「ん〜？なんのこことかな〜？理子分かんない。」

無駄と分かりつつも、バカキャラでとぼけてみる。情報収集に長けたこの女が、素顔を晒して現れている時点で、こちらの想像の数十倍の策が既になされているのだろう。

「そ、峰理子には分からないのね。なら4世さんなら分かるかしら？」  
見下した瞳、嘲笑う様子上がった口角。全てが気に障る。キンジの言う通り、性格が悪い女だ。

「ああ？」

相手の口車に乗せられてはいけないとは理解しているが、素が出てしまう。

「あら、気に障ったかしら？ごめんなさいね、4世さん。ところで本題なのだけど、武偵殺しこと4世さんに――」

「4世、4世うるせえんだよ！私は数字じゃねえ！」

無駄と分かりつつも、怒りが爆発し、隠し玉であるはずの髪を操り、2銃2刀で襲い掛かる。

「いつか、本当に刺されるぞ。」

全ての攻撃が無力化されたと気付く前に、そんな声が聞こえた。

「その覚悟はあるし、碌な死に方をしないのも分かっているわ。」

自嘲気味に笑う狐崎。その前に現れたのは、一番敵対したくない女。遠山かなこ。

「全く、一度くらい痛い目にあつた方が良いのではないか？」

「その時は死ぬ時よ。それよりも、さっさと終わらせましょ。」

マズい、そう思った時には既に手遅れ。掴まれた腕は、如何なる逃走術をもつてしても抜け出せそうにない。そもそも逃げたところで一瞬で追いつかれる未来しか見えない。

「こちらとしても手は出したくない。大人しく話を聞いてくれぬか？」

遠山かなこが邪気のない瞳でこちらを見る。

「話？弟と依頼人を守る為に私を消すんだろ？」

戦闘態勢を切っていない、素の状態でそう言う。

「何を勘違いしているのかしら？私としては、あのふたりがどうなるうと知ったことじゃないし、かなこだって…」

「お前が殺せたとしても、キンジは死なんさ。死んだって生き返るぞ、遠山の男は。」

イカレてるとしか思えない言葉を当然といった顔で口にする遠山かなこに、ゾツとする。

「つまり、貴女が何をしようとしたらには関係ないし、邪魔する気もない。ただ、ふたつ約束しなさい。あのふたりを狙う計画において死人を出さないこと。そして、武偵高の生徒以外に被害を出さないこと。このふたつ。簡単でしょ？」

「随分とぬるいこつて…」

予想以上に簡単な条件。しかし、あのふたりを倒さなければ、私がブラドたちから解放されることはない。

「安心しなさい。貴女の件はなんとかしてあげる。」

どこまでも知ってるんだなこの女は…

しかし、最強のコンビを味方につけれる可能性は、イ・ウーという組織以上に魅力的だった。

## 外伝：緋弾のアリア i f . i f ―開幕編Ⅱ―

―キンジ視点―

面倒くさいことになったな。

アリアに強制的なパートナー契約を結ぶこととなり、そう思っていたが、その翌日は特にこれといった事はなかった。

しかし、それとは別に、教務部からの命令で、重く嵩張るコピー用紙の運搬を行っていた。

「クソ・蘭豹の野郎、面倒くさいからって押し付けやがって…」

ぶつくさと言いながら、倉庫から紙の束を持ち出し教務部へと向かっていた。単位が不安な俺が断れないと分かって押し付けやがったな。

しかし、毎日毎日、しつこいくらい執拗に迫っていたアリアが今日ほとんどやって来ない。俺としては平和でいいんだが、なんだか気味が悪い。

あいつの性格的にパートナー契約が成立したと同時に更に押しが強くなると思っていたが、案外目的を達成したら興味が無くなるタイプなのか？

そんなことを考えながら廊下を進む。教務部ももう目の前だ。

「ついてこいキンジ。」

「ぴゃあっ！」

なんの前触れもなく現れた姉さん。心臓がマジで一瞬止まったぞ！バクバクと痛い程脈打つ心臓を押える手は生憎塞がっている。

「ね、姉さん…ここ学校なんだけど…」

絞り出した声でそう言う。

「それがどうした？行くぞ。」

ダメだ、話が通じない…

「ね、姉さん。待ってくれ。何処に行くのか分からんが、今仕事なんだ。」

手に持つコピー用紙の束を顎で指す。

「ならさつさと終わらせるぞ。誰に持って行くのだ？」

「ら、蘭豹だけど…」

「そうか、なら話が早い。」

グイツ、と引つ張られた感覚の後、自分の足が床から離れているのが分かった。片手で軽々と俺を持ち上げ教務部に突入する姉さん。

教務部、武偵高において最も危険な場所とも言われる場所。教員の機嫌や生徒の態度によっては、ボコボコでは済まない程甚振られる場所へノックもせずに入突するなど、普通の生徒なら恐ろし過ぎてやろうとも思わないだろう。

それをこの姉は、扉を指先ひとつで吹き飛ばして突入する。

「なにしとんじやあつー！」

暴拳に象撃ちをぶつ放す蘭豹を筆頭に、教務部全体から一斉に放たれる弾丸。普通なら恐怖でビビッてしまうのだが、今は姉さんに担がれている為、そんな恐怖は全くない。あるのは姉さんへの恐怖だけだ。

「なんだ？武偵高は随分と物騒になったのだな。私の時はこんなことはなかったぞ。」

全ての弾丸を片手で払いそう言う姉さん。あんたの時もあつたよ。ただ皆あんたが怖くて手を出さなかっただけだ。

そう、姉さんは武偵高の生徒だった頃から別格だった。教員やあの校長でさえ姉さんの反撃を恐れて何も出来なかったと、以前みすずに聞いたことある。

それを聞いた時に思ったのは、『そりやあそうだ』だった。武偵高の教師よりも強い、武装検事の中でもトップクラスだった父さんを、中入学の段階で片手でいなしていた姉さんが、教員たちの手に負えるわけがないのだ。

そんな姉さんが突如教務部へ現れたのだ、教員たちがパニックを起こさないわけがなかった。阿鼻叫喚の地獄絵図を想像したが、姉さんは誰よりも早く、そして速く動いた。

「蘭、久しぶりだな。キンジを借りていくぞ。」

ドサツ、とコピー用紙の束が蘭豹の前に落とされる。



いる。そんな普通では有り得ない営業方針でも事務所が成り立っているのは、偏に一度の報酬額の多さだ。

一般的な日本人の生涯賃金の数百倍の金額が一度の報酬で入って来ることさえある。それが最大の要因。かなこという最強の戦力を国家予算並みの金額をつぎ込んででも行使したい連中というのは、私が想像していた以上にこの世に存在している。

最新型からひとつ型落ちした戦闘機でさえ1機100億円以上する。そんな戦闘機よりも遥かに強いのがかなことだ。戦闘機を10機買う位なら、彼女を雇う方が戦力としては上となるのだから、依頼が絶えないのも分かるが…

「世界って、私よりも腐ってるのね。」

それが事務所を設立して最初に抱いた感想だった。自分でも分かる程性根が腐った私よりも、この世界は腐敗し、腐臭を漂わせている。最も、そのおかげで大金を得られるのだからwin-winなんだけど。

まあ、そんなことはどうでもいい。目下、今現在一番大事なことは

「来たわね。」

「来たって、誰よ?」

私の言葉にそう返す神崎。

「みすず、連れて来たぞ。」

米俵の様にひとりの男を担いで現れるかなこ。

「気絶してるわよ。」

だから、と力なく担がれた男を指す。

「む?全く、情けない奴だ。おい、起きろキンジ。」

ソファアヘ下ろし、体を揺するかなこ。しかし、中々目覚めない。そんなキンジの左頬をペシッ、とかなこが叩く。

「うつ…」

キンジの目が薄っすらと開く。かなこには遠く及ばないけど、このタフさは流石姉弟ね。普通なら死んでもおかしくないもの。

「ようやく起きたか。ほれ、みすずが話があるらしいぞ。」



「うげえ…ところで姉さん、左の頬が滅茶苦茶痛いんだけど…」

私の顔を見て、心底嫌そうな顔をした後、腫れた頬を押さえながらかなこを見るキンジ。随分と嫌われたものね。まあ、好かれても困るけど。

「唾でもつけておけ。直ぐに治る。」

相変わらずな回答をすなかなこを無視し、ふた리를呼んだ理由を告げる。

暇潰しとストレス解消を兼ねた、愉快的喜劇が始ってくれると思うと、自然と口角が上がっていく。

|||||

||

— 神崎・H・アリア視点 —

遠山金次、彼をパートナーにしろ。

転入初日に『武偵殺し』に狙われていたところで共闘した不可思議な男の話を契約書を書く為に事務所を訪問した際にしたら、狐崎からそう告げられた。

そんなことを言われずとも、彼の力を目の当たりにしてから、パートナーとなることを考えていたし、なんだか命令されている様で気に入らなかつたけど、彼に関する情報や行動の予想などは役に立った。

彼が遠山かなこの弟で、彼女程ではないせよ、十分以上の実力を隠し持っているというのは身をもって知っている。それだけでも武偵として十分に魅力なのだが、それとは別に、なんだか彼に対して不思議な思いを抱き、実力とかそういうのとは違った魅力を感じる様になっっていた。

「二度だけ。」

そういう契約でパートナーとなったことを狐崎に伝えた翌日、呼び出しの連絡を受けたのだった。

「それで、今日はなんの用で呼び出したのよ？」

用件も告げずに呼び出された身としては、文句の一つも言いたくない。

「直に分かるわ。もうすぐ着くと思うけど、座ったら？」

説明する気が全くないと分かる狐崎は、コーヒーを啜りながらそう言う。風穴を開けてやりたいが、ここで争っても意味がない。彼女と遠山かなこのふたりは、ママの冤罪を晴らすという目的において、最も強力な武器なのだから。

「来たわね。」

「来たって、誰よ？」

事務所の入口を少し見て狐崎がそう言うので、質問する。しかし、その質問の答えは、彼女の口からではなく、直ぐに目の前に現れた。「みすず、連れて来たぞ。」

遠山かなこの姿と声。そしてその右肩に担がれているのは…キンジ！

なんで気絶しているの…？

目覚めたキンジと並んでソファーに座らされる。

「さて、大切な話をするわね。…でもその前に行くべきところがあるわ。」

チャリ、と車のキーをキンジへと放り投げる狐崎。運転しろということだろう。

「行くって、何処だよ。」

鍵を掴み取ったキンジが苛立った様子で質問する。

「行けば分かることをいちいち聞かないでくれるかしら？ さっさと行くわよ。予約の時間に遅れるわ。」

立ち上がり、そう言う狐崎。それと同時に身体が浮遊感に襲われる。

「姉さん、放してくれ！」

キンジの言葉で、自分が担がれているのだと気付く。ホント一瞬でふたりを軽々と持ち上げる辺り、この人とは敵対したくないわね。

某国産自動車メーカーの高級ミニバンに乗せられる隣に座るのは

遠山かなこ。助手席には狐崎が座る。

狐崎が手早くカーナビを入力し、音声案内が始まる。：目に映った目的地に、怒りや悲しみ、様々な感情が入り混じった、なんとも言いえない思いが込み上がってくる。

「さあ、出発よ。」

狐崎の声に、渋々という感じでアクセルを踏むキンジ。彼にはまだなにも伝えていないし、教えるかどうかとも決めきれていなかったのに…この女、何を考えているの…

「ママ!!」

「アリア!!」

アクリル板越しでなければ、どれだけ幸せだったのかしら。

でも、もうすぐよ。1度つきりとはいえ、パートナーも出来たし、なによりも最強のコンビが味方についている。

「時間よ。」

狐崎の声で面会が終わる。その時、今までの面会とは違う、少しだけ晴れやかな気持ちでママと別れることが出来た。

「少し待ってなさい。」

私とキンジが面会室を出たところで、狐崎にそう言われる。彼女と遠山かなこが面会室に残ったまま、重い扉が閉ざされる。

「アリア…」

心配といたたまれなき、疑問の混じった瞳でキンジが私を見る。

「アンタに何も伝えていなかったのは悪かったと思っているわ。何度か伝えようとは思ったのよ。でも…」

知ってしまったのなら、危険が彼にも及ぶ。完全なパートナー契約というわけではない彼をどこまで巻き込んでいいのか分からなかったのだ。

沈黙の時間。お互いに何を言っているのか分からなかった。

「待たせたわね、話は終わったわ。帰りましょう。」

面会室から出てきた狐崎の言葉で拘置所を後にし、車へと乗り込む。

「おい、イ・ウーってなんなんだよ!」

車へと乗り込んで、開口一番にキンジが狐崎に詰め寄る。

「教えてあげてもいいけど、覚悟はあるのかしら？イ・ウーは第Ⅰ種機密。知れば公安0課や武装検事が消しに来るわよ。全てをね…」

そう、イ・ウーはそういう扱いの連中だ。だからこそ中々言い出せないし、弁護士も見つからなかった。もともと、じゃあなんでアンタは知ってて、しかも無事でいられるのか？という疑問はあるが、彼女たちはそういう次元の上にいるのだろう。

「勝手に巻き込んでおいてよく言うぜ…なんでお前は消されないんだよ…」

まるで消されて欲しいと言わんばかりの言い方だ。

「公安や武検如きが私たちを消せると？もう少し考えてものを言いなさい。」

呆れた、と言う様に狐崎が言う。少なからず日本では最強クラスであるふたつの組織を取るに足らないと言い切ってしまうこのコンビを野放しにしているのかしら…

事務所に戻り、ソファアに腰を下ろす。ここから彼女の言っていた『大切な話』というのに入るのだろう。

「まずは落ち着いてこれを読みなさい。」

差し出される1通の封筒。彼女は既に中身を確認しているのだろう、封が切られている。

中から出てくるのは1枚に紙。その内容に怒りと、それ以上の恐怖が込み上がる。

「読み終えたみたいね。」

そんな私の表情を見て察したのか、狐崎が落ち着いた様子で言う。「待って！契約書を交わしたのよ！」

「よく読まずに署名と捺印したのね。あれは仮契約書よ。それに、仮に契約書だったとしても、着手金も貰ってないし、契約の無効化は可能なのよ。」

あの紙に書かれていたのは、狐崎に対する勧告。私の依頼、要するにイ・ウーに関する件から手を引けということだ。そして、彼女はそれに従う気ている。

「アンタたちなら政府だろうと、公安も武検も怖くないんでしょ！」

そう、つい先程そう言っていたじゃない！

「ええ、別に彼らと一戦交えることになつたとしても、こっちは全然構わないわ。寧ろそれを恐れているのは彼らよ。だから、武力ではなく、弁護士資格の剥奪という手に出たんでしょ。」

狐崎に対する勧告内容は、この件から手を引かない場合、彼女の弁護士資格の永久的に剥奪するというもの。

「だから、私は貴女の依頼は受けられないわ。そもそも、資格を剥奪されたら、弁護士と依頼者という契約関係だつて崩れるじゃない。それに、法廷にも立てないし、貴女の望む結果を出すことは出来ないのよ。」

彼女の言う通り、彼女が弁護士でなくなつてしまつたら、契約も意味を成さない。しかし、

「弁護士でなくとも武偵であれば逮捕権はあるわ！法廷に立てなくてもイ・ウーの奴らを逮捕出来れば冤罪は晴れるのよ！」

裁判は別の弁護士に任せればいい。彼女たちならそれが出来る筈だ。

「まあ、そういう手もあるわね。でも、なんで貴女の為に私の弁護士資格を剥奪されなければならぬの？別に弁護士という仕事に拘りはないわ。でもね、なんで私の社会的地位や資格をただの依頼人の為に奪われるのは看過できないわ。」

「は？」

「だから、なんで貴女の為にそこまでしなければならぬのかしら？私は正直イ・ウーなんてどうでもいいのよ。7年前、奴らの全てを知つて以来、興味なんて無くなつたの。今回依頼を受けてもいいと思つたのも、なんとなく面白そうつてだけだし。」

「ア、アンタ…」

怒りで声が震える。最初から私やママの為なんて思いは無かつたんだ…ひとりではしゃいで、そんな姿をこの女は笑つていたのね。

「まあ、私だつてそこまで鬼畜ではないわ。現に、ちゃんと貴女の望む結果をもたらせる様にしてあげたでしょ。」

「いや、お前は鬼畜とかそういう次元を超えた性悪だろ。」

キンジがそう言うが、そんな彼に対し、ドス黒い微笑みを向ける狐崎。背筋がゾクゾクと震える様な微笑みに、キンジは苦い顔をする。「神崎さん。そのバカをパートナーにさせたでしょう。貴女とこのバカのふたりなら、貴女の望みは叶うわよ。もつとも、御膳立てはしてあげたけど、貴女とキンジの契約がいつまで続くかは、貴女たち次第だけ。」

彼女はどこまで知っていて、何を考えているのだろう。私の直感を持つてしても、分かるのは、私たちは彼女の掌で踊らされているのだということだけだ。

正直、今すぐにも風穴を開けてやりたいが、彼女の横に立つ遠山かなこの瞳を見ると、そうする覚悟が出来ない。

「どうしても駄目そうな時は、私ではなく、かなこ個人に頼みなさい。イ・ウーだろうが貴女の国のM16だろうが、一瞬で潰してくれるわよ。まあ、かなこがそれを受けるかどうかは、キンジ次第でしょうけど。」

余裕の笑みを浮かべる狐崎。やはり、彼女の掌で踊らされているのだろう。

「待て、なんで俺なんだよ!」

キンジが不服そうに言う。それに対し、答えたのは、狐崎ではなく、遠山かなこだった。

「みすずに言われて思い出したが、そのイ…イなんとやらは大したことない連中だ。その程度の相手を倒せず、お前が私に泣きつくなら、お前を鍛え直さねばならんからな。」

「やります! やりますから! それだけは勘弁して下さい!」

キンジが顔を青くしてそう答える。遠山かなこ、彼女は一体、どれ位強いのかしら…

「畜生、最悪だ!」

狐崎の事務所を出た後、キンジがそう呟く。流石に彼に同情してしまふ。

「ねえ、そんなに怖いのか? アンタのお姉さん、遠山かなこって。」



探偵として推理を極めてしまい、その推理力は、最早予知の域に迄達していたというのに、7年前、その予兆さえ見抜かせず。イ・ウーの真実を突き止めた少女、狐崎みすず。

僅か17歳という若さで、僕と同等、もしかしたらそれ以上の推理力を持った少女に、驚愕と、それ以上の興奮を感じた。

僕や、嘗て相対した宿敵にして好敵手、モーリアティ教授。それを超えるかもしれない存在という高揚感。童心に還った様に、いつになく興奮してしまっていた。

「イ・ウー。第I種国家機密になるなんて、どれだけのものかと思つたけど、拍子抜けだわ。かなこの退屈のぎにさえならないなんて。」

僕と向き合つた彼女の第一声はそれだった。イ・ウーのメンバーたちが次々と叩きのめされるという珍事を推理していた時だった。

「まあいいわ。疑問は解決されたし、帰るわ。」

ひとりで納得し、完結した彼女に声をかけた。

「お茶くらい飲んでいったらどうだい?」

それは、純粹に彼女に興味を持つてしまった故に出た言葉だった。

「何故君はここに?」

狐崎みすずと名乗つた少女は、差し出した紅茶を啜りながら僕の問題に言葉を返す。

「探偵なら、推理してもらいたいのね。」

「はは、そうだね。じゃあ、僕の推理では、君は知的好奇心を満たす為にここに来たんじゃないかな?」

僕の推理に、カップを置く彼女。

「半分正解ね。イ・ウーなる組織の実態が知りたかつたっていうのは間違っていないわ。でも——」

そう、言葉にはしなかつたけど、それも分かっている。彼女はひとりではない。もうひとりの為にも動いているのだ。

「君のお友達は随分と強いみたいだ。」

「ええ、そう。あの子の飢えを満たしてあげたいのよ。」

彼女の友人は強過ぎて、己の力を存分に発揮出来ず、フラストレーションが溜まっているのだろう。



「なら、イ・ウーにおいで。ここはお互いを高め合う、言わば学校みたいなものだ。」

彼女たちが欲しい。これ程の逸材はもうお目にかかれないかもしれない。

緋弾の力さえ凌駕しそうなふたり組に好奇心が抑えきれなかった。「お断りするわ。私ひとりだったら考えていたかもしれないけど、私にはあの子がいるもの。」

まだ姿を見せない彼女の友人。その人物にも興味がある。

「残念だ。でも、それは断る理由としては情報があまりにも少なすぎる。」

「そうね。ああ、別に教えたくないわけじゃないわ。ただ、少し調べれば分かることよ。」

次の言葉を促す。

「かなこは、教える、教わるという行為に対して絶望的に向いてないのよ。」

「成程、確かにそれはイ・ウーに居ても退屈だろうね。」

推理出来なかった答え。しかし、悔しさよりも面白いと感じてしまった。

「それじゃあ、そろそろ始めようか。彼女も退屈しているだろうし。」

「流石名探偵ね。かなこ、相手してくれるそうよ。」

その言葉と同時に現れる少女。ブロンドヘアを靡かせる、女性嫌いな僕でさえ見惚れる様な美少女。

「今までの奴らよりも強いな。それも、盲目で…」

目を合わせただけでそれを察する辺り、彼女の実力は本物だろう。彼女もまた、僕の推理を超えてくる存在らしい。

「よく分かったね。今まで誰にもバレなかったのに。何故分かったんだい?」

僕の言葉に首を傾げる彼女。

「分かったからだ。他に理由があるのか?」

成程、彼女は推理ではなく、直感だけでそれを察したのか。直感だけなら僕を超える。だけど…

「右のストレートだね。」

彼女の攻撃を推理する。躲して正解だった。推理を超える威力、受けていればあの一発で再起不能だった。

「かなこ、彼は頭を最大の武器としているわ。最も得意とするところで戦ってこそ意味があるんじゃないかしら？」

初撃を躲した直後、狐崎女史がそう言う。成程、かなこくんの直感  
は僕を超える。しかし、推理と知識であれば負ける気はない。面白い勝負だと思う。

「頭か：私も負けたことがないぞ。」

己の額を親指で叩きながら、僕へと近づくかなこくん。何故だろう、彼女の考えが読めない。

「ふん！」

条理予知の外：いや違う。彼女は何も考えていないんだ。読める筈がない。

頭突きが決まり、意識が途切れる。あの最初の一撃は、彼女が僕の  
実力を測る為に、思考したが故に躲せたのだ。思考を止めた彼女の攻  
撃は、全て条理余地の外にある。

こんな攻略法があつたなんてね…

意識が落ちるまでの一瞬で辿り着いた推理。僕は彼女には勝てな  
い。理の中にあるからこそ予知が出来る。理から外れた彼女は、僕の  
及ぶ範囲にはいないのだから。

「僕も老いたみたいだ。君の考えが全く分からないよ。」

彼女に、いや、誰にも打ち明けていない筈の秘密さえ知っている彼  
女に、柄にもなく恐怖を感じる。

「あれから考え方が変わったのよ。知的好奇心は永久に満たされな  
い。なら、満ちないものを満たすより、楽しんだ方がいいと思わな  
いかしら？」

「君にとって、僕の計画さえ喜劇の1幕だと？」

まるで、全ての結末を知っているのかの様な口振りだ。

「貴方が追い求める色金とそれ以外、そうね、もうひとりの教授も、結局かなこの飢えを満たせない。それなら、少しは私を楽しませてくれたら十分、別に何も期待していないわ。」

あの時の予想通り、彼女は僕を超えてしまったらしい。人の事は言えないけど、彼女は、性格さえまともなら、本当に僕を超え、世界で最も偉大な探偵になれただろうに：

「お生憎様、この性格は生まれつきだし、私はあの子の隣いれればそれでいいの。」

口には出していない。電話越しでも思考を読み取れるみたいだ。

「それじゃあ『教授』、面白い舞台を期待してるわよ。」

ブツリ、と切られる回線。

なんだろう、胃が痛くなってきたよ。

彼女との通話が終わり、それ程の時間も空かずに、理子くと爽竹桃くんの敗北の一報が入った。

別にこれは計画通りだし、なんの疑問も、違和感もないのに、なんだか彼女の掌の上で踊らされている気分になった。

「やはり、歳には勝てないのかな。」

## 外伝：緋弾のエリア i f . i f —開幕編Ⅲ—

—峰理子視点—

「やはり欠陥品だったな、4世。」

ゲラゲラと笑うブラド。4世と呼ばれ、湧き上がる怒りさえ抑え込まれる恐怖、刷り込まれた力関係に涙が零れる。

「これは不要だな。」

奪われる十字架。

「返して！」

母の形見を奪われて尚、その目に制されるだけで萎縮する体。

「欠陥品のお前はイ・ウーも退学だよ。」

更に高笑いするブラド。支配からの解放、その唯一の手段だと信じていた組織からの無慈悲な通達。普通なら泣き叫び、心が碎けていたのだろう。

しかし、そうならなかった。己をここまで追い詰めたキンジ。あいつと組めばブラドを倒せるかもしれない。それに、あの約束が本当に有効なら……

「遠山かなこ……」

「遠山かなこ！」

私の眩きに、信じられないほど過剰に反応するブラド。優越感に浸った笑みは消え、焦りと恐怖が彼を支配する。

そんな彼の姿など見た事がなかった。圧倒的な強者であるブラド。彼が狼狽える姿を見れたお陰で、力で支配され、今だに震える身体に鞭が撃てた。

支配からの解放。その願いの為に、あらゆる能力を駆使し、その場から逃げ出した。

|||||  
|||

—キンジ視点—

アリアと共に、『武偵殺し』だと判明した理子を追い詰め、あと一歩のところを取り逃がした後。一時の感情に流され、アリアとのパートナー契約を延長してしまった俺は、デュランダルことジャンヌとの戦いを終えた。

今振り返れば後悔しかない。あれ程警戒していたみすずの思い描くストーリーに乗っかってしまっているのではないかと、毎晩うなされている。

そんな憂鬱な日々が数日続いていた俺の携帯に、一通のメールが届いた。

「で、なんでお前たちがいるんだよ。」

呼び出しの場所は、やはりみすずの事務所。それはもう仕方ない。応じなければ、姉さんにボコボコにされた後にどうせ連行されるのだから。

問題は、アリアがいること。そして…

「ヤツホー、キーくん！」

『武偵殺し』こと理子がいること。

「キンジ、その物騒な物を仕舞いなさい。」

みすずの冷淡な声。理子に向けたベレッツタを下ろせという言葉。

「司法取引、知ってるよね？」

理子の小悪魔的な笑みで、全ての察する。しかし、よくもまあ、堂々と現れたものだ。その肝の座りようには感嘆するぜ。

「そういうこと。さて、全員揃ったことだし、呼び出した本題に入りましょう。」

悪い笑みを浮かべたみすずの言葉。何故か背筋がゾクリと震えた。

「神崎さん、喜んでいいわよ。貴女の依頼は受けられないけど。盗品返却の依頼なら、私たちは受けれるのよ。」

突如訳の分からんことを言い出すみずず。

「意味が分からないわ。」

俺と同じ感想をアリアも抱いたようだ。

「ふふー、今回の依頼人は理子なんだー。」

何かを含んだ笑みの理子。

「そういうこと。今回、私たちは彼女の依頼を受けることにしたわ。彼女の大切なものを取り戻す。『無限罪のブラド』からね。」

誰だそりゃ？

「ブラドですってー！」

アリアが過剰に反応する。

「おい、誰だよそいつ。」

『無限罪のブラド』、イ・ウーのNO. 2よ…」

俺の疑問にアリアが答える。NO. 2…マジかよ…ヤベエ奴じやん…

「そういうわけで、私とかなこはこれから動くわ。それで、貴女たちには、ひとつお願いしたいことがあるわ。お願いの条件として、ブラドの身柄をあげる。…どうかしら？」

動く前から、その辺の砂利を一粒持つてくる程度の難易度、成功が約束された依頼という言い方をしながら言い放つみずず。

「それでいいわ。それで、お願いってなによ…」

「おい、勝手に了承するなよ！俺はこいつのお願いなんか聞きたくないんだー！」

勝手に話を進めるアリアとみずずに対し抗議をする。

「安心しなさい、別に難しいことじゃないわ。峰理子、依頼と一緒に行動しなさい。そして、彼女の奪われたロザリオを取り戻しなさい。」

いや、それって本題じゃねえのか？

「よろしくね、キーくんー！」

こうして俺たちの愉快的な泥棒作戦が開始されたのだった。



「うむ、やはり殴り甲斐があるな。どれ、もう少し力を込めてみるか。」  
「や、やめてくれ！」

ブラドの絶望と恐怖以外の感情が消え去った叫び。しかし、無情にも叩き込まれる拳。今までも有り得ない音が響いていたのに、それ以上の音が響き渡る。

再生能力のせいで、それでも死ぬことが出来ないブラド。そして更に叩き込まれる拳。今までとは違い、淡い光を纏っている。

「ぎゃあーっ！っ！」

ブラドの絶叫と共に、右肩が吹っ飛ぶ。

「すまん、加減を間違えた。」

返り血が顔に掛かった遠山かなこは、少し焦った様に言う。吹き飛んだ右肩は再生せず、ブラドの絶叫は延々と響く。

「4箇所同時に攻撃すれば再生出来ないって聞いてたけど、そうでもないのね…かなこ、壊したら駄目よ。」

ようやく制止に入る狐崎。そして、泣き喚くブラドに、

「ねえ、このまま一生かなこのサンドバッグと、司法取引に応じた後、血を吸えずに、ゆつくりと死んでいくの、どっちが良いかしら？」

究極の2択を迫る狐崎。

「殺してくれ…」

弱々しく呻くブラド。

「そ、決まりね。かなこ、あの屋敷が不快だわ。消してくれる？」

「まあ、構わんが…」

そう言つて正拳突きを放つ。100m程離れた紅鳴館に、光を放つ金色の虎が襲い掛かる。ドン！という大きな音が1回だけ響き、紅鳴館が綺麗さっぱり、跡形もなく消え去った。

「さて、依頼完了ね。神崎さん、一緒に警視庁に行く？」

完全に心が壊れ、廃人と化したブラドを、突き刺さっていた地面から片手で引きずり出し、軽々と持ち上げた遠山かなこの横で、狐崎がそう言う。

「そ、そうね。そうさせて貰うわ…」

「じゃあ行きましよう。」





にも渡す気はないけれど。

「そうだ、冷泉君。なんか最初は面白くなりそうと思っていたんだけど、飽きてきたのよ。」

「いや、意味が分からないんですが…」

「イ・ウーの…いえ、緋々色金に関する一連のことよ。正直、飽きたわ。さっさとかなこにぶん殴らせて、全部終わらせてみるのも面白いと思うのよ。」

やはり誰かの描いたシナリオに従うのはどうも性に合わないわね。何処かで歪ませ、ぐちゃぐちゃにしてやりたいという衝動が生まれてしまうわ。

「貴女って、本当に世界にとつての悪ですね。本当なら今すぐにでもしよつ引きたいですよ。」

「あら、出来るのかしら?」

「出来ないから頭が痛いんですよ…お願いですから、余計なことをしないで下さい。」

眉間に皺を寄せ、冷泉君が言う。

「それがかなこを喜ばせるのに?」

「程々でお願いします。」

弱いわね。

「それじゃ行くわ。出来れば二度と会いたくはないけど…」

「それは僕も同じです。」

睨み合いそう口にしあう。

「冷泉、またな。」

「はい! 遠山さん!」

反してかなこにはデレデレとする彼、ここまで露骨にしても、かなこには彼の恋心はミクロンも届かないのだから愉快だわ。さっさと告白して、玉砕するのも面白そうね…今度吹っ掛けてみようかしら? いえ、ダメね、こういうのは、そのままの方が面白いわ。

「ねえ、どういう風の吹き回しなのよ。」

「どうもこうもないわ、面白くなりそうな方に動いた。それだけよ。」  
ブラドの身柄引き渡しを終えた神崎と共に並んで歩く。かなこは

先に帰ってしまったている。

「面白くなりそう？本当に、キンジの言う通り、性根が腐ってるのね。」  
「あら、あの子そんなこと言ってたの？お仕置きが必要ね…まあ、それは今はどうでもいいわ。」

そう、本当にどうでもいい。

「足るを知る。これが人生において大切なことよ。でも、永遠に足りない、満ちることのない者もいるのよ。」

欲は果てしない。目的、目標を達成しても、満足せずに更にそれ以上を求めてしまうものだ。だから、満ち足りずとも、足りているのならそれでいい。そう思えるようにならない限り、欲望は止まらない。それに私は気付いている。だから以前の様に無茶なことはしない。

だけど、あの子は今だに飢えたまま。あの子、かなこが求めるもの、彼女の欲は、ただひとつ。強き者。彼女は私では満たせない。彼女を満たしてあげたい。彼女の幸福、喜び、そういったものが今の私の目的。その為なら、この身を滅ぼしても構わない。

…なんでこんな思いを抱く様になってしまったのかしら？唯一心を許せる友人であるかなこが、これ程自分の中で大きな存在になってしまっている。彼女と出会う以前には有り得ない感情だ。利己的で、他者の不幸にしか興味なんてなかったのにね…

良くも悪くも、あの子に影響されてるのかしら？

私の言葉に首を傾げている神崎を見て、自虐的な笑いが出てくる。純真ね。世の中には、白と黒以外も、いえ、それ以外の方が多いというのに、はつきりしないことに対する整理が追いつかない、そんな目だ。

「私の言っていることは、社会人になれば、嫌でも分かるわよ。分かりたくないのなら、強くなりなさい。かなこ以上に。じゃあ、私は帰るわ。」

「あーちよつと！待ちなさいよー！」

引き留める神崎を無視し、車に乗り込む。

「次は、いよいよ本丸ね。最後の舞台、どんな風に台無しにしてあげようかしら。」



るのか？」

——兄さん。

そう呟いて、俺は目を覚ました。

「キンちゃんキンちゃん！ 棧橋に倒れているのを見た時は、本当に心配したんだよー！」

恐ろしい姉から逃げようとして、それから先は覚えていない。

「…そうだーアリアは！」

恐怖のあまり、大切なことを忘れてしまっていた。

「アリアは。パトラに攫われた、理子がアリアにつけてたGPSが示してるよ。キーくん。」

理子とジャンヌの姿、ふたりはカナとなった兄さんから連絡を受け来たらしい。

俺よりも数時間早く意識を取り戻し、行動を開始出来るとは、やはり兄さんは強い。…例外な姉さんを除けば最強だ。しかし、その例外は何処へ行ったのだろうか？ 本当に自由気ままで嵐のような人だ。

パトラとの決戦、白雪がパトラとの激戦を繰り広げるも、ピラミッドによって無限に力を行使できるパトラに俺と白雪は無力化され始めたが、カナが援軍として参戦し、アリアを目覚めさせることに成功する。

それと同時に、『緋弾のアリア』をも目覚めさせてしまった。しかし、それも直ぐに眠りにつく。

ひと段落ついたと息をついたとき。

「——キンジ…逃げなさいッ！」

カナが叫んだ。そして現れる原子力潜水艦、ボストーク号。

『教授』…やめて下さい！ この子たちと——戦わないで！」

俺たちを護るように、舳先のさらに前方に立ちはだかったカナに向け、弾丸が放たれた。いや、放たれた筈だった。

「やっぱり退屈だわ。結末の分かっている劇なんて。」

「みすず…」

俺の横に突如現れたみすず。となれば、当然、カナの前には姉さんがいる。

「わざと受ける気だったな、カナ。」

カナへと向かう筈だった狙撃銃の弾丸を掴んだ姉さんは、それを親指で弾く。

ガチャン！という銃が破壊される音、カナを狙った男が手にしていた狙撃銃に姉さんの弾いた弾丸が命中したらしい。

「曾お爺さま…」

そして、その男を見たアリアの眩き。思考が追いつかない。しかし、それは俺だけではない。アリアも、そして、シャーロック・ホームズ1世でさえだった。

「参ったね…全く予想していなかったわけではないけど、君たちの考えが読めない。狐崎さん…いや狐崎女史。君の目的は、君は何を考えているんだい？」

世界最高の探偵でさえ分からないみすずの思考。

「何も考えてない。が正解かしら。貴方の思い描く『緋弾のアリア』があの程度だと知って、自分でもどうしたいのか分からないのよ。なら、かなこみたいに生きるのもいいんじゃないかと思つたのよ。」

「あの程度？」

シャーロックの顔が曇る。まるで最高の計画書に×を付けられた様に。

「ええ、あの程度ではかなこの足元にも及ばないわ。それじゃあかなこは満たされない。ねえ、もっと強い、かなこを満足させれる相手はいないの？」

「今の君は、正常ではない…冷静な君らしくもなく、取り乱している。落ち着くんだ。」

シャーロックが警戒しつつも、不安定なみすずを諭す。

俺も、こんなみすずを見るのは初めてだ。

「そうね、貴方の最高傑作となる『緋弾のアリア』、それが目覚めた段階で、かなこと戦わせて台無しにする予定だったわ。でも、あんな色金程度ではダメだったのよ。もう地上には、いえ、この世界にはかなこを相手に出来る存在が無いの。世界最高の頭脳を持つ貴方ならどうするのかしら…」

疲れ切った様子でシャーロックへと投げかけるみすず。

「狐崎女史：君はもう分かっている筈だ。今の僕と君の頭脳では、君に軍配が上がる。僕が君に教えられることなんか無いんだ。なら、聞くべき相手はひとりしかいないんじゃないだろうか？」

若干の悔しさを滲ませたシャーロックの言葉。

その視線の先にいるのは姉さんだ。

「そう…やはりそうなるのね…」

感情の消え去った瞳から、一筋の涙が頬を伝う。みすずが泣いている…

「ねえ、かなこ。もうここには用がないわ。帰りましょう。」

「いいのか？」

みすずの前に一瞬で移動し、そう言う姉さん。

「ええ、構わないわ。…ああ、でもなんだか気に食わないから、とりあえず一発ずつ殴っておいてくれないかしら。」

「おい…なんて恐ろしいことを言うんだ！そういうのを八つ当たりっていうんだぞ！」

本当に何考えているんだみすずは！

「あら、人のことを性根が腐ってるなんて言い回ってるのに随分な言い様ね。」

アリアの奴、話しやがったな！

「かなこ、お願い。」

「ああ…」

姉さんの姿が見えなくなり――

世界が暗転した。

「ここは…」

大きな聖堂。我を失いそうになるほど美しい空間。ここは天国か？

複雑な、高く聳えるステンドグラスの下にいるのは…

「アリア！」

ダメだ、目覚めない…しかし、呼吸はしている。気を失っているだけのようだ。そしてそこで気付く。倒れているのはアリアだけじゃ

ない。

「シャーロック…」

本当に殴っていったのか姉さん…

しかし、カナの姿は見えない。上手いこと逃げているのいいが、姉さんが本気ならその可能性は有り得ない。

「死ぬなよ、兄さん…」

どんな目に遭わされているのか、想像するのも恐ろしい。いや、案外俺よりも早く目覚めて何処かに行ってしまったのかもしれない。兄さんも兄さんで神出鬼没だからな。

だが、これはチャンスなのではないだろうか…

全く目覚める様子のないシャーロック。そろりそろりと近づき。

「逮捕！」

ガチャーン！とその手首に手錠を掛ける。

逮捕出来ちゃったよ、世界最高の名探偵…

「流石にそれは卑怯じゃないかい？」

「ちい、目覚めやがったか。」

「本当に、君たち姉弟は推理出来ない。しかし、今の君はまだ僕には勝てない。でも、そのタフさだけは認めるよ。僕よりも遥かにタフだよ。キンジ君。僕よりも3発多く殴られているのに、僕よりも早く目覚めるのだから。」

「おい待て、俺はそんなに殴られたのか…」

ええ…何してんの姉さん…

「さて、とんでもない横槍が入ったけど、再開だ。」

シャーロックとの死闘、アリアに撃ち込まれた緋弾、全てが終わった様で全ての始まりでしかなかった。

イ・ウーとの死闘を終えた俺は、その残党や様々な勢力、強敵たちと戦うことになる。しかし、そんな激動と激闘の日々の中で、どうしても腑に落ちないことがある。

あの日以来、みずすと姉さんがいなくなった。田園調布にあった事務所も、今は別の住人が入居している。

きつと姉さんのことだから、何処かで暴れ回っているのだろうか



思っていたが、そんな騒動も何一つ聞かない。なんの音沙汰も無いまま、俺も忙しい日々を追われ、それどころではなくなっていた。

そんなある日、ふと実家に立ち寄った。

「ただいまー。」

「あら、なんの用かしら？」

バタバタと玄関を飛び出し、表札を確認する。間違いない『遠山』も文字。

「なんでお前がいるんだよ！みすず！」

「随分な言い草ね。暫くかなこと同棲してたんだけど、家事つて面倒くさいのよね。だから一昨日ここに引っ越してきたのよ。」

こいつ、そんな理由でここに寄生してんのかよ。

「ちゃんと家賃は入ってるわよ。多めにね。」

暫く実家には寄り付かない様にしよう。しかし、俺には安寧の地はないのだろうか…

「それより、今まで何処でなにしてたんだ？」

「話す義務はないわ。でも、大人の時間、とでも言うておくわ。」

その日々を思い出したのか、見た事もない柔らかい表情で微笑むみすず。こいつ、こういう風に笑えるんだな。

「さて、私は仕事に行くわ。…そうそう、これ新しい事務所の住所よ。何かあったら、条件と金額次第では助けてあげるわ。」

差し出された名刺に刻まれた住所、また都内の一等地かよ。弁護士って儲かるんだな…いや、こいつの場合、姉さんで荒稼ぎしている可能性が高いから例外なのか？

「出来れば一生お世話になりたくないな。」

そう言つて名刺を破り捨てる。

「そ、どうでもいいわ。じゃあ行つてくるわ。」

カツカツとヒールを鳴らして歩いて行くみすず。その背中を少しだけ見送り、実家に上がる。

「おかえり、キンジ。」

婆ちゃんがそう言いながら居間へとお茶を持ってきてくれ、ひと息つく。

あれ？みすずがここに住んでるってことは、姉さんも帰って来てるってことか…

「婆ちゃん、もしかして姉さんが…」

「かなこなら今お風呂だよ。ついさっき迄山に行ってたらしいわよ。全く、あの子は何を考えているのやら…」

うん、多分何も考えていないのだろう。

「みすずちゃんが一緒にいてくれるから少しは安心出来るけど、やっぱり心配だわ。」

「俺からしたら、ふたりでいる方が不安なんだけど。」

俺と婆ちゃんでは認識に齟齬があるらしい。

「まあ、そんなに心配せずとも、あの子らが幸せならよいじやろ。」

新聞から目を放して、俺と婆ちゃんにそう言う爺ちゃん。

「ええ、そうですね。それで十分なんですよ。」

夾竹桃こと鈴木桃子が、巢鴨の実家周辺をうろつく様になるのは、この数日後だった。

## 外伝：緋弾のエリアi f・i f―虎と狐と毒百合編―

### ―獅堂虎巖視点―

#### 公安0課

この組織に入り、もう何年経つのだろうか…生まれ持った特異体質と経験、技術で他を圧倒し、様々な事件や裏仕事を数々こなしてきた。三式となつてからももう随分と経ってしまった気がする。

そんな公安0課は、武装検事と同じく、常に命のやり取りをしており、明日は知れぬ身。当然、いつだって人材不足に悩まされている。優れた人材はいつだって奪い合いとなるのに、優れた人材は好き好んでわざわざ公安や武検を選ばない。それ以上に稼ぐ手段があるのだから、その選択は当然だと言える。

なので、俺たち公安0課は、多少強引になつても、人材を引っ張つて来る必要がある。目ぼしい人材を早めにピックアップし、何処よりも早く、強引な手段だつて用いて捕まえる。相手は高校生になることが多く、如何に才能と実力があつても、経験値と技術で勝てる故にそういう人材確保術が用いられることもしばしばだ。

じゃあ、なんで捕まえにきた相手に、俺たちはボコボコにされてんだ？

東京武偵高の卒業を控えたあるひとりの生徒を獲得すべく、公安0課の総力を持つて挑んだ一大大捕物の筈だった。

「なんだ？もう終わりか？」

俺たちは総力を以てしても、傷1つどころか、有効打1つ与えることが出来ずに、地に伏していた。

「最近は、仕掛けてくる者がいなくなり、退屈していたのだが…やはり物足りないな。」

遠山金叉の長女で東京武偵高3年、遠山金虎。異次元の強さと世界的に知られたビジュアルキー。公安0課としては、喉から手が出る程欲しい人材だった。

しかし、現実はどうだ？力で屈服させ、公安入りさせた後に、将来

の一式を任せるなんて構想だったが、一から三式の総懸りでも手も足も出ない。

「して、お前たちは何者なのだ？私はこの後約束があるのだ、もう帰ってもいいのか？」

ペシペシと俺の頭を叩きながらそう言う少女。起こそうとしているのだろうか？いや、殺そうとしているのか？だって一発一発が滅茶苦茶痛いぞ！

「痛い！痛えって！ヤメろ！起きてるからヤメろ！」

少女の手を払いながら、ふらつく足で起き上がる。

「うむ、なかなか頑丈だな。まあ、手加減は完璧だったし、当然か。」

うんうんと頷く少女。絶妙な力加減が出来たと自画自賛している。

「おい嬢ちゃん、オメエなんなんだ？」

正直、同じ人間だとは思えない。

「武偵高の生徒だが？」

何言ってるんだこいつ、という目で俺を見る。自覚がないのかこいつは…

「卒業後、進路は決まってるのか？」

この実力なら、引く手数多。どんな武偵事務所だろうが、組織だろうが、よりどりみどりだろう。

「4年程暇だな。全く、みすずの奴。大学に行くと言って聞かぬのだ！ふたりで一緒に事務所を持つ約束だったというのに！お陰でみすずの卒業までの4年、することがない。」

あれ、これはチャンスなのか？4年という制限付きだが、暇を持て余す怪物を飼うことが出来る可能性がある。

「なあ、ならその4年間、公安に来ねえか？」

漸く交渉に入れる。さつきは少し殺気を出して近づいたら、交渉する間もなく、問答無用でボコられたからな。

「別に構わんが…公安とはなんだ？」

「嘘だろ…」

純粹無垢な、曇りつない目で質問してくる少女。

武偵高に通って、公安0課を知らない奴がいるのか!?!しかも、知ら

ない癖にノーラグでついてくる気だったぞこいつ！

大丈夫なのか：寧ろ、今までどうやって生きて来たんだ：知らない人について行くなって教わってないのかよ…

「とりあえず、公安所属に異論はないんだな？ 詳しく話は後日やる。迎えをやるから、くれぐれも手を出さないでくれよ。」

「分かった。忘れるまで覚えておく。」

しかし、このまま変に説明せず、引き込んでしまう方が良さそうだな。こいつがアホで良かったぜ。

なんか不安な一言が聞こえた気がするが、聞こえなかったことにした。

後日、よりにもよって送迎役は俺になってしまった。上司が言うには、俺が奴の担当になるらしい。

何故だ、胃が痛くなってきたぜ。

「なあ、なんで殴った？」

「すまん、忘れていた。しかし、ちゃんと思いついたぞ。」

待ちあわせの場所で再会、それと同時に一発殴られた。

殴り心地で思い出したらいいこいつは、何故か褒めろという表情でそう言う。なんなのこいつ…

しかし、以前より威力が低かった(それでも十分悶る程痛かった)あたり、本当に身分確認の為の一発ということなのだろう…

あれ？ それじゃあこれから毎日殴られるのか!? マズいぞ、1秒でも早く俺のことを覚えさせなければ、任務ではなく、日常生活で殉職することになってしまう…

「どうだ、分かったか？」

机を挟み、向かい合って公安0課の仕事の説明を終え、書類を出す。こんなに苦勞する新人研修は初めてだぞ。

「おい、聞いてんのか？」

全く返事がない遠山かなこに声をかける。聞こえてきたのは規則正しい寝息。こいつ…

「おい！ なに寝てやがる！ 起きろ！」

何故このタイミニングで寝れるんだ。本当に訳がわからない女だ。

肩を揺すり、起こしにかかる。

「ん…うるさい！」

「ぐぶあッ!!」

初めて喰らった一発よりも、遙かに威力の高い一発が顔面に突き刺さり、意識が一瞬で途切れた。

「おい、起きろ。こんなところで寝るな。」

肩を揺すられ、うつすらと目が開いていく。

「全く、こんなところで寝るとは…」

呆れた様な表情で俺を見下ろす遠山かなこ。いや、お前にだけは言われる筋合いが無い。そもそも原因だってお前だろうが…

「人のこと殴っておいて、随分な言い草だな…」

「私は何もしておらんぞ？人のせいにするな。」

こいつ、マジで寝惚けてやったのか。

「居眠りしてるお前を起こしたら殴っただろうが！お前に人をどうこう言う資格はねえ！」

「難しい話をするのが悪いのだ！私が寝たのは悪くない！」

「うるせえ！このバカ女！別に難しい話なんかしてねえだろうが！」

本当に、こいつで大丈夫なのか？今ならまだ間に合うんじゃないか？

「バカと言ったな！許さんぞ！」

マウントをとられ、ボコボコにされる中、こいつは組織に入れるべきではないと確信する。

こんな無茶苦茶な奴の手綱を、誰が握るといふんだ…

|||||

—狐崎みすず視点—

「それで、どうするのか決めたの？」

卒業を間近に控えた休日の午後、喫茶店でかなこと話していた。卒業後、私は大学へ入学する。それは武偵高入学前から決めていたことだ。

しかし、対するかなこには、なんの将来のビジョンもない。いや、あるにはあるみたいだけど、どれも今すぐというわけにはいかないものばかりだ。

とりあえず自分より強い者を探すという最大の目標は、多分、一生達成されることはないでしょうし、一緒に武偵事務所を開くという目標も、私の大学卒業を待つことになる。

彼女には空白の4年間で待っている。今日は、その4年を、どの様に過ごすのか、彼女の意味を尊重しながら、一緒に考えるつもりだった。

「決めたぞ。えーつと、こ、港湾0か？とやらに入ることにした。」

自分が入る組織名さえ覚えていない友人に頭が痛くなる。

「港湾じゃなくて、公安よ。よりにもよって、面倒なところに入るのね。かなこなら、もっと稼げる場所は沢山あるのに。」

彼女に公安0課が接触していたのは知っている。まさかそこをわざわざ選ぶとは思っていなかったけど、彼女ならその場のノリで勧誘に乗るのは十分に有り得ることね。

まあ、公安0課なら、ちよくちよく抜け出して私との仕事も出来るし、よしとしましょう。そもそも、かなこ手綱は、私が握っているのだから。

「別に金など要らぬ。私は強い者と戦えればそれで良いのだ。」

何度も聞いたその言葉。彼女の意思は揺るがない。それでも、私と共に歩むことを選んだのだから、自惚れかもしれないけど、彼女にとって、私の存在はそれと同等がそれ以上であるということね。

柄にもなく口元が緩む。それを隠す様に、コーヒーの入ったカップを口元へと運んだ。

かなこが去った後、ひとり喫茶店に残っていた。話すべき相手かも

うひとりいるからだ。

「それで、目的は私？それともかなこかしら？教えてくれるかしら、鈴木桃子さん？それとも夾竹桃って言った方がいいのかしら？」

「噂通りね、狐崎みすず。彼女を帰してよかったのかしら？」

「イ・ウーという無法者たちの組織に属する少女。確か私たちと同じ年だったわね。」

「ええ、難しい話になるのなら、あの子は邪魔なもの。それに、私に何かあれば、あの子はそれこそ地の果てからでも駆けつけるわ。」

「夾竹桃、私ひとりであれば、赤子の手をひねる程度実力差がある。しかし、かなこは彼女は、それこそ比喩ものにならない力の差がある。」

警戒心が強い彼女は、かなこがいたなら現れていないだろう。

「信頼してるのね、彼女を…さっきの会話も盗み聞きさせてもらっていたけど…貴女たちいいわ。」

鼻を押さえながらそういう夾竹桃。盗み聞きしていたのは知っている。その目的が知りたかったのだが、彼女の表情で分かってしまった。

「悪いけど、貴女が考えている様な関係ではないわよ。クリスティーネ桃子さん。」

同人作家としての彼女の名を言う。

「それは大丈夫よ。妄想で補うから。…ああ、ちゃんと個人が特定出来る様なことは無いようにするから安心して。」

「作品にされること自体が安心できないわ。人の趣味にとやかく言う気はないけど、私に…私とかなこに害が少しでもあるなら、2度と筆を持ってない様にするわよ。」

私たちに害を成す者へ、容赦する気はない。かなこを言いくるめて、全力を以て必ず排除する。例え何処に隠れていようと。

「それは勘弁願いたいわ。それに、貴女とは友好的な関係でいたいわ。これから同じ大学へ通う者としてはね。」

「薬学部だったわね。法学部の私とは会うことは滅多にないと思うわよ。」

「お互いに、今更大学で学ぶことなんてないでしょう？ただ、肩書の



為。違う？」

「概ね当たりね。でも、私は他にすることがあるのよ。」

かなこと共に適度な小遣い稼ぎをしなければならぬ。既に事務所を設立するには十分な資金はあるが、資金は多くて困るということはない。稼げるだけ稼いでおくほうがいい。

「それに、かなこは公安所属になるわ。無法者集団のイ・ウーとしてはあまり関わらない方がお互いの為ではないかしら。」

「大丈夫よ。なんとなくだけど、あの子そういうことを気にしなさそうだもの。」

案外人を見る目はあるのね。

「まあいいわ。大学の間は友好的にしてあげるわ。勿論、貴女次第だけどね。」

彼女の持つ毒の知識は、なにかと役立ちそうだし、使えるものは使っておきましょう。

「なら、私たちは友人、ということになるのかしら？」

「残念だけど、それはないわ。あくまで友好関係、私の友人はかなこひとり。他はいらぬのよ。」

歪んだ価値観だが、それを变える気はない。

「それならそれで構わない、いいえ、そっちの方がいいわ。やっぱり、貴女っていいわ。」

再び鼻を押さえる夾竹桃。なにかよからぬ妄想をしているのでしょうけど、考えるだけ無駄ね。

「じゃあ、私は帰るわ。お会計、お願いね。」

椅子に置いていた荷物を手に取る。

「ええ構わないわ。とつてもいいネタを提供してくれたんですもの。これくらい安いものよ。私は少しネタを纏めて帰るわ。」

鼻を押さえたまま、そう答える夾竹桃。もう少し頼んでおけばよかったわ。



気臭い感じとか…

「なら、私たちは友人、ということになるのかしら？」

「残念だけど、それはないわ。あくまで友好関係、私の友人はかなこひとり。他はいらないのよ。」

少し親近感が湧いてきた私の申し出を、彼女は、バツサリと切り捨てる。

断られ、流石の私も多少のショックはあるかと思っていたけど、彼女の返答にそれどころじゃなくなる。：最高のネタだわ。

「それならそれで構わない、いいえ、そっちの方がいいわ。やっぱり、貴女っていいわ。」

鼻から熱いものが溢れてくるのをハンカチで押さえ、そう言った。

「じゃあ、私は帰るわ。お会計、お願いね。」

狐崎が、椅子に置いていた荷物を手に取る。

「ええ構わないわ。とつてもいいネタを提供してくれたんですもの。これくらい安いものよ。私は少しネタを纏めて帰るわ。」

そう、喫茶店の会計程度安いもの。それよりも、今すぐにでも、この妄想を紙に書き起こさねば!!

退屈になるだろうと思っていた大学の4年間は、想像以上に刺激的で、魅力的な日々になるわね…

止まらない右手、思う限りの妄想を紙にぶちまけながら、これから始まる大学生活を予想し、左手に持ったハンカチで鼻を押さえた。

## 外伝：緋弾のアリア i f . i f ー 虎と狐と毒百合編 II ー

ー 狐崎みすず視点 ー

「それで、就職先ではどんな感じかしら？」

東京武偵高を卒業後、大学に進学した私は都内のマンションを借り、かなこと半同棲状態となった。

かなこは住居にこだわりが全くない。屋根と壁、あと水が出ればどこでもいいという、凡そ年頃の乙女には有り得ない価値観で生きている。

そもそも、彼女の戦闘力があればセキュリティは無しでもいいし、あの脚力があれば地球の裏側に居ようとあつという間に通勤出来るから、駅近とかそういう条件を必要としないのもある。

しかし、かなこがそれで良くても、私には耐えられない。通勤通学に15分以上掛かるなんて許せないし、満員電車なんて死んでも乗りたくない。目的地に徒歩15分圏内でなければ許容出来ないし、オートロックは必須だし、風呂トイレ別で、洗濯機は室内置きでないと嫌だ。

よって、私が選び抜いた部屋にかなこと家賃を折半して暮らすことになったが、かなこは自分の気分次第で帰る場所を実家、この部屋、と変える為、完全な同棲というわけではなく、半同棲ということになっている。

「よく分らん。とりあえず書類は獅堂殿に渡せばいいと言われたのでそうしている。あとは出勤が掛かるまで寝ている。」

公安0課、三式、獅堂虎巖。中々のビックネームに書類を押しつけて寝ているのね…まあ、正しい判断だと思っわ。この子に戦闘以外の仕事は出来ないし、かといってなにもさせずにフラフラさせてると、国境を越えて暴れ始めるし、用がある時以外は寝かせておくのが一番。これは私の経験からも正解に限りなく近いかなこの運用方法だ

ろう。もつとも、その答えに辿り着く迄に公安0課の何人の胃に穴が開いたのかは勿論調べているが、同情したくなる程度には被害を受けたようだ。

「そう、上手くやれているようだなによりだわ。」

それだけ被害をもたらしておきながらも厚遇されているのは、やはり戦力としてののかなこを手放したくないということ。勿論、かなこを渡す気など微塵もない。4年間預けているだけ、キツチリと利子をつけて返してもらおう。

「みすずはどうなのだ？ 大学とは楽しいのか？」

「楽しいとは思わないけど、役に立つ場所だとは思うわよ。」

東大とは、後の出世や地位を約束されたエリートが集まる場所だ。一方で大学生という特別なマージナルマンである彼らは、羽目を外し過ぎてしまうことも多い。コネクションだけでなく、弱みやスキャンダルを握り、後に役立てるには絶好の場でもある。

「ああ、そう言えば、冷泉君も同じ大学に入学してるわよ。同じ学部で学科まで同じだから、見たくもない顔を定期的に見るのは不愉快だわ。あと、面倒な奴がひとりいるくらいかしら。」

鈴木桃子、又の名を夾竹桃。別に戦力としてみればかなこがいるこちらにとつて、なんの脅威にもならないが…

「みすずは相変わらず冷泉が嫌いだな。別に悪い奴ではないと思うぞ？…しかし、面倒な奴とは？」

さて、どこまで話しておくものか…かなこに説明したところで、彼女の趣向や趣味は理解出来ないだろうし、あつさりを受け入れてしまう可能性の方が高い。そうなってしまえば、かなこ公認の元、あの女がこの部屋に居座る未来が見える。それは避けたい。

その一方で、彼女は間違いなく仕掛けてくると確信している。今この瞬間でさえ時期を見計らっているに違いない。勿論、今現在侵入されることは有り得ない。彼女の様に潜り込むやり方はかなこがいる限り気配で見破られるし、私も徹底的にセキュリティを強化し、物理的な強行突破以外での侵入は出来ない様になっている。

「いろいろな事情があつてひとりの同級生と友好関係を結ぶことに

なったの、でも、彼女と私は考え方が似ている様で全く違うのよ。そのくせに、彼女はグイグイとこっちに寄ってくるの。厄介だわ。」

なのでこういう表現で濁しておく。要するに少し愚痴りたかっただけだ。

「それは友人になりたいのではないのか？」

首を傾げるかなこ。そんな彼女に言い切る。

「かもしれないわね。でもお断りだわ。私はそもそも友人とかそういうのは要らないのよ。かなこ以外はね。私の友人はかなこひとりいれば十分だし、それ以上は必要ないのよ。友人なんて大勢いても、結局比重が変わるわ。それだったら、本当に必要なひとりに全ての比重を与える方が効率的でしょ？」

そもそも、かなこに出会わなければ、友人というものは生涯出来なかつたし、必要と思うことさえなく一生を終えていたでしょうね。

「みずずの考え方は難しく分からね。」

瞼を擦るかなこ。少しでも考えてしまったから、案の定眠くなったみたいね。

「貴女は分からなくても大丈夫よ。ただ、一緒にいてくれたらそれでもいいの。」

「そうか…それならそうしよう。」

そう言つて大きな欠伸をひとつして、そのままゴロンと床に転がる。とすぐさま寢息が聞こえてくる。

「全く…優しすぎるのよ、このバカ…」

このバカが風邪をひくことは有り得ないとは思うけど、タオルケットを掛ける。

こんな私に寄り添つて、一緒にいてくれる。

だから、『ふたりの事務所を持つ』彼女がそんな夢を語った時に、同じ将来を描いてしまったのだろう。私の理想や思いを全て捨てても、かなこと同じ夢を追いかけたい。いつでもそばにいたいから。

どんなに悪名を得ようと、敵を作ろうと、汚れ仕事は全部やる。彼女にはそういうことを知る必要はないし、やる必要もない。純真で、綺麗なまままでいて欲しい。



その美しい少女は、公安の総力さえ蠅を払う様に、いとも簡単に無力化する規格外の化物だった。

その力に魅入られ、思わず勧誘してしまった俺は、激しい後悔をすることとなった。

遠山かなこの初仕事は、予想外のタイミングで訪れた。

俺の率いる三式班は、あるターゲットに対し、行動を開始する算段をとっていた。奴らは政府に対するテロ行為を計画する連中とそいつらに雇われた傭兵や武偵崩れ。特に警戒すべきは傭兵たち。国内外問わずに雇入れされた傭兵たちは、中々に名うての者が揃っており、俺でも手こずる様な名前も複数上がっている。

入念な作戦と計画を建て、可能な限り最小限の被害で殲滅ないし、無力化する為に頭をひねる。手持ちの戦力とターゲットの戦力を鑑み、任務成功は可能だが、ある程度の被害は免れないという結論に達する。公安0課、殉職があり得る仕事であり、何人も殉職者を見てきた。誰も死なせたくない。そんな思いもある一方で、仕方ない部分という風に割り切り始めた自分がいるのが悔しいやら悲しいやら…

そんな複雑な葛藤を押し殺し、部下たちへ作戦を説明を終え、目標へと向かおうかという時だった。

「あそこにいる奴らを殴ればいいのか?」

気配さえ感じさせずに背後からそんな声が聞こえた。

「なんでここにいるんだよ…」

一瞬止まった心臓が激しく鼓動を打ち、冷や汗が噴き出るのを誤魔化す様にそう言う。なんでこいつはここにいいのか、そして何をすることもりなのか：分からない。分からないが、とんでもないことが起こる。そう生物としての直感がピンピンと察する。

「なにやら面白いことをすると聞いて来た。それで、あそこに行けばよいのだな?」

疑問に対する適切な回答など何ひとつない。しかし、ゆっくりと一度だけ頷く。そうしなければならぬと本能で頭部が動いたのだ。

「ならば少し行ってくる。」

その声と同時に、一瞬で遠山かなこの姿が消え――



「終わったぞ…思ったよりも面白くなかった。」

少し不満そうな表情で再び現れる。

呆然としながら部下たちと共にターゲットの滞在する基地へと侵入する。見事に消し飛んだ入口の扉、気絶し横たわるターゲットたち。こいつは、俺でさえ死を覚悟する相手を複数相手に一瞬で制圧して見せた。しかも、こいつはまだ全力を出していない…いや、出せていない。

言葉さえ失った俺たちが恐る恐る彼女の方を見ると、既にその姿は無い。

まるで夢を見ているような感覚の中で身柄を抑え、車輦で帰路につく。その道中、誰ひとりとして言葉を発することはなかった。

そして警視庁へと戻り、公安0課へと入ると、俺のデスクの椅子に座りスヤスヤと眠る遠山かなこの姿。誰ひとりとして起こそうとはしない。

しかし、彼女へと向けられる目は、居眠りを咎めたりするものではなく、起こさない様に細心の注意を払うもので、そこには恐怖と、僅かながら尊敬と憧れがあった。

「おい待て、なんだこの書類の山は…」

翌日出勤し、己のデスクに積まれた書類の山を目にし、思わずその隣に立つ女にそう問う。

「知らぬ。しかし、私は分からぬと言ったら獅堂殿に任せろと言われたので持ってきた。」

言われた通りにやっただけだと首を傾げるそいつは、一度大きく伸びをして歩き出す。その方向に目をやると更に頭が痛くなる。

公安0課に、今までなかったものが出来ている。大きさは2畳程だろうか？小さな小屋が出来ている。その小屋の扉に書かれた文字、

『公安0課 遠山かなこ』

あれがあいつのデスクなのか…

「どうなっただんどこりや…」

「知らぬが長待からあそこに待機するよう言われたのだ。用があれば連絡があるらしい。」



が、中々上手く行かなかった。

理由は単純で明快、誰も語らないが、私がイ・ウーへ入学する以前に彼女たちはたったふたりでイ・ウーを半壊させたという噂。少し調べたが、恐らく事実だろう。そうなれば、容易に近づいて再起不能な被害を受ける可能性がチラつくからだ。

しかし、狐崎みずすが私と同じ大学に進学することが分かり、一気に好機が訪れた。彼女に接近し、表面上だけだが友好関係を築くことに成功した。

それ以来、狐崎みずすと遠山かなこのふたりを遠くから見つめる日々を送る。最高の題材だし、創作意欲が湧き上がってくる。それだけで充分だと思っていたし、満たされていた。

しかし、それは直ぐに変わる。人間は欲深い生き物。満たされているのに、満たされた環境に浸かり続けると、それだけでは満足出来ずに更に求めてしまう。

「ねえ、いつまで隠すつもりなの？」

遂に狐崎へと問うてしまっていた。

「何度言わせるのかしら？私とかなこは貴女の思い描く様な関係じゃないわ。」

苛立った様子で六法全書を机に叩きつけながらそう言う狐崎。彼女らしくない感情的な仕草に、しまったと思ってしまう。私は傍観者、過剰な干渉はあるべき友情の姿を変えてしまうのだ、という基本的なことを失念していたのだ。

「ねえ鈴木さん？何度も言ったと思うけど、貴女がどんな妄想をしようとして勝手だし、それを制約する権限は私にはないわ。でも、それを押し付けるといふのなら、貴女との友好関係は終わりよ。」

不機嫌を通り越して、無感情になった瞳と声がちちらに向けられる。

「そういうつもりじゃないわ。ただ、貴女の真意を知りたくなっただけよ。創作者としてね……」

そう言ってみるが、彼女の目は変わらない。

「そう…なら聞いわ。貴女の創作意欲と好奇心で、貴女の思い描く友

情とやらが崩壊するのは構わないのね？ 仮に私の思いが、貴女の想像するものだとして、その感情のままに動いたら、今まで関係は姿を変えるわ。それが貴女の望みなのかしら？」

変わる、私を虜にしたふたりの関係が形を変える…

違う、変わるのではない、前へと進むのだ…

彼女たちのそれは、もはや友情という枠を超えたものに思える。その思いは遠山かなこよりも、狐崎みすずの方が強いと、長年傍観者を続けてきた私には分かる。それに、遠山かなこの性格なら、彼女の思いを無下には出来ないし、受け入れるだろう。

それに…

「枯れない花はないわ。でも、花は何度でも返り咲く、私はそう思うわ。」

美しき友情は花と同じ、枯れることだってあり得るが、種を蒔き、再び花を咲かせる。勿論、必ずそうなるとは言えないが…

「花ね…面白い例えだとは思うわ。なら、その例えに従って私を表現するのなら、私たちは作り物の花、一度終われば、二度と咲くことはない。」

「作り物？ 造花と言いたいのかしら？」

彼女の言い回しに回答を求める。

「造花とは少し違うわね。例えるなら…そうね、繊細な硝子細工で作られた、一輪の花、かしら？ 誰も触れずに、嚴重に守っていれば永遠に枯れることはない。だけど、少しの衝撃で、簡単に崩れ去り、二度とその姿を見せることはない…」

硝子細工の花…美しく、永遠の美で魅せるのに、儂さを兼ね備えている。

「私たちは、その茎を、花弁を、長い時間を掛けて作り上げてきた、でもね、ちよつとの間違いで、それは容易に形を変えるし、割れることだってある。」

彼女の言葉が真意なのか、それとも私を煩わしく思つての方便なのか、無感情の瞳からそれを読み取ることが出来ない。でも——

「面白い表現だわ。次の作品に使わせて貰つてもいいかしら？」

私の作品に新しい風を吹き込ませる。返り咲く友情や、ただ咲き誇る友情とは違う、花は容易に摘み取れる。しかし、彼女の言うそれは違う。摘み取ろうと触れれば、脆く崩れ去る花。何人たりとも触れられぬ、しかし魅了する硝子細工の花：使えるわ!!

「ええ、構わないわよ。だって、ただの仮定の話を例え話で説明しただけだもの。」

そう言っつて鞆を手に取る、これ以上私と会話する気はないようだ。勿論、私も湧き上がり、今にも溢れ出さんとする創作意欲をハンカチで押さえるので手がいつぱいだし、なにより、これ以上の会話は無粋というものでしょう。

これからも、私は様々な花たちを見守っていくことになる、しかし、この花だけは特別だ。傍観者、見守ることに徹すると心に決めている私が、愛でるだけでなく、思わず触れたくなくなってしまう。

そんな魅惑の花に出会ってしまったことに、盛大な歓喜と僅かな不安を抱えることになる。

### 外伝：緋弾のアリア i f . i f ー 虎と狐と毒百合編 III ー

ー 夾竹桃視点 ー

「ねえ、跪いて許しを請うてみるのはどうかしら？ 夾竹桃さん。」

冷たく情けも容赦もない、恐ろしい程背筋が凍る様な感情の籠っていない声。

「ごめんなさい、冗談よ。：貴女に聞くことなんてない、知りたいことは全て知っているし、会話する気もないわ。でも、最後の情けよ。その格好が死に装束では嫌でしょう？ 着替え位はさせてあげる。」

ー 獅堂虎巖視点 ー

手に負えない。

そう思ったのは最初からだだったが、いよいよ限界に近づいて来ている。

俺を筆頭に、常に胃薬と頭痛薬の大親友となつた公安0課の上層部は、日々遠山かなこの戦果と共にやって来る始末書と圧力に、今にも逃げ出しそうだった。

そんな現状を知らない若手や式が二桁の連中からは、その圧倒的な戦果と容姿で、女神の様に扱われ、信仰ともとれる信頼と羨望を得ている。

そして、そんな当の本人は、俺たちの気苦労も、慕う者たちの思いも知らずに毎日の様に暴れまわり、始末書の山を築き上げていく。

こんな奴、さっさと追い出してしまいたい。そう思うのだが、公安0課には、いや、世界中を探しても、彼女以上の戦力はいないし、未だ永劫出てこないだろう。というより、出てきてもらったら困る。

それ程にまで規格外の戦闘力を誇る遠山かなこが公安0課に入っ

て以来、彼女はあらゆる戦闘任務に参加（自分の担当ではないものにも勝手に参加していた）し、全てを数秒で完遂している。それもあり、これまで何人もの殉職者を出してきたのに、彼女が入って以降、殉職者は出ていないどころか、彼女を恐れ、任務自体が激減している。

そりやそうだ、あんな規格外の化物が出てくるのが分かっているのに、わざわざ仕掛けて来るのは、よっぽどの馬鹿か、自殺志願者、後は自分の力量が分かってない未熟者だけとなる。

よって、任務が激減するのも当然。そんな奴らに対し、俺たち公安0課が動く事態になる事がほとんどないのだから。…その分書類仕事は増えたが。

「つまらぬぞ、獅堂殿。もっと強い相手はいないのか!？」

俺のデスクにやって来るなり、そう言うそいつに胃が痛くなる。

「強い奴らはいるぜ。…おめえより強い奴はこの世に存在しねえだろうがな。」

最初の頃は、俺だって負けてられるか!という負けん気があったが、関われば関わる程、こいつは俺らとは別の世界にいる、絶対に勝てないということが分かって以降、もうそういうもんだと考える様になった。

「なんだと!なら私はここで何をすればよいのだ!」

奴がバン!と手を置いた俺のデスクが消し飛ぶ。知るか!そう叫びそうになるのを抑え、

「俺に聞かれてもな…」

そう言葉を絞り出した俺は、死んだ目をしていたと思う。

「つまらぬ…」

俺の目を見た奴は、少し悲しみの籠った瞳でそう言い残し、姿を消した。

それから数日、一度も姿を現さなかった遠山かなこが退職届を提出したという連絡が入り、得も言われぬ安堵感と、それに勝る不安に胃薬を服用したのだった。







「追跡したいけど、その点に関しては彼女の方が上手ね。」

潜入や調査には自信があるが、狐崎はそこに関しては私の上を行く。現にこの3年と半年以上、彼女の部屋には忍び込むどころか、様子さえ窺うことが出来なかった。確認出来たのは、遠山かなこと彼女が同時刻に同じ部屋に居るということだけ。それでさえ、同じマンションに入って行くのを見たというだけだ。

お陰で妄想は捗ったけど。

しかし、知りたい、その欲求は抑えることが出来なかった。

「公安0課…厄介な相手ね。」

でも、あのふたりを相手取るよりは遥かにましね。直接対峙する訳ではないし、彼らを追っていれば、必ず遠山かなこに突き当たる。その確信があった。

その日から、公安0課の動きを見守りながら、新たな原稿に手を入れ始めた。

「まさか、こんなことになっていたなんて…」

ドクドクと鼻血を流しながら、その光景を目に焼き付けていた。

公安に動きがあった。

遠山かなこは、退職届が受理される前に狐崎の開設した武偵事務所へ席を置いたことがきっかけだった。

公安による事務所への襲撃、襲撃自体は成功したと言えるだろう。

睡眠時の完全に無防備な遠山かなこは公安の総攻撃を間違いなく受けた。

しかし、遠山かなこは規格外過ぎた。そして、寝起きの彼女はすこぶる機嫌が悪かった。

こんな圧倒的な力が許されるのか、そう天に問う程の力量差で総攻撃を退けどころか、壊滅的ダメージを与えた。

とはいえ、その圧倒的な戦闘力への驚きはそれ程でもなかった。それは事前に知っていたから。勿論、その情報さえ吹き飛ばされる様な力量に多少は驚いたが…だが、真に警戒すべきはその危機察知能力。

睡眠時という最も無防備なタイミングでさえ、僅かな殺気を感じ取り、目を覚まして即座に迎撃している。

「敵対…考えたくもないわね。」

彼女と対峙する可能性とその際の戦い方を想像してみるが、勝利する可能性は全く見い出せない。

しかし、この根気強い張り込みの成果はあった。彼女たちの居場所が分かった。今まで住んでいたマンションはそのままに、新たに一軒家を借りている。そこを事務所としている様だ。

まだあのマンションの様な、何人の侵入さえ許さないという様な徹底したいセキュリティは配備されていない。

「機会は今かしら…」

今までは全く見れなかった僅かな隙、それが見えた瞬間だった。

4年もの間追いかけて続けた花園が手の届く所にある。それが私を狂わせた。

「まさか、こんなことになっていたなんて…」

単眼鏡を覗き、見えたのはベットに横になっている、あのふたりの裸体。

想像と妄想が掻き立てられ、ドクドクと脈打ち鼻血が垂れてくる。

この光景を目に焼き付けようと瞬きさえ忘れてしまう。ペンと紙を持ってくるべきだったわ。

しかし、それだけ集中して見ていたから一瞬の変化を発見出来た。

遠山かなこの姿が消えた。そう認識した時には遅かった。

「なにやら血の匂いがしたので来て見たが、怪我でもしたか？」

バスタオルを巻いただけという、痴女スタイルで現れた遠山かなこ。

「違うわ。」

そう言う前に、遠山かなこは私をヒョイと持ち上げる。世に言うお姫様抱っこというやつね。

「首を叩くと治ると聞いていたが、以前弟たちにやったら大変なことになった。私よりもみすずに診せた方がよからう。」

どう大変なことになったのか聞いてみたかったが、そんな質問をする前に世界が光の線になった。

「ねえ、跪いて許しを請うてみるのはいかがかしら？ 夾竹桃さん。」

目覚めたばかりの私の耳へと響く、冷たく情けも容赦もない、恐ろしい程背筋が凍る様な感情の籠っていない声。

「ごめんなさい、冗談よ。：貴女に聞くことなんてない、知りたいことは全て知っているし、会話する気もないわ。でも、最後の情けよ。その格好が死に装束では嫌でしょう？着替え位はさせてあげる。」

私の知っていることは、全て彼女も知っている。彼女の情報網を考えれば、当然のことだ。そして、彼女の言葉通り、死に装束には相応しくない下着姿。鼻血が付いた衣服は脱がされたらしい。

「みすずの友人だったのだな。血が付いていたので洗っておいたぞ。なに、女同士、恥ずかしがることもあるまい。」

この殺伐とした空気が分からないのか、はははと豪快に笑う遠山かなこ。室内に干された私の服が見える。それにしても、貴女が服を着てないのは何故なのかしら？…一瞬の隙を見せる余裕もない状況だというのに、何故私の妄想を駆り立てるのよ…

「友人じゃないわ。私にとって友人と呼べるのはかなこだけよ。…さて、本当なら、今すぐにでもかなこに殴らせたいところだけど、この期に及んで下らない妄想する余裕があるのは、呆れを通り越して感心してしまいそうだわ。」

遠山かなこにぶつきらぼうにそう言った後、鼻血を流す私を見て皮肉を込めてそう言った。

「下らない妄想…それは違うわ。女と女が絡み合う美しき友情、それが下らないということとは有り得ないわ。」

すくつと立ち上がり、そう言い放つ。鼻血が出てなければ、最高に決まっていた場面だっただろう。

「それは貴女の価値観でしょう？私とかなこには関係ないわ。」  
冷めた瞳、これ以上口を開くことさえ許さないという目だ。

「貴女の言う友情とやらは、私たちには無いのよ。分かったら大人しく消えてくれないかしら？」

額に突き付けられた小型の拳銃。威力が低いとはいえ、当たれば、この距離からなら致命傷となるだろう。

躲そうと思えば躲せる。躲すどころか、その銃を奪い、逆に彼女を

殺すことさえ出来る。それ程に彼女と私の力量差があるのは分かる。狐崎みすずは、卓越した頭脳と、悪魔の様な性格で優秀な後方担当の武偵であるが、こと戦闘に関しては素人以下だ。

しかし、そう出来ないのは、そんな彼女と私の戦力差を容易く覆す規格外の化物の存在。彼女の出方が分からない以上、下手に動けば死に直結する。

無言の緊張感、数秒も経っていない筈だが、体感だと、数分が過ぎた様に感じる。そんな状況で、件の怪物は、顎に手を当て、何か考えているようだった。

「みすず…私とお前の間には、友情は存在しないのか？」

緊張を破る言葉はそれだった。

狐崎に生まれた一瞬の隙を突き、銃を奪う。

「違うわ。この変態が言う邪な友情はないというだけよ。かなこは私にとって、唯一の…友達だわ。」

銃を奪われたことへの動揺など一切なく、遠山かなこへと向き合う狐崎。

「邪な友情…？みすずの言う事が偶に分からぬ。友情に邪も正もないだろう？」

首を傾げる遠山かなこ。そんな隙を見て、逃げ出そうと動いてみるが、思い立ったと同時に左の手首を掴まれている。

魔王からは逃げられない。レベル1で初期装備のまま、最初に出会ったモンスターが魔王だったRPGの主人公の様な絶望感だわ。

「かなこには知らなくていい世界があるの。私と貴女は、その世界に踏み込む必要も無いのよ。」

そう言う狐崎から、恐怖と焦り、そして、哀しみが薄っすらと感じ取れた。

4年にも満たない、しかも、ただ同じ大学の同級生というだけの、私が一方向的に観察していただけという薄っぺらい関係だというのにそれが分かるのだ。遠山かなこにそれが分からない訳が無い。

「何故そんな顔をするのだ？別に言いたいことがあるのなら、遠慮は不要だ。私とみすずは、そんなにも簡単に崩れる関係では無いだろう

？」

ああ、そういうことだったのね。彼女の瞳とその声で、何故狐崎が彼女との関係を現状維持努めていたのかが分かった。

彼女の瞳と声は純真で穢れを知らない。己に向けられた、邪な視線の意図や意味を理解出来ていないのだ。

彼女にとって、そういうものは異性から向けられるものであり、同性に対して、そういった警戒や知識が欠落している。

穢れ無き硝子細工、作られたと同時にケージに仕舞われ、一切の汚れをつけることなく、産まれたままの姿を保つ美しくも脆いその有様に私は惹きつけられたのね。

そう結論付け、あらゆる毒を分泌出来る左手の爪を遠山かなこが掴んでいる手に立てた。

「もう動ける様になってるなんて、思ってた以上にタフなのね。」

東京武偵高にある留置所。間宮あかりに敗北し、捕らえられた私の前に現れたのは、司法取引の為に指名した弁護士だった。

その声を聞いた時、まさか本当に本人が現れるとは思っていなかった。少し驚きを表に出してしまった。

「あの時、一縷の望みを賭けて爪を立てたのが間違いだったわ。…なんで毒が効かないのよ。」

思い出したくも無いあの拳。イ・ウーという超人や怪物が集まる無法者集団でも、あんな規格外の化物は存在しない。

「毒程度でどうこう出来るなら、とつくに死んでるわよ。見積りが甘かったわね、今回同様。」

格下相手に敗北を喫した私への皮肉だろう。

「そうね、目先の欲に抗えなかった。敗因は私にあるわ。今回は己の知的好奇心、前回は生存欲求、どっちも私の落ち度だわ。」

その皮肉は素直に受け止める。なんせ、最も知りたかったあの日の結末を、それで知ることが出来なくなったのだから。

「しかし、司法取引為の第一要求が紙とペンって…相変わらずね。」

私の置かれた留置場の片隅に置かれた、間宮あかりたちとの一戦で湧き上がってきた創作意欲を作品へと昇華させた原稿をチラリと腋

目に見て、そう言う。

「湧き上がる創作意欲を抑えることは出来ないのよ。好奇心と同様にね。」

間宮あかり、彼女を取り巻く友情も魅力的だった。しかし、私の好奇心と創作意欲は、あの日のことと、その後日談を知りたくて、今現在の創作活動は、その欲求不満なところへの捌け口でしかなかった。「そう…私には関係ないことだわ。今回私が呼ばれたのは、貴女の司法取引と、その手続きだけだもの。それ以外にすることはないわ。」

以前と変わらない、感情の無い瞳で私を見る。

「残念だわ。でも、安心もしたわ。仕事はしてくれるのね。今回はそれだけで十分だわ。」

彼女の実力は知っている。彼女が味方になった今、この自由を阻害された空間から出ることは容易となるのだから。

「そうね、明日の朝には自由の身よ。最も、私の指示に全て従うことが条件だけど。」

こうなると予見していたかのように、分厚い書類の束を見せてくる。

「何か誤りがあったら言いなさい。なければそのまま提出するわ。それが終われば自由の身よ。」

記された情報は私に関する事、そして、イ・ウーに関する事。全て寸分の誤りもなく調べつくされている。

「何か指摘してあげたいけれど、何も無いわ。」

粗探しをしても、非の打ちようが無い。成程、『教授』が彼女たちに関わるというわけね。狐崎の頭脳と情報収集能力、そして、遠山かなこの圧倒的な力、二つが組み合わされば、イ・ウーでさえ赤子の手をひねるよりも容易に壊滅出来る。敵に回すこと自体が間違いね。

「なら用件は終わりよ。依頼料とは別に、謝礼も振り込んでおきなさい。口座番号は後日知らせるわ。」

そう言うのと、面会室を後にする。

その去りゆく背中に、問いかけたくなかった。

貴女ともっと早く、そう、遠山かなこよりも早く出会えていたら、私

たちは友達になれたのかしら？私と貴女、そこに遠山かなこを含めた3人で、一緒に生きていく世界は、有り得たのかしら？

彼女たちの関係に、己の妄想を照らし合わせていた。それは今も変わらない。だけど、最近思うのよ。本当は、貴女の間に入ることこそが、私の望みではなかったのかと…

24歳という年齢になって、再びセーラー服を身に着けるとは思ってもみなかったが、なんやかんやで充実している。東京武偵高には、創作意欲を掻き立てるものが多くていいわ。

でも、それでもなお満たされないのは、あの日の結末を知らないままだからだろう。

しかし、満たされないからこそ、創作意欲は枯れないのだろう。私の追い求める物語は、永遠に未完のままかもしれない。それでもいいと思えてきたのは、一種の境地に達したということだろうか。

いつも通り、武偵高のセーラー服を纏い、街を歩く。

何か良い題材はないかと、観察しながら人混みを抜けていく。

「いい歳こいて、高校生のコスプレかしら？貴女、私と同じ年だったわよね？」

冷淡で、感情を逆なですることしか考えていないという様な声に視線を向ける。

恋焦がれたふたりの姿がそこにはあった。



## 虎とICPO

—キンジ視点—

「なんでここに集まるんだよ…」

例の如く我が家へと集結しているバスカービルの面々。家主である俺の意向など完全に無視されている。

しかし、やいのやいの騒ぐ女共はまだいい。いや、良くないんだけど、まだマシだと言うことだ。

バスカービルの面々に遅れること数分、いつもの様に何の前触れもなく姉さんが現れた。それはもういい、仕方がない。だって姉さんだから。

「それで、なんでお前までいるんだよ!!」

「別に好きでこんな所に来てるわけじゃないわよ。かなこが勝手に連れて来たのよ。」

不機嫌そうに答えるみすずは、仕事の途中だったのか、弁護士バツジの付いたスーツ姿だ。

「みすずが理子に用があると行っていただけなのでな、気を探って来た。」

姉さんの言葉に呆れた様に溜息を吐くみすず。理子に？ 一体何事だ？ 面倒くさいことじゃないといいなあ…でも、絶対面倒くさいことになるんだろなあ…

「え？ 私？」

流石の理子も予想外だったのか、少し驚いた様子で振り向きた。

「用、って程じゃないわ。ただひとつ聴きたいだけよ。正直に答えなさい、それが貴女の為にもなるわ。」

理子に向き合うみすず、仕事モードなのか、有無を言わせない目になっている。

「峰理子…いえ、リュパン4世、ICPOから追われてはいないわよね？」

みすずがあえて理子の嫌う4世という呼び方をしたのは、理子の先祖に関することだからなのか…しかし、ICPOか…警察相手は面倒

どころじゃねえな。殴って終わりってわけじゃないし。

「ICPOが？」

心当りがあるのか、それともスイッチが入ったのか、裏理子となり目付きも変わった理子が答える。

「そう、ICPO。貴女のお父上と因縁のあるあのICPO。正確に言うのなら、貴女のお父上、リュパン3世と因縁のあるICPOの警部、その娘から連絡があったわ。協力して欲しいとね。」

みずずが淡々とそう言う。理子の父、リュパン3世はこっちの界限では知らない者などいない程の有名人だ。彼とその一味は、世界中からお宝を盗んだ大怪盗団であり、化物共と何度も対峙し、勝ち続けた人間辞めてる怪物だ。

そして、そんな怪物を追い続けた警部も有名人だ。そう、あの銭形平次の子孫である。

成程、そんな人物の娘から連絡があったら、真っ先に疑うのは理子になってしまいうのも無理はない。

「悪いが、心当たりがない。あんな化物に喧嘩売るなんて、自殺願望がなけりやしないさ。」

裏理子の荒っぽい口調でそう答える。だが、俺は理子の言葉に疑問が生まれた。

「化物？確かにリュパン3世を追い続けられるだけでも十分凄いが、そんなに恐れる相手なのか？」

俺たちが知るあの警部は、リュパン3世を追うが逃げられ続けた男ということだ。捕まえられなかったって時点で、リュパンの方が強いのではないのか？

そんな俺の疑問は、みずずに鼻で笑われる。

「馬鹿ね、リュパン3世は何度も捕まっているわ。ただ、彼を閉じ込められる牢が無かっただけよ。」

呆れた様に言うみずずに腹が立つが、

「パパが言ってた、とっつあんが本気なら、逮捕ではなく、殺す気で来ていたら、絶対に勝てない。俺たちは逃げるしかないんだって。」

裏理子から戻った理子が、懐かしむ様に言う。

「待て、俺たちちつて…まさか一味全員か!？」

だとしたら、化物なんてレベルじゃない。あのシャーロックよりも遙かに強いぞ!!

「そうだよ、一味全員を一斉に相手取って、数秒で逮捕したこともあるらしいよ。」

嘘だろ…なんでそんな化物が警部なんかやってんだよ…

「関係ないならいいわ。娘の方も父親に勝るとも劣らずらしいから、声をかけておきたかっただけよ。」

みすずらしくもない、こいつなら他人がどうなろうが関係ないって思う筈なのに…

「かなこの将来の義妹らしいし、少し恩を売っただけよ、出世払いでいいわ。」

俺を見てニヤリと笑うみすず。義妹？なんのことだ？

「ちよつと!!どういふことよキンジ!!」

「かなこ様の義妹、キンちゃんお嫁さんは私です!!」

突然ヒートアップする女共、おいレキ、無言でドラグノフを構えるな。

「遠山理子でえーすつ!!」

理子が悪い笑みで俺に抱きつく。おい、やめろよ。

「風穴あつーろー!!」

「天誅うろーろーっ!!」

襲い掛かるアリアと白雪、そしてレキ。畜生、みすずめ、最初からこうする気だったな。

みすずの思惑通りに、我が家がパーティ会場となりかけた瞬間、

「遠山かなこーろーっ!!此処かーろーっ!!」

我が家の玄関が蹴り破られると同時に、そんな怒声と共にスタイル抜群の美女が手錠片手に飛び込んで来た。

「ちよつと、何よアンタ!!」

突然の来訪者に、アリアが警戒心剥き出しに、銃口を俺から美女向ける。

「神崎・H・アリアだな、妹が世話になった様だな。だがそんなことは

どうでもいい!!遠山かなこ!!ようやく見つけたぞ!!」

妹…あの銭形の姉か!?嘘だろ、全然似てないじゃん!!

「ん?おお、あの時の警官か。久しぶりだな。」

ははは、と笑う姉さん。そういう状況じゃなさそうなんですが…

「遠山かなこ、私から逃げたのはお前だけだ!!この屈辱、忘れぬぞ!!」

プルプルと手錠を握る右手を震わせる。しかし、それよりも気になることがあるんだが…

「その左手で引き摺っているのは…?」

彼女の左手で引き摺る大男に思わず目が行く。

「遠山キンジ、貴様も知っているだろう!!獅堂虎巖だ、サボっていたので気合いを入れておいた。」

あの獅堂をボコボコに出来る怪物、みすずが言っていたのは、マジなのか…

「逃げてはおらぬ、売られた喧嘩を買っただけだ。」

姉さんが逃げたと言われ、ムツとして答える。

「その後姿を眩ませた、疚しいことがあつて逃げたのだろう!!」

銭形は顔を真っ赤にしてそう叫ぶ。姉さんに喧嘩売って、殴られて、尚も追い掛けられるって…間違いない、こいつは化物だ。普通なら絶対に戦意喪失する。

「お前が起き上がらぬから帰っただけだ。」

姉さんの答えに、

「あのシンガポールでの夜は忘れん!!遠山かなこ、貴様は私の追っていた犯罪組織を壊滅させるだけでは飽き足らず、身元確認しようとした私と一戦交え、姿を消した。あの時は遅れをとったが、今回はそうもいかんぞ!!」

チャキツ、と手錠を構える銭形。獅堂は無残にも床に叩きつけられた。

「別に構わぬぞ。お前との一戦は中々に面白かったからな。」

強い相手と戦えるのが嬉しいという様に、楽しそうに言う姉さん。

…頼む、外でやってくれ。



は思わん!!留置所でゆつくり聞いてやる!!」

引き寄せられた銭形の右の拳が遠山かなこの左の掌に収まる。

「馬鹿だと!!私は馬鹿ではない!!」

強烈な右の拳が、銭形の腹部に叩き込まれた。…死ぬんじゃないのか?そんな信じられない威力なだけは分かる。

「ぐふッ…」

目を見開いた銭形が苦しそうに息を漏らす。死ななくても、落ちたな。

ぐらり、と崩れ落ちる銭形。

「なんのこれしき!!」

一瞬で復活する銭形。

化物だ…私だけではない、キンジも、あの狐崎みずさえも目を見開き、驚愕している。

「逮捕だ!!逮捕!!遠山かなこ、逮捕するーッ!!」

そう叫び、遠山かなこの最も得意とする徒手空拳で向かっていく。ヒスキンでさえ圧倒的される様な近接格闘術、それを軽くあしらえるのは、遠山かなこだからなのだろう。銭形は紛うことなき怪物。しかし、相手が悪過ぎる。遠山かなこは、この世の理から逸した怪物だ。叩き込まれる拳、意識が飛ぶ銭形。しかし一瞬で復活し、何度でも戦い続ける。

化物同士の対決、格の違いは有れど、理解可能な範疇を超えた戦いが続く。

「逮捕だ…」

銭形の腹部に突き刺さった遠山かなこの右の拳、弱々しくも漸く届いた銭形の右の拳は、遠山かなこの左頬に当たっている。

「参った、これ程の執念、参ったとしか言えぬ。」

遠山かなこが、倒れ行く銭形を抱え、そう言う。その表情は、尊敬と充足感に満たされていた。

|||||

かなこには及ばない迄も、これ程の怪物だったのね。

銭形平静、父同様、ICPOに向し、現場第一主義で出世を辞退し続ける警視庁及びICPOの最強戦力。警部を自称しているが、実際の階級は警視正。父と同様出世を拒んでいたらしいが、拒否され昇格させられたらしい。しかし、その力量から指揮官となる筈の階級でありながら、現場で陣頭指揮どころか、最前線で先頭切つて闘う現場主義者である。

その圧倒的な能力と執念は各国のエージェントや特殊部隊でさえ凌駕すると称されていたけど、嘘偽り無い評価だったようね。

「みすず、どうすればいい?」

銭形をお姫様抱っこで抱えたかなこが問うてくる。

「そうね…置いていきましよう。かなこ、帰るわよ。」

そうした方が面白い…じゃないわね、そうする方がいい。今後の為に。

床に寝かされた銭形を一目見る。かなこの拳を数十発耐えた怪物は、気絶しながらも「逮捕だ…」と呟いている。

私に用がある様だし、どうせ事務所に来るでしょ。そう思い事務所へと戻る。…かなこは…そうね、近くに控えていて貰いましょう。何やら彼女と一方的な因縁があるようだし、彼女の用件も、かなこ絡みな気がするわ。

「おい!!置いてくくな!!連れて帰れよ!!」

叫ぶキンジを無視し、部屋を出る。

「かなこ、貴女と一緒にだと退屈しないわね。」

「そうか?…そうだな、確かに、みすずと共にいる時は何かしら起こるな。」

ホント、退屈しないわ。





通が一番、それは揺るがないんだぜ。

何言っただこいつ、という目でふたりが見てくるが、それを無視し、荷物を纏める。

怪物と同じ空間にいられるか!!俺は外に行くぞ!!

そんな推理小説の死亡フラグの様な事を思ったのが悪かったのか、それとも、怪物が怪物たる証明なのか、

「遠山かなこーおっつ!!」

数時間は起きないと思っていた銭形は、姉さんの名前を、近所迷惑なレベルの大声で叫びながら、10分程度で起きてしまった。

「遠山かなこは何処だーっつ!!」

飛び起きると、俺の胸倉を掴み、そう叫ぶ銭形。マジモンの化物だぞこいつ。

「みすず…狐崎みすずの事務所に行った。俺はそれ以上知らんぞ!!」  
怖い、怖すぎる。父さんレベルの化物から胸倉を掴まれ、恫喝されるなんて、寿命が10年くらい縮むぞ。

「おのれえ…逃さんぞ、遠山かなこおーっつ!!」  
俺の言葉を聞き、パツと手を放し、ふるふると震える手で手錠を握る。

嘘だろ、あんだだけボコられて尚、姉さんを追いかけられるんだよ…  
メンタル可笑いだろ…

「遠山かなこおーっつ!!今度こそ逮捕だあーっつ!!」

そう叫びながら部屋を飛び出す銭形。

!!  
…おい、待て。よく考えたら、お前が蹴破った玄関、直していけよ

みすずが来ると碌なことにならない。その法則は崩れることは無いらしい。

## 憎きも親愛

— 銭形平静視点 —

父は、史上最強の警察官。生涯を賭して追い続けたリュパン3世とその一味。

実力では父が上だった。一味総出で掛かっても、奴らを全滅させれる程度には。勿論、相手は世紀の大怪盗団、容易というわけではないが、それでも勝てる程度には実力があつた。

しかし、父は彼らの逮捕にこだわった。殺す気になれば、何時でも殺せるというのに。それを知る彼らは、逃げに徹した。

生け捕りはかなりの難度だ。敵が防御や逃げに徹した場合、攻め手は常に後手になる。そうなれば、実力差を覆せる。故に父は奴らを捕らえ損ねた。勿論、その力量差で何度か逮捕したが、彼を捕らえておける牢獄が無く、父の力量の及ばぬ所で逃げられることもあつた。

そんな、世紀の大怪盗団に恐れられ、逃げに徹するしかない実力者である父は、私にとって誇るべき父だった。

現場にこだわり、昇進を断り続け、生涯を賭してリュパンを追い続けた、世界最強の警察官。銭形警部。

それだというのに、世間は創作に惑わされ、父を無能警察官だと笑う。勿論、知っている者達は敬意を持って接していたが、世間の認識は、コメディチックで、無能な警察官だった。

一度父問うたことがある。圧倒的な実力を持つのに、世間に笑われ、悔しくはないのかと。

その時の父の答えは、  
「知ったことか!!それよりも、リュパンだ!!待てえい!!リュ  
パーアーンツ!!」

そう言つて、生涯の好敵手を追いかけて行った。娘よりも好敵手、それが父だった。

そんな父の背中を見て育ったからなのか、私は当然の如く警官の道を選んだ。

父と同様、日本最高峰の大学、その法学部を卒業し、警察の道を選んだ。勿体無い、そう言う者たちもいたが、私には関係なかった。

警察学校に入った私は、父の血を濃く受け継いだのか、自分でも恐ろしくなる程、同期の学生を圧倒し、主席で卒業した。

日本中の警察官に轟いた父の武勇伝（リュパン追跡の片手間に、世界を揺るがす様な大悪党たちを一網打尽にしていたこと等、私も知らなかった様なことも多くあった。）と、私自身の能力もあり、埼玉県警でもあつという間に出世し、警部となった。

父同様、それ以上出世する気はなかった、しかし、時代が違うのか、そんな要望受け入れられず（治安が悪化していたのも一因だろう）、階級はどんどん上がって行く。

公安への勧誘もあつたが、彼らと一度模擬戦闘を行い、圧勝した時にその道も違うのだと察した。私はやはり父の子。世界を駆け回り、悪党たちを捕まえることが使命なのだと気付いた。

それから、ICPOへの出向願いを出したが、却下された。しかし、ICPO側から、要望が上がり、出向叶った。その背景には、世界中で広がる重犯罪食い止めへの思いや、父の圧倒的な実績によるものもあつたという。

念願叶ってICPO所属となった私は、世界を又に駆け、犯罪者共を一網打尽にしていた。

そんな日々に物足りなさを感じ始めた頃、シンガポールである犯罪組織のシンジゲートの壊滅任務、つまり一斉逮捕の命令が出た。

成程、目標の戦力や規模を考えれば、私以外に適任者はいないだろう。

この時、私は既にICPOで最高戦力となっていた。故に天狗になつていたのだと、今となっては己を恥じるしかない。そして、父の様に生涯を賭して追う様な相手を求めていたのだと、知つたのだつた。

「悪党共、全員纏めて逮捕してやる。」

降り立ったシンガポール、空港を離れ、一面に広がる海を眺め、そう呟いた。誰一人逃がすつもりはない。そう決意を固めていた。

「此処は何処だ…？おお、獅子が口から水を吐いておる!!きつと強者がいるに違いない!!」

イカれた美女海から現れた。

いかん、いかん。彼女から悪しき気配が感じられない。きつと、最近流行りの人身売買の船から逃げ出し、記憶や精神が混乱しているのだろう。いち早く保護し、その悪党共を逮捕せねば。

「日本人だな？何があった!?安心しろ、私は警官だ。」

同胞をこの様な目に合わせた悪党共は見逃せぬ。そういう思いで駆け寄った。

「？確かに私は日本人だ。だが、何も起こっておらぬぞ？ところで、ここは何処だ？ロシアから海に飛び込み、泳いで来たが、適当に泳いでいたので此処が何処だか分からぬ。教えてくれ。」

可哀想に、恐怖でわけが分からぬ事を言っている。そもそも北半球は真冬、私でもなければ、極寒の北の海を泳げるわけがない。

「パスポートはあるか？パスポートでなくとも、身分証明書、何か持っていないか？」

一秒でも早く、彼女の家族に連絡して、保護した事を伝えねば、捜索届も出ているだろうし、きつと家族も心配しているだろう。

「ぱすぽーと？何だそれは？身分はしがない旅人だ。」

…大丈夫なのかこいつ。

「名前と出身地は？」

「遠山金虎、実家は巣鴨だ。」

記憶はある様だな。

「此処に辿り着く迄何をしていた？」

「強者を求め、世界を旅していた。まだ出会えてはおらぬがな。」

しよんぼりと答える。武者修行の旅をしていたというのか？彼女の容貌からは、そんな風には見えないが…

「各国でエージェントや特殊部隊の隊員が、謎の美女に半殺しにされるという被害報告があったが…関係は無いよな？」

少し前に聞いた報告、表出したくないからか、被害届がICPOに出されることは無かったが、目の前の美女がその主犯ということは無

いだろう、悪しき気配はないし。

「なんだか愉快的な予感がする。」

そんな疑惑の美女は、私の話を聞かずに、そんなことを言って姿を消した。

いや、おかしいだろう!? あいつなんか怪しいぞ!!

それが彼女、遠山かなことの出会いだった。

「何処へ行った!?!」

周囲を見渡すが姿はない。

「銭形さん、手配完了しました。」

単独での奇襲・強襲逮捕ということになっていくが、地元警察との折り合いや、手続きというものがどうしても付き纏う、その完了を部下が伝えに来た。

正直、それどころではない、そう言い放ち彼女追いたい衝動に駆られたが、そういうわけにはいかない、己の理性で踏み止まった。

悪しき気配を感じなかった彼女よりも、明白に市民に被害を及ぼす犯罪者共を一掃する方が正義だ。

「よし、突入する。車輛は!?!」

「直ちに突撃可能です!!」

威勢良く答える部下に領き、走り出す。海岸沿いに止められた、埼玉県警の車輛に乗り込み、出動する。

待っている悪党共、一網打尽にしてやる。父から譲られた、ポケットにしまった手錠をひと撫でし、気合を入れる。

「どういうことだ、これは…」

一網打尽にしてやると息巻いて突撃した先には、気を失って地に伏している犯罪者共と、あの女が立っていた。

「やはり、私の勘は間違っていないかった。此処にいれば愉快的ことになると思っただが、お主がそうだったのか。それ程の気を隠せるとは、恐れ入った。」

楽しい時間が始まる、そう言わんばかりに口角を上げた遠山かなこの姿。

「遠山かなこだったな。お前、何処の依頼で動いた? 一瞬で姿を消し、

誰にも悟られずにこれだけの数を相手に、私の到着よりも早く殲滅出来る力、何処の組織に雇われた？」

武偵か？それとも傭兵か？しかし、これ程の腕を持った者を、私が知らない筈はない。こいつは何者だ!？」

「雇われてなどおらぬ。言っただろう？…言っただよな？ただの旅人だ。」

己の発言さえ覚えていないのか、こいつは…

「ただ、此処にいれば強者に会える気がした、そしたらこ奴らが襲ってきたので反撃しただけだ。それより、一戦願いたい。」

そういうことか…

「任意同行…いや、公務執行妨害で逮捕する!!」

特殊繊維で作られた縄付きの手錠を握る。

その時、今までに感じたこともない高揚感に駆られた。

|||||

— 狐崎みすず視点 —

「遠山かなこは何処だ!!」

やはり来たわね。現在私の務める高千穂弁護士事務所、そこへ飛び込んで来た銭形。事勿れ主義のキンジが、己の身可愛さにかなこの居場所をバラすのは予想通りだ。

周囲の職員たちがざわつく中、私はデスクに腰を下ろしたまま、彼女を眺める。

事務所に帰って、直ちにかなこの現在置かれた状況の確認を行った。彼女、銭形が叫んでいた『逮捕』という言葉、確にかなこがやって来たことは法的にアウトだが、異例中の異例であるかなこに対し、政府がどのような処理を行ったのかを電話で冷泉君を脅して聴き出した。

「狐崎みすず!!遠山かなこは何処だ!!」

デスクが叩き割られるのではないか、という勢いで手を付き、私に詰め寄る銭形。

「用事は私にあるんじゃないか? 銭形警視正。『逮捕』と言うけど、逮捕状はあるのかしら?」

ある訳がない。冷泉君から聴き出した情報と、私が独自に調べた情報を擦り合わせれば、かなこに対する被害届も、手配も出ていない。政府と外務省が全力で後処理を行っているし、その命令を受け、各国を回ったのは、目の前にいる彼女だ。

「ない!!しかし、私はあいつを生涯を賭して追うと決めたのだ!!」

彼女の自己満足、あの父にしてこの子あり、ってことかしら。誰かを追うのが生き甲斐な一族ということなんでしょうね。

「なんとなく、貴女が私にコンタクトを取った理由が分かったわ。かなこと接触するためだったんでしょ? 冷泉君は口が軽くて困るわ。」

冷泉君は、私とかなこの関係を銭形にペラペラと話した事も白状した。彼にとっては同じ公僕であり、階級が上で先輩でもある彼女に逆らえなかったと、言い訳していた。

「そうだ!! 私なりに奴について調べた。その捜査線にお前が浮かび上がってきた。故にコンタクトを試みた。」

秘匿されたかなこの情報、彼女がどの程度それを知らされたのかは分からない。しかし、武装検事や政府でさえ辿り着けなかった私とかなこの関係を探し当てた銭形、優秀なのは腕っ節だけではないと証明している。

「流石ね。依頼料を満額貰えるなら、かなこに会わせてあげる。ただ、会わせるだけよ。」

「構わん!!」

ダン!!とデスク叩きつけられる札束、…ボロい商売ね。

「契約書よ。拇印でいいわ。」

素早く契約書を一読しサインと拇印を押す銭形。

「遠山かなこは何処だ!!」

記入を終えるなり、鬼気迫る剣幕で叫ぶ銭形。





辛うじて奴の拳を払い、拳を繰り出す。さつきよりも更に強くなっている気がする。私自身も、そして奴も。奴の場合、実力を出していないだけの気もするが…

威力も速度も徐々に上がっていく拳をお互いに払い、繰り出しを繰り返す。

楽しい、闘いをそう感じたのは初めてだった。己を高める相手は、私には父しかいなかった。今まで、それを超える相手は警官となつてからも、ICPOとなつて世界中を駆け回つてからも、出会った事はなかった。

しかし、目の前にいる遠山かなこは、そんな全てを超越し、異次元にいる存在なのだと分かる。呆れる程に強い、今までに無い程の高揚感と万能感に満ち、現在進行系で進化する私が、絶対に勝てないのだと本能がそう告げているのに、楽しくて堪らないのだ。

我、終生の敵を得たり。父が生涯を賭してリュパンを追った様に、私は私の全てを捧げてでも、こいつを追う。この時、そう決めた。「愉快なひと時だった。また会おう。」

今までの死闘がじゃれ合いだったと言わんばかりの速度の拳が私を貫く。

視えなかった。意識が薄れていく。

「次はもつと愉快的な戦いをしたいものだ。」

意識が消える寸前で聞こえた奴の言葉。当然だ、貴様を追い続けてやる。遠山かなこ、必ず貴様を捕らえる。お前の力を超えて。そう決意した。

目覚めた時、眼前には遠山かなこが制圧した者たちの地に付した姿だけだった。

あれ程の威力の拳をモロに喰らったというのに、不思議と痛みも怪我也無かった。

表現し難い感情に駆られる私の耳に響く部下や地元警官の声。

「銭形さん流石としか言いようがありません!!ものの5分で完全制圧とは!!」

目を輝かせ駆け寄って来る部下。他の面々も信じられないという

目で倒れた者達を見ている。

「やはり、最強の警官は伊達じゃありませんね!!」

違う。この戦果も、最強であるということも、全て違う。私を超える存在、遠山かなこ。それをこの場で言っただけで信じて貰えるのか？あれ程の存在を何故今まで私が知らなかった？私が知り得ぬ程の規格外の怪物を彼らが信じられるのか？

仮に信じて貰えたとしてどうする？そうならば、奴は世界中から狙われる。それは看過できない。アレは私の獲物だ。誰にも譲らん!!  
「後は任せた。」

そう言い残し、引き留める者たちを適当にあしらい、直ちに日本へと戻る。独自に遠山かなこについて調べた。しかし、何の情報も出てこない。

警視総監に退職届けを持参し奴への質問をした。私が公安部を含めた警視庁で最高戦力である自覚がある故の脅迫だった。

そうして知り得た情報を元に調査を続けた。その情報の見返りとして奴の尻拭いをさせられたが、他の誰かに獲られるくらいなら、その程度、何ということもなかった。

そうやって、調査と足取りを追いながら、尻拭いをするここと3年。漸く辿り付いた奴の交友関係。狐崎みすず。

直ぐにでも連絡とりたかったが、そういう時に限って緊急の任務が引っ切り無しに起こる。

漸く連絡をつけた時、奴の存在は公表され、世界で最も強き者とその界限では認知されてしまっていた。

しまった、出遅れた。そう思い悔いた。最強の座とその称号、裏の仕事をする連中にとっては最高の箔となるそれを求め、奴は狙われると思っていた。しかし、現実はず違った。

誰も奴を狙わなかった。正確に言えば、彼我の力量差さえ分からぬ二流以下が奴に挑もうとした。そんな連中は、奴の力から比べれば、足下にも及ばない武装検事や公安にさえ勝てず、奴に辿り着くことさえ出来なかった。

そして、力や格の違いが分かる一流以上の者たちは、勝てる可能性

が存在しないと知り、関わることさえ拒否した。

そういつた背景があり、奴は、遠山かなこは、今だ野放しとなっている。

私にとつてはまたとない幸運。何より、私しか奴を追えないと思うと、更に力が湧き上がってくる。

あの時よりも強くなっている。奴は、奴の弟、遠山キンジの部屋にいと嗅ぎつけた私は、強襲を行った。

二度目の相対となった闘い。間違いなく私はあの時よりも強くなっていた。

しかし、奴はそんなレベルで越えられる相手ではなかった。

有効打どころか、奴に触れることさえ出来ずに何発もの拳を食らう。一撃で意識を失いそうになるが、直ちに復活する。

普通ならとつくに気絶しているだろう。しかし、奴を前に、そう簡単に倒れることは出来ない。意識が遠のく寸前、奴の姿が見える度に、身体が勝手に覚醒するのだ。

覚醒する度に強くなる私。それなのに奴に追いつける気配さえない。あまりにも強大過ぎる敵、しかし、心は折れるどころか、寧ろ熱り立つ。

躲される拳、突き刺さる拳、その度に覚醒する意識と力。何度繰り返しただろう。

覚醒を繰り返し私にも限界が近づいてくる。次で終わる。そう理解し、闘い方を変える。

今回は見逃してやる。負けを認める。しかし、必ず一矢報いる。お前に届いてみせる。

今までと違い、避ける気はないし、受け流すこともしない、奴の拳をモロに直撃で受ける。全ての持てる力と集中力をカウンターに賭ける。

奴の右手が動く、私も動いた。

「逮捕だ……」

想定よりも速く奴の拳届いた。予定していたよりも力が入らない。薄れゆく意識の中、そう呟いた。

瞼が閉じる寸前に見えたのは、奴の左頬に届いた拳と、驚いた様な奴の表情。

一矢報いたな。満足感を抱き、瞼を閉じた。

|||||  
|||||  
|||||

— 獅堂虎巖視点 —

喫茶店でコーヒーを一杯頼み、一息ついて店を出る。さて、面倒臭えが仕事に戻るか。

「サボりとは、偉くなったものだな獅堂。」

この世で最もおつかない女トップスリーに入る奴の声が聴こえた。聴こえなければどんなに気が楽だっただろう。

「銭形の姐さん、いつこっちに戻ったんだい？」

内心気絶しそうな恐怖を隠し、そう言う。駄目だ、膝が笑ってやがる。

俺が知る限り、この人よりも強い奴はひとりしかいない。そいつは実質殿堂入りだから、ランキングでは一位となるのはこの人だ。

「今朝だ。遠山かなこを追っていたが、漸く辿り着いた。」

おいおい、怪物と怪物がドンパチやり合うのかよ。日本、いや、地球が消滅すんじゃないかねえのか？…やめよう、冗談じゃなく、本当に有り得そうで怖くなる。

「姐さんよお、悪いことあ言わねえ。アイツはやめといた方がいい。いくら姐さんでもアイツは無理だ。」

銭形の強さは痛い程知っている。それこそ、俺では一矢報いることさえ不可能な相手であると身に沁みて分かっている程度には。

しかし、その両方と戦ったことのある俺には分かる。どっちも理解

の範疇を超えた怪物だが、銭形が人間やめたランク一位なら、アイツ、遠山かなこは怪物やめたランク一位だ。遠山かなこからすれば、銭形は所詮怪物。格が違うのだ。

「知っている。奴は誰の手にも負えぬ。だから私が追うのだ!!」

どんな精神力してんだコイツは。

「そうですか、それじゃ俺はこれで…」

警告はした、後は自己責任だぜ。一目散に逃げようとした俺の襟を素早く掴む銭形。首が締まる。

「しかし、公務中にサボりとは…気合を入れ直してやる。」

「はは、姐さん。御冗談を…」

顔が真っ青になってるのが自分でも分かる。コイツは俺の様な特異体質というわけではないし、魔法が使えたり、超能力があるわけでもない。なのに俺よりも遥かに強い。

強いて言うなら、銭形という異常なまでに強い遺伝子を受け継いでいるだけの、特異能力持ちを超える異常に強い人間なのだ。

「冗談など言っておらんぞ。」

知ってるさ、アンタは容赦ないからな。

意識が遠のく中、その拳骨を受け分かる。以前の数倍強くなってやがる。なんで!?

ただでさえ手を付けられない化物なのに、なんで強くなってんの!?! それでも、遠山かなこには勝てる可能性がない様に感じるのは、やっぱりアイツが一番関わってはいけない相手なのだ、俺に教えているのだろうか。

## 風魔の救命活動

— 銭形平静視点 —

狐崎みすずに誘導されやって来たビルの屋上。私にとって、この世で最も憎き、そして、この世で最も大切な敵が目の前に立っている。

「遠山かなこ、今度こそ逃さんぞ!!」

今までとは違い、先祖代々受け継がれてきた十手を構える。

「岡っ引き…、銭形というのはあの銭形なのだな。」

十手を見た奴の言葉。

岡っ引きの子孫である私と、名奉行の子孫たる奴。曾ての身分なら奴が上だが、平成の世で、そんなものは関係ない。

「留置所で先祖に詫びろ。遠山かなこ、逮捕する!!」

「逮捕される様な罪は犯しておらぬ。岡っ引きの様な強引な手法で私は捕らえられんぞ。」

岡っ引き、時代劇では現在の刑事の様に描かれるが、実際は、現在で言う司法取引を済ませた無法者。しかも、ノルマ達成の為に、不法逮捕や恐喝を平気で行っていたという。それにより、一時期廃止された制度でもある。

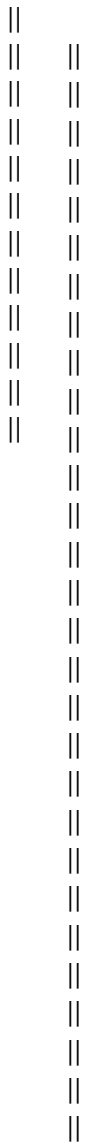
「痛いほど分かっている。故に祖先のことなど関係ない、私の最も得意な闘い方をするだけだ。」

右手に握った代々受け継がれた十手、そして、左手には、父より譲り受けた手錠を握る。銃など不要。これが私にとって最高で、紛うこと無き最強の武器だ

「安心した。下らぬ価値観で手を抜かれてはつまらぬからな。さあ、私を愉しませてくれ。」

まるで最強の大魔王の如く、口角を上げ、両腕を広げる遠山かなこ。  
「逮捕だ!! 遠山かなこ!!」

そんな大魔王に挑む勇者の如く、十手と手錠を駆使し、奴に挑んだ。



—遠山かなこ視点—

銭形平静、実に愉快で、かけがえのない存在だ。

相対する度に、振るう拳の一撃の度に強くなる不思議な人物。

初めて見せた十手と手錠の二刀流、事実を言えば見切れる。躲す必要さえなく、奴の懐に入り、一撃で仕留めれる。しかし、奴の力を引き出したいという己の我儘で、それをあしらうだけに留める。

「まだ足りぬか!!」

奴の声が聞こえる。

「足りぬ、しかし、面白い、実に愉快だ。」

たった数時間で、格段に強くなった奴に嘘偽り無い感想を伝える。

「おのれ!!その余裕、今に崩してやる!!」

一段と速度と技術を上げて挑み掛かる銭形。

「愚弟たちにも見習って貰いたいものだ。」

何度拳を当てても挑みかかる奴の姿を見て、産まれた時から見守ってきたが、その時より雀の涙程しか強くなっていない弟ふたりを思う。

あれだけ鍛えてやっても、今だ私の加減した拳を恐れる愚弟たちにも見習って貰いたいものだ。

「貴様を追えるのは私だけだ!!」

その執念が成すものなのだろうか。私は銭形に敬意を持つ様になつた。

「そうなのかしれんな。」

不殺を掲げる私が、決して人に対して放たぬ、本来の力、その一部を込めた拳を奴に叩き込んだ。

もし、これで奴が起き上がらぬなら、もう夢を追うのは諦めよう。

そんな決意の一撃だった。

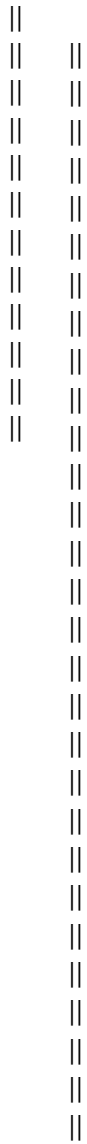
「かなこ、やり過ぎよ。」

みすずの声に、家族とみすず以外に見せたことの無い力を出してしまっただことを知る。

「何故だろう、父上と爺様を相手どった親子喧嘩以来、初めてこの拳を出してしまった。」

武偵高進学に関して、初めてした親子喧嘩。その時以来、初めて放った拳。

全力ではない、しかし、加減をほとんど意識しない拳を銭形に放ってしまった。



— 銭形平静視点 —

今までとは次元の違う一撃。身体に当たる前から意識が刈り取られる、そんな信じられない一撃。

当たったのだと認識さえ出来ずに、意識が暗転した。

走馬灯の様に浮かぶ、父の顔と言葉。そして、母の顔と妹の顔、その言葉。

「孫の顔が見たい。」

「浮いた話がひとつもない。早くいい人を見つけて結婚して、安心させて。お見合いつて手もあるわよ。」

「お姉ちゃんはいつ結婚するんですか？」



正月に久しぶりに家族一堂に会した時の言葉だ。

「仕事が恋人で何が悪い!! 私には追わねばならぬ相手がいるのだ!!」

そう言って卓袱台をひっくり返し、泣きながら実家を飛び出た。

そしてその時叫んだ言葉、今年の抱負。

「遠山かなこおーっ!! 逮捕するおーっ!!」

眼前に広がる月明かり。その光に照らされた遠山かなこの姿。

「ほら、生きていたではないか!!」

「化物ね。普通なら骨どころか、髪の毛一本も残ってないわよ。」

クソっ、また気絶してしまっていたのか。しかも、嫌な事まで思い出してしまっただではないか…

しかし、今までとは違い、目覚めても遠山かなこの姿があるとはな。

「私起きるまでに逃げなかったことを後悔させてやる。遠山かなこ!! 逮捕だっ!!」

倒れる前よりも身体の調子がいい。再び十手と手錠を構える。

「待って、なんで貴女涙声なのよ。」

狐崎がそんな指摘をしてくる。

「う、うるさい!! そんなことはどうでもいいのだ!! さあ、遠山かなこ、来い!!」

余計なことを思い出さない為にも、目の前の好敵手との闘いを欲した。

「本当に、愉快的奴だな。」

そう言って、一歩踏み出す遠山かなこ。

「私は更に強くなっているぞ!! お前の様に、世界を股にかけ、様々強者を襲わずとも、お前の域に達してみせる!! 覚悟しろ!!」

そう、私はこいつだけを追い、そして追いつく。こいつの様に無差別に闘いを挑む浮気性ではない。一途に、お前だけを追い続けている。

「別に襲ってなどおらぬ。結婚相手を探していただけだ。」

…結婚? 奴の口から、そんな言葉が出るとは、全く想像していなかった。

「…結婚? 知らぬ言葉だな…」

そう言つて無視を決め込むが、動きには動揺が出てしまう。

「知らぬ訳があるまい。私とて知っているのだから。」

「あら、少しは自分が途方もないバカだと自覚してきたのね。かなこ、成長したじゃない。」

「私はバカではないと何度も言っているだろう、みすず。」

私よりも四つ歳下のふたりがそんなことを言っている。少なからず、お前は途方もないバカであることは間違いないと思うぞ。

「わ、私を前に、お喋りとは…舐められたものだ。」

「だから、なんで涙声なのよ。」

何故だろう、視界が潤んでいる。これもきつと、奴の能力なのだ。

「私とて、早く結婚したいのだが、私よりも強い者に今だ会えぬ。早くせねば手遅れになってしまう。」

手遅れ？なら、お前たちよりも年上の私はどうなるというのだ…何故こいつらの言葉は胸に刺さるのだろう。食らった拳よりも痛いぞ…

「安心しなさい、もう手遅れよ。そもそも、相手に求める条件が絶対にクリア出来ないもの。」

相手に求める条件云々、やめろ、それは母に散々言われた言葉だ。

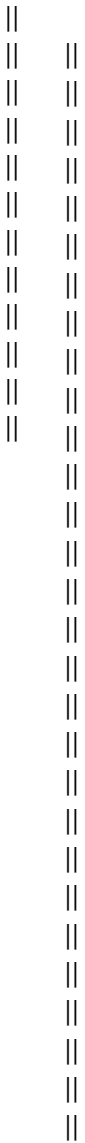
「行き遅れ、と弟たちに思われたくないのだ。」

私は既に妹からそう言われているぞ。泣きながら殴つたがな!!と  
いうより…

「もうやめろーっ!!」

頼む、やめてくれ。あれ、何故だ、何故涙が止まらないのだ…

ガツクリと膝を付き、涙を流して叫んだ。



「結婚しろ、結婚しろと、好き勝手言いおって！何も好き好んで結婚しないわけじゃない!!相手がおらんのだから仕方ないだろう!!」

ダン!!と空になったビールジョッキを叩きつけ、銭形が叫ぶ。だいぶ酔ってるわね。

あの後、泣き崩れた銭形を逃って遊んでいたら、居酒屋に連行されてしまった。：少し遊び過ぎたわね。まさか手錠を架けられるとは：因みに、架けられた手錠はかなこが指先ひとつで破壊していた。「行き遅れたのは自分のせいではないと言いたいのかしら?」

面倒臭い。ジョッキに波なみと注がれたウーロン茶を口に運んだ後、そう言う。

「行き遅れてなどおらん!!私はまだ28だ!!」

「ガツツリ三十路ね。周りは既婚者が多くなってきたんじゃない?」  
いけない、つい逃ってしまった。

「そんなことはない!!結婚式の招待状など一通もまだ届いておらんぞ!!」

「貴女、友だちいないのね。」

まあ、私も人のことは言えないけど。

「友だちくらいおるわ!!」

届いたばかりのビールを一気に煽り、一息に飲み干してそう怒鳴る。

「そうなの?じゃあ具体的に教えてくれるかしら?最近連絡をとった友人は?」

考え込む銭形。

「：私は、友だちさえないのか：」

そう呟いて、ホロリとひと粒の涙を流す。この人、面白いわね。

「みすず、これはどうすればよいのだ?」

入店して既に一時間が経っているのに、今だタッチパネルの使い方が分からず悪戦苦闘しているかなこが助けを求めてくる。

「かなこはもう触らないで。壊したら厄介だわ。貸しなさい、何が頼みたいのよ？どうせ肉でしょ？」

この子の力で下手に触ると、タッチパネルが跡形も無く消え去る可能性もある。

「そういうお前はどうかのだ!!友人は：遠山かなこがいる様だが、他にはおらんのだろう?!恋人の気配は微塵もないぞ!!」

復活した銭形が絡んでくる。

「ご明察通り、私の友だちはかなこだけだし、恋人もいないわ。でも、貴女と違って、そもそも結婚する気もないし、必要ないから作らないだけよ。」

偽りない、本当の気持ちだ。

「私とて、必要ないからしてないだけだ!!」

「でも泣いてたじゃない。正直に言ったらどうなの?」

結婚したい、そう泣きながら呟いてた人物がよく言うわ。かなこの注文を済ませながらそう言う。

「結婚はしたい!!しかし、今は仕事が楽しいのだ、仕方ないだろう!!」  
「そう言って行き遅れたのね。」

「フグウツ…」

銭形が泣きながら机に突っ伏した。やっぱり面白いわね、この人。桁違いの化物の癖に、自分に正直過ぎるのと、仕事以外は基本ポンコツなところは誰かに少し似ている気もするわね。

かなこといい、銭形といい、見た目は悪くない。悪くないどころか、上の上、特上の容姿をしているし、条件さえ下げれば、幾らでも相手はいるというのに、なんでこうも頑固なのかしら。

本心では結婚したくないのでは?そう疑いたくなくなってしまった。

「簡単な条件だと思うのだがな…うまく行かないものだ。」

ボケっと話を聞いていたかなこが、机に突っ伏した銭形を見ながらそう言って、徳利を煽る。

「そういう呑み方じゃないわよ。なんの為に猪口があると思ってるのかしら。」

言うべきは、そっちではなく、この世で最も困難な条件を簡単と言

うごことなのだが、言っても無駄だろうしそのままでもいいわ。  
「面倒くさいではないか。それに、そんな呑み方では呑んだ気がせぬ。」

だったら少しは酔った様子も見せて貰いたいものだわ。顔色ひとつ変わらさず、アルコールの匂いさえしなかなこに呆れる。

「そんなだから結婚出来ないのよ。もう少し女らしくなりなさいよ。」  
溜息混じりにそう言う。誰よりも男らしく、誰よりも強いかなこ。どんな男だつて気遅れするわよ。

「女らしくなれば結婚出来るのか？」

「さあね、でも、今よりは多少マシになるんじゃないかしら。」

無責任に言い放ち、ジョッキに口を付ける。

「ふふふ、そうか、女らしさか…」

銭形がそう言いながら復活した。もう少し大人しくしてよかったのに…また騒がしくなるのね。まあ、愉しませてくれるなら別にいいけど。

「女らしさ、母や妹に散々言われ続けたが、私に足りぬのはそれだけ、それさえあれば結婚出来る!!」

そういう考えだから結婚出来ないのよ。勢いよく立ち上がった銭形にそんな感想を抱く。

「なる程、確かに。私も母上や婆様に散々言われてきたな。」

残念なのがふたり集まると、残念な方向にしか進まないのね。

「女らしさとは何処で手に入るのだ!!直ちに逮捕してやる!!」

手に入るものではないわよ。お宝かなんかと勘違いしてるんじゃないの？

「みずず、何処を探せば出てくるのだ？」

少なくとも、貴女たちの頭の中を探しても出てこないでしょうね。

「産まれて来た時に落として来たのか忘れて来たんでしょ。今更探しても無駄よ。」

そもそも備わってなかったのかもしれないわね。

私の言葉を聞いて、銭形とかなこは目を丸くする。

「では、私たちは一生結婚出来ない…」

銭形の絶望に満ちた声。

「待て、一纏めにするな!!私に結婚する。」

かなこが銭形の発言に噛みつく。

「なにお!!お前ではなく、私の方が結婚するのだ!!少なくとも、お前よりは私の方が女らしい筈のだ!!」

「私の方が強いのだ、私の方が女らしい決まっておろう!!」

駄目ね、こいつら。もう手遅れだわ。

額を突き合わせ、一触即発の剣幕でどっちが女らしいかを言い争うふたり。

そんなんだから女らしさが欠落してるのよ…

止める気も起きず、アホなことと言い争うふたりを眺めながらウーロン茶の追加を頼む。

まあ、傍から見てる分には愉快だからこのままにしておきましょう。う。

ウーロン茶を届けに来た店員が怯えている。面白そうだし、店員に止めさせてみようかしら?。

「貴女、アレを止めてくれるかしら?」

「無理でござるよ…某、まだ死ぬ訳にはいかないでござる。」

よく見ればこの店員、キンジの戦妹だわ。確か、風魔だったわね。戦妹でなく本人がいれば、もっと面白かったんでしょね。…連れて来とけばよかったわ。

ふたりの間に押し込み、ボロ雑巾となるキンジの姿を見たかったけど、次の機会にとっておきましょう。

「それじゃあ、私は明日も仕事があるから帰るわ。」

ふたりを放置し、立ち上がる。

「えっ!?ちよつと待つでござるよ!!こんなの某にどうしろというでござるかぁーっ!!」

「恨むならキンジ恨みなさい。」

そう言い残し、個室を出る。

「どういふことだござるか!?あつ、駄目でござるよ!!ここで喧嘩したら店が消し飛んでしまうでござるよおーっ!!」

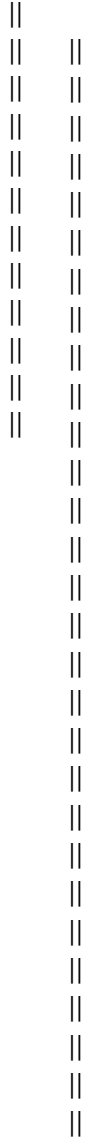
哀れな悲鳴を聞きながら、居酒屋を後にする。ホント、かなこといと飽きないわ。タクシーに乗り込み自宅へ向かう。

部屋に着き、シャワーを浴び終えた時、あるネットニュースが目飛び込んできた。

「早めに帰って正解だったわね。」

『品川で居酒屋崩壊!! 欠陥か、それともテロか!?!』という表題。何故この規模で暴れておきながら、被害が建物だけというのが驚きだ。

なんでも、店員の懸命な避難誘導が功を奏したらしい。案外やるわね、風魔陽菜。



— 風魔陽菜視点 —

「なんでこうなるでござるか!?!」

バイト先の居酒屋で、師匠の姉上こと、遠山かなこ殿と、それと喧嘩しているスーツにコート、ハットを被った女性。酔っ払った末の喧嘩、居酒屋では偶にあることとてござるし、気にする様なことではないでござるな。…いや、やっぱりおかしいでござるよ!!あの姉上殿と喧嘩出来るって、どんな化物でござるか!?!

なんで注文されたウーロン茶を届けに来ただけなのに、大怪獣の大戦争に立ち会うことになるんでござるか!?!

「貴女、アレを止めてくれるかしら？」

お二方の連れなのか、あのふたりとは違い、戦闘力を感じられない女性にそう言われる。

「無理でござるよ…某、まだ死ぬ訳にはいかないでござる。」

この状況だけでストレスで死にそうだというのに…

「それじゃあ、私は明日も仕事があるから帰るわ。」

某の言葉は完全に無視。ふたりを放置し、立ち上がる女性。

「えっ!?ちよつと待つでござるよ!!こんな某にどうしろというでござるかぁーっ!!」

「恨むならキンジ恨みなさい。」

叫ぶ某にそんな事を言つて、本当に帰ってしまった。なんでそこで師匠の名前が出るんでござるか!?

もしや、師匠による修行でござろうか?いや、それは流石にないでござるよ。だって、あのふたりの間に入ったら、強くなる前にこの世から消滅してしまうでござるからな。

「ならば、どちらが女らしいか、はつきりさせようではないか。」

「望むところだ。今度こそ逮捕してやる。」

お二方、そんな理由で争っていたのでござるか!?そんな理由で争っている時点で、女らしさの欠片もないでござるよ!!

ふたりが放つ恐ろしい気配に気圧される。マズい、これはマズいでござるよ。お二人とも、もう戦闘モードになっているでござる。

こんな怪物ふたりが暴れたら、某のバイト先が消し飛んでしまうでござる。しかも、お客もまだ多数店内にいるので、巻き込まれたら、恐ろしい数の死者が出てしまうでござる。

「皆様、今すぐ店の外に逃げるでござるよ!!この店は消し飛んでしまいうでござる!!」

恐怖で震える足で、なんとか個室を飛び出し、精一杯に叫ぶ。

「おい、バイト!!巫山戯た事を言つてんじゃねえ!!」

店長がマジギレしてるでござるが、某、嘘偽りは言っていないでござるよ。

「巫山戯てなどござらん。店長、直ちにお客を外に逃がすでござる



よ。」

覚悟は決めている。多くの命を救う為、躊躇無くクナイを店長の首元に突き立て、脅す。言っても信じて貰えぬなら、こうするしかないでござる。

不満や怒りの声が上がりがらも、あのふたりを除いた、全ての客を店の外に出した。

「何も起きねえじゃねえか!!」

店外で店長が怒鳴る。しかし、某は本気で安堵した。店内から、信じられない殺気が放たれたからだ。

「なんとか間に合ったでござるな。」

その直後、居酒屋は消し飛んだ。崩壊とか倒壊ではなく、消し飛んだ。瓦礫や柱、椅子やテーブル、そこにあった物の何一つ残らず、元々何も無い空き地であったと言わんばかりに、完全に消し飛んだ。

あまりの光景に、皆が言葉を失っていた。某も、これ程とは思ってなかったでござる。

しかし、やり遂げた。店舗以外に被害を出さなかった。達成感と重責からの解放された喜びに、涙が頬を伝う。

「詳しい話は署で聞かせて貰おう。」

「あれえ!?!なんでこうなるでござるか!?!」

某、頑張つて多くの命を救ったでござるよ!?!褒められこそあれど、何故某を連行するでござるか!?!

振り返ると、某を疑いたくなる気も分かるでござるし、某の話信じられる訳がないでござる。

だって、某だつておかしいと思うでござるよ。なんで喧嘩で店が跡形もなく消し飛ぶでござるか…

冷たい留置所中、渡された食事は思いの外、美味しかったでござる。

## サウナと保釈、そして決意

— 銭形平静視点 —

「バカ女!! 貴様に女らしさなど無い!!」

「何を言う!! 貴様よりも私の方が強いのだ!! 私の方が女らしいに決まっている。」

額を突き合し、頭突きを繰り返す。痛い、私以上の石頭がこの世に存在するとは…

「やはり、白黒ハッキリつけねばならぬ様だな。」

「ふん、お前では私には勝てん。」

手錠を握る私に、余裕の笑みを浮かべ遠山かなこ。

「貴様と闘う度に私は強くなる!! その余裕、何時まで続くか見物だ!!」

「ほぎげ、貴様と私、全てにおいて私が勝っている。」

自信満々に胸を張る遠山かなこ。

「私は大卒、しかも東大を首席だ!! お前は?」

「知るか、武偵高に落とされた時より、学問からは離れた!!」

中卒じゃないか!! 私の圧勝だな!! 自信に繋がる。

「学問など、戦いには不要!! その様なものに固執している時点で、お前の負けだ!!」

「不要な訳があるか!! 歴史を見ても、偉人たちは皆、文武両道だ!!」

「小難しい事を言っつて、私を惑わそうとも無駄だ!!」

クソっ!! バカには何を言っつても通じないのか!!

「ならば、戦闘以外で私に勝るところは、何処だと言うのだ!!」

「体格だな!! 身長でも、それ以外でもお前に勝っている!!」

確かに、奴の方がほんの僅かだが身長が高い。ほんの数ミリ程度だが。しかし—

「確かに身長はお前の方が上だ、しかし、それ以外だ?! 自画自賛もいいところだ!!」

確かに、奴が自惚れる程度には、奴の容姿は優れている。それこそ、絶世の美女と言っても過言ではないだろう。しかし、私とてそれに劣

るとは思わない。

「容姿なら、私も同等だ!!別に前だけが優れているわけではない!!」  
「だが私の方が男心がわかってる!!なんせ、弟が3人もいるのだから!!」

クソっ!!妹しかいない私の負けだ!!父と母よ、何故もつと頑張らなかつた!!

しかし、私は負けない!!

「屁理屈ばかりを述べおつて!!もういい!!貴様よりも私が先に結婚すれば分かる話だ!!」

全力の拳を繰り出す。そう、奴よりも先に結婚すれば良いだけのこと、惑わされるな!!

「行き遅れの貴様に私が負けるん?」

奴の光を放つ拳が、私の拳にぶつかる。

それからのことは、なんとなくしか覚えていない。

拳と拳がぶつかり、光が世界を包む。

消し飛ぶ居酒屋、舞台を変え、拳を撃ち合う私と遠山かなこ。

「その程度か、銭形!!」

「吠え面かかせてやる、遠山かなこ!!」

気が付けば、お台場にまで来ていた。

止まぬ拳、蓄積するダメージ。

「貴様と私、何が違う!!どちらも満足する相手に会えず、虚無感と戦い続け、誰にも理解されない!!」

「成程、私とお前は違う。私はみすずという理解者がいる。満足出来ぬとも、寄り添う場所はある。」

私の理解者、それは父なのだろうか?家族は、無条件に身内を肯定することがある。それは真の理解者といえるのか?

「私はお前が嫌いだ。バカの癖に私に無いものを得て、私より今は強い。」

今は、そう、今は、だ。絶対に追いつくし、全てで超えてみせる。

「私は別に嫌いではない。お前は愉快だ。嫌われている相手に言う言葉ではないのだろうが。」

そこで、記憶が途絶えた。

「熱つい!!」

身を焦がす熱と、脱水症状寸前で身体が危機を知らせる為に目覚めさせたのだろう。

大量の汗をかき、茹でダコの様になった身体が、私を目覚めさせた。「起きたか、身体は大丈夫か?」

真っ裸で、木製の、タオルを敷かれたベンチに座り、汗を流す遠山かなこの姿。

ここは…

「なんでサウナいるのだ!!」

「汗流したかった。まあ、裸の付き合いというやつだ。」

私の疑問に、そんな答えを返す。

「私は負けた、置いていけばよかろうに…何故負けた相手と風呂に行かねばならんのだ!!」

お互いに一糸纏わぬ身体で、座る。

「最近は無くなつたが、弟たちや、みずすと風呂に入ることがあった。」  
染み染みと思いつく様に、遠山かなこが口を開く。

「お前とは、そういう関係にはなれぬのかもしれない。だが、私を愉しませたのは、お前とアイツだけだ。」

私だけじゃないのか…こういう時は、嘘でも私だけだと言うのではないのか?

「アイツ? 私よりも強いと? 知らんぞ、そんな奴。」

「純粋な強さでいえば、貴様よりも遥かに弱い。しかし、護りという一点に関しては、お前よりも上だ。」

奴の言葉で、ある傭兵の名が頭に浮かぶ。最強の防衛、完全無欠の鉄壁。最強と評される傭兵の一人、『要塞』ミラ・ミハイロヴィチ。

透き通る様な白磁の肌に、流れる様な色素の薄い金髪。見目麗しい見た目に反した男言葉。そして貧乳。

そんな傭兵の姿が想像出来た。

「成程、手強い相手だ。」

今だ闘ったことはない相手、しかし、負ける気はない!!

「姐ぎーん!!探したぜーっ!!」

サウナへと突っ込んで来た金髪の美女。あれ?こいつ『要塞』じゃないか?

涎を垂らしながら、遠山かなこに抱き着くそいつ。想像とは異なる姿に、私の勘違いだと思っ。

「ミラ、よくここが分かったな。ちょうどお前の話をしていたところだ。」

ミラって言ったな。やっぱりアイツが『要塞』なのか!?

「姐さんの匂いなら、地球の裏にいたって嗅ぎつけるぜ!!」

こんな変態が、あの最強の傭兵だということのか!?

「そんなに臭うか?風呂には入っているのだが…」

少し落ち込んだ様子の遠山かなこ。

「姐さんは世界で一番良い匂いだ!!そのまま大丈夫だ!!」

「そうなのか?ならない。」

おい、それでいいのか!?遠山かなこよ、お前に貞操の危機感はないのか!?

そいつ、お前の裸体を見て、正常では無い目をしてるぞ!!

「ウエヒヒ…なんだテメエ、何見てやがる!!」

遠山かなこの汗を舐めとる妖怪、もといミラ・ミハイロヴィチを見ていた私に、当の本人が噛み付いてくる。

いや、思わず見るだろう…誰がどう見ても変態のそれだぞ!!

「遠山かなこよ…お前、交友関係を改めた方がよくないか?」

流石に心配になってくる。この変態もそうだが、狐崎みすずだつて、人格破綻者で、褒められた人物ではない人。こいつの交友関係、碌な奴がいないな!!

「姐さんに変なことを吹き込むじゃねえ!!ぶっ殺してやる!!そもそも、なんだその乳!!当てつけか!!気に入らねえ、巨乳撲滅委員会の会員の俺を前に、度胸じゃねえか!!」

なんなのだこいつ!?そもそも、巨乳撲滅委員会とか巫山戯た委員会に属しているなら、私よりも大きい遠山かなこを殲滅しろ!!

「寄るな変態!!私にそんな趣味は無い!!」

「俺だつて無え!!畜生!!ブルンブルン揺れやがって!!抉り取つてやる!!」

致し方ない、反撃出るか。変態に付き合っている暇は無いのだ!!  
真つ平らな奴の胸目掛け、拳を振るう。噂通りなら、加減は不要だろう。

「姐さんには遠く及ばねえ…だが、この威力、お前ホントに人間か?」  
私の渾身の拳を受け、平然としているお前こそ人間か?今まであれを受け、その様にいられたのは、お前と遠山かなこだけだぞ。

この変態、強い。いや、強いというより、硬い。攻撃を有効打に出  
来ない。

「貴様こそ、大した硬さだ。本当に人間か?」

そう評価する。

「誰の胸が硬えだど!!ぶつ殺してやる!!」

クソっ!!話が通じない!!

「動きやすくて良いではないか!!こんなものあつても、肩が凝るし、動き辛いだけで、良いことはない!!」

「うるせえ!!持つ者は、いつだつて持たざる者の気持ちなんか分からねえんだよ!!」

攻撃は素人に毛が生えた程度、取るに足らない。しかし、有効打が与えられない。手錠さえあれば、容易に拘束出来るというのに…

「ミラ、止めぬか。胸の大小で人の価値は測れぬ。」

おい、それをお前が言うのか?

「姐さん…」

「私は、可愛らしくて良いと思うぞ。」

お前、自分がどういう立場に置かれているのか分かっているのか!?

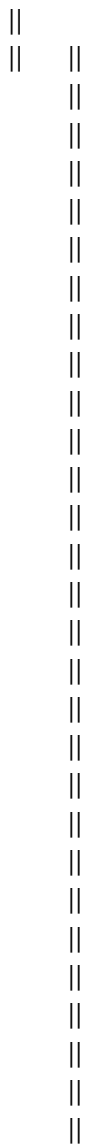
「姐さんが…俺が可愛い…ウエヒヒ…」

ああ、案の定、ヤバい笑みを零している。本当に、お前の危機感はどうなっているんだ!!

こいつ、誰か管理してやらねば、道を踏み間違えるぞ。

「遠山かなこ、お前が心配になつてきた。」

生涯の好敵手と定めた相手の将来が、心配で仕方なかった。



— キンジ視点 —

「おい!!何処に行くのかくらい説明しろよ!!」

昨日同様、突然やってきたみすず。違うのは、ひとりで来たということと、突然連れ出されたということだろう。

「煩いわね。運転中なんだから、静かにしなさいよ。」

社会人二年目の癖に、超高級国産車のハンドルを握り、気怠そうにそう言う。現在道は渋滞中、歩いた方が速いと思う様な速度でゆつくりと進んで行く。

「渋滞で進んでないだろ。突然連れ出しといて、説明も無しじゃ、納得するわけないだろ!!」

俺の声に、苛立った様に溜息を吐き、

「私だって、かなこの為じゃなければ、アンタとドライブなんかしたくないわ。」

俺と渋滞に対しての苛立ちを込めたみすずの声。

「姉さんの為?またなんかやらかしたのか?」

「かなこがやかすのはいつものことよ。本人に自覚がないだけで。今回も、毎度の如く、公安や武検、政府が後処理に駆け回ってるわ。」

姉さんは、相変わらず、多方面に迷惑をかけているらしい。

「なら、いつも通り任せておけばいいだろ。俺が出来ることなんか、何にも無えよ。」

上がなんとかしてるのに、今更俺に出来ることなどあるわけがない。

「かなこ絡みをどうこうさせる気はないわよ。今回は、その被害者絡み。」

被害者ねえ：俺も被害者だと思っただけ？

「師匠！某、無実でござるよ！！」

連れられて来たのは留置所。何故か面会室の強化アクリル越しに、戦妹、風魔の姿があった。

「み…狐崎さん？これは一体どういうことですか？」

以前名前で呼ぶなど、ネチネチと言われたのを思い出し、呼称を咄嗟に変えて質問する。訳がわからんのだが？

「昨夜のニュースは観てないのかしら？品川で居酒屋が綺麗サツパリ消え去ったってやつ。」

呆れた様に言うみすず。観てないな、本当、治安悪くなったなあ…現実逃避をやめ、頭の中で整理する。まず、居酒屋が綺麗サツパリ消え去った。どの程度の規模の店かは知らないが、みすずがわざわざ、綺麗サツパリ消え去ったという表現をしたということは、本当にそうなのだろう。そして、何故か捕まっている風魔。

全て姉さんに関わることだとすれば…

「風魔、姉さんが迷惑かけたみたいだな。」

「キンジにしては上出来ね。」

俺の推理の末に出た言葉を聞き、みすずがそう言う。

「そういうことだから、私は釈放の手続きをしてくるわ。冷泉君を6時間くらい待たせてるし、もう行くわね。」

冷泉、嫌な奴に目を付けられたな。だが、この程度の嫌がらせなら、みすずの中ではかなり優しい方だ。

気怠そうに、みすずが面会室を出て行く。

「手続きは済んだわ。」

「内々の処理があったとはいえ、半日以上拘束することになってしまい申し訳ありません。」

早く帰りたい。そういう心情が明け透けで、隠す気も無いみすず



と、風魔へ心底申し訳無さそうに頭を下げる冷泉。

手続きの間、風魔から事情は聞いている。災難としか言いようが無いのだが、不幸体質の俺の戦妹は、そんなところ迄も受け継いでしま  
うのだろうか…

流石に、恨みつらみの一言も言いたい風魔が口を開きかけた。

「これ、持って帰っていいわよ。」

取り調べの定番のカツ丼と、その他日持ちするカップ麺などが詰め  
込まれた紙袋をみすずが差し出す。

「あ、有り難いでござる!!」

安い買収だなあ…そんなとこまで似なくていいぞ、風魔。

「この件は内密に…」

「勿論でござる!!忍はそこらへんは弁えているでござるよ。」

申し訳無さそうに言う冷泉に、即答で返事をする風魔。

「それじゃあ、帰りましょう。」

そう言つて、車のキーを俺に投げるみすず。それをなんとかキャツ  
チする。全然届いてないぞ!!相変わらず、運動能力は壊滅だな。

「えーっと、狐崎さん。僕言うことではないんですかね?」

6時間、不必要に待たされた冷泉が、青筋を立ててそう言う。

「ご苦労様。かなこの役に立って良かったわね。気が向いたら、かな  
こに冷泉君が頑張ってくれたと教えてあげるわ。」

その時は一生来ないのだろう。

「文句があるなら、かなこに言いなさい。私だって、かなこの為に時間  
を割いたんだから。」

姉さんに対してだけは、異常な迄に寛容なみすずが、あの姉さんに  
対して恋心を抱く冷泉にそう言つて、俺たちに移動を目で促す。

面倒ごとはゴメンだ。みすずに促されるままに風魔を連れ、そそく  
さと面会室を後にした。

「さて、冤罪により拘束された感謝料を貰ってるわ。」

車に乗り込んだ風魔に、みすずがそこそこの厚みのある茶封筒を差  
し出す。

冤罪は御免だが、一日拘束されるだけで金貰えるなら俺もやろうか

な。…いや、絶対やめとこう。みすずのことだ、喜々として俺を貶めるだろうし、金も取られそうだ。

「そ、某の一月分のバイト代よりも遥かに多いでござるよ…」

嬉しさと哀しみの折り混ざった、複雑な心境が感じ取れる声音で言う。

「受け取ったわね。じゃあ、今回あったことの全てを忘れなさい。あれは老朽化で起こった崩壊。そうでしょ？」

まあ、そうなるな。あれは慰謝料という名の口止め料。それはなんとなく分かっている。

「御意。」

風魔とて武偵、それに代々忍者の家系だ。そこら辺は弁えている。

しかし、姉さん絡みだからか、みすずにしてはやけに優しいな。

「良い返事ね。それじゃあ、保釈手続きの着手金と手数料を貰うわよ。出血大サービス、10万でいいわ。」

「じゅ、10万でござるか!!」

やはり、みすずはみすずだった。

|||||  
|||

— 乾桜視点 —

「待ちなさい!!」

あかり先輩たちとリーフパイを食べに行こうと歩いていた最中、私の横をすり抜けて行く二人乗りのバイク。

あれ？悪の匂いがする。あまり人通りの少ないこの道、私たち以外には、私たちの前を歩く一人の女性と、そのバイクの二人組しかいない。

匂いを感じた瞬間だった。女性のバックがひったくられた。

「待ちなさい!!」

倒れた女性を介抱し、そう叫ぶ。

「桜ちゃん、ここは私に任せて。バイクを追って!!」

あかり先輩が私に代わり女性の介抱を行い、バイクを追った。

駄目、走っては追いつけない。ナンバーはご丁寧に隠され、確認出来ない。逃がすものか!!

銃を取り出し、タイヤを狙い構える。

「邪魔だ!!」

低い女性の声、さっきの女性ではない。声を認識した時、私の顔の横を何かが飛んでいった。

何かに引つ張られる様に宙に浮き、こちらへとバイクの二人組が引き寄せられる。ロープ？

「現行犯逮捕だ!!」

乗り手を失ったバイクは転倒し、道路を滑っていく。マズい、民家にぶつかると!!

「おい、危ないぞ。」

ピタリと止まるバイク。

「その程度でお前が死ぬのなら、とっくに捕まえておる。」

男ふたりを捕獲した女性が、バイクを片手で止め、それを軽々と片手で担ぎ、こちらへと歩いて来る女性にそう言う。

この人…

「ぜ、銭形警視正!!それに遠山かなこさん!!」

世界最強の警察官と評され、多くの警官にとって憧れの人、銭形平静警視正と、私たちにトラウマレベルの力量差を見せつけたRランク武偵でS D A総合ランク1位の怪物、遠山かなこ。

とんでもない大物がいた。

「なんだ？貴様も公僕か？」

私に銭形警視正がそう言う。日本人女性としては大柄な彼女は、170cm位あるのか、私は少し見上げる様に彼女の目を見て、敬礼する。

「はっ!!乾巡查であります!!」

多くの警官がそうである様に、私にとつても憧れの対象である彼女に最大の敬意を示す。

「そうか、ご苦労。では、こいつらは任せた。私は奴を待たせているのでな。」

私に敬礼を返し、男ふたりを押し付ける。そして、遠山かなこさんの方を向く。最強と最強、やはり引かれ合うものがあるのだろうか？一緒に行動していたみたいだし、あのふたりが動く程の何か起こっているのだろうか？

「遠山かなこおーっ!!決着をつけてるうーっ!!」

あれえっ!!違うの!!

何が起きているのか分からない、目で追うことさえ不可能な、音から察するに光速の殴り合いが繰り広げられている。

理解不能な殴り合い、先に膝を付いたのは銭形警視正。しかし、すぐさま立ち上がり、再び光速の世界に旅立つ。

「はは…」

あかり先輩たちの乾いた笑い声、理解の範疇を超えた闘いに、言葉も感情も、瞳の光さえ失っている。

私だつて同じだ。遠山かなこさんとは一度、ナゴジョで手合わせしたが、あの時、どれだけ手加減されていて、それにさえ全く手が届かなかったのだと、理解出来てしまう。

「姐さん、帰ろーぜ!!」

ふたりの闘いに気を取られ、女性気付かなかった。

飽きた様にそう言う女性は、背中に重火器を背負い、溜息をついている。

「仕方ない、終わりにするか…」

遠山かなこさんの声が聞こえ、動きが止まる。

遠山かなこさんに俵担ぎにされ、気を失った銭形警視正。あの異常



す。

「我々は、これからみすずを誘って風呂に行くが、一緒に来るか？」  
えっ!? 又風呂行くの!? という質問は飲み込む。遠山かなこの隣に立つ変態こと『要塞』ミラ・ミハイロビイチが妬ましいという感情剥き出し睨んでいたからだ。

こいつ、異常な迄に私を嫌っているな。しかし、狐崎みすずを誘うのはOKなのだな…

その疑問は、奴、狐崎みすずの姿を思い浮かべて解決した。成程、奴はこの変態と同類だな。凹凸の少ない狐崎の身体思い出し、納得する。

「遠慮する。そもそも、遠山かなこ、貴様と馴れ合うなど、有り得ぬ!!」  
そう、私とこいつは、馴れ合う関係であってはならないのだ。

「けっ、こつちからお断りだぜ。」

遠山かなこではなく、『要塞』がそう答える。こちらとしても、出来れば、こいつとは関わりたくないな…

「遠山かなこ、次に会う時は…次こそは貴様を捕まえてやる!!」  
「そうか、楽しみにしている。」

私の決意に、楽しそうに答える遠山かなこ。歯を食いしばり振り返り、奴とは逆の道を進む。

そうしないと、緩んだ顔を見られてしまいそうだったからだ。

最強の、遥か頂きに立つ手の届かない敵。そんな相手を得たことに、初めて在るがままに振る舞える友人を得た気がしていた。

「銭形平静、六ヶ月の減給を言い渡す。」

そんな翌日、警視総監に呼び出され、そう言い渡された。

「なっ!! 私は何をしたというのですか!!」

突然の処分に、思わず詰め寄る。

「酔った勢いで遠山かなここと喧嘩し、居酒屋を消し飛ばしたんだ。甘過ぎる処分だと思うのだが…」

「あの程度で消し飛ぶ居酒屋が…」

反論しようとした私に、警視総監が呆れた様に溜息を吐く。

「君はもう少し、自分の力を理解した方がいい。」

そんなもの十分承知している。警視庁、いや、ICPOで私よりも強い者はいないし、世界を見ても、勝てる相手の方が多い。

しかし、私よりも強い者が現にいるということは、私はまだ弱いということだ!!

「ええ、十分理解しております。私はまだまだ弱い。更に強くなり、奴を、遠山かなこを捕まえてみせます!!」

理解してないじゃないか…

そんな警視総監の呟きを無視し、決意を新たにした。

## 乙女大乱―女子力競う、料理大会―

―リサ視点―

「遠山かなこ、今度こそ貴様が敗北を味わう番だ!!」  
「今回も私の勝ちだ。」

私を挟み、一触即発の気配、銭形様から、意識を失ってしまいそうな程に放たれる殺気と、余裕の笑みを浮かべるかなこ様に今にも倒れてしまいそうです。

何故、こんな怪物ふたりの間に私が立っているのか。

それは、ご主人様のお部屋に行ったことがきっかけでした。

「ご主人様、これはいったい…」

無惨にも破壊された玄関の扉、ほのかに残るかなこ様の気配。メイドとしての務めを果たすべく、ご主人様のお部屋にやって来た私が見たのは、そんな惨状に茫然と佇むご主人様と、白雪様に理子様やアリア様、そしてレキ様のお姿でした。

茫然とされるご主人様たちが、何が起こったのかを説明して下さいます。

「…モーイ…」

精神が崩壊しそうな説明に、リサはなんとか言葉を絞り出しました。

リサにご主人様たちが説明されたことを整理するに、かなこ様、あのかなこ様と殴り合える、この世のものとは思えない方、銭形様が現れ、ふたりで散々暴れた後、姿を消したということですね。

…リサの理解出来る範疇を超えていますね。

かなこ様の底の見えないお力。その気になれば、殺気だけであのシャーロック卿さえ再起不能に出来そうかなこ様と殴り合うことが出来るというだけで、その銭形様という方が、この世の理を外れた方だと、痛い程分かります。

「ご主人様、まずは扉の修理が先決だと思えます。」

まずやるべきことを進言しました。



リサが交渉し、本来の三分の一迄に抑えた修理費用で扉が修理されている間、リサは部屋の中を整理します。

信じられない怪物ふたりが暴れたにしては、部屋の中は思った程壊れていませんでした。

「ご主人様、この様子だと、今日中に終わりそうにありません。」

荒れた室内の整理をリサは精一杯行いますが、どうにも間に合いそうにありません。本来であれば、ご主人様にお料理を作る予定でしたのに…

「あーもういいぞ、リサ。後はやっておく。暗くなる前に帰つてくれ。」

お優しいご主人様の言葉、

「モーイ!!ご主人様のお優しい配慮は大変嬉しいですが、この様な現状でご主人様をひとりには出来ません!!」

アリア様たちも帰られ、リサとご主人様だけになった部屋で、リサはそう伝えます。

「な、なら、また明日来てくれ。俺はこれから予備校に行かなきゃならんからな。」

焦った様に言うご主人様。残念です、せつかく一晩中ご主人様のお世話を出来ると思っておりましたのに…

しかし、リサはメイド、ご主人様の命令に従う他ありません。

「では、また明日に…」

「ああ、本当にリサには感謝している。」

モーイ!!ご主人様のお褒めの言葉に、リサは歓喜し、明日も頑張ろうと思えます。

頑張るつもりでした。

朝にご主人様の部屋向かい、かなこ様より頂いた部屋の鍵を使い、寝ているご主人様を起こさぬ様に朝食の準備をします。

食事の匂いが室内に漂い始めると、ご主人様が大きな欠伸をし、目覚められます。

「おはようございます、ご主人様。」

「リ、リサ。もう来てたのか…」

朝食を食べ、部屋の片付けをしていると、

「白雪!!何しに来た!!」

「キンちゃん!!私もお手伝いします!!」

白雪様が来訪します。その頃には、部屋の片付けも大方終わっております。

「モーイ!!流石奥様です!!」

「ふふっ、リサはいい子だね。」

白雪様と台所に並び、そんな会話をしながら昼食を作り、ご主人様の座るテーブルに並べていき、食事を始めます。

「美味しい!!」

ご主人様がそう言って下さり、白雪様ふたりで、喜びの笑みを浮かべておりました。

「なにやら旨そうな匂いだな。」

かなこ様、何故いるのですか？

あの恐ろしい程に感じる強者の気配を感じさせずに席に着いているかなこ様に、心底恐怖します。

今までは、如何に隠そうと感じられた、圧倒的強者の気、リサの中に流れる百獣の王の血が、本能を感じ取る、絶対に何者さえも勝てない、最強の気、それを完全に消したかなこ様。気配を察知することさえ不可能となった彼女に、もうなんの言葉も出ません。

「か、かなこ様!!いい、いえ、義姉様!!今すぐお食事をご用意します!!」  
何事もない様に席に着くかなこ様、白雪様は大慌てしてしまいません。

「お、奥様!!私が準備いたしますので、お座り下さい!!」

勿論、私も大慌てです。

「よい、私は食事は済ませて来た。」

そう言つて、ガサリと食卓に袋を置くかなこ様。

スーパリーの袋、様々な食材が入っている様に見えます。

「偶には、愚弟に料理でも作つてやろうと思つたが、不要だった様だな。」

少し残念そうに仰るかなこ様。私たちはとんでもない異なるをし

てしまったのではないのでしょうか…

かなこ様の意向に反する事をしてしまい、白雪様とふたり、顔が青くなりますよ

「姉さんの手料理…」

「ご主人様も顔を青くされております。」

「勘弁してくれ!!そんなものを食べるくらいなら、猫じゃらし食ってる方がましだ!!」

「ご主人様がとんでもない速度で壁に激突します。」

「キンジよ、そんなに私に殴られたかったのか?」

猫じゃらし以下の料理…以前ご主人様が思い出話の様に語ったかなこ様の生焼け肉の話以外にも、何かあるのでしょうか…?

かなこ様へ何度も土下座するご主人様を見かね、思わず飛び出してしまいます。

「か、かなこ様、お、お料理でしたら、リサと一緒に作りませんか?」  
我ながら、とんでもない事を言ってしまったのだと、すぐに理解します。しかし、時すでに遅し、

「おお、そうか!!なら、愚弟を泣かせる程のものを作ってやろう!!」

リサの提案に、すぐに乗っかってしまわれます。

「不味すぎて、普通でも泣く出来だろ…」

「ご主人様の呟きを、聞こえぬ振りをして、台所へかなこ様を誘導します。」

我ながら、信じられぬ程青い顔をしていたでしょう。

「モ、モーイ…流石、かなこ様です。しかし、お料理には包丁を使いましょう…」

手で食材を刻まれるかなこ様に、リサは提言します。

「成程、しかし、こっちの方が切れるのだが?」

そう言つて、右手を見せるかなこ様。仰つていることに間違いはないのですが、根本的に間違っています。人は何故、刃物を生み出したのか、そう考えると、如何にかなこの方が間違っているのか分かる筈です。

勿論、そんな恐ろしいことは言えず、無難な回答をします。

「かなこ様、包丁を使えねば、料理を出来るとは言えません。」  
「そうか、なら仕方ない。」

そう言つて、包丁を握られるかなこ様。  
危なっかしい手捌きで包丁を振るわれます。

「危ない!!」

勢いよく振りかざされた包丁が、かなこ様の左手に落ちて行きま  
す。

「扱い辛いな。少し力を込めれば、柄を握り潰してしまうし、やはり、  
手で切る方がいいな。」

まな板の上に落ちる、包丁の刃、柄から離れ、グニヤリと曲がり、二  
度と使えない状態となつてしまつていきます。信じられない速度で振  
り落とした包丁が左手に当たつたというのに、無傷でそんな事を仰る  
かなこ様。

「ほらな、やっぱり無理なんだよ。」

そう呟いたご主人様の元に、衝撃波が届き、ご主人様が窓を突き  
破つて吹き飛んでいきます。

「私に相応しい包丁が無いのだから仕方あるまい。」

そんなもの、色金で作つた包丁があつたとしても、無理な気がしま  
す…

白雪様とふたりで、かなこ様への地獄の様なお料理教室を繰り広げ  
るます。

何度も心が折れそうになりながらも、なんとか（私と白雪様のふた  
りでお料理を進め、かなこ様の出番を無くす様に努める）被害を最小  
限に食い止めて肉じゃがを作つていきます。

「遠山かなこおーっ!!此処だなあーっ!!」

昨日直したばかりの扉が吹っ飛びました。

「遠山かなこ!!貴様のせいで、減給だ!!この屈辱、絶対に晴らしてやる  
!!」

「料理中だ、後にしろ。」

乱入者の言葉を流し、真剣に食材（肉じゃが用の牛肉）を見つめる  
かなこ様。

「このまま焼いた方が美味しいのではないか？」

そう言つて、肉を指します。

それでは肉じゃががじゃがになってしまいます…

「ふふふ、やはり、貴様に料理など出来る筈は無い!! 所詮貴様は人間兵器、女子力など皆無!! 先に結婚するのは私の様だな!!」

そんなかなこ様を見て、心底安心した様に笑う乱入者、かなこ様にこの様な口を聞けるということは、恐らく、この方があの銭形様ということでしょう。

「ほぎげ、昨夜貴様と私、どちらが女子力とやらが上か、拳で決着を着けたであろう。」

「あの時私は酔っていたし、何より、肉じゃがから肉を抜こうなど、貴様に女子力とやらがあるとは思えぬ!! やはり、私の方が女子力とやらが高いと見える!!」

どちらも壊滅的だと思うのは、私だけではない筈です。勿論、そんな恐ろしいことを口には出しません。というより、出せません。

「ならば、どちらが上か、料理で決着を着けようではないか。」

「望むところだ!!」

なんだか、絶対に良くない方向へと進んでいる気がします…

— キンジ視点 —

「料理とは、食材を選ぶところから始まります。」

姉さんに吹っ飛ばされ、意識が戻ったら、白雪がそんなことを言っている。

「なるほど、食材調達も女子力とやらの見せ所というわけか。」

白雪の言葉に頷き、納得した様に姉さんが言う。その隣で、同じく頷く銭形。なんでまたいるんだ…

「では、まずは食材の調達というわけだな。遠山かなご、貴様に勝ちの目は無い!!最高の食材を持って来てやる!!」

「いや、私の勝ちに決まっている。」

火花を散らし、部屋を飛び出すふたり。いや、ホントなんなのこの状況…

「あ、キンちゃん!!起きたんだね。」

「ご主人様、お怪我はありませんか?」

ふたりが去った後、俺が目覚めたと気づき、白雪とリサが駆け寄ってくる。

「ああ、なんとかな。しかし、どういう状況なんだ?」

勢いよく壁に叩きつけられたのに、なんで骨折どころか、怪我ひとつしてないんだろう、ホント、姉さんは理解出来ん。

「えつとね、キンちゃん—」

白雪の口から語られる、俺が気絶した後の出来事。うん、バカかな?いや、姉さんがバカなのは世界の真理みたいなもんだけど、銭形、お前もか…

理子から聞いた銭形の情報は、東大法学部を首席で卒業する程の秀才の筈なのに、その行動の節々からは、姉さんと同じ匂いがする。

「女子力って、あいつ等に最も足りない能力だろ…」

そんな感想を抱く。ああ、姉さんは違うな。姉さんに一番足りないのは知性だ。

「私の勝ちだ!!遠山かなごおっ!!」

5分後、先に帰ってきたのは銭形。スーパーの袋を掲げ、部屋に飛び込んできた。お前、普通に入って来れないの?

「なんだ、まだ来てないのか。ふふ、速さでは私の勝ちだな。」

勝ち誇るが、お前本当にまともな食材選んだんだろうな?速けりやいいつてもんじゃないぞ。

それから2分後、リサが鼻をすすすと鳴らす。

「血の匂いがします…」

ああ、姉さんだな。

「待たせた。」

扉の吹き飛んだ玄関を、更に吹き飛ばし、姉さんが到着する。

その姿を見て、白雪の顔が青くなり、ふらつ、と貧血の様に倒れそうになる。

マズい、白雪の幼少期のトラウマが蘇ってしまった。

「以前、シベリアを横断した際に見つけていたのだが、以前よりも強く、大きくなっていったのでな、正しく最高の食材だろう。」

姉さんが背負うのは、突然変異としか思えない程大きく育ったグリズリー、グリズリーの平均身長は198cm程、なのにそれは、それの倍以上の大きさだ。

並の大きさのグリズリーでさえ、地上最強の生物と評される程に強いというのに、その数倍大きいそれは、恐らく、ライフルで撃つても勝てる相手では無いだろう。

そんな大物の喉を一突きで仕留めたのか、喉以外に傷は見られない。それを軽々と担ぎ、此処まで往復7分でやって来た我が姉は、やはり何かがおかしい。

「クツ!!しかし、如何にそんな大物といえど、造り手が未熟であれば、意味など無い!!私の勝ち揺るがんとぞ!!」

「ふん、何を勝ったか知らぬが、己の手で狩ってこそその馳走だ。私が勝ったも同然だな。」

お互いに自分の勝利を宣言する。現状だと、銭形の勝ちだな。だって、あんな巨大熊を狩るなんか嫌だもん。

「で、では、お料理を開始しましょう。」

白雪に変わり、場を仕切るリサ。白雪はうなされながら寝ている。素早く台所に向かうふたり。

「邪魔するな!!私が先だ!!狭いんだ、退け!!」

「貴様が退け!!早く捌かねば、鮮度が落ちるだろうが!!」

狭い台所で悪かったな。勝手におっ始めて、文句言うなよ。

ヤカン片手に姉さんを押しやろうとする銭形と、台所どころか、部屋に入りきれない程巨大な熊を置こうとする姉さん。

「か、かなこ様、それは入りきれませんよ…」

見かねたりサが姉さんにそう声をかける。

「仕方ない、私は外で捌いてくる。」

姉さんは澁々姿を消す。

「戻って来た時、貴様の敗北は決定する!!」

銭形はウキウキとコンロに火をかける。

どっちも碌な物が出来る気がしないなあ…

ピーッ!!とお湯が湧いた事を告げるヤカンの音。

「勝負あった!!」

その音を聞き、勝利宣言する銭形。素早くスーパーの袋から取り出したのは、様々なカップ麺。いや、料理って言ってんじゃない…

「ふふっ、遠山かなこ、貴様の敗北まで、後三分だ!!」

まあ、アンタが何か作るよりも、確かに、そっちの方が美味しいだろうけどさ。それでいいのか…

流石のリサも頭を抱えている。

「遠山かなこ、貴様にこれより美味しいものが作れるか!!」

いや、作ったのは日清だろ…

「どうせ、貴様の女子力とやらでは、そんなものだろうと思っておった。」

銭形がお湯を注いで2分、美味そうなカップ麺の匂いが漂いつついた時、姉さんが帰って来た。

「貴様、それは!?!」

驚愕する銭形。それもその筈、姉さんが持って来たのは、誰がどう見ても表面だけが黒焦げになった、元の姿を残したままの肉。

ホント、相変わらず最悪の出来栄えだな。

「捌こうかと思っただが、丸焼きの方が美味そうだと思っただ。まあ、私の勝ちだろうがな。」

何故そんな自信を持てるのか、姉さんの頭の中を覗いてみたいものだ。捌くと言っても、どうせ手刀でぶった切るだけなんだけどさ。

キッチンタイマーが音を鳴らす。カップ麺の完成を告げる音だ。いよいよ実食となる。…これ、誰が食うの?!

「ほれ、キンジ。さっさと食わんと冷めてしまふぞ。」

手刀で熊の手を切り落とし、俺に差し出す。冷めるとかそういう問



題じゃないぞ。だって表面が焦げただけで、ほぼ生肉じゃん!!ほら、血が滴ってるし!!

「私が先だ!!伸びたら勿体無いだろうが!!」

姉さんに対抗する様に、カップ麺を突き出す銭形、ちやっかり自分の分も作ってやがる。

「待て、待ってくれ!!なんで俺が食うことになってるんだよ!!」

カップ麺はいい。金欠の俺にとっては寧ろ有り難い。しかし、姉さんの差し出す生肉は、腹を下す未来しか見えない。

「なんでだど?当然だろう。女子力とやらの上下を決める戦いなのだ、男のお前が決めるべきだろう。」

「そうだ!!」

姉さんと銭形から圧が掛かる。マズい、これはマズい状況だぞ…逃げようにも、このふたりから逃げおおせるなど、ヒステリアモードの俺でも不可能だというのに…

「ほれ、さっさと食わぬか。」

グイグイと血の滴る熊の手を押し付けてくる姉さん。

「だから、私が先だと言っているではないか!!」

カップ麺を押し付ける銭形。スープがかかって熱いんですけど…

「さっさとせぬか!!」

俺の口に、両方共がねじ込まれる。なんなのこいつら…

臭い、獣臭い!!というより、やっぱり完全に生肉だこれ!!そしてその間を縫うように慣れ親しんだカップ麺の味が混ざり…

「不味ついっ!!」

正直な感想が飛び出た。

「なんだと貴様!!」

烈火の如く怒るふたり。いや、正気かお前ら…

「肉だぞ、不味いわけがなからう!!」

生の熊を美味しいと言えるのは姉さんくらいじゃないかな…アンタ、本当に肉ならなんでもいいんだな。

「ラーメンが不味いなど、貴様おかしいのではないか?」

いや、ラーメンは美味しいよ。でも、あの状況で無理やり流し込む

か、普通？

「ご、ご主人様…」

パキパキと拳を鳴らすふたりに恐怖し、俺に縋り付くりサ。すまんな、流石にこのふたり相手では、仮にヒスっても一秒も保たんぞ。

「では聞こう、どっちが上だ？」

「聞く迄もない、私のカップ麺の方が勝ちだ。」

いや、どっちが美味いかで言われれば、圧倒的にカップ麺だけどき、今回は女子力とかいう謎のパラメーター勝負なんだろう？それを文字通り評価するなら…覚悟を決め、口を開く。

「どっちも最低以下だろ。」

少なからずとも、俺の方がまだ料理が出来る自信がある。というより、こいつらののは料理じゃない。

方や狩ってきた熊（熊を狩って来た時点でどうなのかという話なのだが）に火を着けただけ。対するもう一方は、お湯を沸かし、注いだだけだ。

どっちも料理とは言えないだろう。

すうっ、とふたりの目の中に宿る色、光が変わる。ああ、死んだな。そう直感が俺に警告を告げる。

しかし、俺にとっては幸いであり、最悪の方向にふたりの闘志が向かった。

「なるほど、我が愚弟には、私の女子力とやらは理解出来ぬらしいな。」  
「全くだ、やはり、決着はこっちで決める他にないらしい。」

向かい合うふたり、認識出来たのはそこまでだった。一瞬で姿を消したふたりが、何処へ行ったのか、俺が知る由もない。

しかし、その2時間後、太平洋沖で強烈な衝撃波が観測されたと、後に冷泉から聞かされることとなる。



女子力とはなんでしよう？

かなこ様と銭形様、共にこの世の理から外れられた、規格外の生物の共演を目の前に、お二方の口から時折出てくる女子力というワードが、不可思議なものに感じられてしまいます。

そもそも、本来の意味はなんなのか、それさえ分からなくなってしまいます。

そしてお二方の辿り着いた結論は、拳での勝負だったのでしよう。意識が遠のく程の鬪気をぶつけ合うお二人は、姿を消しました。

リサが思ったこと、それは、お二人はリサとはつ違い、誰かに守られる必要も、守られたいという思いもないのでしよう。逆に、あのお二人を守れる程強い方がおられるとしたら、それこそ世界は終焉を迎えるのではないのでしょうか？

リサは悪いメイドです。かなこ様は、私を家族の一員と仰って下さったお優しく、大切な方。

それだというのに、かなこ様の底知れぬ、それでも尚分かる圧倒的な力を恐ろしく感じてしまうのですから…

外伝：緋弾のエリア if・if―虎と竜、武偵高生徒編―

―遠山かなこ視点―

武偵高、本来であれば、武偵小、中学校と通うつもりだったが、父上の意向で武偵高からの進学となった。

まあ、そのお陰で、みすずと知り合い、友人となったのだから良かったとも言える。

しかし、そんな念願叶って入学した東京武偵高だが…

「つまらんな…」

私に最も相応しいと思いついた強襲科、しかし、上級生だろうと、教官だろうと、皆私の寸止めの拳の気に当てられただけで倒れてしまう。

『武偵高は猛者と野獣が集う場所、か弱く可愛いかなこが行く様な場所じゃない。』

何度も入学反対した父上は、そう私を諭していたが…

「か弱い私よりも弱いとは…」

なんだか心配になってくる。幼き頃より、何度も私の拳骨に、気絶しつつ立ち上がり、文句を垂れながらも元気に逃げ回っていた弟たちの方がよっぽど頑丈ではないか!!

「入学早々やることじゃないわよ。」

遠くで見学していたみすずがそう言いながら私の側にやって来る。「父上が言っていたのだ。武偵高は猛者揃い、か弱き私など、あつという間に食われると。故に将来の夫がおるやもしれぬと少し張り切ったが…相応しき者はおらぬな。」

そう、強き者こそ理想の恋人であり、理想の旦那だ。しかし、私をときめかせる者がいないのだな。

「本気で自分がか弱いと思っていることが、最大の問題なのよね…」

何故かみすずが溜息を吐く。私はか弱き乙女だぞ、父上がそう言っ

ていたのだから間違いない。

「それで、どうするのよ。明日から、誰も組み手も模擬戦もしてくれないわよ。」

「なんだと!!では私は、何しに武偵高に来たというのだ!!」

「猛者たちと毎日戦えると思いい、武偵高に入学したというのに……しかし、確かにみすずの言う通りだな。なんせ、強襲科の全員と教官を纏めて倒したのだ、ここに私よりも強い者はいない。」

それは実感する。

「つまらぬ……やめて世界を旅する。」

「バカなの? ああ、ごめんなさい、バカだったわね。せっかく壮大な親子喧嘩までして入学した武偵高なのに、もうやめるの?」

「バカと言うな!! 私はバカではないぞ!!」

みすずの奴、事ある毎に私をバカ呼ばわりしおつて!!

「そう、バカじゃないなら、武偵高に残るわよね?」

「当たり前だ!! 私はバカではないからな!!」

私はバカではないから、やめたりせん!!……なんだかみすずの掌上で上手く転がされた気がするが、気の所為だろう。

こうして、私の武偵高生としての日々が始まった。

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

|| || || ||

— 狐崎みすず視点 —

「バカなの、やり過ぎだよ……」

東京武偵高の受験日。専科は違えど、一般中からの受験生ということで一緒に受験に向かった私たち。かなこにとっては夢に見た受験日だというのに、何故その張本人が寝坊するのかしら……

まあ、緊張感が無いのはいつものことね。

筆記試験始まると同時に爆睡するかなこの姿を見て、溜息を吐きながら問題を解いていく。

流石都内最底辺の偏差値を誇る武偵高。簡単過ぎるわね。

「終わったのか？」

筆記試験が終わったというのに、目覚めないかなこを起こすと、伸びをしながらそんなことを言う。

「ええ、終わったわよ。寝坊してきた癖に、試験で爆睡なんて出来るのはバカなことだよ。」

本当に受かる気があるのかしら？かなこの約束だから受験した武偵高だけど、私だけ受かってても意味無いのよ。

「バカなこと言うな。しかし、武偵高とは武人を目指す場であろう？難しい勉強など不要だ。」

自信満々に言い切るかなこ。いろいろと不安しかないわね。

「なら精々頑張りなさい。如何に武偵高とはいえ、筆記試験オール0点じゃ、余程のことが無い限り落ちるわよ。」

そう発破をかけた。それがいけなかった。

かなこの異常なまでの強さは、ここにいる全員で掛かってても傷一つ負わせることなど出来ないし、私は知っているのだから。

私の言葉に奮起したかなこは凄かった、というより、全ての受験生が気の毒になるほどの力を見せた。

格闘術試験では、早々にリタイアした私を尻目に、振るう拳から放たれる衝撃波で体育館を半壊させ、模擬戦闘では、数秒で試験場となるビルから気絶した受験生と教官たちを放り出し、ビルを指先ひとつで瓦礫の山に変えた。

「バカなこと、やり過ぎだよ……」

その光景を見ながら、眉間を指で押さえて溜息を吐く。

あのバカに加減させなきゃこうなるなんて、とうの昔から分かっていたのに……

流石に落ちたわね。本来の第一志望校の受験に専念しましょう。……かなこは……中卒ね、しようがないけど、あの子ならなんとか生きて

いくでしよう。

そう思っていた。

「武偵高っていうのは、私の予想を超える異常な場所の様ね。」

合格通知書を嬉しそうに持って我が家にやって来たかなこに、そう感想を伝えた。

「ん？そうだな。武偵高には猛者が集うらしいからな、今から楽しみだ。」

その猛者たちを虫を払うよりも容易く一瞬で戦闘不能にしたというのにことに、何故気付いていないのかしら…

まあ、かなこが楽しそうだし、どうでもいいわね。

「なら、同じ学校に通えるわね。」

私の下にも届いた合格通知書を見せると、私に抱きついて喜ぶかなこ。

「離さないよ。」

「照れずともよいではないか。みすずは小さくて抱きやすい。」

「小さくはないわ、かなこが大きいよ。それに、照れてるんじゃないわよ。不快な感触が顔に当たってるのが気に入らないだけ。」

大きく育った柔らかい双丘が押し当てられ、不愉快になる。なんで私のは大きくなるのかしら？お母さんはそこそこあるというのに…

何がいけないのかしら？日頃の行い？だとしたら諦めるしかないわね。

探偵科の私とは違い、かなこは『明日無き学科』とも評される強襲科を選択している。

そして迎えた入学初日、入学試験で大暴れしたかなこは、当然の如く注目株となっているのだが、またしてもかなこはやらかした。

それは最早、注目株などという表現から、頂点という表現に変わる程…

物騒で血の気が多い強襲科、そんな学科の三年ともなれば、纏う空気さえ普通のそれとはかけ離れてくる。そんな連中を抑え付け、従わせる教諭たちは、その道の第一線級以上の実力者ばかり。

そんな普通じゃ有り得ない集団相手に、たったひとり、素手のみで、それも圧倒的力量差を見せつけての圧勝という伝説で始まったかなこの武偵高生活は、初日で終了を迎えようとしていた。

「つまらぬ…やめて世界を旅する。」

己よりも強い者がいないのだと理解したかなこは、そんな事を言い出す。

同じ学校に通う為に入学したというのに、そんな理由で終了？巫山戯るんじゃないわよ!!

「バカなの？ああ、ごめんなさい、バカだったわね。せつかく壮大な親子喧嘩までして入学した武偵高なのに、もうやめるの?」

かなこは、父親の反対を押し切って入学している。武偵高生となれば、一人暮らしとなるし、何より物騒な世界だ。正直、ドン引きする程娘であるかなこを溺愛している彼からすれば、身を割かれる思いだっただろう。だって、今だにかなこの携帯が鳴り止まないのだから。

まあ、散々反対しておきながら、武偵高のセーラー服を着たかなこの記念写真をメモリーがいっぱいになるほど撮っていたんだけど。

「バカと言わない!!私はバカではないぞ!!」

単純なかなこは、あっさりと前言を撤回する。

そう、それでいいのよ。かなこ、貴女の才能を最大限に活かせるのは、武偵や傭兵、そういった力の世界。貴女と私、お互いを補い合うふたりなら、なんだって出来る気がするの。そうでしょう?かなこ。

武偵高での生活、私には水が合っていたらしい。一年目から、相手を見抜く力を養う探偵科、その逆、相手を欺く諜報科、分析力を磨く鑑識科、それらを兼科し、全てを最大限学び、私本来の才能を伸ばしていく。

そんな片手間で、私とかなこのたったふたりのチームは、数々の依頼をこなしていく。それも、ハイランクの依頼ばかり。

「狐崎、留学の話が来ているぞ。」

教務部からそんな通達が来た。

「かなこ私は唯一無二のチームメイトです。彼女と一緒に無けれ



ば、お断りします。」

「アイツを海外に出せるか!! 国際問題じゃ済まんぞ!!」

そりゃそうでしょうね。でもその言葉に偽りは無い。かなこと一緒じゃなきや嫌なのよ。

「それじゃあ、この話は無かったことでお願いします。」

「狐崎、これは教務部からの通達だぞ?」

要は、お願いではなく命令だと言いたいのでしようけど…

「かなこ、どう思う?」

強襲科でやることの無いかなこは、いつも私の影にいる。勿論、本当に影の中にいるわけではなく、誰にも気配を察知されずに何処かで見守ってくれている。

「みずずは嫌なのだろう? なら行かなくていいと思うぞ。無理矢理にでも連れて行こうという者がいるのなら、私が強めに殴ってやるから安心しろ。」

教諭言葉の裏など、全く理解してないかなこは、なんでも無いことだと言つてのける。

「わ、分かった!! 帰っていいぞ!! この話は無かったことにしておく!!」  
顔を青くし、慌ててそう言う教諭。かなこの強めの拳、それは実質死刑執行と変わらないということを理解しているからの焦りだろう。

「なら、失礼します。そういう話は、ふたり一緒の場合であれば、喜んでお受けしますよ。」

かなこにとって、武偵高程度の依頼ではもの足りるわけがない。いっそ、海外に打って出るのもひとつの手ではあるのだけど…

「何処に行けと言われていたのだ?」

「イギリスよ。」

「なるほど、それは何処だ?」

こんな調子のかなこを海外に連れて行って、大事にならないわけが無い。だからまだお預けね。





なんなの!!こいつ!!気に入らない!!

入学試験、筆記試験で爆睡するブロンドヘアの受験生に対して抱いた感想。

悔しいけど、受験会場に少し遅めに入って来た瞬間、周囲がざわめく程の美少女。それは認めましょう。

だけど、ミス神奈川武偵中で、強襲科主席で卒業した私を差し置いて注目されるのは気に入らない!!

なによ!!見た目だけでしょ!!

それに、見た目だけなら、オーストリア人のママと、日本有数の巨大財閥企業である竜宮グループの総帥たるパパの血をひく私だって負けてません!!一般中だからってだけで注目されてるだけだわ!!

そんな気に入らない女は、筆記試験が始まると同時に、爆睡する。なによこの女!!何しに来たのよ!!

結局、その女が試験中に目覚めることはなかった。筆記試験終了後、一般中の制服(その女とは制服が違っていた)の少女がその女を起こし、一緒に次の実技試験会場へと向かって行くのを見ていた。

一般中の奴ら、武偵のやり方教えてあげるわ!!

そう張り切っていたのに::

なんなのよ!!こいつ!!おかしいでしょ!!

最初の格闘術の試験。得意のCCCで試験相手の受験生を圧倒していた。

あの女じゃなかったのは残念ではありますが、まあ、武偵の世界の片鱗は見せれたでしょう。

そう思っていたのに::

あの女の番、どんなものか見てみましょう。そう思って見ていた格闘試験は、開始二秒で

「退避ーっ!!」

試験官の声が響き渡ると同時に、半壊する体育館。

拳、あの女の拳から放たれた衝撃波がそうさせた::違う、違いますわ!!あれはただの建物の老朽化!!そうに決まっています!!パパに言って、修繕費用を寄付するとしましよう。

やはり、私は間違つてなかった。あの女は、射撃はダメダメ（引き金さえ引けてなかった）だし、きつと、偶然、体育館の崩壊と、あの女の正拳突きของ タイミングが重なっただけなのよ!!

そう思いこむことが出来たのは、模擬戦闘が行われる迄だった。

偶然あの女と同じグループになった私は、開始のブザー音を待つ。隠れることも思いつかないのか、丸見えの位置に仁王立ちするあの女に銃口を向け、その時を待った。

ブーッ!!という、開始を告げるブザー音、その音と同時に弾丸を放つ。無様に、地に伏しなさい!!

しかし、弾丸が彼女を捉えることは無かった。そもそも、そこに彼女の姿は無かった。

「ひとり目。」

誰に聞かせる訳ではなく、ただカウントする様に呟く女の超えると同時に世界が真っ暗になった。

目覚めた時、試験場だった筈のビルは無く、あるのは瓦礫の山と、死屍累々と倒れる受験生たち。

「遠山かなこ。」

気に入らない女の名を知るのは、悔しさに満ちたまま迎えた、東京武偵高入学式の日だった。

入学時の強襲科主席候補として挙がった名前、そこには、私の名前どころか、たったひとりを除き、他の名前は無かった。

『遠山かなこ』

入学試験で圧倒的な力を見せた一般中からの入学生。筆記も射撃も壊滅状態というのに、ただ純粹な力だけでその地位に座る者。

それがあの女だと、理解するのに、少しの時間も要らなかった。

入学式終了後、容赦無く行われる強襲科オリエンテーション、上下関係を叩き込む上級生と教官による暴力の祭典。そんな、絶対に勝てない筈の催しで、唯一人、愉しそうな笑みを浮かべ、一年生諸共、一瞬で捻じ伏せた武偵高の伝説、遠山かなこ。

彼女と私の因縁の始まりだった。

外伝：緋弾のARIA if・if―虎と竜、武偵高生徒編―

―竜宮アイラ視点―

とにかく気に入らない!!

「アイラ様、おやめください!!」

取り巻きの生徒たちが必死に私をとめるが、入学して一ヶ月、ここまですつと我慢していたのだが、やはり限界というものがある。

「うるさい!!」

取り巻きを一蹴し、遠山かなこに詰め寄る。

「遠山かなこ!!貴女に勝負を申し込むわ!!」

ボケつと自分の席で外を眺めていた彼女の机を叩き、そう宣言する。

「…ん?おお!!構わぬぞ。」

私の宣言まで、周囲のことなど心底興味が無かったのか、ワンテンポ遅れてそうあっさりと受諾する。

「ところで、お前は誰だ?」

知らない相手からの勝負を、そんなにもあっさり受けたわね…というより!!

「私のことを知らないですつて!!強襲科Aランクの竜宮アイラを知らないなんて、許されないわよ!!というより、同じクラスで隣の席なんだから、それくらい覚えておきなさいよ!!」

最も、遠山かなこは、教室にいる間は基本爆睡しているが…

「そうなのか?まあ、そんなことはどうでもいい。さっさと勝負するとうしよう。」

私の言葉は、彼女の耳から耳を通り抜けているのか?という程に、関心さえ示さずにそう言っただけのける。

「そうね、白黒はつきりつけければ、貴女のその意識も変わることでしよう。」

入学試験、そして入学初日に見せた彼女の力、それを信じきることは出来ない。何かの偶然が重なったのだ!!私がN.O.1ではない、そんなの納得出来ない!!

「アイラ様…今からでもおやめになった方が…」

取り巻きであり、代々我が竜宮家に仕える侍女である瀬木苗流せぎのうるがそういう言いながら、私の戦支度をする。竜宮一族の遺産、分かっているだけでも、千年近く前から受け継がれて来た、竜宮家の戦装束。対遠山かなこ用に持ち出した完全装備で挑む。

「これだけの装備に、完全無欠の私、これで負けたのなら、竜宮一族、いえ、人類の敗北と言っても過言ではないわ!!」

竜宮家の納屋、その中に仕舞われていた武装。ご先祖様たちは一体何と戦ってきたのか、と、一族の嫡子である私でさえ疑問に思う程の武装を身に着け、そう宣言する。少し胸が窮屈だが、あの女を地に伏させる為なら仕方ない。

いつ造られたのか、誰が何を意図して造ったのか、パパやお祖父様に聴いても分からなかった一族秘伝の武装、以前、好奇心で身に着けたそれは、私の持つある能力と恐ろしい程マッチしていた。

失われた竜宮の血。そんなことを言われ続けた竜宮家。嘗ての竜宮家は、正しく竜の家系、他を圧倒する伝説の生物たる竜を彷彿させる能力を有していたと聞くが、それは、何百年も前に失われてしまっていた。

そんな中、その失われた血が宿ったと、一族が狂喜乱舞する力持つて生まれたのが私、竜宮アイラよ!!

遠山かなこがなによ!!あの気に入らない女が虎なら、私は竜!!負ける筈がないわ!!

「遠山かなこ、貴女が虎なら、私は竜。竜宮の力、その身に叩き込んであげるわ!!」

装束に武器、完全装備で臨む私に対し、遠山かなこは武偵高のセーラー服のまま立っている。

「うむ、楽しみだな。」

そう言って、グーツとひとつ伸びをする彼女。それは、肉食動物が、

獲物を追う前にやる、準備運動の様に思えた。

「覚悟なさい!!」

秘蔵の大太刀を振るう。太刀が真紅の炎を纏い、遠山かなこを襲う。

しかし、鎧袖一触の一太刀は、容易に躲される。

「摩訶不思議な太刀だな。」

「これは太刀の力ではないわよ。私自身の能力。竜宮家は竜の一族。竜の血は、こんなものじゃないわよ!!」

刃を返し、二の太刀を振るう。遠山かなこが躲す先に炎を吐く。

「なるほど、竜か…鬼なら倒したことはあるが、竜は初めてだな。」

直撃した筈の炎を、左腕の一振りで消し去りそう言う彼女。

「鬼?そんなものと竜を一緒にしないでくださいるかしら。竜は強く、気高く、美しく、そして何より高貴なのよ!!」

一族秘伝の武装の力を解放すると、装束から翼が生え、私の身体は空を翔ける。

上空からの攻撃、所詮人間の遠山かなこには届かない世界よ!!

竜の力を持つ私は、戦車よりも硬く、そして強い。当然、発揮する力は、人間如きが発揮出来るその比ではない。それが空を舞うのだ、生身で勝てる相手など、いる筈がない!!

「空中戦か、久しぶりだな。」

「待ちなさい!!なんで貴女浮けるのよ!!」

何故か目の前に遠山かなこがいる。翼を持たぬ彼女が何故浮くことが出来るのよ!!

「浮くくらい、誰でも出来るのではないのか?」

駄目だ、この女の言っている意味が分からない。誰でも飛べるのなら、人類は飛行機も気球も作らなかつた。辿り着けぬからこそ憧れ、そこを目指したからこそ、人は大空を夢見て飛行する術を開発したのだ。

空は特別な場所、人の身のみで辿り着くのは選ばれた者だけ、そう!!それこそ私の様に!!

「この雌牛!!地に落としてあげるわ!!」



「誰が雌牛だ!!」

私こそ至高で最高のプロポーション。それよりも大きいこの女は、雌牛だわ!!

右手に握った大太刀と、左手に宿る竜の爪、口からは火炎を吐き、果敢に攻めたてる。

「このホルスタイン!!ステーキにして差し上げますわ!!」

武偵らしくないと、抑えてきた本来の口調に戻り始める。

「貴様、私を虎と言ったり、牛と言ったり、なんなのだ!!私は人間だ!!」  
少なくとも、彼女の言い分は、大多数の人間に否定されるだろう。空を駆け、竜の攻撃を蠅を払う様に容易くあしらう彼女は、竜の血を宿す私から見ても人間離れしている。

「うるさいですわ!!竜は最強!!その血を宿す私が最強で最高!!地を這う虎や、家畜と成り下がった雌牛が、私と同じ空を翔けるなど、許されませんわ!!」

「だから、誰が雌牛だ!!好きで大きくなったわけではない!!私だって、邪魔だと思っておるのに、勝手に大きくなるのだから仕方あるまい!!」

私の攻撃を払い、距離を詰めてくる。

「牛女!!トドメですわ!!」

渾身の一撃、巨竜が放った最高の一撃、私が放てる最高の一撃だった。

「遅いな…まるで牛歩、貴様の方が雌牛だ。」

右脚の一閃、その威力と衝撃で、大太刀は砕け、柄は右手を離れる。「地に落ちる雌牛はお前だったな、竜宮よ。」

世界が真つ暗になる。竜の鱗、最強で最高たる私を撃ち抜く拳は、振りかぶったわけではなく、添えただけの様な、力を込めないものだった。

「アイラ様!!」

目を開けた私を見て、歓喜の表情と共に私の名を呼ぶ苗流。

「負けたのね…竜、竜宮の嫡子たる私が、あんなホルスタイン如きに…」

襲いかかる敗北感。

「アイラ様…その…」

私にかける言葉を探しているのか、慌てふためく苗流の顔。それを見て、湧いてくるのは対抗心。

「いいですわ、今日のところは負けを認めるとしましょう。ですが、この世で最も美しく、強いのはこの私!! 絶対に私の前に跪かせ、敗北宣言をさせてあげますわ!!」

高笑いし、最強たる筈のこの身を超越る怪物を跪かせ、真の最強となる宣言をする。

遠山かなこ、枕を高くして寝ることなど、金輪際出来ないと知りなさい!!

|||||  
|||||  
|||||

— 狐崎みずず視点 —

類は友を呼ぶ、そんな諺があるけど、本当にその通りね。

かなこに付き纏う連中に、まともな者はいない。

そんなかなこの第一の友人である私がその筆頭なのだろうけど、それを差し置いても、世間一般の常識から外れたみんなの頭のネジが吹っ飛んだ連中ばかりが寄ってくる。

「遠山かなこ!! 今日こそ私に跪く日ですわよ!!」

その最たる例が彼女、竜宮アイラだ。

輝く様な金髪に、スラリと長く伸びた脚、かなこよりは小さいが、かなり大きい胸に引き締まった腰まわり。

彼女を見た全員が全員、絶世の美少女と評するであろう顔立ち。

おまけに、日本有数の巨大財閥の嫡子であり、頭脳明晰で並外れた身体能力、正しく非の打ち所がない筈なのだが、常軌を逸したナルシストで、何事もナンバーワンでなければ納得出来ないという自己愛の異常に強い人物だ。

「またお前か…流石に飽きてきたぞ…」

あのかなこをウンザリさせる程、暇さえあれば勝負を挑む竜宮。かなこの姿が見えれば、必ずそう言っつて勝負を挑み、その度にワンパンで沈められている。

「今日こそ貴女をホルスタインらしく、無様に鳴かせてみせますわ!!」  
私からすれば、貴女も十分乳牛よ。

「アイラ様あ…もうやめましようよお…」

彼女のお付きである瀬木苗流が、心労で疲れ切った顔と口調でそう言うのも、見慣れた光景となっている。

「苗流!!貴女、この私、竜宮アイラがこんな雌牛に負けっぱなしでいいと言うの!!」

彼女の返しもお決まりで…

「誰が雌牛だ!!」

「ゲフツ!!」

「ああ!!アイラ様あ!!」

かなこが怒り、竜宮吹き飛ばされるまでがお決まりのパターンとなっている。

こう見ると、なんだか竜宮が弱く見えるけど、竜宮は全力であれば、現在の武偵高の一年生では、かなこの次に強いのは間違いない。そもそも、かなこが異次元にいるから、実質一位ともいえる。

一度、毎度見事に、かなこにやられる竜宮をナメて、戦いを挑んだ強襲科の生徒は、完膚なきまでに叩きのめされていた。

竜宮の場合、相手が悪過ぎるだけで、普通にSランクの中でも上位クラスの実力者なのだ。

最も、彼女の目立ちたがりな性格と、異常なまでに高いプライドで減点され、Aランクということになっているが。

「毎度、飽きないものね。」

「全くだ、その根性は評価するが、流石に毎日何回もこれでは、飽きてきたぞ。あやつ、毎度私を雌牛と言っておつて!!」

「プンプンと怒るかなこ。」

「なら、一回くらい負けてあげれば? そうすればもう来なくなるわよ。」

彼女の場合、結局、勝ち誇って毎日やって来そうだけど。

「如何なる理由があれば、わざと負けるなど出来ぬ!!」

そういう、融通の効かない不器用さは、きっと彼女と一緒になんだろうね。この無意味な戦いは、これから卒業まで、ずっと続くのかしら?」

まあ、どうでもいいけど。

「ねえ、かなこ。今回の依頼の帰り道に、素晴らしい喫茶店を見つけたわ。こだわりの紅茶とセ〇・サターンを愛する喫茶店、最高だと思わない?」

私の好きなものを両方提供するという、素晴らしい店、立ち寄らないうという選択肢は無い。

「やだ、ハンバーグがいい。今回は、私が決める番だ。」

全く、融通が効かないわね。

「その喫茶店、ハンバーグもあるわ。決まりね。」

「待て、私はもつとがつつりとしたのがいい!!」

乙女らしからぬリクエストを無視し、決定する。

「いいか、みすずの我儘に付き合うのだ、絶対に三つは食べるからな!!」

「しようがないわね。一皿は奢るわよ。」

そう言いながら、武検でさえ手に負えない様な強敵の元に向かう。今回得る報酬からすれば、安いものよ。

武偵高に入学し、始まった一人暮らし。私たちふたりに、自炊という選択は無いので、必然的に外食に頼る私たちは、如何なる依頼や騒動よりも、夕飯のメニューの方が大事だった。

|||||

↳外・外伝―娘を思う静かなる鬼―↳

―遠山金叉視点―

「ちちうえ。」

拙い言い方、しかし、あどけなく愛らしい。駆け寄ってくる、愛娘。

「父上。」

小学生になり、初めて友達が出来たと嬉しそうに言う姿。

「父上。」

親の鼻肩目もあるのだろうが、元々整っていた顔立ちは、体型と共に、徐々に大人の女性へと近づいてきた。あまりにも魅力的で、悪い虫が見つからないか、心配になる中学校の入学式。

そして…

「父上!!」

世界で一番可愛く、美しい我が娘は、絶賛反抗期を迎えていた。

「かなこ、何度も言っているだろう。武偵高なんて物騒なところに、か弱く、可愛いお前が入ってしまうえば、あつという間に野獣共の餌食になる。何も意地悪で言っているんじゃないんだ。」

武偵高を受験したがるかなこを、なんとか説得しようとするも、普段は聞き分けの良いかなこが、絶対に譲ろうとしない。

「ならば尚の事行かねばならぬ!!私は、私よりも強い男に会いたいのだ!!」

そんな奴、この世に存在しない気がする…しかし、万が一ということもある。もし、そんな奴がいたら、俺はかなこを守る自信は無い。

だって、かなこは俺よりも遙かに強くなるから。

しかし、可愛い愛娘に傷がつくなど耐えられるものか!!ましてや傷ものにもでもされてみる、例えこの身が塵一つ残らないとしても、そいつを地獄に送ってやる!!

だが、そもそも何故、かなこはそんなことを思い始めたのだろうか? 「かなこ、何故強い男に会いたいんだ?」

まさかな…最悪の理由を想定してしまい、思わずDEを己の頭に撃とうとしてしまいそうになるのを、首を振って否定する。

「私の旦那となる者を探す為だ。父上には関係ない。」

想像した最悪よりも更に悪い回答だった。彼氏どころか、男友達でさえ赦せないのに、旦那、つまり夫。

「だ、駄目だ!!絶対に駄目だ!!絶対に認めないぞ!!」

かなこを嫁にやるだ!!絶対に認めん!!俺の目の黒い内、嫌、仮に死のうと、記憶を失おうと許さん!!

「父上、何故だ!!何故認めてくれぬのだ!!もういい!!父上なんか嫌いだ!!」

かなこは、とんでもない殺気を撒き散らしながら、家を飛び出してしまった。

「き、嫌い…」

どうしよう、娘に嫌われてしまった…かなこと同じ年頃の娘を持つ同僚が、

「娘が反抗期で辛い。」

と言っていたが、これ程のダメージとは…今まで数々の修羅場を潜り、数多の傷を負ってきたが、一番堪えたかもしれない…

その日、かなこが帰ってくることはなかった。みすずちゃんの家に泊まっていると、彼女から連絡があり、とりあえず一安心したが、このまま帰って来なくなっただうしよう…

不良となったかなこなど、手を付けられない化物が誕生してしまうぞ…最悪、日本が、いや、世界が壊滅してしまう…

「かなこ…」

職場で、無意識に名前を呟いてしまう。

「どうしたんですか？金叉さん、今日は顔色が悪い悪いですよ。」  
後輩が心配そうに聞いてくる。

「娘が家出してしまった。」  
プライベートな問題を持ち込んで良い仕事ではないというのに、情けない限りだ。

職場内、上司や俺と歳の近い同僚が、ビクツと反応し、緊張感が漂う。

「十五歳でしたっけ？絶賛反抗期ですね。」

なんの緊張もなく、そう言う後輩。ああ、そうか、こいつにはかたこを紹介したことは無かったな。

「金叉くん、家出って、大丈夫なのかい…」

俺も考えた最悪のルート、非行少女化したかなこを想像したのか、上司が青い顔をして聞いてくる。

「今は友達の家に泊まっているそうです。そうでなければ、仕事どころではありませんから。」

かなこの居場所が分からなくなってしまうていたら、それこそ、超緊急事態であり、俺どころか、武装検事や公安、武偵庁が総出で捜索しなければならぬだろう。正に仕事どころではない状況だ。

「親バカってやつですね。『静かなる鬼』も娘さんは可愛いんですね。」  
状況の分かっていない後輩がそんなことを言う。かなこは可愛いに決まっている。そんなことも分からないとは、一度沈めてやらねばならぬな…おっと、そうじゃない。

「武偵高を受験すると言って聞かず、喧嘩になりました…」

経緯を上司に伝える。報告というよりも、相談に近かったが…

「金叉くん、私も娘がいるし、気持ちも分かる。しかし、冷静に考えてくれ。君よりも強い高校生が日本にいるかい？」

全力で首を振る後輩。

「しかし、万が一という可能性が!!」

かなこという例外がいるのだ、娘を愛する父親として、看過できない。

「確かに、君よりも強い者が現れるかもしれない。そんな可能性は否

定出来ないが、私には、かなこちゃんよりも強い者が現れる可能性が全く見えないんだ。というより、現れてはいけないと思うんだ。武偵高を受験させるだけで、多くが救われるんだ。」

つまり、かなこはずっとお嫁に行くことはないということか…

「分かりました。もう一度話し合ってみます。」

「そうしてくれると、本当に助かるよ。」

みずずちゃんに連絡を取り、かなこが家に帰る様に誘導して貰う。妻、かなこにとつての母が亡くなって以来、かなこを最も上手く言い聞かせれるのは、悔しいがみずずちゃんだ。

彼女なら、家に帰る様に上手く言いくるめてくれるだろう。

珍しく定時で上がる事が出来、実家に辿り着くと、みずずちゃんからの指示通り、肉の焼ける美味しそうな匂いが玄関にまで届いている。

「ただいま。」

「金叉、おかえり。かなこはまだだよ。」

まだ帰っていないのか…

「大丈夫、あの子は悪いことをする子じゃないわよ。」

そうだな…なんせ、世界一可愛い娘だからな。

食卓では食事の準備が出来ている。食べ盛りの方が息子たちは、夕飯を待ち遠しいのか、そわそわしている。

かなこを待たずに、食べさせてやった方がいいかもしれないな。

「いただきます!!」

元気よくキンジがそう手を合わせ、ご馳走に箸を伸ばす。

「ハンバーグ：みずずの言った通りだ。」

音も気配もなく、食卓に座るかなこ。

「げえっ!!姉さん、帰ってきたのかよ!!」

箸を伸ばしていたキンジが、突如現れたかなこの姿を見て、そう言う。

「キンジ、死にたいのか…」

そんなキンジに、キンイチが顔を青くしてそう言う。

「キンジ、姉に向かって随分な言い様だな。拳骨をくれてやる。」



止める間も無く、光の様な速さでキンジが気絶する。

「かなこ!!それよりも先に、ただいま、でしょ!!それに手は洗ったの!?  
アంతはお姉ちゃんなんだから、もつとしつかりしなさい!!」

母さんに雷を落とされ、

「ごめんなさい…ただいま。手を洗ってくる。」

一瞬、俺と目が合い、直ぐに顔を背ける。まだ怒っているのか：  
シヨックを受けるが、洗面所に向かう瞬間に見えたその目には、怒り  
の感情は見えなかった。

「いただきます。」

行儀良く手を合わせ、ハンバーグに箸を伸ばすかなこ。

「かなこ、その前に言うことがあるんじゃないかしら?」

母さんが、かなこの俯きがちな目を見てそう言う。

「うつ…」

かなこの箸が止まる。暫しの沈黙。言葉を紡ぎたいが、恥じらい  
と、意地の様なものが邪魔しているのか、中々、かなこから言葉が出  
ない。

「かなこ…」

「父上…嫌いなど言ってごめんなさい…本当は父上は嫌いじゃない  
し、大切な家族で好きだ。」

愛娘から好きだと言われたのはいつ以来だろう。

一番最初は三歳の時だ。

「かなこ? パパのこと好き?」

妻が俺を指し、そう質問した。

「パパとやらはわからないけど、ちちうえは好き。」

結局、パパとは呼んでくれなかったな。

「かなこは何が好き?」

妻が五歳のかなこ尋ねる。

「お肉。あとハンバーグ。」

「そうか、かなこは肉が好きだな。」

可愛いかなこの答えに、頭を撫でながらそう言う。

「うん、好き。」

「じゃあ、パパとハンバーグ、どっちが好きだ？」

きつと、俺と答えるのだと信じていた。

「んつと…ハンバーグ。」

シヨックだった。そう答えて、妻にしがみつき、ハンバーグをねだるかなこ。その間、俺は自室に籠もり、本気で泣いた。

いかん、折角の幸福な時間だというのに、悲しい思い出など不要だ！！

「かなこ、父さんもかなこが大好きだ。だから、かなこの夢を応援したいが、反対する気持ちも分かってくれ。」

「分かっている。みすずからも言われた。父上は私を大切に思っているからそう言うのだと。」

みすずちゃん、ありがとう。今度何か奢ってあげよう。でも、あの子容赦ないからなあ…

「かなこ、分かってくれたんだな。」

「うむ、だから、このハンバーグを食べたら、父上と爺様を倒す。ふたり同時に相手し、勝ったら、武偵高に行っても問題ないと分かる筈だとみすずが言ってた。」

ごめん、みすずちゃん。なんてこと言ってるの？父さんなんか、お茶吹き出して…

「待て、かなこ!!なんでそうなるんだ!?!」

「父上や爺様よりも強い者は滅多にいないそうではないか。なら、そのふたりを同時に相手し、勝ったなら、私は、武偵高行っても大丈夫ということだ。」

そう言つてハンバーグを口に運び、満面の笑みを浮かべるかなこ。可愛いなあ…じゃない!!

最悪、俺と父さん、ふたり揃ってあの世行きになるぞ!!

その日、後に武装検事たちの間で語り継がれることとなった『史上最悪の親子喧嘩』と呼ばれる闘いが、巢鴨で巻き起こる。

遠山家秘伝の奥義の限りとはヒステリアモードの限界を尽くし、かなこに立ち向かう俺と父さん。息子たちは、震えてその闘いを見守っていた。

そして、その闘いの果てを見た息子たちの残した言葉、

「姉さんはヤバイ。」

この日以降、息子たちは姉であるかなこに、決して逆らうことは無くなった。

外伝：緋弾のエリア i f . i f — 虎と竜、武偵高生徒  
編Ⅲ—

— 狐崎みすず視点 —

武偵高入学以来、かなこと共に、割の良い依頼の数々をこなし、貯金も随分と貯まった一年を過ごし、二年生に進級した。

正直、かなこが進級出来るとは思ってもみななかったけど、武偵高としては、留年や退学などさせて、かなこが暴れた場合の被害の大きさを考慮して、仕方なく進級させたのだろうと推測する。最も、仮にそういう処分となっていたとしても、かなこはあつさりを受け入れる気もするけど。

さて、二年生に進級して、一般中出身である私たちにとっては、初めて武偵の後輩が出来るわけだ。

武偵高には、戦姉妹制度というものがあるらしく、戦姉妹契約を結ぶことで、戦姉としては、使い勝手の良い駒を手に入れることになり、戦妹は、小間使いをする代償に技術などの指導を受けることが出来るというわけだ。

まあ、かなこと基本二個一で活動する私には不要だし、足手まといにしなければならない上、戦妹の成績次第では、私の評価も下がってしまうというし、不要なものにリスクを負う必要などないわけだ。

せっかく、専門である探偵科と、兼科している諜報科と鑑識科で主席となったのに、評価を落とす必要はない。

「狐崎先輩!!」

諜報科の教室でパソコンと向き合っていた私に、声をかけてくる者がいた。

「仕事中よ、見て分からないのかしら?」

「す、すみません!! その、私を戦妹にして下さい!!」

偶にこういう変わり者がいる。

「悪いけど、私は戦妹はとらないの。仮にとるとしても、使える駒でな

いなら要らないわ。」

「そう言い放つと、しょんぼりと帰っていく。」

「物好きもいるものね。私から何を教わる気なのかしら?」

正直、私が人より優れていると、自負出来る能力は、人に教えられる様なものではない。精々、変装術程度かしら?」

情報収集も、その整理も、如何に相手が嫌がるか、そこを考えれば自然と見えてくる。真実とは、誰かの不都合。そう理解していれば、自ずと答えは見えてくるのだから。

それは教わるものではない。持ち合わせた感性によるもの。教わりたいと思う者は生涯持つことはないし、持って生まれた者は、教わる必要などないという、そういうものだ。

つまり、教えるだけ無駄。だから、私の戦妹になりたいという者の申し出は全て断っているのだ。

「随分と人気者になったじゃない、性悪女。」

そして、二年生に進級したのに、今だに彼女は付き纏い続けている。最近では、かなこだけでなく、私にも絡んでくる様になった。まあ、かなこに対する様に勝負を挑んでくるのではないし、誂う分には面白いから別にいいけど。

「そういえば、Rランクに昇格したらしいわね。おめでとう。まあ、それでも貴女は、相変わらずかなこに負けっぱなしだけけど。」

竜宮アイラ。二年強襲科次席となった彼女は、ランク考査試験でRランクとなり、実質主席と言われている。まあ、主席を争う相手かなこじゃしようがないでしょうね。

「う、うるさいですわ!!今日はまだ負けてませんわ!!」

登校してくるなり、かなこに殴られに行くのが日課だった彼女。

「あら、朝一で殴られに行く極度のマゾヒストが成長したわね。正直、みんな引いてたし、教室という公の場で自分の歪んだ性癖を発散しなくなったのは、いい傾向だわ。」

「なっ!!なんですって!!私にそんな趣味は無いわよ!!...も、もしかして、みんなそんな風に思っていたと...」

「ええ、そうね。大丈夫よ、少し頭のイカれた変態程度にしか思っ

いわよ。」

まあ、これは嘘だ。皆、彼女が極度の負けず嫌いだと知っているし、最初の方こそ呆気に取りられていたが、徐々に慣れてきたら、なんだか微笑ましいものを見る目で見守っていたし。

何より、彼女の優れた容姿と根っからの我儘お嬢様な性格で、熱狂的なファンクラブさえ出来上がっている。

でも、それは言わない方が面白そうね。

「で、でも、私にはファンクラブまで出来てましてよ!!」

ああ、それは知ってたのね。まあ、目立つの大好きな彼女だし、知ってて当然ね。

「あら、あの変態同好会、貴女公認だったのね。流石、類は友を呼ぶわね。」

「むきーっ!!」

あら、怒らせちゃったみたいね。目が竜化し始めてる。

「ここで暴れないでくれるかしら。機材も多いし、被害が大きくなってしまうわ。ほら、中庭にかなこがいるから、行ってらっしゃい。」

後はかなこに丸投げする。だって、私の戦闘力、ゼロなんだから。

「ふーっ…」

呼吸の度にほんのりと炎が出てしまっている竜宮は、一息吐いて、教室を飛び出る。

ホント、愉快的な子だわ。

|||||

—竜宮アイラ視点—

この私が話して上げてるのに、なんて無礼な女なの!!

狐崎みすず。遠山かなこと基本的に行動を共にする彼女。初めは、所詮虎の威を借る狐程度にしか思っていなかった。

しかし、蓋を開ければ、そこにいたのは、知識と情報の怪物。座学にも自信のある私を以てしても足元にさえ及ばない。

探偵科の主席候補に彼女がなった時、彼女の推理力は、もはや未来予知の域に達し始めていた。

ふたり揃って異常。それが彼女と遠山かなこのチーム。如何に私のプライドを以てしても、敵わない世界、その頂きにいるのだと頭では理解している。

だけど、それでも絶対に負けたくない!!

だって、ナンバーワンは私じゃないと納得出来ないんだから!!

あまりにも無礼で恐れ知らずな性悪女、狐崎みすず。この怒りを発散するには…

「遠山かなこおーっ!!」

中庭にいる遠山かなこに勝負を挑むべく、突進する。

「つて!!なんですよ、この状況は!？」

呆気にとられ、怒りのあまり、竜化しかけていた身体が元に戻る。中庭では、キヤーキヤーと黄色い叫びが上がり、一年生の女子たちが一箇所に群がっている。

「遠山先輩!!戦妹にして下さい!!」

「お姉様なって下さい!!」

強襲科とCVRの新入生たちが群がって中心には、鬱陶しそうにしている遠山かなこの姿がある。

わ、私を差し置いて、こんなに注目を集めるなんて!!許せないっ!!

「退きなさい!!退きなさいよっ!!このっ、遠山かなこおっ!!許しませんわ!!」

新入生たちを押し退けようとするが、その波にのまれてしまい、ゴチャゴチャとした人波の中で藻掻く。

「このっ!!邪魔ですわ!!退きなさい!!私はあの雌牛に用があるのよ!!」

「誰が雌牛だ!!」

人波をすり抜け、遠山かなこが私の胸倉を掴む。

「勿論、貴女のことですわ。遠山かなこ。今日こそ私に跪かせてやりますわ!!」

「一度でも勝つてから言え、トカゲ女。」

「誰がトカゲですって!!私は高貴な竜ですわ!!」

翼を出し、空を舞う。この私をトカゲ呼ばわりなんて!!今日こそ最強は私だと証明してみせますわ!!

「この雌牛!!ホルスタイン!!ダチョウ以下の脳みそ!!」

「煩い!!えーつと…」

拳と大太刀の剣戟を繰り返しながら、罵倒をする私対して、絶望的な語彙力で言葉に詰まる遠山かなこ。

この一年、毎日数回勝負を挑み続け、少しだが、彼女の動きついていける様になった。

「隙ありっ!!ですわ!!」

私を何と罵るか思案する為に少し動きの止まった遠山かなこ。その隙を見逃しはしない。

「遅い。」

渾身一振りを、指二本で白刃取りされる。そのまま振り切ろうにも、刀を返そうにも、ピクリとも動かない。

「くうっ!!離しなさい!!このっ!!」

「武器などに頼るからそうなる。闘いの真髄は拳と蹴り。その他は、所詮、それらを補うものでしかない。」

力を籠めたのか、大太刀の刃が砕け散る。

「鍛錬不足だな。」



毎度の如く、突き刺さる拳で吹っ飛び、意識を失った。

「全く!! 気に入りませんわ!!」

苗流の介抱と、竜故の回復力で目覚めた時、既に遠山かなこと新入生たちの姿は無かった。

「ア、アイラ様。もうおやめになつてはいかがですか？ 苗流は毎日心配で胃に穴が開いてしまいそうです…」

「苗流!! なんてことを言いますの!! 竜宮の跡取りたる私が、負けっぱなしなんて許されせんわ!!」

そう、負けっぱなしなんて許せない。私が一番じゃなきや嫌なの!! 「はっ!! そういえば、何故私の下には戦妹申請が来ないのよ!! あの時牛にはあんなに来てたのに!! あの時雌牛の方が目立つなんて!! 許せませんわ!!」

「多分もう少ししたら来ると思いますよ…」

苗流が疲れた様に言った。

「竜宮先輩!! 戦妹にして下さい!!」

「アイラお姉様あ!!」

翌日、私の下に下級生たちが群がる。目立つのは良い。でも…

「貴女たち、昨日あの雌牛の所にいたでしょう!!」

そう、あの時見た顔ばかりだ。

「あら、大盛況ね。凄く目立っているじゃない、良かったわねまあ、全員かなこに振られて、第二候補の貴女のところに来たみたいだけど。かなこのお古でいいなら全部貰っていいわよ。あの子、うんざりしてたみたいだし。」

ひよこつと顔を出し、そう言う狐崎みすず。何故か愉快そうに笑みを浮かべているので、余計腹が立つ。

「あの雌牛のお古ですって!! 知りませんわ!! …このっ!! 離れなさい!! ああ! もう!! 放しなさい!! こらっ!! スカートを掴むのをやめなさい!! 苗流!! 苗流!! 何処ですの!! なんとかしなさい!!」

結局、少しだけ竜化し、彼女たちを振り払い、空に逃げた。

「遠山かなこ!! それに狐崎みすず!! 絶対に許しませんわっ!!」



念、それを貫くのに、最も適した将来はなんなのだろう？

「損な性格だねえ。ま、そんなキューちゃんだからリクは好きなんだけど。」

キューつと抱きついてくる理玖。

「ぼ、僕にそんな趣味は無いと散々言ってるだろ!!離せ!!」

ギャルっぽい見た目でスタイルの良い理玖は、男たちからモテるのに、何故か女の僕にご執心だ。確かによく男に間違われるけどさ…

「いいじゃん、リクも手伝ってあげるからあ。」

「僕ひとりでも十分だ!!」

理玖を引き離し、走って逃げ出す。

「ああ、キューちゃん。」

「この辺りか…」

依頼書を頼りに、依頼主の家を探す。神奈川から離れ、やって来たのは静岡。明らかに治安が悪いと分かる地域に足を踏み入れる。

「お願い!!お父さんを助けて!!」

まだ幼稚園に通っている様な年頃の少女が泣きながらそう叫ぶ姿が見え、駆け寄ろうとした。

「ああ、任せておけ。」

そんな少女の頭を軽く撫でる人物。見惚れる程の女である僕が見惚れる程の美人さんは、東京武偵高の制服を纏っていた。

「あのっ!!」一体何があったんです!!」

先輩となる美人に駆け寄って尋ねる。

「分からぬ。しかし、子どもが泣いているのだ。助けてやるのが当たり前だろう?」

当たり前…

「さて、では行くか。」

そう言い残し、姿を消した。

その数秒後、

「ねえ、この子を見なかったかしら?」

呆然と立ち尽くす僕の横に、高級車が停まる。運転席側の窓が開き、これまた東京武偵高の制服を着た、目の死んだ女性の写真を見せ

てくる。

「あつ!!きつっきのお姉ちゃんだ!!」

幼女が写真を見て、そう答える。

「そう…なんとなく分かったけど、少し話を聞かせてくれるかしら?」  
幼女の話は、いなくなつた父親を探して欲しいという内容だつた。  
しかし、彼女の話を書く限り、ただいなくなつたというわけではなく、拐われた様に感じる。

「そう、よく分かつたわ。それで、お父さんの名前は?」

死んだ目をした武偵高の生徒がそう質問する。

「えつと——」

ん? 待てよ、その名前…今回の依頼人じゃないか!!

「ああ、そんな名前で割に全く合わない依頼があつたわね。あのバカ、また勝手にタダ働きを…」

溜息を吐く彼女。あれ、依頼人が拐われたつてことは…マズい!!こんな悠長にしている場合じゃない!!

「ぼ、僕、スグに行かないと!!」

慌てて立ち上がる。

「待ちなさい。何処にいるのか分かるの?」

「うっ…」

分かる筈が無い。

「一緒に来なさい。貴女がどんなに急いで走るよりも、場所が分かる私と車で行く方が速いわ。」

今の幼女の説明だけで居場所を特定したのか!?

「お、お願いします!!」

彼女を信頼していいのか分からないけど、今は藁にもすがるしかない。

「これは一体…」

明らかにカタギのものではないと分かる屋敷に踏み入り、見えたのは異様な光景。

周囲に漂う強烈な硝煙の香りと、死屍累々と横たわる構成員たちの手には、様々な銃火器が握られている。間違い無く何十、いや、何百

発という銃弾が放たれた筈だ。

それだというのに、壁や柱、襖にさえ傷ひとつないのはどういうことだ？

「遅かったな、みすず。」

そんな中、男性を片手で俵の様に担ぎ、そう言うあの美人さん。その足元には、数え切れない程の弾丸が落ちている。

「勝手に突っ走らないで、と何回言ったかしら？ 全く、お人好しが過ぎるわよ。」

呆れた様に言う死んだ目をした女性。

「子どもが助けを求め泣いていたのだ、仕方ないだろう。」

そう言い、こちらに向かってくる。

「この子の依頼を奪ったみたいよ。それでもいいのかしら？」

「そうなのか？ 悪かったな。報酬はいくらだ？」

そう言って、片手で財布を取り出す美人さん。

「い、いません!! 僕はただ、弱い人を助けたかっただけで…」

こうして見ると分かる。彼女は、僕よりも遥かに強い。僕だって強襲科のAランクだが、彼女は、そんなランクとかそういう次元にいない様に感じる。

「良い心掛けだな…しかし、そういうわけにいかんだろう。」

財布ごと渡される。

「みすず、帰るとしよう。」

「全く…」

車に乗り込むふたり（正確には気絶した男性含め三人）を慌てて追いかけて、車に乗せてもらった。

「お姉ちゃん!! ありがとう!!」

「なんとお礼を言っただけ良いものか…少ないのですがこれは依頼料です。」

ボロ家に戻り、父娘感動の再会の後、そう言う父娘に、

「要らぬ。私はその子を泣き止ませたかっただけだ。」

そう言って、死んだ目をした女性と共に出て行く。

「待って下さい!!」

それを追いかける。

「なんだ？」

振り返る美人さん。

「お、お名前を聞いても!?それと、いつもこんなことを!？」

夕日を背に、彼女は答える。

「遠山かなこ。いつもというわけではない。」

「バカ言うんじゃないわよ。毎度タダ働きして…価値を下げるからやめなさいって言うてるでしょ。」

遠山かなこ…私の理想を体現した人…

なにやら言い合うふたりを見送りながら、何度もその名を心の中で復唱し、その姿焼き付ける。

「遠山かなこ…遠山かなこさん…」

これ程憧れ、惚れ込んだ相手がいただろうか? いや、いない!!

その日、僕は東京武偵高の受験を決めた。

「竜宮先輩!!」

「アイラお姉様あ!!」

先日、見苦しい程にかなこ先輩の群がっていた彼女たち。今日は竜宮先輩に群がっている。

全く、なんとミィハーで信念が無いのだろう!!

一度断られ、それで次に移るなんて、信念が無い証拠だ!!

「遠山かなこ先輩!!僕を戦妹にして下さい!!」

何度断られても、何度倒れても…何度だって、諦めない!!

「私に一発でも当てたらいいで。」

かなこ先輩は、群がる後輩に飽き飽きしたのか、そんな条件を提示した。

それから姿を見る度に挑み、吹き飛ばされる毎日。

「キューちゃん…もうやめようよお。」

毎度介抱してくれる理玖には感謝しかないが、僕は諦めない!!

「かなこ先輩!!今日こそ戦妹にして下さい!!」

「遠山かなこおっ!!今日こそ平伏しなさい!!」

かなこ先輩の姿を見かけ、毎度の如く勝負を挑む僕と、もう一人。

これが、僕の第二の運命の出会い出会った。

完全に一致したタイミングで、二年の次席、竜宮アイラ先輩が同時に挑みかかった。

「このっ!!退きなさい!!一年の癖に!!私に譲りなさい!!」

「年齢も学年も関係ないです!!僕が今日こそ勝つんです!!」

ふたりでかなこ先輩に何度も攻撃を繰り返す。

「なんて生意気ですの!!それに服装!!男なのにスカートを履くなんて、風紀を乱していますわ!!」

「僕は女です!!先輩だろうと許しません!!」

何故かかなこ先輩を無視し、激闘を繰り広げる。

「なかなかやりますわね…でも、雌牛には遠く及びませんわ!!」

今までとは違う、強烈な一撃が僕の意識を刈り取る。正しく竜の一撃だった。

「キューちゃん!!」

抱き着く理玖。此処は…保健室…

「理玖…」

涙が溢れてくる。僕、かなこ先輩だけじゃなく、竜宮先輩にも負けちゃった…

かなこ先輩は仕方ない。だって憧れだから。でも。それ以外には負けられない…正義の為に、負けたらいけないのに…

「キューちゃん!!もうやめようよ。リク、遠山俊かなこも、竜宮アイラも嫌い!!」

「理玖…」

何度も馬鹿にされ、嘲笑われても付き合ってくれた理玖の涙に、ただ名前を呼ぶことしか出来なかった。

「所詮、その程度。あの雌牛…遠山かなこに挑もうなど、百年早いですわ!!」

高笑いしながら現れた竜宮先輩。

「キューちゃんを馬鹿にするな!!先輩だろうと容赦しないんだから!!」

竜宮先輩に噛みつく理玖。

「理玖、ありがとう。でも、君が傷つく必要はない。」

僕の為に、君が傷つく必要はない。仮に、僕と理玖のふたりが、全力で挑んでも、彼女に勝てる気は全くない。なにより、竜宮先輩からは戦意は感じられない。

「伊勢新久良、貴女は他の新入生たちとは違う。決して叶わぬ願いだろうと、己の信念の為に食らいつく意地と根性があるわ。貴女なら、私の戦妹にしてあげても宜しいくてよ!!」

|||||  
|||||  
|||||

—多目理玖視点—

キューちゃんは誰にも渡さない!!

伊勢久美、嘗て関東を納めた伊勢氏、後北条家ともいわれる家系の末裔たる彼女は、その始祖たる新九郎の再来と謂われる程、強くその血を受け継いでいる。

「弱者を救わず、何が正義だ!!」

そう叫び、突撃する彼女の後ろをついてきた私にはよく分かる。

幼き日、彼女の御屋敷で初めて合って以来、彼女に魅せられていた。

「キューちゃん。今日は何処に行くの〜?」

「理玖はついて来なくていい。危ないから。」

そう言つて誰かを助ける為に飛び出して行く彼女を必死に追いか



けた。自分ではない、誰かの為に命を賭ける彼女に、惹かれ、私だけを見て欲しいと願ってしまっていた。

「キューちゃん。武偵になるのおく？」

「武偵になるのか迷っている。でも、誰かを救えるなら、それも良いかもしれない…」

ただ、誰か人の為になりたい。その一心のみで、毎日傷だらけになっても、馬鹿にされても嬉しそう笑うキューちゃん。

「じゃあ、リクも武偵になって、キューちゃんを手伝ってあげる。」  
だから、私だけを見て。キューちゃんは私だけのものなってくれなきや嫌なの…

だけど、キューちゃんはずっと、誰かの為に突っ走る。…そして…  
「理玖!!僕は目指すべき人を見つけた!!」

初めて見る様な歓喜の表情でそう言うキューちゃんに、ズキリと胸が痛む。

「遠山かなこさんっていうんだ!!彼女は僕理想だ!!僕は、東京武偵高に行つて、彼女の戦妹になる!!」

彼女の見つけた目標。今までなら、無条件で応援出来た。でも…リク以外の女の為なんて絶対嫌だもん!!

「やだ!!絶対やだ!!絶対に駄目なんだもん!!キューちゃんのバカ!!」  
「ちよ、ちよっと!!突然どうしたんだよ、理玖。」

突然怒り出し、ポコポコと肩叩きの様に拳を振るリクに、キューちゃんが戸惑う。

「やだ!!絶対ダメ!!」

何が嫌で、どうダメなのか、それを言ってしまったら、もう今までの様な関係ではなくなる。それが何よりも嫌で、ただの駄々っ子のようにイヤイヤと泣いていた。

結局、キューちゃんの意志は変わらなかった。

私も一緒に東京武偵高に合格し、家を離れ学生マンションを借りた。

「理玖、ごめんよ…僕が借りれる家がないから、一緒に住むことになつて…」

カバンひとつだけの荷物と、制服一式だけを持ち、申し訳なきそうに玄関に立つキューちゃん。

キューちゃんは貧乏だ。なんせ、赤字確定の依頼ばかり受けるし、偶に真つ当な依頼を受け、お金が入っても、直ぐに誰かの為に使ってしまうからだ。

「リク、キューちゃんと一緒に嬉しいよお。」

偽らざる本心。

「理玖…本当にありがとう…僕は理玖がいなかったら、野垂れ死んでたよ。」

「キューちゃんならホントにそうなりそ〜。」

薄つすらと涙を浮かべ、お礼を述べるキューちゃんに抱きつき、そう言った。

「大丈夫だよお、キューちゃんはリクが守ってあげるから〜。」

「理玖は弱いから戦えないじゃないか…。」

小さく笑い、リクの頭を撫でてくれる。

「リクはお医者さんだからあ、キューちゃん守れるも〜ん。」

キューちゃんの言う通り、リクは弱い。喧嘩なんかしたことないし、やっても絶対に負ける。だけど、怪我ばかりの彼女の為、武偵中進学以来救護科に入り、医の道を選んだ。

生傷絶えない強襲科。そんな強襲科に所属し、暇さえあれば遠山かなこに挑みかかるせいで、一日に何度も気絶するキューちゃん。

「キューちゃん、大好きだよ…。」

誰もいない中庭のベンチ。気を失った彼女を膝枕し、その額唇をつける。遠山かなこ、アイツ嫌い。キューちゃんを奪おうとするから。でも、こういう瞬間をくれるのは嫌いなアイツの一撃なんだ…一瞬で意識を刈り取る程の攻撃なのに、キューちゃんの身体に痣ひとつつかない。理解出来ないけど、キューちゃんが無事ならそれでいいや。

その日は違った。

いつもは遠山かなこに負け、気絶していたキューちゃんだけど、今回は、竜宮アイラという変な女に負け、傷だらけになってしまっている。心配のあまり、救護科の保健室に運んだ。

「キューちゃん!!」

彼女が目覚めた時、安心のあまり抱き着いてしまった。

「理玖…」

キューちゃんは泣いていた。

「キューちゃん!!もうやめようよおく。リク、遠山俊かなこも、竜宮アイラも嫌い!!」

キューちゃんを泣かせる奴らは絶対に許さない!!大ツキライ!!

それなのに、キューちゃんを戦妹にしようとする竜宮アイラ。

キューちゃんを傷つけ、泣かせた大ツキライな女の申し出に、

「少し考えさせて下さい…」

キューちゃんはそう答えた。

「絶対反対なんだから!!」

自室に帰り、キューちゃんの好物である味噌田楽が並んだ食卓でそう言う。

「うん…でも、竜宮先輩は僕と同じ道、その先を行っているんだ…」

弱々しくそう答え、箸を伸ばす。

「リクは絶対やだ!!キューちゃんはリクと一緒に遊ぶの!!」

プクツと膨れ、そう言う。

「僕も理玖と一緒にいるのは好きだよ。…やっぱり美味しい。やっぱり、理玖の田楽が一番好きだなあ…」

キューちゃんはズルい。そうやって、いっつもリクを大好きでいっぱいにする。



「僕、伊勢久美を、竜宮アイラ先輩の戦妹にしては頂けませんか？」

片膝をつき。そう言い放つ後輩。伊勢久美。その目には、私を超えようとする野心が漲っていた。

「ええ、歓迎しますわ。この私の戦妹になれるということ、誇りに思いなさい!!」

こういう輩でないとつまらない。あの遠山かなこを超え、私、竜宮アイラがナンバーワンであると証明するには、こういう配下が必要なのよ!!

伊勢久美、東京武偵高一年。神奈川武偵中時代から変わらず強襲科のBランク。

身長は158cm、一人称と体型、顔立ちから小柄な男子生徒かと思いついていましたが、服装（武偵高のセーラー服）同様、紛う事なき女子生徒らしいですわ。

完全無欠な私からすれば、取るに足らないBランク相応の実力。しかし、思わず注目してしまったのは、その執念を見たからですわね。「私に一撃でも当てれたら考えてやる。」

戦妹志願者が殺到した遠山かなこが放った一言。新入生たちが個々に、時には編隊を組んで襲い掛かるも、有効打の一撃どころか、一秒間戦線を維持することさえ出来ずに意識を刈り取られていた。

：私、やっぱり強かったんですわね。

そんな光景を眺めながら、そう確信しましたわ。毎度勝てない、憎き遠山かなこ。あまりにも負けが嵩み、自分は実は弱いのでは？と疑心暗鬼に陥ることもあった、しかし、この異様なまでに強過ぎる好敵手と新入生の一瞬の格闘を見て自信を取り戻しました。

彼女たちが全く反応出来ない攻撃が、私には見えていたし、反応し、対応出来るというのが分かったからですわ。

そんな圧倒的な力の前に、憧れも、自信も廃り、翌日からは次の目標に逃げる者たち（それが私なのは納得出来ませんわ!!）。そんな情けない者たちを数日掛かりで薙ぎ払い、遠山かなこに挑み掛かった。

そんな時、生意気にも、私と同時に攻撃を仕掛けた者がいた。あの絶望的で圧倒的な力量差に怯まず、挑める新入生。

それが伊勢久美だった。

そんな伊勢に対し、抱いた最初の感情は…

邪魔ですわ!!

この新入生が、あの雌牛、遠山かなこに一発でも攻撃を当てる？

そんなの夢のまた夢。この私でさえ、認めたくは無いけど、遠く及ばない戦闘力を誇るあの女に、私にも一撃を当てることも出来ないであろう一年生が私と遠山かなこの一戦に混ざる。足手まといではないですわ!!

「このっ!!退きなさい!!一年の癖に!!私に譲りなさい!!」

そう言いながら、遠山かなこに向け攻撃を放つ。

「年齢も学年も関係ないです!!僕が今日こそ勝つんです!!」

そう言いながら一年も同様に攻撃を放つ。

「なんて生意気ですの!!それに服装!!男なのにスカートを履くなんて、風紀を乱していますわ!!」

ふたり掛かりでも、遠山かなこに一撃も当てられない。それどころか、完全に見切った動きで、最小限の動きだけでそれらを躲してくる。

「僕は女です!!先輩だろうと許しません!!」

私の言葉に、一年生が怒り、標的を私にシフトした。

「僕は女です!!先輩だろうと許しません!!」

女性でしたの!?!どう見ても男性にしか見えませんが…言われてみれば、男性よりも少し柔らかい雰囲気がありますわね。

それから、遠山かなこをほっぽり出してふたりの戦いが始まる。

戦いとはいうけど、実際は相手をしてあげる程度。竜の力を使わずとも、一蹴出来る程度の相手だと分かる。全ての攻撃をあしらい、彼女の持てる力、その全てを引き出させる。

躲し、あしらい、手加減した一撃を当てる。まあ、手加減したといえど、彼女にとっては絶望的な一撃でしょうけど…

ぐらり、と彼女の意識が遠のくのが分かる。所詮、この程度ですわね。遠山かなこに何度も挑み掛かる執念は認めてあげますわ…でも、圧倒的に実力が伴っていませんわ。

倒れた、そう思った彼女が当たり前前の様に立っている。…いや、意

識は半分飛んでいる。目の焦点が定まっていない。

しかし、そんな状態なのに何度も攻撃を放ってくる。そのどれもが、先程よりも強くなっている。

面白い後輩が入ってきたものですわね…

何度も攻撃を当てても、起き上がる下剋上の執念。

「なかなかやりますわね…でも、雌牛には遠く及びませんわ!!」

そう、認めたくないが私よりも遥か高みにいるあの女にはどう足掻いても及ばない。

それを教える一撃、竜の力を少し込めた一撃を放ち、この一戦に終止符を打った。

「苗流!!あの新入生について、一時間以内に調べなさい!!」

「はい!!」

私の一撃を受け、気絶した彼女に、友人らしき新入生が駆け寄るのを見て、そう告げる。

駆け寄った新入生から睨まれた気がしましたが、そんなことなど、今は取るに足らないこと。

「さて、よく逃げずに待っていましたわね、遠山かなこ!!逃げなかったことを後悔させてあげますわ!!」

因縁の相手との戦いに挑んだ。

|||||  
|||||  
|||||

遠山かなこ先輩、そんな人物に憧れ入学した東京武偵高。入学した際には、憧れは信仰に近いもの変わっていた。

「私に一発でも当てたらいいぞ。」

数十人を一度に相手取り、そう言い放つ。

余裕。そんな驕りと慢心が新入生たちの表情に溢れる中、僕は、『絶対に無理だ』そう確信に近いものを抱いていた。

結果は予想通り。いや、それ以上。一発当てるどころか、数十人相手でも、一秒保つことさえ出来ない。圧倒的な力量差だった。

呆気なく薙ぎ払われた僕たち。そんな翌日、新入生たちは誰も遠山かなこ先輩に挑むことはなかった。圧倒的強者。彼女の要求するレベルに達していないと理解した末に、次の目標へと移った。

だけど、そんな圧倒的な力量差を見せられたからこそ、僕はますます彼女に憧れた。

竜宮先輩に敗れ、戦妹の誘いを貰った翌日。

「遠山かなこ先輩!! 今日こそ貴女の戦妹にしてもらいます!!」

誰もが諦めた相手へ、懲りずに何度も挑み掛かる。

「竜宮といい、大した執念だな…」

初めて挑んだ時から、もう既に数十回、日によっては一日に何度も挑み続ける僕に、少し呆れた様に言うかなこ先輩。

「それが僕の夢ひとつですから!!」

竜宮先輩の申し出に、少し悩んだ。竜宮先輩だって、僕よりも遙かに強い。それもその筈。現在の東京武偵高に一人しかいない強襲科Sランクだ。(かなこ先輩はRランク)

Bランクの僕との実力差は明白。勿論、ランクが全てではないのだけど、実際に相手をして貰い、その力の差を見せつけられ、痛い程実感した。

そんな人物の戦妹になれる。きつとこれ以上ない幸運なんだろうし、実際嬉しい。彼女の元でなら、きつと今の何倍も強くなれる気がする。

…だけど、僕は遠山かなこ先輩、その人に憧れて此処へ来たんだ!! 雑念を払い、銃に刃、そして徒手格闘、僕の持つ全てを駆使して挑



む。

「一日やそこらで人は強くならぬ…」

全ての攻撃を軽くてあしらい、そう眩くかなこ先輩。

その言葉が耳に届くと同時に、僕の意識は刈り取られていた。

「もつと強くならないと…」

目覚めた時、頭に残り、何度も響く彼女の言葉。いつも介抱してくれている理玖の姿は、今日はない。

地面から起き上がり見えるのは、学園島を消し飛ばしてしまうのではないのか、と思ってしまう様なかなこ先輩と竜宮先輩の空中戦。何故あのふたりは飛べるのだろうか？

到底及ばないと分かる戦いだが、必死に挑む竜宮先輩に対し、涼しい顔で攻撃を無力化するかなこ先輩。

僕から見れば、ふたり共、別次元の怪物。そんな怪物ふたりでも、竜宮先輩とかなこ先輩の間には、途方も無い高い壁があるのだと理解出来た。

「雌牛!!今日が貴女に土を着ける時ですわ!!」

「誰が雌牛だ!!このトカゲ女!!一撃でも当てておらぬではないか!!」

更に速度と威力が上がる激闘。もはや目で追うことさえ出来ない。

そんな激闘、しかし、決着はあっさりとした。飽きたのか、かなこ先輩が少しだけ動きを止めた。いや、止めた様に見えた。

その瞬間、竜宮先輩の姿が見えた。力無くかなこ先輩の腕に載っている。

かなこ先輩が攻撃したのだ。そう状況的には理解出来る。しかし、何が起こったのかは分からなかった。

気を失った竜宮先輩を地面に寝かせるかなこ先輩。すぐさま駆け寄る竜宮先輩の取り巻きの先輩（確か瀬木先輩だった筈）が小さな身体で竜宮先輩を担いで走り去って行く。

「伊勢…だったな？」

「ひ、ひゃい、しようでしゅ。」

そんな状況で、かなこ先輩から声を掛けられた。予想外のことに、

テンパリ、思い通りに舌が回らず、裏返った声に噛み噛みで答える。「お前、竜宮について見たらどうだ？アイツは、ああ見えて面倒見が良いい。」

「ふえ？」

かなこ先輩から出た言葉に、間拔けな声が出てしまう。

「ぼ、僕は遠山かなこ先輩の戦妹になりたいです!!」

例え憧れの人に勧められても、その意志は揺るがない。

「正直に言うぞ。お前は竜宮に遠く及ばぬ。そして、竜宮は私にとって脅威ではない。」

彼女の戦妹の条件。一発でも当てたら認める。それが如何に高い壁か、それは身に沁みて分かっている。しかし、心の何処かで、何度もしつこく負い続けられ認めてもらえると思っていた。しかし、彼女の言う通り、そんな楽観的思考が認められるにも差が有り過ぎるのだ。

「二年…一年待って下さい。僕は竜宮先輩に追いつきます。そうしたら認めてくれますか？」

超えるとは言えない。竜宮先輩でさえ遙か高みなのだから。

「…考えておこう。」

少し笑い。そうかなこ先輩は言う。

その微笑みに、胸を貫かれた。

「それにしても、理玖は何処に行っただろう？」

いっつも一緒の理玖が居ない。部屋に戻ってひとりぼっちなのは、こっちに来て初めてじゃないだろうか…

グ〜とお腹が鳴る。理玖は何故か電話に出ない。

「冷蔵庫、何にも入ってない…」

絶望的状况。僕は料理が出来ないし、備蓄食料も無い。どうしよう…

「そ、外に行こう…」

理玖を探す意味もある。喧嘩した覚えはないし、怒らせた記憶もない。なら、彼女が純粹に何か用事があったんだろう。そう信じ、食事次いでに探すことにした。▪

「美味しそうだなあ…」

街の至る所から、美味しそうな匂いが漂ってくる。夕飯の為に外出したのに、僕の財布には、数十円しか入っていないなかった。

この間、駅前の募金に有り金全部突っ込んだのを忘れていた。

「僕、理玖に甘えっぱなしなんだな…」

よく考えれば、家賃も食費も、全部理玖が負担している。彼女がいなければ、僕は本当に野垂れ死んでいただろう。

美味しそうな食事の匂いに足が止まる。空腹時にこれは拷問に近い。理玖、何処に行つたんだ…申し訳無さに涙が溢れてくる。

「急に立ち止まられと、邪魔ですわ。…って、伊勢久美ではありませんの。貴女、何をしていますの!？」

「竜宮先輩…」

街中で涙を流す僕に、ギョツとした顔で竜宮先輩がそう言った。

私服なのか、武偵高のセーラー服とは違う、綺羅びやかで、高価だと分かる装飾品に飾られ、普段以上に輝いていた。

「なにがありましたの!？」

心配そうに僕に問いかける竜宮先輩。

「竜宮先輩…」

どう説明したものか…そう考えていると…

グ。と情けない腹の虫が鳴いた。

「情けない…しかし、哀れな後輩に施しを与えるのも、先輩である者の務めですわ。」

見たことも無い様な高級車に乗せられ、隣に座る竜宮先輩はそう言う。

「すみません…」

恥ずかしさと申し訳なさ、そして、あまりにも豪勢な車内に萎縮し、縮こまって答える。

「それで、何がありましたの? 貴女の様な不屈の精神を持つ者が涙を流すなんて。」

ジツと僕の目を見て質問してくる。

「それは…」

どこから説明すればいいのだろうか？己の生き方、信念への揺らぎ？理玖のこと？どれも安々と話していいことでは無いように思う。

「話たくなければ別に話さなくてもいいですわ。人間誰しも、一つや二つ隠し事はあるものですわ。それが、真に信頼している相手であっても…」

興味を失った様にそう言う竜宮先輩。言葉の最後の辺りで瀬木先輩をチラリと見たその目は、自信家な竜宮先輩らしくない瞳だった。「凄い…」

見たこともない大豪邸に連れられ、見たこともない様な食事を出され、なんだか夢を見ているみたいだった。

「伊勢様、お風呂の準備が出来ております。」

メイド服に着替えた瀬木先輩に促される。あまりにも至れり尽くせりな待遇に流石に気が引ける。それに…

「そんな!!これ以上…」迷惑をお掛けするのは…それに、瀬木先輩は先輩なんですから、後輩の僕にそんな敬語とか…」

それが一番申し訳なく感じる。

「学園ではいざ知れず、ここは竜宮家のお屋敷、その使用人たる私がお嬢様の、アイラ様の招かれた客人に、無礼振る舞いなど、許されません。」

断固たる意思を示す瀬木先輩。

「お嬢様からの指示ですので、無理矢理でもお連れします。」

小さな身体で僕を持ち上げ、少し早足で歩き出す瀬木先輩。…これは、無礼じゃないんですか？瀬木先輩の竜宮先輩への忠誠心からすれば、僕の意識を無視する程度、何の無礼でもないということだろうか…

「本当に女でしたのね…」

脱衣場で身包みを剥がされ、浴場に放り込まれた僕の下半身を、先に浴場で待っていた竜宮先輩が見てそう言う。…言われずとも散々男女だ、男の娘だと言われてきたけど、目の前に完璧な、女性の理想の様なプロポーションを誇る人物がいると、流石に傷付く。

「好きでこんな身体になったわけじゃないもん…」

涙ぐみながらそう呟く。貴女は良いですよ。持つものに、持たざるものの気持ちは分かる訳がないのだ。

「ま、まあいいですわ。この竜宮が誇る湯で日頃の疲れを癒やしていきなさい!!」

話を逸らす様に竜宮先輩が自慢気に高笑いする。確かに凄い浴場だ。でも、此処に至る迄に、もはや別世界と思う様なお屋敷を見ていた僕は、わあく凄いという感想くらいしか出なくなっていた。

僕の身体を洗おうとする瀬木先輩を必死に押し退け、湯船（昔家族旅行で行った温泉旅館のより遥かに大きい）に浸かる。

「ふっつ。」

結局僕はどこまでいっても日本人。普段水道代の節約の為、シャワーだけで済ませていたけど、やっぱり湯船に浸かるといのは気持ちがいい。

「ダラシのない顔ですわね。」

長い髪をタオルで纏め、瀬木先輩に身体をマッサージされながら、竜宮先輩が言う。絵に描いた様な上流階級の姿だった。そんな竜宮先輩は、

「遠山かなこ…貴女はあの女の戦妹になりたいんでしょう?」

強い目でそう問われる。

「はい…」

ここまでお世話になって、そう言い切るのも気が引ける。しかし、その意思是揺るがない。

「揺らぎませんでしたわね…大抵の人間は、目先の欲に囚われるものよ。…ねえ、伊勢久美。そんな貴女だからもう一度言うわ。私の戦妹にならなくて?」

真剣な瞳に吸い込まれる様だった。

「なんで…」

彼女からそこまで求められる理由が分からない。僕は、彼女にとって、何の利も無い筈だ。

「そうね、先ず、あらゆる利より、己の信念を貫いたところ。次に、あの雌牛を相手に何度も挑むその精神力。第三に、利害が一致している

こと。そして何より!!この私に靡かなかったことですわ!!」

ザバア!!と湯船から立ち上がり、惜しげもなくその裸体を晒しながら言い放つ。

「今やあの雌牛に執着するのは貴女だけ!!見ていてイライラしますの!!今の貴女では到底及ばない!!この私でさえ、赤子の手をヒネる様にあしらうあの雌牛に、私にさえ届かない貴女が挑むのを!!」

侮辱なのだろうか?いや、違う。竜宮先輩も憤っているんだ。この人はきつと、かなこ先輩に会うまで、ずっと一番だったんだろう。それが、絶対に越えられない壁にぶち当たり、それでも己のプライドと譲れないものを捨てきれず、挑み続けているんだ。

人生で初めての挫折、それにどう対処するのか、彼女自身まだ決め兼ねているんだ。涙を浮かべたその瞳に、そんな苦悩を感じ取った。

「竜宮先輩…:僕のこと嫌いですか?」

そんな彼女にとって、きつと僕は気に入らないだろう。圧倒的才能を遺憾なく発揮してきた天才がぶち当たった壁に、僕のような存在が挑んでいるんだから。

「ええ、本当に気に入らなかったわ。でも、貴女を見ていると、己を見ている様に感じたわ。だから、貴女を、あの雌牛に挑む資格を持つ程度には鍛えてあげようと思いましたが。」

なんとも一方的な言い分だ。でも…

「魅力的な申し出ですね…:でも、僕は…」

断ろうと思った。

「多目理玖。本日、狐崎みすずの戦妹となった様ですね。今日は戦姉妹としての親交を深める為、食事会らしいですよ。」

瀬木先輩の目が僕を見て、一瞬光り、瞳を閉じた。そして、竜宮先輩への耳打ちを、わざと聞こえる様に言う。

:理玖が、あの狐崎先輩の戦妹に?そんなのなんにも聞いてない!!理玖は、そんな結構大事なことを、僕に伝えることをしたくない程、僕に腹を立てているのだろうか…

怖くなった。唯一ともいえる繋がりが絶たれるのが。目の前の彼女に縋りたくなった。

会ったら絶対に謝る。でも、謝っても許されなかったら…  
そんな恐怖が、僕の意志を揺るがせた。

「僕、伊勢久美を、竜宮アイラ先輩の戦妹にしては頂けませんか？」  
彼女の前に膝を付き。そう乞うていた。

|||||||  
|||||||  
|||||||

—瀨木流苗視点—

竜宮アイラ様。私のお使えする愛しき主人。

竜宮に代々お使えし、それを生き甲斐としてきた瀨木家に生まれ、  
産まれた時より竜宮家にお使えする喜びを説かれてきた。

それが正しいと思い込ませる洗脳教育であつたのかもしれない。  
でも、アイラ様にお会いした初めての日そんな洗脳が解かれ、真の忠  
誠を誓った。

「なんとという幸運なのだろう。アイラ様と同じ年に生まれ、仕えるこ  
とが出来るとは!!」

父が感極まつた様に初出仕の日にそう言ったのを覚えている。

物心つかぬ私にとって、そのアイラ様なる人物が何者で、どんな人  
なのか知らなかった。ただ、同い年の女の子と遊べると思って、少し  
はしゃいでいた程度の認識だっただろう。

「アイラ様、娘のノウルです。今日より、精神誠意お使え致します。」  
父に頭を押さえられ、ペッコリと頭を下げた形で床しか見えなかつ  
た。

「ノウル？変な名前。まあいいわ。アイラが友達になってあげる。」  
あまりにも高慢な言葉。ムツとして頭を上げた。その先に見えたのは、私の全てとなる人だった。

透き通る様な金髪に碧眼。あまりにも美しく容姿。全てを捧げた  
いと思う姿だった。

「ノウル、挨拶をしなさい！」

小声で父が言う。見惚れて、何も発せなくなっていた。

「瀬木流苗です…アイラ様にお使い出来ること、光栄に思います。」

心の底から出た言葉。今振り返れば、この時、私はアイラ様に一目惚れしたのだ。

「流苗!!」

毎日の様に名前を呼ばれ、毎日の様に我儘を仰られるアイラ様。その我儘も愛らしく。そして、愛おしかった。

「なんですの!!あの女!!」

そんなアイラ様が変わったのは高校に進学してから。高貴で、そして、一族の悲願たる竜の血を復活させたアイラ様は、竜宮家にとって、最高、宝だ。そんなアイラ様には、最低限の自己防衛力を身に着ける必要があると、中高と武偵学校に通うこととなっていた。当然私もそれにお供する。

武偵中、そこにアイラ様の敵などいなかった。竜の力を使わずとも、圧倒的才能と努力で、直ぐに一番になっていた。

アイラ様は、それを最初は喜んでいたが、次第に退屈そうにしているのが、少し不安だった。

「遠山かなこおっつ!!」

毎晩怒りを発散するかの如く、そう叫ばれるアイラ様。しかし、以前の様な退屈に苛まれた目ではなく、心底悔しいという本来のアイラ様らしい天真爛漫な我儘っぷりと、楽しそうにする姿に、毎度気絶され、その度に心労で痛む胃が少し緩和されていた。

二年生へと進級した日、そんなアイラ様の表情が険しくなった。

伊勢久美という新入生のせいではない。

伊勢に出会う以前、新学期が始まったその日の早朝。宛名のない手



紙が、アイラ様に届いた。

寝間着のネグリジエ姿のままそれを一読したアイラ様の表情が見る見る険しくなり…

「流苗!!掃除…いいえ!!焼却しておきなさい!!」

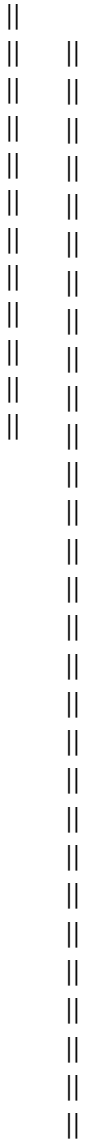
ビリビリと手紙を破り裂き、床へとぶち撒け、怒気が混じった声でそう言い放たれた。

「かしこまりました。」

不機嫌そうに着替えを始めるアイラ様を手伝いながら、そう言う。私がそうすると。言われた通りに従うと疑わないその姿に胸が痛む。

アイラ様の着替えが終わり、お部屋を出られた後、私は破り裂かれた手紙を集めた。命令通りに燃やす為ではない。

いけないことだと、許されないことだと分かっているのに、それを集め、繋ぎ合わせてしまった。



—多目理玖視点—

「みーちゃん先輩!!凄いよお、キューちゃんが理玖のこと大好きって言うてくれたの!!それに、なんでも言う事聞くて!!」

憎き遠山かなこ。その相棒ともいえる人物の戦妹になるなど想像してもみなかった。

しかし、その効果が初日、その夜から現れ、私は歓喜し、翌日戦姉たる狐崎みすずの元にそう言うて飛びついて成果を報告していた。

「抱き着かないで、鬱陶しい。」

かわいい戦妹の歓喜の報告だというのに、私の戦姉は、心底面倒臭そうに私を押し退け様とする。

非力な私の梗塞さえ押し退けられない、信じられない程非力な戦姉は、溜息をつけて、諦めた様に抵抗をやめる。

「離さないで、戦姉妹契約を破棄するわよ。」

「え、リクなりの感謝の表現なのに。」

パツと手を離す。それは本当に困る。

「全く、感謝の気持ちは金額か、労力で返しなさい。下らない親愛なんか要らないのよ。」

戦妹割りよ。そう言っただけで電卓を見せてくる。

「容赦ないなあ。」

提示された金額はかなり高額。しかし、この戦姉は一応Sランクだ。相場からすれば破格の安さだろう。

「次は、リクの力で対価を払うよ。」

紙幣の束を差出し、そう言う。相場からすれば安いとはいえ、流石に毎回払える金額ではない。

「ええ、そうなることを願うわ。」

お金を受け取り、興味を無くした様にパソコンに向き直る狐崎。

「みーちゃん先輩。次はどうすればいい？」

そんな彼女にもたれ掛かり言う。

「まずその呼び方をやめなさい。不快だわ。」

「え、いいじゃん。」

そう答える私に、ゾツとする程の冷たい目を向ける。

「下らない仮面は、私の前では不要よ。安心しなさい、ここは私以外に誰もいないわ。バカの振りも、貴女がそうじゃないとわかっていて相手にはなんの意味もなさないわよ。」

「参ったなあ。…いつ気付いた？」

「貴女に会って最初の会話。」

「そこからか。流石、武偵高最高の頭脳。」

拍手する私に、狐崎は冷めた目を向けながら言う。

「私は正真正銘本物の大バカを知ってるわ。貴女がどんなにその仮面を被っても分かるわ。」

「じゃあ、なんで戦妹にしてくれたの？」

己を偽る私を、胡散臭いと見抜きながら、側に置く決断をした彼女に質問した。

「簡単よ。別に貴女が必要だと思ったわけじゃない、貴女が欲するものが、私にとっては邪魔だったから。」

キユーちゃんのことか…

「それじゃあ、利害関係が一致している間は、私に協力してくれるってことだよな。」

「そういうこと。勿論、対価は貰うわよ。」

「いいよ。キユーちゃんがリクのものになるなら全部あげる。」

それが叶うなら、他に何も要らない。

「歪んだ愛情ね。まあ、アレを抑えられればどうでもいいわ。」

そう言っつて、プリントアウトされた紙を渡してくる。

「なにこれ？…へく、面白そう。」

己の歪んだ欲望が湧き上がってくるのが嫌でも分かった。

外伝：緋弾のARIA if・if―虎と竜、武偵高生徒  
編V―

―狐崎みすず視点―

「イ・ウーとはなんですか？」

同級生であり、竜宮アイラの従者である瀬木から呼び出され、依頼金を受け取った後、そう質問される。

「なにか、と聞かれたら、無法者集団という表現になるのかしら。」

彼女から受けた依頼は、彼女の主人である竜宮アイラの元に届いた手紙、その解析だ。

結果、送り主は内容通り、イ・ウーという組織。実態は掴んでいるし、かなこにとって、いい暇潰しの相手としてリストアップしていたけど、組織自体に興味はなかった。

「まあ、イ・ウーとしたら、竜宮アイラを勧誘するのは当然でしょうね。」

彼らは組織のメンバー同士での指導等を行っている。特異中の特異とも言える彼女の力は、喉から手が出る程欲しいのだろう。

「アイラ様…」

心底心配だという表情になる瀬木。

「選ぶのは彼女。如何に貴女が心配しようと、その決定権は彼女にあるわ。」

私としては、竜宮がイ・ウーに入ろうと、拒否し、襲撃されようと、どちらでもいい。関係のないことだから。

「ねえ先輩。竜宮アイラにくつついてたら、キューちゃんも危険な目に遭うの？」

「まあ、場合によってはそうなるのかしら。いいじゃない、窮地に駆けつけてあげれば評価が上がるわよ。」

隠れて話を聞いていた戦妹の多目理玖の質問に、そう答える。

「先輩って、人を好きになったことないでしょ。」

「そうね、無いわ。私にはかなこがいればそれでいいもの。」

「先輩も大概歪んでるねえ。」

そうね…自覚は嫌という程している。

|||||

—伊勢久美視点—

竜宮先輩の戦妹となってから思ったこと、それは、大変面倒見が良  
い先輩だということだ。

空いた時間があれば稽古の時間を作ってくれるし、それを強制する  
こともない。任務に呼んでくれるし、理玖の同行も許してくれる。

そんな竜宮先輩との共同任務で、今回だけは違っていることがあつ  
た。

「狐崎先輩…」

理玖の戦姉であり、探偵科Sランクの狐崎みずす先輩。憧れのかな  
こ先輩が唯一共に行動する特別な人。彼女が動く場合、絶対になか  
先輩も動く筈だ。その期待の眼差しは、狐崎先輩にすぐさま否定され

る。

「ご期待のところ申し訳ないけど、かなこは一緒じゃないわよ。…呼んだら来るけど。」

僕の考えを見透かした様に言いながら、鬱陶しそうにしがみつく理玖を押し退けようとしていた。

「狐崎さん、お願いします…」

何故か瀬木先輩が狐崎先輩に頭を下げている。

「ねえ〜リク危ないの嫌だよお〜。」

狐崎先輩にしがみつきながらそう言う理玖。

「離れなさい、鬱陶しい。…私がかなこを連れずに来るってことは、そのトカゲモドキで十分ということよ。」

グイグイと理玖を押しながら狐崎先輩がそう言う。トカゲモドキって…竜宮先輩のことだよね…

「誰がトカゲモドキですって!!この女狐!!」

狐崎先輩に詰め寄る竜宮先輩。

「リ、理玖。こっちにおいで。ほ、ほら、狐崎先輩も迷惑そうだし…」間に挟まれた理玖に声をかける。

「キューちゃん。」

僕の声に反応し、がっしりとしがみついてくる。

狐崎先輩と竜宮先輩の口論が繰り広げられる(一方的に竜宮先輩がやられ、涙目になっていた)。

「あ、貴女と共同任務なんて、本来ならお断りですわ!!」

涙声でそう言う竜宮先輩。

「そう?私は楽しいわよ。」

そんな竜宮先輩を見てそう返す狐崎先輩は、邪悪な笑みを浮かべている。

あれえ?なんか思っていたのと違うぞ。あのかなこ先輩の唯一認められた相棒がこんな邪神とか大魔王という表現がピッタリな人だなんて…

大丈夫なのかな?

これから始まる共同任務に、Sランクがふたりもいるのに、恐ろし



しかし、全てにおいてナンバーワンであった私にとって、それは屈辱以外の何ものでもなかった反面、己よりも優れた能力というものに惹かれたのも事実だ。

しかし…

「竜の血、それが加わりや、俺は教授を超え、紛うことなく最強となる。」

「お父様、独り占めなんてケチなことは仰るらないでしょうね？」

目の前に立つ吸血鬼、無限罪のブラドとその娘、ヒルダ。そして、  
「妾の援護あつてのものぢやぞ!!」

古代エジプトを彷彿させる露出多めの衣装を纏った褐色肌少女パトラ。

イ・ウーの中でも上位戦力三人を相手取らねばならない状況に追い込まれたのは、間違いなく、あの性悪女、狐崎みすずの謀に違いないと確信した。

「貴女!!探偵科の主席でしょう!!さっさとやりなさいよ!!」

モタモタとセキュリティ操作をする狐崎に怒鳴る。

「五月蠅いわね…ほら、空いたわよ。さっさと行きなさい。ああ、後輩たちと、瀬木さんは残った方がいいわ。」

ゲートが開き、そう言う狐崎。

「私は、アイラ様と共に…」

そんな狐崎に対し、流苗が私の横につく。

「キューちゃん。リクと一緒にいよう。」

多目が伊勢をそう誘う。

「理玖は狐崎先輩とここに居て。僕はアイラ先輩と一緒に行くよ。大丈夫!!アイラ先輩は僕よりもずっと強いんだから!!」

純粹な眼をそう言って私に向けてくる。

「でもおっ、キューちゃん…」

異常なまでに心配する多目に、少し違和感を感じる。しかし、続く狐崎の言葉で、その違和感さえ吹き飛ばす。

「安心しなさい。私の身に少しでも危険が迫れば、かなこを呼ぶわ。」  
狐崎にとっての最強の切り札である人物が控えているということ



を宣言する。

「私を信用していないということですかね？」

「かなこに比べたらね。かなこを呼ばなくてもいいことを願っているわ。」

嘲笑う様な顔と言い方に怒髪天を衝く。

「ええ、そう。分かりました：貴女の期待以上の働きを見せてあげますわ!!ノウル!!クミ!!ついて来なさい!!」

怒りに駆られ、突っ走ってしまった。今思えば、これも狐崎の思惑通りだったのだろう。

「なんですか、アレ?ピラミッド?」

突入した先、犯罪組織の武器庫の筈の場所には、それらしき物は何も無く、暗闇の中に異様なピラミッドがそびえていた。

「嫌な予感がしますわね。」

この時、直感的に狐崎に嵌められた可能性を疑った。しかし、なんの為に?」

「邪魔者が二匹ついてるが、まあ、いいだろう。」

暗闇から聞こえてくる地の底から響く様な声。その声の主の、異様な姿が現れた。熊?毛むくじやらな巨体はそう見えた。

「竜の血…どの様な味が、楽しみですわね。」

横に立つのは蝙蝠の翼が生えた少女。

「全く、ヌシらに付き合わされる身にもなって欲しいものぢや。」

古代エジプトの王族、そんな洋装の少女。

今まで相対した事の無い、異様さを感じる。そんな彼女を見て、ひとつの可能性を思う。

「イ・ウーの方々かしら?私に何の用でして?」

あの手紙、その答えを聞きにきたのだと想像した。その想像は概ね的中したらしい。

「そうだ。まあ、俺はお前を勧誘するというより、個人的な用だがな。」

小馬鹿にした様に笑いながら、毛むくじやらが答える。

「イ・ウーに入るのかしら?それとも…」

蝙蝠の翼の少女がこれまた小馬鹿にした様に笑う。

「アイラ様…」

心配そうに私を見つめるノウル。

「ノウル、安心なさい。答えは端から決まっていますわ…」

そう、決まっている。

「お断り致しますわ。そんな訳のわからない組織よりも、私には超えねばならない宿敵がいますもの!!」

そう、そんな組織に時間を割いている暇などないのだ。私には、あの遠山かなこを完膚なきまでに打ちのめすという最優先事項があるのだから!!

私の答えを聞き、毛むくじやは大声をあげて笑う。

「そう答えると思っていたぜ。俺にとってはそっちの方が好都合だ。下手にイ・ウーに入られると、教授の奴が面倒だからな…」

教授？それがイ・ウーなる組織の頭ということかしら。

しかし、そんなことを考える暇などなかった。

言い切ると同時に、毛むくじやらが襲い掛かって来たからだ。

「遅い!!ですわ!!」

遠山かなこの攻撃に比べれば、止まって見える。

躲して竜化した右手、その爪で薙ぎ、吹き飛ばす。かなりの一撃だ、余程の相手でなければ起き上がれないだろう。

壁に激突した毛むくじやら、爪を当てた箇所には大きな傷が入る。やり過ぎたかしら…

しかし、仲間がやられたというのに、余裕の笑み、嫌、面白そうに私を見る少女ふたり。違和感、でも、手応えは間違いなくあった。

「おいおい、予想以上だぜ。ますますその血が欲しくなった。」

全く堪えた様子のない毛むくじやらの声に驚いてそちらを見る。

「どういうことですか…?」

深々と引き裂いた傷が塞がっていく。竜の血を引く私の再生能力を超えた超再生能力。見た目通りの化物ということですかね。

「想像以上。このままだと千日手だな。」

毛むくじやらが姿形を変えていく。

「そういうことでしたのね…」



異様な三人組。

吸血鬼が実在したことへの驚愕、それを相手取り、優位に戦う竜宮先輩にそれ以上に驚愕する。

いや、そもそもかなこ先輩と拳を撃ち合える時点で、彼女が滅茶苦茶強いというのは分かっていたけど、想像を超えていた。

僕に稽古を付けてくれてる時は、凄く手加減してくれてたんだなあ

：

そんな風に楽観的に戦いを見ていられるのも僅かな時間だった。

「うっ!!」

竜宮先輩の影から現れた少女が、電撃を放ち竜宮先輩に当たる。

「アイラ様!!」

瀬木先輩が飛び出した。僕はそれを止めなければならぬのに、咄嗟のことに出来なかった。

「ノウル!!下がりなさい!!」

電撃を浴びたせいとか、少し動きを緩めた竜宮先輩が叫ぶ。

「お前、邪魔よ。」

瀬木先輩の影から、あの少女が現れ、同様に電撃を浴びせる。

「ノウル!!」

竜宮先輩が、悲痛な叫びを上げ、蝙蝠の翼が生えた少女に襲い掛かるが、直ぐに影に身を潜める。

「瀬木先輩!!」

竜宮先輩の代わりに、僕が駆け寄る。

「…アイラ様は…?」

弱々しく訊ねる瀬木先輩。

「竜宮先輩は無事です。瀬木先輩の方が…」

どう見ても竜宮先輩よりも瀬木先輩の方が重症だというのに、竜宮先輩の心配をする瀬木先輩の忠誠心に涙が出てくる。

「クミ、ノウルを連れて逃げなさい。…いいえ、お願い、ノウルを助けて…」



「キリがないのぢや。妾がケリをつけてやる。」

ニンマリと笑い、そう言う彼女。

「遅えぞ。」

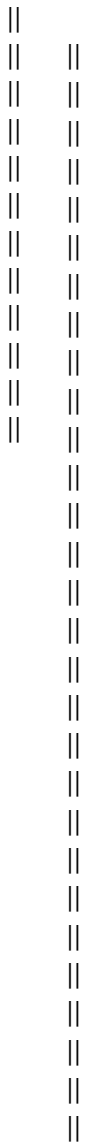
醜悪な笑みを浮かべ、ブラドが立ち上がる。

「お返しをしなければね。」

サデイステックに笑みを浮かべる少女。

超能力？いや、これは魔術？

動きを封じられた私に、電撃が何度も与えられた。



—ヒルダ視点—

竜宮アイラ、彼女の持つ竜の力は、私たちの想像を超えていた。

暴走した様に暴れ、浴びせられる攻撃に、不死の身体である吸血鬼、高貴な私が、恐怖を抱いてしまった。

パトラの呪いがなければ…

そんなことを考えてしまう。屈辱でしかない。その鬱憤晴らしの如く、動きを止められた彼女に何度も電撃を放つ。

「ビルダ、そこまでだ。殺しちゃあ、意味がねえ。」

「そうですね…では、血を頂くとしましょう。」

父の言葉で、物足りなさを感じながらもその手を止めた。

想像を超える竜の力。これを手にすれば、私たちを退屈そうに見ながら大欠伸している、ピラミッドの側では世界最強クラスの魔女であるパトラどころか、教授さえ超える…

父と短く目配せし、小さく頷き合った時だった。

ゾクリと背筋を駆け抜ける悪寒。突然本能が恐怖に支配される。私だけではない。父もそれを感じた様だ。

「遠山かな…」

何度も電撃を浴びせたことで、弱った竜宮アイラの口から、そんな名前が漏れた。

「瀬木と伊勢は無事だ。」

瞬きもしていない。それなのに、竜宮アイラをお姫様抱っこし、そう彼女に伝える女の姿が目の前にあった。

言葉を失う私たち。退屈そうに大欠伸をしていたパトラでさえ目を見開いて冷や汗を流している。

「武偵憲…武偵…なんとやらの第何条とやらにあったな。仲間を信じ、仲間を助けよ。…だったな。」

その言葉と同時に、父の身体が吹き飛ぶ。

超再生能力を持つ父の聞いたことも無い様な悲鳴と再生が遅い傷に感じたこともない恐怖を感じる。

「お、お前は…」

父の弱々しい声が聞こえた時。

「アアアツ!!」

私のこめかみに激痛が走る。その謎の女は、目にも留まらぬ速さで、竜宮アイラを安全地帯へと置き、私にアイアンクローを決めた。た。

藻掻き、何度も最大出力の電撃を放つのに、全くダメージが無いどころか、意にも返さない。

「あとひとりか…」

父も同様にアイアンクロードで掴み、パトラを見る女。

「お、お主が何者か知らぬが、妾にとつては好都合ぢや!!」

若干、動揺しながらも、パトラは高笑いしながらそう言い放つ。

それと同時に、私たちを魔力が包む。：私の魔臓、その箇所には紋様が浮かび上がる。父は形態が解かれ、醜い姿に変わってしまう。

「パトラ、テメエ…」

「裏切りましたわね!!」

弱体化、世界最高クラスの魔女による呪い。

「裏切る？妾はそもそもお主を仲間とは思っておらぬのぢや。」

高笑いするパトラ。元々そういう計画だったということね…

「なんだ？仲間割れか？」

「だから!!仲間ではないと言っておるぢやろう!!…つて、何故お主なんともないのぢや!!」

圧倒的魔力を一番強く浴びた筈の女は、ケロッとした表情で立っている。

「なにやら変な気に包まれたが、あの程度、気合いでなんとかなるぞ。」

この女は何を言っているのだろう。脳の処理が追いつかない。術を掛けたパトラの顔が青くなる。

「何故ぢや!!何故ぢや!!ピラミッドと共にある妾の呪いが効かぬなど、あり得ぬのぢや!!」

未知の力への恐怖に負けたのか、反狂乱となり女に向け何度も魔術を放つ。

「さて、そこまでだよ。」

パトラが放った魔術が全て羽虫を払う様に消し飛ばされた時、どこからともなく声が響く。

「パトラ…いや、ここにいる全員に僕が関わっても、彼女には勝てないよ。」

「教授…何故お主がここにおるのぢや…」

ギリツ、と苦虫を噛み潰したような顔になるパトラ。教授には、全てお見通しだったということね…

教授…イ・ウーの現リーダーであり、世界最高の探偵であるシャー



ロック・ホームズが姿を現し、そう悟る。

「あら、随分と弱気なのね。無法者集団の癖に。」

その横に立つ細見の少女は、謎の女と同じ、東京武偵高の制服を身に着けている。

「彼私の戦力差を見極めることくらいは出来るさ。」

「あら、残念。貴方なら、己の好奇心の為に、その見極めも捨てると予想していたのに。」

教授の言葉に、少女は全く残念でもなさそうにそう言う。

「実物を見るまで、僕もそう思っていたよ。でも、こうやって実際に顔を合わせたら、好奇心よりも恐怖が勝る。僕には、彼女への勝ち筋を推理出来ない。」

やれやれ、といった様子で肩をすくめ、お手上げのポーズを取る教授。

「なんだ、もう終わりか?」

彼の言葉を聞き、それまでパトラを見ていた女は、興味を無くした様に教授の方を向く。

「そうしてくれると有り難いよ。ここでイ・ウーの主戦力を壊滅させたくないんだ。勿論、遠山かなこ君、君にもメリットはある。君の弟たちが強くなる機会というメリットがね。」

彼が何を言いたいのかわからない。今この状況で、その言葉の真意を理解しているのは、発言の主たる教授と、その隣に立つ少女だけだった。

「かなこ、彼の言う通りよ。キンイチとキンジが愉快な：強くなる良い機会を彼は作るわよ。」

愉快と思いつきり言ってたわね：あの少女、遠山かなこと呼ばれる謎の女よりもヤバい気配がする：

「そうか：：ならそうするとしよう。」

そう言つて、帰る素振りを見せた女に、

教授が言葉を掛ける。

「そうだ、ひとつお願いなんだけど、あのピラミッド、このまま残しておくと困るんだ。よかつたら壊してくれるかい?」

パトラが魔力を注ぎ作り上げたピラミッド。簡単に壊せるモノではない。

「別に構わぬぞ。」

しかし、女は軽く承諾し、ピラミッドの前に一瞬で移動した。

「こ、壊すぢやと!!妾の魔力を注ぎ込んでおるのぢや!!そう簡単に…」  
叫ぶパトラ。そんな言葉の途中で、女が軽い感じで正拳突きを放った。

ピラミッドは壊れなかった。

そう、壊れはせず、跡形も無く消し飛んだ。そこにそんな物があつたという形跡ひとつ残らず、綺麗サツパリ消え去った。

「満足かしら?」

正拳突きを放った女ではなく、教授の横に立つ少女がそう教授に問いかけた。

「…十分だ。ありがとう、手間が省けたよ。」

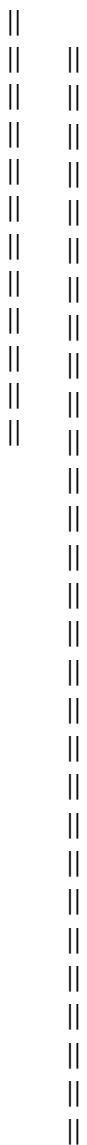
紳士的な笑みを浮かべそう答えるが、その顔も、声も、強張っているのは分かった。

「かなこ、帰るわよ。」

少女の声に頷き、竜宮アイラをお姫様抱っこして女が去って行く。

その後、父と教授から説明を受けた。

絶対に敵対してはならない存在。それがあのふたりであると。



「武偵憲…武偵…なんとやらの第何条とやらにあつたな。仲間を信じ、仲間を助けよ。…だつたな。」

確認するかの様に私の顔を見る。条項以外何一つ覚えていない、バカ丸出しの発言なのに、落ち着いた口調と、普段と何一つ変わらない瞳。

そう言った後、一撃で無限罪のブレードを吹き飛ばす。遠山かなこの拳を食らったブレードは悲鳴を上げる。あの厄介な再生能力が追いつかないのか、深々と刺さった跡の残る傷は、なかなか修復しない。

私の知る中で最も強い相手、最も高い壁だとは分かっていて。けど、その壁はあまりにも高過ぎるのだと、知った。

「少し待っている。」

私をお姫様抱っこして、安全地帯に寝かせる。

何が起き、何がどうあつて終わったのか、理解出来ない。

ただ分かるのは、相手の戦意が完全に消失したということだ。

「かなこ、帰るわよ。」

狐崎の言葉に頷き、私の方へと歩き出す遠山かなこ。

「ちよ、ちよつと!!待ちなさい!!自分で歩けますわ!!お、降ろしなさい!!」

また私をお姫様抱っこし、歩き出す遠山かなこにそう言う。

「足がまだ震えている。今は大人しくしている。」

彼女の言う通り、何度も電撃を浴びた身体は、今だ万全ではない。しかし、それよりも降ろして欲しいと思うのは、感じたことの無い胸の高鳴りと頬の紅潮を自覚していたからだろう。

遠山かなこ、彼女に抱えられ、見える彼女の顔、耳に届く声。そのひとつひとつに胸の高鳴りが強くなる。何故?何故、こんなにもとき

めくの：

その後、ノウルが泣きながら駆け寄って来た。その頭を軽く撫でながら、発熱した時の様に、ボオつとした思考で遠山かなこを見つめていた。

|||||

— 狐崎みすず視点 —

計画通りね：

かなこを呼ぶタイミングも完璧だったし、天然のタラシである遠山家の力も遺憾無く発揮されていた。

現に、かなこを見つめる竜宮の目は、恋する乙女そのものだ。

これまで、数え切れない程の任務に当たり、幾度もなく、男女、性別問わずにタラシてきたかなこだ、お膳立てさえすれば、あの竜宮アキラといえどコロツと墜ちると踏んでいたが、予想通りだ。

ただ、予想よりもその惚れ込みが深過ぎた。

「遠山かなこ、ここにいましたのね!!」

任務で海外に行つていようと、探し出して付き纏ってくる様になっ

てしまった。

面倒だし、煩い。そう思うが、当初の目的は達成されたし、良しと  
した。

「かなこの為に、五千万程必要なだけど…」

「その程度の端金、どうということもありませんわ!!倍の一億、お渡し  
しますわ!!」

都合の良いATMが出来たのだから。 ▪

## 最強の警察官

ーキンジ視点ー

「雑魚ばかり…しかし、市民の平和と安寧の為、見過ごすことは出来んな。」

そう言っただの肩を叩くベージュのコートとハットを被った美女、最強の警察官と評される銭形平静。

「アンタ一人でなんとでもなるだろ!!俺を巻き込むなよ!!」

得物を手にし、血気だった男たちが俺と銭形に今にも襲い掛かろうとしていた。

「真面目で善良な人々を糧にし、不当に奪う連中が裕福に生き、奪われた者が泣き寝入る…そんな不条理を許せんだろう?」

確かな怒りを込めた瞳で男たちを睨む銭形。

「そんなもん綺麗事だ、現実はそのような不条理しか存在しないだろ。」

そう返す俺の背中を銭形が勢いよく叩いた。

「流石、金叉さんの息子だ。捻くれようと、確かな正義を持っている。」

嬉しそうに一瞬だけ微笑んだ銭形は、

「背中には任せろ!!」

そう言い放つと、不可視の銃弾よりも早く弾丸を複数放ち、最前列の男たちの得物弾いた。

いや、アンタ一人で十分どころか、戦力過剰だろ…

弾丸飛び交う中、無傷で一方的に、瞬く間に十数人を徒手で無力化する銭形を見てそう思う。

兄さんの不可視の銃弾よりも早く正確な射撃と、ヒステリアモードの俺たち兄弟（姉は除く）以上の格闘術、正しく最強と言える実力者。

そんな銭形の快刀乱麻の逮捕劇を見ながら思う。

姉さんって、本当に人間なのだろうか？

正直、銭形よりも強い人間が存在するのなら、全盛期のシャーロットクや初代リユパン等、歴史に名を刻む者たちであるだろう。そんな偉人を指先一つでダウンさせる怪物である我が姉。

姉さんについて考えるのはやめよう。

俺は普通に生きたいんだから。

迫りくる男の攻撃を辛うじて躲し、ベレッタを構える。

ヒステリアモードでもない俺でも、こいつら程度なら二、三人くらいなら相手に出来る。

「正義って言葉は狡いだろ…逃げたらご先祖様にあの世でボコられるんだよ!!」

遡ること十数分前、塾帰りの俺は日の沈んだ町の中を歩いていた。家に帰って復習しよう。

そんなことしか考えていなかった俺の肩は突然肩を掴まれた。

「未成年が不用心に出歩くな。通常なら補導対象だ。」

肩を掴んだのは見覚えのある化物、銭形平静だった。

「塾帰りで、寄り道もせず家に帰る未来ある若者なんだが。」

気配を微塵も感じることもなく接近されたことに動揺したが、それを隠す様に言い放つ。

「遠山金虎の弟だ、学力はあまり期待しない方が良い。」

ポンポン、と優しく肩を叩かれ、無礼極まりないことを言われる。

「宇宙一の大馬鹿と一緒にするな!!流石にあれは例外だ!!」

姉さんの頭脳と同等扱いされ、遺憾の意を唱えた。

「…勉強、教えてやろうか?」

同情的な表情と言葉で返され、不安に駆られる。

もしかして、俺はあの姉さんと同レベルなのか!?

無意識に懐のベレッタに手が伸びる。

もしそうなら、こめかみを自分で撃ち抜きそうだな。

「それで、その宇宙一の大馬鹿はどこにいるのだ?」

俺の首に腕を絡め、身体と顔を近づけて銭形は言う。

ムニユ、と柔らかい感触が左腕を襲い、血流が速まりヒスの前兆を

感じ掛けたが、それ以上に恐怖が勝る。

あれだ、こいつは見た目にはヒス的に非常によろしくないが…

姉さんと同列か…

ヒステリアモードのトリガーとなる以上に、生物としての恐怖が上回る相手だ。

「知らない、あの人の動きが分かるなら俺はとつくに公安か武検…世界のそういつた組織に拘束されてるさ。」

神出鬼没の我が姉は、一度姿を消したら最後、その姿や位置を捉えることが出来る者は存在しない。

そんな姉を追う異常な人物に正直にそう答えたら、

「使えん奴だ…」

そうやれやれと溜息を吐かれる。

正直、相手が化け物でなければ全力でぶん殴っていたと思う。殺されるからしないけど。

「まあいい、お前も遠山金虎の弟、私的に言えば危険分子、しっかりとマークしていくつもりだ。」

そんな恐ろしいことを言っただけから離れる。

「まあ、そうは言っても金叉さんの息子だからな、ある程度は赦してやろう。」

ハハハと笑いながら俺の背中をバシバシと叩く。

痛え…姉さん程ではないけどアリア以上の馬鹿力だ。

「さて、そんなお前に嬉しい一報だ。」

笑いながら動く所作さえ見せず俺を逮捕術で拘束した銭形は、「ここいらで不穏な動きをする連中がいるらしい、少し協力しろ。」

有無も言わせぬ力を掛けてそう言った。

「痛ッたたたた!!分かった!!協力する!!協力するから離せ!!」

これはお願いではない、強迫だ。

そんな不満は言えそうにない。俺は大切な両腕を守る為に嫌々ながら協力を申し出た。

全部姉さんのせいだからな!!



